

集落遺跡からみた古墳時代前期社会の研究

—近畿における広域流通の視点から—

山田 隆一

「集落遺跡からみた古墳時代前期社会の研究－近畿における広域流通の視点から－」

山田隆一

本論では、近畿における古墳時代の集落動態から、国家形成に向かい始めた古墳時代前期社会の位置付けを明らかにする。古墳時代前期に出現する広域流通を中心に据え、それに関与する集落の具体的な内容を明らかにし、弥生時代から古墳時代への社会動態の中での位置付けを論証する。対象とする時期は、大和に纏向遺跡が出現・存続し、大阪平野を含む周辺地域にも連動した画期が認められる古墳時代初頭期および前期であり、対象とする地域は河内・摂津および大和を含む周辺地域である。なお当該期の集落の出現と消滅は、いずれも急激に生じており大きな社会変化が想定できるので、前後の弥生時代と古墳時代中期についても言及する。また社会の変化を反映する集落の動態が狭い地域で完結するものでもなく、まして広域の流通網を主題とすることから、全国各地域および韓半島の状況にも触れる。

第1章は、近畿における弥生時代拠点集落の変遷を示し、そこに築かれた大型掘立柱建物（以下、大型建物）の性格を明らかにすることが目的である。

第1節では、北河内の拠点集落である雁屋遺跡の報告書から大型建物のあったことを検証し、集落変遷に位置付けた。これにより弥生中期末まで継続してきた拠点集落や大型建物が後期に変質し、さらにその後の古墳時代とも断絶のあることを示した。

第2節では、近畿における弥生時代前期から古墳時代前期の大型建物を検討し、両時代の大型建物の性格を検討した。その結果、弥生時代は農耕祭祀や墓前祭祀の性格を帯びた大型建物が、古墳時代には大型建物は広域流通に関わった集落と関連を持ち、新たに創出・規格化された祭祀とも関わることを示した。

第2章は、河内・摂津における古墳時代初頭・前期の集落遺跡の動態を検証し、当該期に出現する広域流通網における拠点集落を明らかにすることが目的である。また、伊勢湾沿岸の伊勢・尾張・三河における集落動態についても検討し、流通拠点を明らかにし、近畿との関連性を述べた。本章は、本論全体の前提となる基礎作業である。

第1節では、旧大和川流域の中河内と中部摂津の集落遺跡と他地域系土器などの出土遺物を検討した。それによって、中河内には広大な面積を有する中田遺跡群と加美・

久宝寺遺跡群、摂津中部には垂水南遺跡と崇禪寺遺跡が広域流通の拠点として立地することを提示した。これらの集落遺跡は、瀬戸内海から河内湖、旧大和川を介して当時の倭王権の存在する大和盆地東南部をつなぐ広域流通網の幹線に立地する。

第2節では、淀川流域の摂津東部と北河内の集落を検討した。摂津東部では郡家川西遺跡と溝咋遺跡が広域流通拠点となる。いっぽう北河内の枚方・交野台地では集落は確認できるも流通拠点は確認できない。また淀川左岸低地と生駒山西麓では集落が少なく、しかも小規模で存続期間も短い。淀川流域の場合、右岸地域が広域流通に関わる一方、左岸地域は圏外にある。広域流通は限られた地域のみで確認でき、周辺地域にその情報は伝わらず、格差のある社会を形成することがわかった。

第3節では、南河内の石川流域を検討した。石川は旧大和川に合流する河川ながら、集落は少なくしかも小規模で短期間に消長を繰り返す。他地域系土器は少なく、流通拠点は確認できず流通網の圏外にあることがわかった。

第4節では、東海の伊勢湾沿岸地域を検討し、近畿と対比した。その結果、伊勢の雲出川流域に流通拠点がみられ、また伊勢湾沿岸地域における集落消長の画期、あり方、土器流通の活発化する時期において、近畿と連動することを示した。

第3章では他地域系土器を検討した。他地域系土器は、地域での編年研究により流通時期が明らかとなり、さらに持込んだ地域内部での主体地域をも示す。地域間交流の実態を知ることで、当該期の社会的・政治的な背景を究明することが目的である。

第1節では讃岐・阿波・播磨系と備讃系製塩土器をあつかった。大阪には吉備系とともに阿波・讃岐系が多く持込まれ、搬入時期は庄内期新相以降に増加し、布留期前半に盛期をむかえる。また遺跡分布から、流通ルートは瀬戸内海、摂津中部を介して河内湖に入り、旧大和川を通じ大和盆地にいたる幹線ルート。支線ルートとして淀川を通じて山城・近江にいたるルート、大阪湾岸を往来するルートが確認できた。

第2節では近畿での北部九州系土器をあつかった。北部九州系も流通拠点に出土が確認できるが、わずか7点である。北部九州には西新町遺跡、博多遺跡群を港津に、拠点となる比恵・那珂遺跡群が存在するも、韓半島から伝わった高度な技術や物資がストレートに各地に伝播するような社会でないことがわかった。

第3節では東海・東国系土器をあつかった。両者は、大和盆地東南部に多数が搬入されるにも関わらず、垂水南遺跡などを除外すれば、旧大和川流域の流通拠点での出土は少ない。広域流通網が王権の存在した大和盆地東南部への一方向的な流れであっ

たことに起因すると考えられる。

第4章では、流通によって持込まれた製塩土器をあつかった。塩は鉄とともに、重要な物資であり、広域流通網を介して王権によって掌握されたと考えられる。

第1節では消費地である摂津中部・中河内での製塩土器を検討した。製塩土器は、製作技法から大阪湾岸系と備讃系に識別が可能で、中河内には両者がほぼ同じ割合で搬入される。また製塩土器は、流通拠点に集中出土し、塩の集積が確認できる。備讃系の中継となる播磨、中河内とつながる大和、淀川ルート摂津東部と山城の製塩土器も検討した。その結果、中河内と大和への塩の集積は明確で、それは他の地域に先駆けて、旧大和川流域で開始されたことがわかった。

第2節では西三河で出現する土器製塩と交流拠点の関係を論じた。当該期、日本各地には小規模ながら土器製塩が現れるが、それは備讃系あるいは大阪湾岸系の影響を受けたものである。西三河では大阪湾岸系の製塩土器が確認でき、広域流通を背景にした鹿乗川流域遺跡群による技術移転が想定できる。鹿乗川流域遺跡群は、他地域系土器や威儀具の出土する流通拠点であり、集落域には複数の前方後方墳からなる桜井古墳群が確認できる。当該期の土器製塩は、広域流通および地域首長との結びつきが強いことを提示した。

第5章では、弥生時代から古墳時代前期の鉄器と鉄器生産をあつかうと共に、特に普及の程度－鉄器化－について検討することが目的である。

第1節では、近畿の出土鉄器を地域と器種ごとに集成し、地域性を抽出した。また鉄器化の程度を示す目的で、残存する石器の状況も確認した。「石器の減少＝鉄器の普及」は誤りではないが、近畿の鉄器化を過大評価する鉄器研究の実情を示した。また鉄器保有量と鉄器化の程度において、北部九州との間にある著しい格差を示した。

第3節では、鑄造鉄器の再加工品、三角形鉄片、高度な鍛冶関連遺物を提示して大阪湾沿岸地域の鉄器化について考察した。その結果、近畿では庄内期以降に後二者の出土が急増し、大きな画期をむかえることを確認した。汎日本的にも、初期の鍛冶関連遺物である断面カマボコ形のフイゴ羽口は、博多遺跡、津寺遺跡、穂積遺跡、纏向遺跡の広域流通拠点にのみ確認できる。古墳時代前期、急激な鉄器化を達成するが、その背景には纏向遺跡を中心とした広域流通の形成があることを示した。

第6章では、渡来系と考えられる土木技術の敷葉工法と水制をあつかった。大阪平野部での治水構造物の位置付けを目的としたものである。

第1節では、中河内における古墳時代の敷葉工法を集成し、社会的な背景について述べた。古墳時代前期には久宝寺遺跡、中・後期には亀井遺跡と長原遺跡に集中する。前者は流通拠点、後者は韓式系土器が多数出土する遺跡である。

第2節では、水制の一種である杭出し水制をあつかい、古墳時代中・後期の事例2、奈良～中世の事例8を抽出した。古墳時代中・後期に久宝寺遺跡と長原遺跡で出現し、その後、周辺地域に拡散する。長原遺跡では土手状遺構に水制と敷葉工法が確認でき、両者の関連は強く、ほぼ同時期に伝わった渡来系土木技術と考えられる。

洪水の頻発する大阪平野部において集落を維持していくには、治水の知識と技術は不可欠である。大阪平野部では、古墳時代前期以降に韓式系土器が出土し、中・後期に最盛期をむかえる。中河内における敷葉工法と水制の出現の背景には、渡来人による治水系土木技術の移転があったことがわかった。

終章では、6章までのまとめとともに、流通拠点と関わる首長層の古墳を検討した。首長層の倭王権での位置付けを明らかにすることが目的である。玉手山古墳群と松岳山古墳群、弁天山古墳群、向日古墳群と、大和盆地東南部の前期古墳群を検討した。

中河内の流通拠点である中田遺跡群などの首長墓は、築造時期の一致と旧大和川を見下ろす丘陵での立地から、玉手山古墳群と松岳山古墳群と考えられる。古墳群は、90～110m級の中規模前方後円墳からなる首長墓系列と、付随する小型前方後円墳からなる特異な群構成である。広い集落面積の中田遺跡群での複数集団の集住化に対応する。弁天山古墳群は淀川ルート of 摂津東部、向日古墳群は淀川ルートにつながる三川合流地域の山城南部の首長層が想定できる。いずれにも集落と同時期に、前方後円墳（前方後方墳）からなる首長墓の系列が確認できる。首長墓の規模は、やはり90～110m級の中規模古墳で玉手山古墳群・松岳山古墳群と同じランクにある。

大和盆地東南部では、大和古墳群、柳本古墳群、纏向古墳群が集中し、南に桜井茶臼山古墳とメスリ山古墳がある。各古墳群には、王墓と考えられる230m以上の前方後円墳の系列があり、多数の前方後円墳・前方後方墳が付随する。後者の規模は120～180m級（大規模）、90～110m級（中規模）、50～80m級（小規模）と続き、明確な階層構造を示す。よって広域流通を担ったのは、倭国の階層構造の中では中規模クラスの地域首長達である。広域流通とは、王権が最先端の物資・技術・情報を集中させるために、地域首長層を取り込むことで成立した装置であることを示した。

目次

序章	1
第1章 弥生時代の集落動態	
第1節 大阪府雁屋遺跡の大型掘立柱建物	9
1 はじめに	9
2 調査状況と大型掘立柱建物	9
3 雁屋遺跡の変遷と大型掘立柱建物の位置	14
4 まとめ	18
第2節 近畿の大型建物の変遷とその性格について	21
1 はじめに	21
2 近畿の状況	21
3 まとめ	25
第2章 古墳時代前期の広域流通と拠点	
第1節 古墳時代初頭前後の中河内地域	29
1 はじめに	29
2 中河内地域の状況について	31
3 周辺地域状況について	43
4 中河内地域の動向	47
5 まとめ	49
第2節 淀川流域の古墳時代初頭期集落について	56
1 はじめに	56
2 東部摂津地域の状況	56
3 北河内地域の状況	67
4 淀川流域の状況について	70
5 まとめ	72
第3節 南河内、石川流域における弥生時代後期から古墳時代初頭社会の特質	79
1 はじめに	79
2 旧大和川と石川	79
3 石川流域に立地する諸遺跡の動向	80
4 石川流域出土の他地域系土器	84
5 まとめ	88
第4節 東海地域における古墳時代初頭期の集落	92
1 はじめに	92

- 2 大阪における集落遺跡の変遷と概要 92
- 3 東海地域の集落遺跡 93
- 4 東海地域の物流ルート 96
- 5 まとめ 98

第3章 他地域系土器とその社会背景

第1節 大阪出土の讃岐・阿波・播磨系土器と製塩土器	101
1 はじめに	101
2 各地の土器編年の状況	101
3 大阪府の阿波・讃岐・播磨系土器	104
4 出土遺構と遺物	107
5 大阪府の消費地における製塩土器	109
6 まとめ	111
第2節 大阪府下出土の北部九州系土器	129
1 はじめに	129
2 大阪府出土の北部九州系土器	129
3 近畿の北部九州系土器	132
4 まとめ	134
第3節 大阪府下出土の東海・東国系土器	136
1 はじめに	136
2 大阪府下出土の東海系土器のありかた	136
3 東国系の状況	138
4 まとめ	139

第4章 塩の生産と流通拠点

第1節 中河内における古墳時代前期の製塩土器	151
1 はじめに	151
2 製塩土器製作技法の二者	152
3 大阪府内陸部出土の製塩土器	154
4 周辺地域の搬入された製塩土器	161
5 まとめ	168
第2節 西三河の土器製塩と交流拠点	179
1 はじめに	179
2 大阪湾沿岸の土器製塩と集落遺跡	179
3 西三河の土器製塩と拠点集落	186
4 まとめ	193

第5章	鉄器と鉄器生産	
第1節	近畿弥生社会における鉄器化の実態について	199
1	はじめに	199
2	近畿地方の鉄器化の状況	200
3	鉄製品の概略	211
4	まとめ	218
第2節	甲田南遺跡出土の鉄斧について	227
1	はじめに	227
2	甲田南遺跡出土の板状鉄斧	227
3	まとめ	228
第3節	大阪湾沿岸地域における鉄器化について	231
1	はじめに	231
2	大阪湾沿岸地域の鉄器化	232
3	まとめ	234
第6章	土木技術の伝来と展開	
第1節	中河内地域における古墳時代の敷葉工法	245
1	はじめに	245
2	古墳時代前期の敷葉工法	246
3	古墳時代中・後期の敷葉工法	250
4	まとめ	255
第2節	大阪の水制	258
1	はじめに	258
2	水制研究の概要	258
3	大和川の水制	260
4	大阪の水制遺構	263
5	水制遺構の概要	275
6	まとめ	279
終章		287
1	広域流通網における拠点集落と他地域系土器	287
2	塩と塩生産の掌握	292
3	流通拠点と古墳	294
	収録論文初出一覧	303

序 章

1 はじめに

本稿では、近畿における古墳時代の集落動態を検討することによって、国家形成に向かい始めた古墳時代前期社会の歴史的な位置付けを明らかにする。集落遺跡による古墳時代の研究は、古墳およびその出土品の研究から導かれた古墳時代像を異なる視点から説明し、また補強することが可能である。あるいはその古墳時代像に再考を促し、未解決の課題に迫ることも可能と考える。なお本稿で、近畿地方の考古資料を中心にあつかうのは資料数の膨大なことにはよるものの、近畿地方の一部は後に畿内と呼称されるように、古墳時代前期にはあきらかに日本の政治的中核を担う地域に成長しつつあり、単に一地方史の究明ではなく、日本の古墳時代像の枠組みを提示することにつながると考えている。

従来の古墳時代の研究は、古墳それ自体およびその出土品の研究から導かれた古墳時代像が大きな比重を占めている。その一方で、古墳時代の集落研究は低調であった。弥生時代の社会像が、各種の集落遺跡—拠点集落と周辺集落、高地性集落など—、あるいは方形周溝墓や墳丘墓などの墳墓を研究対象として進められてきたのだが、古墳時代の集落研究とは断絶に近い状況があったのである。そんな状況に変化が表れるのは奈良県纏向遺跡の調査成果¹⁾が報告されてからで、それ以後の古墳時代集落研究の大きな起点となった、と考えられる。

纏向遺跡で確認された集落内容すなわち、集落内および周辺に築造される前期大型古墳と同時期の継続期間、1 km 四方の広い集落面積、首長層の居館、創出された祭祀と祭祀空間、矢板で護岸した運河などは弥生集落には見られないもので、従来の古墳研究から到達した社会の階層性をより具体的に示すものである。それは古墳時代の集落研究が、各地域における階層構造、あるいは社会発展の進行程度などの解明につながるといった方向性を示した点で重要である。

またそれら遺構論とは別に、遺物論からも異なる研究の方向性を示している。纏向遺跡で多数出土した様々の地域の土器、有力者の保持した威儀具、古墳の築造に直結する各種の遺物—朱、白石、結晶片岩、特殊埴輪など—は、一般集落からは出土しない内容を有しており、弥生社会の流通とは比較すべくもなく、より広範囲でしかも活発な流通のあったことを示しており、纏向遺跡が広域流通の拠点であったことをも示した。またそれらの遺

物は、すべての古墳時代の集落から出土するわけではなく、各地域内でも特定の集落から出土することもわかってきた。特定の集落とは、当時の上位ランクの集落であることは確かだ、そうすれば各地域にも纏向遺跡に連なる流通拠点が存在—あるいは配置されていたことが想定でき、その背後に地域首長層が存在することも確かであり、纏向遺跡を中心とした王権構造をも想定できるのである。これらの研究は、近年のいわゆる行政発掘の激増と調査結果の蓄積によって可能となったもので、いくつかの地域で上記の方向性を持った古墳時代集落の研究が散見されるようになっている。

本稿の目的は、古墳時代前期集落の動態から当該期の社会の歴史的な位置付け、特質を明らかにすることである。「物・人・情報の流通」をキーワードとして、それを達成するために古墳時代前期の集落がどのようなあり方をするのか、集落の具体的な内容はどのようなものかを明らかにし、弥生時代から古代への社会変遷の中でどのように位置付けられるのか、以下に示すように三つの課題に沿って論証する。

対象とする時期は、纏向遺跡が出現・存続し、大阪平野を含む周辺地域にも連動した画期が認められる古墳時代初頭期および前期である。筆者は流通拠点となる集落の出現という明確な画期が認められる庄内期を古墳時代初頭期、最古の前方後円墳の出現する布留期を古墳時代前期と考えており²⁾、随時呼び分ける。またこれらの集落の出現と消滅は、いづれも急激に生じており大きな社会変化のあったことが想定できるので、前後の弥生時代後期と古墳時代中期についても言及する。

対象とする地域は河内・摂津地域および大和を含む周辺地域である。むしろ古墳時代の首長層の動向を反映した集落遺跡がその狭い地域で完結するものではないし、まして広い地域間をつなぐ流通ルートを主題としてあつかうことから、全国各地域および韓半島・中国社会の状況も大きく関わる。前述したように、全国的な視野で検討するには資料数が膨大な事があるものの、大和とそれに直結する河内・摂津地域は、古墳時代前期には倭国の政治的中核を担う地域に成長しつつあり、倭国における古墳時代像の枠組みを提示することが可能と考えている。

なお地域・時代に関わらず、個別集落および地域内における集落間の関係、あるいは広域の地域間関係の研究には、そのベースとなる地理的環境の把握は不可欠である。殊に本稿で中心としてあつかう古墳時代の中河内地域の場合、むしろその特異な地理的環境に立地したことによって非常な発展を遂げる地域である。中河内地域とは東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵に囲まれた河内平野部をさしているが、弥生時代から古墳時

代にはその平野部北側には潟湖である河内湖が存在しており、河内平野はその南岸に接していた段階である。この平野部には旧大和川が頻繁に流路を変えながら北流しており、その水は河内湖に流れ込み、そして上町台地北端から大阪湾に流れ出していたのである。なお、旧大和川とは1704年に付け替えられる以前の大和川をさす。つまり中河内地域は、当時の中央権力の存在した大和盆地東南部から旧大和川・河内湖・瀬戸内海を介してその周辺諸地域および北部九州地域・韓半島へと伸びる流通ルート上の結節点に立地する地域なのである。弥生時代集落が農耕社会であるがゆえに水系単位で形成されるのに対し、中河内の古墳時代集落の分布から流通に有利な立地を占める集落群の出現を読み取ることができる。

2 広域流通網の出現と流通拠点

第一の課題として、地域の集落遺跡を流通の視点から再検討し、地域の中での流通拠点となった集落あるいは集落群を明確にすることで、古墳時代前期にいくつか想定できる広域流通ルート上での位置付けを明確にすることである。その基礎的な作業として、地域毎に集落遺跡の時期変遷と遺構・遺物の内容を明確にした上で、当該期の旧地形図をベースとした遺跡分布を示すことが必要になる。基礎資料となるのが、既往の調査による膨大な数量の遺構・遺物とその調査報告書などであるが、未報告資料も多い。未報告資料の多くを実見しており集落遺跡個々の大枠の変更はないと考えるが、この点は集落遺跡の大きな問題点で、絶えず修正を加えつつ研究を進めていく必要がある。

酒井龍一氏は、集落遺跡の研究によって弥生社会の枠組み³⁾を明らかにしている。それによれば、弥生社会には水系ごとに直径5km程度を単位とする集落群があり、その集落群には巨大で長期間継続する一つの拠点集落と、そこから派生した小規模で短期間の複数の周辺集落からなる。集落群の中心は拠点集落であり、複数の集落群がまとまって地域社会を構成する。また各拠点集落の間には、生産地の限定される物資の流通があり、近畿では二上山産サヌカイトや紀ノ川流域産緑色片岩・丹波山地産粘板岩の原石や製品、その破損品が多数出土する。前者は各種の打製石器、後二者は主に磨製石庖丁として、日常的に広範囲に流通していたことがわかる。また生駒山西麓産の胎土で作られた土器も各地の遺跡で出土する。もちろん土器自体が製品として流通した場合もあるだろうが、何らかの物資を運ぶための容器でもあったと考えられるし、あるいは人の移住に伴って持ち込まれた場合も想定できる。弥生社会とは、拠点集落を中核とする複数の集落群が集合して地域

社会を形成したと考えられている。

それに対して古墳時代の集落には、弥生時代に見られたような集落関係は希薄になる。古墳時代にも拠点集落は存在するものの、弥生時代の拠点集落とは立地を異にし、弥生集落の発展によって成立したものでもないことは明らかである。弥生集落とは様々な差異が確認できるが、出土遺物の変質もその一つである。特筆すべきは多数の他地域系土器の出土が確認できることで、しかも一部の集落では弥生時代とは比較にならないような遠隔地の土器も多く含まれ、それらの集落が地域の中で広域の流通機能を担ったことが明らかである。他に出土遺物の中に古墳の築造あるいは副葬品に関わる遺物や威信財を含み、また検出される遺構には首長居館などの高い階層性を示す事例もあり、隣接して築かれた古墳との関連をも考慮すれば、その背後には流通ルートを掌握した地域首長が存在したと考えられる。このことは、流通ルート上に立地した集落こそが、その地域の拠点集落となり得たことを示している。古墳時代の拠点集落は、流通機能を重視した立地となっており、ここに流通をキーワードとして集落をあつかう意義がある。

古墳時代になると、大阪府において大阪平野部とその周辺地域の集落内容には、大きな差異が確認できるようになる。弥生時代には顕著でなかった中河内と北・南河内、和泉、摂津の集落間に、格差とでも表現すべき差異が生じるのである。そういった格差の生じる原因として、人や物資の行きかう広域流通ルートとの関わりが大きな要因を占めると考える。中河内の場合、大阪平野の中央を流れる旧大和川沿いの広範囲に流通拠点としての集落群が出現するのであるが、それは旧大和川が当時の倭国政権の中心である大和盆地東南部とをつなぐ流通ルートであることが大きな要因と考えられる。さらに巨視的にみれば旧大和川は、大陸、朝鮮半島から西日本諸地域と大和盆地東南部をつなぐルートの一部でもある。それに対し、南河内は旧大和川に連なる石川流域にあるにも関わらず全く異なった状況を示す。それは流通拠点となる集落の欠如、土器様式の後進性や他地域系土器がほとんど出土しないことに示される。このことは、南河内が古墳時代前期の広域流通ルートからはずれていたことを示していると同時に、流通ルートとは自然発生的なものではないことを示している。本稿では中河内を中心に据え、北・南河内、摂津中部・東部および愛知県の尾張、三河地域の集落動向の実態を提示し、その社会的な背景を論証したい。

3 広域流通の実態

第二の課題として、他地域から持ち込まれた物、情報、技術を取上げ、その具体相を明

らかにすることで、古墳時代前期の流通ルートが設定された目的や果たした社会的役割を検討する。古墳時代前期、近畿には流通の活発化によって様々な地域から土器が持ち込まれる。また中河内産の土器も識別が容易であることから、早くから各地域で出土が確認されてきた。このような土器の活発な移動―搬出・搬入―は、近畿に限らず、当該期の列島各地で確認できる考古学的状況であり、流通の活発化は列島全域で出現した社会的な画期として認識できる。土器は地域によって、形態および製作技法、胎土などが異なっており、その違いからどの地域から持込まれたのかが明らかになり、これを「他地域系土器」と呼称する。またそれぞれの地域での土器編年に照合すれば、地域間の併行関係が明らかとなり、持込まれた時期も確定できる。

他地域系土器は、人の移動・移住に伴う容器あるいは実用品であって、それ自体が流通の直接的な目的物ではないことが多い。他地域系土器の出土は、何らかの物資が持込まれたこと、人の移住を伴う場合があったこと、その人の保有する情報や技術が伝えられたことなどを示している。持ち込まれた物資を確定することは難しいが、そこには首長層が入手したであろう朱、特殊器台、白石、結晶片岩の他、鏡などの青銅器、素環頭鉄などの鉄器、碧玉製腕輪類などが含まれていたことが出土によって確認できる。それらは古墳の構成要素であり、また威信財でもある。製塩土器は、塩が持込まれたことを証明できる稀有な事例である。また河内平野の複数の遺跡では、準構造船に関わる資料が出土しており、その流通が海上・河川での船運によるものが大きな割合を占めることを示している。人の移動・移住がどの程度あったのかは研究課題であるが、在地胎土でありながら彼地の技術で作られた他地域系土器などからも、一定人数の移住が推定できよう。また人の移住を示す稀有な事例もある。大阪で複数確認された阿波系土器を使用した土器棺は、彼地と同様に口縁部を東に向ける。また阿波特有の竪穴住居の形態から、阿波型土器の出土する事例もある。これらは、習俗や習慣も同時に持ち込まれていたことを示している。

新たに持ち込まれた技術も確認できる。本稿では土木技術である「敷葉工法」と「水制」を取上げる。古墳時代中期には、渡来人によって持込まれた新たな技術として須恵器、馬匹の生産、本格的な鍛冶技術などが一斉に開花する。他地域系土器である「韓式系土器」の出土数量は膨大で、それらの技術者として多くの渡来人が移住してきたことも確認されているし、技術の独占・掌握を目的に渡来人の集落が倭国あるいは地域の首長層によって計画的に配置されたことも指摘されている。そうした渡来人による技術移転は古墳時代中期以降に活発化するるのであるが、前期にその萌芽が認められるのである。土木技術も同様

で、水処理が重要な課題であった中河内地域では、古墳時代前期以降に渡来系技術と考えられる「敷葉工法」や「水制」が認められる。古墳時代前期以降、絶えず大阪平野部は流通ルート上にある要衝であり続けるが、そこでの集落域造りとその維持にそれらの技術が治水・利水技術として用いられるようになる。また敷葉工法はその後の山田道の築造、平城宮・京の造営、狭山池等の築堤などの国家事業でも認められる技術であり、中河内での施工は全国に先んじるものである。ここではそれらの土木技術を半島をも含む広域な流通ルートを背景に導入され、それら流通拠点を支え、またその後の都市造りにも活用された技術として位置付けたい。

4 広域流通網と塩鉄の掌握

第三の課題として、近畿の首長層が広域流通を通じて入手したであろう塩と鉄を取上げる。塩は人間に欠くことのできない物資として食用となったほか、工業用、儀礼・祭祀用として消費され、また鉄は石器や木器などよりも有効・効率的な農・工具および武器・武器の原料となる。ところで両者共に実用品としての価値を有する物資ではあるが、それ以上に重要な社会的機能を有する点で類似する。すなわち使用価値の高さから生じる両者の交換価値、あるいは威信財としての鉄器の価値であり、それら二義的な価値である。考古資料からも、古墳時代の首長層が二義的な価値を認識していたことは十分に想定できることであり、その掌握は律令期の税制における貢納品となって確立する。しかし両者の掌握が、いつどのように開始されたのかは明らかではない。筆者は古墳時代前期に形成された流通ルートとは、近畿地域の首長層がその物資の掌握をも目的とした装置だと考えておりそれを論証する。

鉄と塩は共に重要な物資であり、その掌握は政権にとって重要課題であった。鉄器については、石器の著しい減少と消滅から、近畿ではほとんど出土しないにも関わらず、弥生時代後期には鉄器化が達成されたと考えられてきた。出土数が少ないのは、再利用と錆化が原因とされてきた。本稿では弥生時代から古墳時代前期における鉄器資料の実態を示すことで、当時の北部九州社会とは大きな格差が生じていたことを示すとともに、持込まれた高温操業による鉄器製作技術が、近畿社会の鉄器化を促したことを明らかにする。

奈良盆地東南部における前期古墳から出土する鉄器は、地域首長層のそれに比較して、種類・数量ともに著しく多い。古墳時代前期には奈良盆地東南部にあった首長層が、鉄・鉄器を独占したことは確実であり、それは極めて短期間に達成されたと考えられる。鉄生

産技術を持たない倭国にとって、鉄素材はすべてが韓半島を介して持ち込まれた物である。また鉄器生産技術は有したにしても、前期古墳から出土する長大な刀剣類などは、技術的には難しく古墳時代前期の広域流通を通じて持ち込まれたと考える。それを証明する考古資料として、大阪市崇禅寺遺跡から出土した素環頭鉄刀の柄部がある。崇禅寺遺跡は、淀川の沖積作用で形成された砂洲上に立地する集落遺跡である。立地は農業には適さず、多数の他地域系土器が出土する典型的な流通ルート上の集落である。鉄器の搬入にも広域流通の果たした役割は大きい、それによって倭国の首長層が鉄・鉄器を独占し得たと考えられる。

土器を使用する塩作りを「土器製塩」、その塩作り専用の土器を「製塩土器」と言う。近年の研究では弥生時代の北部九州地域で、日常土器による土器製塩が確認されている。日常土器による土器製塩から、専用の製塩土器の出現はより組織的・集約的な塩作りを目指したことによる。大阪府では塩の生産地である大阪湾沿岸の和泉地域と、消費地である北・中・南河内と摂津地域からなるが、消費地である中河内から多くの製塩土器が出土することが特徴である。古代社会における塩の労働力に対する給付物としての交換価値を考慮すると、それは単なる物資の移動にとどまらなると考えられる。首長層による労働財源としての塩の掌握を讀取ることが可能である。

弥生時代中期後半、岡山県と香川県の海浜部とその間の島嶼部からなる備讃瀬戸地域に製塩土器が出現し、弥生時代後期後半には大阪湾沿岸の和泉地域にも製塩土器を使った塩作りが始まる。両者の製塩土器は、「脚台式製塩土器」と呼称されるワイングラス形の体部に脚台を付けた非常に類似したものであることから、備讃瀬戸地域から和泉地域に伝わったことがわかる。ただし両者の製塩土器は、脚台部の製作技法が異なっており区別することが出来る。すなわち両地域の製塩土器は、それぞれの地域の高杯の製作技法によっており、備讃瀬戸地域の製塩土器は、体部と脚台部を一体として成形しその後に両者の間に薄く粘土を充填する、いわゆる円盤充填法である。それに対して和泉地域では、体部と脚台部を別々に作り、その後に脚台部を体部に結合させる。本稿では前者を備讃系製塩土器、後者を大阪湾岸系製塩土器と呼称する。

古墳時代中・後期以降、消費地である内陸部で製塩土器が見つかることは知られているが、古墳時代前期の事例はほとんど先行研究がない。また大阪府の場合、塩生産地の和泉が至近にあるので、塩は隣接地域から持込まれたとする先入観からほとんど重視されることがない。ここでは大阪内陸部における古墳時代前期の製塩土器を検討して、流通拠点を

介して持ち込まれた物資の一つに塩があったことを提示し、その分布が旧大和川流域に集中すること、製作技法の違いから大阪湾沿岸と備讃瀬戸の両地域から製塩土器が持ち込まれたことを示す。両地域は、当時最大の製塩地帯であり、中河内・大和にあった首長層による塩を掌握する体制がすでに古墳時代初頭期に始まっていたことを提示する。

註

- 1 奈良県立橿原考古学研究所『纏向』1976
- 2 本稿で記載する相対的な年代観は、以下の土器編年による。寺沢薫・森井貞雄「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編 I 木耳社 1989、寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986
- 3 酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』第三集 奈良大学文学部文化財学科 1984、同「拠点集落と弥生社会」『弥生の世界』歴史発掘 6 講談社 1997 など。

第1章 弥生時代の集落動態

第1節 大阪府雁屋遺跡の大型掘立柱建物

1 はじめに

雁屋遺跡は大阪府四條畷市雁屋北町、江瀬美町、美田町に所在（第1図）する。北河内地域に属し、弥生時代前期から後期末まで継続するいわゆる拠点集落である。

ここに「大型掘立柱建物」としてとりあげる遺構に関わる調査は四條畷市教育委員会によって実施されたもので、調査成果はすでに『雁屋遺跡発掘調査概要』¹⁾（以下、報告書）が刊行されている。和泉地域の池上・曾根遺跡の大型掘立柱建物の発見以前の調査であり、大部分の柱が抜き取られ、しかも遺構密集地であったために一棟の大型建物として認定しえなかったものである。さらに既存建物からのコンクリート柱による破壊で柱列の一部が消滅していることも大きな一因となった。筆者は本地域の資料調査中に疑問を抱き、調査担当の野島氏から教示を得ることによって大型掘立柱建物の存在したことは確実視できる、と考えている。

ここでは雁屋遺跡における大型掘立柱建物の存在を提示し、さらに遺跡変遷の中に位置付けることで、今後の地域検討資料として提示する。

2 調査状況と大型掘立柱建物

調査は府立四條畷保健所改築工事に伴うもので、市教育委員会により平成4年12月1日から平成5年3月31日に実施された。調査地点は昭和38年まで水田であった所に、盛土・整地の後に完成した保健所の老朽化による立替え工事に伴うもので、調査面積は2,380㎡である。報告書ではA地区としている。弥生時代に関しては、中期から後期の遺構が二面で検出されており、本稿では上面と下面として記述する。以下、報告書に沿って概略を紹介する。

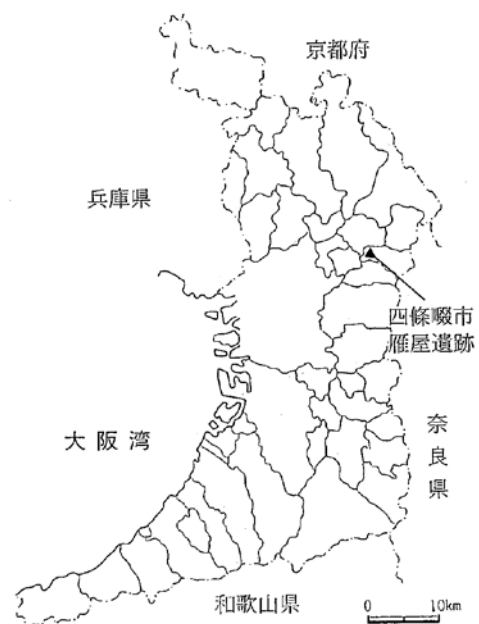


図1 雁屋遺跡位置図

上面遺構 時期的に新しい上面では、調査区西半に方形周溝墓4基からなる墓域、東半に方形あるいは隅丸方形を呈する竪穴住居2棟、多数の土坑、ピット、落ち込み等の居住域に関わる遺構群の他、旧河川が検出されている。旧河川2には橋の基礎杭と推定できるものが確認されており、報告者は環濠的な機能を想定している。なお、図示された資料から

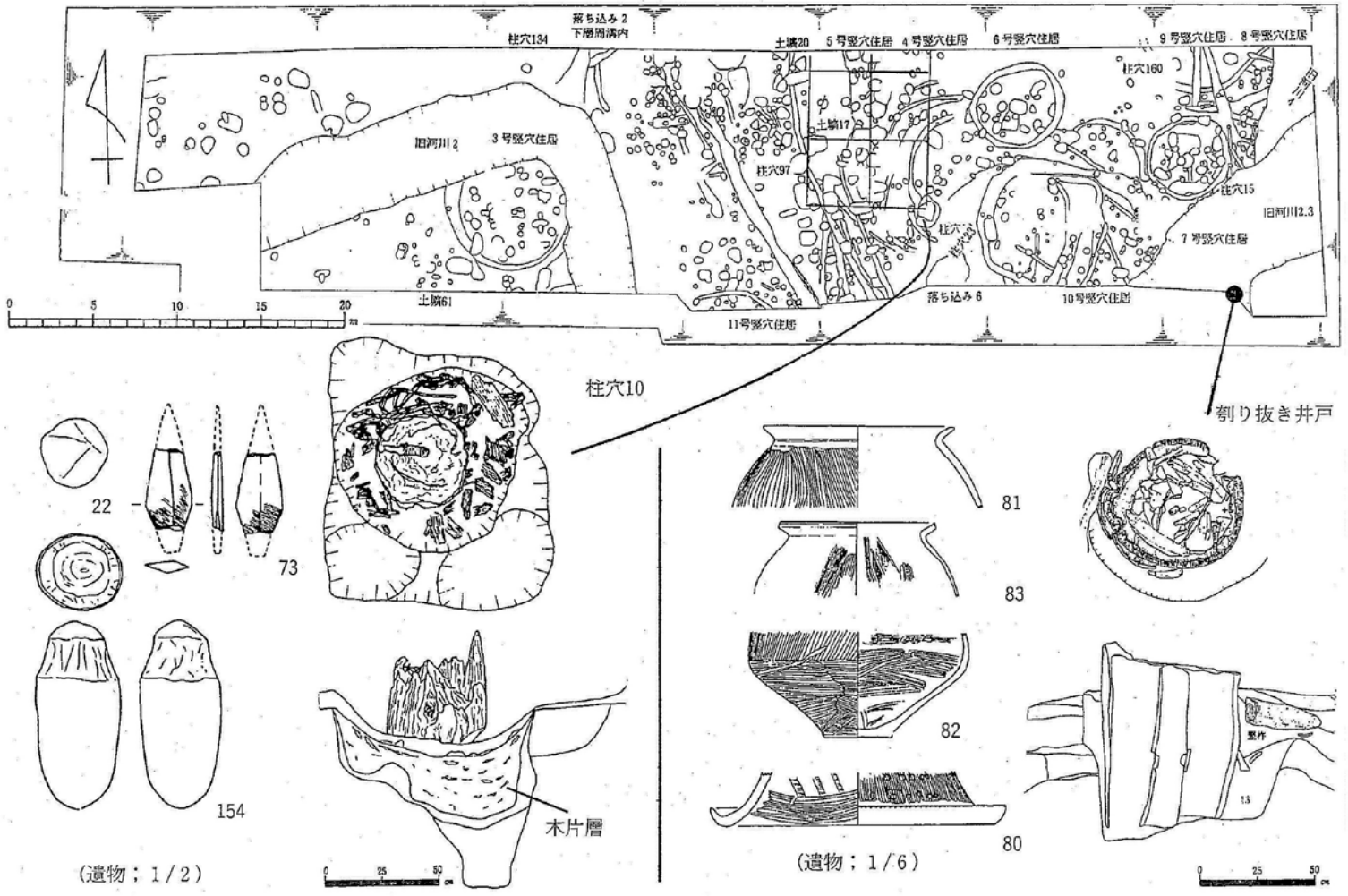


図2 下面遺構の柱穴10・井戸、出土遺物

の判断になるが、弥生時代後期の遺構は旧河川2のみで、第Ⅴ様式前半である。その他の遺構としてはその多くが凹線文出現段階以降の第Ⅳ様式で、第1号方形周溝墓周溝出土の無文化傾向を示す第Ⅳ様式終末の土器²⁾が最も新しい。

下面遺構（図2） 下面では円形竪穴住居9棟を主体に、多数の土坑、ピット、溝、落込み等が検出されている。上面の方形周溝墓の下にも竪穴住居が確認されており、本段階は全域が居住域である。遺物としては第Ⅲ～Ⅳ様式のものが出土しており、竪穴住居の報告資料は凹線文出現段階以降の第Ⅳ様式である。ただし部分的ではあるが、第Ⅱ様式に遡る落込みや柱穴群も確認できる。

本地点では中期は基本的に居住域であり、その後半段階（上面遺構）に西方が墓域になり、後期には断絶したことがわかる。なお、大型掘立柱建物は下面遺構として報告された土坑群の一部をひろったものである。

大型掘立柱建物（図2・3） 位置は、下面の中央部の遺構密集部分である。報告書の図版3下段から、いくぶん方形を呈した土坑が並んでいることが見てとれる。また、報告書第12図（P36）からそれら土坑の並びがほぼ正方位に近いことも確認できる。これら正方位の土坑の並びを大型掘立柱建物の柱穴と推定するのであるが、柱材自体はほとんどが弥生時代の内に抜き取られている³⁾。唯一残存した柱材（図版22上段）は、前記土坑の一つに原位置を保って検出されており「第4号竪穴住居の南側に切り合いをもつ柱穴10」として報告されている。「東西0.9m・南北幅1.12mの周溝内（ママ）に直径80cmの2段掘りをした柱穴」で、直径45cmの柱根が残存する。また、柱根の下には「板材と削り木・木片が約30cm堆積」した特異な状況も報告されている。なお、報告書に記す「周溝」とは、柱根がそのままに残存することからすれば、長大な柱を落とし込む機能を有したと考えられる。さらに、それ以外の柱材の残存しない土坑がより長方形を呈するのは抜き取り段階に伴うと考えるが確証はない。大型掘立柱建物に関わる遺物としては、柱穴10の埋土から中期の土器片・土玉・磨製石鏃・加工石製品が出土している。

第3図は報告書の遺構図面から、大型掘立柱建物に関わると推定される柱穴・土坑を抜き出したものに復元ラインを示したものである。まず、確実な柱穴10を基準にして周囲を見るとほぼ東西南北方向の土坑の並びが確認できる。なお、調査区北壁に沿って既存建物のコンクリート柱が並ぶが、部分的に土坑の一部が残存することから、本来この部分にも土坑の並びがあったと想定する。柱穴10の南と東には土坑の並びが見られないことから、柱穴10を南東隅にする南北棟の建物である可能性が高い、と考えた。なお、これら

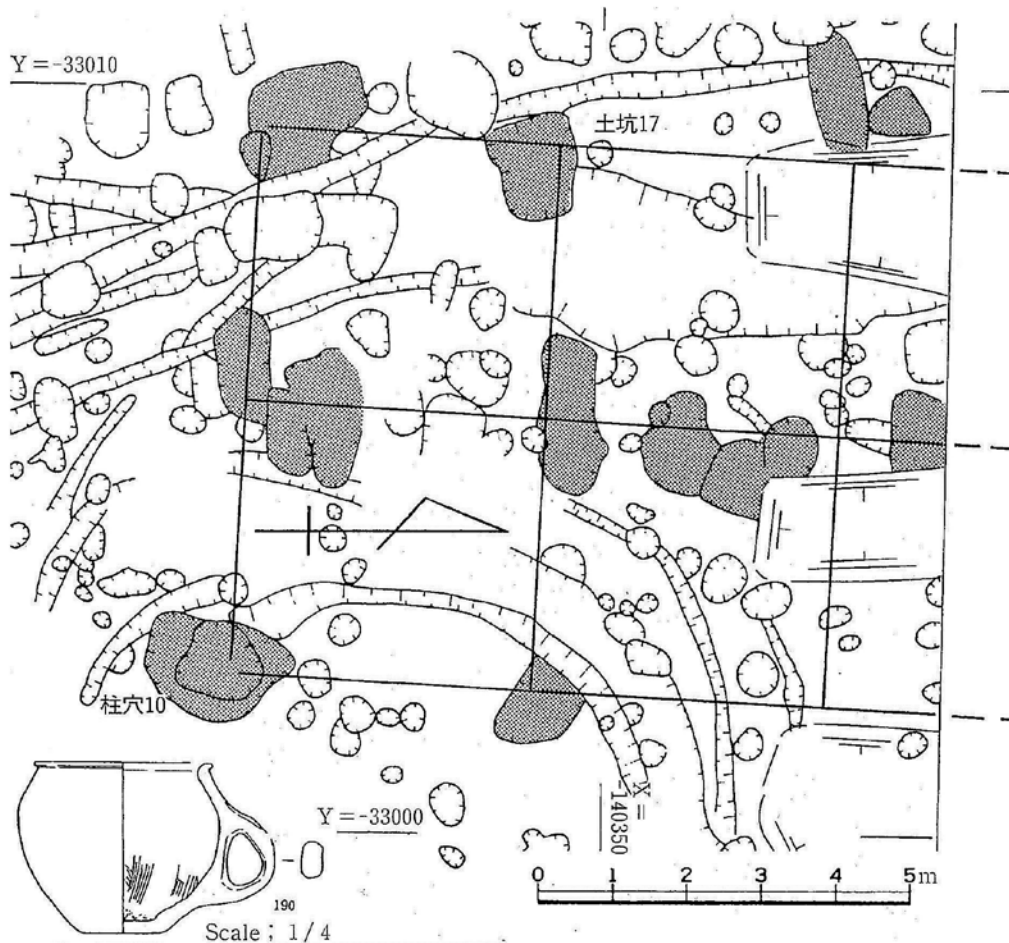


図3 大型掘立柱建物柱建物と土坑17出土遺物

の土坑が一時期の所産によるものか、いく度かの立替を経たものであるかの確証はない。以下のように想定している。

- 1) 梁間（東西）2間、桁行（南北） $2 + \alpha$ 間のほぼ南北方向の大型掘立柱建物を想定⁴⁾したい。総柱建物であり、独立棟持ち柱は確認できない。主軸は真北よりも 3.5° 程度東に振る。なお、南から三列目の東西方向柱穴は、既存建物からのコンクリート柱による破壊でほぼ消滅している。第3図では梁間（東西）を7.4 mに復元したが、最大7.8 m程度、最小7.0 m程度で柱間隔は3.9 ~ 3.5 mにおさまる。東西の側柱の柱間隔4.0 mで復元したが、中央柱列は側柱とは対応しない。梁間のみから比較すると、池上・曾根例と同程度の規模に復元できる。
- 2) 大型掘立柱建物の時期を示す遺物としては、西側柱列の柱穴（報告書の土坑17）から把手付き鉢が出土しているのみである。非河内産胎土、第IV様式に位置付けられる。遺構の切り合い関係と遺構面の上下関連からみると、下面の第4号竪穴住居埋没の後に築造されたものであり、廃絶後には上面で第2号竪穴住居や落ち込み5等の遺構が形成

されている。報告遺物からみると、第2号竪穴住居、落ち込み5共に第IV様式に位置付けられるもので、土坑17出土の把手付き鉢とほとんど時期差が認められない。大型掘立柱建物は、第IV様式の極めて短期間の内に築造と廃絶がなされたと考えられる。

次に簡単に他遺跡の類例との比較を行なっておきたい。弥生時代の近畿地域においては、奈良県唐古・鍵遺跡（第II様式）、兵庫県武庫荘遺跡（第III様式）、大阪府池上・曾根遺跡（第IV様式）、滋賀県伊勢遺跡（第V様式）、京都府大藪遺跡（第V様式）で超大型の掘立柱建物が確認されている。第V様式の伊勢遺跡、大藪遺跡の位置付けは今後の検討を要するにしても、雁屋遺跡も含めて弥生中期例はいずれの遺跡もそれぞれの地域での拠点集落として理解できる点で共通する。他にも建物の主軸に正方位を意識するもの、集落内に築造するもの、方形区画内に築造するもの、独立棟持ち柱を有するもの、巨大な柱材の使用、割り抜き井戸を伴うもの等の共通項も多い。雁屋例の場合、立柱の方法にも共通項を指摘できる。

前述したように、唯一柱根の残存した柱穴10は、柱根の下に板材、削り木、木片の堆積があり、さらにその下にも二段目の深い掘り込みを有した特異な状況を示す。実は全く同様の状況が、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡例⁵⁾にも認められる。唐古・鍵遺跡の独立棟持ち柱付き総柱型掘立柱建物は、第II様式に築造と解体がなされたもので雁屋例よりも時期が遡るものの、技術的には類似する点が多い。唐古・鍵例の柱穴の下部構造は三つの類型が報告されており、B類とされたものは「木片層及び板・棒材を敷き柱を据えるが、据える前に下部を深く掘り込む」もので、雁屋例に極めて類似すると考えたい。また、その木片については「柱材加工時に出たものらしくチップ状になっている。なかには、明瞭な工具痕を残すものもある。それが約10cmほどの厚さで敷き詰められていた。」と報告されている。時期差はあるものの、唐古・鍵例と雁屋例には同様の技術的背景さえ想定しうる。唐古・鍵例とは他にも、正方位の意識、総柱建物である点が共通する。

なお、上記の大型掘立柱建物の柱穴群の他にも一基の大型柱材が「第8号竪穴住居跡内No. 20 柱痕」として報告（図版22下段）されている。これも別の大型掘立柱建物を構成する柱材の可能性はある⁶⁾ものの、調査範囲の端部でもあり将来の隣接地の調査に期待したい。

割り抜き井戸（図2） 調査区南東隅で割り抜き井戸1基が検出されている。掘り方は東西90cm、深さ85cmで、長径62cm、短径58cmの木の内面を焼いて割り抜いている。井戸底部から拳大の石、焼木その他、中位から土器、自然木その他、鹿の下顎骨、石鏃が出土し

た。「旧河川3の堆積土層から井戸の掘り方を検出（中略）。井戸の上部堆積土が、旧河川2の1次堆積土層」とされており、旧河川3の埋没後に築造され、旧河川2によって廃絶したことがわかる。井戸内出土遺物の内、新しい傾向のあるものは、80は台付き鉢の脚台部⁷⁾と82の最大径の下方にある壺で、形態から第IV様式に位置付けられる。井戸のベースとなる旧河川3からは古相を示す遺物が混じるものの、凹線文を巡らせる高坏や、生駒西麓産胎土の把手付き鉢が出土しており第IV様式に属する。また、井戸を埋没させた旧河川2は第V様式前半に位置付けられる。以上の状況から、井戸は第IV様式（それも後半段階）に築造され、中期の内に廃絶したと考えられる。

以上のことから、雁屋遺跡の弥生時代中期後半段階に大型掘立柱建物と割り抜き井戸の築造と廃絶が確認される。ただし、厳密には両者が池上・曾根例のようにセットとして存在したのかは不明である。また、上・下面遺構の状況から、中期後半段階の中で居住域から一部西半が墓域に変化するが、土器様式では極めて短期間である。その過程で存在した大型掘立柱建物の存続期間もさらに短い。上面の方形周溝墓群の段階には大型掘立柱建物は廃絶していることは確実であるが、下面の竪穴住居群との関係は不明である。遺構の切り合い関係から、竪穴住居が先行して存在したことは確実であっても、その後両者が隣接して共存した場合と、竪穴住居が廃絶し大型掘立柱建物のみが存在した場合の二者が想定できる。

3 雁屋遺跡の変遷と大型掘立柱建物の位置

弥生時代の雁屋遺跡は、生駒山麓から河内潟に向かって形成された扇状地の末端に立地している。この時期、河内平野部の北部には河内潟が存在⁸⁾しており、本遺跡は河内潟の北東沿岸部沿いに位置し、遺跡西方の現外環状線付近に潟の渚ラインが想定されている。北河内地域最大の拠点集落であり、弥生時代前期前半から後期終末期まで継続する。大阪府下では中期末、後期中頃に消滅や著しい衰退傾向を示す遺跡が一般的であるが、雁屋遺跡は例外的で、同様の消長を示す事例は中河内地域の亀井遺跡のみである。本遺跡の変遷については、濱田延充氏と阿部幸一氏の論考⁹⁾がある。両氏の論考に導かれつつ、雁屋遺跡における時期毎の変遷について概観しておきたい（表1表・第4図）。

弥生時代前期（図4-1） 本遺跡の出現期である。河内潟に最も近い調査地点1（表1の「地点番号」に一致する。以下同じ）でのみ確認できる。前期前半段階の遺物が溝、包含層から出土するが、遺跡としての性格は不明瞭である。多数の弥生土器と数点の縄文

系突帯文土器が出土する。なお、前期後半段階は未確認である。

弥生時代中期前半（図4-2） 遺跡は、立地のより安定した内陸部へ移動するが、極端に希薄な状況を示す。2地点で確認できる。遺物量から見ると、中期全期間の土器に占める前半段階は大変少なく、第Ⅲ様式後半から第Ⅳ様式に至る後半段階に主体がある。前半段階の明確な遺構は、調査地点5と9の一画で落込み、土坑、ピット等少数の遺構が確認されるにすぎない。中期後半段階における活発な開発によって本段階の遺構の消滅があったにしても少ない。中期後半の遺構と混在したり、その下層で確認できることから、次段階での発展への立地を確保したことは確かで、複数の小規模集落からなっていたと理解しておきたい。なおそうすれば、墓域も次段階の方形周溝墓群に混在する可能性は大きいが、実情は不明である。

表1 雁屋遺跡の調査状況

地点番号	調査年度	調査機関	調査区名	主な検出遺構、その他	文献
1	1983	市教委	市1次；道路公園住宅	遺物量は第Ⅰ様式約90%、第Ⅴ様式8%、第Ⅱ・Ⅲ様式微量。前期；溝、包含層から前期前半の土器多数。中期後半；土器棺1(第Ⅳ-1様式)。	1
2	1986	市教委	市2次；暇生会病院	中期後半(下面)；方形周溝墓4。第Ⅲ～Ⅳ様式に築造。後期(上面)；円形竪穴住居1、土坑、周溝墓1。竪穴住居と周溝墓は終末期で、北近畿、山陰系土器出土。	2
3	1986	府教委	府1次；第Ⅰ期調査区	中期後半；方形周溝墓3、土坑2、溝1、大溝1。以上、第Ⅳ様式。他に2号墓周溝内から数点の第Ⅰ～Ⅱ様式土器。後期後半；大溝1、自然河川1、土器群。	3
4			府1次；第Ⅱ期調査区	後期；溝9、土器群4、壺棺1。溝、土器群は第Ⅴ様式中頃～後半主体で、前半は少ない。壺棺も後半と考えられる。	
5	1992	市教委	市3次；A地区(保健所)	中期前半(下面)；落込み、1号周溝墓下層柱穴群。中期後半(下面)；竪穴住居9、大型掘立柱建物、土坑、溝、河川等。中期後半(上面)；方形周溝墓4、竪穴住居2、土坑、落ち込み、溝。後期前半の河川。	4
6			B地区(保健所)	中期(下層)；溝4、土坑3、大溝1。中期後半(上層)；竪穴住居2、井戸1、土坑1。竪穴住居は第Ⅳ様式。	
7	1993	府教委	府2次	後期後半；溝3、包含層。	5
8	1994	府教委	府3次	後期のみで中期なし。未報告。後期前半～中頃(上面)；竪穴住居3、井戸2、溝、土坑、落込み他。後期後半(下面)；竪穴住居6、井戸2、溝、土坑、落込み他。	6
9	1997	府教委	府4次	遺物の大半は後期。調査地東端で中期前半の遺構(土坑、ピット)も少数あり。中期後半；方形周溝墓2、溝、土坑他。後期；竪穴住居1、溝、土坑他。	7
10	2001	府教委	府5次	奈良時代溝より、弥生時代中後期土器、布留後半土器。	8

- 1 四條畷市教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1984.3
- 2 四條畷市教育委員会『雁屋遺跡』1987.3
- 3 大阪府教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要』1987.3
- 4 四條畷市教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要』1994.3
- 5 大阪府教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要』1994.3
- 6 佐久間貴士「四條畷市雁屋遺跡の発掘調査」『第32回大阪府下埋蔵文化財研究会』1995.6
- 7 大阪府教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要・Ⅴ』2002.3
- 8 大阪府教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要・Ⅴ』2002.3

弥生時代中期後半（図4-3） 遺跡の盛行

期であり、膨大な遺構、遺物が確認できる。立地からみると、前段階からの延長線上での発展であると理解できる。居住域は、調査地点5でのみ濃密な重複関係をもって確認できる。前述のようにこの地点では、第IV様式の中で多数の竪穴住居と掘立柱建物からなる居住域（下面）から墓域（上面）へと変化しており、その過程の最も盛行した段階に大型掘立柱建物と削り抜き井戸が短期間の内に造営と廃絶が確認される。未報告資料が多いが数ヶ所の面的調査や道路埋管に伴う立会等によって確認されることも多く、方形周溝墓を主体とする墓域が、群を形成しつつ広大な面積を占めることが特徴である。前段階では居住域の調査地点9も墓域に変化する。四條畷高校西半部は沼状地形とされており、そうすれば墓域は二ヶ所に分離できる。なおこの段階の方形周溝墓は、調査地点5の第1号方形周溝墓周溝出土遺物が示すように、無文化傾向を示す第IV-4様式には造営を終了する。

弥生時代後期（図4-4） 第二の盛行期で

あり、中期段階とは立地をかえて膨大な遺構、遺物が確認できる。居住域が、四條畷高校東半部に集中する。後期全期間におよぶ遺構の密集と安定した包含層の形成が確認できる。中期居住域が、後期には継続しないことは特徴的である。前段階に墓域であった所が、本段階に居住域になることは



図4-1 雁屋遺跡(弥生時代前期)

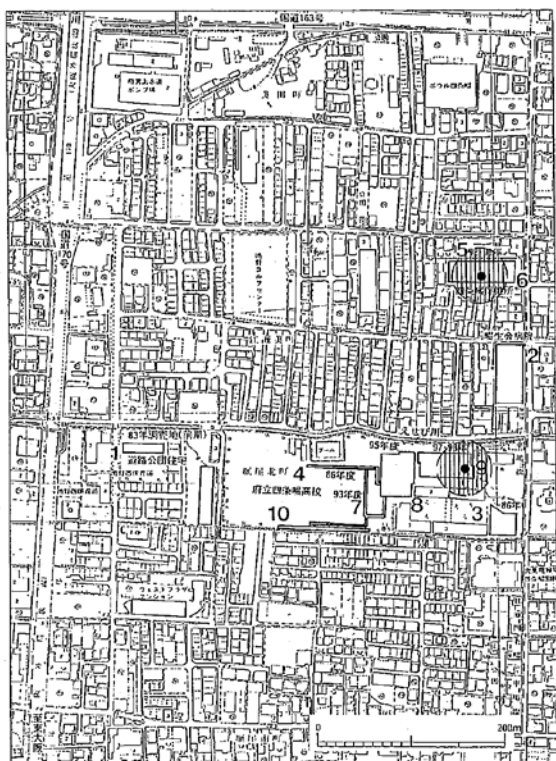


図4-2 雁屋遺跡(弥生時代中期前半)

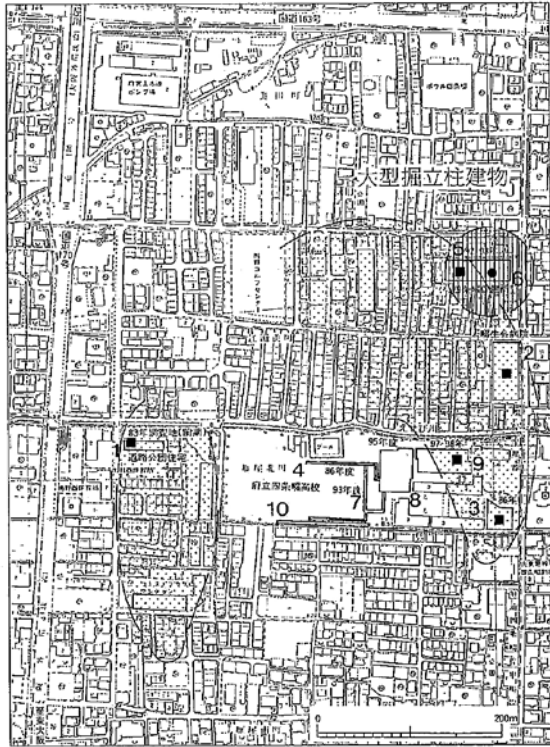


図4-3 雁屋遺跡(弥生時代中期後半)

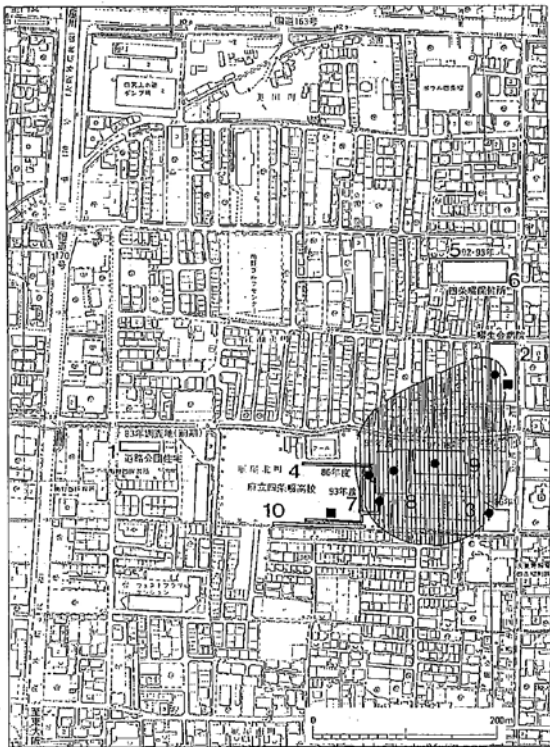


図4-4 雁屋遺跡(弥生時代後期)

調査地点9で確認される。居住域における生駒西麓産胎土の土器の搬入は非常に多く、中河内地域の生駒山麓諸遺跡との密接な交流を示す。居住域の外縁部である調査地点3・4・7では多条の溝が確認され、環濠的機能を有すると考えたい。墓域は他遺跡と同様に極めて不明瞭になる。群をなす方形周溝墓の造営はまったく確認できない。現状では居住域の南西隅で土器棺（後期後半）、北東隅で周溝墓（後期終末）各1基が確認されているにすぎない。なお、調査地点2の周溝墓からは弥生時代終末期の北近畿系の鉢と山陰系の低脚杯が、隣接する竪穴住居からはやはり北近畿系の把手付き鉢が出土¹⁰⁾しており異色である。中期的な墓と住居のありかたとは異なる。また、後期居住域に隣接するかつての中期周溝墓で、後期段階に何らかの祭祀を行った例が調査地点3で確認¹¹⁾されている。本遺跡は後期終末をもって消滅する。

古墳時代初頭～前期 明確な遺構は未確認である。流路等から庄内～布留期初頭と布留期後半の遺物が少数出土¹²⁾するに止まる。

以上のように、雁屋遺跡では弥生時代の全期間にわたって継続するとはいうものの、全域で連綿と存在するのではなく、その範囲の中での移動が確認できる。前期、中期、後期程度に時期を限定すれば、全くその立地を替えており、近畿の諸遺跡で確

認できる画期に一致する。なお、遺跡範囲では中期、後期にそれぞれ1～2単位の居住域しか確認できないのが現状であるが、方形周溝墓の広がりからすると、たとえば唐古・鍵遺跡等と同様の未発見の単位を推定しておきたい。

4 まとめ

以上の検討から、詳細は今後の検討と隣接の発掘調査によるにしても、雁屋遺跡では弥生時代中期後葉に大型掘立柱建物と削り抜き井戸の存在は確認できた。中期近畿地方における大型掘立柱建物の例が、雁屋例も含めて地域での拠点集落の、しかも盛行段階での築造である点、あるいは共通項の多さは前述したとおりである。このことは、畿内の弥生時代拠点集落における大型掘立柱建物の存在は一般的な状況であったとの想定¹³⁾も可能で、その成立の背景には共通の思想・祭祀、技術的背景があったと考えたい。大型掘立柱建物を特殊と考えるのではなく、むしろ通有の社会的な到達点¹⁴⁾として理解することが必要ではないだろうか。

しかし第Ⅴ様式をむかえるや、雁屋遺跡では中期居住域のエリアは無人化して別地点へ移動するとともに、その後の大型掘立柱建物の系譜にのるものは未確認になる。隣接地に移動したのであろうか、あるいは別遺跡を形成したのであるかは大きな関心事である。なお第2節で紹介するように、第Ⅴ様式後半の滋賀県伊勢遺跡で大型掘立柱建物が確認され、その実情が近年の調査で判明しつつあり、一般集落とはかけ離れた状況を示す。畿内中枢部における第Ⅴ様式の状況が不明瞭であるので早急な判断は控えねばならないが、大型掘立柱建物との社会的な意味が第Ⅳ様式までと第Ⅴ様式では大きく異なる可能性は想定しておきたい。

註

- 1 四條畷市教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要』1994
- 2 多くの生駒西麓産土器が出土している。濱田氏の第Ⅳ様式新段階（濱田延充「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『弥生文化博物館研究報告』第2集 大阪府立弥生文化博物館 1993）、森井氏の河内Ⅳ-4様式（寺沢薫・森井貞雄「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社 1989）に位置付けられる。本文中の時期の記載は後者によった。
- 3 池上・曾根遺跡の大型掘立柱建物の柱材はその多くが残存し、本遺跡のほとんどは抜き取られて

- いた。池上・曾根遺跡では弥生時代後期は断絶期間であり、雁屋遺跡の本地点はその後墓域として利用されたことに理由がある、と考えたい。
- 4 野島 稔氏のご厚意により航空写真を実見させていただき、これらの土坑の多くが深いことを確認した。しかし例外もあり、建物の南西端に設定した土坑は浅い。
 - 5 豆谷和之「唐古・鍵遺跡第74次発掘調査概要報告」『みずほ』第33号 大和弥生文化の会 2000。本報告を待ちたいが、本書で豆谷氏は、雁屋遺跡の柱穴10と同じ状況を技術的に解釈している。筆者も同様に考えたいのだが、柱穴10の断面形態と復元ライン上の土坑のあり方からすれば、立替に伴うものであるとの想定も可能で今後の研究課題としておきたい。
 - 6 柱根は報告書図版22下段によれば、基部近くに水平の抉りを巡らせる。ロープをかけて運搬、あるいは立柱時に機能したと考えられる。同様の抉りは京都府大藪遺跡の大型掘立柱建物SB001の柱根bにも施される（小泉信吾「大藪遺跡の大型掘立柱建物について」『第5回 近畿弥生の会 和歌山場所』資料 近畿弥生の会 2002）。
 - 7 三好孝一氏（財団法人 大阪府文化財調査研究センター）より教示を得た。竹管文を巡らせるのは台付鉢の施文パターンである。
 - 8 梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』青木書店 1986。それによれば、当該期は「河内潟の時代」に相当する。
 - 9 濱田氏によれば、雁屋遺跡は弥生時代前期前半に出現し、前期中葉には様相が不明確になるものの、中期以降は後期末まで継続して集落が営まれたことを述べている。また、本遺跡では生駒西麓産胎土の土器の搬入、その模倣土器が多く存在することが特徴で、中河内地域の生駒山麓諸遺跡との密接な交流のあったことにも触れている（濱田延充「北河内地域における弥生時代遺跡群の動態」『市史紀要』第8号 寝屋川市教育委員会 2001）。阿部氏は既往の調査地点ごとの成果をふまえて、遺跡範囲内における時期毎の変遷について述べている（大阪府教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要・Ⅲ』1998）。
 - 10 四條畷市立歴史民俗資料館『第16回特別展 がんばる弥生人』2001。
 - 11 調査地点9では、第Ⅳ様式の方形周溝墓の溝が後期段階にも残存しており、そこでの後期後半段階の焼成後穿孔の甕を含む土器群による祭祀行為が確認されている（大阪府教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要』1987）。
 - 12 奈良時代の自然流路から、庄内期新相～布留期初頭と布留期後半の遺物が少量出土している（大阪府教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要・Ⅴ』2002）。
 - 13 大阪府の弥生拠点集落では、中期全般にわたって盛行する遺跡の他に、田井中遺跡のように中期前半にピークのあるものと、本遺跡のように中期後半にピークをむかえる場合がある。前者に大型掘立柱建物が存在するのかが今後の課題になる。

- 14 同様の状況は様々な考古学的事象に現れる。例えば中河内においては、方形周溝墓にも現れており、一般墓域から離れて特に大型の上位階層墓が認められるようになることもその一つである（大庭重信「方形周溝墓制からみた畿内弥生時代中期の階層構造」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 1994）。

第2節 近畿の大型建物の変遷とその性格について

1 はじめに

近年、弥生時代から古墳時代の大型掘立柱建物（以下、大型建物）の発見が相次いでいる。当初はその特殊性ばかりが強調されたが、事例の増加によってむしろ当時の社会的発展の段階、集落の役割、ランクに応じて存在する築造物と認識できるようになった。

ところで広瀬和雄氏は、掘立柱建物で独立棟持柱を有するものを「神殿」と考える。氏も述べるように、弥生時代の掘立柱建物は多数検出されるが独立棟持柱建物はわずかに40数例にすぎないこと、土器絵画において独立棟持柱建物は農耕祭祀の主要な構成要素であること、祭祀遺物を伴うものがあることで明らかであろう。また何にもまして池上・曾根例、武庫庄例などは独立棟持柱建物がその集落で最も巨大で中心部分に築造されていることから、特殊な機能を有し、その威容から祭祀性の強い存在と考える。しかし土器絵画や大型建物には独立棟持柱以外もあり、私自身は必要以上に大型化した建物により強い祭祀性を認めたい。むしろ土器絵画は祭祀行為を描いたと考えられ、そこに描かれた大型建物の空間を祭祀空間と考えることは自然である。

なお、広瀬氏の独立棟持柱建物「神殿」論¹⁾に対しては、7世紀後半の神明造りと結び付けるにはその間の考古学的根拠の積み上げが必要と考える。集会所、祭殿、政治執行の建物、有力者居宅などの考えがある中で独立棟持柱建物を含む大型建物のあり方、機能を見極めることこそが最重要の作業と考え、機能の特定は時期尚早と考える立場である。よって、本稿では超大型建物、あるいは大型建物²⁾と記載する。ここでは時期ごとのそれら建物の要素、立地する集落遺跡の性格、方形区画などを取り上げ、その祭祀的性格の変遷について述べたい。

2 近畿の状況

本稿では大阪府を中心に据え、奈良県と滋賀県などの状況を加味して近畿の状況として概観する。地域性を云々できるほどに資料は多くないからである。大阪府では池上・曾根遺跡の超大型建物が有名であるが、弥生前期以来、通常の規模以上の大型建物の展開が確認できる。ここでは時期ごとにその概略について述べる。

(1) 弥生時代前期 中河内の山賀遺跡で大型建物が確認されている。掘立柱建物3と

報告されたもので、規模は2×4間(5.5×8.3 m)、柱痕は40cmと大型である。方位はN 45° E。中河内地域での集落変遷としては、若江北遺跡に次いで出現する集落で、さまざまの弥生的要素が質的にも量的にも完備される遺跡である。

やや大型といった程度ながら若江北遺跡でも事例がある。掘立柱建物1と報告されたもので、規模は3×5間(4.4×8.3 m)である。梁間3間が特徴的で、以後近畿では1～2間に統一される。府下最古の遠賀川式土器段階のものであり、大型建物が新来の弥生文化の構成要素の一つであったことを示す。

なお通常規模ながら、和泉地域の氏の松遺跡ですでに独立棟持柱建物がみられる。現状で上記事例に祭祀性を示す状況は確認できない。

(2) 弥生時代中期前半 奈良県のみ事例がある。唐古・鍵遺跡では、中期初頭に遡る独立棟持柱付きの超大型建物が検出された。当時の唐古・鍵遺跡は北・西・南の3地区に分離しており、超大型建物は西地区から検出された。規模は2×5間以上(7.0×11.4 m以上)、柱材は直径60cmと超大型である。方位はN 7°W。建物は中期前半の中で成立、解体しており、極めて短期間の存続期間である。

(3) 弥生時代中期後半 各地域で事例が急激に増加する。大阪では和泉の池上・曾根遺跡と北河内の雁屋遺跡で超大型建物が確認された。池上・曾根遺跡ではⅢ期後半～Ⅳ期後半にかけての5段階の超大型建物の変遷が明らかにされている。最終段階の大型建物1と報告されたものは独立棟持柱建物で、規模は1×10間(7.25～6.76×19.38～19.25 m)、柱材は直径50～60cmが主体と大型である。方位はN 6°W。西側独立棟持柱からヒスイ製勾玉、北に接する土坑から特異な独立棟持柱建物を描いた絵画土器が出土した。また巨大な一木割り貫き井戸を併設し、建物周囲に方形区画の意識がみられる。さらに建物の南西部から被熱で発泡、変形した多量の土器が出土し、青銅器生産に関わるものと考えられる。

雁屋遺跡の事例は、規模は2×3間以上(7.4×9.5 m以上)、柱材は直径45cmと大型である。方位はN 3.5°W。南東隅の柱穴から磨製石鏃、土玉、石製穿孔具が出土した。また建物の東20 mで同時期の一木割り貫き井戸が確認された。なお遺構の重複が著しく、独立棟持柱や方形区画の有無は不明である。

上記の2遺跡は平野部における拠点集落であるが、北河内の交野台地に立地する星ヶ丘西遺跡でも事例が確認できる。掘立柱建物SB02と報告されたもので、同一場所で立替がなされ、最大で2×8間(4.2×10.5 m)で、中央に束柱を持つ。また、建物の南と東に

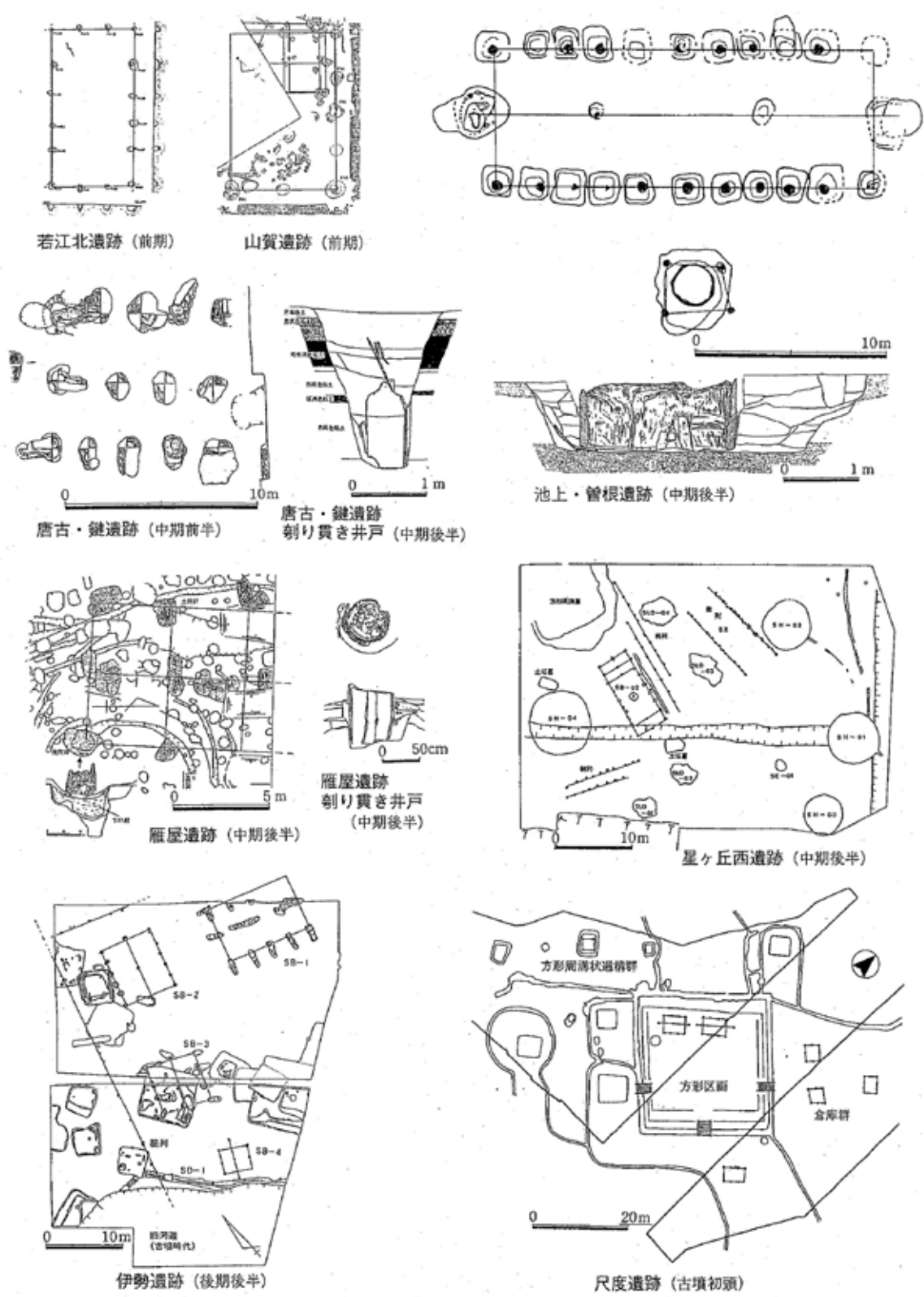


図1 近畿の大型建物とくり抜き井戸

は主軸に平行あるいは直交する方向の柵列があり、集落内の方形区画が想定できる。柱穴の一部から多量の土器破片と石鏃が出土した。

上記3例は拠点集落内部の事例であるが、拠点集落と周辺集落の関連はどのようなのだろうか。それを示すのが、唐古・鍵遺跡とその周辺集落である清水風遺跡、八尾九原遺跡出土の中期後半の独立棟持柱建物を描いた絵画土器である。現状では周辺集落で超大型建物の事例はないから、唐古・鍵遺跡の大型独立棟持柱建物を描いたと考えたい。土器絵画は当時の祭祀行為を描いたと考えられ、そうであるなら拠点集落での大型建物の空間を祭祀空間として、その周辺集落を含めた領域での祭祀が行われたのであろう。なお大型建物は未確認ながら、多遺跡と芝遺跡でも大型建物と考えられる絵画土器が出土している。いずれも水系を異にする拠点集落であり、同様の状況がそれぞれの拠点集落と周辺集落にもあったと想定したい。

(4) 弥生時代後期前半 中期にみられた大型建物は廃絶して継続しない。特に平野部では拠点集落の活動自体が不活発で、大型建物も確認できない。

(5) 弥生時代後期後半 滋賀県に事例がある。野洲川流域³⁾は、やはり後期前半は集落活動の衰退期で、後期中頃から古墳時代初頭期にかけて環濠集落や大型建物が集中する地域である。後期中頃に不整形の環濠集落として酒寺遺跡が、その後伊勢遺跡やや遅れて下鉤遺跡が出現する。伊勢遺跡は集落中心部に真北方向の楼閣、その西側隣接地に柵や溝で構成した方形区画内に大型建物を配しており、さらにそれを独立棟持柱建物群が径約150 mの円形に取り巻く特異な配置が確認されている。方形区画内ではS B 1が最大規模で2×4間(7.8×11.3 m)、柱材は直径40～50 cmに復元できる。方位はN 19°W。他にも大型建物が数棟並存しており、寺沢氏⁴⁾はこの方形区画を首長の居所と考える。下鉤遺跡では独立棟持柱を有する大型建物の隣接地から青銅製品(銅鏃10、銅釧2)が出土し、銅塊も出土している。

(6) 古墳時代初頭 溝を掘削した方形区画とその内部に大型建物が明確になる。

南河内の尺度遺跡では、36 m程度の方形区画とその内部に柵列や数度立替えられた独立棟持柱建物が明らかとなり、首長居所と考えられる。最大規模の建物Cは2×4間(5.4×7.5 m)、方位はN 47°W程度である。この方形区画は独立するのではなく、周囲に多くの竪穴住居や掘立柱建物が検出され、集落の一画に存在する。

同じ状況を示すのが滋賀県下長遺跡である。ここでは広大な居住域の一画に一辺50 m以上の方形区画と、その内部から独立棟持柱を有する大型建物が検出されており、やはり

首長居所と推定できる。他にも一辺 65 m ほどの方形環濠があり、内部には柱列以外の遺構がないことから祭祀空間と推定されている。なお集落域の北を流れる自然河道からは、準構造船、儀杖、直弧文入り刀柄頭、蓋立ち飾り、琴、団扇状木製品などの木製品や石釧、重圏文鏡が出土している。

奈良県では纏向遺跡と能登遺跡に事例がある。纏向遺跡では遺跡を見下ろす高所に、幅 1 m、深さ 1.5 m の断面 V 字状の溝が検出され、その外側に溝に平行して柱穴列が確認されている。鉄器製作に伴うフイゴ羽口や鍛冶滓、石釧破片などが出土しており、布留期初頭に位置付けられる。また、巻野内家ツラ地区では掘立柱建物に隣接して導水施設が検出されて、水に係わる祭祀の行われたことがわかる。やや異なるのが能登遺跡⁵⁾の事例である。遺跡は鳥見山山麓裾にあり、2 × 3 間 (5.0 × 7.0 m) の独立棟持柱付建物が検出されている。調査担当者は立地から神奈備山である三輪山信仰、あるいは鳥見山信仰などの宗教施設としての性格を想定する。

地域は異なるが類似例として、石川県千代・能美遺跡⁶⁾の事例も紹介する。ここでは中期後半にみられたのと同様、大型建物と一木割り貫き井戸を併設する。つまり 2 × 5 間 (5 × 12 m) の柱掘立柱建物 12 の軸線上に長軸 96cm の一木割り貫き井戸が検出された。また、中央川跡からは導水施設の他、準構造船部材、直弧文を彫り込んだ装飾木製品、四方転びの箱等多数の特殊木製品が出土している。

3 まとめ

最後に、概観してきた弥生時代から古墳時代前期の大型建物の内容と祭祀性について、時期毎にまとめてみよう。

(1) 弥生時代前期 超大型建物は未成立であるが、一般規模以上の大型建物は若江北遺跡と山賀遺跡に事例があり、弥生文化の流入当初から存在する。若江北遺跡の事例は大阪最古の遠賀川式土器出土層準より古い段階であり、梁間 3 間以上は福岡県江辻遺跡、高知県田村遺跡にもみられる弥生文化流入期の特徴である。北部九州ではこの系譜が追えるに対し、近畿では山賀遺跡以降 1 ～ 2 間に統一され地域性を示す。山賀の巨大な柱材使用は後の超大型建物へ引き継がれる要素である。この段階に祭祀性を示す証拠はない。また中期以降に大型建物の主流となる独立棟持柱建物もすでに出現している。

(2) 弥生時代中期前半 唐古・鍵遺跡の事例から、大型建物は地域内の拠点集落の内部に建てられる。また、従来言われたように中期中頃以降に権力集中の一箇所に成立した

のでないことを示すとすれば、たとえば中河内では拠点集落でも中期前半に最盛期のある田井中遺跡、美園遺跡などにも注意を向けておく必要がある。巨大な柱材の使用と柱堀方、正方位の意識などに後の大型建物につながる要素がみられる一方で、方形区画は未確認である。なお本段階以降、超大型建物は独立棟持柱を有するものが主流になる。祭祀性を示す証拠は未確認である。

(3) 弥生時代中期後半 事例が急激に増加し、多数の共通点が確認できる。すなわち、①弥生前期から継続する拠点集落であり、最盛期の中期後半に築造される、②拠点集落内部の方形区画内に築造する、③短期間で立て替あるいは廃絶する、④正方位を基準にする、⑤巨大な柱材の使用と巨大な柱堀方、⑥独立棟持柱を有する、⑦柱穴からの特殊遺物の出土、⑧一木割り貫き井戸を併設⁷⁾するなどである。大阪の二例の梁行長がほぼ同じなのも気になり、予想以上に規格化されていた可能性もある。ただし、いっきに整備されたのではなく前期以来の大型建物の諸要素が統合、整備されたと考えられる。また時期の経過をおって、あるいは大型と超大型の間を埋める事例があって徐々に大型化するのではなく、山賀、星ヶ丘西の事例は45㎡程度で、超大型の100㎡以上とは隔絶した差があることも重要である。星ヶ丘西遺跡は交野丘陵での遺跡の動向から出現時期、継続性、集落構造から拠点集落と考えてよい。大型建物のあり方からは、広大な平野部をひかえた池上・曾根遺跡や雁屋遺跡と比較した場合の後進性を示すと考えたい。なお、池上・曾根遺跡、雁屋遺跡ともに祭祀行為に伴うとみられる遺物が出土するが、前者での発泡、変形土器の多量出土は実業的な青銅器生産をも祭祀空間に取り込んだことを示す。また土器絵画の急激な増加自体、祭祀の確立と無縁ではない。

以上から、各拠点集落の大型建物を中心に周辺集落を含めた領域での整備、規格化された祭祀を想定しておきたい。と同時に、星ヶ丘西遺跡の状況からは、下位ランクの拠点集落でも上位ランクの縮小型の祭祀が行われたと考えたい。

ところで、北部九州では大型建物と墳墓祭祀との関連が濃厚である。しかし他地域でそれが言われることは少ないが、北部九州独自の性格かといえば必ずしもそうではなく、愛知県猫島遺跡では方形周溝墓の墓域入口に立地する大型建物に墓前祭祀的性格が想定されている。近畿でも中期後半には多数の方形周溝墓群が築造され、また独立した巨大方形周溝墓が築造される時期である。なお雁屋遺跡、星ヶ丘西遺跡ともに同時期の方形周溝墓が隣接しており、農耕祭祀ばかりでなく墓前祭祀的性格を想定する余地は十分にある。多様な祭祀的要素が渾然一体となった状況を示すと考えたい。

(4) 弥生時代後期前半 後期前半における集落遺跡の衰退・解体が言われて久しく、大型建物にあっても実態は不明である。重要なことは本段階をはさんで、その前後で大型建物を取り巻く状況がまったく異なることである。

(5) 弥生時代後期後半 大型建物の事例は少なく、滋賀県伊勢遺跡、下鈎遺跡と京都府大藪遺跡があるにすぎない。これらは遺跡自体が、後期のみの短期間の存続期間であることが特徴である。古墳時代初頭期には首長居宅と祭祀空間が分離するが、伊勢遺跡では本段階にその萌芽がみられる。また中期後半までの大型と超大型建物の間を埋める面積であり、正方位に沿った築造にならないことも重要である。さらに複数の大型建物の並存から機能分化が推定でき、本段階の特徴である。また下鈎遺跡の銅塊は、前段階の池上・曾根遺跡と同様に実業的な青銅器生産を祭祀空間に取り込んだことを示すと考えたい。

(6) 古墳時代初頭期 庄内期から布留期初頭には、集落遺跡の性格が大きく変化するが、中でも港市的性格の遺跡での大型建物が目立つ。弥生中期後半までは明確でなかった首長居宅と祭祀空間などの機能分化を伴いつつ、広い居住域の一角に大型建物を内包する方形区画がみられる。尺度遺跡と下長遺跡などがそれであり、他地域では、岡山県津寺遺跡でも同様の事例がある。尺度遺跡は閉鎖的な地域の拠点であり、対して下長遺跡は湖東から淀川を介し、瀬戸内に至る物流の主要ルート上の拠点で、津寺遺跡もそれに連なる。このような社会的役割の差が方形区画、大型建物の規模の差に示される。

祭祀関連の遺構・遺物にも大きな変化がみられる。水関連の祭祀では、従来の井戸以外に導水施設が加わり、本段階から主要な祭祀装置の一つになる。また新たな祭具として儀杖、団扇状木製品、蓋形木製品などの威儀具、四方転びの箱や直弧文入り特殊木製品などが創出される。なお実業面では青銅器製作の他に鉄器生産を取り込んでいる。本段階には港市的機能を有する集落を中心に、弥生時代とは全く異なる新たに整備、創出、規格化された祭祀の完成が確認できる。

以上、弥生前期以来みられた大型建物の系譜は、中期後半と古墳時代初頭の2段階において全く異なった内容で整備、企画化されていたことを確認した。

註

- 1 広瀬和雄「弥生時代の「神殿」」『都市と神殿の誕生』新人物往来社 1998、同『前方後円墳国家』角川書店 2003 など。なお、独立棟持柱が後の神明造に引き継がれたことは有力と考える。佐伯

英樹氏は、出雲大社の柱穴内の柱の周りに 13 トンの石が充填されていたことに注目し、同様の工法が滋賀県下鉤遺跡と伊勢遺跡の独立棟持柱建物にもみられるとする。これを「底つ石根に宮柱ふとしり、高天原に氷木高しりて」と伝える『古事記』の出雲大社創建伝承と結び付けて考える。独立棟持柱建物が律令期以降、神明造りに限られることも、「弥生時代、古墳時代を通じて「特別な建物」と広く認識されていたから・・(略)・・神明造として成立したからこそ律令期には広く模倣を許さなかった」からと解釈する(佐伯英樹「下鉤遺跡の青銅器生産と大型掘立柱建物」『徹底討論「伊勢遺跡の謎を解く」』皇子山を守る会 2002)。

- 2 本稿では高倉洋彰氏の分類に従って、必要に応じて面積が 40㎡程度を大型、100㎡に及ぶようなものを超大型と呼びわけ(高倉洋彰「弥生時代の環濠集落と大型建物」『ムラと地域社会の変貌』埋蔵文化財研究会 1995)。
- 3 近藤 広「近江における弥生中・後期集落の構造」『究班』Ⅱ 埋蔵文化財研究会 2002。なお野洲川流域での後期から古墳時代初頭の集落遺跡の展開、個別遺跡の状況について伴野幸一氏や佐伯秀樹氏による多数の報告があり、詳細はそれによら(『徹底討論「伊勢遺跡の謎を解く」』皇子山を守る会 2002 ほか 所収)。
- 4 寺沢 薫「首長居館論追補」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 2001
- 5 清水眞一「大和で最初の大型棟持柱付掘立柱建物の発見」『みずほ』第 24 号 大和弥生文化の会 1998
- 6 林 大智ほか「千代・能美遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第 6 号(財)石川県埋蔵文化財センター 2001
- 7 今回は扱わなかったが、大和においても数例の刳貫き井戸がある。唐古・鍵遺跡 23 次 SK113(直径約 60cm、Ⅲ様式)、芝遺跡 17 次 S K 4307(直径 60 × 40cm、Ⅲ様式)、同 18 次 SK606(直径約 30cm、Ⅲ様式)、平等坊・岩室遺跡 19 次 SK59(直径約 60cm) などである。いずれも拠点集落であり、大型建物の存在が予想できることは注目しておいてよい。なお唐古・鍵 SK113 からは銅鐸形土製品破片やト骨が出土し、祭祀性は明らかである(『みずほ』第 30 号 大和弥生文化の会 1999 所収)。

第2章 古墳時代前期の広域流通と拠点

第1節 古墳時代初頭前後の中河内地域

1 はじめに

大阪府下では古墳時代初頭以降、営まれてきた弥生集落は解体し、新たな集落が出現する¹⁾。このような状況は若干の時期のズレはあっても広く日本の各所に認められる動向であり、その背景には弥生社会が古墳時代になって大きく変質したことが想定される。今回とりあげる旧大和川流域においてもその傾向は著しく、具体的には弥生時代には流域単位でいくつかの地域毎に拠点集落、周辺集落のまとまりとして認められたものが、庄内期に至って多数の、あるいは広大な面積を有する集落が密集する状況を示すようになると思われる。同様の状況は西日本の各地で確認でき、その意味するところは未解決であり、それぞれの地域で究明されねばならない課題である。中河内の場合はこの地域が瀬戸内海に面する諸地域と、当該期の政治的中心地と想定されている大和盆地東南部地域を結ぶ要衝の地、旧大和川沿いに位置することからその重要性を推定できる。

しかし中河内地域の場合、旧大和川の沖積作用が著しく研究のベースとなる旧地形の復元が難しく、また対象となる遺構面も極めて深いことから、点と線の状況でしかとらえられていないことも事実である。そのようなこともあって、現状では行政区画に沿って遺跡が線引きされ、「どの地点で何が出た」程度のことは報告書から引き出せても、それ以上の遺跡単位の動向、変遷について知ることは困難である。その一方で、そういった問題をかかえたままに、近年の膨大な緊急発掘調査によって資料の蓄積が進行している。

本稿は上記の現状ではあっても、現段階での成果をまとめておく作業は必要と考え、中河内を中心とした古墳時代初頭以降の遺跡の動態を概観し、その歴史的

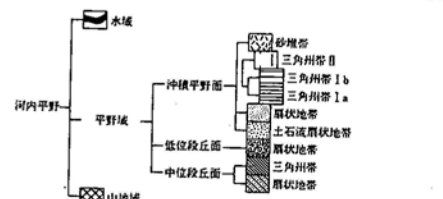
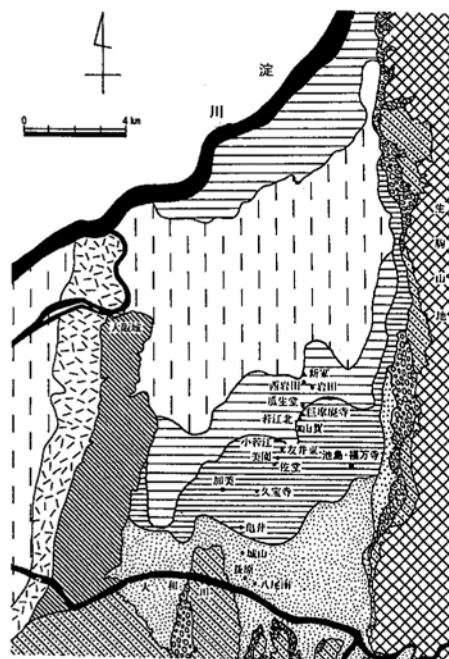


図1 河内平野の地形分類(註4)

な意義を探ることを目的とする。なお、古墳時代初頭とは庄内期をさしており、前期の布留期までをあつかう。また時間軸は、寺沢薫氏による土器編年²⁾を参考にする。

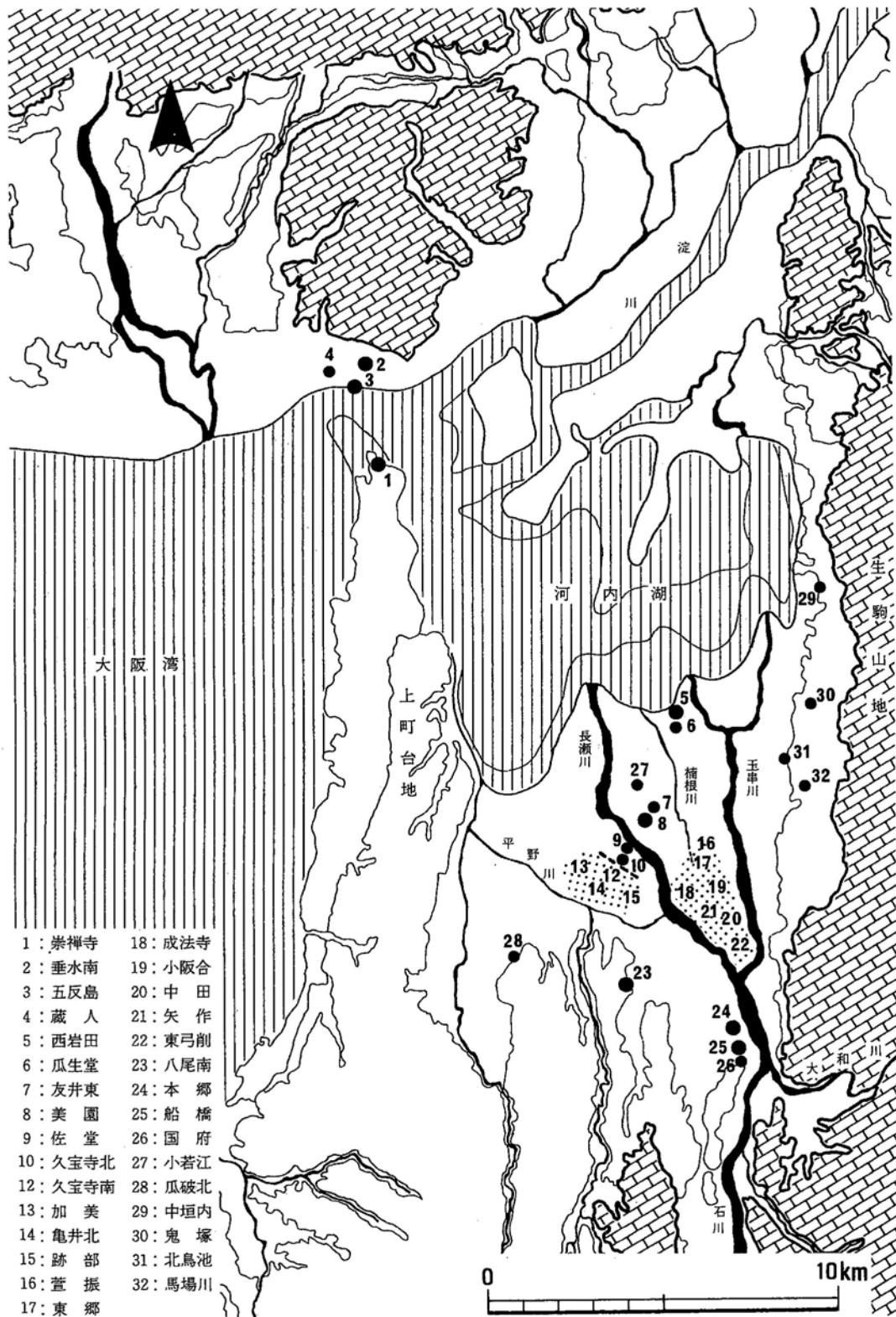


図2 中河内の古墳時代初頭期遺跡分布

2 中河内地域の状況について

ここで扱う中河内地域とは東西を生駒山地と上町台地、南北を羽曳野丘陵と河内湖に挟まれた河内平野部をさしている。この地域は旧大和川の著しい沖積作用によって形成されたもので、その平野部を旧大和川が流路を頻繁に変えながら北流していたのである。なお旧大和川とは 1704 年に付け替えられる以前の大和川を指す。また、古墳時代初頭は河内平野北方に河内湖³⁾が存在しており、急激な陸化が進行しつつ瀬戸内諸地域と直接に通じていた時代である。近年の高橋学氏の研究(第1図)⁴⁾はそれを示している。

中河内の遺跡の分布(第2図)を概観すると、立地からいくつかのまとまりのあることがわかる。ここでは、その遺跡のまとまり毎の動向について述べるが、一部は現状の行政区画に沿った遺跡を統合することもあれば、分割することもある。なお、そのまとまりが複数の遺跡を含む場合は代表的な遺跡名をその名称として仮称した。

a) 西岩田遺跡 西岩田遺跡⁵⁾と瓜生堂遺跡⁶⁾の北半。当該期の南北方向の居住域の広がり、西岩田から瓜生堂遺跡の北半部(B地区)までが一連のものと想定でき、瓜生堂南半と巨摩廃寺下層(瓜生堂南端)、若江北遺跡では庄内期の水田が検出されている。さらに南部に展開する友井東遺跡⁷⁾では当該期の遺構は検出されない。東西方向の広が

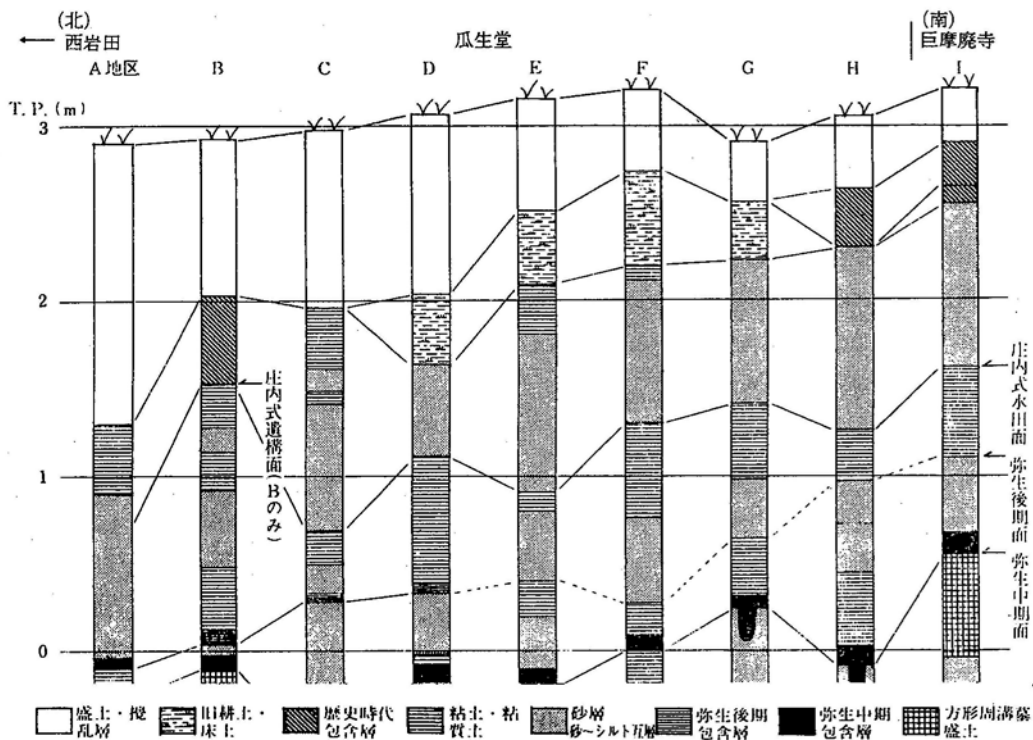


図3 瓜生堂遺跡の土層柱状図(註6を一部改変)

りは不明。河内湖の南岸に沿った地域であり、高橋学氏の地形分類では三角州 I b 帯に相当する。縄文時代晩期から弥生時代後期にかけては水没状態の湿地帯、あるいは厚い洪水砂で覆われた三角州河口付近に相当し、居住空間とはなりえない。庄内期以降に旧大和川の沖積作用によって陸化し、居住域となった地域である。

西岩田、瓜生堂遺跡北半は庄内期の全期間と布留期初頭に限られる。遺構は、自然河川、溝、落ち込み等が検出されたのみで、遺跡の性格については将来にゆだねねばならない。出土土器には庄内期前半では吉備系、庄内期後半以降に吉備系に加え山陰、四国系を代表とする西日本のものが多く、他地域との頻繁な交流の一拠点であったことを示している。さらに船形木製品の出土にも注目したい。この木製品は準構造船の小型模造品と考えられ、時期は出土層から庄内期初頭に位置付けられる。庄内期以降、大阪府では準構造船関連資料が増加するが、西岩田のそれは最も古い資料の一例である。

本地域では立地から当然漁労活動も行なつたと推定できる。にもかかわらず、そういった生業に関わる遺物は少なく、むしろ継続期間の全期間におよぶ多数の他地域系土器や準構造船の模造品は交流における「津」としての機能を推定させる。

b) 美園遺跡 美園遺跡⁸⁾を中核として、布留3期の墓域の拡大によってその北方に隣接する友井東遺跡⁹⁾南半も同一遺跡に含まれた。北は水田域によって限定される。長瀬川右岸に展開する地域であり、地形分類では三角州 I a 帯に相当する。

美園遺跡では弥生時代前期新段階から中期後半の集落が検出されている。第V期は空白期間となって、再度集落が造営されるのは庄内0期から布留3期の期間である。遺構としては、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑、溝等の他、北方では墓域を示す土器棺、方形周溝墓と考えられる溝、生産域と想定できる範囲も報告されている。本遺跡でも吉備、山陰系土器若干の他、東海系の高杯1点が報告されている。

友井東遺跡の南端では、布留3期程度の方形周溝墓3基が確認されている。美園遺跡北端の墓域と同時期であり、当該期に美園遺跡の墓域が北方に拡大したと理解できる。

以上のように、本地域では比較的狭い遺跡範囲の中に、居住、墓、生産域が認められ、自己

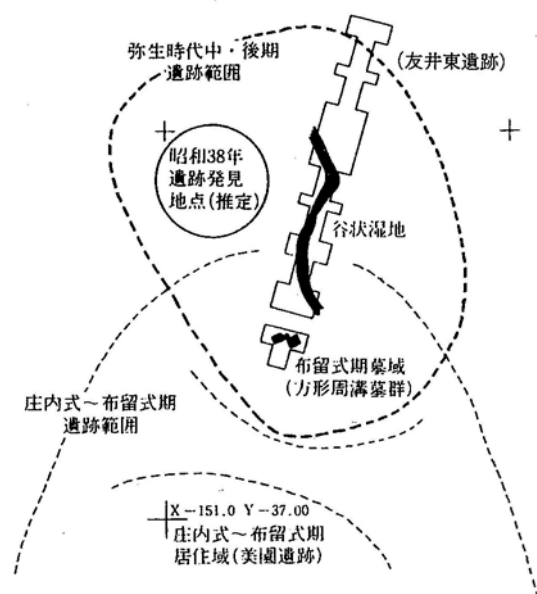


図4 美園遺跡北端の概念図(註7より)

完結的な集落景観を呈する。今後の検討を要するものの他地域系土器は少ない。

c) 佐堂遺跡他 佐堂遺跡南半(その2)¹⁰⁾と久宝寺北遺跡北半(Cトレンチの第1居住域)¹¹⁾で当該期の遺構が存在する。両者の間には水田域(S T 4001)を挟んでおり、北西から南東方向にのびる二つの微高地上にそれぞれ小集落が形成された。北方の美園遺跡と接する佐堂遺跡北半(その1)は布留後半期の遺構、遺物は認められるが希薄¹²⁾であり除外する。また久宝寺遺跡北地区南部において、当該期の長瀬川本流と想定できる自然河川(N R 4001・4002)が検出されており南限となる。河幅は約150mである。この旧長瀬川右岸に展開する地域であり、高橋の地形分類で三角州I a帯に相当する。

佐堂遺跡(その2)では竪穴住居1、掘立柱建物3、井戸3、土坑、溝等の居住域、および土坑墓2が検出されている。

久宝寺北遺跡第1居住域では掘立柱建物3、井戸、土坑、溝等が検出されている。なお旧長瀬川(N R 4002)の南にも自然堤防上に居住域(第2居住域)が認められるが、出土遺物の時期から南部に展開する久宝寺遺跡南地区の北端部分と考えられる。

時期は久宝寺北遺跡第1居住域は布留1期新相から、佐堂遺跡南半(その2)は布留2期新相(主体は布留3期)から居住域が営まれ、いずれも布留3期で消滅する。自然堤防上の居住域とその間の低地部に営まれた水田域が確認される。

以上のように、本地域では布留中頃を主体とする居住域と生産域が確認される。期間は大変短い。山陰系土器が若干出土しているが、流通経路上の遺跡としての主体的な役割は確認できない地域であり、初期須恵器、韓式系土器の流入時期には消滅する。この地域では旧長瀬川が時期によってその流路を大きく変えており¹³⁾、立地上の不安定要素がその要因と考えておきたい。

d) 加美・久宝寺遺跡群 久宝寺、加美、跡部、亀井北遺跡は明らかに一遺跡の範疇で理解できるものであり、広大な面積の集落範囲が想定できる。長瀬川(久宝寺北遺跡のN R 4001・4002)と平野川に挟まれた地域であり、高橋の三角州I a帯に立地する。久宝寺、加美遺跡の北方は長瀬川によって限られ、南方は亀井北遺跡(その2)のE地区までが一集落範囲と考える。それより南については沼状地形を呈し遺構・遺物は未検出、東西方向の広がり是不明である。

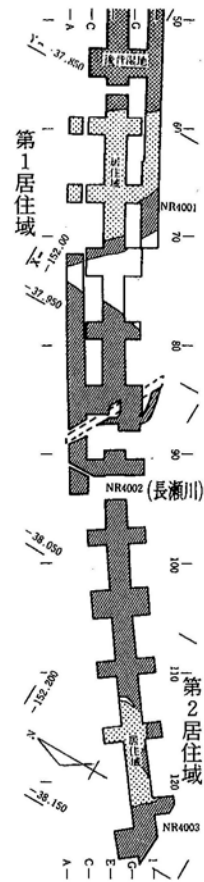


図5 長瀬川全体図
(註11より)

久宝寺遺跡は、(財)大阪文化財センターによって久宝寺北遺跡(その1~3)、久宝寺南遺跡(その1・2)として調査された。他にも大阪府、東大阪市、八尾市等の調査があるが、ここでは(財)大阪文化財センター調査から述べる。

久宝寺南遺跡(その1)¹⁴⁾では北からA~D調査区に分割されており、B調査区以南から当該期の遺構が確認される。第IV層の第2・3・4遺構面がそれである。第4遺構面は竪穴住居、土坑、畑、第3遺構面は周溝墓、第2遺構面は小区画水田といった変遷が確認されている。出土土器からみれば、第4面が庄内新相、第3面が庄内新相~布留古相、第2面が布留古相と考えられる。他地域系土器は第3面で山陰系が目立ち、四国、吉備系も確認できる。なおA調査区とその北に存在する久宝寺北遺跡第2居住域は、その間に約20mの自然河川(NR 4003)を挟むがここでは同一遺跡と考えておく。この第2居住域では、布留4期以降に多量の韓式系土器と初期須恵器が出土している。

久宝寺南遺跡(その2)¹⁵⁾では第4遺構面から当該期の遺構、遺物が多数確認できる。時期は弥生時代後期、庄内期全般から布留2期の間におさまる。多量の土器が報告されており、外来系は山陰、吉備、阿波、讃岐系の西方もので占める。中田遺跡群等の他地域系土器よりも少ない印象を受ける。遺構としては、弥生時代後期末から布留1期までの方形周溝墓、前方後方形周溝墓の他、竪穴住居、掘立柱建物、運河を想定させる溝等が報告されている。また庄内新相の準構造船が出土していることも注目できる。

加美遺跡¹⁶⁾では多数の方形周溝墓、前方後方形周溝墓の他、竪穴住居等が検出されている。KM84-1調査区では前方後方形周溝墓1基を含めて46基の周溝墓と竪穴住居群

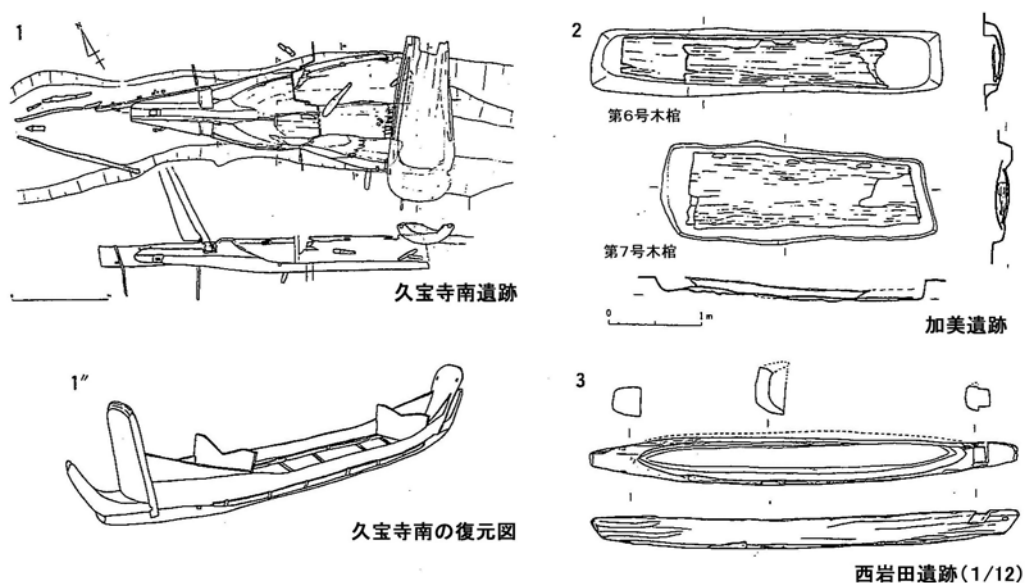


図6 河内平野の船関連資料

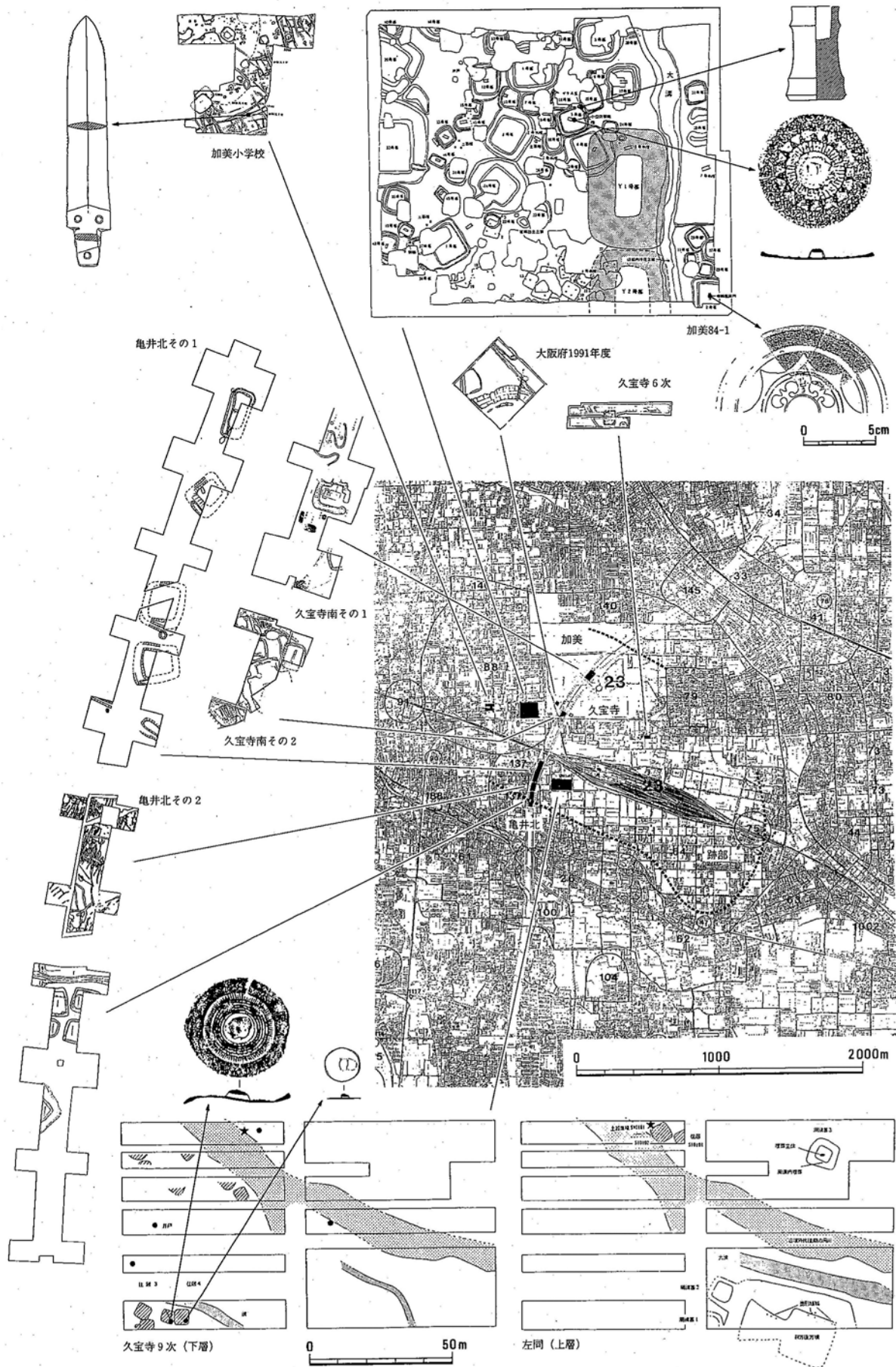


図7 加美・久宝寺遺跡群概念図

が検出されている。周溝墓は庄内期の古い段階から布留期初頭までの変遷が確認される。布留期初頭に至り、前方後方形周溝墓や周溝中央に橋梁部を有するものが出現する。他地域系土器としては、吉備、山陰、阿波、讃岐、広島西部の土器を主体にしつつも、他に東海、北陸、紀伊系の土器もある。また周溝墓の周溝から庄内期の土器に伴って陶質土器が出土している。三国時代前期に属すると考えられており、半島南部との交流も考えられる。それとも絡んで、墓域内の木棺には船材を転用したものがあり、久宝寺南遺跡例とともに注目できる。

亀井北遺跡はその1、2調査区として調査がされている。(その1)¹⁷⁾は当該期に限定しても多くの遺構の重複があり、報告者は6期に区分する。Iは住居の時代、II・IIIは耕作の時代、IV・Vは墓の時代としている。時期は庄内新相から布留前半に主体があり、土器型式としての時期差は必ずしも明確ではなく、ごく短期間に土地利用が変更される。

亀井北遺跡(その2)¹⁸⁾では方形周溝墓5基(E地区)と掘立柱建物と畑(D地区)が検出(古墳時代第1遺構面)されている。時期は方形周溝墓が庄内新相～布留前半程度と考えられる。久宝寺遺跡と加美遺跡は一連の遺跡と考える。

以上のように本地域では広大な遺跡範囲の中に、居住、生産、墓域が錯綜した状況で検出されている。同一箇所であっても、土地利用を短期間の内に変更している。出現時期は庄内期初頭(久宝寺南その2、加美)であり、庄内新相に南北方向に遺跡の拡大(久宝寺南その1、亀井北)が認められる。地形から遺跡範囲は南東から北西方向に延びると考えられるが、長さは不明。幅は1km強と大規模である。墓はすべて方形周溝墓と数基の前方後方形周溝墓として検出され、加美遺跡、久宝寺南遺跡その2、亀井北遺跡その1、2の全域に存在する。他地域系土器は庄内期新相以降に西方地域が認められるようになる。他地域系土器搬入の活発となる時期と、遺跡範囲の拡張時期が重なることは重要である。また久宝寺南遺跡その2、加美遺跡では船に関する資料、調査者が運河と推定する大溝のあることにも注目したい。なお、北端では多量の韓式系土器、初期須恵器が出土しており、布留4期以降に長瀬川沿いの一拠点となる遺跡である。

e) 中田遺跡群¹⁹⁾ 萱振南端、東郷、成法寺、小阪合、中田、矢作、東弓削遺跡を一遺跡群として把握できる。長瀬川と玉串川に挟まれた低地部であり、その中央を楠根川が北流する。ただし近年の調査によって玉串川のルートが固定したのは条里型地割り成立以降であって、それ以前には存在しなかったか小規模な流路であったとする見解²⁰⁾がある。楠根川も含めて地理学による古環境の復元は将来に期待するとして、少なくとも古墳時代

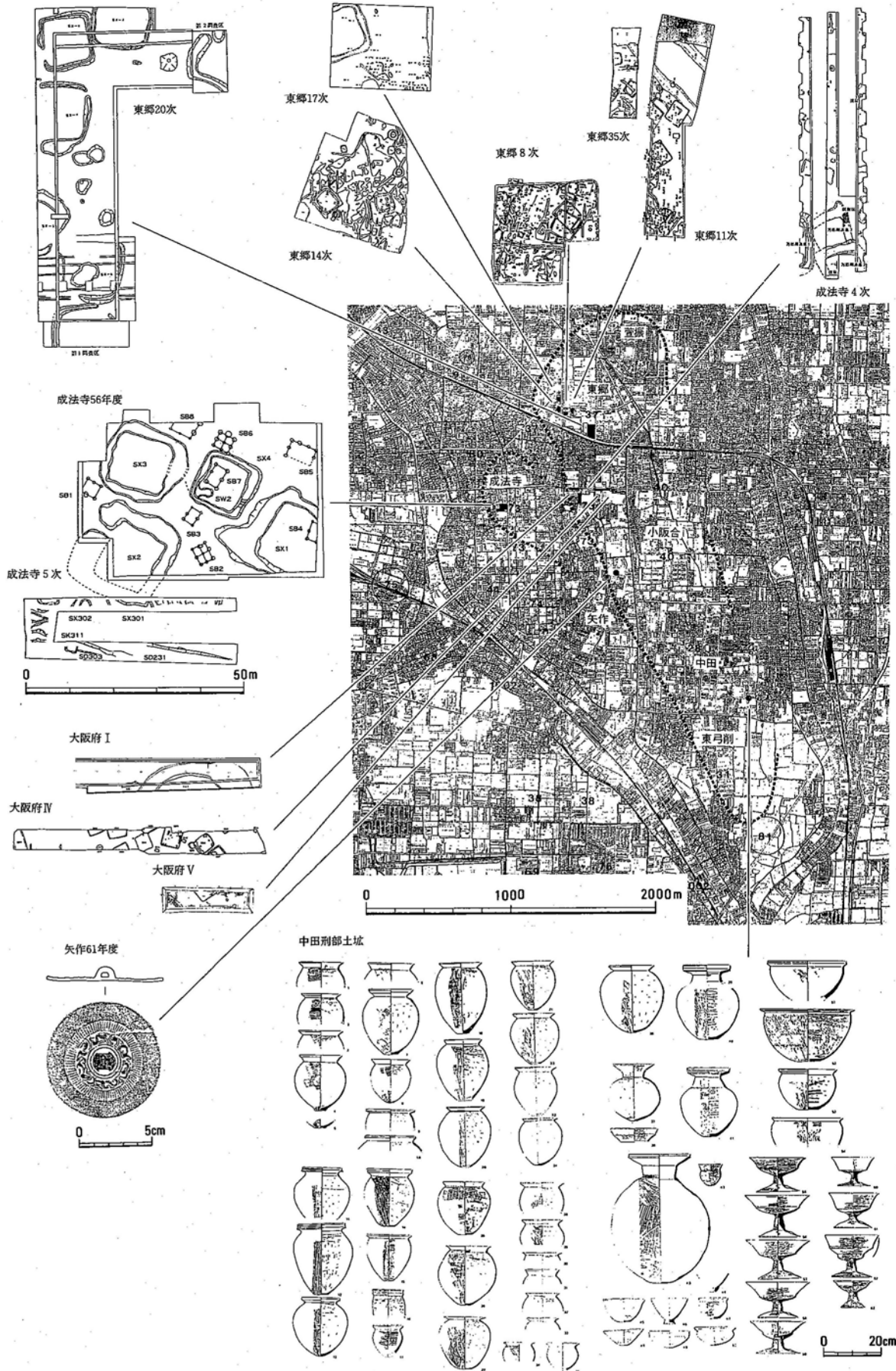


図8 中田遺跡群概念図

初頭期には主要経路は、長瀬川の方にあった点は確実と考えておきたい。高橋氏の土石流扇状地帯を主体とし、一部三角州 I a 帯に相当し、比較的安定した地域である。

萱振遺跡南端では、東郷遺跡に隣接する部分²¹⁾で当該期の遺構、遺物が確認できる。現状では庄内期は認められず²²⁾布留 0 期から須恵器出現以前の布留 4 期におさまる。土器棺墓、掘立柱建物、井戸、土坑、溝等が確認できる。多数の他地域系土器が出土しており吉備、山陰、四国のものが確認できる。布留 1 期の井戸 3²³⁾は何らかの祭祀行為による遺構と考えられるが、61 点中、半数以上の 33 点が他地域系とされている。遺跡の継続期間からすれば、この地域で最も新しい時期からの開始であり、現状では東郷遺跡の北方への拡大と理解しておきたい。

東郷遺跡²⁴⁾ではその中心部で 30 数次におよぶ地点での調査がある。弥生時代に属する遺構としては、第Ⅳ様式新相の土坑 2（第 15 次調査の S K 1・S K 2）、第Ⅴ様式中頃の土坑 1（第 24 次調査の S K 1）等があるが、庄内期との間には断絶期間があり連続しない。集落の継続期間は、庄内 0 期から布留 1 期である。居住域と墓域が確認されており、庄内期古相には竪穴住居 3・掘立柱建物 2・井戸 5・土坑等の居住域と方形周溝墓 2・土器棺 3 の墓域が北部で確認されている。また庄内期～布留期古相には竪穴住居 8・掘立柱建物 10 等とその南北の 2 箇所でも方形周溝墓 7・土壙墓 1 の墓域を形成する。方形周溝墓は、庄内期新相のもので一辺 12 m 前後である。居住域は時期が新しくなるにしたがい、中心部が若干東側に移動する。吉備、山陰、四国系の土器が多く、吉備の特殊器台（向木見型）も出土している。

成法寺遺跡でも 10 数次におよぶ調査がある。弥生時代としては、第Ⅳ期の方形周溝墓、第 5 次調査の S D 303 下層からは第Ⅴ期上六万寺式の遺物が出土している。当該期集落の継続期間は庄内 0 期から布留 1 期である。遺跡範囲を旧河川（時期不明）が東西に分断しており、そのいずれからも居住域と墓域が確認されている。居住域には竪穴住居、井戸、土坑、土器溜め、墓域には方形周溝墓、円形周溝墓があり、時期ごとに頻りに位置を変える²⁵⁾。方形周溝墓は、庄内期古相のもので一辺 10 m 前後、庄内期新相に一辺 14 m を超える大型のものがある。

小阪合遺跡では土地区画整理事業によって広範囲にわたって線的な調査が行なわれている。それによれば多条の自然流路が確認され、その周囲の微高地上で土坑、ピット、土器溜等が検出され居住域と考えられる。自然流路内には著しい量の遺物が含まれる。時期はやはり庄内期初頭から布留期前半に主体がある。他地域系土器が多数出土する。ただ一部

に布留期後半から韓式系土器、初期須恵器を含む溝等がみられる。中田遺跡群の範囲での初期須恵器の段階の遺物はめずらしく、古墳時代前期後半から中期に継続する。

中田遺跡は小規模の調査で実態不明ながら、ほぼ全域で古墳時代初頭期の遺構、遺物が確認される。隣接する東弓削、矢作、小阪合遺跡との境界は見出せない。継続期間は庄内期初頭から布留1期程度である。その間の他地域系土器は大変多く、吉備、山陰、四国系その他、東海系2点も出土している。庄内1期の刑部3丁目土坑²⁶⁾から出土した資料は、大部分が吉備系(オノ町Ⅱ式)で占められる。壺、甕、高杯、鉢の全器種がそろった点がない。また布留0期中田1丁目39番地²⁷⁾からの出土資料にも多くの外来系が含まれる。奥田氏の分析によれば、山陰34、吉備21、紀伊4、阿波4、摂津5、生駒西麓32、中田付近17、不明18とされている。古い在地胎土の庄内式甕も出土しており、河内型庄内甕の発祥の地とも考えられる。

東弓削遺跡は本遺跡群の南端に位置する。調査件数は少なく実態は不明であるが、遺跡中央部を南北方向に縦断した約1kmのトレンチ調査がある。トレンチ北端は中田遺跡に接しており、南方へ約700mの間で弥生時代中期～後期前半、庄内期新相～布留期古相の土器が出土している。その後の調査も加味すれば、庄内期古相～布留期古相が継続期間と考えてよい。山陰、吉備、讃岐からの他地域系土器が出土している。

矢作遺跡では、成法寺、小阪合、中田遺跡と接する北東部のみで当該期の遺構・遺物が確認される。遺構としてはV期末程度から布留期古相にかけての土坑、溝等が散発的に検出される。布留期の溝から小型の仿製変形獣文鏡が出土した。中田遺跡群の縁辺部に相当すると考えられる。

以上のように、本地域では旧長瀬川右岸の広大な範囲に密集した状況を示しており、各遺跡間に境界は認められない。集中部は北西～南東方向にのびており、萱振遺跡南端から東弓削遺跡までは長さ約3.5km、幅1km程度の範囲である。この間の微高地上に遺跡が連綿と形成されたと推定できる。さらにこの地域では、庄内期初頭にいっせいに出現しており、基本的に布留期前半の内に消滅するといった全く同様の継続期間を示す。この点は纏向遺跡を中心とする大和盆地東南部の状況と同一歩調をとることは注意されてよい。いずれも在地系土器に占める他地域系土器の割合が高い点も共通した特徴である。中河内地域に他地域系土器が増加するのは庄内期新相以降であるが、中田遺跡群では若干ではあるが出現時から中田、小阪合、東郷遺跡などで吉備系が存在する。さらに中田遺跡の刑部土坑の状況は、吉備からの人の存在さえ考えるべきであろう。このように広大な範囲を有する

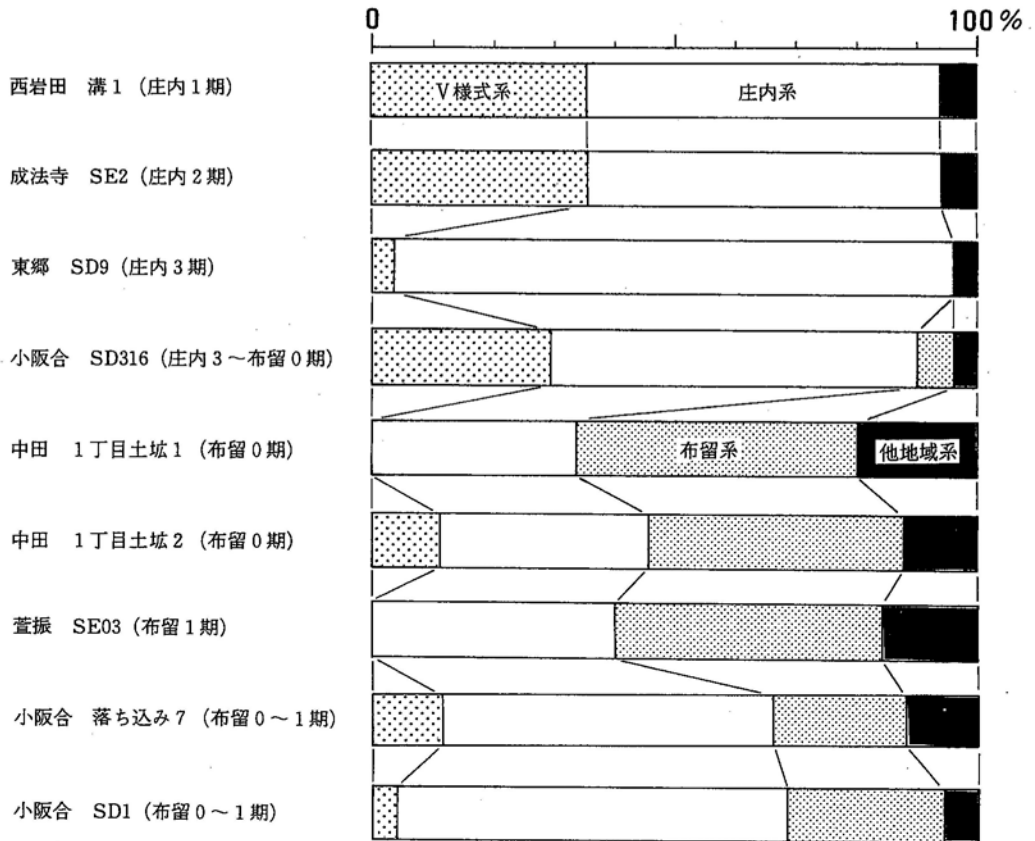


図9 甕形土器の系統別内訳(註48を改変)

遺跡も布留期前半の内には消滅し、中河内に多量の初期須恵器、韓式系土器が搬入された時期には交流の拠点としての役割は終える。

f) 八尾南遺跡 和泉山系から北に派生した段丘によって形成された羽曳野丘陵北端近くの東側縁辺部に立地する。旧大和川からは2 km程度離れた地域であり、八尾南遺跡のみが認められる。高橋氏の土石流扇状地帯に立地する。

八尾南遺跡²⁸⁾では、弥生時代第V期終末(西側微高地のSE7)の井戸1基以外は庄内初頭から5世紀代の遺構が確認されている。すなわち、微高地上の居住域とその周縁に営まれた墓、さらに低い外縁に営まれた水田遺構によって構成される。他地域系土器としては吉備、山陰、四国系その他、大阪府では事例の少ない北陸、東海系も若干出土している。庄内新相以降に増加する。これら他地域系土器には特殊なあり方を示す事例がある。庄内3期の周溝中央部の途切れる方形周溝墓(SX2)に吉備系甕を据えた例、布留4期の井戸(井戸6)に東海産のS字甕と在地産胎土のS字甕を入れた事例²⁹⁾等である。これらの資料は、単に搬入土器が出土したにとどまらず、彼地の人が八尾南遺跡に入り込んだ状況を想定すべきであろう³⁰⁾。八尾南遺跡で注目すべきは須恵器出現以降も北西に隣接し

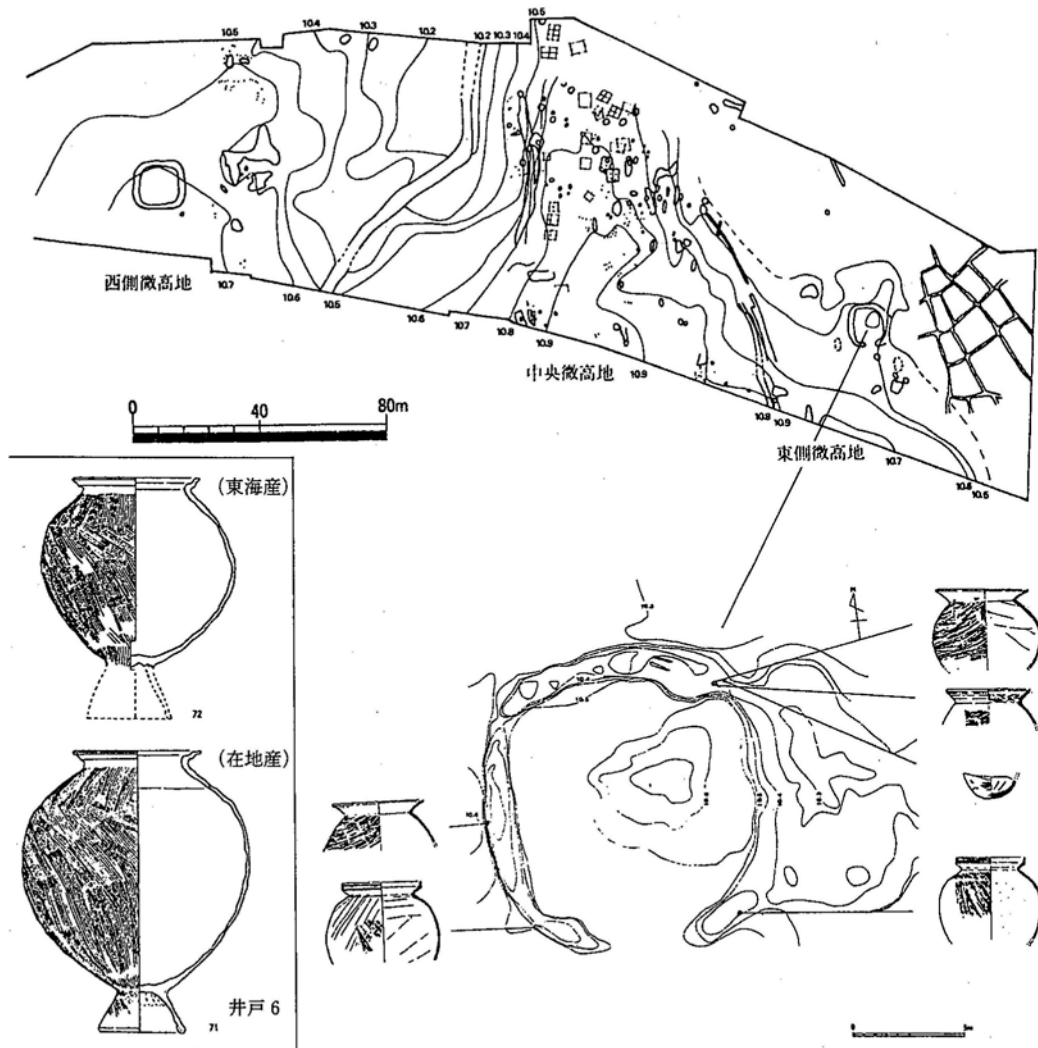


図10 八尾南遺跡の遺構と遺物

て出現する長原遺跡とともに多数の初期須恵器、韓式系土器が出土することである。むしろ須恵器出現以降の方が活況を呈したかの感がある。

以上のように本地域では八尾南遺跡のみが存在し、広大な遺跡範囲の確認できる旧大和川流域の遺跡群とは異なったあり方を示す。比較的狭い範囲内に長期間の居住、墓、生産域が確認でき、自己完結的な景観を呈する。その一方で流通経路の主流たる旧大和川からは離れた位置に存在するにもかかわらず、庄内新相以降、多くの他地域系土器、初期須恵器、韓式系土器のみられることは、八尾南遺跡の特殊性を感じさせる。

g) 本郷・船橋遺跡 本郷、船橋、国府遺跡北端がある。和泉山系から北に派生した段丘によって形成された羽曳野丘陵、およびその先端部周辺に立地する。奈良盆地東南部から流れてきた大和川が、中河内の平野部に流れ込む入り口部に相当する。高橋氏の土石流扇状地帯に立地する。

船橋遺跡は 1704 年の大和川付け替えにより河床となり、遺跡の広範囲が寝食されてきた。そのために多くの採集遺物があって知名度は高いにもかかわらず、遺跡の内容は不明瞭であった。しかし近年の柏原市教育委員会の調査³¹⁾によってその一端が明らかになっている。調査によって竪穴住居、井戸、溝等が検出された。井戸は庄内期初頭（井戸 5）から布留期初頭（井戸 3、4、6）にかけて次々と営まれ、庄内期後半には竪穴住居 6 棟以上、溝が検出されている。そして布留期中頃以降に遺構、遺物は減少する。また従前の平安学園考古学クラブの調査³²⁾では布留 3 期（船橋 0 - I）、布留 4 期（船橋 0 - II、H - II）、初期須恵器段階（船橋 0 - III）の資料が出土している。船橋遺跡は庄内期から布留期にかけての全期間にわたる遺跡であったと考えられる。出土土器には多くの他地域系土器を含む。奥田尚氏の砂礫分析³³⁾があり、他地域系土器として吉備、山陰、播磨、讃岐系の西方からのもの、北陸系（加賀南部）の他、泉南、紀伊系も数点ある。井戸出土土器の約 7 割が搬入品とされている。他に採集品ではあるが、東海系土器³⁴⁾も数点が確認されている。奥田氏は同様の傾向を示す遺跡に中田遺跡をあげ「船橋遺跡は中田遺跡と同様に人々が定住する場でなく、通過地点に設けられた場、江戸時代の宿場的な要素をもつ場所であったと推定される。」と述べている。なお、南方に接する国府遺跡の北端³⁵⁾でも当該期の資料が散見され、集落範囲は南にのびる。

本郷遺跡³⁶⁾は、地形から旧柏原村周辺に広がると考えられるが判然としない。船橋遺

表1 船橋遺跡出土の他地域系土器(註31より)

		石川	大和川	河内	客坊谷	播磨	足守川	山陰	加賀	泉南	紀伊	讃岐	他	不能	合計
井戸 3	壺	1		1											2
	甕			1					1						2
	高坏	1													1
	鉢					1									1
	器台	1											1		2
	不明												1		1
井戸 4	壺	2		1		3						1		2	9
	甕	1	2	14				1	4		2		2	2	28
	高坏	2										1			3
	器台		1												1
井戸 5	壺	3	1	2		6		2	3	1				1	19
	甕	2			1	2	2		1						8
	高坏	6				2			1			1			10
	器台	3											1		4
	不明	1		1				1		1					4
井戸 6	甕			2		1			1						4
	鉢													1	1
合計		23	4	22	1	15	2	4	11	2	2	3	5	6	100

跡とは距離がある。造営期間は、弥生時代中期中頃以降、5世紀代までは確実に継続するとされるが、弥生時代V期は少なく庄内、布留期が主体となる。継続期間は船橋遺跡と同様に長期に及ぶ。庄内、布留期の他地域系土器、それ以降の初期須恵器も確認できる。

以上のように本地域では未だ調査は少なく、遺跡内容自体は不明瞭ながらも多数の他地域系土器と、旧大和川を通じて大和と中河内をつなぐ要衝の地に存在する立地から、この地域が交流の一拠点として機能したことは確かである。また、韓式系土器の存在から流通拠点としての役割が長期におよぶことも特徴³⁷⁾である。この地域での大和川の流路は早い段階から固定しており、大和と河内の関係を考える場合、時期を問わずその中間地点に存在することになる。そのことによって、この地域の遺跡の継続期間が中河内低地のそれに比較して長く、安定していたと考えられる。

以上のように河内湖南方の旧大和川沿いは庄内、布留期には遺跡の密集した地域である。弥生時代においては、拠点集落とその周辺に分村として形成された複数の遺跡が一定の距離を有しつつ存在するが、それとは全く異なる遺跡の出現が確認できた。ことに加美・久宝寺遺跡群、中田遺跡群に代表されるように、継続時期の重複する遺跡の密集する状況は極めて異常であり、それは単に弥生時代以来の農耕を主体とする社会的発展の延長線上ではとらえにくい。この二大遺跡群は、弥生時代には拠点集落としては機能しておらず、巨大な遺跡が庄内期に至って突如として出現した点で共通する。また、その集落範囲の中で述べてきた多数の遺跡名称は、もともと行政的に分離されたものであり、多数の小集落の散在する状況とも理解されてきたのである。しかし、そのなかでの他地域系土器の内容の共通、遺跡の出現と消滅時期の共通等からは、本来一遺跡の範疇でとらえることが妥当と考える。筆者は纏向遺跡と同様に数条の河川間の微高地上に形成された複数単位の居住域、墓域の集合体³⁸⁾を想定しているが、これについては、旧地形の復元と併行させつつ究明されねばならない課題である。

3 周辺地域の状況について

次に同じ中河内でありながら、旧大和川から離れた河内湖東岸に近接する諸遺跡と、摂津中部に属し河内湖の出入口に相当する上町台地先端部と、その対岸の吹田市域に分布する遺跡について述べる。後二者は瀬戸内から旧大和川を通過して大和への経路を考える場合、避けることのできない地域と考えるからである。

a) 崇禪寺遺跡 上町台地から北方にのびる沿岸洲先端の地域であり、大阪湾と河内湖

を結ぶ交通の要所である。土地条件は砂洲。崇禪寺遺跡のみが確認されている。

崇禪寺遺跡³⁹⁾からは庄内2期から布留2期の土坑、溝、土器溜りが検出されている。遺構の性格付けは不明瞭で将来の調査によらねばならない。報告者も述べるようにこの遺跡では水稻耕作は不可能で、また漁具（土錘、刺突具）、製塩土器は僅かで、漁業、製塩等の生産活動を軸とした生産遺跡とも考えられない。この遺跡の重要性は、多くの他地域系の土器と鉄製素環頭刀が出土したことである。他地域系土器は、山陰、吉備、近江、東海系の他、生駒西麓産の庄内甕も含んでおり、重要な点はこの遺跡の開始期（庄内2期のⅡ区土器溜り）から終末期（布留2期のS K 01）の全期間にそれらの他地域系土器を含む点であろう。また鉄製素環頭刀⁴⁰⁾は当該期にあっては、大陸あるいは半島からの舶載品と考えるのが自然である。この種の鉄刀が古墳、墳墓以外から、あるいは一般集落から出土することは極めて少ない。とすれば崇禪寺遺跡の関わった交易は民間レベルではなく、大陸、半島をも視野に入れた公的な性格を帯びていた可能性が強い。半島を含む西方各地域と大和を中継するという点で、どの遺跡よりもより政治的に設定された、単純なありかたを示す遺跡と考えたい。また後述するが、西方各地域と大和を中継する遺跡と考えた場合、対岸の吹田市域に展開する諸遺跡も同様の機能を想定するが、同時併存ではなく若干の重複期間を有しつつ、本地域から吹田市域の諸遺跡へと推移すると考えられる。

b) 吹田市域の諸遺跡 垂水南、五反島、蔵人遺跡が散在する。河内湖と千里丘陵に挟まれた狭小な沖積平野部である。また当該地域南方の河内湖には崇禪寺遺跡の立地する上町台地が北方にのびてきており、大阪湾から河内湖に入るのに最も狭くなる部分に当たることも重要な視点である。

垂水南遺跡では、竪穴住居、掘立柱建物、土坑、井戸等の遺構が調査されているが未報告のため詳細は不明である。本遺跡では多量の他地域系土器が出土しており公表されている⁴¹⁾。遺跡の造営時期については、「庄内式期（纏向2、3式）の遺構に伴う良好な資料は断片的にしか検出されずその実態は不明」とされ、「纏向3式期、布留1式期古段階には範囲、数量とも拡大、増加する。布留2式期には退化した尾張系のS字状口縁台付甕を始めとする2・3を除き、その搬入はほぼ終焉を迎える」とされている。搬入土器の内容については、多数の吉備、山陰、東海系と少数の西部瀬戸内、四国（阿波、讃岐）、近江、北陸、紀伊、河内、南関東・駿河系土器が報告されている。なお東海系はC類新段階⁴²⁾以降のもので布留2期以降に位置づけられる。

五反島遺跡は垂水南遺跡よりも、より海岸線近くに立地する。遺構は明確ではない。布

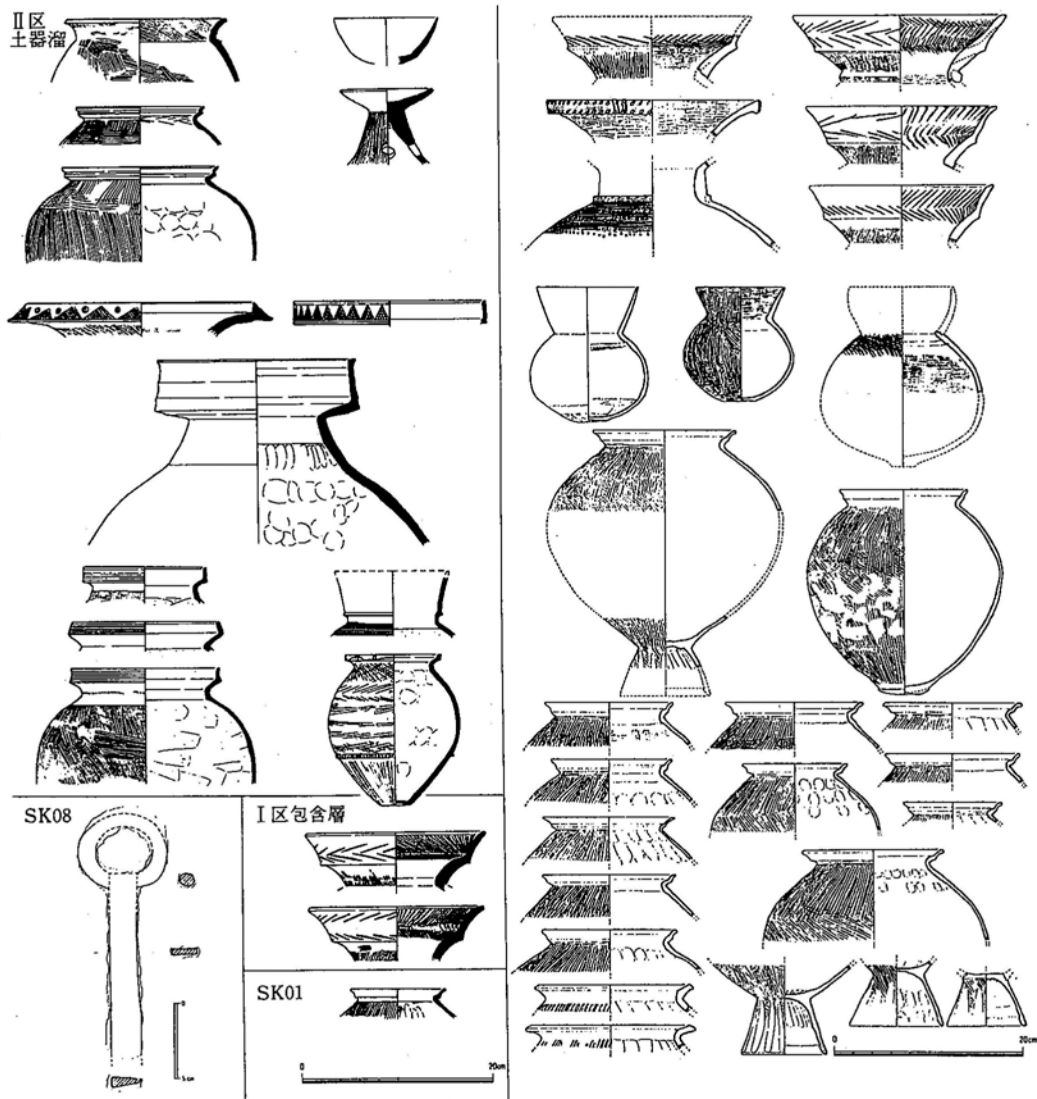


図11 崇禪寺遺跡と垂水南遺跡の東海系土器他
 (左:崇禪寺遺跡、右:垂水南遺跡 註39~41より)

留期初頭以降の遺物が確認できるが、主体は布留3期から韓式系土器、初期須恵器の段階にある。他地域系土器は、垂水南遺跡よりも新しい時期の資料が主体を占めており、ここでは東海系土器について述べる。実見しえた東海系のS字甕と宇田型甕の構成比率で示すと、垂水南ではS字甕16点と宇田型甕2点に対して、五反島ではS字甕8点と宇田型甕8点である⁴³⁾。両遺跡のS字甕は、いずれも布留期中頃以降のC類新段階以降のものである。両遺跡は時期的には一時併存しながらも、他地域系土器の搬入の主体は明らかに垂水南から五反島遺跡に移行する。また韓式系土器、初期須恵器は五反島遺跡では多いが、垂水南遺跡ではごく僅かにとどまることもそれを示している。

以上のことから、この地域では垂水南と五反島遺跡が布留期初頭に形成されたようであるが、布留3期程度を境に前半は垂水南遺跡、後半はより海岸沿いの五反島遺跡にその港

湾的機能は移行したと理解できる。

c) 河内湖東岸の諸遺跡 東に生駒山麓、西に河内湖に挟まれた狭小な沖積平野部、扇状地部である。中垣内、鬼塚、北鳥池、馬場川遺跡などで当該期の遺跡が散見される。

中垣内遺跡では近年の調査で竪穴住居、土坑が検出⁴⁴⁾された。布留1～4（古）期に属する。数点の東海系土器がある。

鬼塚遺跡でも庄内新相の土坑、包含層が確認されているが、遺跡内容は明確でない。

北鳥池遺跡では包含層が確認されるのみで、実態は不明である。土器は弥生時代第V様式終末（北鳥池下層式）の標準資料とされてきたが、近年の研究⁴⁵⁾では低地部ですでに庄内甕が成立する時期に併行すると認めてよい。

馬場川遺跡では庄内期から布留期初頭の遺構が見つまっている。小規模集落が時期毎に位置を変えつつ存在する状況である。

以上のように、本地域では小規模遺跡が散在しており、継続期間は短期間である。他地域系土器も低い割合に止まっていて、この点で河内湖南端、旧大和川流域に存在する諸地域の遺跡群とは大きく異なる。他地域間をつなぐ役割を担ったと想定される淀川、旧大和川からは離れ、地域交流といった面からはむしろ閉鎖的な地域であったと考えられる。さらに本地域にあっては、生駒西麓産胎土の産出地でありながら、庄内期には土器様式に庄内甕を主体的に含む遺跡はほとんど存在しない。

中河内の古墳時代初頭期の諸集落を考える場合、少なくとも崇禪寺遺跡や対岸の垂水南遺跡等を視野に入れる必要がある。それは瀬戸内海から河内湖、旧大和川から大和盆地東南部へといった経路を考える場合、河内湖への入口部を押さえる要衝の地点だからである。事実、集落の出現時期、存続期間、他地域系土器の搬入状況も中河内の諸集落とほとんど同じ状況を示している。ところで摂津中部の地域色として近江系と東海系土器の搬入があり、中河内とは異なっている。近江系と東海系は中河内では少数派である。崇禪寺遺跡において東海系は器種が揃い、吹田市域では布留期以降に多量に出土するようになる。近江系と東海系は淀川を介して摂津中部に搬入されたと考えられるが、その後に中河内には入らないことが実情である。摂津中部は、河内湖・旧大和川から大和盆地東南部へといったルートとは別ルートの起点にもなったと考えられる。

河内湖東岸、生駒山西麓地域については同じ河内湖に近接した地域でありながら、中河内低地部とは内容が全く異なっている。このような「河内湖東岸地域」的な状況は特殊ではなく、旧大和川の経路から一步外れればごく一般的である。ここでは、他地域系土器は

河内低地部に比較すれば極端に少なく、いわゆる庄内甕が主体的に存在することはなく、極言すれば「伝統的第Ⅴ様式甕」の地域として一括できる。

なお、垂水南等の吹田市西隣には豊中市島田、庄内遺跡等があるし、摂津にも東奈良遺跡などは同じく拠点と目されるが、今回は力が及ばず除外した。

4 中河内地域の動向

概観してきた各遺跡の継続期間を示したのが第12図である。これに他地域系土器、韓式系土器、初期須恵器の状況等を加味して述べる。

1) 庄内期以前 弥生時代前期以来、継続してきた亀井、田井中、恩智遺跡等の拠点集落は後期前半の内に消滅、あるいは衰退する。後二者は布留期から遺物の出土はあるが、庄内期集落の形成はこれらの弥生集落の発展的延長線上にはない。また庄内期集落内に弥生時代後期の遺構、遺物が存在することはあっても、短期間で小規模である。

2) 庄内期初頭 西岩田、美園、加美・久宝寺、中田遺跡群等の旧大和川流域の諸遺跡が一斉に出現する段階。八尾南、本郷、船橋遺跡もこの段階から遺物は増加する。中河内地域では最大の画期となる。中田遺跡群は広大な範囲全域で出現するに対して、加美・久宝寺遺跡群はこの段階では久宝寺南その1、亀井北その1・2の範囲にはおよばない。他地域系土器は吉備系を主体とするが顕著ではない。

3) 庄内期中頃 崇禅寺遺跡が出現する段階。当初から他地域系土器は搬入される。

4) 庄内期新相～布留期初頭 垂水南、五反島遺跡が出現し、加美・久宝寺遺跡群が拡大する段階。中田遺跡群でも萱振遺跡南端が加わる。この時期から中河内地域で吉備、山陰、讃岐、阿波系主体の西方の他地域系土器が急激に増加する。中河内が最も活況を呈する段階である。

5) 布留期前半 西岩田、加美・久宝寺、中田遺跡群等が一斉に消滅する段階。第2の画期といえる。また、崇禅寺、垂水南、美園遺跡も若干遅れて消滅する。この時期に消滅した遺跡が、韓式系土器、初期須恵器の流入に伴う拠点となることはない。

6) 布留期中頃以後 五反島、八尾南、本郷・船橋遺跡はそのままだに継続し韓式系土器、初期須恵器の流入にも関わる。この段階の搬入土器は大阪府下では非常に多い。しかし庄内、布留期の流通に関わった地域は、この段階ではほとんどが消滅しており、新たな遺跡をベースにそれらの流通は行なわれる。これら新規集落遺跡の出現が第3の画期である。

旧大和川沿い、および瀬戸内海から河内湖に通じる狭小地域にほぼ時を同じくして他

No	遺跡名	所在地	時期												
			V後半	庄0	庄1	庄2	庄3	布0	布1	布2	布3	布4	須恵		
1	崇禪寺	大阪市東淀川区淡路他													
2	垂水南	吹田市垂水町													
3	五反島	吹田市南吹田													
5	西岩田	東大阪市西岩田													
6	瓜生堂	東大阪市瓜生堂他													
7	友井東	東大阪市金物町													
8	美園	八尾市美園町													
9	佐堂	八尾市末広町他													
10	久宝寺北	東大阪市大蓮東													
11	久宝寺南その1	八尾市西久宝寺													
12	久宝寺南その2	八尾市神武町他													
13	加美	大阪市平野区加美他													
14	亀井北その1	八尾市北亀井町他													
15	亀井北その2	大阪市平野区加美南													
16	萱振	八尾市緑ヶ丘他													
17	東郷	八尾市本町他													
18	成法寺	八尾市光南町他													
19	小阪合	八尾市南小阪合町他													
20	中田	八尾市中田他													
21	矢作	八尾市高美町他													
22	東弓削	八尾市東弓削他													
23	八尾南	八尾市木ノ本													
24	本郷	柏原市本郷													
25	船橋	柏原市古町他													

図12 遺跡の変遷

地域系土器を多量に出土する集落遺跡が出現する。それら集落は流通拠点であり、広域流通ルートが成立した事を示している。大規模である点を重視すれば、中田遺跡群、加美・久宝寺遺跡群を二つを核として進行しているのであって、その時期は庄内期初頭から布留期前半である。さらに重視せねばならないのは、旧大和川という同じ水系に立地する大和盆地東南部の纏向遺跡⁴⁶⁾の動向である。纏向遺跡でも庄内期初頭に突如として出現し、布留期でも初頭の内に衰退するとされている。やはり他地域系土器についても、庄内新相以降に急激に増加する。つまり大和と中河内という二つの地域に、全く同様の動向を確認することができる。これらの状況から、西日本の諸地域と大和盆地東南部をつなぐ旧大和川ルート上に形成された遺跡群として一括して理解することが可能である。その場合、崇禪寺、垂水南、西岩田、中田遺跡群、(加美・久宝寺遺跡群)、本郷、船橋遺跡から纏向遺跡への流れが想定できる。

5 まとめ

これまでに述べてきたことをまとめれば、以下のようなになるだろう。

1) 中河内地域で弥生時代前期以来継続してきた亀井、田井中、恩智遺跡などの拠点集落は後期終末までには消滅する。庄内期以降にこの範囲では大規模集落は形成されることはなく、弥生的な集団関係の崩壊と考える。また庄内期以降の集落はその範囲内に点在した弥生小集落を核として発展したとは考えにくい。弥生社会が拠点集落の出現、分村による遺跡の増加とむしろ緩やかな発展を遂げたことを考えるとき、庄内期の諸集落がほぼ一斉に出現すること、殊に巨大な中田遺跡群、加美・久宝寺遺跡群の出現は異質⁴⁷⁾である。

2) 当該期の遺跡は府下では一般的に認められる。しかしながら、旧大和川流域沿いには広大な面積を有する遺跡が密集した状況を呈し他地域を圧倒する。殊に本稿では中田遺跡群とした、長瀬川右岸に立地する萱振南端、東郷、成法寺、小阪合、矢作、中田、東弓削遺跡の一带は一遺跡の範疇でとらえるべきであり、約 3.5 × 1 km 程度の範囲を有する。加美・久宝寺遺跡も現状ではその規模は不明ながらも巨大である。

3) 他地域系土器の搬入は庄内期新相以降に増加⁴⁸⁾する。分布は旧大和川流域沿い（西岩田遺跡、中田遺跡群、加美・久宝寺遺跡群、本郷・船橋遺跡）、あるいはその延長線上にある瀬戸内との海上経路上の諸遺跡（崇禅寺遺跡、垂水南遺跡）に集中する。

4) 中河内の他地域系土器は山陰、吉備、讃岐、阿波の西方からのものが多く、それにごく少数の近江、北陸、東海等の東方のものが混じる状況である。関東系はみられないようである。また奥田氏の砂礫分析によれば、在地土器の中に紀伊、泉南、摂津地域のものも含まれているようである。以上のことは中河内地域が対象としたのは西日本の諸地域であり、東方からの流れは限定されていたことを明確に示している。同じ旧大和川流域にありながら、大和型庄内甕でさえ数点にとどまり、逆に大和での河内型庄内甕は多いことはそれを明確に示している。

5) 当時の流通経路を崇禅寺、垂水南、西岩田、中田遺跡群、(加美・久宝寺遺跡群)、本郷・船橋遺跡から纏向遺跡へと想定した。加美・久宝寺遺跡群を()で示すのは、同じく巨大な遺跡範囲を有する中田遺跡群と比較した場合、河内型庄内式甕の出現が遅れること⁴⁹⁾、庄内期に属する方形周溝墓が明らかに小型であることの2点による。両者を比較した場合、中田遺跡群がより優位であった可能性が高い。

6) 中河内の諸遺跡は、庄内期初頭に一斉に出現するが、その後の変遷は一様ではない。

巨視的に見れば、布留期でも比較的前半で消滅する遺跡と、布留期でも後半あるいは初期須恵器の時期まで継続する遺跡の二者がある。後者は河内湖の出入り口部の五反島遺跡、大和との連結点となる本郷、船橋遺跡であり、流通の要衝である点で共通している。次の段階（韓式系土器、初期須恵器）の拠点としても機能した遺跡ある。八尾南遺跡も隣接して長原遺跡と城山遺跡が加わり巨大化して一大拠点となった。布留期初頭でいったん消滅した集落が再び流通拠点となることはない。二者の差は、初期須恵器あるいは韓式系土器の出土数量として示される。

7) 大阪府下では東海系土器は特異な在り方をする。旧大和川流域では1遺跡で1～2点程度が、多数の他地域系土器に混じる状況で出土する。その一方で中垣内遺跡、摂津中部地域の崇禅寺、垂水南、五反島遺跡ではまとまった数が出土する。後二者で府下出土の東海系の半数以上に達する。同様の例は佐賀県諸富町の諸遺跡にもみられるが、東海の人々の移住の可能性が高い。

凡日本的な状況として、庄内期以降は他地域系土器が活発に移動する時期であり、また纏向型前方前方後円墳の拡散期である。それらのことを取り上げるまでもなく、当該期は中河内一地域のみではその社会での位置付けを語ることはできない。最後に大和盆地東南部との関連⁵⁰⁾を述べることで本稿のまとめとしたい。それは纏向遺跡に多量に入った他地域系土器、とりわけ西日本の土器については、当時の「都市」纏向遺跡と人、物、文化の流出入の主要ルートである旧大和川を共有するからにほかならない。

米田敏幸氏は中河内での庄内期の他地域系土器を総括し、さらに崇禅寺遺跡と纏向遺跡との比較を行なっている⁵¹⁾。それによれば、「摂津崇禅寺遺跡では、近江系、東海系、吉備系の土器がまとまって出土しており、河内平野の遺跡群とは若干様相を異にしている」とされる。一方、大和纏向遺跡と比較して「河内平野においては東海系はごく少数で、吉備系土器群が搬入土器の多くを占めている。山陰系土器群は、大和、河内とも目立って出土するが、吉備系土器との比では大和、河内は逆転する。」とされ、地域差としてとらえられている。しかし注意すべき点は、氏の述べる遺跡単位の他地域系土器の搬入状況の差はあくまで構成比率の差であって、その比率差の解釈が重要と考えられる。

先に述べてきたように、中河内の旧大和川流域の諸遺跡では他地域系土器は山陰の他、吉備、讃岐、阿波系の瀬戸内地域の土器を主体とし、それに若干の北陸、東海系等が混在する。その一方で纏向遺跡では、それらに加えて東海、関東系等の東日本の土器も多数存在するというが実態である。この状況は地域差としてとらえるよりも、むしろ当時の纏向

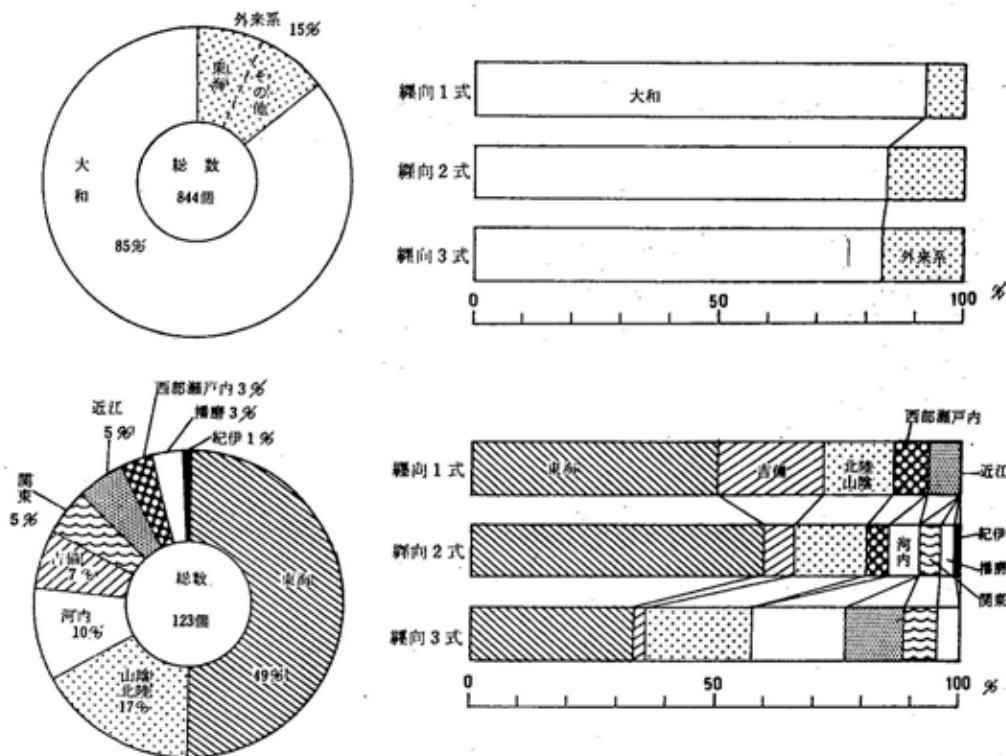


図13 纏向遺跡の他地域系土器(註46より)

遺跡を中心とする大和盆地東南部地域への一方通行的な流通の実態を示していると考えたい。つまり、中河内地域の諸遺跡は西日本各地の「物」の大和盆地東南部地域への流通経路上に機能した流通に関わる一拠点集落群であり、その一方で東日本の諸地域から大和盆地東南部にもたらされた「物」は基本的には中河内をはじめ西日本の諸地域には流出しない社会的状況であったと考えるのが妥当ではなかろうか。

ところで、当時の社会にあっては「中河内」的な状況は決して特異なありかたではないと考える。同様の例は、近江地域では斗西遺跡周辺、西播磨地域では丁・柳ヶ瀬遺跡周辺や長越遺跡周辺、備中地域では津寺遺跡周辺、阿波地域では黒谷川郡頭遺跡周辺、讃岐地域では下川津遺跡周辺、筑前⁵²⁾では西新町遺跡等の博多湾沿岸の諸遺跡、肥前⁵³⁾では諸富町周辺で確認されつつある。これらの遺跡はその立地から「津」としての機能が注目される。その証左として地域内では傑出した量の他地域系土器が搬入され、またその地域特有の土器も保持する場合もあって、他地域への搬出拠点にもなったと考えられる。纏向遺跡に搬入された膨大な量の他地域系土器を前提とすれば、大和東南部を頂点として旧国単位程度の地域間を繋ぐそれら港湾的機能を有する遺跡がネットワークとして形成された可能性が想定できる。

註

- 1 寺沢 薫「大阪湾沿岸地域における弥生時代遺跡群の展開とその社会（上）・（下）」『古代学研究』72・73 古代学研究会 1974、阪田育功「第2節 河内平野における古墳時代前期集落の成立と変遷」『佐堂（その2）－1』（財）大阪文化財センター 1984、福田英人「古墳時代初頭の河内」『八尾市文化財紀要2』八尾市教育委員会文化財室 1986 等がある。
- 2 寺沢 薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』橿原考古学研究所』 1986
- 3 梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』青木書店 1986。当該期は「河内湖Ⅰの時代」に相当する。
- 4 高橋 学「河内平野の地形環境分析Ⅰ」（（財）大阪文化財センター『池島・福万寺遺跡発掘調査概要－86－1～6 調査区の概要－』1991 所収）。「三角洲Ⅰa帯は、弥生時代中期頃までには河川の搬出した土砂によって陸化した場所である。三角洲Ⅰb帯は、陸化した時期が遅く弥生時代末から古墳時代中期頃にあたると考えられる地帯である。（中略）瀬戸内海沿岸の各地でほぼ共通してこの時期に三角洲Ⅰ帯の拡大が認められる」としている。
- 5 （財）大阪文化財センター『西岩田』1983
- 6 （財）大阪文化財センター『瓜生堂』1980
- 7 友井東遺跡は、南北 330 mが調査され、北部 1/3 が「その2」調査区、南部 2/3 が「その1」調査区として報告されている。当該期の遺構が検出されているのは南端の 25 m で方形周溝墓 3 基である。この方形周溝墓は布留 3 期における美園遺跡の墓域が拡大した北限と考えられている（大阪文化財センター『友井東（その1）』1984、大阪文化財センター『友井東（その2）』1983）。
- 8 （財）大阪文化財センター『美園』1985
- 9 （財）大阪文化財センター『友井東（その1）』1984
- 10 （財）大阪文化財センター『佐堂（その2）－1』1984
- 11 （財）大阪文化財センター『久宝寺北（その1～3）』1987
- 12 遺構は溝 11、井戸 1、ピット 3 がある。また（その1）調査区の南端部分では 10～20cm の包含層が形成されるが、北方向にはのびない。（（財）大阪文化財センター『佐堂（その1）』1985）
- 13 阪田育功「第3節 河内平野の形成と河川の変遷－長瀬川流域を中心に－」（註9 文献所収）。佐堂遺跡検出の N R 4001・4002 を当該期の長瀬川本流としており、本稿もそれによった。
- 14 （財）大阪文化財センター『久宝寺南（その1）』1987
- 15 （財）大阪文化財センター『久宝寺南（その2）』1987
- 16 田中清美「報告2. 加美遺跡発掘調査の成果」（古代を考える 43 『加美遺跡の検討』古代を考える会 1986 所収）
- 17 （財）大阪文化財センター『亀井北（その1）』1986

- 18 (財)大阪文化財センター『亀井北(その2)』1986
- 19 現段階で、本遺跡群において中核となった所が確定できるわけではない。現在の中田遺跡の範囲から庄内期初頭の他地域系土器の主体である吉備系が集中していること、それら吉備系から当該期の象徴たる河内型庄内甕が生み出されたと考えることから、本稿では「中田遺跡群」と仮称する。
- 20 二点の根拠がある。一点は玉串川の東側に立地する池島・福万寺遺跡での調査成果による。遺跡は弥生時代以降の水田主体の生産遺跡であり、たびたび洪水の被害を被っている。問題はそれらの洪水堆積物の供給された方向であり、条里型地割出現以前は遺跡の南東方向の生駒山地からのもので、条里型地割出現以降になって玉串川方向からの洪水が確認される事実である(高橋 学「河内平野の地形環境分析Ⅰ」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ』(財)大阪文化財センター 1991)。二点目は、服部昌之氏の研究による。奈良時代の洪水記事に玉串川の記載がないこと、玉串川兩岸の条里が連続することから玉串川の成立を9世紀以降と想定するものである(服部昌之「大阪平野低地古代景観の基礎研究」『歴史研究と都市研究』大明堂 1978)。
- 21 大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1983。その後も周辺を大阪府、八尾市が調査しているが、状況は同じである。
- 22 萱振遺跡は、遺跡範囲が南北方向に2km程に長くのび、北半を萱振A遺跡、南半を萱振B遺跡としている。本稿で対象となるのは、萱振B遺跡の南端である。萱振A遺跡南端で両遺跡の境界付近に位置する府立八尾北高校での発掘調査において、庄内期に属する方形周溝墓、溝などが検出されている。時期は、弥生時代V期中頃からで、庄内全期間と布留期初頭を主体にしつつ一部布留期後半も含む。しかし、現状ではその間をつなぐ状況が不明瞭なことが、八尾北高校部分を除外した理由である。少なくとも、遺構は中田遺跡群から萱振遺跡の南半にまでのびることは確かである。
- 23 大野 薫「萱振遺跡井戸3出土の布留式土器」『庄内式土器研究Ⅳ』庄内式土器研究会 1993
- 24 (財)八尾市文化財調査研究会「東郷遺跡の調査成果」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度』1989において第26次調査までの成果をまとめている。調査報告には枚挙にいとまがない。
- 25 原田昌則「第1章 地理・歴史的環境」『成法寺遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会 1991 において第6次調査までの成果をまとめている。
- 26 八尾市教育委員会「7.中田遺跡〈刑部地区〉」『昭和53・54年度 埋蔵文化財発掘調査年報』1981
- 27 米田敏幸「中田1丁目39番地出土土器」『八尾市文化財紀要2』八尾市教育委員会文化財室 1986
- 28 八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』1981。その後、八尾市教育委員会「八尾南遺跡出土の追加資料」『八尾市文化財紀要Ⅰ』1985で多数の韓式系土器を追加報告している。

- 29 大阪府教育委員会『八尾南遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1991。2点のS字甕は、奥田尚氏に砂礫の分析をお願いした。概要の71は在地産、72は愛知県庄内川流域の砂礫とされた。形態的にも前者は口縁部上面に強いヨコナデを施して凹ませており東海産のS字甕とは異なる。
- 30 同様の状況を示す事例に、加美、久宝寺遺跡の方形周溝墓がある。いずれも東海系土器が出土する。前者の1号方形周溝墓（庄内新～布留初頭）からは瓢形壺が、後者の方形周溝墓3-2からは小型S字甕（B類新～C類古）が出土している。
- 31 柏原市教育委員会『船橋遺跡』1994
- 32 田辺昭三他『船橋Ⅱ』平安学園考古学クラブ 1971
- 33 奥田 尚「第6章 船橋遺跡出土土器の砂礫」（註31文献所収）。奥田氏の分析よれば、生駒西麓産を含めて7割以上が搬入土器とされ、他遺跡での搬入比率とはかけはなれた数値を示す。土器形態からみれば、搬入土器は2割程度と考えられ、砂礫分析による数値と同等に扱えない。在地産土器の定義にもよるが、本来その遺跡内で作られた土器は大変少ない場合も推定され、今後の研究課題である。
- 34 山田隆一「大阪府下出土の東海系土器とその特質」『庄内式土器研究Ⅲ』庄内式土器研究会 1992
- 35 大阪府教育委員会『国府遺跡発掘調査概要・ⅩⅡ』1982。また一瀬和夫氏、森井貞夫氏はの時期毎の変遷について述べている（大阪府教育委員会『国府遺跡発掘調査概要・ⅩⅠ』1981）。
- 36 柏原市教育委員会『本郷遺跡 1991・1992年度』1993。調査担当者の北野重氏によれば、本報告部分が遺跡範囲の南端であり、船橋遺跡との間は試掘・立会調査をしても遺構・遺物は存在しないとのことである。また船橋遺跡の中心は、現大和川河川敷き部分との教示も得た。
- 37 韓式系土器の段階になれば、旧大和川をはさんで本郷遺跡の対岸に立地する大泉遺跡で出土するようになり、集落の中心は移動している。
- 38 寺沢 薫「三輪山麓の遺跡」（『日本の古代遺跡5 奈良中部』保育社）1983
- 39 大阪府教育委員会『崇禅寺遺跡発掘調査概要・1』1982
- 40 大野 薫「大阪市東淀川区崇禅寺遺跡出土の鉄製素環頭大刀」『大阪の歴史』第34号 1991
- 41 米田文孝「搬入された古式土師器」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』関西大学 1983
- 42 S字甕、宇田型甕の編年は、赤塚次郎「V考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1990、同「最後の台付甕」『古代』第86号 早稲田大学考古学会 1988による。
- 43 註41文献。なお、垂水南遺跡と五反島遺跡の出土遺物の実見に際しては、吹田市教育委員会の西本安秀氏のお世話になった。
- 44 寝屋川市教育委員会の浜田延充氏、大東市歴史民俗資料館の黒田淳氏の教示による。

- 45 芋本隆裕「北鳥池遺跡出土土器の再整理」『東大阪市遺跡保護調査会年報』東大阪市遺跡保護調査会 1980
- 46 奈良県立橿原考古学研究所『纏向』1976
- 47 弥生時代集落のあり方については、酒井龍一氏の研究がある。それによれば、弥生社会において拠点集落は5 km程度の距離をおいて存在しており、それが一共同体の社会的、経済的に運営できる範囲であることがわかる。
- 48 米田敏幸「庄内河内型甕の生産と移動」『庄内式土器研究Ⅰ』庄内式土器研究会 1992
- 49 庄内式土器の研究によって、庄内甕は地域内のきわめて狭い範囲に分布する事実が判明している。例えば大和型庄内甕は、纏向遺跡から天理市南部がその分布範囲となり、それ以外からは少数の出土にとどまる（青木勘時「大和における庄内併行期の甕の諸相」『庄内式土器研究Ⅲ』庄内式土器研究会 1992）。河内型庄内甕も同様で分布の中心は中田遺跡群にある。
- 50 当時の権力中枢と河内平野に分布する集落遺跡との関係を述べたものに、阪田氏の論考がある（阪田育功「第2節 河内平野における古墳時代前期集落の成立と変遷」『佐堂（その2）-1』（財）大阪文化財センター 1984）。氏は河内の古墳のありかたを分析することで、「（河内平野）低地部の集落は生産力の高さ故に権力に直接的に支配され、古墳も強く規制を受けたために前方後円墳という墳形をとりえなかった・・・小方墳や大円墳という古墳の様相は経済的先進地域として、大王権力に直接支配された状況を示している」と解釈する。事実、近年の調査により当該期の広大な水田域の判明した八尾市志紀遺跡等の状況からそのような解釈は可能であろう。しかし、当該期の遺跡分布の在り方や他地域系土器の搬入状況、大和盆地東南部と中河内地域の遺跡の消長等から考えて、農業生産力の高さばかりが理由ではなく、むしろ半島を含む西日本の諸地域と大和盆地東南部をつなぐ旧大和川ルート上に位置したことにその主たる理由を考えたい。
- 51 米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器について」『考古学論集』第1集 考古学を学ぶ会 1985
- 52 吉留秀敏「弥生時代から古墳時代の博多」『法哈噠 第2号』博多研究会 1993。吉留氏からは西新町遺跡は庄内古相に出現し布留初頭には断絶するとの教示を得た。
- 53 蒲原宏行「古墳時代初頭前後の佐賀平野」『日本と世界の考古学』岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会 1994

第2節 淀川流域の古墳時代初頭期集落について

1 はじめに

弥生時代終末から古墳時代初頭期は、地域間の交流が活発化する時期である。その結果の一つとして、在地の土器に混じって他地域から搬入された土器が多数見られるようになる。第1節では、旧大和川流域の中河内地域をあつかったが、本稿では、同様の視点から淀川流域の集落動向を述べて、その地域的特徴¹⁾を明らかにすることが目的である。あつかう地域は東部摂津地域と北河内地域である。なおここに言う古墳時代初頭期とは、土器様式で庄内様式初頭から布留様式中頃程度を指し、前稿で明らかにした集落遺跡出現の画期から消滅までの間である。

2 東部摂津地域の状況

あつかう東部摂津地域とは、旧三島郡であり、現行の島本町、高槻市、茨木市、摂津市に相当する。地形的には千里丘陵よりも東部にあって、北摂山地と画され、そこから派生する丘陵、および淀川とそれに注ぐ中小河川が形成する沖積平野部から形成される。なお本地域を流れる淀川は、瀬戸内諸地域と山城・近江・大和、および東日本諸地域を結ぶ大動脈であることが重要である。ここでは仮に島本町・高槻市域を大阪平野北端地域と桧尾川・芥川流域、茨木市域を茨木川・安威川流域に三分して、代表的な遺跡を取り上げることで記述を進める。

1) 大阪平野北端地域

本地域は淀川流域の中でも、北からは天王山、南からは男山丘陵が川沿いに最も迫り、平野部が急激に狭くなる。摂津と山城を結ぶ結节点的な位置にある。弥生時代以降、北部の島本町で桜井遺跡等、南部の高槻市東端で上牧遺跡等が見られるが、活発な状況は確認できない。南部の梶原南遺跡でⅠ・Ⅱ様式、北部の神内遺跡でⅡ様式の遺物が出土するが、それ以外はⅤ様式中頃以降の小規模遺跡が確認できる。

梶原南遺跡 (3)・上牧遺跡 (2) 梶原遺跡、梶原南遺跡、上牧遺跡が北摂山地から淀川に流れ込む旧流路沿いに立地したことが航空写真から読み取れる。弥生時代後期～庄内期にかけては、両遺跡で竪穴住居各1棟が確認されているが、集落としては極めて小規模である。なお、弥生時代後期には北から南方に延びる長大な3条の溝が確認されており、

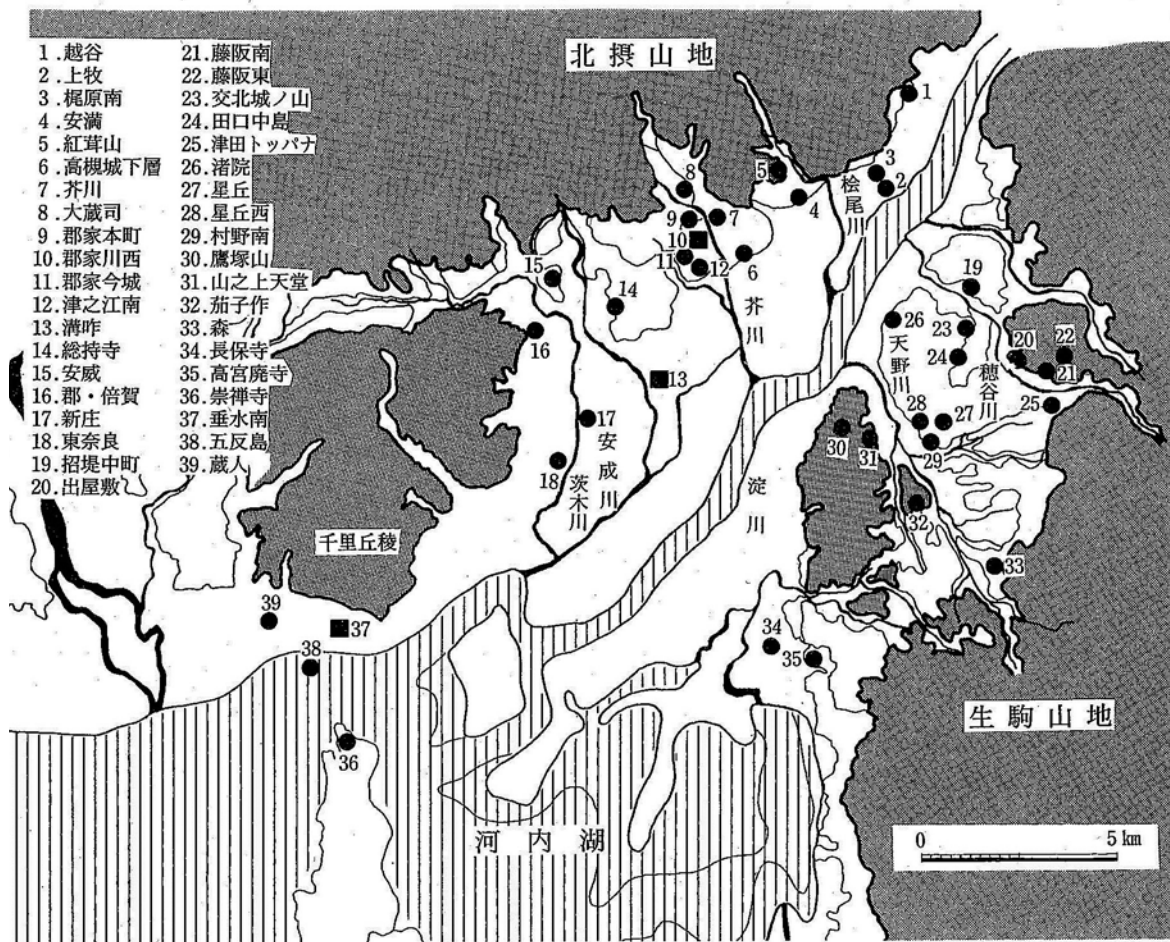


図1 淀川流域の古墳時代初頭期遺跡分布

水路と考えられる。本段階からの開発を示しており、今後より規模の大きな遺跡の発見される可能性はある。その後、上牧遺跡では布留期の遺物のみの出土をみるが、竪穴住居、井戸、土坑等の明確な居住を示す遺構が確認できるのは布留3期以降である。

上牧遺跡の包含層からは、若干の他地域系土器（第3図）が出土している。出自不明の壺（g）の他は、すべて山陰系で占められる。山陰系は、若干の時期差があるが、青木V・VI期新段階²⁾以降とみてよく、布留初頭から前半段階の所産と考えておきたい。

本地域では、庄内期～布留前半の時期には何らの傑出した要素は認められない。しかし、山城地域に入るや木津川川床遺跡の存在が知られ、最近この遺跡からの採集遺物をまとめた久保哲正氏³⁾は、「弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期から営まれる比較的大きな規模の集落跡」の可能性を示唆している。東部摂津地域の結節点としての本地域の在り方について、今後の基礎資料の増加を期待したい。

2) 梶尾川・芥川流域

弥生時代には、梶尾川流域の安満遺跡を拠点集落とした展開が見られる。安満遺跡は、

番号	遺跡名	所在地	V4	V5	庄0	庄1	庄2	庄3	布0	布1	布2	布3	布4	須恵
1	越谷	島本町桜井	■											
2	上牧	高槻市上牧	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■
3	梶原南	高槻市五領町	■											
4	安満	高槻市高垣町他	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■
5	紅茸山	高槻市紅茸町		■										
6	芥川	高槻市紫町	■					■	■	■	■	■	■	■
7	大蔵司	高槻市大蔵司	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■
8	郡家本町	高槻市郡家本町				■	■	■	■	■	■	■	■	■
9	郡家川西	高槻市清福寺町他	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■
10	郡家今城	高槻市氷室町他				■	■	■	■	■	■	■	■	■
11	津之江南	高槻市津之江北町	■											
12	総持寺	茨木市三島町他	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■
13	溝昨	茨木市学園町他				■	■	■	■	■	■	■	■	■
14	安威	茨木市安威他												■
15	新庄	茨木市新庄町	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■
16	東奈良	茨木市東奈良他				■	■	■	■	■	■	■	■	■
17	招堤中町	枚方市東牧野町他			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
18	出屋敷	枚方市山田池南町他				■	■	■	■	■	■	■	■	■
19	藤阪東	枚方市藤阪中町他		■										
20	渚	枚方市渚元町他							■	■	■	■	■	■
21	村野南	枚方市村野本町他							■	■	■	■	■	■
22	津田トッパナ	枚方市津田北町							■	■	■	■	■	■
23	鷹塚山	枚方市高塚町		■										
24	山之上天堂	枚方市山之上北町						■	■	■	■	■	■	■
25	森	交野市森南					■	■	■	■	■	■	■	■

図2 淀川流域の遺跡変遷

弥生Ⅰ様式前半に出現し、Ⅰ様式後半には環濠集落となり、以後Ⅳ様式までは桧尾川流域の拠点集落として継続する。またⅡ様式には天神山遺跡、Ⅲ・Ⅳ様式には慈願寺山遺跡、成合遺跡といった高地性集落が成立する。しかし安満遺跡を含めこれら諸遺跡は、Ⅴ様式になるや消滅あるいは著しい衰退傾向を示し、替わってⅤ様式前半に古曾部・芝谷遺跡、後半から庄内期初頭にかけて紅茸山遺跡の高地性集落が形成される。

安満遺跡 (4) 高槻丘陵縁辺部、旧桧尾川に形成された扇状地に立地する。弥生Ⅰ様式の遺跡形成以来、東集落と西集落の2地点で居住域、墓域あるいは水田域がセットとして営まれる。三島地域において、弥生Ⅰ様式以来の環濠集落は、東奈良遺跡と本遺跡のみで、弥生時代を通じての二大拠点集落とする位置付けが一般的である。しかし、この拠点集落としての性格はⅣ様式で消失する。庄内期から布留初頭期には西集落は消滅し、従来の東集落の範囲にのみ居住域が営まれる。庄内期以降の状況は小規模であり、一般集落の一つと理解できる。報告資料からⅤ様式以降の状況を述べると、断絶あるいは衰退期間をはさみながら、Ⅴ様式後半、庄内期後半～布留期初頭、布留期後半に遺構・遺物が認めら

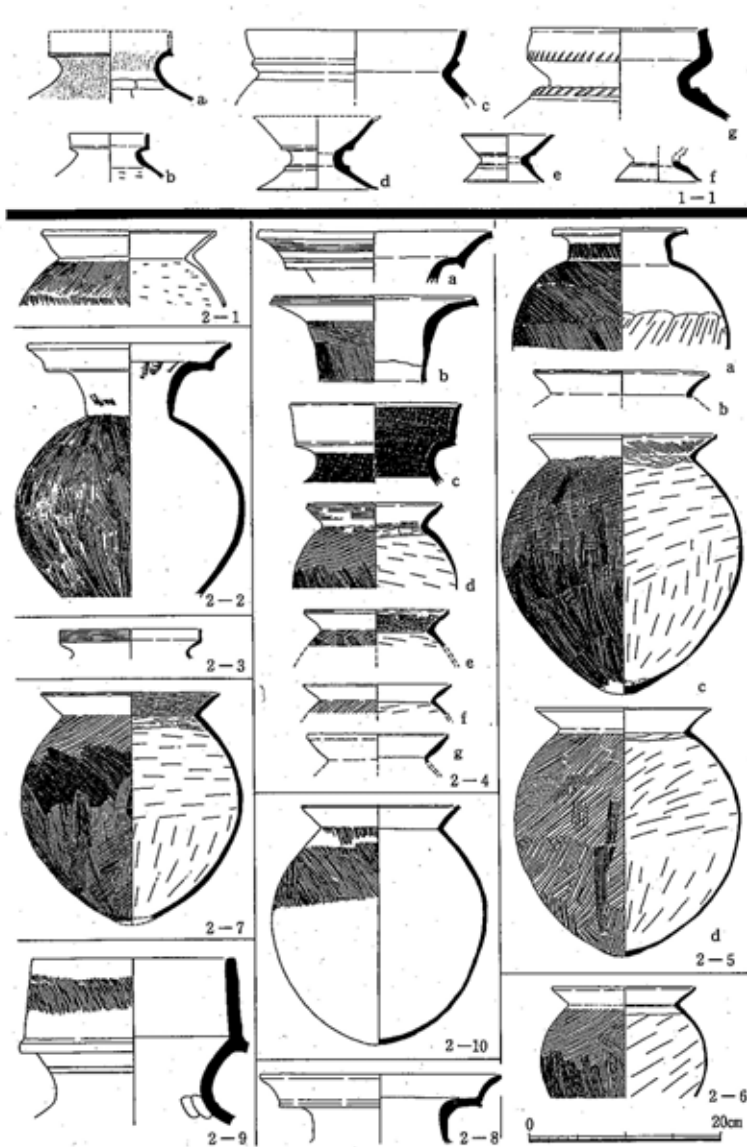


図3 上牧遺跡(1)、安満遺跡(2)

れ、小規模集落の存在が確認できる。

複数の遺構から一定量の他地域系土器（第3図）が出土している。中河内（1、4 d～g、5 b～d、6）、山陰（4 c）、吉備（3）、讃岐（5 a、9）、阿波（2、4 a、b、8）が確認できる。特徴的なのは、中河内系庄内甕が目立ち、今回抽出した他地域系土器19点中、実に11点を占める。これらは、庄内甕の変遷⁴⁾から庄内期後半～布留初頭に位置付けうる資料である。吉備系甕もそれに併行する。第1表を参照すれば、当該期に搬入の主体があり、一部布留後半にも認められることになる。

芥川遺跡 (7) 高槻丘陵縁辺

部、芥川左岸に形成された扇状地の頂部に立地する。遺跡の変遷は縄文時代後期、弥生時代前期新相、同後期、布留期に断絶期間をはさみながら集落が確認される。各時代において多様な外的要素が確認され、この遺跡がたえず物流ルート上にあったことを示す。縄文時代後期には山陰や東日本の影響を受けた多数の土器、弥生前期土坑墓からは金山産サヌカイト製の石鏃が出土する。弥生時代後期には多角形住居が検出され、そこから破鏡が出土している。同時に東方からは近江、山城、丹後系土器が、西方からは吉備、讃岐系土器が搬入される。多数の住居、井戸、土坑、溝等の遺構や遺物とともに本遺跡の最盛期である。その後、庄内期には衰退し、布留初頭～前半段階の遺物が大溝から出土するが多くはない。この段階での他地域系は山陰系に変化する。庄内期以降は郡家川西遺跡に吸収された、と考えられている。

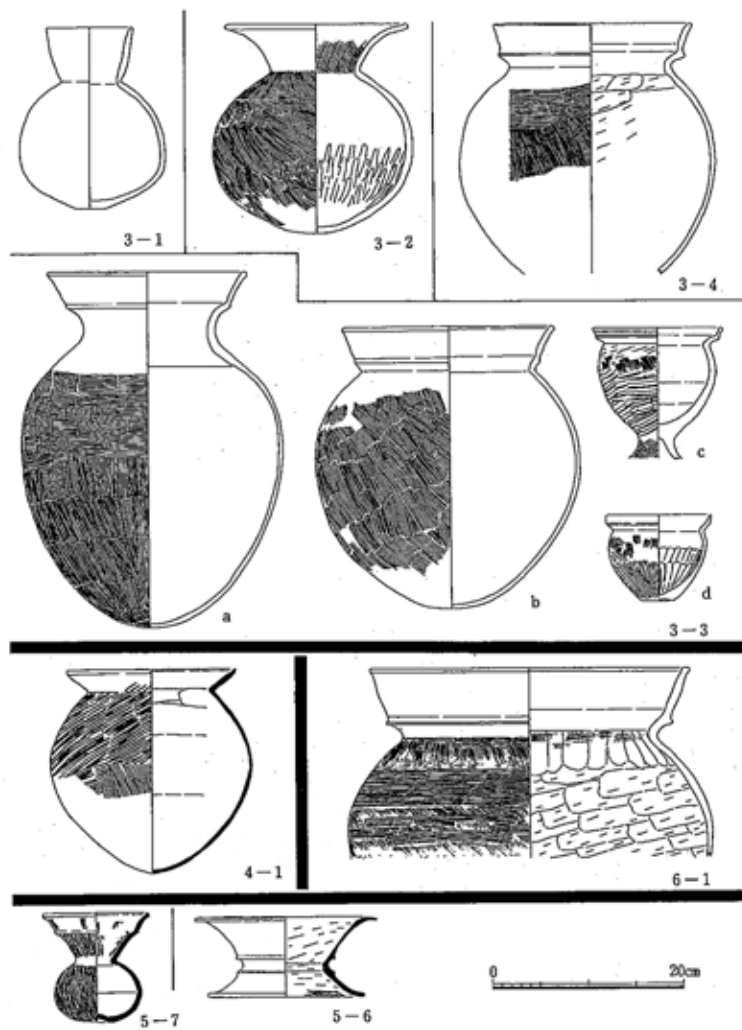


図4 芥川遺跡(3)、郡家今城遺跡(4)、新池遺跡(6)、
郡家川西遺跡(5)

古墳時代初頭期には複数の遺構から他地域系土器（第4図）が出土するが、弥生後期段階の他地域系とは地域は異なり数量も減少する。庄内期以降、郡家川西遺跡に吸収されたことに要因があると考えたい。東海（1）、讃岐（2）、山陰（3 a . b、4）、北近畿系（3 c . d）が確認できる。時期の推定できる山陰系は、丸底化の程度からやはり、布留期初頭程度に併行する。

郡家川西遺跡（10） 芥川右岸の段丘上に立地する。同一の段丘上で北に郡家本町遺跡、西に郡家今城遺跡が接しており、いずれからも庄内期の土坑墓群が確認されている。両

遺跡は、郡家川西遺跡の墓域として理解しておきたい。本遺跡は、長年にわたる多数の地点での調査があり、弥生時代後期後半から布留前半にわたる濃密な遺構分布と遺物が確認されている。遺構内容の詳細は将来の検討によらねばならないが、「堅い段丘を掘削した溝が延々と続く状況」や「居住域は東西・南北とも800mをはかる。竪穴住居の検出数は古墳時代初頭にかけて50棟を超え」る状況が確認されており、「居住域の広さからすれば総数はかなりの数にのぼると推定でき、三島東部の中心集落」⁵⁾と理解されている。

未報告資料があまりに多いが、多数の他地域系土器（第4図）が出土している。中河内（郡家今城遺跡の1）および大和型庄内甕、讃岐、阿波、山陰（6）、九州、近江、東海系（7）が確認できる。東海系の壺は模倣品であろうが、口縁と底部形態から伊勢型二重口縁壺の模倣と考えたい。実見した印象になるが、他地域系のありかたは崇禅寺遺跡、垂水南遺跡、溝咋遺跡に比肩しうる状況と考える。

本地域で重要な点は、弥生時代を通じて桧尾川流域で活発な展開をみた集落遺跡が、古墳時代を迎えるや、その主体が芥川流域に移動したことである。芥川流域においても、弥生時代後期前半の芥川遺跡から、それ以降の郡家川西遺跡への移動が確認できる。筆者は、大きな社会的変化の画期が、遺跡立地における河川流域の変更、集落の新たな位置での出現を伴いながら生じた、と解釈している。同様の状況は当該期中河内地域でも確認できる。次に重要なのは、郡家川西遺跡の立地で、後の奈良時代の島上郡衙と重複し、西国街道沿いに立地することで、すでに古墳時代初頭期から交通の要所を占める事が確認できる。なお芥川をはさんで、北側の段丘上に立地する大蔵司遺跡にも当該期の居住域が展開するが、詳細は不明で今後の検討が必要である。

次に他地域系について。他地域系は均一的に分布するのではなく、偏在的なあり方を示す。つまり、安満、芥川、郡家川西遺跡への集中がみられるが、さらに三者ともに全く状況が異なる。弥生時代後期前半に芥川遺跡に讃岐、近江を主体とする搬入があり、庄内期に入るや西日本諸地域系が郡家川西遺跡に集中し、流通の中核が移動したことがわかる。安満遺跡では中河内系が過半数を占め、西日本の他地域系若干を有する。同様の関係は、後述する東奈良遺跡と溝咋遺跡の間でも生じている。

3) 茨木川・安威川流域

弥生時代には東奈良遺跡を拠点集落とした展開がみられる。東奈良遺跡は、安満遺跡とともに、I様式後半には環濠集落として成立し、I様式末に環濠は埋没するものの茨木川流域の拠点集落として継続する。安満遺跡とは異なり、若干衰退しつつも、V様式から古墳時代初頭期に継続する。他にも安威川流域に目垣遺跡、茨木川流域に耳原遺跡と郡・倍賀遺跡も前期以来継続する。郡・倍賀遺跡は中期段階で膨張しており、著しい遺構密度の拠点集落的様相を示す。他に中期には、安威川流域に太田遺跡と溝咋遺跡、茨木川流域に新庄遺跡、中河原遺跡、春日遺跡、中条小学校遺跡等の多数が出現する。V様式の前半には安威遺跡が出現し、後半には安威川流域に中城遺跡と総持寺遺跡、茨木川流域に宿久庄遺跡等が、高地性集落として安威川流域に塚原遺跡、茨木川流域に松沢池遺跡、見付山遺跡、地蔵池南遺跡が出現する。いずれも小規模である。

溝咋遺跡 (13) 安威川下流域左岸の沖積地に立地する。遺跡の変遷としては、弥生時代中期後半以降に成立し、後期初頭には土器棺が検出され他地域系土器も出土する。その後、断絶期間をはさんで、庄内期から再開する。庄内期前半の遺物は確認できるが、庄内期後半～布留期に集落は整備され最盛期をむかえる。初期須恵器、瓦質高杯等の出土は見

られるものの、その段階の遺構、遺物は激減する。古墳時代初頭期の遺跡景観は、東西方向に発達した自然堤防上に居住域が展開し、その自然堤防の後背湿地に水田が展開する。弥生時代後期前半と古墳時代初頭期の二時期に、他地域系の文物が集中出土することも強調しておきたい。他に縄蓆文叩きの土器も出土している。

他地域系土器（第5～8図）は極めて多く、地域も広範囲である⁶⁾。吉備系2点（12、22 h）、讃岐系6点（1、2、3、8 a・b、22 u）、阿波系14点（7、8 c、11 b・c、14 b、18 d、20、21 l～n、22 i～k、25）、山陰系23点（4 a、6 b～e、9 f、13 a、14 a、16、19 a～c、21 s～y、22 n・o、23、24）、中河内系14点（9 a～c、10、11 a、17、21 i～k、22 a～e）、播磨系1点（22 g）、北近畿系3点（13 b、19 d、22 m）、近江系11点（9 d、15 a・b、18 a、21 a～f、22 f）、北陸系1点（22 l）、東海系6点（9 e、13 e、18 b・c、21 g・h）、関東系2点（21 r、22 p）の他、出自不明資料（4 b、5、6 a、21 o～q、22 q～t）も多い。遺跡自体の内容が不明瞭にしても、多量の他地域系土器は、郡家川西遺跡の状況が不明瞭な今、淀川右岸域の物流拠点としての実情を良好に伝える資料である。特徴は以下のとおりである。

流通の時期について。吉備系甕は下田所～亀川上層程度、中河内系庄内甕は米田氏分類の庄内甕C・Dが主体的であるとする。また、東海系S字状口縁台付甕（以下、S字甕）は、赤塚氏分類⁷⁾のB類新段階～C類古段階である。これらは、いずれも庄内後半～布留初頭に併行する資料であり、この段階に急激に流入したことを示している。

東日本地域との流通について。近江系、東海系の多さが目立ち、また少数ながら北陸系と関東系の出土にも注目できる。府下での東海系の出土は多くないが、吹田市垂水南遺跡、堺市下田遺跡、大阪市崇禅寺遺跡、および加美・久宝寺遺跡とともに本遺跡の6点は多い。本遺跡から垂水南、崇禅寺遺跡は、淀川から瀬戸内に至る物流拠点であり、そこに東海系の集中がみられる。近江系も同様に淀川流域以外ではほとんど見かけない。関東系も異色で、しかも2点ともが安威川流域産の胎土である。近畿では全く別系統であり、彼地の人の往来が想定できる。淀川流域は、他地域系の主流はあくまで西日本諸地域にあるにしても、弱いながら東日本地域との流通にも関わったことがわかる。

阿波との流通について。流通における他地域系土器は結果であって、本来の内容がわかることは少ない。本遺跡では多数の阿波系土器と共に赤色顔料付着土器、朱の精製に用いた石臼、L字状石杵などの朱関連遺物と、阿波吉野川流域産の結晶片岩材が出土⁸⁾しており、本来の物流の一端がわかる。

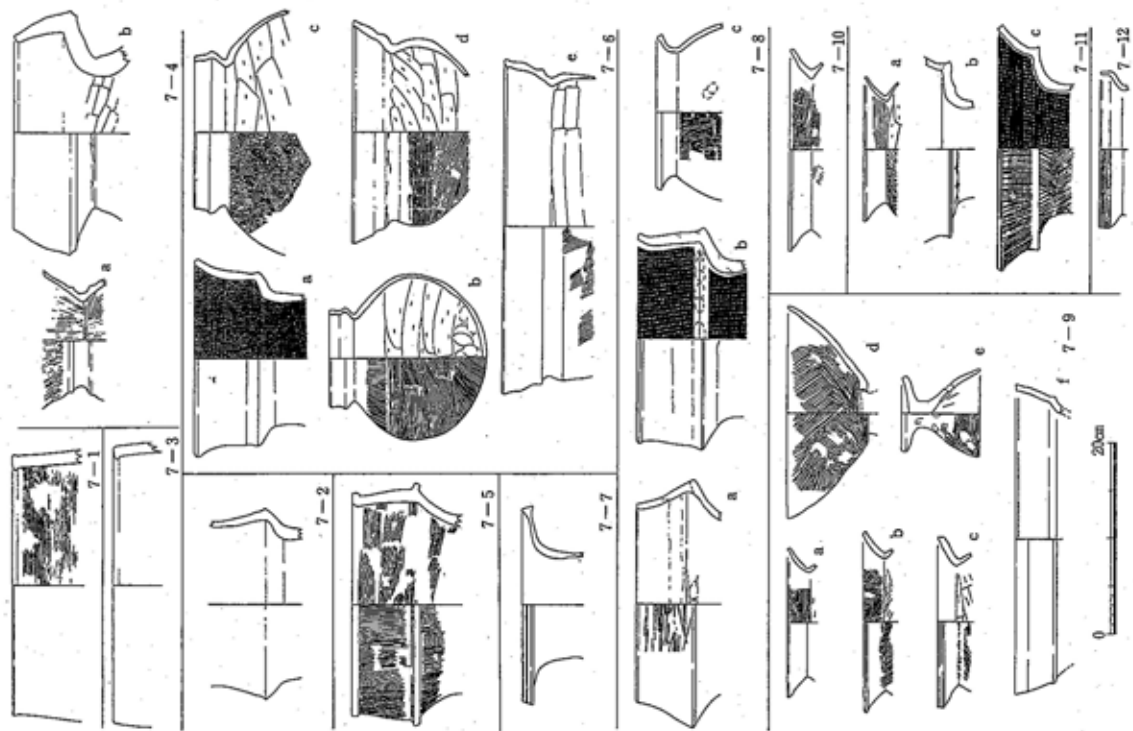


图5 沟咋遗迹(7)-1

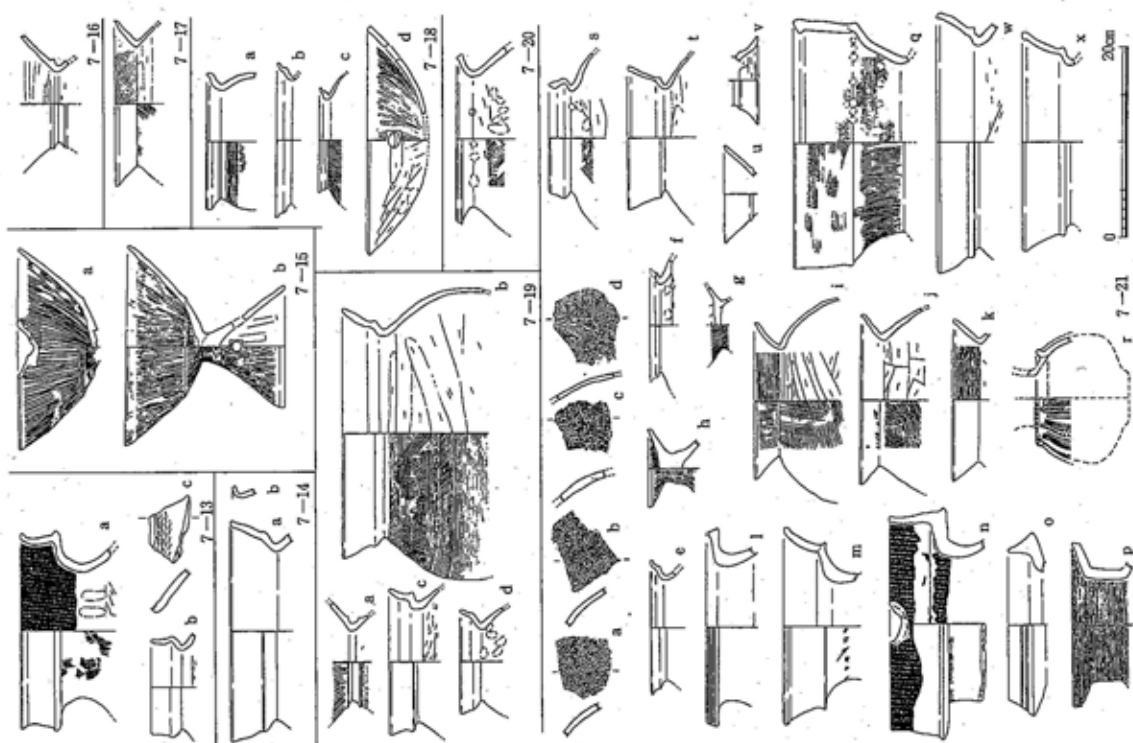


图6 沟咋遗迹(7)-2

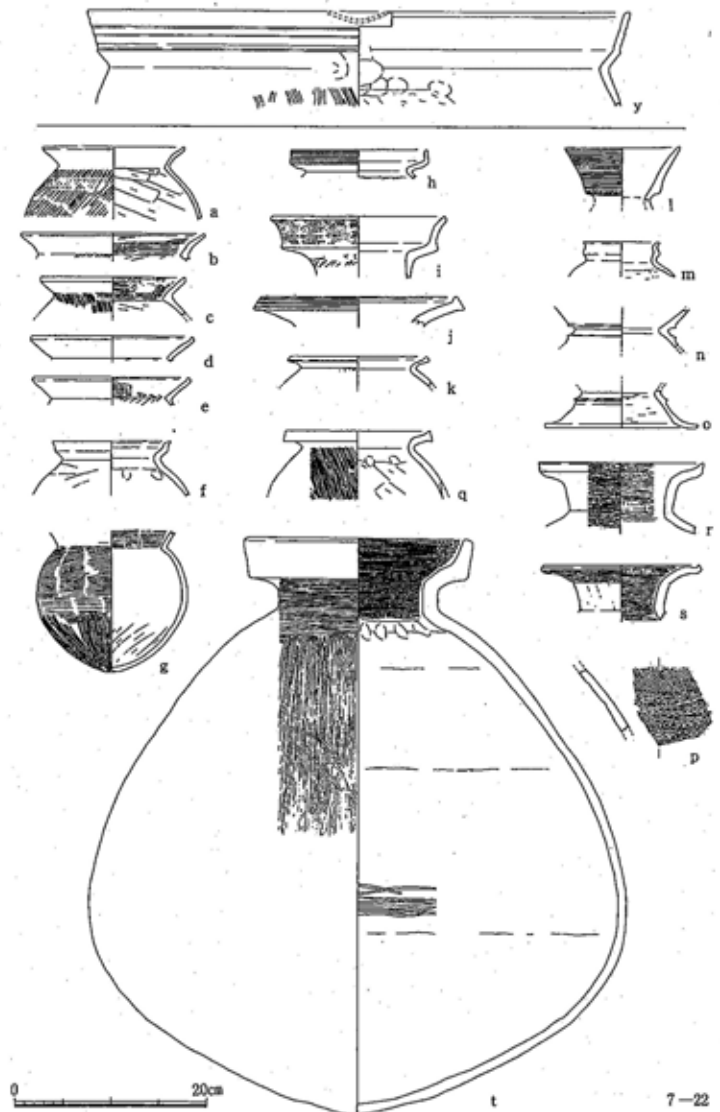


図7 溝咋遺跡(7)-3

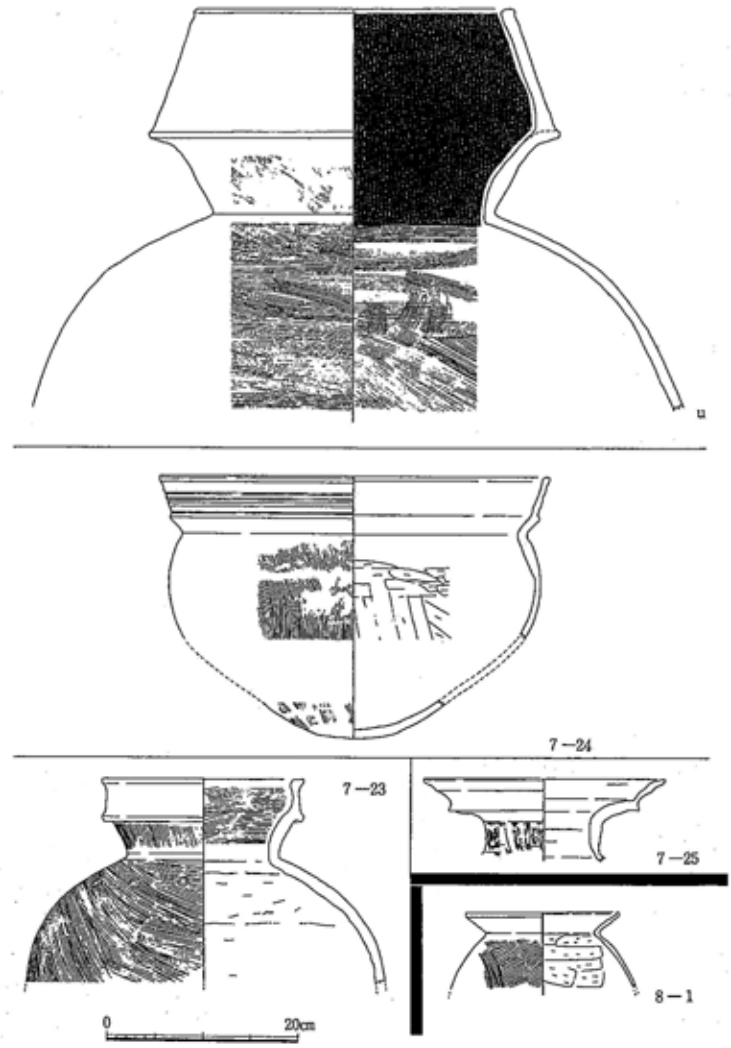


図8 溝咋遺跡(7)-4、新庄遺跡(8)

讃岐系の大型壺について。22 uが典型であり、府下では淀川流域と旧大和川流域に集中的に分布する。畑氏の研究⁹⁾があり、その分布図を見るとさらに流域を遡り、前者では山城、近江地域へ、後者では大和盆地に流入することがわかる。

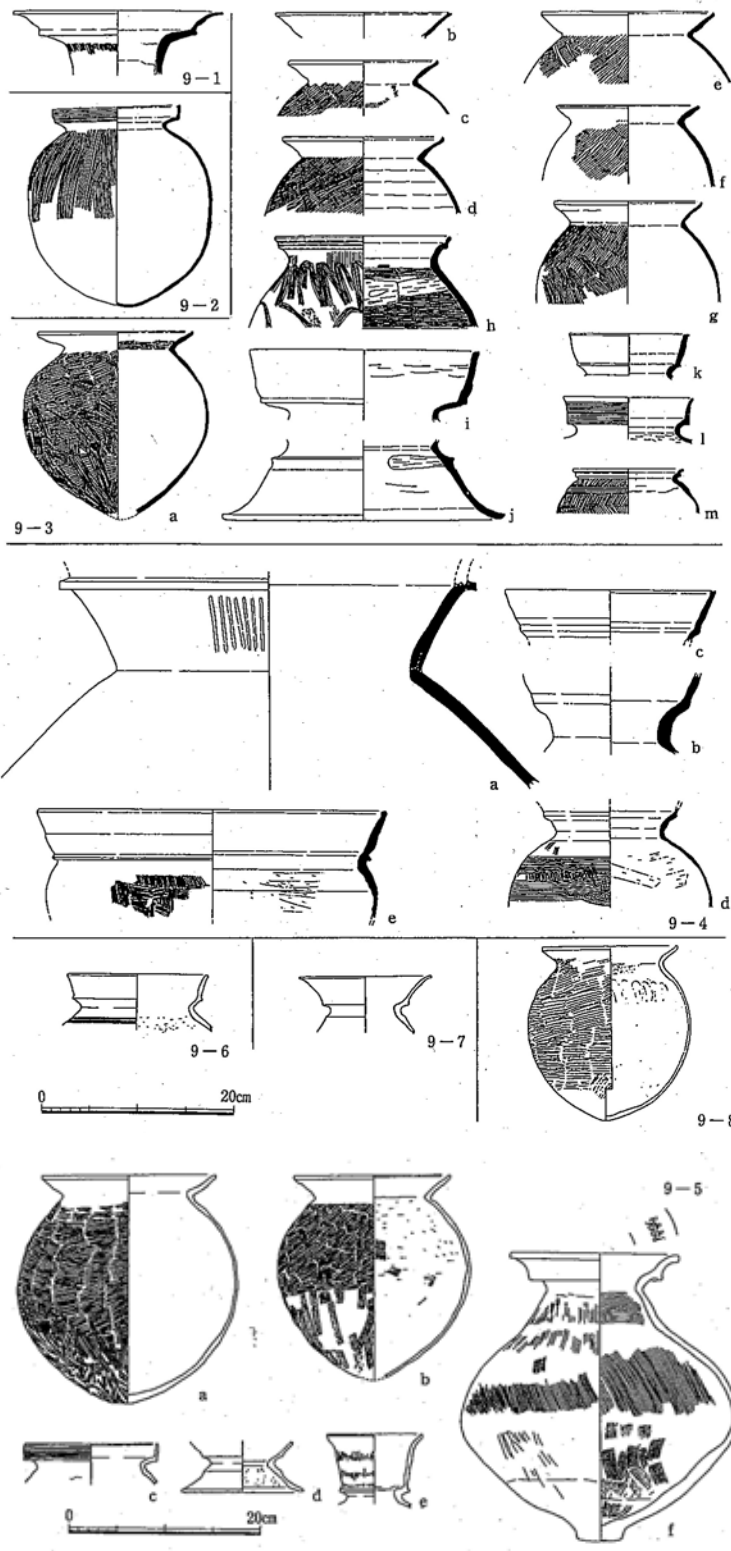


図9 東奈良遺跡 (9)

は、庄内期中頃から布留期中頃の遺構・遺物が確認できる。遺跡範囲の中央部と茨木川右岸の二ヶ所で居住域と墓域が確認され、ベッドを有する方形竪穴住居、小型方形周溝墓、土器棺等が確認される。

他地域系土器 (図9) は一定量が出土している。中河内 (3a~g、5a・b)、山陰 (3j、

総持寺遺跡 (14) 舌状にの

びる低位段丘上に立地する。段丘西縁部で、安威川を望んで造営された墓域である。弥生時代後期後半には突出部を有する円形周溝墓1、方形周溝墓2、土器棺墓が検出されている。なお、土器棺の一つは生駒西麓胎土の大型壺である。その後、TK 73段階以降に小型方墳が墨々と築造された。造営母体は不明である。庄内期から布留期前半は小規模集落である。

東奈良遺跡 (18) 茨木川右

岸の標高5~10mの沖積地に立地する。南北1.4km、東西1km程の広大な範囲が遺跡範囲とされるが、内部は均一ではなく、谷地形や微高地が地点的に存在し、微高地上に居住域、その周辺に墓域や生産域が配置されたと考えられる。弥生前期中段階以降継続する拠点集落であるが、中期後半に盛期がある。後期にも継続するが、遺構密度は明らかに低くなる。古墳時代

4b～e、5d・e、6、7)、吉備(2、5c)、讃岐(4a)、阿波系(1)の他、類例の少ない播磨(8)、北陸(3l)、東海系(3m)、出自不明(3h・i・k、5f)の搬入が確認できる。安満遺跡と同じく、庄内期後半～布留期初頭の中河内系庄内甕が目立ち、他地域系土器29点中、9点を占める。吉備系は他遺跡と同様に少なく、やはり下田所～亀川上層式である。また東海系S字甕は赤塚分類B類新段階、溝資料(4)の山陰系は青木Ⅶ期古段階程度で、これらは庄内期後半～布留期初頭に併行する。少ない資料の中にも東海系S字甕、北陸系月影式の甕が入ることも淀川流域の特徴と考えられる。

郡・倍賀遺跡(16) 千里丘陵より派生した段丘先端部に立地する。弥生時代には拠点集落的な様相を帯び、古墳時代にも継続的に盛行した大遺跡と理解¹⁰⁾されるが、公表された資料は少ない。本稿では報告資料から、とりあえず衰退期をはさみつつ弥生時代、布留期後半、そして奈良時代に三度のピークが認められると理解したい。むろん最大の盛行期は奈良時代、西国街道沿いに造営された嶋下郡衙としてであって、古墳時代初頭期は衰退期に相当する。なお古墳時代初頭期における搬入土器は「中河内からの庄内甕の破片以外目立つものもなく、少量」とされている。

安威遺跡(15) 本遺跡は、古墳時代初頭期は衰退期で、布留3期以降の集落遺跡であるが、次段階への社会発展の方向性を明確に示す集落として紹介する¹¹⁾。安威川中流域右岸、北摂山地の南に舌状に張出した段丘上に立地する。一部に弥生第Ⅴ様式中頃の遺構があるも、主体は布留3期以降である。5世紀初頭の布留3期から6世紀前半のTK10型式の竪穴住居35棟、掘立柱建物11棟、鍛冶炉と推定される土坑7基他が検出された。集落としての盛期は、遺跡の成立した5世紀初頭から前半(TG232型式)とされている。半島的要素の濃厚な集落遺跡である。

本地域で重要な点は、茨木川流域で活発な展開をみた弥生時代の集落関係が、古墳時代に入るや溝咋遺跡と次段階の安威遺跡の存在から、安威川流域へ盛行する地域が移動したことにある。これは、桧尾川・芥川流域の状況と同じ状況を示す。他地域系が偏在的な在り方を示す点も同じである。集中する遺跡は溝咋遺跡と東奈良遺跡で、中河内系庄内甕が数点程度出土するにとどまるのが新庄遺跡と郡・倍賀遺跡である。溝咋遺跡と東奈良遺跡も状況は異なる。つまり、溝咋遺跡においては、弥生時代後期には壺を主体とする中河内系の土器が入り、庄内期以降には、若干の中河内系を含みつつも、多量の西日本諸地域系と少量の東日本系が搬入されている。東奈良遺跡においても他地域系は多いが、庄内期においては半数が中河内系庄内甕で占められる。すなわち、安満遺跡と東奈良遺跡、郡家川

西遺跡と溝咋遺跡が同じ状況を示すことが確認できる。

以上のように、三島地域では河川流域毎に拠点としての遺跡が存在し、それらは縄文時代以降、いずれの時代においても流通拠点としての機能を確認することができる。時期によって変動が認められ、弥生時代にはやや低調であった芥川と安威川流域に郡家川西遺跡と溝咋遺跡が確認できることは重要である。拠点となる集落が、弥生時代から古墳時代への変化のなかで、水系を変えて立地すると理解できる。

3 北河内地域の状況

北河内は、現行の枚方市、交野市、寝屋川市、四條畷市、大東市、門真市、守口市に相当する。地形的には淀川より以東で、弥生・古墳時代にあつては河内湖によって中河内と分離される。北河内は生駒西麓を走る東高野街道により、中河内地域とつながっている以外は地形的に独立している。遺跡立地については、浜田氏¹²⁾により、地形的な特徴から古代の交野郡に相当する「枚方～交野台地」（以下、枚方・交野台地）の丘陵上、茨田郡に相当する「淀川左岸低地」の自然堤防上、讃良郡に相当する「生駒西麓」の生駒山地と河内湖に挟まれた地域の三分区がなされており、それを踏襲する。

1) 枚方・交野台地

本地域の特徴は、集落遺跡自体が丘陵上に造営され、中河内や摂津地域のように環濠集落や高地性集落といった識別がしにくい点にある。弥生時代前期については、近年ようやく招堤中町遺跡で確認された。遺跡の展開が明確になるのは弥生中期からで、Ⅱ様式に交野台地上に交北城ノ山遺跡や星丘西遺跡が出現し、Ⅲ・Ⅳ様式にかけて遺跡数の増加が見られる。その後、Ⅴ様式初頭期の集落遺跡の減

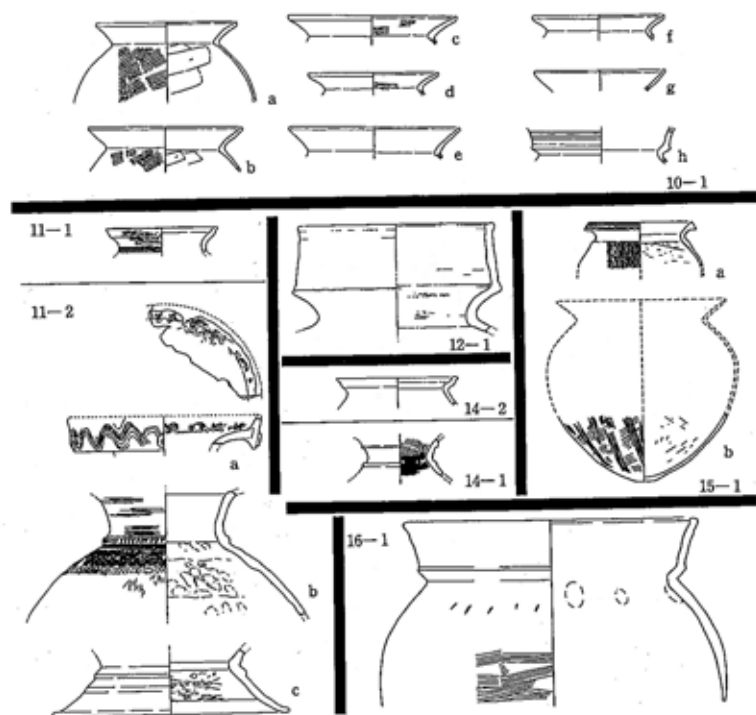


図10 北河内の他地域系土器

招堤中町(10)、出屋敷(11)、津田トツバナ(12)、森(14)、長保寺(15)、高宮廃寺(16)

少、断絶期をはさみ、V様式後半期～庄内期にかけて急激に増加すると認識¹³⁾されている。土器様式に庄内式を含まない地域のため、特にV様式後半～庄内期の時期の位置付けが不明瞭の感がぬぐえない地域である。本稿では、地域内でも特殊例と考える二遺跡について概観することで地域的特徴を明らかにするにとどめる。

招堤中町遺跡 (19) 穂谷川流域、標高約 20m の低位段丘上に立地する。I 様式新段階の土坑、ピット、II～III 様式古段階の方形周溝墓群が確認されている。その後V様式末までの断絶期間をはさんで、庄内期から居住域として再開する。竪穴住居 8 棟、木棺墓、土坑墓が確認されている。竪穴住居の 1 棟は一辺 8 m を測る大きなものがあるが、他は一辺 4.5～6.0m の規模である。出土遺物からみると、庄内期前半の内に集落の造営が開始され、庄内期後半に最盛期をむかえて布留期前半に消滅する。

弥生時代中期初頭の方形周溝墓の溝上層から他地域系土器（第 11 図上段）が出土している。生駒西麓産胎土の中河内系庄内甕 7 点と北陸系 (h) で構成され、中河内系庄内甕のみが目立つ。庄内甕は庄内 3 期が主体で、1 点 (g) のみが布留初頭に属する。他に、極細の横方向ヘラミガキの椀形高杯 1 点も東部瀬戸内系の可能性がある。本遺跡ではこの段階、吉備や中河内平野部では一般的になる、回転を利用したであろう極細の横方向ヘラミガキ技法¹⁴⁾が部分的に確認できるようになる。共伴した複数の資料にもこの技法が看取できる。つまりこの地域では、多数の西日本諸地域系の土器が搬入される状況はないにしても、庄内期後半以降、中河内地域との技術交流のあったことを確認できる。

森遺跡 (33) 生駒山系から天野川の形成する沖積平野に向かって延びる尾根地形の先端部微高地上に立地する。

縄文時代や弥生時代中期の遺物も出土するが、明確に居住域を示す竪穴住居、井戸、土坑、溝等の遺構が確認できるのは庄内期後半以降で、布留期前半まで継続したと考えられる。その後、布留期後半の空白期間をはさんで、古墳時代中期以降には掘立柱建物群を中心とした鍛冶専門集団に移行する。古墳時代中期は本遺跡が最も盛行する段階であり、遺構の確認できる範囲も拡大する。府下における鍛冶関連遺構・遺物の多さは、柏原市大県遺跡に次ぐものであり、奈良県においては天理市布留遺跡と御所市南郷遺跡群が類例としてあげられ、それらが地域を異にしながらもほぼ同時期に出現する。鍛冶専門集団としての森遺跡の出現自体、広範囲の社会的な画期に連動したものであることを示しており、森遺跡のみの鉄器をまかなうものではなく、より広い地域の鉄器需要を対象にしたものであることを示している。本遺跡の古墳時代前期については、おそらく集落周辺部の調査にと

どまることからその性格を言及できる段階ではない。他地域系（第 11 図中段）の搬入は、河内型庄内甕、近江系甕（2）と山陰系鼓形器台（1）各 1 点が確認できる程度である。

本地域では、他に第 1 図でも示したように出屋敷、藤阪南、藤阪東、交北城ノ山、田口中島、津田トッパナ、渚院、星丘、星丘西、村野南、鷹塚山、山之上天堂、茄子作遺跡等多数の古墳時代初頭～前期の遺跡が確認できる。しかし多くが比較的短期間で出現と消滅の認められる集落で、淀川右岸地域で確認できたような遺構・遺物面からの遺跡間格差がほとんどない。他地域系土器（第 11 図）も招堤中町遺跡と森遺跡の他には、出屋敷遺跡で近江系（11- 1）、東海系（11- 2 a.b）、山陰系（11- 2 c）が、津田トッパナ遺跡で讃岐系大型壺（12）が、茄子作遺跡でも讃岐系大型壺が確認できるにすぎない。等質性、閉鎖性こそが北河内の地域性と考えられる。

2) 生駒西麓地域

弥生時代前期から中期にかけて、河内湖北東の低地部に雁屋遺跡、高宮八丁遺跡（中期中葉以降は太秦遺跡へ移動）、中垣内遺跡の拠点集落の展開が見られる。一方、河内湖東岸に沿う生駒西麓でも一定の距離を持ちながら中河内地域の東大阪市に向かって集落が一定の距離で確認でき弥生中期集落間のネットワークと理解されている。それが弥生時代後期には以下の状況を呈して確認できなくなる。太秦遺跡は V 様式後半まで継続、雁屋遺跡は遺跡内で移動しつつ V 様式終末まで継続するが庄内期は途絶、中垣内遺跡は IV 様式で消滅する、等である。

庄内～布留初頭の集落状況は不明瞭である。寝屋川市小路遺跡、同 長保寺遺跡、四條畷市部屋北遺跡、同 北新町遺跡等で土器が出土しているにすぎず、集落遺跡の展開は不活発である。他地域系土器（第 11 図）は、長保寺遺跡の自然河川で古い吉備系と考えられる甕（15- 1 a）と中河内系（15- 1 b）が確認できるにすぎない。

3) 淀川左岸低地

弥生時代に中核となる集落は、未確認である。弥生前期に大阪市茨田安田遺跡が、中期に守口市八雲遺跡、門真市古川遺跡、同 普賢寺遺跡、大阪市森小路遺跡、大東市西諸福遺跡が、後期前半に寝屋川市楠遺跡、同 池田西遺跡、同 高柳遺跡が知られるが小規模・短期間に営まれた。弥生時代後期中頃～古墳時代前期の遺跡は未確認である。他地域系（第 11 図）は、高宮廃寺遺跡の山陰系甕（16）が確認できるにすぎない。

以上のように、北河内地域における三小地域での集落遺跡の展開は、不均衡である。生駒西麓と淀川左岸低地地域は、当該期の遺跡自体がほとんど確認できない。とりわけ生駒

西麓地域では、弥生時代における雁屋遺跡の存在によって達成されたであろう社会的な発展が、次段階の地域発展に全く引き継がれていないことが確認できる。両地域が急激な発展を示すのは古墳時代中期である。

いっぽう枚方・交野台地は、弥生時代後期後半以降、庄内期と布留期の集落遺跡の展開が確認できる。しかし、東部摂津地域に存在するような、物流拠点としての性格を有する遺跡は未確認であるし、全体を見ても他地域系土器の搬入自体が少ない。物資の流通面からみれば、南河内地域と共に極めて閉鎖性の強い社会であったと想定できる。

4 淀川流域の状況について

淀川流域の弥生時代から古墳時代初頭・前期の社会の動行は、以下のとおりになる。

(1) 弥生時代前・中期 淀川右岸では、桧尾川流域に安満遺跡、茨木川流域に東奈良遺跡が、同左岸の生駒西麓地域では雁屋遺跡、高宮八丁遺跡と太秦遺跡を拠点集落とした遺跡群の活発な展開が確認できる。時期の経過にしたがって遺跡数が増加する。枚方・交野台地でも同じく多数の遺跡が成立する。なお淀川左岸低地での状況は不明瞭である。

(2) 弥生時代後期前半 安満遺跡では前半には遺構・遺物は確認できなくなる。東奈良遺跡は継続するものの衰退傾向がうかがえる。雁屋遺跡は地点をかえて継続、盛行する。以上のように後期前半で中期までの集落間関係は大きく変化する。新たな遺跡が出現するが、小規模であることが多い。安満遺跡の背後に集住型高地性集落である古曾部・芝谷遺跡、芥川流域に芥川遺跡、安威川流域に溝咋遺跡も出現するが、この三遺跡では多数の他地域系土器が出土する。ただし三遺跡ともに後期後半には断絶する。枚方・交野台地は一部に高地性集落が出現するも、衰退傾向が認められる。淀川左岸低地については、集落の動向はやはり不明瞭である。

(3) 弥生時代後期後半～庄内期前半 本段階から出現する遺跡は多い。大阪平野北端地域はこの時期からの開発が目立つし、東部摂津地域、淀川左岸の枚方・交野台地でも多数の遺跡が確認できる。淀川右岸では、桧尾川流域の安満遺跡から芥川流域の郡家川西遺跡へ、茨木川流域の東奈良遺跡から安威川流域の溝咋遺跡へと河川流域を替え、遺跡自体も変動をともなって拠点が移動する。同様の状況は中河内地域でも確認できる。招堤中町遺跡もこの庄内期前半の中で出現する。本段階での他地域系の搬入はほとんど見られない。なお、生駒西麓、淀川左岸低地では、集落遺跡はほとんど確認できない。

(4) 庄内期後半～布留期前半 庄内期前半に成立した遺跡の安定期である。淀川右岸で

は、特定の遺跡に集中して他地域系土器の搬入が急増する。前段階で新たに出現した郡家川西遺跡と溝咋遺跡に多数の搬入が確認でき、弥生時代の拠点集落であった安満遺跡と東奈良遺跡でも一定量の他地域系が出土する。いっぽう淀川左岸では、枚方・交野台地で複数の集落遺跡の展開がみられるも、遺跡間に格差は見出しにくい。他地域系も少なく、招堤中町遺跡にのみ数点の中河内系庄内甕が出土する。生駒西麓と淀川左岸低地では、やはり遺跡自体がほとんど確認できない。

(5) 布留期後半 前段階で盛行した郡家川西遺跡と溝咋遺跡は急激に衰退し、替わって安威川流域では安威遺跡が出現する。本稿では安威遺跡の紹介にとどめたが、本段階で出現する遺跡は多い。河内湖東岸・北岸に位置する生駒西麓、淀川左岸低地でも急激な遺跡数の増加の認められる。

(6) 古墳時代初頭期 淀川右岸と左岸の状況¹⁵⁾は全く異なる。左岸では明確な中核となる遺跡が確認できず、他地域との流通がほとんど見い出すことができず、いわゆる「伝統的第Ⅴ様式」的社會に埋没した状況である。一方右岸では郡家川西遺跡と安満遺跡、溝咋遺跡と東奈良遺跡に集中的に他地域系土器が出土しており、特に溝咋、郡家川西の二遺跡は著しい。これらの遺跡は、淀川流域の流通における拠点的な性格を有し、瀬戸内諸地域と、山城、近江をつなぐ役割を果たしたと考えられる。ところで他地域系の集中する四遺跡の内容にも差異がある。若干の中河内系を含むも、多量の西日本諸地域系と少量の東日本系が搬入される郡家川西遺跡と溝咋遺跡、他地域系の半数が中河内系庄内甕で占められる安満遺跡と東奈良遺跡の二者である。この差異は、旧拠点集落と新拠点集落の差につながるようである。

(7) 淀川右岸の他地域系 吉備、讃岐、阿波、山陰系等の西日本諸地域が主体で、一定数の近江、東海系の東方からの搬入も認められる。中河内系庄内甕も多い。中河内地域と比較すれば西日本諸地域系が主体を占めるの



図11 大阪府の古墳時代前期吉備系土器
(註19を改変。大丸は5点以上)

は同じであるが、吉備系が極端に少なく、山陰系の割合が高い。近江系が一定量入ることも特徴である。淀川が近江とつながることから当然なのであるが、中・南河内での近江系は微量であり、旧大和川には流れ込まないことがわかる。吉備系¹⁶⁾の少なさも以外で、瀬戸内から河内湖に入り旧大和川に流れることが主体で、淀川には向かわない。

(8) 古墳時代前期集落の衰退 溝咋遺跡等が急激に衰退する頃、安威遺跡が出現する。府下他地域で布留後半段階に出現する遺跡の代表的なものとして、北河内の蔀屋北遺跡、中河内の大県遺跡、南河内の津堂遺跡、和泉北部地域の浅香山遺跡、和泉南部地域の大園遺跡などがある。これらは庄内期初頭～布留期前半の集落ネットワークが崩壊した後に、全く別地点に成立する5世紀代の集落遺跡の先駆けである。河内湖西岸・北岸の地域も、急激な遺跡数の増加と韓式系土器の激増する地域でもある。庄内期初頭の集落変動にみられたと同様に、古墳時代中期社会への巨大な画期であり、面的に進行する。

5 まとめ

今回の検討によって、淀川流域の流通拠点的な性格を有する集落遺跡が明確になった。これらは単独で存在し得るものではなく、周辺地域と連動して広範な流通ネットワークの一部を構成する。他地域系土器の出土が多い事を流通拠点の基準にすれば、西日本諸地域からの流れに対する淀川への起点は、吹田市垂水南遺跡¹⁷⁾と大阪市崇禅寺遺跡になる。そして淀川を遡り山城地域¹⁸⁾に入れば、木津川流域では八幡市木津川河床遺跡、桂川流域では京都市水垂遺跡、さらに宇治川を遡り近江地域¹⁹⁾に入れば守山市下長遺跡、能登川町斗西遺跡、近江町法勝寺・顔戸遺跡群など、同じ傾向を示す遺跡を上げることができる。ちなみに、西日本諸地域の土器は、湖北地域から東国の美濃・尾張地域へは入らず、このネットワーク上での西からの流れの東限を示すことができる。

ところで淀川流域から近江地域にいたる物流拠点では、中河内地域で確認できたような遺跡の密集状況は呈さない。中河内の中田遺跡群と類似する遺跡の密集状況は、奈良盆地東南部と岡山県の足守川流域、福岡県の比恵・那珂遺跡群で確認できるのみである。筆者は、これらを「港市」と想定し、密集度・面積の広さは遺跡のランクを示すと考えており、旧大和川を介しての物流の重要性を示すと想定している。

以上の集落動向から北河内は取り残された。いわゆる「伝統的Ⅴ様式」の地域として位置付けられるが、この地域にも小規模ながら拠点は存在しえたようだ。本稿では北河内地域での招堤中町遺跡の位置付けについて記載した。述べたように招堤中町遺跡では一定

量の中河内系庄内甕が出土しており、北河内では唯一の状況である。ところで、同様の状況を示す遺跡は他地域でも確認できる。すなわち南河内地域では羽曳野市尺度遺跡、富田林市柿ヶ坪遺跡、和泉地域では堺市四ツ池遺跡、同 小阪遺跡、和泉市池上曾根遺跡、岸和田市土生遺跡などである。一定量の他地域系の半数以上が中河内系庄内甕で占められることからすれば、安満遺跡と東奈良遺跡も同じ類型に属することになる。重要なことはこの内、尺度遺跡²⁰⁾で庄内期新相の一辺約50mの方形居館が確認され、南河内石川流域における一拠点として位置付けうることである。それを根拠に、招堤中町遺跡を含めこれら諸遺跡は各小地域内の拠点集落の一つになりうる可能性が強いと考えている。将来の調査進展による解明に期待したい。

古墳時代初頭期集落と古墳の対応が推定できる場合がある。芥川流域では、郡家川西遺跡とその上流に造営された弁天山古墳群の関係が強いと考える。弁天山古墳群の場合、A1号墳→B1号墳→C1号墳と推移しており、最も新しいC1号墳が前方部粘土槨棺外出土の小型丸底壺と布留式甕から布留2式に位置付けられている²¹⁾。遺跡の継続期間と古墳群の造営時期の一致することから、被葬者が郡家川西遺跡の首長層の可能性は高いと考えたい。また、森遺跡とその背後の尾根高所の鍋塚古墳、および森古墳群の関係も強いと考える。古墳群は、古墳時代前期を通して築造された4～5基の前方後円墳²²⁾を主体にし、古墳の築造時期は森遺跡と同時期であることから、造営母体としての可能性は高い。またすでに森田克行氏は、安威川流域の安威遺跡と安威1号墳、茨木川流域の宿久庄遺跡と將軍山古墳の対応を述べ、茨木川流域の郡・倍賀遺跡と紫金山古墳の対応も示唆されており、その可能性は高いと考えたい。以上の集落と古墳との対応関係は、流通機能を有する集落の地域内での優位性を示していると理解できるのである。

註

- 1 森岡氏はほぼ同様の視点で摂津全域の分析を行っている（a. 森岡秀人「摂津における土器交流拠点の性格」『庄内式土器研究』21 庄内式土器研究会 1999）。また、浜野氏等は摂津全域の遺跡内容についての分析を行っている（b. 森岡秀人・中井秀樹・浜野俊一「庄内式併行土器の様相をめぐる摂津地域の動向」『庄内式土器研究』12 庄内式土器研究会 1996）。
- 2 清水真一「因幡・伯耆における庄内式併行期の土器」『庄内式土器研究』8 庄内式土器研究会 1994
- 3 久保哲正「木津川河床遺跡採取の土器（I）」『山城郷土資料館報』第15号 京都府立山城郷土資料館 1998。
- 4 米田氏の河内型庄内甕の分類による（米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器」『考古学論集』考古学を学ぶ会 1985）。ただし筆者は米田氏の庄内期IVは布留期初頭と考えるので、本文ではそのように記載した。また生駒西麓産胎土使用の河内型庄内甕を他地域系との整合性をとるために、中河内系庄内甕と記載した。
- 5 宮崎康雄「淀川北岸の弥生集落—三島地域を中心に—」『みずほ』第32号 大和弥生文化の会 2000。
- 6 合田幸美「溝咋遺跡出土の他地域系土器について」『溝咋遺跡（その1・2）』（財）大阪府文化財調査研究センター 2000。
- 7 赤塚次郎「V考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1990。
- 8 西口陽一氏より、同地域の將軍山古墳の竪穴式石室板石は、阿波産との教示を得た。
- 9 畑 鴨子「第8項 まとめ」『河内平野遺跡群の動態IV』（財）大阪府文化財調査研究センター 1998。この時期、同種の大壺は讃岐ばかりでなく、山陰、北近畿、西部瀬戸内、阿波でも造っており、それらが近畿で多数出土する。土器棺が多い。
- 10 註5による。ただし報告資料は少ない。例えば大溝SR01中層出土資料（茨木市教育委員会『倍賀遺跡発掘調査概要報告書』1993）には、多量の庄内式～布留期初頭、布留期後半の土器がある。また最下層は弥生時代中期から弥生時代後期後半である。
- 11 大阪府教育委員会『安威遺跡』2000。発掘調査は、遺跡の立地する段丘上に南北方向のトレンチを入れたことになった。竪穴住居はすべて主柱穴が未検出で、住居の壁外側に多数の木杭が打ち込まれていることから、壁立ち住居と想定される。18棟から作り付けカマドが検出されており、本来ほとんどの竪穴住居にカマドが設置されていたと考えられる。注目される遺物として初期須恵器、陶質土器、瓦質土器、軟質韓式系土器、フイゴ羽口1、椀形鍛冶滓4、管玉（緑色凝灰岩1、滑石2）等がある。胎土分析の結果、陶邑周辺産が大部分ながら、伽耶産、産地不明のものが含まれる。また韓式系は、朝鮮半島南部（伽耶東部）的な形態を有する。

- 12 浜田延充「北河内地域における弥生時代遺跡群の動態」『市史紀要』第8号 寝屋川市教育委員会 2001
- 13 枚方・交野台地の弥生時代～古墳時代前期の動向について述べたものに、西田敏秀・荒木幸治「淀川左岸地域における弥生集落の動向」『みずほ』32号 大和弥生文化の会 2000、西田敏秀「枚方台地における古墳時代前期集落の展開」『研究紀要』第1集(財)枚方市文化財研究調査会 1984がある。
- 14 同様の状況は、出屋敷遺跡でも確認できる。第3次調査SH3の出土遺物には、若干の他地域系と横方向の極細ヘラミガキ技法が確認できる((財)枚方市文化財研究調査会『出屋敷遺跡Ⅱ 調査概要報告』1986)。
- 15 森岡氏は弥生時代から古墳時代前期の淀川右岸と左岸の地域差を述べている(森岡秀人「弥生集落研究の新動向(Ⅲ)」『みずほ』第32号 大和弥生文化の会 2000)。
- 16 秋山氏は近畿の古墳時代初頭・前期における吉備系土器を集成し分析している(秋山浩三他「近畿における吉備系甕の分布とその評価」『古代吉備』第22集 2000)。
- 17 米田文孝「搬入された古式土師器」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』関西大学 1983
- 18 国下多美樹「乙訓地域における土器交流拠点」『庄内式土器研究』20 庄内式土器研究会 1999
- 19 宮崎幹也「近江における土器交流拠点」『庄内式土器研究』20 庄内式土器研究会 1999。なお、「法勝寺・顔戸遺跡群」の名称は本文献による。
- 20 (財)大阪府文化財調査研究センター『尺度遺跡Ⅰ』1999
- 21 米田敏幸「畿内における前半期古墳の土器年代についての予察」『考古学論集』第四冊 考古学を学ぶ会 1992
- 22 海辺博史・玉井みゆき・柳本照男「交野市森第1号古墳採集資料の検討」『あまのともしび』原口正三先生の古稀を祝う集い事務局 2000
- 23 森田克行「第3節 古墳時代の三島と新池遺跡」『新池』高槻市教育委員会 1993

表1 淀川流域の他地域系土器一覧

遺跡番号	遺構番号	遺跡名	所在地	遺構等	時期	吉備	讃岐	阿波	山陰	河内	他西日本	大和	近江	北陸	東海	他東日本	文献
1	1	上牧遺跡	高槻市上牧町	包含層	——				壺2、甕、 鼓器台3		壺						1
2	1	安満遺跡	高槻市高垣町他	井戸1	庄内新相					庄内甕							2
	2	安満遺跡	高槻市高垣町他	井戸1	——			壺									3
	3	安満遺跡	高槻市高垣町他	北9地区包含層	——	甕											4
	4	安満遺跡	高槻市高垣町他	包含層	——			壺2	壺	庄内甕4							5
	5	安満遺跡	高槻市高垣町他	井戸1	庄内中頃		壺?			庄内甕3							5
	6	安満遺跡	高槻市高垣町他	井戸2	庄内新相					庄内甕							5
	7	安満遺跡	高槻市高垣町他	土坑1	庄内中頃					庄内甕							5
	8	安満遺跡	高槻市高垣町他	井戸3	布留中頃			壺									5
	9	安満遺跡	高槻市高垣町他	東1-H地区落込み	布留新相		壺?										6
	10	安満遺跡	高槻市高垣町他	井戸7	布留古相					庄内甕							6
3	1	芥川遺跡	高槻市紫町	溝7	後期終末～庄内										壺		7
	2	芥川遺跡	高槻市紫町	溝8	——		壺										7
	3	芥川遺跡	高槻市紫町	南大溝北部	——				壺、甕		北近畿 甕2						7
	4	芥川遺跡	高槻市紫町	土坑5	布留初頭				甕								7
4	1	郡家今城遺跡	高槻市郡家新町	土坑墓19	庄内新相					庄内甕							8
5	1	郡家川西遺跡	高槻市清福寺町	7・A・B地区整地層	——				鼓形器台								9
	2	郡家川西遺跡	高槻市清福寺町	住所跡12	庄内新相						九州系鉢	庄内甕					10
	3	郡家川西遺跡	高槻市清福寺町	38-K区方形周溝墓2	——		大型壺2			庄内甕							11
	4	郡家川西遺跡	高槻市清福寺町	57-M地区	——								甕				11
	5	郡家川西遺跡	高槻市清福寺町	27-D地区	——			壺									12
	6	郡家川西遺跡	高槻市清福寺町	F・G・J区暗褐色土	——				鼓形器台								13
	7	郡家川西遺跡	高槻市清福寺町	F・G・J区3号住居	布留古相										伊勢壺?		13
6	1	新池遺跡	高槻市上土室	沼沢地	布留古相				甕								14
7	1	溝咋遺跡	茨木市学園前	3B区6層	——		大型壺										15
	2	溝咋遺跡	茨木市学園前	3B区7層	——		大型壺										15
	3	溝咋遺跡	茨木市学園前	3B区溝2	庄内新相		大型壺										15
	4	溝咋遺跡	茨木市学園前	3B区溝13	庄内新相				鼓形器台		大型壺						15
	5	溝咋遺跡	茨木市学園前	3D区河川2中層	布留新相						大型壺						15
	6	溝咋遺跡	茨木市学園前	3D区河川2下層	——				甕2、鉢2		大型壺						15
	7	溝咋遺跡	茨木市学園前	4次溝7	——			壺									15
	8	溝咋遺跡	茨木市学園前	A区7層	——		大型壺2	甕									16
	9	溝咋遺跡	茨木市学園前	A区8層	——				鉢	庄内甕3			高杯		小型器台		16
	10	溝咋遺跡	茨木市学園前	6面溝	——	庄内甕											16
	11	溝咋遺跡	茨木市学園前	A区7面溝120	布留古相	壺2	庄内甕										16

遺跡番号	遺構番号	遺跡名	所在地	遺構等	時期	吉備	讃岐	阿波	山陰	河内	他西日本	大和	近江	北陸	東海	他東日本	文献
	12	溝咋遺跡	茨木市学園前	A区7面溝120砂層	布留古相	甕											16
	13	溝咋遺跡	茨木市学園前	A区7面土坑133	布留古相				甕、壺		北近畿甕				壺		16
	14	溝咋遺跡	茨木市学園前	A区7面土坑134	布留古相			甕	甕								16
	15	溝咋遺跡	茨木市学園前	A区8面溝123	庄内新相								高杯2				16
	16	溝咋遺跡	茨木市学園前	2A-1区3層	布留古相				鼓形器台								16
	17	溝咋遺跡	茨木市学園前	2A-1区3面溝120	——					庄内甕							16
	18	溝咋遺跡	茨木市学園前	2A-1区3面溝123	布留古相			鉢					甕		S字甕2		16
	19	溝咋遺跡	茨木市学園前	2A-2区6層	庄内新相～布留古相				鼓形器台、 甕2		北近畿甕						16
	20	溝咋遺跡	茨木市学園前	2A-2区10層	——			甕									16
	21	溝咋遺跡	茨木市学園前	2A-2区6面溝120	——			壺3	壺4、鼓形器台2、鉢	庄内甕3	大型壺、 壺2		甕6		S字甕、 小型器台	壺	16
	22	溝咋遺跡	茨木市学園前	2A-2区6面溝120砂層	——	甕	大型壺	壺2、甕	鼓形器台2、 壺	庄内甕5	壺3、北近畿甕、 庄内播磨		甕	壺		壺	16
	23	溝咋遺跡	茨木市学園前	2A-2区6面土坑84	——				大型甕								16
	24	溝咋遺跡	茨木市学園前	2A-2区6面土坑129	——				大型甕								16
	25	溝咋遺跡	茨木市学園前	2A-2区6面土坑165	——			壺									16
8	1	新庄遺跡	茨木市新庄町	SE114	庄内新相					庄内甕							17
9	1	東奈良遺跡	茨木市東奈良	溝I-S	布留古相			壺									18
	2	東奈良遺跡	茨木市東奈良	P-15	布留古相	甕											18
	3	東奈良遺跡	茨木市東奈良	溝II・3	布留初頭				大型鼓形器台	庄内甕7	甕2、壺		壺?	甕	S字甕		18
	4	東奈良遺跡	茨木市東奈良	SD-4013	布留古相		大型壺		壺3、鉢								19
	5	東奈良遺跡	茨木市東奈良	88-6溝1	庄内新相～布留初頭	甕			壺、鼓形器台	甕2							20
	6	東奈良遺跡	茨木市東奈良	88-10溝I・1上層	——				甕								20
	7	東奈良遺跡	茨木市東奈良	88-10包含層	——				鼓形器台								20
	8	東奈良遺跡	茨木市東奈良		——						播磨型庄内甕						21
10	1	招提中町遺跡	枚方東牧野町	SD4888	庄内新相					庄内甕7				甕			22
11	1	出屋敷遺跡	枚方市山田池南町	竪穴住居SH2	庄内新相								甕				23
	2	出屋敷遺跡	枚方市山田池南町	竪穴住居SH3	庄内新相				鼓形器台							二重口縁壺2	23
12	1	津田トッパナ遺跡	枚方市津田北町	不明	布留古相		大型壺?										24
13	1	茄子作遺跡	枚方市茄子作	方形周溝墓	——		大型壺										25
14	1	森遺跡	交野市森南	F調査区包含層	——				鼓形器台								26
	2	森遺跡	交野市森南	溝1	——					庄内甕			甕				27
15	1	長保寺遺跡	寝屋川市昭栄町	第4遺構面自然河川	——	甕				庄内甕							28
16	1	高宮廃寺	寝屋川市高宮	第2トレ黒色粘質土	——				甕								29
17	1	雁屋遺跡	四條畷市	円形周溝墓	弥生後期終末				低脚杯		丹後鉢						30

表1 文献

- 1 高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』1980
- 2 高槻市教育委員会『嶋上遺跡群 22』1998
- 3 高槻市教育委員会『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・13』1989
- 4 高槻市教育委員会『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・11』1987
- 5 高槻市教育委員会『安満遺跡発掘調査報告書－9地区の調査－』1977
- 6 高槻市教育委員会『安満遺跡発掘調査報告書－中世集落跡の調査－』1974
- 7 高槻市教育委員会『芥川遺跡発掘調査報告書』1995
- 8 高槻市教育委員会『嶋上遺跡群 17』1993
- 9 大阪府教育委員会『嶋上郡衙跡発掘調査概要・IV』1974
- 10 高槻市教育委員会『嶋上郡衙跡発掘調査概要・4』1980
- 11 大阪府教育委員会『嶋上郡衙跡発掘調査概要・III』1973
- 12 大阪府教育委員会『嶋上郡衙跡発掘調査概要・II』1972
- 13 高槻市教育委員会『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・10』1986
- 14 高槻市教育委員会『新池』1993
- 15 (財)大阪府文化財調査研究センター『溝咋遺跡(その3・4)』2000
- 16 (財)大阪府文化財調査研究センター『溝咋遺跡(その1・2)』2000
- 17 大阪府教育委員会『新庄遺跡』1996
- 18 東奈良遺跡調査会『東奈良 発掘調査概要 I』1976
- 19 大阪府教育委員会『東奈良遺跡発掘調査概要・II』1990
- 20 茨木市教育委員会『平成元年度発掘調査概報』1990
- 21 浜野俊一他「庄内式並行土器の様相をめぐる摂津地域の動向」『庄内式土器研究 12』1996
- 22 大阪府教育委員会『招堤中町遺跡』2002
- 23 (財)枚方市文化財研究調査会『出屋敷遺跡II』1986
- 24 (財)枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報VII』1986
- 25 未報告
- 26 交野市教育委員会『森遺跡III』1991
- 27 交野市教育委員会『森遺跡V』1997
- 28 寝屋川市教育委員会『長保寺遺跡』1993
- 29 寝屋川市教育委員会『高宮廃寺』1995
- 30 未報告

第3節 南河内、石川流域における弥生時代後期から古墳時代初頭社会の特質

1 はじめに

弥生時代から古墳時代への変化の中で、社会は大きく変質する。その変化は、地域によって若干の時期的なズレ、あるいは内容・程度の差を含みながらも、多くの地域で確認できる。本章第1節では、中河内における古墳時代初頭期の集落遺跡の動向から、韓半島から瀬戸内の諸地域を経て大和にいたる広域流通ネットワークに果たした旧大和川とその流域に立地した諸遺跡の位置付けを行った。本節ではその旧大和川最大の支流である、石川流域に展開する南河内地域での遺跡の動向とその内容について検討する。それによって、流通ネットワークから離れた周辺地域の実態とを示すとともに、弥生時代には認められない地域間格差が、至近距離にある中河内と南河内の間にさえ生じていることを示す。

2 旧大和川と石川

本論に入る前に、地理的な面から大阪平野部と石川流域について説明する。

まず大阪平野の状況について。この平野は中河内地域の中心部にあり、東西を上町台地と生駒山地、南北を河内湖と羽曳野丘陵に挟まれている。ここでは弥生時代から古墳時代にかけて、今とは全く異なった地理的な状況が見られた。まず大和川の旧流路が、平野中央部で頻繁に位置を変えながら北流していたことである。現在の大和川は柏原市から西の堺市に流れが固定されているが、これは江戸時代宝永元年（1704）の付替え工事以後の姿であり、それ以前は船橋遺跡東方あたりからいく筋かに分かれて北西方向に流れていたのである。この過去の流れは、現在の長瀬川・玉串川・楠根川・恩智川・平野川などの前身で、それらを総称して「旧大和川」と呼ぶ。2点目は、平野北方に河内湖が存在したことである。大阪平野自体かつては大阪湾の内湾であり、旧大和川や淀川の沖積作用によって陸地化したものであり、その過程で河内湾から潟、湖、平野に変遷する。当時、河内湖は淡水湖となり、その水は上町台地北方に形成された砂洲と吹田市域の間から大阪湾に流出していたと考えられている。つまり河内湖を介して、瀬戸内の諸地域と大阪平野中央部が直接に通じていたのである。

次に石川流域の状況について。石川は旧大和川最大の支流であり、羽曳野丘陵と金剛山

地の間を北流し、船橋遺跡の東部で生駒山地南端から大阪平野に流れ出てきた大和川と合流する。沿岸の沖積低地は大変狭く、上位から下位の河岸段丘が発達している。今回あつかう石川東岸は、段丘の間をぬって石川に流れ込む小河川によって、独立した丘陵を単位とした小地域区分が明瞭なことも大きな特徴になる。

3 石川流域に立地する諸遺跡の動向

近年の発掘調査によって、石川流域の弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡の動向が明らかになりつつある¹⁾。弥生時代後期、庄内期、布留期の遺跡の分布と動向をまとめたのが第1・2図である。

遺跡の分布をみると、弥生時代後期以降になって中期末までほとんど皆無であった石川東岸の丘陵上に多数の集落が出現する。これは石川西岸に多数存在した中期遺跡の消滅と機を一にした状況で、西岸から東岸への人々の移住による。東岸は沖積部が大変少なく、丘陵の間を縫っていくつかの支流が石川に流れ込むが、それによって分断された丘陵上に後期以降の遺跡が立地する。現状ではこれらの丘陵を1グループとしておくことが適当である。ただしすべてのグループの状況が判明しているのでもなく、本稿では比較的全体的な状況がつかめる千早川、宇奈田川、佐備川流域に限定して検討する。

a) 西大寺山遺跡 (10)・寛弘寺遺跡 (11) 千早川と宇奈田川に挟まれた低丘陵上に営まれた集落遺跡で、標高 75 ~ 116 m、比

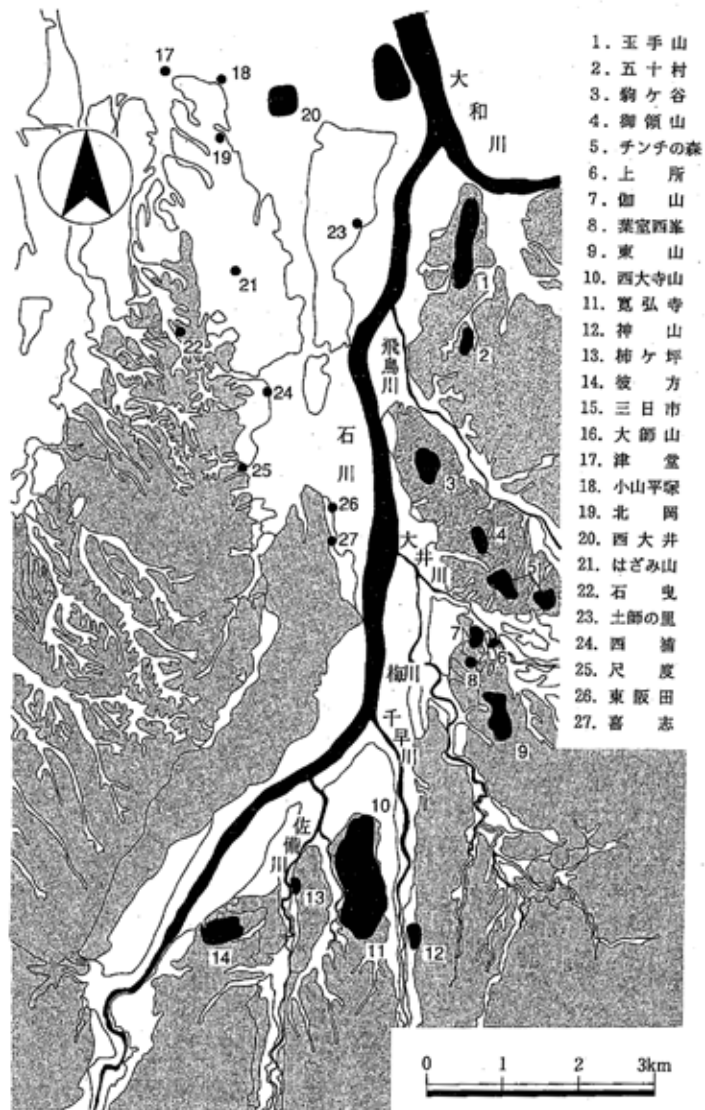


図1 弥生時代後期～古墳時代前期遺跡の遺跡分布

No	遺跡名	所在地	時 期																備考	
			W	Y0	Y1	Y2	Y3	Y4	Y5	E0	E1	E2	E3	M0	M1	M2	M3	M4		継
1	玉手山	柏原市玉手町 他		■																丘陵
2	五十村	羽曳野市誉田			■															丘陵
3	駒ヶ谷	羽曳野市大黒、壺井		■																丘陵
4	御領山	羽曳野市通法寺 他		■																丘陵
5	チンチの森	南河内郡太子町太子		■																丘陵
6	上 所	南河内郡太子町春日						■												丘陵
7	伽 山	南河内郡太子町太子				■														丘陵
8	葉室西峯	南河内郡太子町葉室				■														丘陵
9	東 山	南河内郡河南町東山		■																丘陵
10	西大寺山	富田林市山中田					■										■			丘陵
11	寛弘寺	河南町寛弘寺 他	■																	丘陵
12	神 山	南河内郡河南町神山						■											■	
13	柿ヶ坪	富田林市佐備								■										
14	彼 方	富田林市彼方、楠風台							■											丘陵
15	三日市	河内長野市三日市町他	■																	
16	大 師 山	河内長野市三日市町						■												丘陵
17	津 堂	藤井寺市津堂 他																		
18	小山平塚	藤井寺市小山																	■	
19	北 岡	藤井寺市岡 他																		
20	西大井	藤井寺市西大井																		
21	はざみ山	藤井寺市野中 他																		
22	石 曳	羽曳野市埴生野 他						■												丘陵
23	土師の里	藤井寺市道明寺																		
24	西 浦	羽曳野市西浦																		
25	尺 度	羽曳野市尺度																		
26	東 阪 田	羽曳野市東阪田																		
27	喜 志	富田林市喜志町 他	■																	

図2 石川流域の遺跡変遷

高30m程度である。丘陵先端部は西大寺山遺跡として分離されているが、近年の調査では、希薄ながらも寛弘寺遺跡と同時期の竪穴住居が確認され同一遺跡と認識すべきである。弥生時代後期初頭には一部の独立丘陵に竪穴住居が出現する（図3参照）が、小規模である。そして後期前半の空白期間をはさんで、後期後半には丘陵の全域に拡大し巨大化する。なお庄内期以降については寛弘寺、西大寺山遺跡双方ともに遺構としては明確でないが、古墳周溝などに布留期初頭の遺物が入ることがあり、小規模集落が想定できる。なお西大寺山遺跡では、布留初頭の四国系の大型壺を使用した土器棺が出土している。

b) 神山遺跡 (12) 千早川東岸の河南台地と呼ばれる段丘面上、および扇状地に立地す

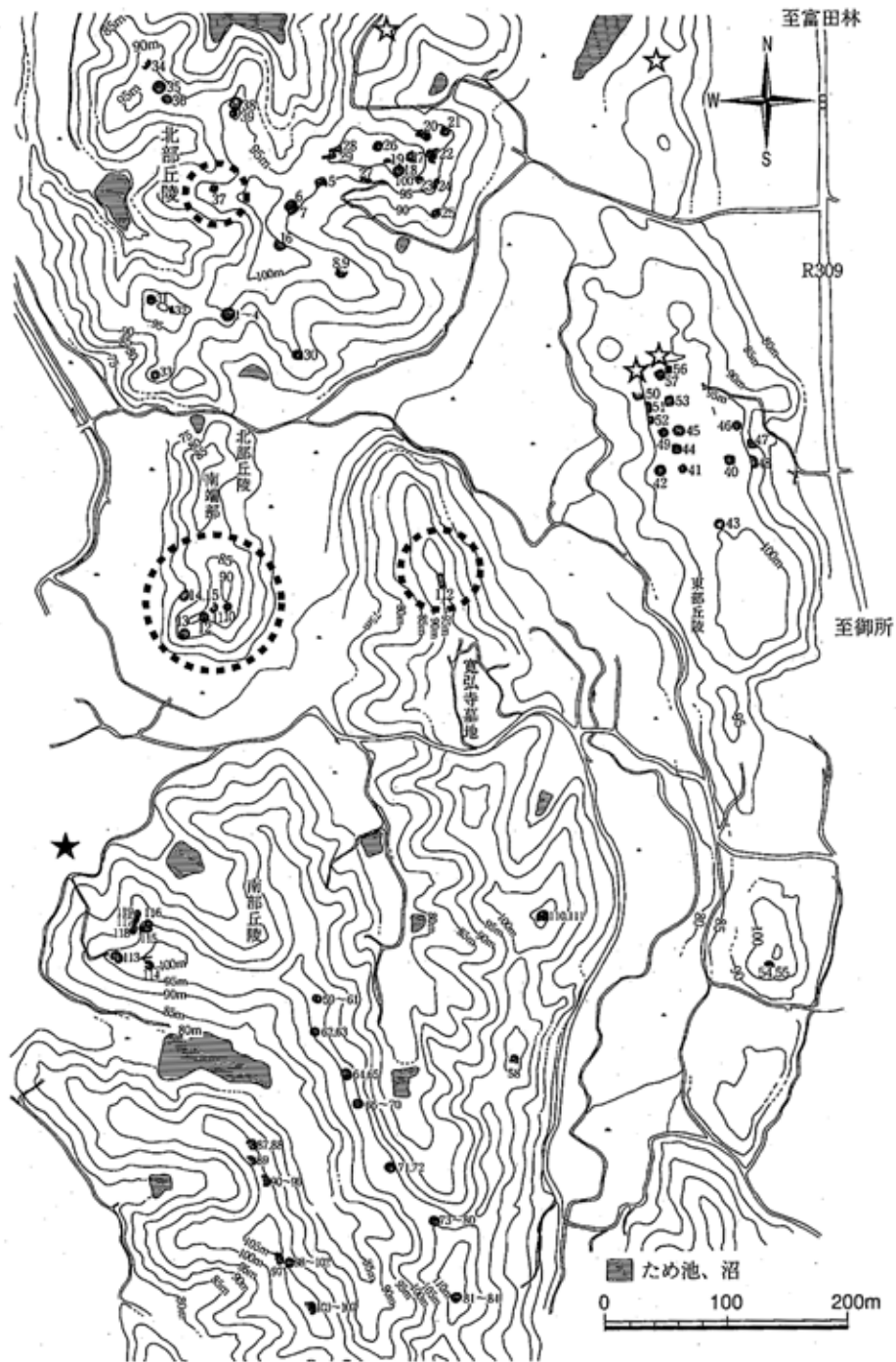


図3 寛弘寺遺跡の弥生時代竪穴住居他 分布図

(点線内は弥生後期初頭、他は後期後半。★は布留前半の遺構、☆は布留前半の遺物出土地。)

る。遺構としては溝（弥生後期末、初期須恵器段階）と竪穴住居（初期須恵器段階）が確認されており、特に前者からは多量の遺物が出土している。性格付けは難しいが、周辺に居住域を想定しておきたい。寛弘寺遺跡に隣接して営まれ、同じ時期の遺物も含みながらも、やや新しい時期が主体となる。寛弘寺遺跡からの移動も考えられる遺跡である。

c) 彼方遺跡 (14) 石川と佐備川に挟まれた中位段丘から丘陵上で、石川に面して立地

する。標高 90 m 前後、比高 25 ～ 35 m 程度であるが、現地を立てば北西方向、石川流域をみはらすことができる。未報告ながら、溝、土坑、ピットの他、30 棟以上の竪穴住居が検出されており、居住域であったことがわかる。出土土器によって、弥生時代後期中頃（V－3 期）から古墳時代初頭の継続期間があり、主体は V 期末から庄内期初頭にある。なお、遺物は石川に面する丘陵上で近鉄滝谷不動駅あたりまで散布しており遺跡範囲は広大である。注目すべき遺物として、駿河地域の壺 1 点、水銀朱の精製に使用したと考えられる L 字状石杵（図 6－15）、鉄器（鉄斧 1、鉄鍬 2）がある。庄内期以降、中河内では西日本諸地域との流通が活発化するが、駿河地域との関わりを示すものは唯一である。また L 字状石杵も阿波や吉備の足守川流域には集中しても畿内での事例²⁾は少ない。いずれの遺物も広範囲の地域間交流の結果とはいえ、突発的な事例で位置付けは難しい。地域間交流の活発化する庄内期後半以降には南河内の拠点となることなく、遺跡自体も消滅する。

d) 柿ヶ坪遺跡 (13) 佐備川に面する低位段丘の西裾部に位置するが、遺構は落込みと不定形な土坑のみで、遺跡の性格付けは難しい。おそらく集落縁辺部であろうと考えられる。出土土器からは、庄内前半から布留中頃程度の継続期間である。また、庄内期末から布留期初頭にかけて若干の他地域の土器が確認できる。東阿波地域の壺、東部瀬戸内の大型壺が出土している。甕において、庄内期前半はすべて V 様式系のタタキ甕であったものが、庄内期後半には 14 点の河内型庄内甕が確認されていることも注目できる。総数が少ないことに問題はあるが、庄内期後半の甕の構成比率が、V 様式系タタキ甕 55%（11 点）、河内型庄内甕 45%（9 点）と報告されている。弥生時代後期以来の伝統的なタタキ甕を主体とする南河内にあって、多数の庄内甕を含む状況は唯一である。

今回は千早川、宇奈田川、佐備川流域の小地域に限定した遺跡について述べた。しかし図 2 に示された遺跡の動向は、地域による遺跡数の多少と丘陵によっては希薄化する段階の見られることを別にすれば、出現、消滅の時期に関して、大枠では石川東岸の各地域は類似したもの、と考えてよさそうである。たとえば V 期の高地性集落は石川東岸にあっては数多いが、どうやら初頭・前半と、後半に二つのピークのあることが読取れ、前者が小規模であるに対して、後者は大規模化する。さらに V 期末を最後に消滅することも同様である。また庄内期以降には小規模な高地性集落が消長をくり返すことも類似する。詳細については後述するが、検討した富田林市南部の状況が孤立したものではなく、石川東岸流域にあっては一般的な集落動向であることを確認しておきたい。

4 石川流域出土の他地域系土器

石川流域の諸遺跡を旧大和川と比較して、出土遺物の大きな差のひとつは、他地域から運ばれてきた土器が極端に少ないことである。このことは当時の流通の中心にあった旧大和川流域に合流する流れにありながらも、脇道に外れた石川流域の差を端的に示している。石川流域から出土した他地域系土器のほとんどすべてを図示すれば、図4の通りである。参考のため石川への入口にあたる藤井寺市域の事例も示した。

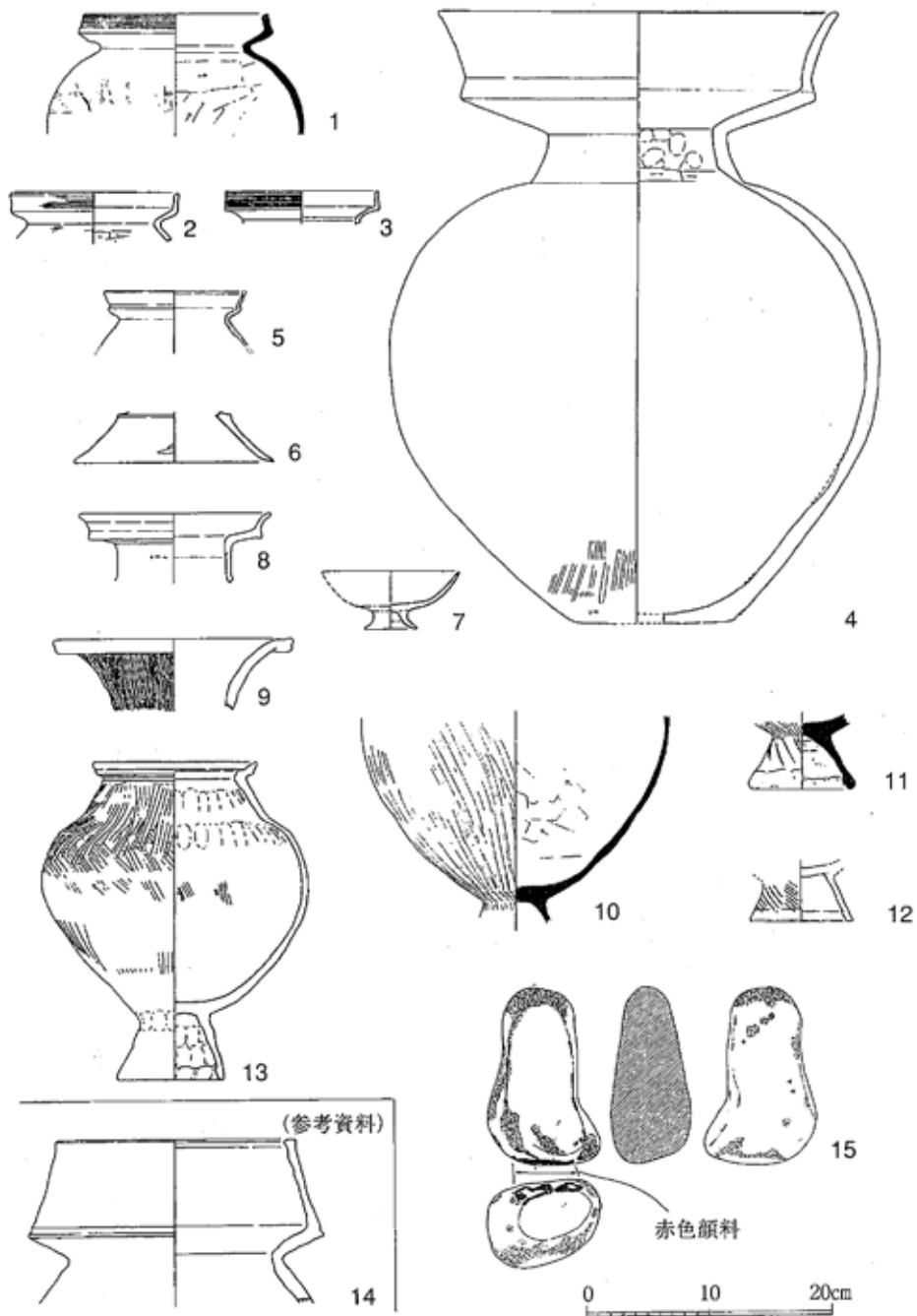
a) 吉備系土器 (図6-1~4) 藤井寺市西大井遺跡(1)、同野中宮山遺跡(3)、河内長野市三日市遺跡(2)で甕各1点、富田林市柿ヶ坪遺跡で吉備系と考えられる大型壺(4)1点がある。1~3は口縁部を上方に拡張させそこにクシ描き文を巡らせ、器壁が大変薄い吉備特有の甕である。時期は、形態から庄内後半~布留期初頭である。4は庄内期の落込みから出土した大型の壺で、土器棺にの可能性がある。吉備においても類似例は少なく一般的な形態ではないので、吉備を含むその周辺からの搬入と考えておく。なお中河内では、吉備系土器の搬入は多くの遺跡で確認でき、一般的である。

b) 山陰系土器 (5~7) 河南町寛弘寺遺跡(5)で甕、河内長野市三日市遺跡(6)で鼓形器台、藤井寺市はざみ山遺跡(7)で低脚杯各1点がある。山陰系土器の搬入も多くない。5は口縁部を上方に拡張させ、ヘラケズリによって器壁を薄く仕上げた山陰特有の甕である。6は「鼓」の形に似た、山陰地域に特有の器台で布留期初頭と考えられる。

c) 阿波系土器 (8) 富田林市柿ヶ坪遺跡(8)で壺1点がある。口縁部を上方に拡張し、そこに強いヨコナデを施すことが特徴的である。胎土に結晶片岩を含んでおり、阿波から運ばれたことを示している。庄内期後半の在地の土器と一緒に出土している。中河内では、吉備系に次いで事例の多い他地域系土器である。

d) 讃岐系土器 富田林市西大寺山遺跡で壺1点があるが、未報告のため八尾市八尾南遺跡の類似資料(14)を示した。大型の壺で土坑から単独で出土しており、土器棺に使用されたと考えられる。時期は、形態から布留初頭に位置付けられる。同種の讃岐系大型壺を土器棺とした事例は、近畿では兵庫県南部で多数確認できるが、それより東方では初例になる。同様の大型壺は中河内地域では一定数が出土し、近年、石川北端に立地する船橋遺跡では複数個体が出土している。なお讃岐系は器壁の薄い特有の甕が移動している。中河内には多いが、石川流域では未確認である。讃岐系は茶褐色をした特徴ある胎土でありながら、肉眼観察あるいは砂礫分析においては生駒西麓産胎土との区別がつかないので実態の把握が難しい土器である。

e) 駿河系土器 (9) 富田林市彼方遺跡で広口壺 1 点が出土した。口縁端部を下方に折返すことが特徴になる。駿河地域の編年では弥生時代後期の菊川式に位置付けられる。無文であることから菊川式の新しい段階と考えられ、弥生後期終末～庄内期初頭の在り土器と共伴することは矛盾しない。中河内地域では出土例がないものの、吹田市垂水南遺跡や纏向遺跡では事例がある。



西大井 (1・10・11)、野中宮山 (3)、はごみ山 (7)、林 (12)、小山平塚 (13)
 寛弘寺 (5)、柿ヶ坪 (4・8)、彼方 (9・15)、三日市 (2・6)、※八尾南の参考資料 (14)

図4 石川流域の他地域系土器他

f) 東海系土器 (10 ~ 13) S字状口縁台付甕 (以下、S字甕) が藤井寺市西大井遺跡 (10・11) で2点、同 林遺跡 (12) で1点、同 小山平塚遺跡 (13) で1点がある。今のところ、東海系は石川の入口部で見つかることはあっても、石川を遡らない。口縁部を「S」字状に屈曲させ、11・12のような台を付けるもので、外面の独特なハケ目調整と器壁を大変薄く仕上げることが特徴である。13は共伴遺物から布留2期に位置付けられるが、形態および砂礫分析から在地で東海系を真似て作ったものである。前3者は共に形態は新しく、S字甕としては最終末に近いものである。旧大和川流域においても、東海系は少数派であるが、この3例と同様の布留期でも新しい段階のものが、吹田市の垂水南遺跡や五反島遺跡で多数認められることと関連しよう。

旧大和川を介した広域流通ルートにのる遺跡では、他地域の土器の占める割合が大変高い。最盛期となる庄内期後半から布留期初頭では、吹田市垂水南遺跡で15%、桜井市纏向遺跡で15%以上とされている。以上は土器の形態による識別である。また、出土土器の胎土に含まれる砂礫から産地を認定する方法³⁾があるが、それによると柏原市船橋遺跡で約70%、八尾市東弓削遺跡 S D 1 が36%、同 久宝寺遺跡第1次調査約80%が遺跡の外から運び込まれた、とされている。分析方法の違いにもよるが、前者によったとしても、旧大和川流域では15%以上の高率で他地域の土器が普遍的に認められるのである。一方、石川流域では他地域系土器はほとんどが単独の出土、偶発的存在であって普遍的ではない。僅かに出土する吉備、山陰、阿波、讃岐系の西日本各地からの搬入品は、中河内では一般的である。また、東日本の駿河系、東海系も少ないとはいえ中河内でも出土する。ちなみに近年、中河内では播磨西部、北陸系も資料が増加しつつあるが、石川流域ではいまだ出土例がない。つまり、石川流域と中河内で出土する他地域の土器は、比率を別にするれば同じ地域からの搬入品で占められることになる。

南河内地域の閉鎖性は、生駒西麓産胎土の河内型庄内甕が少ないことにも現われる。唯一、河内型庄内甕を多く (甕のみで9点、45%) 保有する柿ヶ坪遺跡でさえ、中河内地域のみとのつながりに限られ、それ以上の広範な地域に対して門戸を開いていたわけではない。まして庄内期にあっても、弥生時代後期と同じ技術のタタキ甕を主体的に使用し続けた他の遺跡はなおさらである。庄内・布留式土器自体、広汎な地域間交流の結果、形成された土器様式と考えられるが、それらを土器様式を含まない石川流域は、地域間交流の不活発がその背景にあることは明らかであろう。以上のように考えれば、むしろ石川流域で散発的に認められる遠隔地の他地域系土器は、中河内地域との決して太くない、石川

を介してのつながりによってのみ存在しえたと考えるのが妥当であろう。

石川流域の弥生時代から古墳時代初頭期の社会の動向は以下のとおりになる。

1) 弥生時代前・中期 中期を最盛期として石川西岸の河岸段丘上に集落遺跡が展開するが、それらは中期後半をもって消滅する。後期には、東岸に多数の集落遺跡が出現しており、西岸から東岸への人の移動が考えられる。この移動によって西岸は全く無人化する急激な変化で、石川流域での最大の画期である。

2) 弥生時代後期初頭～前半 石川東岸において高地性集落が展開する段階で、数遺跡が確認できる。今のところ玉手山遺跡、駒ヶ谷遺跡、御領山遺跡、東山遺跡、寛弘寺遺跡でその段階の遺構が確認され、チンチの森遺跡 B 地点⁴⁾、彼方遺跡、伽山遺跡でも遺物が少し採集されている。寛弘寺遺跡で明らかのように、後期初頭には小規模の高地性集落が造営されたようである。なお西岸では皆無である。

3) 弥生時代後期後半 遺跡数は急激に増加し、しかも寛弘寺遺跡や東山遺跡はこの時期に大規模化する。駒ヶ谷遺跡、御領山遺跡、チンチの森遺跡、上所遺跡、伽山遺跡、葉室西峯遺跡、東山遺跡、西大寺山遺跡、寛弘寺遺跡、彼方遺跡がいきなり盛期をむかえており、さらに今後の調査で各遺跡間でも、当該期の遺跡が増加することは確実である。飛鳥川以南の丘陵上は、多数の遺跡が密集した状況が想定できる。なお、石川上流域で大師山遺跡、西岸でも石曳遺跡が確認できる。いずれもが高地性集落として把握できるが、庄内期初頭までには終息する。

4) 庄内期～布留期前半 遺跡は少なく、しかも小規模なものが短期間に消長を繰り返す。弥生時代には一般的な巨大な拠点集落と小規模な周辺集落のような関係は認められない。現状では、石川東岸北部には遺跡が確認されていない。東岸の地理的な条件にもよるのだろうが、後期段階と同様に高地性集落として認識できるものが多い。たとえば西大寺山遺跡、寛弘寺遺跡や伽山遺跡、上所遺跡などのかつての高地性集落でも微量の遺物が確認でき、小規模化した集落が営まれたようである。柿ヶ坪遺跡での河内型庄内甕は、本段階後半に中河内と交渉を持つ遺跡の存在したことを示す。

5) 布留期後半 布留中頃前後で消滅したり、新たに出現する遺跡が目立つ。中河内の集落の動向に連動した動きの可能性がある。小規模ながら、石川下流の西岸に再び遺跡が出現するようになる。この段階に東岸では遺跡が希薄になり、中心が再度西岸域に移動したと考えられる。

6) 弥生時代後期の石川流域東岸地域 高地性集落の時期として把握できる。ただし後期

の全期間に連続するのではなく、寛弘寺遺跡や東山遺跡が示すように、初頭と後半に画期がある。詳細にみれば、後期初頭の遺物は少量で、大部分は後期中頃から後半で、後者により大きなピークがある。また、彼方遺跡は庄内期初頭にピークをもつ高地性集落である。

7) 石川流域の後進性の背景 石川流域では、中河内平野部で確認できるような庄内期初頭から布留期前半における遺跡の大規模化、継続性は確認できない。中河内の状況は、視野を広げれば一地域の動向として理解すべきではなく、汎日本的な社会変化に連動したことは明らかである。そうすれば石川流域において、後期後半の高地性集落の消滅といった他地域と共通する画期は確認できても、庄内期の隔絶性が見いだせないのは、当該期の社会的変動、広域流通ネットワークの枠外に位置した地域でのあり方と考えられる。

8) 石川流域の他地域系土器 中河内と比較すれば、大地域との流通を示す他地域系土器が極端に少ない。わずかに確認できる遠隔地の資料も単発的で、石川流域の諸遺跡が恒常的かつ独自に他地域間と交流があったとは考えられない。むしろ石川を介しての中河内とのつながりによって持込まれたと考えられる。なお、本地域においては河内型庄内甕も他地域系土器である。庄内期後半に至って、柿ヶ坪遺跡に一定程度の河内型庄内甕が確認できる以外は、弥生時代後期以来の伝統的なタタキ甕を使用する。つまり、石川流域は土器様式に庄内甕や小型精製土器といった先進的なものは含まない地域である。

9) 石川西岸の状況 V期以降の状況を示すものとして、富田林市喜志遺跡で出土した小数のV期後半の遺物と、羽曳野市尺度遺跡で出土した庄内併行期の遺物がある⁵⁾にすぎない。極めて小規模な集落が散在したと考えたい。なお布留期後半になれば、遺構は不明瞭ながら、多くの遺物出土地点を確認できるようになる。

5 まとめ

石川流域における古墳時代初頭期・前期の集落は、弥生時代の集落とどのように違うのだろうか。また当該期中河内地域と比較してどのように異なるのだろうか。その点を述べてまとめとしたい。

弥生集落は水系を単位にした、まとまった地域圏に分散しており、これが社会を構成する自己完結的な最小単位となったとされている。また、その小地域圏内部は、中核となる拠点集落と、人口圧や新たな耕地獲得等の理由でそこから派生した子集落で構成されており、半径5 km程度の規模を有することが一般的とされている⁶⁾。弥生時代には、自然発生的なこういった状況が面的に広がると考えられている。この様な集落間の関係は、中河内

ではV期初頭には変質し、小規模集落の拡散する状況が生じ、庄内期以降に巨大な拠点集落が生じる。石川流域でもV期初頭の変化は中河内の変質とも連動したものであるが、庄内期になっても小規模集落の拡散する状況が継続することが大きく異なる。

中河内の場合、弥生集落と古墳時代初頭から形成される集落の位置が全く異なる。すなわち亀井、田井中、恩智遺跡等の拠点集落の範囲は、V期の内には放棄されるか、あるいは小規模な集落へと変質する。一方、石川流域ではそのV期の変化がより極端な状況で確認できる。すなわち、弥生中期までは石川西岸のみでの集落遺跡の展開であったものが、後期以降に石川西岸は無人化し、突如として東岸主体に激変するのである。そして庄内期、多くの集落遺跡が消滅あるいは規模縮小に向かい、中河内地域において現われた急激な変化が全く認められないのである。

次に物資の流通について。弥生時代においては、各地域の拠点集落間でのネットワークを通じて物資は流通した。さらに小地域内にあっても、拠点集落を介して地域内の周辺集落に流通したと考えられる。一方、古墳時代初頭期にあってもやはり各地域の拠点集落間でのネットワークを通じて物資は流通したと考えられる。しかし他地域系の土器を検討すれば、拠点集落間での物資の流通は確認できても、拠点集落から周辺小集落への物資の流れは極めて希薄であったことがわかる。拠点集落が地域の「顔」であった弥生時代とは明らかに異なる。石川流域の場合、地域の「顔」となるべき船橋遺跡との関連は、極めて弱かったことは述べたとおりである。後進性を意味する「伝統的V様式」の地域、遺跡とは、このような社会背景によって生じたのであろう。

かつて南河内地域は、極めて先進的な地域と考えられてきた。それは学史的にも著名な国府・船橋遺跡の存在、あるいは古墳時代前期の松岳山、玉手山古墳群や後の古墳時代中期に築造された古市古墳群の存在から形成されてきたのである。しかしながら、前者の国府遺跡の北端と船橋遺跡は、旧大和川流域の遺跡として、中河内地域の遺跡動向の中で位置付けるべきであることは第2章第1節に述べた通りであるし、後者の古墳群の造営母体は石川流域には存在しないことは明らかである。

中河内地域がなしえたように、流通ルートを把握することが発展の基盤のひとつとなるならば、石川流域にもより先進的な内容の遺跡が存在しえたはずである。なぜなら、石川は旧大和川の最大の支流であり、しかも中河内地域の平野部中央を流れる旧大和川とは一連の流れだからである。たとえば本稿で検討した、阿波や讃岐の土器は和歌山県の紀ノ川を遡り石川に入れば、最短距離で中河内あるいは大和盆地東南部に入ったはずである。し

かし遺物の分布から見るかぎり、紀ノ川から石川に入るルートは存在せず、瀬戸内から河内湖に入り旧大和川を遡るルートで移動したと考えざるを得ないのである。庄内期における石川流域の遺跡自体の変質の欠如、土器様式の後進性はこのような状況の下に形成されたと考えられる。おそらくは、人為的に設定された物流のルート上に立地したために著しい発展を示す旧大和川流域の遺跡と、それから一步外れたために大きく立ち遅れた石川流域の遺跡、古墳時代以降の社会は極めて偏った在り方をしたことがわかる。

註

- 1 石川流域の弥生遺跡の動向について述べたものに、玉井 功「石川流域の弥生集落一中・上流域を中心として」『花園史学』第8号 花園大学史学会 1987、禰宜田佳男「南河内の弥生時代と遺跡」『弥生時代の大阪湾沿岸』大阪経済法科大学出版部 1995、藤田道子「第3章 まとめ」『寛弘寺遺跡発掘調査概要・15』大阪府教育委員会 1996がある。
- 2 現状では畿内のL字状石杵は、V期初頭から古墳時代初頭に出土資料がある。V期初頭例は大阪府和泉市観音寺山遺跡と同 高槻市古曾部・芝谷遺跡、滋賀県新旭町熊野本遺跡、V期中頃は滋賀県守山市酒寺遺跡、古墳時代初頭例は大阪府茨木市溝咋遺跡、同 東大阪市池島・福万寺遺跡と滋賀県守山市五村遺跡がある。
- 3 奥田尚氏によって精力的に行なわれている。
- 4 鍋島隆宏「チンチの森遺跡採集の弥生式土器について」『館報』第2号 太子町立竹内街道歴史資料館 1996
- 5 両遺跡とも平成8年度の発掘資料による。なお尺度遺跡では、数棟の竪穴住居も確認されており、第7章で検討する。
- 6 酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』第三集 奈良大学文学部文化財学科 1984

脱稿以降、二つの資料の追加があるので記す。

1) 大阪府文化財調査研究センターにより、羽曳野市尺度遺跡の発掘調査がなされ、調査報告書が刊行された(大阪府文化財調査研究センター『尺度遺跡I』1999)。本遺跡では、庄内期後半のカマドを伴う竪穴住居を含む竪穴住居群、および同時期の方形区画とそれに囲まれた掘立柱建物群が確認された。後者からは、閉鎖的な石川流域にも居館を有する有力者の存在したことが判明した。また出土遺物には、若干の他地域からの搬入土器がある。

これらの状況から、卓越した首長居館と理解する研究者もある。しかしながら私は、一定程度出土する河内型庄内甕、および本遺跡は中河内地域で集落が急激に膨張し他地域との交流の活発化する時期に連動して成立する事実から、中河内地域との関係によって成立した、石川流域諸集落の拠点遺跡と想定している。先進的な中河内地域と後進的な石川流域諸遺跡の間であって、前者とは一定程度の交渉を有し、その一方で後者に対しては地域の窓口にはなりえない。本遺跡は、古墳時代初頭期の集落ネットワークの末端の状況を明瞭に示している。

2) 駒ヶ谷遺跡の発掘調査がなされ、弥生時代後半から庄内期の丘陵性遺跡の実態が追加された（大阪府文化財調査研究センター『駒ヶ谷遺跡Ⅱ』2002）。立地は東山遺跡、寛弘寺遺跡などにみられるように、石川流域では極めて常態であり、若干の朱関連遺物、および住居跡からの鉄片の出土もまた常態である。

第4節 東海地域における古墳時代初頭期の集落

1 はじめに

ここでは、東海地域における古墳時代初頭期の集落遺跡の動向とその特徴について、大阪府を主とする近畿の集落遺跡の状況、あるいは他地域系土器のありかた等を比較・検討することで明らかにする。それによって、八王子遺跡の位置付けを明確にすることが目的である。なお、東海地域とはおおむね伊勢湾沿岸地域を意味しており、伊勢・尾張・美濃がその主体となり広大である。本稿では、東海地域の中でも八王子遺跡の所在する尾張の濃尾平野部と、流通拠点としての性格が明らかになりつつある伊勢の雲出川流域の資料を中心にあつかう。また本稿での古墳時代初頭期とは、東海の土器様式で廻間Ⅰ～Ⅲ式前半、畿内の庄内～布留前半を指しており、画期をとらえるために弥生後期から記述した。

2 大阪における集落遺跡の変遷と概要

大阪府下では、弥生時代後期に主眼を置けば、集落遺跡の画期に大きく二つの類型が見られる。すなわち、中河内地域とそれ以外の地域に分けられる。

中河内地域では集落遺跡によって継続期間に差異が確認できる。平野部では弥生前期に始まる拠点集落は継続し、基本的にV様式中頃で消滅する。八尾市田井中遺跡、同 恩智遺跡等がそれにあたる。ただし、亀井遺跡のみはV様式中頃に一時的に希薄になるも終末期まで継続するのである。

次にその他の地域つまり東部摂津・北河内・南河内・和泉地域では、拠点集落は基本的にIV様式で消滅、あるいは衰退する。衰退しつつも若干の継続を示すもの、高地性集落の出現、あるいは小集落が消長をくり返す場合等々、V様式段階の在り方は地域により差異がある。また、これらの地域では、後期初頭から前半期に集住型の巨大高地性集落¹⁾を形成することも特徴的である。これは低地の拠点集落構成員の一部によって形成されたと考えられる。流通面では、後期初頭段階の集住型巨大高地性集落を舞台に活発になるようである。なお北河内地域の雁屋遺跡のみが、亀井遺跡と同様に終末期まで継続することの理由は残された課題である。つまり大阪では亀井遺跡と雁屋遺跡のみが、大和盆地²⁾と同様の継続期間を有することになる。

古墳時代初頭の庄内期になると、弥生時代とは立地を変えて新たな集落遺跡が展開する

ようになり、大きな画期と理解できる。これらの集落遺跡には、小規模単発的で短期間に出現と消滅のみられるものと継続性を示すものがある。後者の場合でも、布留1～2期で消滅するようで、そこにも大きな画期がある。その後、再度集落立地を替え、局所的に布留3期から新たな遺跡の展開が始まり、初期須恵器段階に最盛期をむかえるといった集落動向を示す。

庄内期以降の集落遺跡の展開は、河川流域に一定の距離を有しつつ分布する弥生時代のそれと全く異なったものである。すなわち、広域流通ルート上つまり瀬戸内諸地域と中河内、東部摂津地域の結節点にある吹田市域の垂水南遺跡や上町台地北端の崇禅寺遺跡、および旧大和川流域に立地する中河内地域の諸遺跡、あるいは淀川に流れ込む河川流域に新たに出現する東部摂津地域の諸遺跡に重点が移行している。これは、他地域系土器の占める割合が高いことが一つの目安になるのであるが、土器の問題に止まらない。それら遺跡の継続期間の安定、その他文物の流入面からも各地域内での優位は確認できるのであり、これら集落遺跡を背景にして、前期古墳の築造される場合も多い。また、旧大和川流域に中田遺跡群、加美・久宝寺遺跡群と呼べる集住による巨大拠点³⁾が出現したことも重要である。これ以外の北・南河内、和泉地域はいわゆる「伝統的Ⅴ様式」段階に止まり、閉鎖的、単発的集落が展開する。つまり、本段階は、地域によって非常にかたよった在り方を示していることが解る。

弥生時代後期初頭、および庄内期新相～布留期初頭に他地域系土器の搬入が顕著になる。特に後者段階に顕著であり、その地域も北部九州を除く西日本諸地域、つまり阿波、讃岐、吉備、山陰地域等と広大になる。その一方で、大和盆地を含む東日本諸地域からの流入⁴⁾は、極めて希薄である。西日本諸地域、および中河内地域の土器は、大和盆地東南部にも入っていることから、中河内は西日本諸地域と大和を結ぶ中継点としての役割を担ったとも考えられる。

3 東海地域の集落遺跡

東海地域の弥生時代の拠点集落についての詳細は勉強不足ながら、赤塚次郎氏は朝日遺跡の状況を述べることで、東海地域全域にも普遍化できるとしている⁵⁾。それによれば、朝日遺跡では山中式後期に再掘削された南集落の環濠が、廻間Ⅰ式初頭段階から始まる大量の土器投棄により埋没し、急速に衰退して求心力が喪失して散漫な遺構群が点在するにすぎなくなるとしている。同様の状況は、愛知県見晴台遺跡・大廻間遺跡・中根山遺跡・

古井遺跡群・欠山遺跡・高井遺跡等の他、三重県草山遺跡・阿形遺跡等でも確認できる。そして、これら拠点集落の解体に呼応して、廻間Ⅰ式期に顕著な集落遺跡の増加が認められる。また、同様の状況が西美濃・伊勢地域の伊勢湾沿岸部でも確認できる。さらに、西三河地域以東でも同様の状況が時期を微妙に遅らせながら東漸することも述べている。最近の知見として、上記の単発的集落とは別に、濃尾平野では八王子遺跡周辺と津島遺跡周辺、美濃地域では荒尾南遺跡周辺、西三河地域では古井遺跡周辺で、遺跡群を形成するとの教示⁶⁾も得た。

廻間様式前後の集落遺跡の消長について、赤塚氏は図2のようにまとめている。そこから得られる情報をまとめれば以下のようになる。

1) 廻間Ⅰ式段階で出現あるいは存在が明確になる集落遺跡が目立つとともに、それらも廻間Ⅲ式の中で消滅するものが大部分である。濃尾平野以外の地域では、廻間Ⅱ式初頭(東海系の第1次拡散期)に消滅・衰退、あるいは出現する集落遺跡も確認でき、それも画期

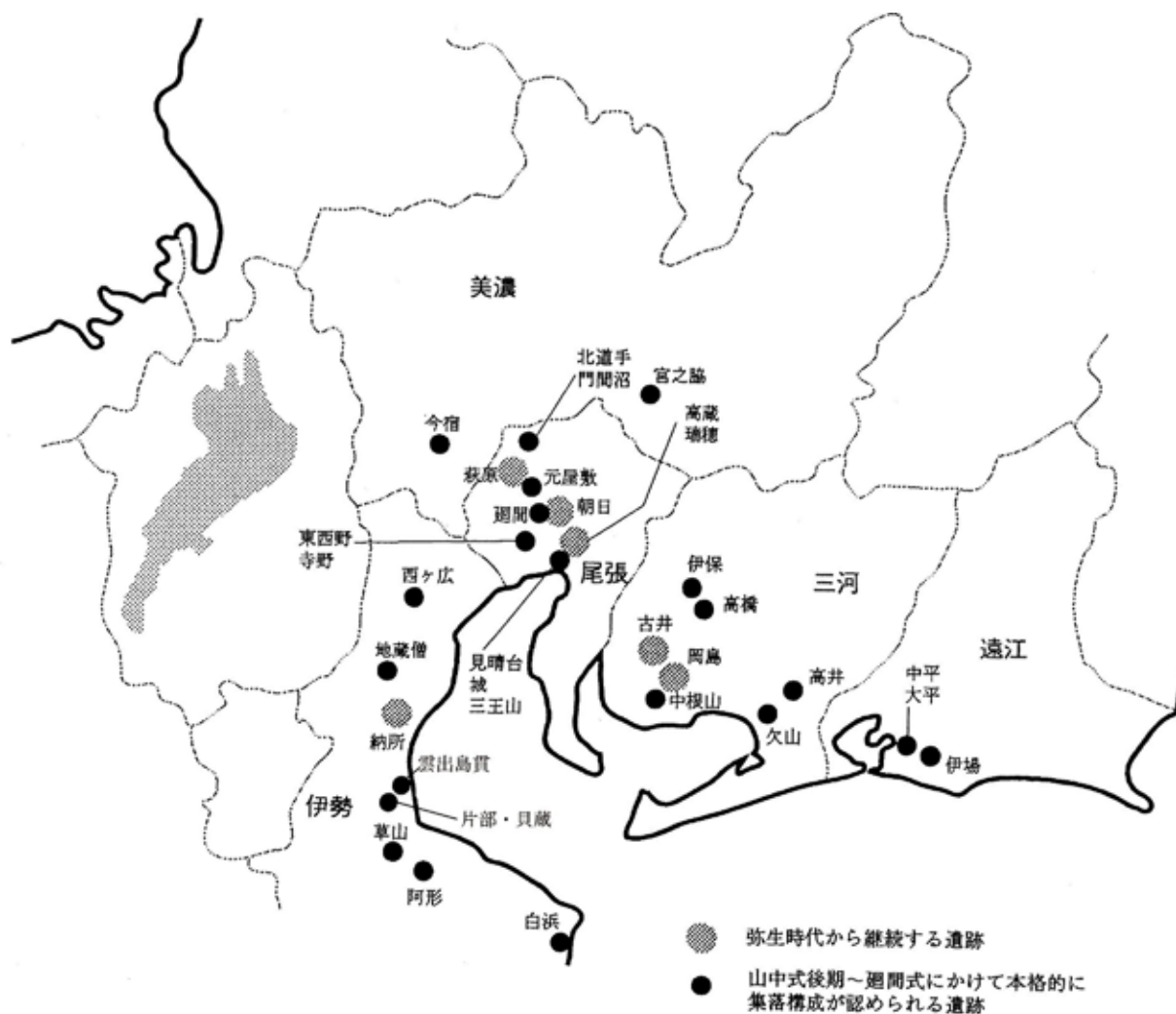


図1 東海地域主要遺跡(註8を一部改変)

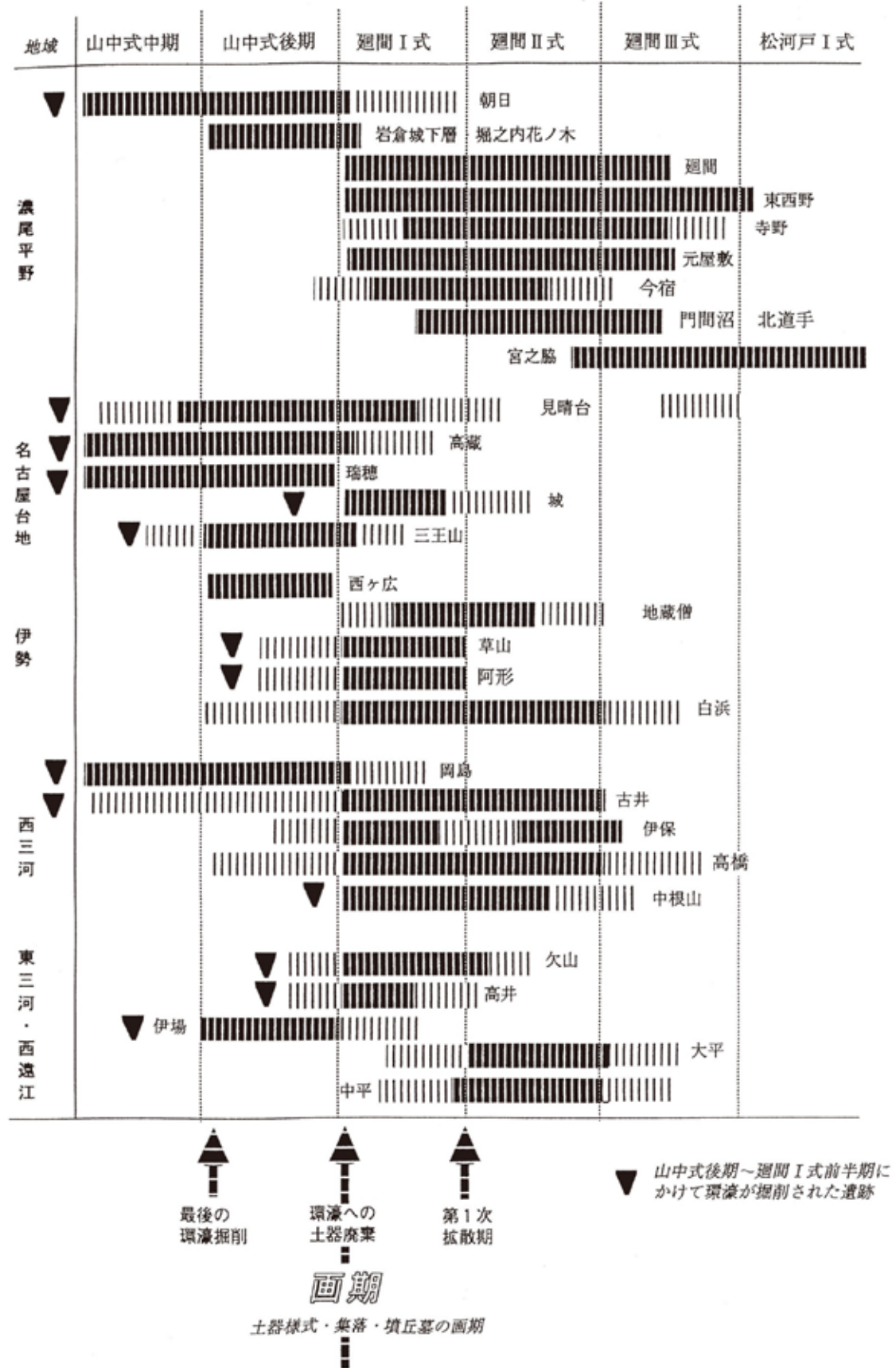


図2 東海地域主要遺跡の変遷(註8より)

としてとらえられる。

2) 濃尾平野と西三河、伊勢では廻間Ⅰ式以降の集落が明確になり、しかも継続性を示す。それに対して、名古屋台地では弥生集落の盛行に比較して、地域的には衰退傾向を示し、継続性を示さず短期間で消長する。大阪府下では、弥生時代後期から古墳時代初頭期の集落変動の中で明らかに地域的な優劣の差、あるいは同一地域にあっても立地する河川流域の移動が認められる。同様の状況があるのかどうか、遺跡内容が明らかになる必要があり、東海地域にあっては今後の課題である。

3) 図2の作成段階では、不明確であった伊勢地域の集落遺跡の内容が明らかになりつつある。雲出川下流域において片部・貝蔵遺跡、雲出島貫遺跡等の廻間様式段階の集落遺跡の展開が明らかになった。片部・貝蔵遺跡では集落内に前方後円墳を取り込んでおり、首長層の存在も明らかである。両者ともに他地域系土器が多く広域流通ルート上の拠点集落と認定できる。

土器の交流については、東海系が拡散する時期が集中することを指摘している。すなわち、第1次拡散期は廻間Ⅱ式初頭でもっぱら東方へ向かい、第2次拡散期は廻間Ⅱ式末～廻間Ⅲ式初頭で西方への移動に重点があるもの、としている。以上は東海系の外部地域への移動であるが、その一方で他地域の土器が東海地域に流入することはほとんど確認できず、まして様式内に組込まれることもない。

4 東海地域の物流ルート

大和盆地や大阪と大きく異なるのは、濃尾平野には他地域系土器が流入しないことである。現在の調査の進行状況からすれば、本地域全体に他地域系の流入がない場合と、濃尾平野における流入拠点となる遺跡が未発見である二つの場合が考えられる。本稿では現在の状況に則して、前者の立場で述べる。

東海地域に他地域系の搬入がないにしても、搬出に関わったのは確かである。近江地域の物流拠点と目される湖北の近江町黒田遺跡⁷⁾、湖東の能登川町斗西遺跡⁸⁾、湖南の守山市下長遺跡⁹⁾では多数の東海系のS字状口縁台付甕（高坏、壺は在地化する）が出土しており、東海の中でも美濃を含む濃尾平野に立地する遺跡が関与したと考えられる。また、穂積裕昌氏が指摘するように、纏向遺跡出土のパレス壺等は東海の中でも濃尾系と考えられ、伊勢を經由して入ったと考えられる。さらに、同氏は、弘法山古墳のパレス壺等から、東山道筋は濃尾からの搬入ルートであったことを示唆¹⁰⁾している。以上のことは、濃尾

平野が流通の搬出拠点であったことを示している。

それでは、いかなる理由で他地域系の搬入が認められないのであろうか。実は同様の傾向を示す地域として山陰、阿波地域等、あるいは在地化した東海系を除外した北陸地域があり参考になる。これらの地域の土器は、他地域で多数が出土するが、それに対して地域内で他地域からの搬入を示す土器は微々たるものである。西日本の流通拠点と考えられる遺跡を検討すると、当時の流通は西方へ、極めて一方的である場合が多くその逆方向への移動は弱い。ちなみに、流通の中継拠点と考えられる岡山県足守川流域の諸遺跡では山陰、讃岐系は多いが、東方からの搬入は極めて少ないこともそれを示している。これについて、流通ルートの始点になる場合に生じ得る状況と考えたい。あるいは濃尾平野も、流通の中継拠点ではなく、むしろ始点である可能性も視野に入れておきたい。

ところで、東海地域とはいっても広大で地域差があり、尾張と伊勢は状況がかなり異なることが明らかになりつつある。伊勢、雲出川流域にある雲出島貫遺跡¹¹⁾の調査成果がそれを示している。他地域系土器の状況¹²⁾をまとめれば以下のとおりである。

1) 三河、遠江、駿河、関東等の東日本系の土器が一定数出土している。このような状況は、伊勢地域の中でも本遺跡（あるいは雲出川流域）の特徴で、一般的ではない。なお、近江

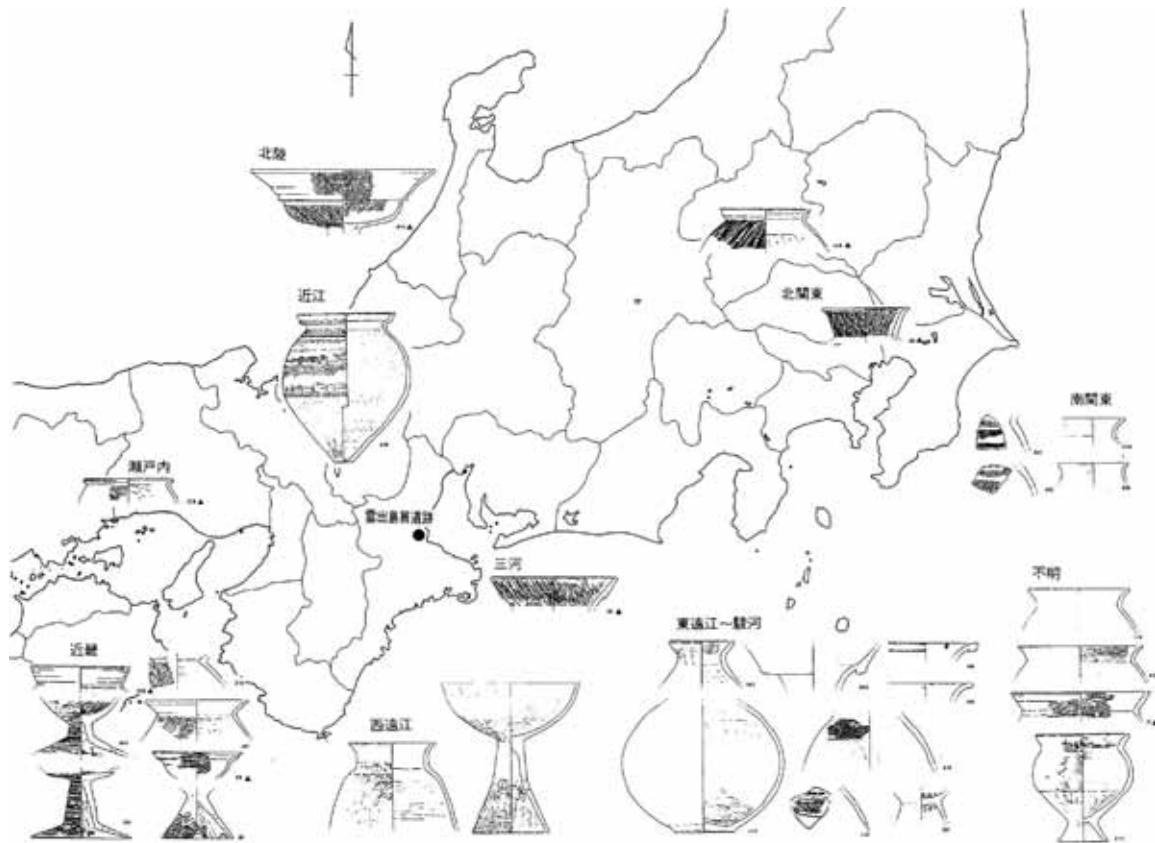


図3 三重県雲出島貫遺跡の他地域系土器(註16より)

と北陸系¹³⁾も各1点が出土している。

2) 他地域系土器の搬入される時期は、近江系が島貫Ⅱ期古相で最も古い少量である。その後、庄内期新相に併行する島貫Ⅱ期新相を境に急激に数量が増え、布留期初頭併行の島貫Ⅲ期にまで続く。

3) 他地域系土器は伊勢より東方地域が主体で、西日本地域からの搬入は極めて少ない。山陰、吉備、讃岐、阿波系等は皆無である。

4) 布留甕がまとまった数量出土する。伊勢地域の他遺跡でも、布留甕の出土することあっても単品か微量である¹⁴⁾。

つまり、当該期の東海地域にも西日本と同様の流通拠点的な機能を有した集落遺跡が存在したことがわかる。伊勢の嬉野町片部・貝蔵遺跡も含めて、雲出川流域に港湾的機能があったことは確実であろう。さらに、漠然と東海系とされてきたS字状口縁台付甕の砂礫も雲出川流域が起源地であること¹⁵⁾も重要である。伊勢を港湾の一つとする経路は、かつて田口一郎氏が述べたとおり、海浜部のいわゆる東海道筋で東国とつながっていたことが確認されつつある¹⁶⁾。

以上のことから、尾張と伊勢は同じ東海地域にありながら関係した主要な物流ルートは、大きく異なった可能性がある。伊勢は東海道筋を通じて東国と大和の中継的位置を占め、尾張は東山道筋を通じて中部地域と、あるいは近江、北陸とも強くつながったとも考えられる。

5 まとめ

以上を総合すると、集落遺跡の消長における画期、集落遺跡の在り方、土器流通の活発化する時期等において、大和盆地や大阪の状況と東海地域の状況が大変類似していることがわかる。

集落変遷の画期については、弥生集落が後期終末まで継続する点は、亀井、雁屋遺跡、および大和盆地と東海地域は同様である。つまり、弥生集落の断絶で確認できる画期は近畿周辺でⅣ様式末、中河内でⅤ様式中頃、中河内の一部と大和、東海でⅤ様式終末へと時期差を生じつつ同様に認められる。さらに、古墳時代初頭の廻間様式、庄内様式からの新たな集落遺跡の展開と、廻間Ⅱ式と庄内後半からの盛行、廻間Ⅲ式後半と布留中頃からの急激な消滅・衰退はほとんど幾を一にした画期と考えられる。ただし、東海地域では第1次拡散期である廻間Ⅱ式初頭をはさんで、集落遺跡の消長が顕在するが、近畿では確認で

きない。その解明は将来の課題とせざるをえないが、八王子遺跡ではこの段階に方形区画、井泉遺構が廃絶していることから、その段階での画期の重要性が伺えよう。

東海系の第1次拡散に対応する遺構・遺物でのあり方は、大阪府では明確ではない。S字状口縁台付甕A類段階の移動は大和盆地、および滋賀まではおよぶが、大阪府下では皆無である。古い段階の中河内産庄内甕を他地域で見かけることもない。むしろ府下で時々出土する才の町I・II式段階の吉備系甕は、中河内と吉備との交流を伺うことができる。庄内期前半は、極めて限定された地域間での小規模な流通の段階であった、と考えられる。なお、八王子遺跡には他地域系はないが、これは庄内期前半に併行する廻間I式期初頭～後半にかけての時期に造営の主体があることと、物流の始点地域に立地したことに理由と考えておきたい。

近畿において確認できる庄内期新相～布留期初頭の他地域土器の搬入に対応する物流は東海でも認められる。すなわち東海系の第2次拡散、および雲出島貫遺跡を代表とする雲出川流域の状況である。廻間編年、島貫編年との対応も矛盾はない。ただし、流通の方向は全く異なっており、東海は東日本諸地域系の西方への中継地、大阪府では西日本諸地域系の東方への方向性を持っている。いずれも大和盆地東南部への流通であり、その逆の流れは弱い。

註

- 1 摂津東部の古曾部・芝谷遺跡、南河内の東山遺跡、和泉の観音寺山遺跡、近江の熊野本遺跡、播磨東部の表山遺跡が相当する。
- 2 寺沢 薫「大和弥生社会の展開とその特質」『橿原考古学研究所論集』第4 1979
- 3 ここに言う遺跡群と東海地域で言われる遺跡群とは視点が異なる点を明記しておきたい。例えば、八王子遺跡は萩原遺跡群に属するように、東海で言われる遺跡群とは時期の異なる遺跡が移動を繰り返す「エリア」ほどの意味であり、一時期に限定すれば集落遺跡の占める面積は狭い。一方、中河内で言う遺跡群とはそのエリアの中にいくつかの自然堤防と微低地を含みながらも一時期に形成された集住状況を指している。同程度の集住は、奈良県纏向遺跡、岡山県足守川流域、福岡県比恵・那珂遺跡群に認められる。
- 4 山田隆一「大阪府下出土の東海系土器とその特質」『庄内式土器研究』3 庄内式土器研究会 1992
- 5 赤塚次郎「東海」『ムラと地域社会の変貌』埋蔵文化財研究会 1995

- 6 赤塚次郎氏、石黒立人氏、樋上昇氏（以上、愛知県埋蔵文化財センター）より教示を得た。また石黒氏からは、単発的集落の規模は直径 100m 以下で非常に小規模であるとの教示も得た。
- 7 宮崎幹也『黒田遺跡 3』近江町教育委員会 1994
- 8 植田文雄『能登川町埋蔵文化財調査報告書第 10 集 斗西遺跡』能登川町教育委員会 1988、『同第 11 集 斗西遺跡』同 1993、『同第 12 集 斗西遺跡』同 1993
- 9 岩崎茂『下長遺跡発掘調査報告書Ⅷ』守山市教育委員会 2001
- 10 穂積裕昌「東海系土器のなかの伊勢の土器」『第 9 回 春日井シンポジウム 2001 年』春日井市他 2001
- 11 伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜 第 1 次調査』三重県埋蔵文化財センター 1998、同『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター 2001。資料見学では、川崎氏・伊藤氏・船越重伸氏のお世話になった。なお今回は雲出島貫遺跡をあつかうが、雲出川流域の中核は、嬉野町片部・貝蔵遺跡であり、その概要が報告されている（和気清章「伊勢に於ける土器交流拠点」『庄内式土器研究』20 庄内式土器研究 1999）。
- 12 川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター 2001
- 13 雲出島貫遺跡での北陸系は少ないが、雲出川流域の片部・貝蔵遺跡、西三河地域の矢作川流域に立地する古井遺跡群には一定量の北陸系が入る（原田幹「東海出土の北陸系土器」『考古学フォーラム』10 1998）。
- 14 伊藤裕偉氏（斎宮歴史博物館）の教示による。なお布留甕の少ないことは濃尾平野も同じである。早野浩二氏（愛知県埋蔵文化財センター）によると平成 8 年段階で 7 遺跡 11 個体である（早野浩二「濃尾平野における布留式甕について」『年報 平成 7 年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1996）。
- 15 S 字甕胎土研究会「S 字甕の混和材を考える」『考古学フォーラム』9 1997
- 16 註 12 において、川崎氏は田口一郎氏が指摘した北関東に至る太平洋岸沿いの「津」の存在を認めている。

第3章 他地域系土器とその社会背景

第1節 大阪出土の讃岐・阿波・播磨系土器と製塩土器

1 はじめに

弥生時代終末から古墳時代初頭は、地域間の交流が活発化する時期である。集落遺跡から出土する、多数の他地域系土器がそれを示す。他地域系土器とは、他地域から持ち込まれた土器の他に、他地域の形や技法を真似て在地で作った土器、あるいは形は他地域の土器に似ているが区別の難しい土器も含む。大阪においても例外ではなく、特に旧大和川流域において西日本諸地域から持ち込まれた土器が多数出土する。具体的には山陰、吉備、讃岐、阿波系などの西日本からの搬入が大変多く、北陸、東海、関東系などの東日本からのものが少数ながら出土する状況である。他地域系土器は、それぞれの地域での編年研究によって、持ち込んだ地域内部での主体となった地域、およびその相対的な年代を示している。他地域系土器研究の目的は、地域間交流の実態を知ることによって、本格的な国家形成に向かい始めた日本の当該期の社会的・政治的な背景を究明することにある。

本節では、大阪府出土の讃岐・阿波・播磨系土器の他、製塩土器を集成し基礎資料を提示する。製塩土器を含めるのは、当時備讃瀬戸地域ならびに大阪湾岸地域から紀淡地域では、土器を使った塩作りが盛んに行われており、大阪の内陸部には、大阪湾岸だけではなく讃岐を含む備讃瀬戸地域からも製塩土器が運び込まれたと考えるからである。他地域系土器が持ち込まれた背景には、技術や情報を持った人、さまざまな物資などが行きかったからであろうが、その具体的な内容の判る場合は少ない。そんな中であって、製塩土器の出土から、持ち込まれた物資の一つに「塩」があったことがわかる。ただし製塩土器の個別詳細については、第4章第1節で記述することとし、本節では一覧表での他地域系（備讃系）、在地系（大阪湾岸系）の出土点数のみを提示する。

2 各地の土器編年の状況

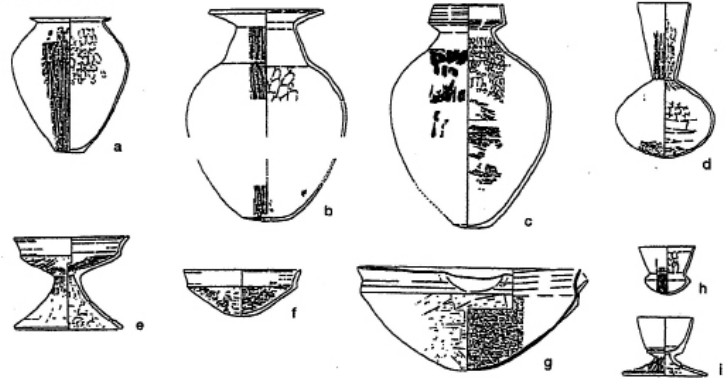
最初に讃岐・阿波・播磨系土器、および製塩土器の概要について記す。

1) 讃岐地域

他地域に搬出される多くは、「下川津B類土器」（図1上段）と呼ばれる一群の土器であ

る。器種には甕・広口壺・大型複合口縁壺¹⁾・細頸壺・高坏・鉢・小型丸底壺などがある。この土器群は、胎土に角閃石、雲母、長石を含み、茶褐色あるいは赤褐色を呈し、伝統的な技法によって作られた特異な形態なので、識別が比較的容易²⁾である。粘土採取地は石清尾山南麓であり、製作地および分布域は、石清尾山の東に隣接する高松平野である。高松平野中心部の遺跡出土土器は、6割が「下川津B類土器」で占められる。なお讃岐では、「下川津B類土器」の持ち込まれた丸亀平野に所在する下川津遺跡の土器編年³⁾が基準となる。

下川津B類土器



東阿波型土器

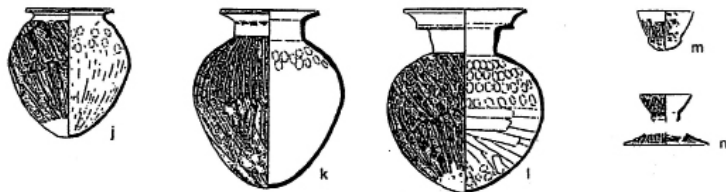


図1 東四国系土器 (梅木2004より)

2) 阿波地域

他地域に搬出される多くは、「東阿波型土器」(図1下段)と呼ばれる土器群である。器種には、甕・広口壺・複合口縁壺・小型丸底壺の他、大型複合口縁壺などがある。この土器群は胎土に結晶片岩を含み、特徴的な形態なので識別が比較的容易である。結晶片岩が含まれるので、粘土採取地は中央構造線に沿って流れる吉野川流域であることは確かで、製作地および主たる分布域は吉野川の支流である鮎喰川下流域と考えられている。黒谷川郡頭遺跡の資料で黒谷川I～Ⅲ式に編年⁴⁾され、その後空白期間への追加を行い、V-4 a～VI-3様式の6様式に細分⁵⁾されている。

3) 播磨地域

播磨の土器は、明確な特徴が乏しく識別が困難である。現状では播磨西部地域で作られた「播磨型庄内甕」(図2)だけが識別可能である⁶⁾。またあるいは、播磨東部地域⁷⁾からも持ち込まれた可能性も強いが、詳細は不明である。庄内甕とは主に大和、中河内、播磨、筑前で作られた、内面へラケズリで体部を極限にまで薄く仕上げた叩き甕であるが、播磨型の特徴は以下のようなものである。

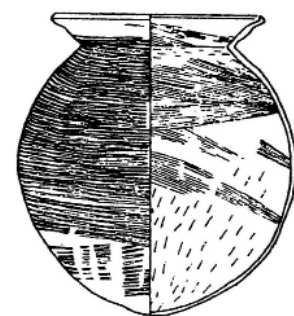


図2 播磨型庄内甕 (兵庫県教委1978より)

- ①口縁端部はつまみ上げており、端部外面が擬凹線状に窪み巡る。
- ②体部外面の叩きは、右上がり優勢で、左上がりも若干ある。何よりも体部上半の水平方向に施す叩きが目立つ。頻度は、右上がり→水平→左上がりの順である。
- ③内面ヘラケズリが、体部上半に及ばない事例が多く、そこに1次調整のハケ目が残る。
- ④新しい段階まで、小さな平底が残る場合がある。
- ⑤白灰色～灰褐色を呈する事例が多い。

播磨型庄内甕は、播磨西部でも市川から揖保川にかけての狭い平野部で出土するもので、播磨の全域には広がらない。姫路市長越遺跡と太子町鶯遺跡の二遺跡が多量に保有し、その周辺の多数の遺跡では数点の出土に止まる。

4) 製塩土器

備讃瀬戸や芸予諸島の瀬戸内中部地域では弥生中期後半から、大阪湾沿岸から紀淡海峡周辺では弥生後期後半から、専用の土器を使った塩生産が盛んに行われた。塩生産に使用された専用の土器を「製塩土器」、その専用土器を使った塩生産を「土器製塩」と呼ぶ。今回は、庄内式とその前後に位置づけられる、シリンダー状あるいはコップ状の体部に脚台の付く「脚台式」の製塩土器を抽出した。なお消費地での脚台式に限定し、生産地の和泉地域は含めていない。

備讃地域での製塩土器の編年は、岡山県では大久保徹也氏⁸⁾、香川県では岩本正二氏⁹⁾によるものがある。大久保氏の分類と年代観によると、備讃Ⅰ式は弥生時代中期後葉、備讃Ⅱ式は上東鬼川市Ⅰ・Ⅱ式に並行しつつも一部が同Ⅲ式まで残存、備讃Ⅲ式は上東鬼川市Ⅲ式から上東才ノ町式に並行、備讃Ⅳa式は下田所式から亀川上層式に並行、備讃Ⅳb・c式は亀川上層式の直後から布留式中新段階に並行することになる。

大阪湾沿岸から紀淡地域での製塩土器の編年は、酒井龍一氏、広瀬和雄氏、鈴木陽一氏、積山洋氏、河田泰之氏、宮地聡一郎氏、富加見泰彦氏等によるものがある。近年の動向は、従来は比較的単純であった編年が、資料増加によって複雑な状況を呈するようになったことである。新たなタイプの製塩土器の抽出に加え、複数タイプの製塩土器が同時に存在し、従来の年代観よりもかなり遡ることが明らかになった。ここでは、広瀬氏¹⁰⁾の分類により記載し、積山氏¹¹⁾の年代観によった。脚台式に限定すれば、広瀬脚台ⅠA式は弥生時代後期後半、脚台ⅠB式と同Ⅱ式が庄内式で、脚台Ⅲ式が庄内式後半に加わる。その後、布留式には脚台Ⅲ・Ⅳ式を位置づけている。なお脚台Ⅲ式からⅣ式にいたる細かな変化は明らかではないが、5世紀初頭までは残存するようである。

備讃地域と大阪湾沿岸地域の脚台式製塩土器の相違点は、製作技法の違いからくる脚台部の厚みである（図3）。備讃瀬戸では体部と脚台部の間に粘土を充填して作る¹²⁾とされており脚台部は薄い。大阪湾沿岸の脚台皿式¹³⁾は、脚台に粘土紐を巻き上げていく、あるいは体部に脚台を接合して作るので接合部が大変厚いことが相違点と考える。そして一覧表には、少々強引ではあるが、大阪湾沿岸を在り地、備讃地域の可能性の高い資料を他地域として分離した。

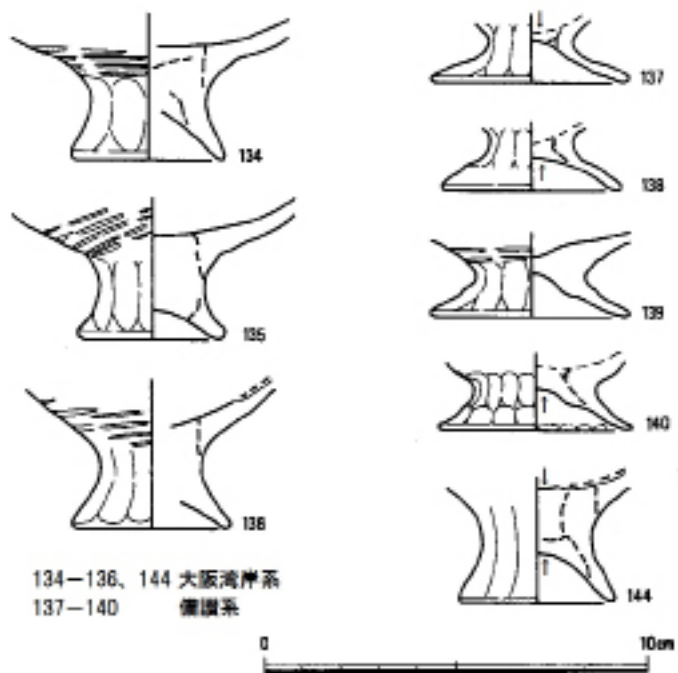


図3 脚台部の作り方

3 大阪府の讃岐・阿波・播磨系土器（図7～19）

当時の地形を考慮して、淀川以北の摂津東部、大阪湾に面し瀬戸内海と河内湖、淀川が交わる地域を摂津中部、淀川左岸で河内湖以北の北河内、河内湖以南で旧大和川によって形成された沖積平野部の中河内、現在の大和川以南の南河内、大阪湾に面する和泉に区分する（図4）。

1) 摂津東部

出土遺跡数は6遺跡。讃岐系は3点、阿波系は17点、播磨系は2点である。この地域は、高槻市域と茨木市域に二分して捉えることができる。高槻市の桧尾川流域に安満遺跡、芥川流域に郡家川西遺跡が、茨木市の茨木川流域に東奈良遺跡、安威川流域に溝咋遺跡が立地する。いずれの河川も淀川の支流であり、交流拠点としての役割を有した集落遺跡である¹⁴⁾。安満と東奈良遺跡は弥生時代以来の拠点集落、郡家川西と溝咋遺跡は古墳時代初頭期に巨大化する。庄内期後半以降の阿波系が目立つ。今回の対象以外の他地域系もこの4遺跡に集中し、安満と東奈良遺跡では河内型庄内甕が多く、中河内とのつながりが強い。

2) 摂津中部

出土遺跡数は11遺跡。讃岐系は8点、阿波系は16点、播磨系は4点である。この地域は瀬戸内海の最奥部にあって、瀬戸内海沿岸の諸地域と近畿の各地域をつなぐ結節点に

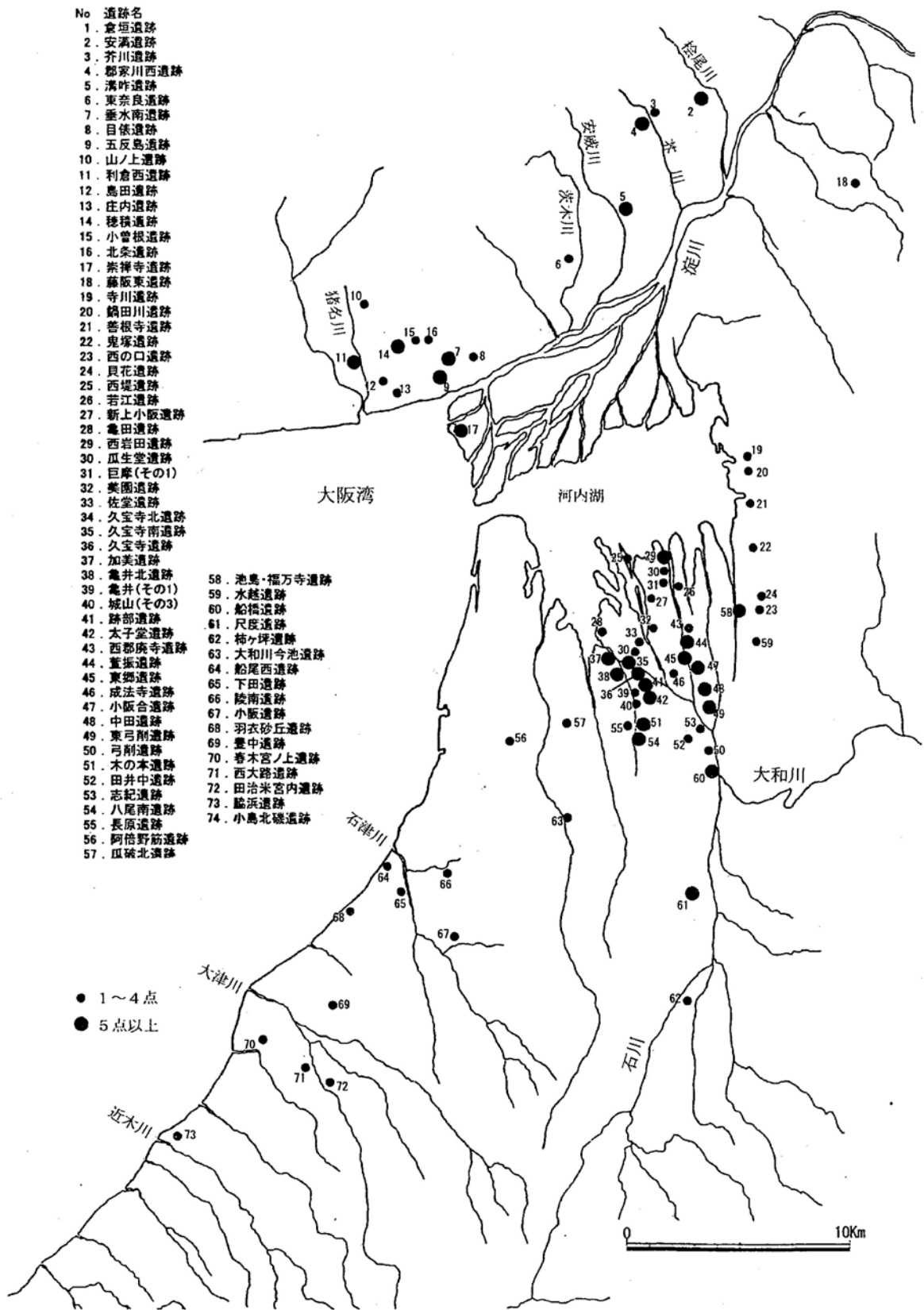


図4 讃岐・阿波系土器が出土した遺跡分布

位置する。河内湖を介して中河内から大和、大阪湾岸を南下すれば和泉から紀伊、淀川を遡り摂津東部から山城・近江へとつながる。多くの遺跡が、千里丘陵と猪名川にはさまれた平野部や、淀川によって形成された三角州に立地¹⁵⁾する。阿波、讃岐系の他、製塩土器も多く、それ以外の他地域系も大変多い。中河内に次ぐ集中が確認できる。

3) 北河内

出土遺跡数は1遺跡、阿波系が1点である。この地域には交野・枚方台地上に多数の集落が存在するし、広大な面積を占める集落も確認できるにもかかわらず、他地域系はほとんど出土しない。また淀川左岸低地部では集落遺跡がほとんど確認できない。明確な拠点集落が確認できず、他地域との流通をほとんど見出すことができない。いわゆる「伝統的第Ⅴ様式」と呼ばれるような、弥生時代以来、閉鎖性の強い社会が継続する。

4) 中河内

出土遺跡数は41遺跡。讃岐系は44点、阿波系は208点、播磨系は3点である。この地域には、旧大和川が網目状に流れており、その流域に多数の集落遺跡が立地している。遺跡分布の状況から、西日本の諸地域と大和盆地を結ぶ旧大和川の交流ルートと理解でき、西岩田遺跡→中田遺跡群、加美・久宝寺遺跡群→船橋遺跡→大和盆地につながる¹⁶⁾。これらの遺跡では阿波・讃岐系ばかりでなく、対象以外の他地域系も大変多い。なお中田遺跡群とは萱振、東郷、小阪合、中田、東弓削、成法寺、矢作遺跡から、加美・久宝寺遺跡群とは久宝寺南、久宝寺、加美、亀井北、跡部遺跡からなっており、広大な面的に分布する状況を呈する。他地域系の出土する遺跡は多数あり、しかも一遺跡から見つかる数量は他地域を圧倒する。なお中河内でも生駒山西麓に隣接する遺跡など、旧大和川から離れると他地域系は極端に少ない。

5) 南河内

出土遺跡数は3遺跡、阿波系が6点である。この地域の東方には、石川が北流し、旧大和川に合流する。石川右岸の丘陵上には多数の遺跡が存在するにもかかわらず、今回の対象以外の他地域系も非常に少ない¹⁷⁾。紀伊との交流ルートになり得る地域なのだが、流通はほとんど認められない。わずかに庄内期新相の方形居館が見つかった羽曳野市尺度遺跡にのみ集中する。本遺跡では、河内型庄内甕も多い。北河内と同様に、閉鎖性が強い地域である。

6) 和泉

出土遺跡数は11遺跡。讃岐系は2点、阿波系は19点である。この地域は大阪湾に多

くの河川が流れ込んでおり、その下流域に集落分布が認められる。現状では、弥生時代の拠点集落である四つ池遺跡と池上曾根遺跡が立地した、石津川と大津川流域に集中し、それよりも南西の地域は希薄である。一遺跡における阿波、讃岐系も少ない。中河内と阿波の流通を考える上で、大阪湾岸は最短ルートなのだが、現状ではそれを確認できない。

4 出土遺構と遺物

他地域系土器や持込まれた遺物には、古墳築造に関わる遺物や人の移住を示す事例もある。これらは広域流通の果たした社会的・政治的な役割やその背景を解明する上で重要な考古資料となる。ここでは、それらの代表的な事例を取上げる。

1) 溝咋遺跡の結晶片岩と朱関連遺物

溝咋遺跡¹⁸⁾では、阿波との関連が推定できる資料として、結晶片岩と朱関連遺物が出土している。結晶片岩は集落域から3個体が出土した。大きさは幅6cm前後で長さ15cm前後の小型で、色調は灰色系、緑色系、紫色系である。報告者は、土器製作における混和材と推定している。阿波の結晶片岩は、前期古墳の竪穴式石槨の石材として近畿に持込まれており、流通拠点からの出土はそれが流通物資の一つであることを示している。

朱関連遺物としては、朱付着土器（分析の結果、6点が朱とベンガラ混合物）と、朱精製に関わるL字状石杵2点と石皿1点が出土している。報告者は、阿波系土器が多量に持ち込まれているので、朱も阿波からの搬入品の可能性が高いと推定している。この状況は中河内の諸遺跡でも同様で、庄内期新相以降に朱付着土器が多数出土する。土器内面に朱が、外面に煤が付着するのが一般的で、朱の精製に関わる遺物である。朱は古墳や墳墓に関わる葬送儀礼などに使用する目的で持込まれたと考えられる。

2) 中田遺跡の「白石」

中田遺跡第5次調査のS K 201は、全体の形状は不明ながら、平面は1.8 m×0.6 m程度の楕円形、深さ0.3 m程度の二段掘りの土坑である。阿波、吉備系土器や多数の在地系土器類の外に10数個の礫が出土した。時期は布留1式で、阿波系は黒谷川IV式である。礫は紀ノ川・吉野川下流域、あるいは淡路島の南西部にある五色ヶ浜に産地が限定できる石英質片岩が目立つ。いわゆる「白石」で、古墳などの特定の場所に敷き詰められることが多い。白石は、径2～3cm程度の垂円礫10点が報告されている。口縁部を打ち欠いた壺・甕・鉢や、穿孔のある壺・甕が共伴しており、墓関連の施設あるいは祭祀の場と推定されている。

周辺で白石は、玉手山1号墳の後円部に方形壇がありその上に敷かれたり、松岳山古墳と茶臼塚古墳の間に立てられた楕円筒埴輪の付近に敷かれている¹⁹⁾。

3) 阿波系土器棺、および小阪合遺跡の阿波系土器棺と住居

東郷遺跡の第20次土器棺1、同第43次土器棺1、八尾南遺跡土坑50²⁰⁾と小阪合遺跡の住居865埋没後に設置された土器は、阿波系壺を用いた土器棺である。そして東郷20次(図8-b)・八尾南(図8-c)と小阪合の土器棺(図8-a)は、いずれも壺の口縁部を東方に向け、横置されていた。地域は讃岐なのだが、高松市の平野部にある4遺跡11例で、全ての土器棺の口縁部が東を向くことが指摘されている²¹⁾。阿波平野部での事例は明らかでないが、ここでは阿讃地域と一括りにしての事例として提示しておきたい。その背景に、太陽の昇る方向と結びついた死者再生を願う死生観が想定されている。死生

観の是非はともかくとして、両地域の土器棺に同様の思想的背景があったと考えておきたい。ほぼ同時期、中河内では萱振遺跡で10基、亀井北遺跡で1基の在地土器棺が報告されているが、口縁部の方向は一定しない。萱振遺跡では北1、北東1、南4、南西1、北西1、不明2であり、亀井北遺跡では南東を向く。中河内には、阿讃地域の思想的な背景は確認できない。

さらに、小阪合遺跡の住居865の形態(図8-a)にも注目できる。それは、この住居には円形の中央土坑と長方形土坑がみられ、いわゆる「10型中央土坑」(以後、「イチマル土坑」と記載)の可能性が高い²²⁾ことである。「イチマル土坑」と

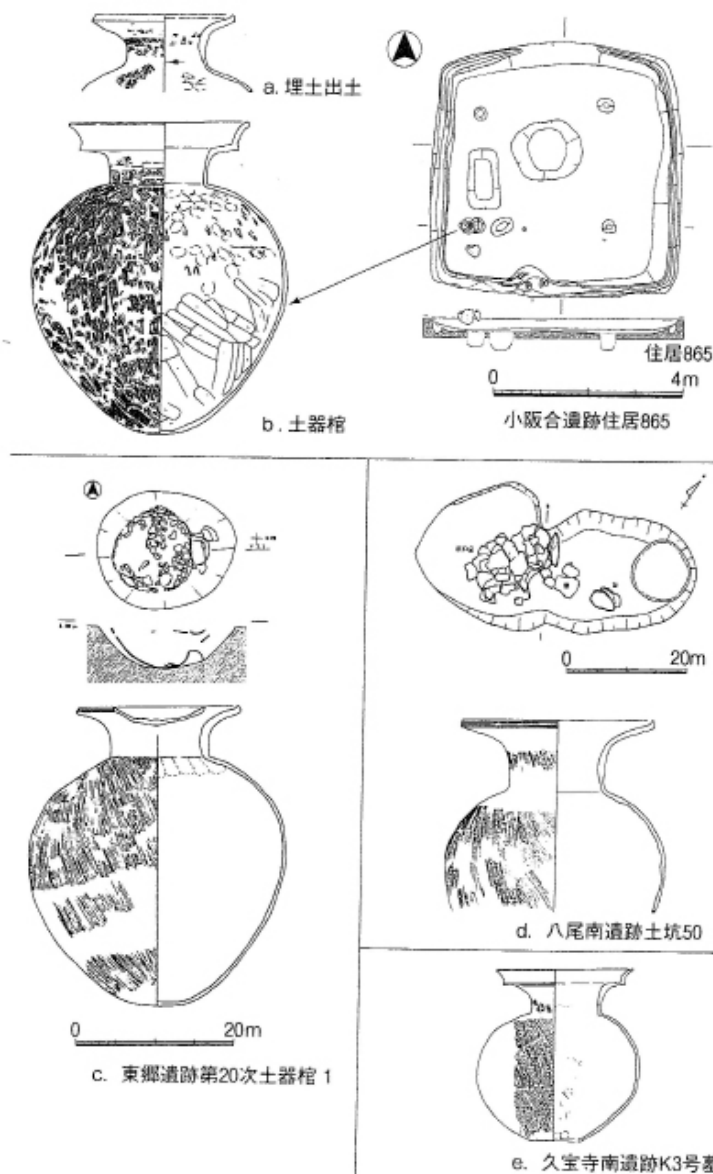


図5 中河内の阿波系土器

は、竪穴住居の燃焼施設の種類²³⁾で、円形の深い土坑と長楕円形の浅い土坑がセットになったものである。弥生時代中期後半以降、時期を異にしながらも、摂津・播磨・吉備・讃岐・阿波に分布する。讃岐では弥生時代中期後半から、阿波では弥生時代後期初頭から確認できる。阿波での「イチマル土坑」の事例²⁴⁾として、弥生時代後期初頭の名東遺跡 SA01、後期後半から布留古相にかけて名東遺跡・鮎喰遺跡・黒谷川郡頭遺跡・貞光前田遺跡などがある。

小阪合遺跡住居 865 は、当時の阿波に認められる「イチマル土坑」をもち、埋土からは阿波系壺が出土し、埋没後には故地と同様の思想的背景のもとに阿波系壺による土器棺で埋葬がなされている。以上のことから、阿波の人の住居であった可能性が高いと考えたい。他地域系土器の背景に、人の移住のあったことを示す事例である。

4) 焼成前穿孔の壺

久宝寺南遺跡 K 3 号墓²⁵⁾は、長方形のマウンドとその長辺に突出部を持つ方形周溝墓で、陸橋を有する。時期は布留初頭である。その周溝底に接して、阿波系の二重口縁壺が出土した。この壺の底部には、焼成前に径約 6 cm の孔が穿たれている。近年、隣接地の調査で方形周溝墓や前方後方墳の周溝から底部の穿孔された在地の壺が出土するが、焼成後の穿孔である。現状では、古墳時代初頭期の大阪府で焼成前に穿孔された壺は唯一である。一方、讃岐では墳墓に焼成前穿孔の壺を供献する事例は多い。壺形埴輪の成立を考えるのに重要な資料でもある。なお K 3 号墓からは多数の土器が出土しているが、阿波系は本資料のみで他に山陰系鉢 1 点、同鼓形器 2 点、吉備系甕 1 点が出土した。また亀井北遺跡 2 号墓の北西周溝では、阿波系の広口壺が出土した。しかしこの土器の底部に穿たれた孔は焼成後である。

以上の 1・2・4 は、前期古墳の築造あるいは祭祀関連の要素である。彼の地では、埋葬行為の中に採り入れられている要素であり、さらに 3 はその地域の人が中河内に居住したことを示す事例である。人・物資・情報が、同時にそして総体的に持込まれたことを示す事例である。

5 大阪府の消費地における製塩土器

図 6 は、塩の生産地である和泉地域を除く、脚台式製塩土器の分布である。時期を庄内期から布留期に限定するために、分布図には、在地の脚台 I A 式と脚台 IV 式、亀井遺跡の備讃 II 式は含めていない。状況は以下のとおりである。

1) 一部の例外を除いて、弥生後期後半以前に製塩土器は持ち込まれていない。利倉西遺跡の脚台ⅠA式と、亀井遺跡の備讃Ⅱ式がある。

2) 大阪湾沿岸と考えられる製塩土器では、脚台Ⅱ式は少なく多くが脚台Ⅲ～Ⅳ式である。このことは庄内期に少数が、布留初頭期になって多くが持ち込まれたことを示している。さらに脚台Ⅳ式も多いので、同じ状況が古墳時代中期に引き継がれたことがわかる。

3) 備讃系と考えられる製塩土器では、備讃Ⅱc式（利倉西7）の一点以外、備讃Ⅲ～Ⅳ式におさまる。明らかにⅣ式が主体になり、在地の製塩土器の持ち込まれた時期と同じである。

4) 大阪湾沿岸と備讃の両地域の製塩土器が持ち込まれており、その搬入時期も同じである。現状では同一遺跡、同一遺構であっても、一方の地域の製塩土器が優勢となることはない。消費地では両者がほぼ同じ割合で確認できる。一方、大阪湾沿岸の生産遺跡では、脇浜遺跡の一例以外に備讃系が持ち込まれることはない。

5) 分布に著しい偏りがある。河内湖への入口部の吹田市、豊中市域と中河内平野部の旧大和川流域に集中する。出土遺跡数が多く、一遺跡で5点以上出土する遺跡も集中する。この分布は先にみた他地域系土器が濃密に分布する範囲と一致する。

内陸部の消費地から出土する弥生後期後半から古墳時代初頭期の製塩土器についての言及は少ない。ところで、河田泰之氏²⁶⁾は脚台Ⅲ式が生産地の和泉地域よりも消費地の河内地域の方が出現時期がさかのぼることを指摘し、しかし今後の資料の蓄積によって解決されるとされている。もちろん今後、生産地での庄内段階での脚台Ⅲ式が見つかる可能性はあるが、そう考える背景には、隣接地で塩を作っているのだから、わざわざ遠隔地から持ち込む必要がないという常識的な判断があると考えられる。

今回の集成によって、大阪府の消費地から出土する製塩土器の一定数は、和泉地域の「脚台Ⅲ式」というよりも吉備を含む備讃瀬戸地域からの「備讃Ⅲ・Ⅳ式」段階の搬入の可能性が明らかになったと考えたい。どちらか一方からの搬入ではなく、八尾市萱振遺跡の製塩土器が示すように、両地域から持ち込まれたと考えられる。多数の吉備、讃岐、阿波系土器が搬入された状況からすれば、その可能性は高い。



図6 大阪内陸部の脚台式製塩土器

ところで、備讃地域と中河内の中間地、播磨西部の長越遺跡でも約 80 点の製塩土器が出土²⁷⁾している。遺構毎の内訳は大溝 60 数点、落込み 12 点、住居 2 点、土坑 1 点で、時期は庄内期～布留期初・前半である。ほとんどが備讃系脚台であり、備讃Ⅲ a～Ⅳ a 式と考えられる。長越遺跡では多数の讃岐、阿波系土器も出土しており、そこに備讃系の製塩土器が加わることになり、中河内の諸遺跡と状況が類似する。大阪湾系の製塩土器が見られないことだけが異なる。長越遺跡は、播磨型庄内甕の生産地であり、讃岐・阿波と中河内をつなぐ流通拠点の一つであったと考えられる。そして製塩土器のあり方は、備讃の塩を近畿に持ち込んだことを示す事例である。

6 まとめ

最後に、大阪の東部瀬戸内系土器の分布と流通についてまとめる。

1) 個体数は、阿波系が非常に多く讃岐系が少なからず確認できる。播磨系はほとんど確認できない。播磨系が少ないのは、認識しえないからとしておきたい。大阪では、吉備系土器が数多く出土するが、阿波系はそれと同程度と考えてもよい。

2) 持ち込まれるのは、特定の器種に限られ、すべての器種ではない。阿波、讃岐ともに、壺と甕を主体的に持ち込んでいる。壺には日常的に使用する中型品と、土器棺と考えられる大型品、甕は内面ヘラケズリの「薄甕」である。

3) 搬入の時期は、庄内期新相以降に急増し、布留期前半に盛期を迎える。分布は、中河内の旧大和川流域の沖積平野部と、摂津中部に集中する。特に前者では、中田遺跡群(萱振、東郷、小阪合、中田、東弓削、成法寺)と加美・久宝寺遺跡群(久宝寺南、久宝寺、加美、亀井北、跡部)の二大遺跡群に集中し、面的分布とさえいえる状況を呈する。摂津東部においては、河川流域ごとに特定遺跡への集中が確認できる。和泉では、少数の遺跡が確認できるものの散在的である。それに対して北河内と南河内では、他地域系土器はほとんど確認できず、閉鎖的な状況がうかがえる。以上の諸地域の状況は、阿波・讃岐系の分布だけでなく、吉備・山陰系も同じである。

4) 他地域系土器とそれを出土する遺跡分布の状況から流通ルートが復元できる。瀬戸内沿岸を通り、摂津中部を介して河内湖に入り、旧大和川をさかのぼり大和盆地にいたるのが幹線ルートである。他に、淀川右岸をさかのぼり山城や近江にいたる交流ルートや、大阪湾沿岸を往来するルートが推定できる。その一方で、南河内の石川を通じて紀伊と交渉を持つことはなかったようである。淀川右岸をさかのぼり、他地域系の分布を追いかけられ

ば、山城では水垂遺跡、近江東部では下長遺跡、近江北部では黒田遺跡など、溝咋遺跡と同じような流通拠点としての集落が立地している。それらの集落を核として、ネットワークが存在したことが推定できる。

4) 大阪府内陸部の脚台式製塩土器はいまだ少ないが、庄内新相以降に、備讃瀬戸地域からも塩が運びこまれたことを示している。他地域系土器が持ち込まれた背景には、さまざまな物資、技術、情報の流通があるが、そこに塩が含まれていたことは確かである。地元の大阪湾岸地域ばかりでなく、備讃瀬戸地域からも塩をかき集めた、と考えられる。

大阪の前期古墳には、阿波や讃岐的な要素が指摘できる。阿波との関連では、結晶片岩を使用した竪穴式石槨が多いことは一例である。しかもその地域は、阿波系土器が濃密に分布する地域と一致する。摂津東部では、茨木川流域に茨木市將軍山古墳と紫金山古墳、芥川流域に高槻市弁天山C 1号墳と鬮鷄山古墳がある。また中河内では、旧大和川流域の遺跡群に造営母体が想定できる玉手山古墳群と松岳山古墳群では、玉手山7号墳と同9号墳、茶臼塚古墳に結晶片岩の使用が確認されている。

讃岐との関連では、鷲の山石材を使用した松岳山古墳の長持形石棺と玉手山3号墳の石棺と考えられる安福寺の剝抜式石棺がある。また積石塚である茶臼塚古墳と、積石を部分的に採用した松岳山古墳も讃岐の積石塚との関連でとらえようとする考え²⁸⁾もある。

本稿では、中田遺跡の「白石」、久宝寺遺跡の阿波系の焼成前穿孔壺、溝咋遺跡の結晶片岩と朱関連遺物を紹介したが、これらは古墳の築造あるいはその祭祀に関わる物資である。土器の搬入と同時にそれらの物資や情報も持ち込まれたのであろう。そして、阿波・讃岐の土器の数量が吉備に次ぐ程度に多いことからみて、両地域との関係が大変強かったことがわかる。

今回、中河内地域に塩が持ち込まれていることを紹介した。中河内での製塩土器の時期と分布は、備讃瀬戸の他地域系のそれと全く同じであり、塩が持ち込まれた物資の一つであったことを示している。また備讃瀬戸の製塩土器を多く含む兵庫県長越遺跡の事例は、備讃地域から中河内につながる交流の中間地域でのあり方を示していると考えられる。

ところで、塩はもちろん日常生活における必需品であるが、いっばうで労働財源としての価値のあることが指摘²⁹⁾されている。首長層の指揮下に行われる耕地開発や治水・灌漑、古墳や首長居館の築造などの土木工事に際して徴発した民衆への労働財源として塩が給付されたと想定されている。筆者も中河内にみられた製塩土器の状況は、近畿の首長層によって、労働の対価として集められた塩の概要を示していると考えたい。つまり製塩土器の

形態からは、塩は備讃瀬戸ばかりでなく大阪湾沿岸地域からも持ち込まれており、少なくとも瀬戸内中部から東部の塩が集まる仕組みが形成されているのである。そして、塩生産の背景には近畿首長層の存在があり、塩はもはや日常生活における必需品以上の価値を持った物資であると考えておきたい。

註

- 1 畑鴨子氏は、従来から四国系複合口縁壺と呼称されてきた大型壺を三形態に分類、検討した（畑鴨子「古墳時代前期の土器・土製品」『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』（財）大阪府文化財調査研究センター 1998）。Aは胴部から傾斜を変えて内傾する頸部をもつもの、Bは内傾する頸部をもたないもの、Cは複合口縁部の立ち上がりが短いものや、立ち上がりの境に突出した突帯をもつものである。そして胎土分析の結果から、Aは讃岐産胎土、BはAの影響を受けて大阪で作られた生駒西麓産胎土とされた。今回の集成もそれによった。Cは山陰系やA・Bの後出段階の資料を含んでおり、再検討が必要である。
- 2 肉眼観察によれば、「下川津B類土器」の胎土は生駒西麓産胎土と酷似しており、胎土では両者の区別は困難である。「下川津B類土器」の胎土の方が、生駒西麓産胎土よりもキメが細かいことは確かである。生駒西麓産胎土の土器が主体的である中河内では、形態で識別するしかない。
- 3 大久保徹也「讃岐地方における古墳時代初頭の土器について」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅰ（財）香川県埋蔵文化財調査センター 1993
- 4 菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』徳島県教育委員会 1986
- 5 菅原康夫・瀧山雄一「阿波地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社 2000
- 6 岸本道昭「西播磨の庄内式前後」『庄内式土器研究』11 庄内式土器研究会 1996
- 7 播磨東部地域では、明石川流域の吉田南遺跡や玉津田中遺跡が流通拠点としての役割をはたしたと考えられる。
- 8 a 大久保徹也「1 岡山県」『日本土器製塩研究』青木書店 1994、b 同「備讃地域における弥生後期土器製塩の特質」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会 2002
- 9 岩本正二「2 香川県」『日本土器製塩研究』青木書店 1994
- 10 広瀬和雄「大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店 1994
- 11 積山洋「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『季刊考古学』別冊 14 雄山閣 2004
- 12 大久保徹也「喜兵衛島遺跡群出土製塩土器について」『喜兵衛島』喜兵衛島刊行会 1999
- 13 たとえば萱振遺跡の場合、接合方法が確認できる大阪湾沿岸産の製塩土器6点は厚みのある脚台部（1.1～2.0cm）を作り、その上側面に粘土紐を積み上げていくことで体部を作る。脚台の作り

方を確認することは難しいが、明らかに輪台を用意して内部に粘土を詰め込む方法もあり、その場合でも厚みのある脚台にする。

- 14 山田隆一「淀川流域の古墳時代初頭期集落について」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』2003
- 15 従来、上町台地北端から北方に沿岸洲がのび、その先端付近に崇禪寺遺跡が立地して吹田市域の遺跡群と対峙し、その間で瀬戸内海と河内湖が繋がると考えられてきた。しかし近年の調査によって、崇禪寺遺跡・同心町遺跡・森小路遺跡のベースとなる砂礫層は、北東方向からの堆積つまり淀川によって運ばれてきたことが判明した。三角洲が想定以上に発達しており、崇禪寺遺跡はその三角洲に立地したことが明らかとなった。
- 16 山田隆一「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第3集 1994
- 17 山田隆一「大阪府南部、石川流域における弥生時代後期から古墳時代初頭社会の特質」『弥生時代の集落』学生社 2001
- 18 合田幸美「溝咋遺跡出土の外来系土器について」『溝咋遺跡（その1・2）』（財）大阪府文化財調査研究センター 2000
- 19 奥田尚「玉手山古墳群の葺石・敷石の石種とその採石地」『玉手山古墳群の研究V』柏原市教育委員会 2005
- 20 報告書では、土器棺の可能性もあるが積極的な証拠はないとしている（大阪府教育委員会『八尾南遺跡発掘調査概要・II』1991）。
- 21 中西克也「土器棺について」『蛙股遺跡』高松市教育委員会 1995
- 22 「土坑1」は土坑924、「土坑0」は炉と記載され、両者は住居865に伴うと報告されている（（財）大阪府文化財調査研究センター『小阪合遺跡』2000）。中央の炉は炭を多く含む。一方、土坑924は、規模は長さ128cm・幅70cm・深さ7cm程度、埋土は暗オリーブ灰色土、貯蔵穴や作業穴といった用途が想定されている。
- 23 多賀茂治氏は、イチマル土坑の機能を以下のように述べている（多賀茂治「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡』第6分冊 兵庫県教育委員会 1996）。中期後半の出現期には、従来の中央土坑の二つの機能、つまり暖をとる機能と食料を調理する機能が二つの土坑に分化したと考える。つまり、土坑1は熱が外部に出やすいように浅くした暖房施設、土坑0は外部に熱が逃げないので調理施設と考える。その後、弥生時代後期から終末期に機能の変化が見られる。甕底部の丸底化や支脚の出現により、浅い土坑での燃焼が可能になったので土坑1が調理施設に変化する。そして、土坑0は灰を入れ置き火を保存したり、蓋をして消し壺とする施設に変化したと考えられている。

- 24 イチマル土坑の確認できた住居に、弥生後期初頭の名東 SA01、黒谷川 I 式の鮎喰遺跡 SB2002 と黒谷川郡頭遺跡 SB501、黒谷川 II 式の名東遺跡 SA01、黒谷川 IV 式の名東遺跡 SA02 と貞光前田遺跡 SB2003 などがある。(岡山真知子「V 考察 1 竪穴住居の様相」『鮎喰遺跡』(財)徳島県埋蔵文化財センター 2000 の第 123・124 図を参考にした。)
- 25 (財)大阪文化財センター 『久宝寺南(その1)』1987
- 26 河田泰之「大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開」『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター 1996
- 27 兵庫県教育委員会『播磨・長越遺跡』1978
- 28 本田奈都子「古墳時代前期の讃岐と畿内」『文化財学論集』奈良大学文学部考古学研究室 1994
- 29 岸本雅敏「古代国家と塩の流通」『古代史の論点』3 小学館 1998

引用・参考文献

梅木謙一 2004「西瀬戸内地方における庄内期東四国系土器の検討」『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会

表1 讃岐・阿波・播磨系土器と製塩土器一覽(1)

番号	遺跡名	所在地	遺構等	時期	讃岐	阿波	播磨	製塩土器		文献		
								他地域	在地他			
1	倉垣遺跡	豊能郡能勢町	一 竪穴住居3	布古-中		(壺)				1		
2	安満遺跡	高槻市高垣町他	1 包含層	—		壺2				2		
			2 井戸1	—	壺					2		
			3 井戸3	布古		壺					2	
			4 井戸1	庄中		壺					3	
3	芥川遺跡	高槻市紫町	一 溝8	—		壺			4			
4	郡家川西遺跡	高槻市清福寺町	一 38K地区方形周溝墓2	—	大型壺				5			
5	溝咋遺跡	茨木市学園前	1 A区7層	—		大型壺、壺				6		
			2 2A-1区3面溝123	布古		鉢				6		
			3 2A-2区6面溝120	—		壺2			脚台2	6		
			4 2A-2区6面溝120砂層	—		壺2、壺		庄内壺	脚台	6		
			5 2A-2区6面土坑165	—		壺				6		
			6 3D区河川2下層	—		大型壺				7		
			7 4次溝7	—		壺				7		
6	東奈良遺跡	茨木市東奈良	1 溝1-S	布古		壺				8		
			2	—			(庄内壺)		9			
7	垂水南遺跡	吹田市垂水町	1 C-5地区土坑	庄古					脚台	10		
			2 D-10地区大溝上層	布初-新	壺					10		
			3 C-8地区土器群	布古-中					脚台	脚台Ⅲ・Ⅳ	10	
			4 不明	—						脚台Ⅲ2、Ⅳ2	10	
			5 河道内落込み	—		壺2				脚台Ⅳ	11	
			6 河道	—		壺					11	
			7 G4土器群	布新				(脚台)			12	
8	目黒遺跡	吹田市目黒町	一 第Ⅳ層	—		(壺)			13			
9	五反島遺跡	吹田市南吹田	1 河道Ⅵ下層	—					脚台Ⅲ	14		
			2 河道Ⅵ上層	—		(壺)		脚台	脚台Ⅳ	14		
			3 河道Ⅲ下層	—				(脚台)		14		
			4 河道Ⅰ下層	—		(壺)				14		
			5 河道Ⅰ上層	—		小丸		脚台4	脚台Ⅲ2	14		
10	山ノ上遺跡	豊中市山ノ上町他	一 1号住居下層	布古					脚台Ⅲ	15		
11	利倉西遺跡	豊中市利倉西	1 1区北土器群6層	庄古	壺					脚台Ⅰ	16	
			2 5区C-4-8SP	—		(壺)					16	
			3 1区南落込み1	庄一布初	壺						16	
			4 1区南第6層	庄一布初	壺						脚台Ⅰ	16
			5 1区南第7層	庄一布初		壺		(庄内壺)			16	
			6 2区南落込み1第7層	庄一布初					脚台		16	
12	島田遺跡	豊中市庄内栄町他	1 1次流路	—					(脚台)	16		
			2 4次北大溝SD1	布		壺、壺2	(庄内壺)		脚台Ⅲ	16		
			3 6次土器群	布初						脚台Ⅲ3	16	
13	庄内遺跡	豊中市庄内栄町他	—			壺	(庄内壺)		16			
14	穂積遺跡	豊中市服部豊町他	1 1次円形周溝SD37	布初		壺		脚台	脚台Ⅱ	16		
			2 1次SK19	庄	(壺)					16		
			3 1次SK22	布初	(壺)					16		
15	小曾根遺跡	豊中市小曾根他	1 8次1区井戸SE1	庄中				(庄内壺)		16		
			2 8次3区11層	布初					脚台2	16		
16	北条遺跡	豊中市北条町	一 第1ブロック	—	(壺)				16			
17	崇禅寺遺跡	大阪市東淀川区淡路	1 1区SD01	—		壺				17		
			2 I区包含層	—				脚台		17		
			3 II区土器溜	庄中	大型壺						17	
			4 SK03	庄中		壺					18	
			5	—						脚台Ⅲ	19	
18	藤阪東遺跡	枚方市藤阪中町	一 SH-019	—		(壺)			20			
19	寺川遺跡	大東市寺川	一 SDO2	—		壺			21			
20	鍋田川遺跡	大東市中垣内	一 1区旧流路	—		壺			22			
21	善根寺遺跡	東大阪市善根寺町	一 第4層	—				脚台	23			
22	鬼塚遺跡	東大阪市箱殿町	一 包含層	—		壺			24			
23	西の口遺跡	東大阪市横小路町	一 SD78	庄		壺			25			
24	貝花遺跡	東大阪市横小路町	一 3次第4層	布古		壺2			26			
25	西堤遺跡	東大阪市西堤学園	一 河川	庄新-布古	壺				脚台Ⅱ、Ⅲ2	27		
26	若江遺跡	東大阪市若江本町	一	—					脚台Ⅲ	28		
27	新上小阪遺跡	東大阪市新上小阪	一 第5層	—					脚台Ⅳ	29		
28	龜田遺跡	東大阪市衣摺	一 9層	—					脚台Ⅱ	30		
29	西岩田遺跡	東大阪市西岩田	1	—				脚台	脚台Ⅱ2	28		
			2 第11次第4層	—	壺	鉢				31		
			3 Bトレ土器群1	庄新-布初		壺					32	
			4 Bトレ河川Ⅰ	布初	壺	壺、鉢	脚台2	脚台Ⅲ		32		
			5 Bトレ河川Ⅰ	布初	壺					32		
30	瓜生堂遺跡	東大阪市西岩田町	1 溝224	布初				脚台	32			
31	巨摩(その1)	東大阪市若江西新	1 自然河川Ⅰ	—				脚台	32			
			2 自然河川Ⅱ	布古-中					脚台Ⅲ	32		
32	美園遺跡	東大阪美園町	1 DSK306	庄古		小丸鉢				32		
			2 布留(旧)遺構	—				脚台		32		
			3 Cトレ庄内包含層	—	大型壺					32		
			4 CSD324	—					脚台Ⅲ	32		
33	佐堂遺跡	東大阪市金岡地	一 Cトレ包含層	—		大型壺			33			
34	久宝寺北遺跡	東大阪市大蓮東	1 CトレSD4004	—		壺		脚台	33			
			2 INR4003	—		壺			33			

表1 讃岐・阿波・播磨系土器と製塩土器一覧(2)

番号	遺跡名	所在地	遺構等	時期	讃岐	阿波	播磨	製塩土器		文献	
								他地域	在地他		
35	久宝寺南遺跡	八尾市西久宝寺他	1 K3号墓周溝内下層	布初		穿孔壺				33	
			2 K3号墓K-SX-2	布古		壺、甕				33	
			3 K3号墓K-SX-6	布古		壺				33	
			4 K3号墓上層堆積	布古-中		壺				33	
			5 SD70	後末						(脚台2)	33
			6 SD60	布古	壺2	壺2				脚台Ⅲ	33
			7 土器群1	庄新		壺、鉢					33
			8 SK32	—		壺					33
			9 SK43	布古		壺					33
			10 SD45	布初-古		壺5				脚台	33
			11 SD145	布初		壺					33
			12 Ⅱ-Ⅰ灰色砂層	—		壺					33
			13 Ⅱ-Ⅰ黒色土4	—	壺						33
			14 SD120	—		壺2					33
			15 SX01	庄新-布初	壺	壺					33
			16 SK104	布初		壺					33
36	久宝寺遺跡	八尾市亀井	1 8トレンチ第5層	—	甕	壺、壺2				34	
			2 96-1トレンチ第5-2層	—					脚台	35	
			3 第3層	—					脚台4	36	
			4 304大溝	布初	大型壺						37
			5 405大溝	庄中	大型壺						37
			6 531井戸	庄中	壺					脚台	37
			7 SD1	庄新-布古		壺2				脚台Ⅲ2	38
			8 第8層	布初-古		壺					38
37	加美遺跡	大阪市平野区	1 第7b層	—		鉢			脚台Ⅲ	39	
			2 SX7a01	布古	大型壺2	壺5				39	
			3 SD7a01	布古	大型壺					39	
			4 SX7a02	布古-中		壺					39
			5 SD7b02	布						脚台Ⅲ	39
			6 第7a層	布初						脚台	39
38	亀井北遺跡	八尾市北亀井町他	1 土器群Ⅱ	布初-古		壺				33	
			2 2号墓北西周溝	庄新-布		壺					33
			3 SD8021	布初	壺2						33
			4 土器群Ⅴ	—		壺					33
			5 C地区第Ⅹ層	庄新						(脚台)	33
			6 Bトレ自然流路01	布古						脚台	33
			7 2Eトレ自然流路01	—		壺					33
			8 D地区包含層	布初-古		壺2					33
39	亀井(その1)	八尾市亀井町他	1 SD3021B	V後半					(脚台)	33	
			2 SD2301	Ⅳ末-V初					脚台	40	
40	城山(その3)	大阪市平野区	— SK96	庄中		壺			33		
41	跡部遺跡	八尾市春日町	1 第1次	—		壺				41	
			2 溝を伴う遺構	布古		壺				42	
			3 VI層	布古		壺				42	
			4 第7次包含層	—		壺				43	
			5 Ⅱ区8C西側畦	—						脚台	44
			6 第15次SK101上層	布古		壺					45
			7 SE1	布古						脚台Ⅲ	46
			8 SK3	布古		壺					46
42	太子堂遺跡	八尾市東太子	1 2区SD201上層	布古-中		壺2、壺2				47	
			2 2区SD201下層	布初-古		壺2、壺1				47	
43	西部庵寺遺跡	八尾市幸町	— 第1次SK-1	—		壺			48		
44	萱振遺跡	八尾市萱振他	1 SE03	布古		壺2、壺			脚台4	脚台Ⅲ	49
			2 SK03	布古		壺				脚台Ⅲ4	49
			3 土器溜1	—		壺				脚台Ⅲ	49
			4 包含層	—					脚台	脚台Ⅲ	49
			5 Dトレンチ	—		壺					50
45	東郷遺跡	八尾市桜ヶ丘他	6 第6次第6層	—	壺					51	
			7 第7次SD11	庄新-布初		壺、鉢					52
			8 SK4004	庄新	壺						53
			1 SX1	庄古		壺					54
			2 自然流路	—		壺3、鉢					55
			3 第5次SD9上層	布初		鉢					56
			4 第5次SK4	—						脚台Ⅲ	56
			5 第20次SX4	布古		壺、壺					57
			6 第20次SX5	布初		壺					57
			7 第20次土器棺1	—		壺					57
			8 第14次SK5	—						脚台5	58
			9 第14次SK17	庄新						脚台3	58
			10 第14次包含層	庄-布古		壺				脚台3	58
			11 第16次4e層	—						脚台Ⅱ	58
			12 第18次包含層	—						脚台	58
			13 第28次SD1	布古		壺					59
			14 第33次SK2	布古		壺3					60
			15 第43次土器棺1	—		大型壺					61
46	成法寺遺跡	八尾市南本町	1 NR301	庄新-布古		壺				64	
			2 Ⅱ区SD303下層	V後半					(脚台)	65	

表1 讃岐・阿波・播磨系土器と製塩土器一覽(3)

番号	遺跡名	所在地	遺構等	時期	讃岐	阿波	播磨	製塩土器		文献		
								他地域	在本地			
47	小阪合遺跡	八尾市青山他	1 A-Ⅲa区落込み7	布古		壺5				66		
			2 A-Ⅲ区包含層	—	甕					66		
			3 23n区落込み27	—		壺				67		
			4 28n区SD316	布初		壺				67		
			5 第2区第7層	—		壺				68		
			6 第3区包含層	—		壺				68		
			7 第5区SK2	庄新		壺				68		
			8 第5区河川1	—		壺				68		
			9 第7区SD1	庄新一布古		壺3、壺5、壺6				68		
			10 第8次1区包含層	—		壺				69		
			11 第8次2区包含層	—		壺				69		
			12 第10次2区SW1	庄古一新		壺				69		
			13 第13次1区包含層	—		壺				69		
			14 第13次3区河川1	—		壺2、壺				69		
			15 第20次NR2	—		壺2、壺				70		
			16 第19次2区NR301	—		壺				71		
			17 第38次SK102	—		壺				72		
			18 住居865	庄新		壺2				73		
			19 川1200	—		壺				73		
			20 包含層	—		壺3		庄内壺		73		
			21 02-2区第3層	布古		壺				74		
			22 02-3区第5層	—		壺				74		
			23 第1区包含層	—		壺				75		
			24 第1区3層	—		鉢				75		
			25 第1区4層	—		壺				75		
			26 第2区541土坑	—		壺				75		
			27 第2区4層	—		壺				75		
48	中田遺跡	八尾市中田他	1 49年度SX01	—				脚台	(脚台)	76		
			2 平成5年度SX01	庄新一布初					(脚台)	77		
			3 39トレンチSX01	庄古					脚台2		78	
			4 第3層	—		壺					79	
			5 第16次SD207	布初		壺3、壺2、鉢2					80	
			6 第16次第7層	庄新一布古		壺3、鉢					80	
			7 第5次SK201	布古		壺2					81	
			8 第5次包含層	—	(壺)	壺2					81	
			9 第6次1区第5層	—		壺					82	
			10 第25次SO301	庄新一布古		壺、壺2			脚台	脚台Ⅲ	83	
			11 第25次第4層	庄新一布初	壺	壺2、壺					83	
			12 第45次SKN101上層	庄新					脚台		84	
			13 第10次SD1	布古		壺4、壺、鉢					85	
49	東弓削遺跡	八尾市八尾木他	1 第5次2G6層	布古					体部	86		
			2 第4次SD1	庄中		壺	庄内壺2			87		
			3 第7次104層	—		壺			脚台Ⅲ	88		
			4 第7次206層	布古		壺					88	
			5 6・7層	布古						(脚台)	89	
50	弓削遺跡	八尾市志紀南町	— 第1調査区包含層	布古		壺			90			
51	木の本遺跡	八尾市南木の本	1 第1層	—					脚台Ⅳ2	91		
			2 SK07	庄新		壺				91		
			3 第8層	—	大型壺						92	
			4 溝0301	—	壺	壺2					93	
52	田井中遺跡	八尾市田井中他	1 95-2区土坑259	布初一古		壺			94			
			2 96-1区第3層	布古	壺					94		
53	志紀遺跡	八尾市志紀町西	— 3A区第5層	—					脚台Ⅳ	95		
			1 SX2	庄新					脚台Ⅲ	96		
54	八尾南遺跡	八尾市若林町	2 SW1	庄新一布初	大型壺					96		
			3 SE26	布新		壺					96	
			4 SK3	庄新					脚台		96	
			5 SK29	庄古	大型壺						96	
			6 SK55	庄新一布初	大型壺						96	
			7 SK77	庄	大型壺						96	
			8 井戸9	布古	壺						97	
			9 土坑34	布初	支脚						97	
			10 土坑37	布初					脚台		97	
			11 土坑46-C	—	大型壺						97	
			12 土坑50	庄新		壺					97	
			13 溝17	庄新	壺						97	
			14 溝25	—		鉢					97	
			15 落込み3	—	壺3						97	
			16 落込み8	布初	大型壺、壺	壺					97	
			17	—						(脚台)	98	
			55	長原遺跡	大阪市平野区	1 13次第5d層	—	大型壺				
2 長原7a層	—					壺				100		
56	阿倍野筋遺跡	大阪市阿倍野区	— 第3層	—					脚台Ⅲ3	101		
57	瓜破北遺跡	大阪市平野区	— 包含層	—					脚台7	102		
58	池島・福万寺遺跡	八尾市福万寺町他	1 <落込み3(96-2区)上層	庄中	支脚						103	
			2 94-1・2区土坑12	庄新		壺					103	
			3 97-1区第10層	庄新一布初		壺						104
			4 溝20	—		壺						105
			5 溝630	庄新一布初		壺						106
			6 333溝	庄初		小丸						107
			7 315土坑	布初		壺						107

表1 讃岐・阿波・播磨系土器と製塩土器一覽(4)

番号	遺跡名	所在地	遺構等	時期	讃岐	阿波	播磨	製塩土器		文献	
								他地域	在地他		
59	水越遺跡	八尾市水越他	1 第2層	—		壺				108	
			2 第1次SK1	庄新		壺				109	
60	船橋遺跡	柏原市古町他	1 (庄内式土器群)	—	大型壺					110	
			2 井戸5	庄中一新					(脚台IV)	111	
			3 表探	—		壺					112
			4 表探	—		壺					113
			5 第5面遺構122	庄新一布初		壺2					114
			6 第5面遺構123	布古		壺					114
			7 第5-2面遺構185	布古		壺					114
			8 468方形周溝墓周溝墓	—	壺	壺2、大型壺					115
			9 467溝	—		壺					115
61	尺度遺跡	羽曳野市尺度	1 510溝	庄					脚台I	116	
			2 198溝	庄新一布初		壺				117	
			3 213井戸	布古		壺				117	
			4 233井戸	—		壺				117	
			5 43井戸	布古		壺2			脚台		118
62	柿ヶ坪遺跡	富田林市佐備	— h-2区	庄新		壺			119		
63	大和川今池遺跡	松原市天美西他	1 土坑19	布				脚台II	120		
			2 34土坑	布新				脚台	121		
64	船尾西遺跡	堺市浜寺船尾西	— SG-001井戸	布古		壺、甕			122		
65	下田遺跡	堺市下田町	1 NR2109	—		壺				123	
			2 SD2206	—		壺				123	
			3 SA2220	布古		壺				123	
			4 ND1	布初一新		壺				124	
66	陵南遺跡	堺市百舌鳥陵南町	— 包含層	—	大型壺				125		
67	小阪遺跡	堺市小阪他	1 表探	—		壺				126	
			2 溝30-a	庄	大型壺					127	
			3 河川8下層	—		壺				127	
			4 河川8上層	—		壺				127	
68	羽衣砂丘遺跡	高石市羽衣	— A地点	—		壺			128		
69	豊中遺跡	和泉市池上町	— 溝5	—		壺			129		
70	春木宮ノ上遺跡	岸和田市八幡町	— 竪穴住居	布古		壺2			130		
71	西大路遺跡	岸和田市西大路町	— 533-OX	庄古		壺			131		
72	田治米宮内遺跡	岸和田市田治米町	— 土坑050	布中		壺			132		
73	脇浜遺跡	貝塚市脇浜	— Ⅲ区中洲付近	布古				脚台	脚台II・III	133	
74	小島北磯遺跡	岬町多奈川小島	1 第2層	—		壺				134	
			2 第3層	—		壺				134	
			3 第4層	—		壺				134	
			4 その他	—		壺				134	

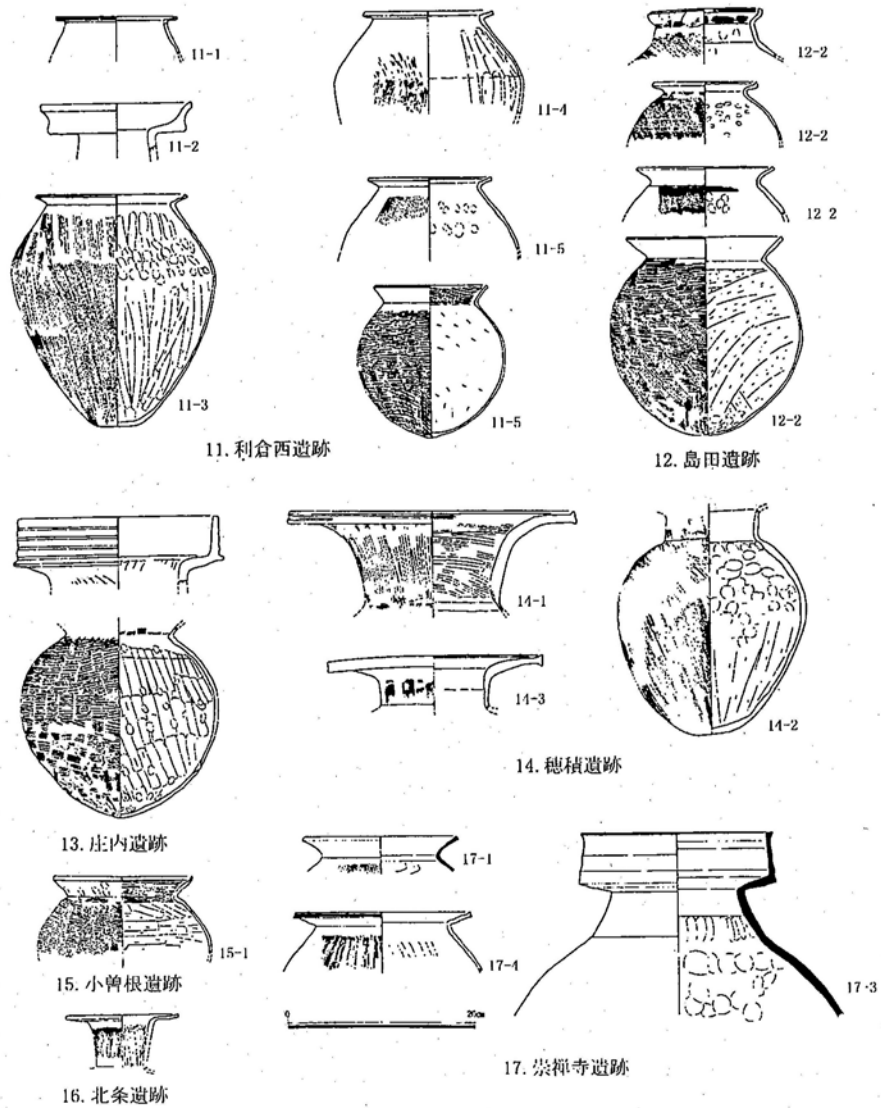


図8 摂津中部地域(2)

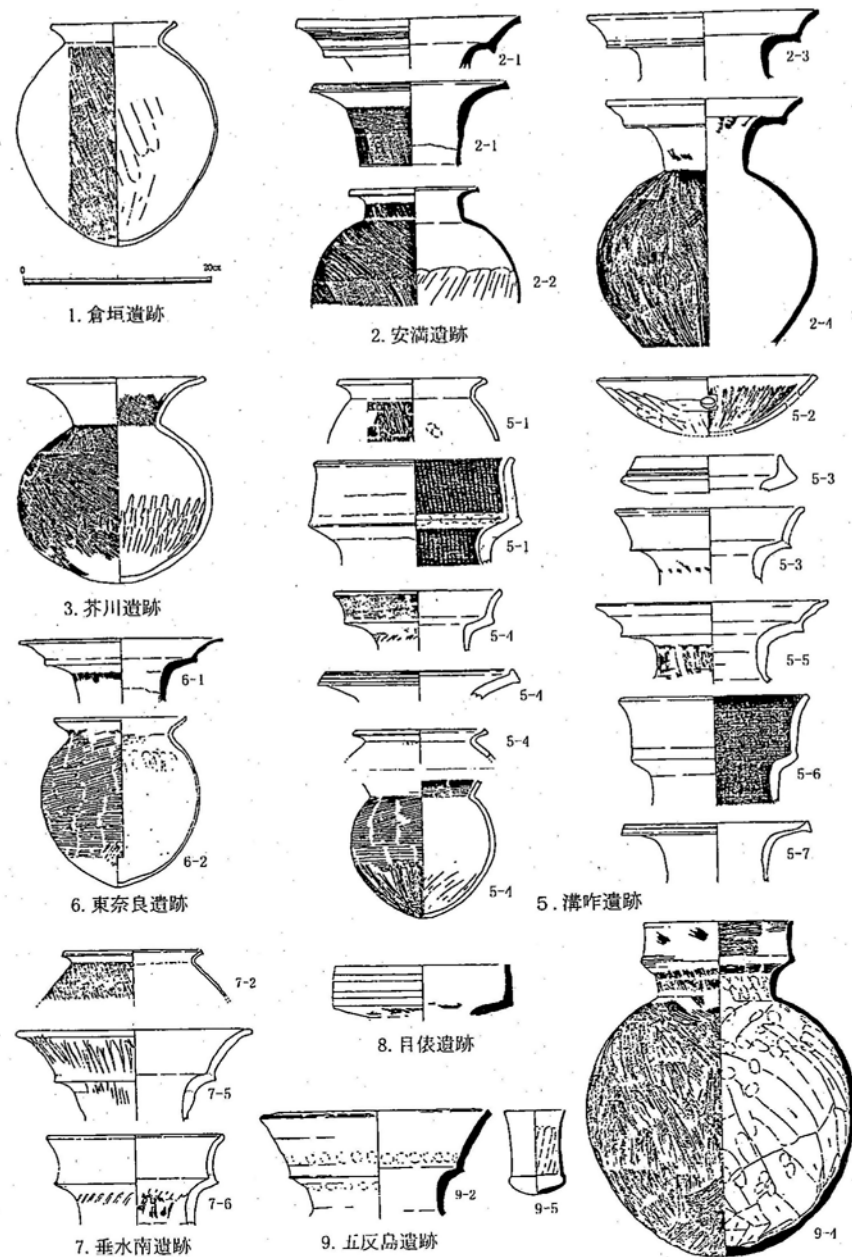


図7 摂津東部地域・摂津中部地域(1)

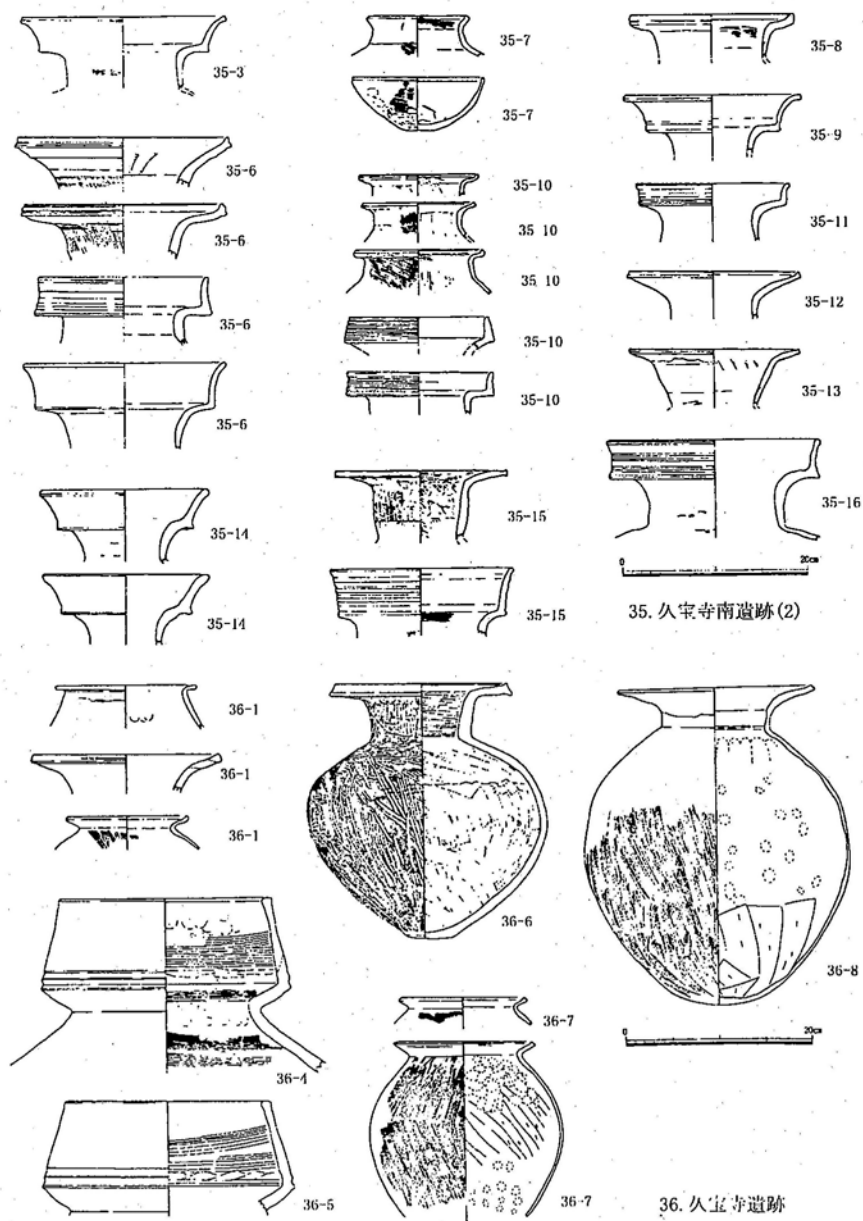


图10 中河内地域(2)

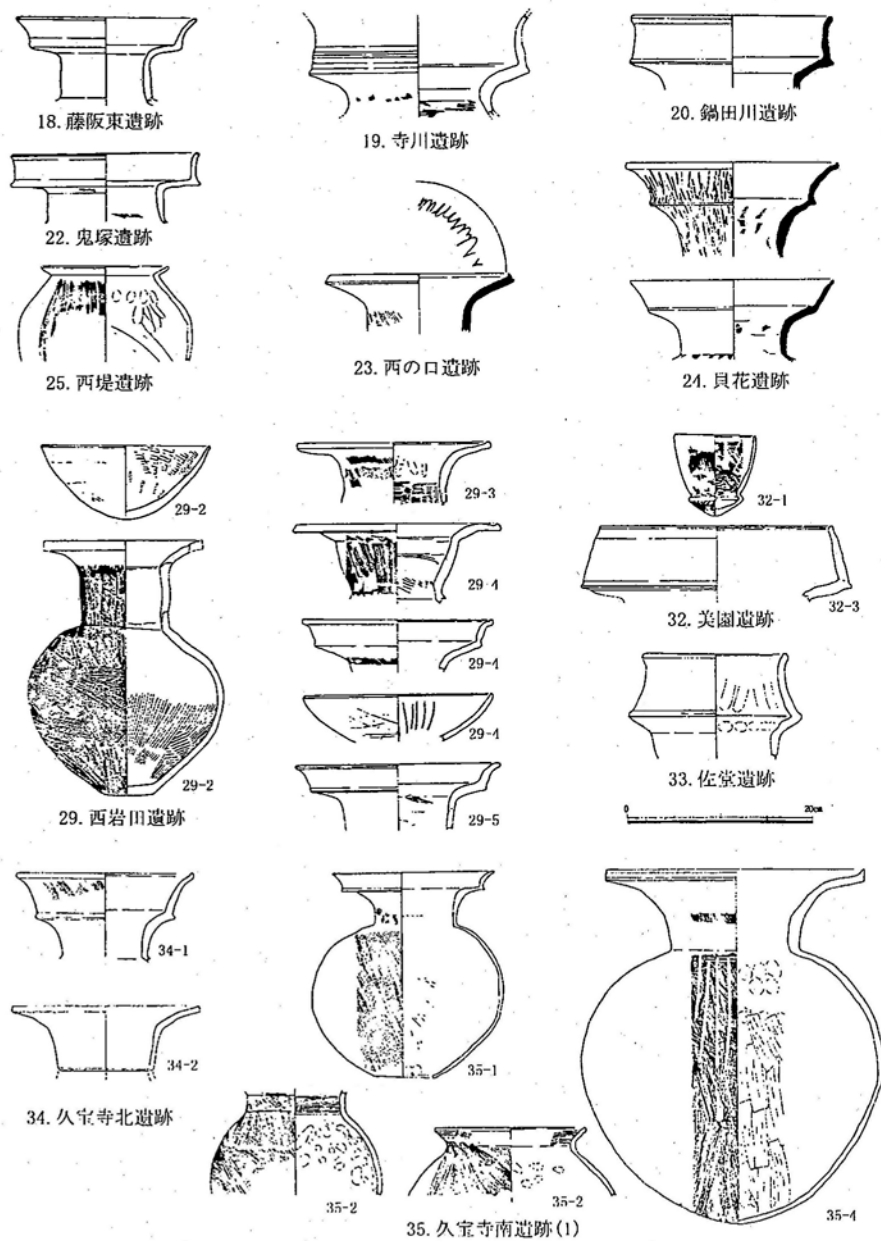


图9 北河内地域・中河内地域(1)

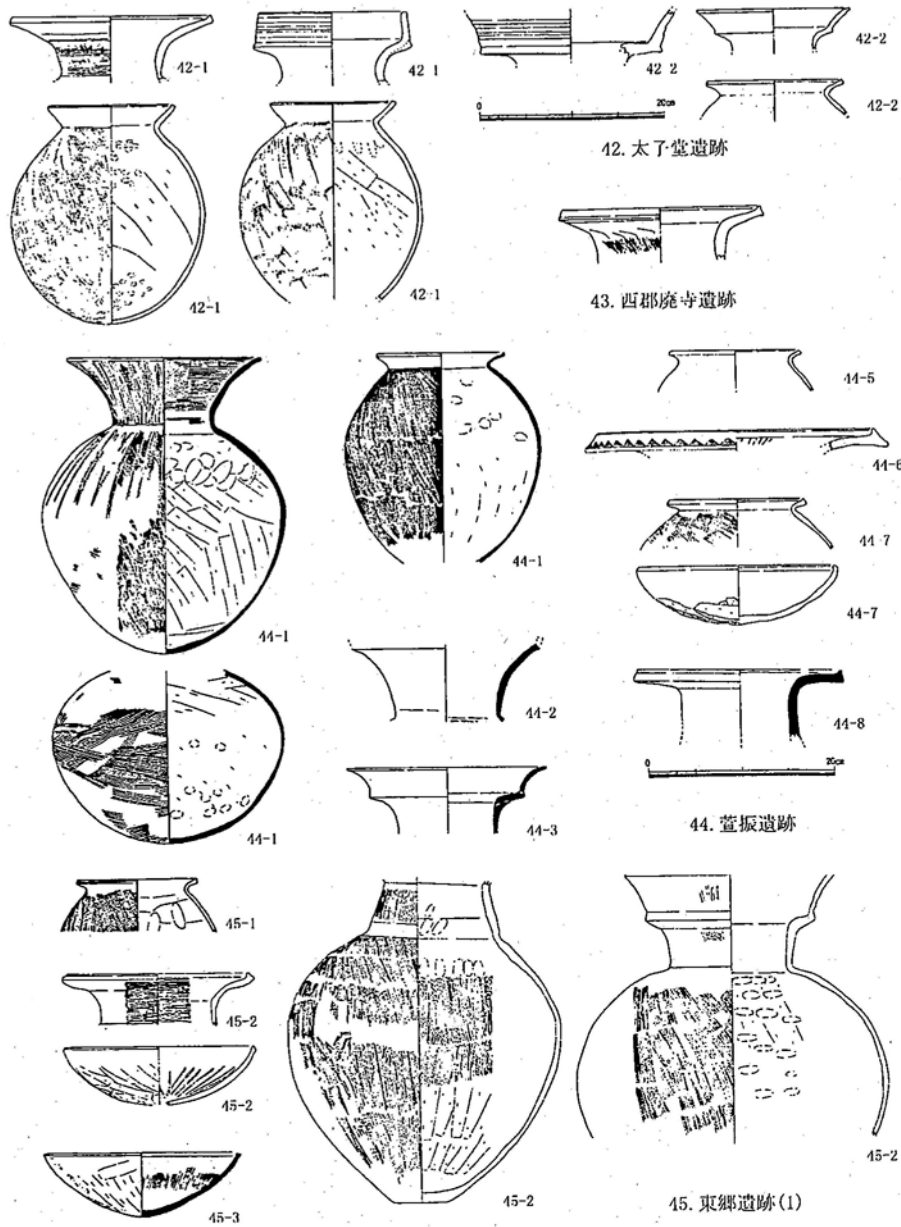


图12 中河内地域(4)

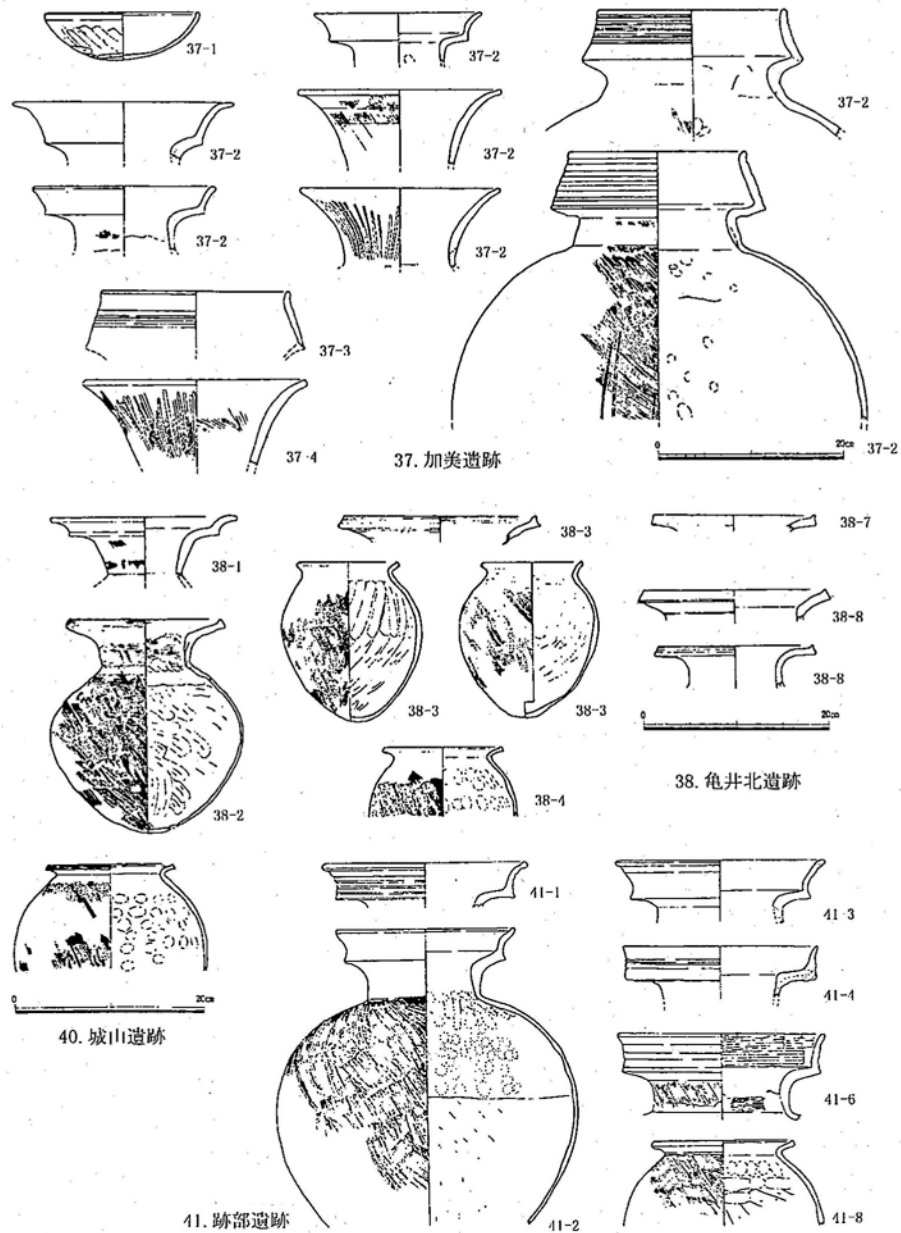


图11 中河内地域(3)

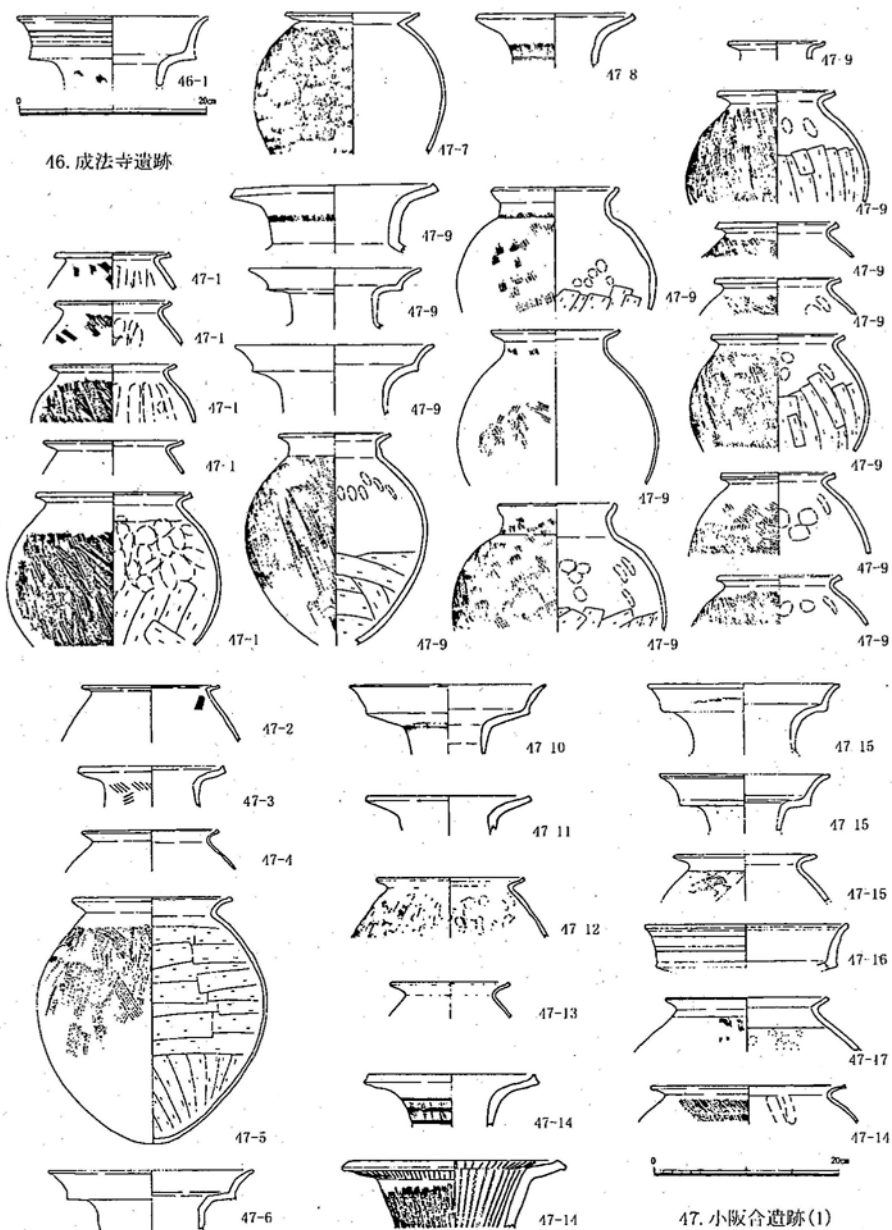


图14 中河内地域(6)

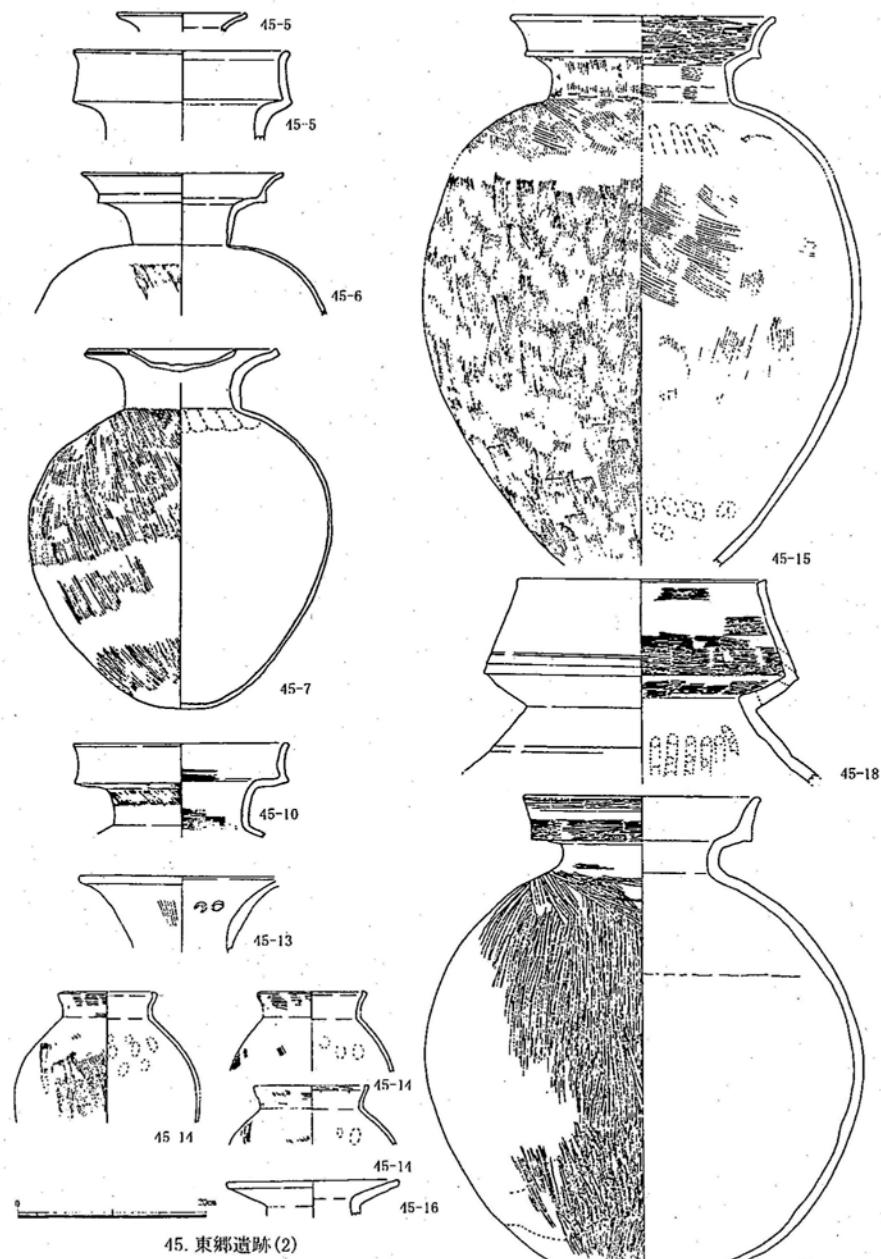
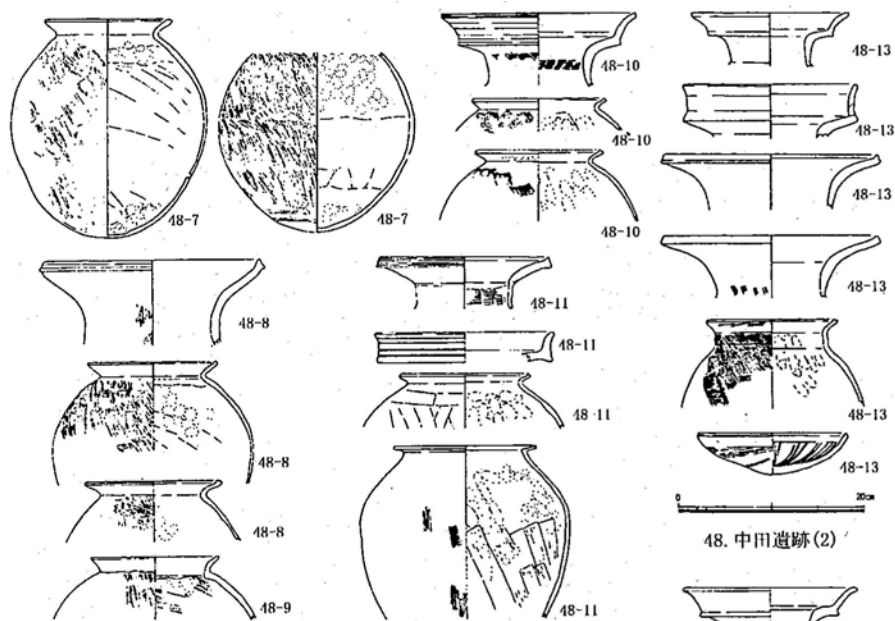
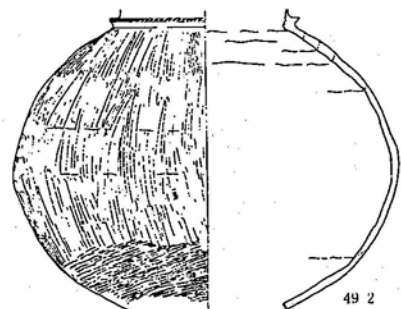


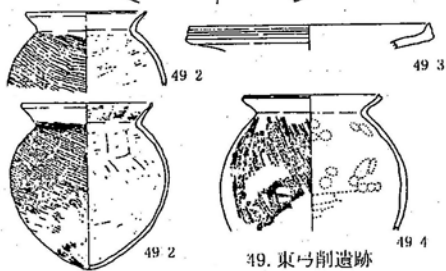
图13 中河内地域(5)



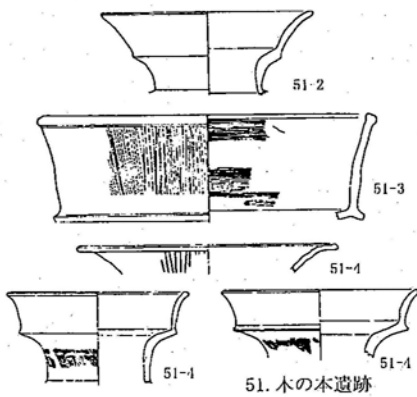
48. 中田遺跡(2)



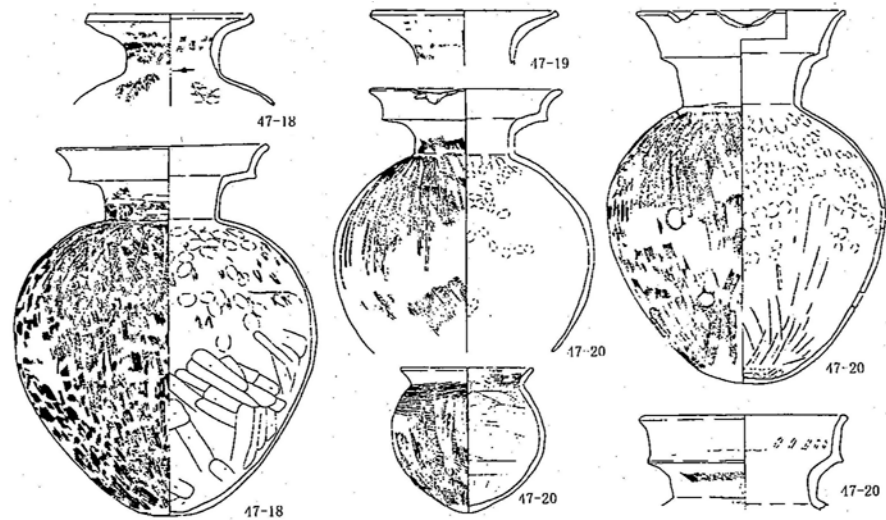
50. 弓削遺跡



49. 東弓削遺跡



51. 木の木遺跡



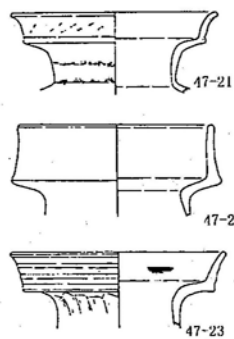
47-18

47-19

47-20

47-20

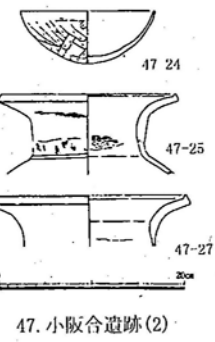
47-20



47-21

47-22

47-23

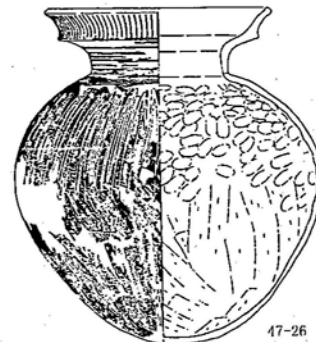


47 24

47-25

47-27

47. 小阪合遺跡(2)



47-26



48. 中田遺跡(1)

图15 中河内地域(7)

图16 中河内地域(8)

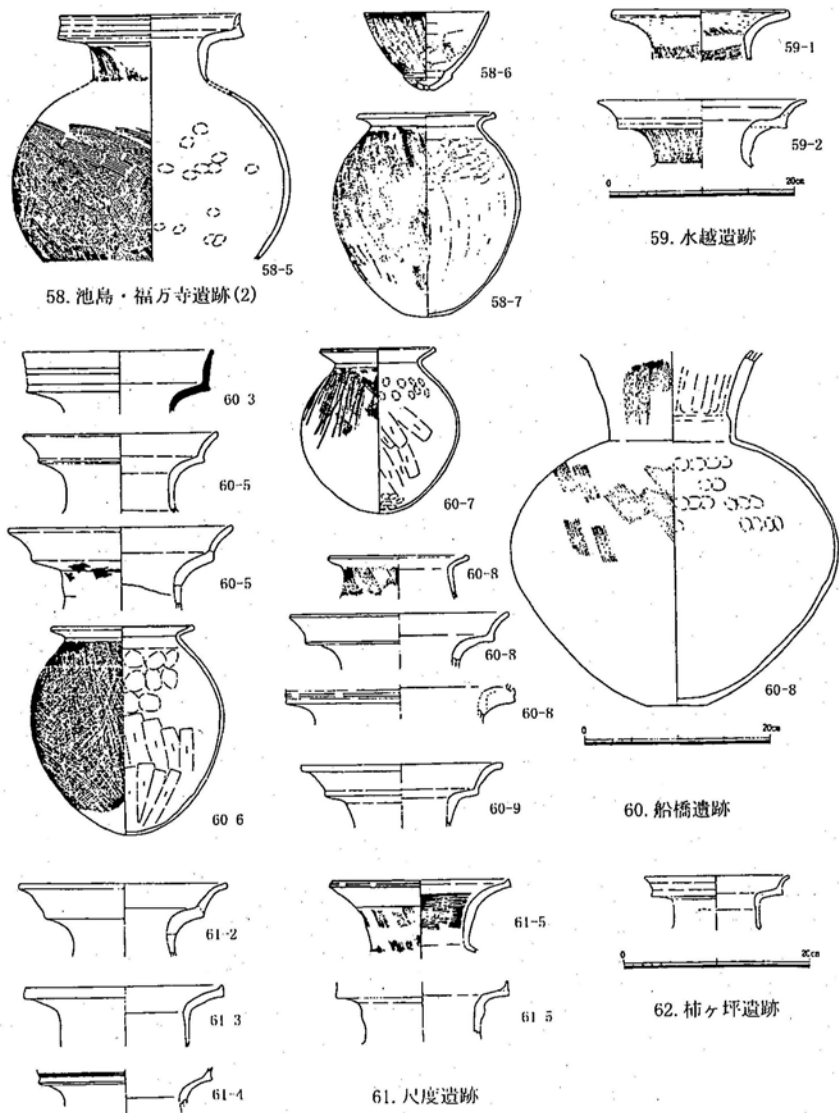


图18 中河内地域(10)・南河内地域

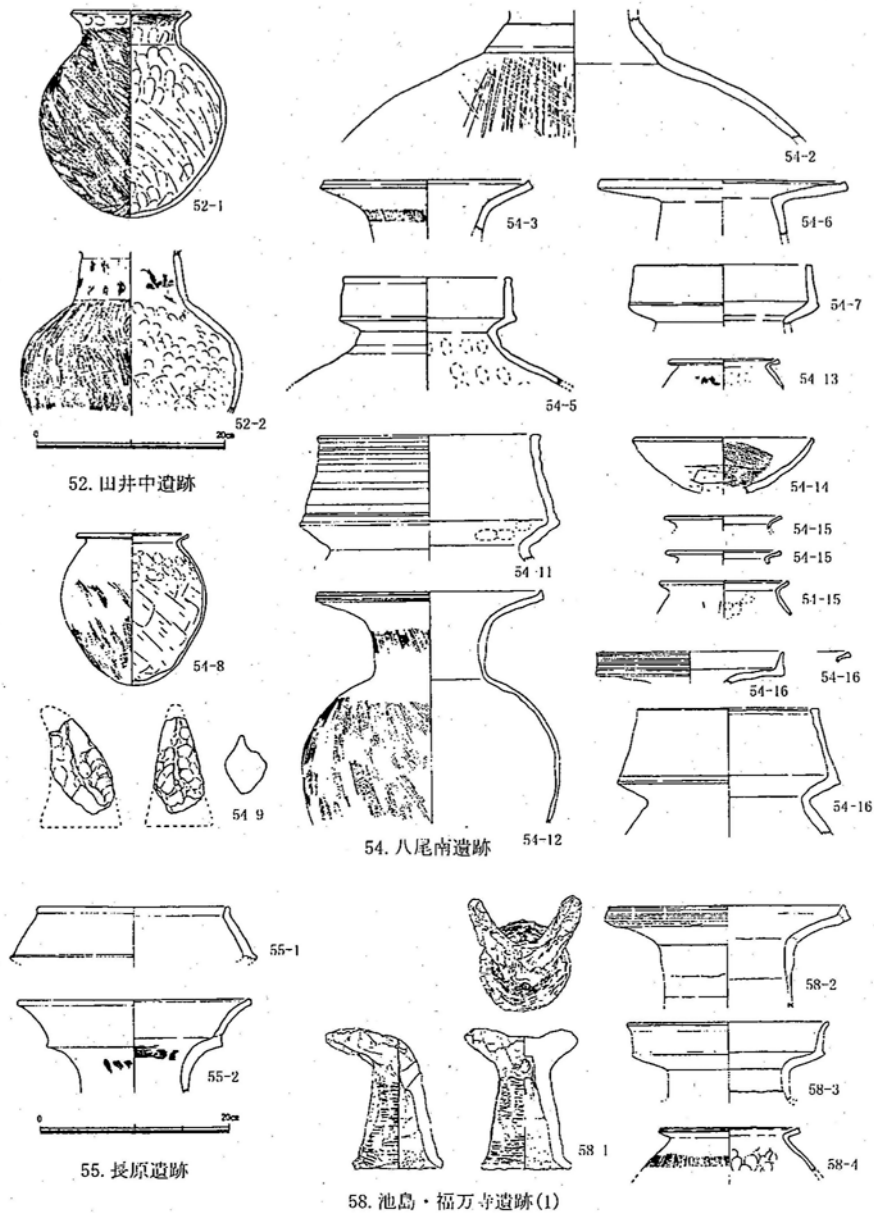


图17 中河内地域(9)

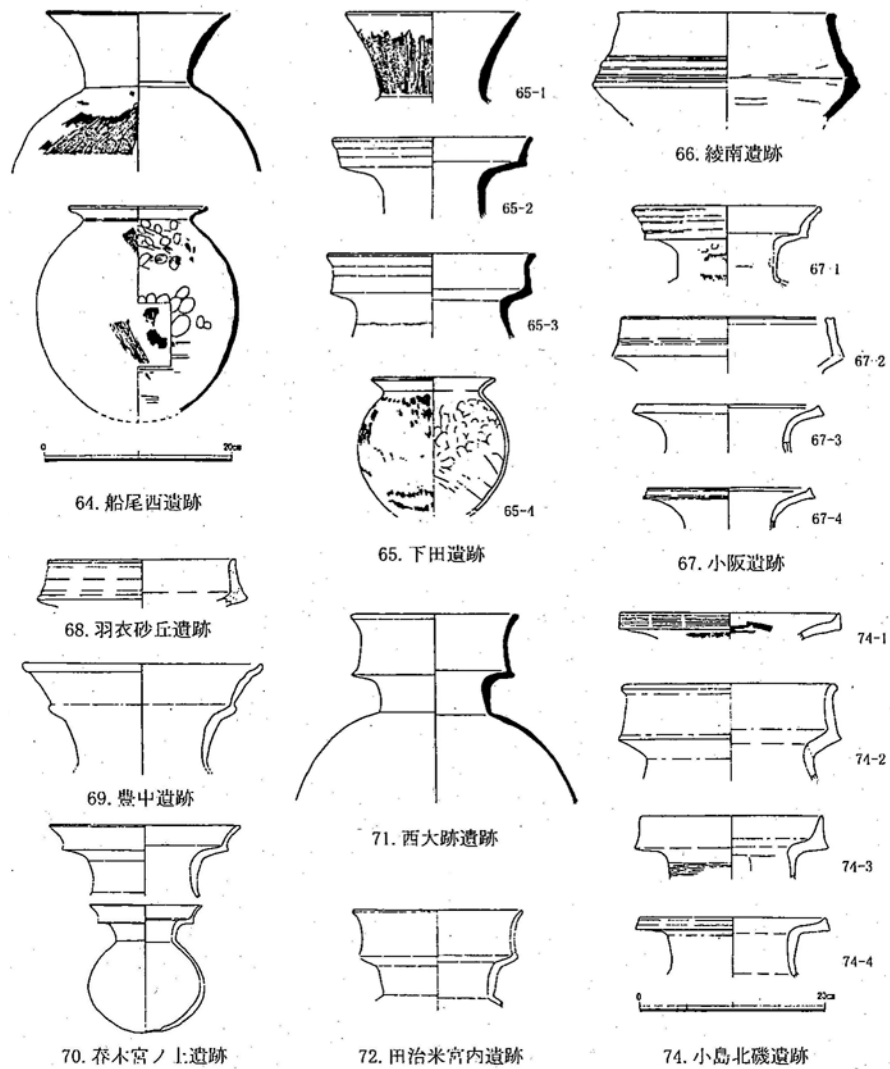


图19 和泉地域

表1の文献

- 1 大阪府教育委員会『倉垣遺跡・長谷のガマ等発掘調査概要』2000
- 2 高槻市教育委員会『安満遺跡発掘調査報告書-9地区の調査-』1977
- 3 高槻市教育委員会『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・13』1989
- 4 高槻市教育委員会『芥川遺跡発掘調査報告書』1995
- 5 大阪府教育委員会『嶋上郡衙跡発掘調査概要・Ⅲ』1973
- 6 (財)大阪府文化財調査研究センター『溝咋遺跡(その1・2)』2000
- 7 (財)大阪府文化財調査研究センター『溝咋遺跡(その3・4)』2000
- 8 東奈良遺跡調査会『東奈良 発掘調査概要』1976
- 9 浜野俊一他『庄内併行土器の様相をめぐる摂津地域の動向』『庄内式土器研究』XⅡ 1996
- 10 米田文孝『搬入された古式土師器』『関西大学考古学研究室開設三拾周年記念 考古学論叢』1983
- 11 吹田市教育委員会『昭和58年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1984
- 12 吹田市教育委員会『平成7年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1996
- 13 吹田市教育委員会『目依遺跡』1999
- 14 吹田市教育委員会『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書 遺物編』2003
- 15 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1984年度』1985
- 16 豊中市『新修 豊中市史』第4巻考古 2005
- 17 大阪府教育委員会『崇禪寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1982
- 18 (財)大阪市文化財協会『崇禪寺遺跡発掘調査報告Ⅰ』1999
- 19 大阪府教育委員会『崇禪寺遺跡』2003
- 20 (財)枚方市文化財研究調査会『藤阪東遺跡Ⅱ』
- 21 大東市教育委員会『寺川遺跡発掘調査報告書』2003
- 22 大阪府教育委員会『鍋田川遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1992
- 23 東大阪市教育委員会『善根寺遺跡第1次発掘調査概要報告』2003
- 24 東大阪市遺跡保護調査会『鬼塚遺跡Ⅱ』『鬼塚遺跡Ⅱ. 若江遺跡』1979
- 25 (財)東大阪市文化財協会『西の口遺跡第1次発掘調査概要』1987
- 26 (財)東大阪市文化財協会『貝花遺跡第3次発掘調査報告書』1999
- 27 西堤遺跡調査団『西堤遺跡』1991
- 28 才原金引『東大阪市内出土の製塩土器』『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』1980
- 29 (財)大阪府文化財調査研究センター『新上小阪遺跡2』2003
- 30 (財)大阪府文化財センター『弓削ノ庄遺跡他』2005
- 31 (財)東大阪市文化財協会『西岩田遺跡第11次発掘調査概報』『(財)東大阪市文化財協会概報集 1988年度』1989
- 32 (財)大阪府文化財調査研究センター『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』1998
- 33 (財)大阪府文化財調査研究センター『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』1999
- 34 (財)大阪府文化財調査研究センター『久宝寺遺跡・竜華地区(その1) 発掘調査報告書』1996
- 35 (財)大阪府文化財調査研究センター『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ』1998
- 36 (財)大阪府文化財調査研究センター『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ』2003
- 37 (財)大阪府文化財調査研究センター『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』2004
- 38 (財)八尾市文化財調査研究会『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書』2001
- 39 (財)大阪市文化財協会『加美遺跡発掘調査報告Ⅰ』2003
- 40 (財)大阪文化財センター『亀井(その2)』1986
- 41 (財)八尾市文化財調査研究会『19 跡部遺跡(第4次調査)』『八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度』1989
- 42 (財)八尾市文化財調査研究会『跡部遺跡発掘調査報告書』1991
- 43 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅰ跡部遺跡(第7次調査)』『八尾市文化財調査研究会報告39』1993
- 44 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅱ跡部遺跡(第11次調査)』『八尾市文化財調査研究会報告58』1997
- 45 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅲ跡部遺跡(第15次調査)』『八尾市文化財調査研究会報告58』1997
- 46 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅱ跡部遺跡(第23次調査)』『八尾市文化財調査研究会報告81』2004
- 47 (財)八尾市文化財調査研究会『太子堂遺跡 第1次調査・第2次調査調査報告書』1993
- 48 八尾市教育委員会他『Ⅲ西郡廃寺遺跡第1次調査』『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告Ⅰ』
- 49 大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1983
- 50 大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1984
- 51 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅰ萱振遺跡(第6次調査)』『萱振遺跡』1996
- 52 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅱ萱振遺跡(第7次調査)』『萱振遺跡』1996
- 53 大阪府教育委員会『萱振遺跡』1992
- 54 八尾市教育委員会『1. 東郷遺跡の調査』『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』1986
- 55 大阪府教育委員会『東郷遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1989
- 56 (財)八尾市文化財調査研究会『第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』1983
- 57 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅲ東郷遺跡(第20次調査)』『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度』1987
- 58 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅰ東郷遺跡(第11~16.18次調査)』『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和63年度』1989
- 59 (財)八尾市文化財調査研究会『3 東郷遺跡(第28次調査)』『八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度』1989
- 60 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅳ東郷遺跡(第33次調査)』『八尾市文化財調査研究会報告41』1993
- 61 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅳ東郷遺跡(第43次調査)』『八尾市文化財調査研究会報告42』1994
- 62 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅰ東郷遺跡(第25次調査)』『八尾市文化財調査研究会報告45』1995
- 63 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅱ東郷遺跡(第44次調査)』『八尾市文化財調査研究会報告61』1998
- 64 大阪府教育委員会『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1987
- 65 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅰ成法寺遺跡(第5次調査)』『平成4年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』1992
- 66 (財)八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡(昭和57年度 第1次調査報告書)』1987
- 67 (財)八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡(昭和58年度 第2・3次調査報告書)』1987
- 68 (財)八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡(昭和59年度 第4次調査報告書)』1988
- 69 (財)八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡(八尾市文化財調査研究報告26)』1990
- 70 (財)八尾市文化財調査研究会『Ⅲ小阪合遺跡(第20次調査)』『八尾市文化財調査研究会報告41』1993

表1の文献

- 71 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅱ小阪合遺跡(第19次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告41』1993
- 72 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅵ小阪合遺跡(第38次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告78』2004
- 73 (財)大阪府文化財調査研究センター『小阪合遺跡』2000
- 74 (財)大阪府文化財調査研究センター『小阪合遺跡(その2)』2004
- 75 (財)大阪府文化財センター『小阪合遺跡(その3)』2005
- 76 八尾市教育委員会『中田遺跡』1975
- 77 八尾市教育委員会「7. 中田遺跡(93-289)の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅱ』1994
- 78 大阪府教育委員会『中田遺跡発掘調査概要』1986
- 79 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅵ中田遺跡(第7次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告34』1992
- 80 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅰ中田遺跡(第16次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告43』1994
- 81 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅰ中田遺跡(第5次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告49』1995
- 82 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅱ中田遺跡(第6次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告49』1995
- 83 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅱ中田遺跡第14・25次調査」『中田遺跡』1997
- 84 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅰ中田遺跡(第45次調査)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告2』2001
- 85 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅵ中田遺跡(第10次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告81』2004
- 86 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅴ東弓削遺跡(第5次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告32』1991
- 87 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅰ東弓削遺跡(第4次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告37』1993
- 88 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅴ東弓削遺跡(第7次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告61』1998
- 89 八尾市教育委員会「4-2. 東弓削遺跡(97-675)の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅱ』1999
- 90 大阪府教育委員会『中垣内・志紀・弓削・太平寺遺跡発掘調査概要』1995
- 91 大阪府教育委員会『木の本遺跡発掘調査概要』1996
- 92 大阪府教育委員会『木の本遺跡発掘調査概要・Ⅲ』1999
- 93 大阪府教育委員会『木の本遺跡』2004
- 94 (財)大阪府文化財調査研究センター『田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)』1997
- 95 (財)大阪府文化財調査研究センター『志紀遺跡(その2・3・5・6)』2002
- 96 八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』1981
- 97 大阪府教育委員会『八尾南遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1991
- 98 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅶ八尾南遺跡(第22次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告54』1996
- 99 (財)大阪市文化財協会『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ』2000
- 100 (財)大阪市文化財協会『長原・瓜破遺跡発掘調査報告XV』2000
- 101 (財)大阪市文化財協会『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』1999
- 102 (財)大阪市文化財協会『瓜破北遺跡』1980
- 103 (財)大阪府文化財調査研究センター『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要 XXⅢ』1997
- 104 (財)大阪府文化財調査研究センター『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要 XXⅤ』2001
- 105 (財)大阪府文化財調査研究センター『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要 28』2002
- 106 (財)大阪府文化財調査研究センター『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要 30』2005
- 107 (財)大阪府文化財調査研究センター『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要 33』2006
- 108 八尾市教育委員会「9. 水越遺跡(63-354)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』1989
- 109 (財)八尾市文化財調査研究会「Ⅰ水越遺跡(第1次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告 23』1989
- 110 大阪府教育委員会『船橋遺跡発掘調査概要』1980
- 111 柏原市教育委員会『船橋遺跡』1994
- 112 柏原市教育委員会『北峯古墳群・田辺遺跡』1999
- 113 柏原市教育委員会「第5章 船橋遺跡採集遺物」『安福寺横穴群他調査概報2000年度』2001
- 114 (財)大阪府文化財調査研究センター『船橋遺跡』1998
- 115 (財)大阪府文化財センター『船橋遺跡Ⅱ』2005
- 116 (財)大阪府文化財調査研究センター『尺度遺跡Ⅰ』1999
- 117 (財)大阪府文化財センター『尺度遺跡Ⅱ』2003
- 118 (財)大阪府文化財センター『尺度遺跡Ⅲ』2004
- 119 大阪府教育委員会『柿ヶ坪・尾平・西板持・寛弘寺遺跡発掘調査概要』1995
- 120 大阪府教育委員会『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅸ』1992
- 121 (財)大阪府文化財調査研究センター『大和川今池遺跡(その1・その2)』2000
- 122 堺市教育委員会『船尾西遺跡発掘調査抄報』1978
- 123 (財)大阪府文化財調査研究センター『下田遺跡』1996
- 124 下田遺跡調査団『堺市 下田遺跡』1998
- 125 陵南遺跡調査会『陵南遺跡発掘調査報告書』1975.6
- 126 堺市教育委員会「小阪遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第12冊1983
- 127 (財)大阪文化財センター『小阪遺跡』1992
- 128 高石市『高石市史』第2巻史料編Ⅰ1986
- 129 和泉市教育委員会『府中遺跡群発掘調査概要』1981
- 130 岸和田市教育委員会『春木宮ノ上遺跡』2000
- 131 (財)大阪府埋蔵文化財協会『西大路遺跡』1988
- 132 岸和田市教育委員会『田治米宮内遺跡』1999
- 133 (財)大阪府埋蔵文化財協会『脇浜遺跡』1986
- 134 (財)大阪府文化財調査研究センター『小島北磯遺跡』2000

第2節 大阪府下出土の北部九州系土器

1 はじめに

弥生時代終末から古墳時代初頭期は地域間の交流が活発化する時期である。その結果のひとつとして、在地の土器に混じって、他地域から搬入された土器が多数見られるようになる。大阪においても例外ではなく、ここでは主に西日本の諸地域からの土器が搬入される。山陰、吉備、讃岐、阿波系などが多数を占め、時たま北陸、東海、駿河、関東系などの東日本の土器が混じる。つまり西方からの強い物流が確認できるのであるが、なぜか九州からの搬入土器はほとんど出土しない。九州系土器がこれほどに少ないのは、実数自体が少ないことは確かとしても、形態や胎土の特徴に乏しいことによる認識不足も大きいと感じる。当該期の北部九州地域には流通の巨大拠点形成されており、その意味で九州系の希薄さは意外であり、決して単純でない当時の流通、あるいは社会の状況を反映しており、その実態解明は急務と考える。

2 大阪府出土の北部九州系土器

大阪府で確認できる九州系は、現状では北部九州系に限られ、和泉市池上曾根遺跡、同府中遺跡、大阪市加美遺跡¹⁾に各1点がある。

池上曾根遺跡（和泉市池上町他）

本資料が出土したのは、昭和62年度事業府道松ノ浜曾根線建設工事に伴う発掘調査によるもので、すでに『概要』²⁾が刊行されている。しかしながら、本資料およびその出土遺構については未報告である。

北部九州系土器（図1-1）は、SD42から出土した。外反する口縁を有する中型の甕で、頸部に刻み目を施した断面三角形の低い突帯をめぐらせる。口径約30cm、体部最大径は肩部にあり約29.3cmで、府中例のように肩は張らない。頸部刻み目は、ハケ状工具

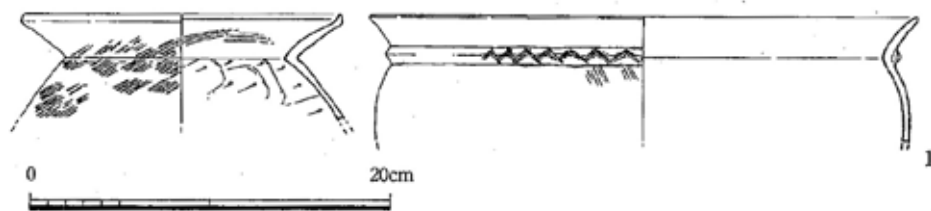


図1 池上曾根遺跡SD42出土遺物

で鋸歯文状に施すもので、部分的に単位が確認できる。口縁端部は尖らせており、体部の器壁は0.4cm弱で薄い。調整は体部外面に右下がりのハケ目（5条/cm）が部分的に残存する以外は、磨滅のため不明。胎土は微細～1mmの石英とチャートを主体にした砂粒を含む。焼成（残存）はあまい。色調は橙色（5 Y R 7/8）を呈する。本資料は器壁が薄く鋸歯文状刻み目などの類例は多くないものの、北部九州地域の西新町式の範疇で理解できる資料³⁾である。

図1左は、共伴した生駒西麓産胎土の河内型庄内甕である。外傾する口縁部に端部を上方につまみ上げる甕で、頸部はややしぼる。口径17.4cm。体部外面にやや細筋の右上がりタタキ目（7条/cm）、内面はヘラケズリを施す。口縁部外面には体部と同単位のタタキ目が残存し、口縁を叩き出した痕跡である。最終的にヨコナデで仕上げる。胎土は微細～1mmの角閃石、雲母、長石を主体に、2～4mm大の角ばった長石も目立つ。焼成は良好。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）である。庄内3式に位置付けることが可能である。

府中遺跡（和泉市府中町）

本資料は、昭和59年度事業の府道と泉中央線拡幅工事に伴う発掘調査によって出土したもので、すでに『概要』⁴⁾が刊行されている。

北部九州系土器（図3-2）は、SX03下層から出土している。SX03は方形周溝墓と考えられ、溝中央部に陸橋を有するタイプで、部分的な調査ながら周溝を含めた規模は一辺24.7mと巨大である（図2）。『概要』では、その周溝出土遺物は上下2層に分別されて報告されている。北部九州系は、若干外反する口縁を有する大型の甕である。『概要』ではこの土器について、「頸部に刻み目を施した高い凸帯をめぐるせ、短く外反する口縁部をもつ壺である。口径39.8cm、残存高9.4cm、凸帯上の刻み目は深い。口頸部から胴部外面に縦方向のハケメを施す。胎土は精良で、色調は明褐色である。搬入品の可能性が強く、『弥生式土器集成本編1』PL.9の193～195のような形態の土器と考えられる」と報告

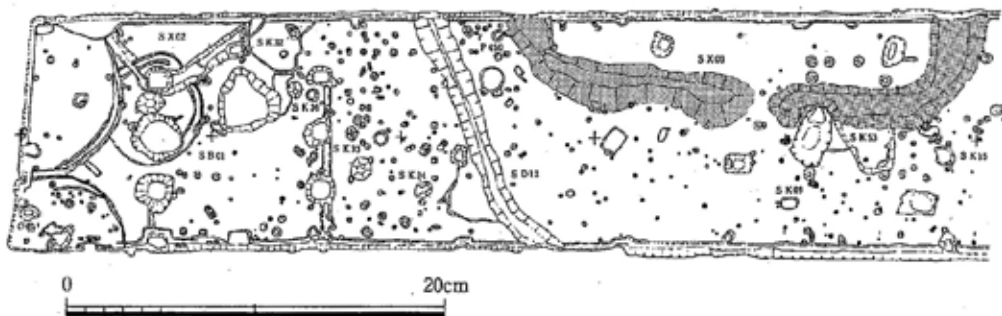


図2 府中遺跡遺構図（註4より抜粋。一部改変）

がなされ、北部九州系であることが示唆されている。ハケ目は8条/cm単位の左斜上方のもの。頸部刻み目内には木目が観察でき、ハケ状工具で施文されたことがわかる。色調は黒斑部分を除外すれば明赤褐色（2.5YR5/8）である。なお、体部内面は磨滅が著しいが、部分的に左斜上方へのハケ目が残存しており、ハケ目仕上げであったことがわかる。

本資料は形態の特徴から、福岡西部から糸島地域に分布する大型の甕で、時期は下大隈

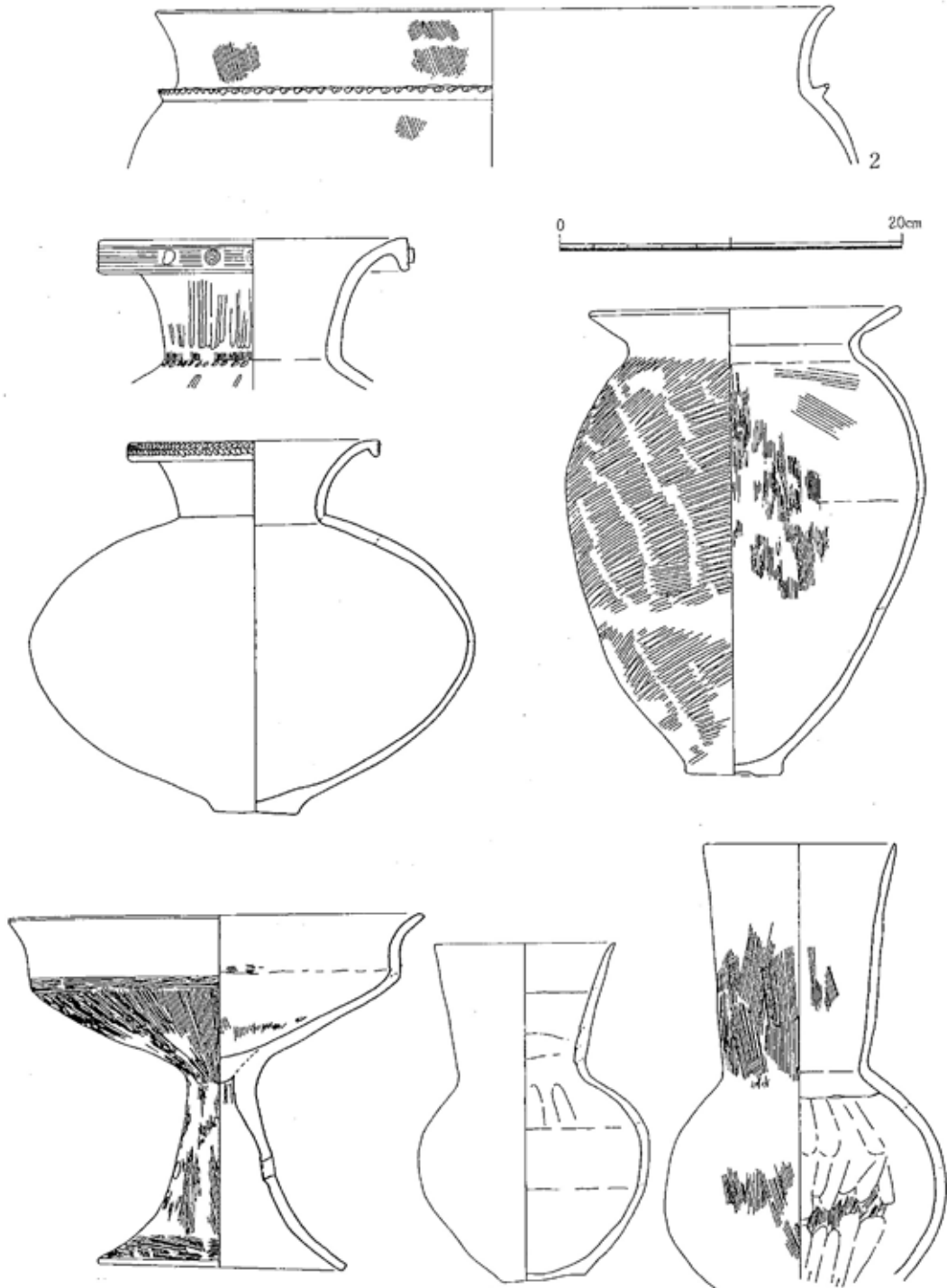


図3 府中遺跡SX03下層出土遺物(註4より抜粋)

式新相から西新町古相に位置付け得る⁵⁾ ようである。共伴する在地土器は、ハケ目仕上げの長頸壺や高坏の形態からみて和泉V-3様式⁶⁾ 程度に位置付けられる。

3 近畿の北部九州系土器

北部九州系が少ないのは、大阪のみの状況ではない。現状で近畿における北部九州系は、奈良県桜井市纏向遺跡、同 纏向石塚古墳々丘盛土内、奈良県御所市檜原遺跡で各1点、他に可能性のあるものに京都府京都市伏見区水垂遺跡の1点があるにすぎない(図4)。

纏向遺跡(奈良県桜井市)

土坑1から出土した複合口縁壺(4-1)の口縁屈曲部⁷⁾ である。口径29.5cmの大型品。口縁外面に斜格子の線刻文、屈曲部に刻み目を巡らせる。常松氏は形態の特徴から、製作地を福岡平野すなわち「奴国」域を第一候補にあげ、西新式古段階に位置付けている。

他に採集資料であるが、南九州系(4-3)とされる土器⁸⁾ がある。壺の胴部破片で、ハケ状工具で刻み目を施文した突帯を巡らせており、報告者の石野氏は弥生時代終末～古墳時代初頭期で南九州の成川式に比定している。

纏向石塚古墳盛土内⁹⁾ 石塚古墳第8次調査において墳丘盛土内から土器片3,616点が出土し、その内の1点が北部九州系とされている。頸部と肩部の境に刻み目を施した貼り付け突帯の巡る複合口縁壺(4-2)である。淡い褐色を呈し、器壁は厚い。伴出した土器から庄内0～1式に位置付けられる。

檜原遺跡(奈良県御所市)¹⁰⁾

溝4から出土した複合口縁壺(5)の口縁部細片である。屈曲部に刻み目を施す突帯文を巡らせ、この部分の直径が30cmと大型品である。口縁部外面に波状文を巡らせる。淡褐色を呈し、器壁は厚い。伴出した土器から布留1式程度に位置付けられる。なお本遺跡では山陰、吉備、中河内、近江、北陸、東海、南関東からの他地域系土器も出土しており、出土土器に占める比率は高い。

水垂遺跡(京都府京都市)¹¹⁾

SD98から出土した断面三角形突帯を有する大型甕(6)である。直径37.8cm。黄灰色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口縁端部の外傾面、形態、外面ハケ目調整に府中例と共通点が多い。ただし突帯の位置がやや高く、刻み目を施さないことは異なる。なお本遺跡でも他地域系は多数出土しており、山陰と中河内が多く、阿波、近江、東海、北陸がそれにつき、大和、讃岐、丹波は少ない。

以上、わずか7点の事例であるが、その特徴は以下のようにまとめられる。

- 1) 他地域系が集中的に出土する遺跡での出土例が多い。ただし大阪府和泉地域に属する府中と池上・曾根遺跡はいずれも和泉地域で、他地域系の集中する集落ではない。
- 2) 少数でありながら、府中例と纏向石塚例のように他地域系が集中的に出土する前段階の資料がある。

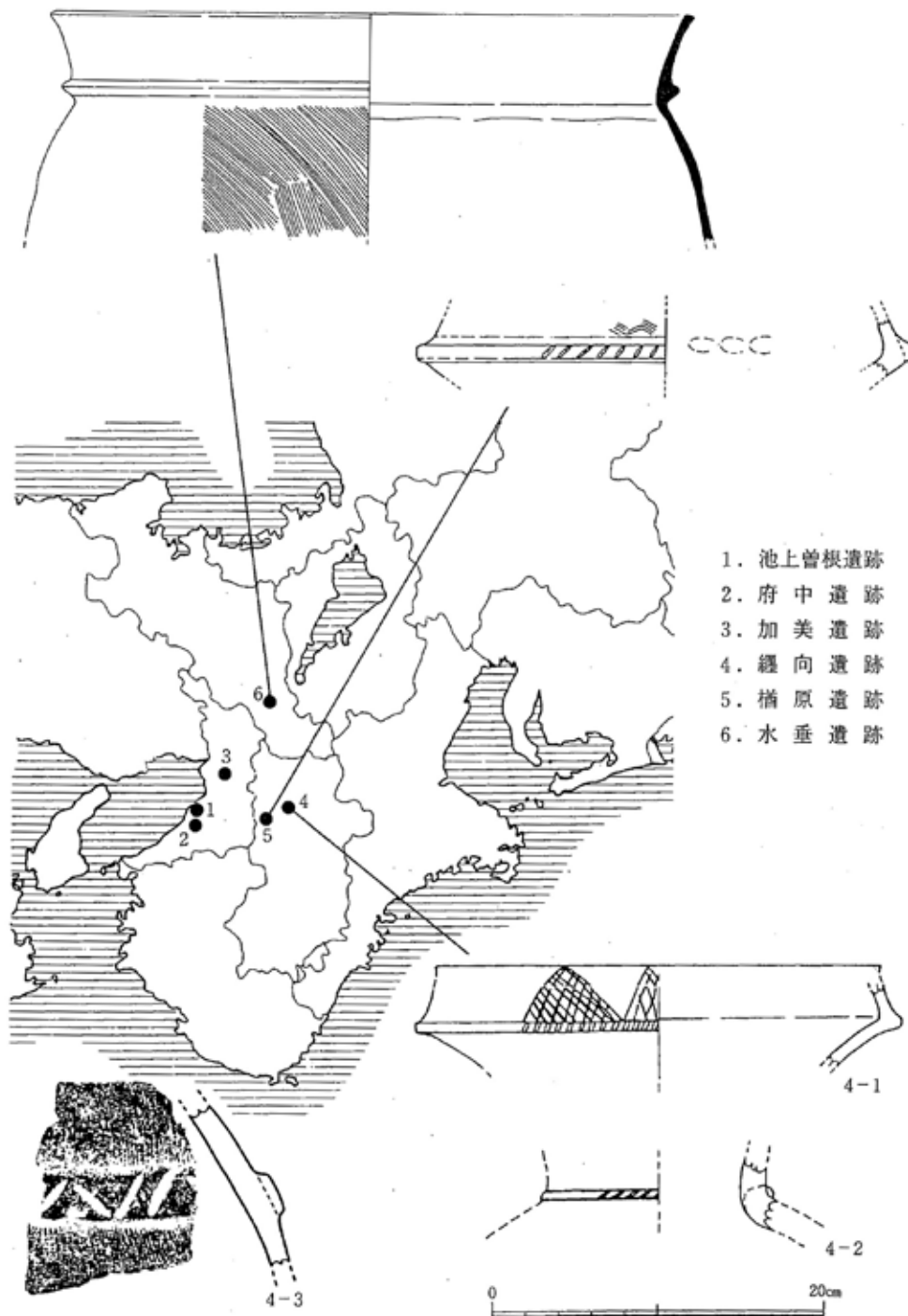


図4 近畿出土の九州系土器 (No4-3のみスケール1/2)

つまり北部九州系は、地域的にもまた時期においてもその他の他地域系とは別の流通に乗った可能性も想定できるかもしれない。今後の資料の増加に期待したい。

4 まとめ

北部九州系土器は、畿内ばかりでなく、ほとんど他地域には流出しないようである。現状で、その原因のひとつが「北部九州系土器の形態や胎土の特徴に乏しいことによる認識不足」によるとして、それが解消されて資料の増加を見込んだとしても、大枠はそれほど動かないと考える。当時、北部九州地域には西新町遺跡、博多遺跡群を港津に、比恵・那珂遺跡群という巨大拠点が存在するにも関わらずである。そのことはおそらく、一部の例外を除いて、西新町遺跡で多量に出土する半島系土器が他地域には流出しないし、博多遺跡群で確認された高度な鍛冶技術が伝播することがないことにも通じる。これらは、そこに半島からの渡来人が居住したために生じた特殊な状況によるのであろうが、そうであっても半島的な文物や高度な技術がストレートに日本各地に伝播するような社会でなかったこともまた確かなのである。

註

- 1 未報告。角南聡一郎「西日本における畿内系甕製作技術の展開」『奈良大学大学院研究年報』第2号 奈良大学 1997の116頁注7において「大阪市加美遺跡の溝より、未発表資料ではあるが西新町式の甕が1点出土している。」とされている。なお、加美例については実見していないので本稿では触れない。
- 2 大阪府教育委員『史跡池上曾根遺跡発掘調査概要』1990
- 3 常松幹雄氏（福岡市教育委員会）の教示を得た。
- 4 大阪府教育委員『府中遺跡発掘調査概要』1985
- 5 岡部裕俊（前原市教育委員会）、久住猛雄、菅波正人、常松幹雄、宮井善朗（福岡市教育委員会）の各氏より教示を得た。
- 6 樋口吉文「和泉地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編』木耳社 1990
- 7 常松幹雄「大和・纏向遺跡における北部九州の壺形土器」『庄内式土器研究』3 庄内式土器研究会 1992
- 8 石野博信「纏向遺跡採集の「南九州」系土器」『青陵』第59号 奈良県立橿原考古学研究所 1986

- 9 橋本輝彦「纏向遺跡の発生期古墳出土の土器について」『庄内式土器研究』14 庄内式土器研究会
1997
- 10 御所市教育委員会『檜原遺跡』1994
- 11 (財)京都市埋蔵文化財研究所『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』1998。図版35－171の
大型甕で、「山陰の土器」と報告されている。

第3節 大阪府下出土の東海・東国系土器

1 はじめに

筆者は、かつて大阪府から出土する東海系土器の実態¹⁾について述べた。それによって、東海系は旧大和川沿いの大阪平野部と河内湖と瀬戸内海の結節点に集中して分布することを確認し、その歴史的な背景について言及した。本節では、それ以降に増加した東海系土器、ならびに新たに確認できるようになった東国系土器を集成し、その歴史的・社会的な背景について再考する。なおここで東国系とした資料は駿河以東のもので、必ずしも明確な地域が特定できるわけではないことは明示しておきたい。

2 大阪府下出土の東海系土器のありかた

前回は25遺跡、今回は42遺跡の資料を抽出できた。資料数は増加し若干の変更点は認められるが、傾向は前回述べた内容に変更はないと考える。以下のようにまとめることができる。

1) 大阪府下で、S字状口縁台付甕（以下、S字甕）A類²⁾の存在が明らかになった。原田遺跡で1例が確認された。他に下田遺跡SD1305の資料も脚部のみながら、裾端部内面に折り返しのない古い形態を示す資料である。粗い単位の口縁端部外面の刺突文、肩が大きく張り口縁端部は面を持たず若干引出す形態、体部内面ナデ仕上げなどはA類新段階の特徴である。共伴する在地土器の編年的位置は不明ながら、庄内期初頭に帰属すると考えられる。

2) 東海系土器の出土数が増加するのは、庄内新相～布留初頭である。S字甕B類中段階以降から目立つ。庄内期初頭の美園遺跡例や近年に増加しつつある岡山・福岡・佐賀県でのS字甕A類・B類古段階の存在からすれば、東海系は中河内を通過したことは確かなのだが、定着することはなかったのである。

3) 分布は、旧大和川に沿った中河内の平野部と河内湖と瀬戸内海の結節点（河内湖北西岸地域）に集中する。すなわち、西日本の諸地域と大和盆地東南部を結ぶ流通の幹線ルート上に集中する。なお幹線ルートから分岐して、河内湖東岸や羽曳野丘陵先端へ、さらに下田遺跡や脇浜遺跡の資料から大阪湾を南下した支線ルートもうかがえるようになった。また一部の東海系は、山城の三川合流地域から淀川に入り、摂津東部を通過して西進した

ことも確認できる。

4) 幹線ルートにおいて、港津的機能を果たしたと考えられる崇禅寺遺跡と河内湖北西岸の垂水南遺跡と五反島遺跡の東海系土器の時期は異なる。前者は庄内～布留前半、後者は布留後半であり、その港津機能が崇禅寺から河内湖北西岸へ移行したと考えられる。さらに河内湖北西岸地域にあっても垂水南遺跡から五反島遺跡への移行³⁾が推定できる。

5) 各遺跡の出土状況からすれば、ほとんどが単独～数点の出土であり、東日本の広域で確認できるように東海系そのものが土器様式として定着する状況は認められない。例外的に、ややまとまった数の東海系が出土する集落として垂水南遺跡、五反島遺跡、崇禅寺遺跡と下田遺跡がある。物資流通に伴って少人数が通過した考古学的痕跡と考えられるが、出土点数は中河内よりも明らかに多く、東海系の西方への幹線ルートは淀川であったと考えておきたい。

6) 中河内の諸遺跡では、東海系よりも圧倒的に西日本諸地域の土器が多数出土する。具体的には、吉備、讃岐、阿波、山陰系が多数派であり、東海系を含む山城、近江、北陸系などの東方の諸地域系は少数派である。

7) 東海系には搬入品とその模倣品がある。ただし東日本で確認できるように、定着したS字甕がそれ以降に独自の変化を示したり、さまざまな変種のS字甕が存在する状況にはない。大阪府下での変種のS字甕の事例としては八尾南遺跡、小山平塚遺跡、浜寺石津町遺跡で確認できる。いずれも東海のS字甕とは著しく形態が異なる。砂礫分析から、在地胎土と確認された八尾南遺跡の事例からも、在地民がまねて作ったと考えられる。単独的で系譜としてはとらえられない。

8) 墳墓に関連すると思われる資料としては、旧大和川流域の加美・久宝寺遺跡があり、いずれも小型S字甕である。

9) 石津川流域の百舌鳥古墳群の周辺で、宇田型甕の出土する遺跡が集中して確認できる。浅香山遺跡、大仙中町遺跡、土師遺跡、綾南遺跡のほか、異形のS字甕の出土した浜寺石津町遺跡などがある。垂水南遺跡と五反島遺跡に宇田型甕が集中することから、ここを中継して石津川流域に持込まれたと考えられる。S字甕段階での纏向遺跡周辺への集中を古墳築造に関わる労働力の徴集とする考えがあるが、そうであるならば宇田型甕の集中は百舌鳥古墳群築造を契機とする可能性も考えられる。しかし、現状では1遺跡1～2点の出土であり、今後の動向をみたい。

以上のように資料的な増加はみられるものの、前回からは大阪府下の東海系は時期が若

干漕ったものの、やはり「小人数が通過した程度の痕跡」と考えたい。ただし下田遺跡のように東海系がやや集中的に出土する遺跡が判明し、その意味については新たな研究課題となった。

3 東国系の状況

8遺跡で資料が抽出できる。そのうち溝咋遺跡、垂水南遺跡、北泉遺跡、本郷遺跡、久宝寺遺跡、下田遺跡はいずれも庄内期新相～布留期初頭にかけて流通拠点となった集落遺跡である。久宝寺遺跡の資料が千葉県西部～東京付近からの搬入品と限定できる以外は、必ずしも明確な地域が指摘できるわけではない。

溝咋遺跡（1・2）⁴⁾ 溝咋1は体部に横位、縦位の突帯を貼りつける小型壺である。肩部の横位突帯は体部と頸部の接合において、粘土を折り曲げて作る。内面ナデ仕上げ。類例は少ないが千葉県番后台遺跡、神奈川県山王山遺跡、同 城郷中学校敷地遺跡、同 久地伊屋之免古墳、茨城県安戸星古墳、群馬県貝沢柳町遺跡、同 稲荷森遺跡、同 荒砥二之堰遺跡、福島県龍門寺遺跡、山梨県榎田遺跡、静岡県伊場遺跡、同 雌鹿塚遺跡がある。他に東北、駿河で少数が確認できるのみで、広く関東に分布するものである。

溝咋2は、大型壺の肩部破片である。上部に単節LRとRLの羽状縄文、下部に二条一組のS字状結節文四段が認められる。同様の文様構成は、神奈川県、東京都、千葉県で確認できる。

垂水南遺跡（1～4）⁵⁾ 垂水南1は広口壺である。肩部に単節LRの縄文を二段、口縁部内面上半に一段を施しており、それぞれの端部にS字状結節文を巡らせ区画とする。同一の文様構成は神奈川、東京都に多いが、形態もあわせると神奈川県王子ノ台、同 子ノ神遺跡、東京都四葉地区遺跡、埼玉県南通遺跡に酷似する事例がある。

垂水南2は、口縁部外面にハケ目の後、縦方向のヘラ描き沈線3条以上を施す。駿河地域の大廓式の二重口縁壺である。垂水南3・4は駿河系の広口壺と考えられる。口縁部外面にハケ目の後、端部を外方に折り返し突帯状にする。

北泉遺跡⁶⁾ 二重口縁壺の口縁部細片である。外反する二重口縁部で、外面に縦位の棒状浮文（二条残存）を貼りつける。奈良県布留遺跡山口池⁷⁾に類似例がある。

本郷遺跡（1）⁸⁾ 台付き甕の脚部である。脚径10.5cmの大型品である。厚手のハケ調整甕で、東海以東と考えられるが地域の特定は難しい。

久宝寺遺跡（1）⁹⁾ 口縁端部を上下に拡張させる広口壺。拡張面には撚糸文で施文し、

刻み目をつけた棒状浮文を巡らせる。内外面縦方向ヘラミガキ、赤彩する。千葉県西部～東京都付近からの搬入品で、時期は前野町終末～五領Ⅰ式に位置付けられる。

高鷲遺跡（１）¹⁰⁾ 駿河系の広口壺。口縁端部は折返しではなく、粘土帯を貼り付ける。丸い体部に、短く外傾する口縁部が付く。調整は口縁部内外面・体部外面に粗い原体のハケ目を施す。他の駿河系と比べて粗雑である。

彼方遺跡（１）¹¹⁾ 駿河系の広口壺。口縁部は大きく開き、端部を折返す。外面は縦方向のヘラミガキを密に施す。

下田遺跡（１～３）¹²⁾ いずれも駿河系の広口壺で、口縁端部を下方に折返す。１は口縁外面にヘラミガキを施し、端部に刻み目文を巡らせる。３はほぼ完残するもので、下膨れの体部に外反する口縁部が付く。２・３は内外面ともに密なヘラミガキを施す。

高鷲・彼方・下田遺跡の駿河系広口壺は、共伴遺物から彼方１が弥生時代Ⅴ－５期、下田１・２が庄内期初頭、下田３が布留０期、高鷲１が布留３期新相に位置付けられる。時期が下るにしたがい、形態は下膨れの体部から丸い体部へ、外反して大きく開く頸部から短く外傾する頸部に変化する。調整は、密なヘラミガキから粗雑なハケ目に変化する。

以上の東国系の搬入時期は、彼方と下田 SA2218 が弥生終末から庄内古相、高鷲が布留後半であり、それ以外は庄内新相～布留前半である。後者は搬入土器が急増する時期であり、事例も明らかに増加傾向にある。分布状況も、彼方遺跡以外は搬入土器の多数が確認できる地域、遺跡と重複する。つまり大阪府における東国系は、時期的にも広がりにおいても、多数の列島諸地域から持込まれた他地域系の中に単独か、せいぜい数点が混在して確認できるのが実態である。

４ まとめ

以上のように東海・東国系土器は、大阪府あるいは近畿において在来様式へ影響を与えたり、ましてや定着するような状況は確認できない。このことは、同時期多量に搬入される西日本諸地域の土器についても同じ状況である。森岡秀人氏の土器移動の類型¹³⁾に従い、大阪府における東海・東国系土器のあり方と特徴を示せば以下ようになる。

移動距離による類別 大阪における東海・東国系土器は、すべて「大地域間移動」に該当する。ただし、旧大和川水系で大和盆地東南部とつながることを考慮すれば、東海・東国との直接的な流通ではなく、大和盆地東南部からの間接的な移動つまり「大地域内移動」によって生じた資料が多く含まれると考えられる。

移動形態による類別 東海系は、S字甕と壺が主体の「複数器種移動」と考えられる。東国系は、少数ながら壺主体の「特定単器種移動」に相当する。他地域からの集団の移動・移住が想定できる「様式システム」、「生活関連システム移動」のレベルではない。

移動量による類別 大阪の東海系土器は、「微量型移動」～「単品型移動」に該当する場合が大部分である。しかし垂水南遺跡、五反島遺跡、崇禅寺遺跡、下田遺跡には東海系が少数ながらも集中しており、「少量型移動」～「微量型移動」に該当する。東国系は「単品型移動」に相当する。

移動方式による類別 加美・久宝寺遺跡から5点の小型S字甕が出土しており、その内1点は方形周溝墓の溝からの出土である。小型S字甕は大阪では加美・久宝寺遺跡のみからの出土であり、しかも集中する。他に瓢形壺2点も方形周溝墓から出土しており、これらは墳墓供献を目的とした「直接型移動」に該当する可能性はある。

大阪中央部で出土する東海・東国系は「拠点間接型移動」の枠組で考えられる。その場合、移動量において旧大和川流域が「微量～単品型移動」なのに対して、垂水南遺跡、五反島遺跡、崇禅寺遺跡周辺およびそれから離れる下田遺跡のみが「少量～微量型」に相当する。旧大和川流域の場合は大和盆地東南部を中継するが、摂津中部の3遺跡は淀川ルート、下田遺跡は大阪湾岸を南下するルートを想定すれば、直接に東海・東国との流通も想定可能である。大阪の遺跡毎に確認できる微妙な地域性は、当時の複雑な物資流通を背景に生じたと考えられよう。その場合でも、関東で広大な地域が一斉に在地土器が姿を消し東海系に変化する人間集団の移動・移住によって生じたであろう「様式システム」、「生活関連システム移動」に至らないことが大阪および近畿の特徴である。大阪では、東海・東国との関わりは、物資・情報あるいは少人数の流通レベルにとどまることが確認できる。

最後に、大和盆地東南部と対比することで、大阪府での東海系土器流入の持つ意味を述べる。両地域は旧大和川で連なっており、当該期には密接な関係を有していたからである。

前述したように、中河内地域は旧大和川を介して瀬戸内の諸地域と、纏向遺跡の立地する奈良盆地東南部に至る流通の要衝にあたる。この点が中河内の地理的な特殊性であり、それによって纏向遺跡に多量の西日本各地域からの搬入土器が集積される。また大阪府で出土する東海系土器は、地理的には宇陀から奈良盆地東南部へ、さらに旧大和川を下って西日本各地域への流れが主要なルートと想定せざるを得ないことから、当時の流通、社会の実体を知る上でも重要である。

ここでは、中河内地域の搬入土器を大和盆地東南部との関係でとらえるため、大まかに

そのルートから分類して考える。つまり、1類：主に中河内を介して大和盆地東南部に入った一群（吉備、西部瀬戸内、阿波、讃岐、山陰系など）、2類：大和東盆地南部を介して中河内に入った一群（東海、東国系など）、3類：旧大和川ルートとは無関係に入る一群（山城、近江、北近畿、北陸系などと摂津に入った東海、東国系）に分類できる。

中河内では、概観したように1類の搬入土器は普遍的に存在しているが、2類は微々たるものであった。おそらく中河内では、1類が出土土器の10～30%程度を占め、東海系はその中に時たま混じる—数値化できない—程度に存在するのが実体であろう。また3類も微量ではないにしても、大変少ないことが実態である。

一方、纏向遺跡では1～3類がまんべんなく、しかも多量に存在している。報告書¹⁴⁾によれば、庄内期の出土土器の15%以上が搬入品であり、しかも他地域系のうち纏向2式の60%、纏向3式の30%以上が東海系で占められる。つまり東海系については、中河内の諸遺跡と纏向遺跡の状況は大きく異なっており、このことをとらえて両地域の違いを強調することも可能であろう。

それでは、両地域の東海系土器の搬入状況の違いは何に起因するのであろうか。結論的には、旧大和川ルートは当時の社会にあっては、中河内から大和盆地東南部への一方的な流れであり、逆の流れは非常に弱いものであったことによると考えざるをえない。同様のことは庄内甕の分布にも表れる。生駒西麓産胎土の河内型庄内甕は、大和盆地東南部には多数が持ち出されているが、大和型庄内甕は中河内ではほとんど出土しないこともそれを示している。西日本各地域の土器は、旧大和川ルートで大和盆地東南部へ搬入された一方で、東海系に代表される東日本各地域の土器は大部分が大和までといった、大和中心的な実態を反映していると考えられる。古墳時代前期、各地域での他地域系土器の増加から、西日本から東日本にかけて広域流通網の存在が明らかである。それはもちろん自然発生的なものではないし、まして日本各地の首長層の利益に資するためのものでもない。王権の存在した大和盆地東南部への物資・技術・情報を集積するために創られた政治的な装置であったと考えられる。以上のように、府下出土の東海系土器は極めて少ないが、当時の社会状況の考察には重要な意味を有していると考えられる。

註

- 1 山田隆一「大阪府下出土の東海系土器とその特質」『庄内式土器研究』3 庄内式土器研究会 1992
- 2 東海系の S 字甕と宇田型甕の分類・編年は、赤塚次郎「V 考察」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1990、同「最後の台付甕」『古代』第 86 号 早稲田大学考古学会 1988 による。
- 3 西本安秀氏（吹田市教育委員会）のご厚意により、垂水南遺跡と五反島遺跡の遺物を実見した。東海系 S 字甕と宇田型甕の点数は、垂水南遺跡が S 字甕 16 点と宇田型甕 2 点、五反島遺跡が S 字甕 8 点と宇田型甕 8 点である。
- 4 （財）大阪府文化財調査研究センター『溝咋遺跡（その 1・2）』2000
- 5 米田文孝「搬入された古式土師器」『関西大学考古学研究室開設三十周年記念 考古学論叢』1983
- 6 未報告。調査者の田中充徳氏、西本安秀氏（吹田市教育委員会）より教示を得た。
- 7 置田雅昭「大和における古式土師器の実態－天理市布留遺跡出土資料－」『古代文化』第 26 巻第 2 号（財）古代学協会 1974
- 8 柏原市教育委員会「本郷遺跡」『柏原市所在遺跡発掘調査概報 1996 年度』1997
- 9 （財）八尾市文化財調査研究会『久宝寺遺跡第 22 次発掘調査報告書』2001
- 10 羽曳野市教育委員会「第 4 章 高鷲遺跡」『羽曳野市内遺跡調査報告書』1999
- 11 粟田薫「彼方遺跡」『弥生時代の石器』第 II 部第 5 分冊 埋蔵文化財研究会 1992
- 12 （財）大阪府文化財調査研究センター『下田遺跡』1996
- 13 森岡秀人「土器移動の諸類型とその意味」『転機』4 号 東海埋蔵文化財研究会 1993
- 14 奈良県立橿原考古学研究所『纏向』1976

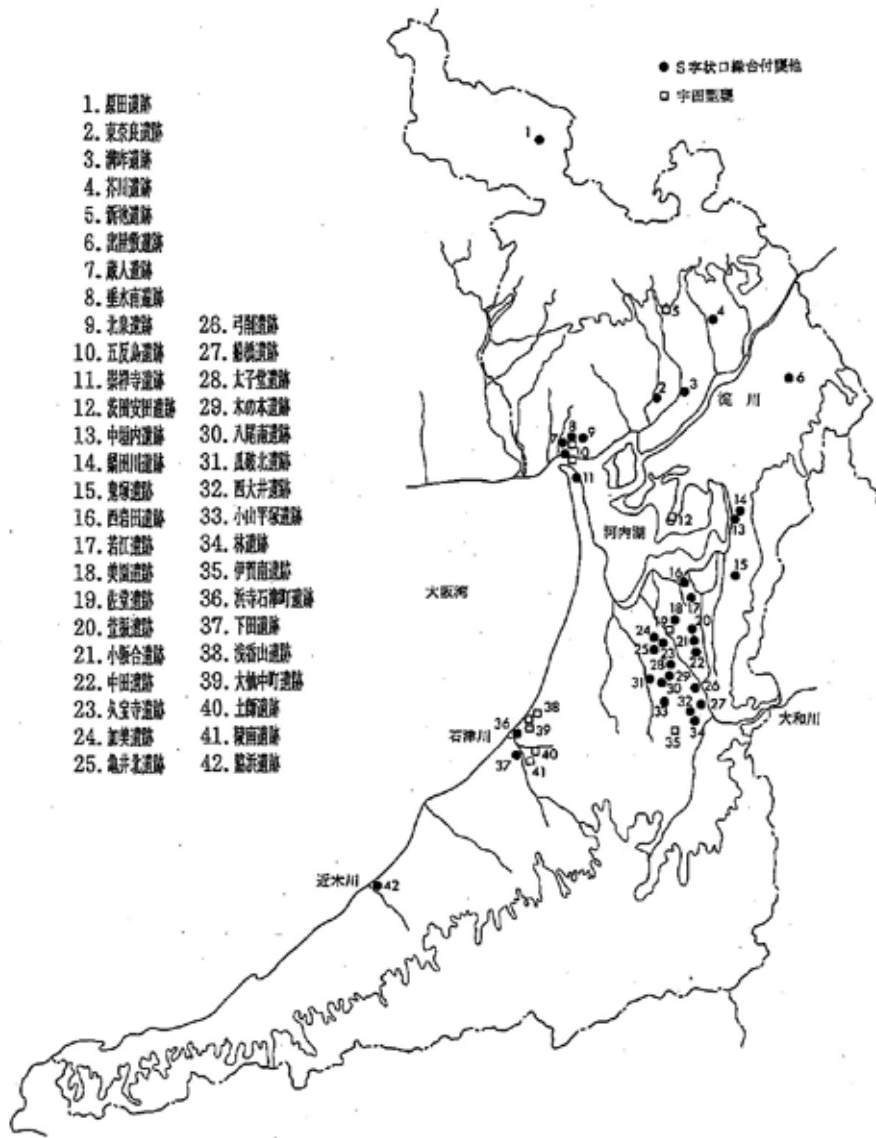


図1 東海系土器出土遺跡分布図

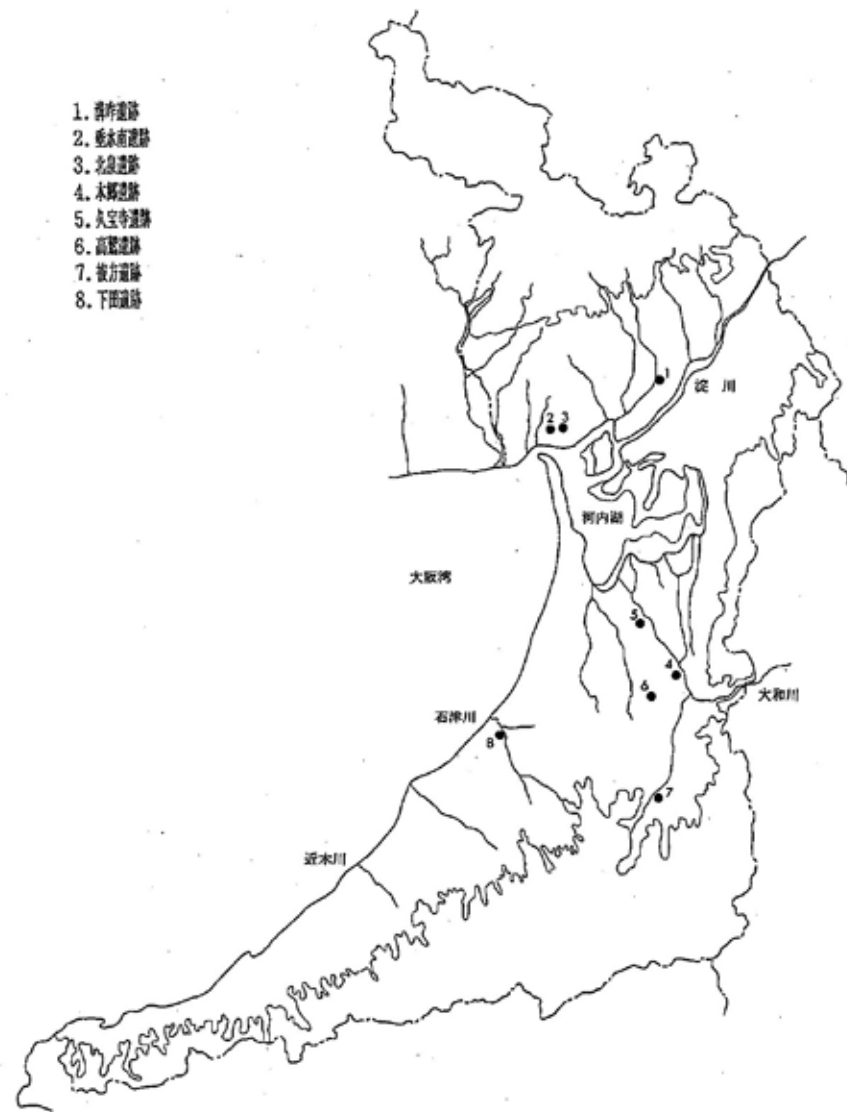


図2 東国系土器出土遺跡分布図

表1 大阪の東海西部系土器

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構	内容・備考	文献
1	原田	豊能郡能勢町倉垣		土坑7	S字甕(A類新)	1
2	東奈良	茨木市東奈良	布留0	溝Ⅱ-3	S字甕(B類新)	2
3	溝昨	茨木市学園町		包含層	S字甕(B類新~C類古)、高杯	3
4	芥川	高槻市紫町	~庄内	溝7	瓢形壺	4
5	新池	高槻市上土室		3号住居	宇田型甕(四段階)	5
6	出屋敷	枚方市山田池南町	庄内新	竪穴住居SH3	二重口縁壺(肩部赤彩)	6
7	蔵人	吹田市江坂		包含層	S字甕(脚部)	7
8	垂水南	吹田市垂水町			S字甕(16点、C類新~D類)、柳ヶ坪型壺、宇田型甕(2点、一・三段階)	8
9	北泉	吹田市泉町			S字甕(肩部)	9
10	五反島	吹田市南吹田		自然河道他	S字甕(8点、C類新~D類)、柳ヶ坪型壺、宇田型甕(8点、一~三段階)	10
11	崇禅寺	大阪市東淀川区淡路他	庄内2	Ⅱ区土器溜	S字甕(2点、B類中、B類中~C類古)、甕、小型器台、椀形高杯	11
			布留2	SK01	S字甕(C類新)	〃
			布留1~2	I区包含層	柳ヶ坪型壺(2点)	〃
12	茨田安田	大阪市鶴見区茨田安田	TK208~23	落込み	宇田型甕(三段階?)	12
13	中垣内	大東市中垣内他	布留1~2	竪穴住居SB01	S字甕(脚部)	13
			布留2	SK10	柳ヶ坪型壺	〃
			布留3	SK15	S字甕(D類古)	〃
				包含層	S字甕(C類)	〃
14	鍋田川	大東市中垣内		包含層	瓢形壺(口縁内面と体部外面に赤彩)	14
15	鬼塚遺跡	東大阪市箱殿町		包含層	S字甕(C類古?)	15
16	西岩田	東大阪市西岩田	庄内3~布留0	Bトレンチ河川Ⅰ	S字甕	16
			庄内3~布留0	包含層	S字甕(脚部)	17
			布留4(古)	土坑8	S字甕(D類中~新)	18
17	若江	東大阪市若江本町他		包含層	S字甕(B類中~新)	19
				(包含層)	S字甕(脚部)	20
18	美園	八尾市美園町	庄内1~2	落込みDSX304	高杯(廻間Ⅱ-1程度)	21
19	佐堂	東大阪市金岡町他		包含層	宇田型甕(三~四段階)	22
20	萱振	八尾市萱振他	庄内1~2	SD4001下層	瓢型壺、小型器台	23
			布留0	包含層	S字甕(脚部)	24
21	小阪合	八尾市青山他	布留0~1	落込み7	S字甕(B類新~C類古)	25
			布留1~2	SD314	広口壺	26
			庄内3~布留1	SD1	S字甕(B類新~C類古)	27
22	中田	八尾市中田他	庄内新~布留初	包含層	S字甕(B類新~C類古)、柳ヶ坪型壺	28
			布留1	包含層	S字甕(C類)	29
23	久宝寺	八尾市西久宝寺他	布留2~4	SD4004	S字甕(2点、C類新~D類中)	30
				方形周溝墓3-2	小型S字甕(B類新~C類古)	32

24	加美	大阪市平野区加美東	庄内新～布留初	1号方形周溝墓	瓢形壺	33
			(庄内)	井戸	瓢形壺	〃
			(布留)		小型S字壺(C類)	〃
25	亀井北	大阪市平野区加美南他	布留0	SD8021	S字壺(B類新～C類古)	34
26	弓削	八尾市志紀南町	布留1主体	包含層	S字壺(C類)	35
27	船橋	藤井寺市大井他			S字壺(脚部)、パレス壺、高杯	36
28	太子堂	八尾市太子堂	布留1～2	SD201下層	S字壺(2点、C類)	37
29	木の本	八尾市南木の本		包含層	S字壺(C類新)	38
30	八尾南	八尾市若林町	布留4(古)	井戸6上層	S字壺(2点、D類古、東海産と在産各1点)	39
31	瓜破北	大阪市平野区瓜破	～布留2	方形周溝墓SX12	S字壺(脚部)	40
32	西大井	藤井寺市西大井		粗砂	S字壺(脚部)	41
			～布留3	SD1	S字壺	〃
33	小山平塚	藤井寺市小山	布留2	土坑01	S字壺(異形の在産)	42
34	林	藤井寺市沢田	布留2	竪穴住居SB01	S字壺(脚部)	43
35	伊賀南	羽曳野市伊賀		包含層	宇田型壺(二段階程度)	44
36	浜寺石津町	堺市浜寺石津町	布留後半	包含層	S字壺(在産)	45
37	下田	堺市下田町	庄内0	SD1305	S字壺(2点、脚部)、瓢形壺	46
			布留0	SD1108	S字壺(3点、C類新)、広口壺	〃
				SD2254	瓢形壺	〃
38	浅香山	堺市今池町		SK011	宇田型壺(三～四段階)	47
39	大仙中町	堺市大仙中町		SD304	宇田型壺(四段階)	48
40	土師	堺市深井北町	TK208	SK043	宇田型壺(四段階)	49
41	陵南	堺市百舌陵南町他	TK208	落込み	宇田型壺(四段階)	47
42	脇浜	貝塚市脇浜	布留1	自然河川91-OR	S字壺、柳ヶ坪型壺	50
			布留1主体	Ⅲ区中洲付近	S字壺(脚部)	〃

表2 大阪の東海東部・東国系土器

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構	内容・備考	文献
1	溝咋	茨木市学園町	庄内3～布留0	溝120	体部に突帯のある壺	文献
					縄紋を施文する壺	〃
2	垂水南	吹田市垂水町			駿河系壺	8
3	北泉	吹田市泉町			口縁部に棒状浮文のある二重口縁壺	9
4	本郷	柏原市本郷	庄内3～布留0	包含層	台付き壺	51
5	久宝寺	八尾市亀井	布留初	包含層(河川?)	口縁部に燃糸文と棒状浮文のある壺、千葉県西部～東京付近産	52
6	高鷲	羽曳野市高鷲	布留3	溝	駿河系壺	53
7	彼方	富田林市彼方	V期5	竪穴住居56	駿河系壺	54
8	下田	堺市下田町	布留0	SD1108	駿河系壺	46
			庄内0～1	SA2218	駿河系壺(2点)	〃

- 1 重金誠「能勢町原田遺跡発掘調査概要」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第34回）資料』（財）大阪府文化財調査研究センター 1996
- 2 東奈良遺跡調査会『東奈良発掘調査概要Ⅰ』1979
- 3 （財）大阪府文化財調査研究センター『溝咋遺跡（その1・2）』2000
- 4 高槻市教育委員会『芥川遺跡発掘調査報告書』1995
- 5 高槻市教育委員会『新池』1993
- 6 （財）枚方市文化財研究調査会『出屋敷遺跡Ⅱ 調査概要報告』1986
- 7 吹田市教育委員会『蔵人遺跡』1979
- 8 米田文孝「搬入された古式土師器」『関西大学考古学研究室開設三十周年記念 考古学論叢』1983
- 9 未報告。吹田市教育委員会による平成9年度調査資料。
- 10 吹田市教育委員会『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書 遺物編』2003
- 11 大阪府教育委員会『崇禅寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1982
- 12 大阪府教育委員会『茨田安田遺跡発掘調査概要』1975
- 13 未報告。黒田淳氏（大東市歴史民俗資料館）の了解を得た。
- 14 大阪府教育委員会『鍋田川遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1992
- 15 東大阪市遺跡保護調査会「鬼塚遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』1975
- 16 （財）大阪文化財センター『西岩田』1983
- 17 （財）東大阪市文化財協会「西岩田遺跡第10次発掘調査概報」『（財）東大阪市文化財協会概報集 1998年度』1989
- 18 （財）東大阪市文化財協会「Ⅱ西岩田遺跡第11次発掘調査概報」『（財）東大阪市文化財協会概報集 1996年度（1）』1987
- 19 阿部嗣治「若江遺跡出土のS字状口縁土器」『調査会ニュース』18 東大阪市遺跡保護調査会 1981
- 20 （財）東大阪市文化財協会「第2章 若江遺跡第60次発掘調査概要」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 1995年度調査（2）』1997
- 21 （財）大阪文化財センター『美園』1985
- 22 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター『佐堂（その2）－Ⅱ・他』1985
- 23 大阪府教育委員会『萱振遺跡』1992
- 24 （財）八尾市文化財調査研究会「Ⅴ 萱振遺跡第5次調査（KF87-5）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1993
- 25 （財）八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡＜昭和57年度 第1次調査報告書＞』1987
- 26 （財）八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡＜昭和58年度 第2次調査・第3次調査報告書＞』1987

- 27 (財) 八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡<昭和 59 年度 第 4 次調査報告書>』1988
- 28 未報告。青木勘時氏(天理市教育委員会)より資料の提供を受けた。
- 29 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅱ 中田遺跡第 14・25 次調査」『中田遺跡』1997
- 30 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター『久宝寺北(その 1～3)』1987
- 32 大阪府教育委員会『久宝寺遺跡発掘調査概要』1992
- 33 森 毅「加美遺跡出土の東海系土器」『葦火』3 (財) 大阪市文化財協会 1986
- 34 (財) 大阪文化財センター『亀井北(その 1)』1986
- 35 大阪府教育委員会『中垣内・志紀・弓削・太平寺遺跡発掘調査概要』1995
- 36 大阪府立弥生文化博物館『船橋展』(大阪府立弥生文化博物館図録 3) 1992
- 37 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅱ 第 2 次調査(TS90-2) 発掘調査概要報告」『太子堂遺跡』1993
- 38 米田敏幸氏(八尾市教育委員会)より資料の提供を受けた。
- 39 大阪府教育委員会『八尾南遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1991
- 40 (財) 大阪市文化財協会『瓜破北遺跡』1980
- 41 大阪府教育委員会『西大井遺跡発掘調査概要 1992 年度』1994
- 42 藤井寺市教育委員会「小山平塚遺跡の調査」『藤井寺市文化財保護事業 昭和 57・58・59 年度』1988。
- 43 藤井寺市教育委員会「林遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告 IX』1994
- 44 羽曳野市教育委員会「伊賀南遺跡」『古市遺跡群 16』1995
- 45 森 浩一「堺市浜寺石津町遺跡の土師器と須恵器」『古代学研究』28 古代学研究会 1961
- 46 (財) 大阪府文化財調査研究センター『下田遺跡』1996
- 47 小谷正樹「堺市浅香山遺跡(ASK-1) 古墳時代集落の調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第 34 回) 資料』(財) 大阪府文化財調査研究センター 1996
- 48 堺市教育委員会「大仙中町遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告 第 47 集』1989
- 49 堺市教育委員会「土師遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告 第 50 集』1990
- 46 (財) 大阪府埋蔵文化財協会『協浜遺跡-発掘調査報告書-』1986
- 51 柏原市教育委員会「第 1 章 本郷遺跡」『柏原市所在遺跡発掘調査概報 1996 年度』1997
- 52 (財) 八尾市文化財調査研究会『久宝寺遺跡第 22 次発掘調査報告書』2001
- 52 羽曳野市教育委員会「第 4 章 高鷲遺跡」『羽曳野市内遺跡調査報告書』1999
- 54 粟田薫「彼方遺跡」『弥生時代の石器』第Ⅱ部第 5 分冊 埋蔵文化財研究会 1992

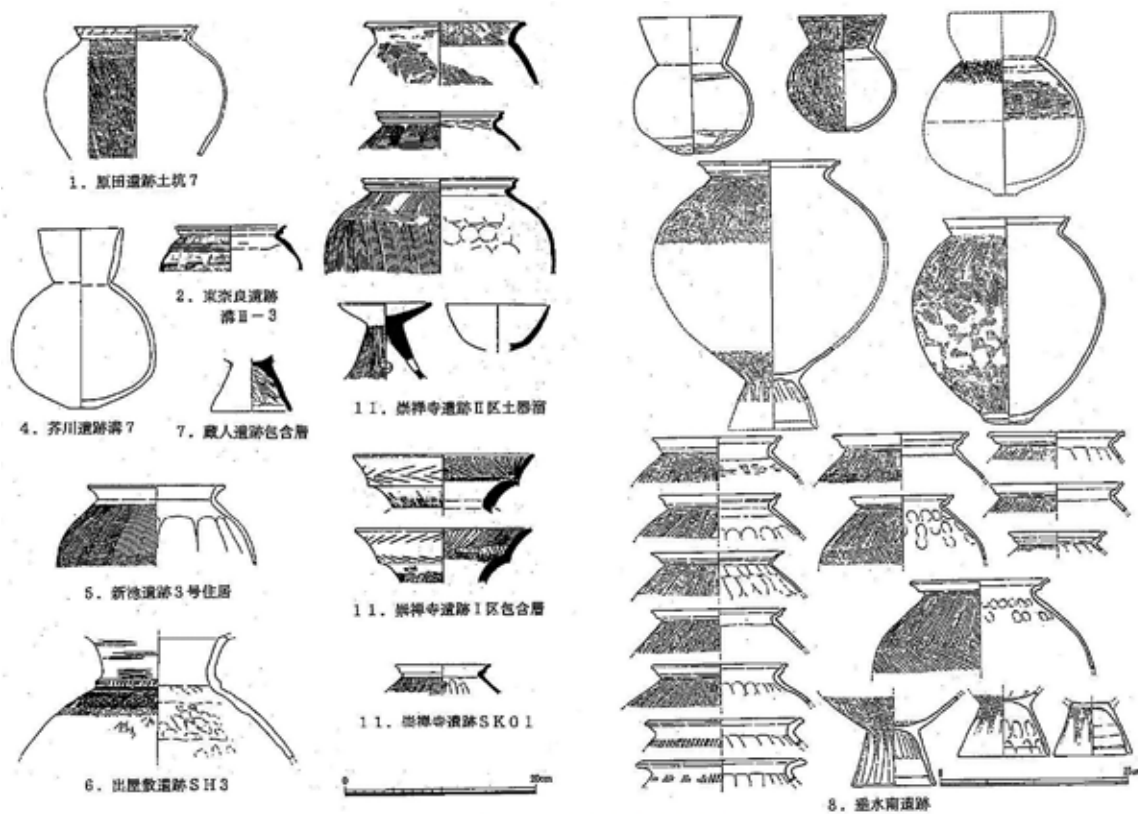


図3 東海系土器(1)

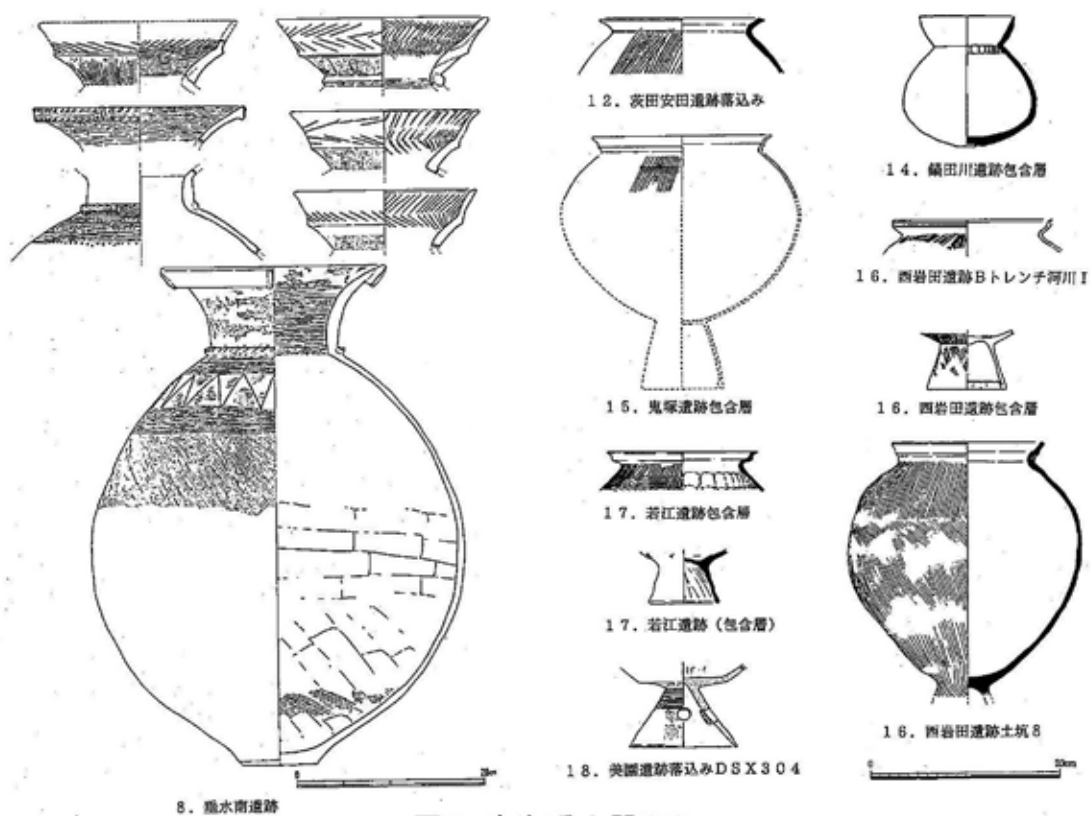


図4 東海系土器(2)

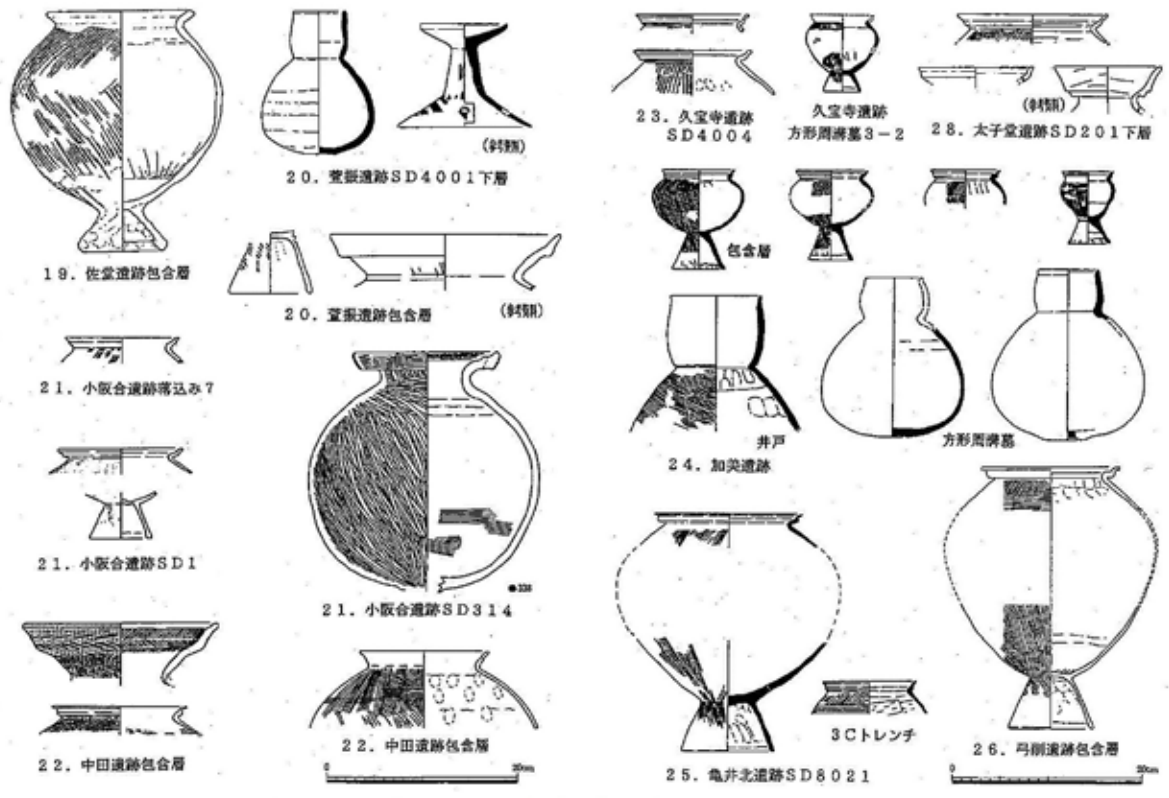


図5 東海系土器(3)

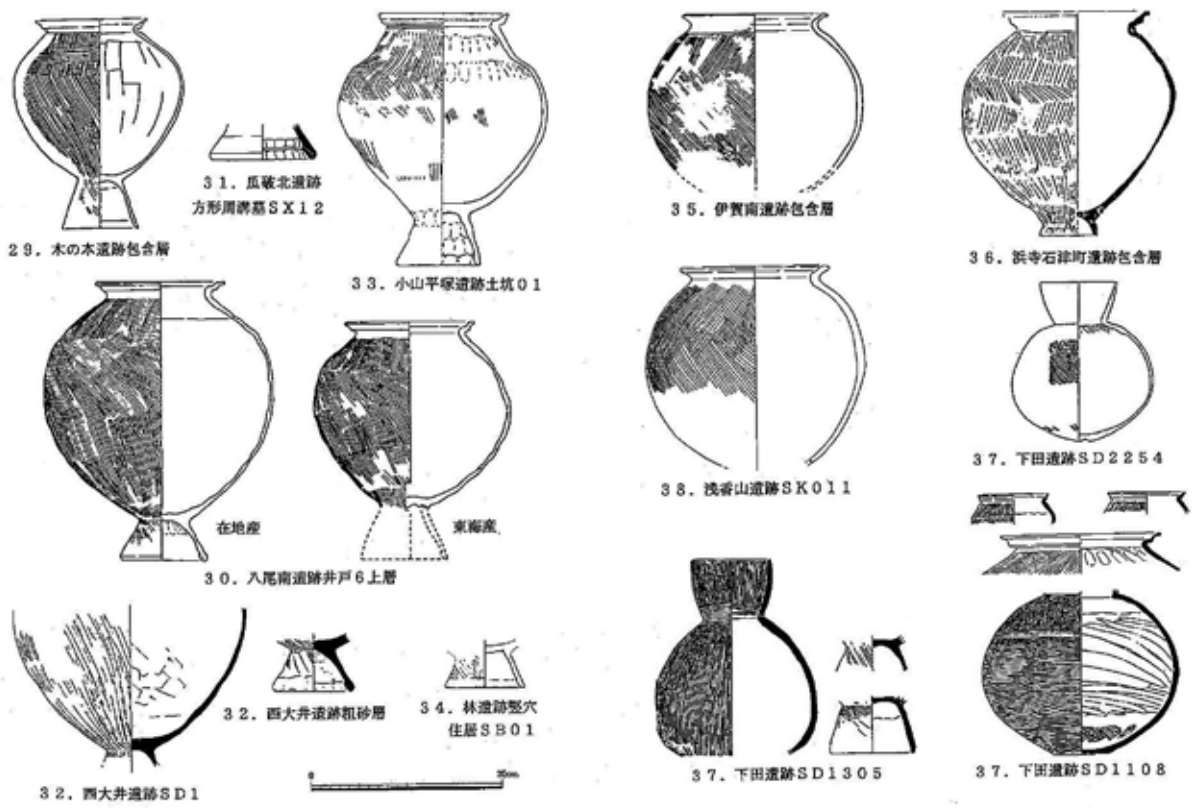


図6 東海系土器(4)

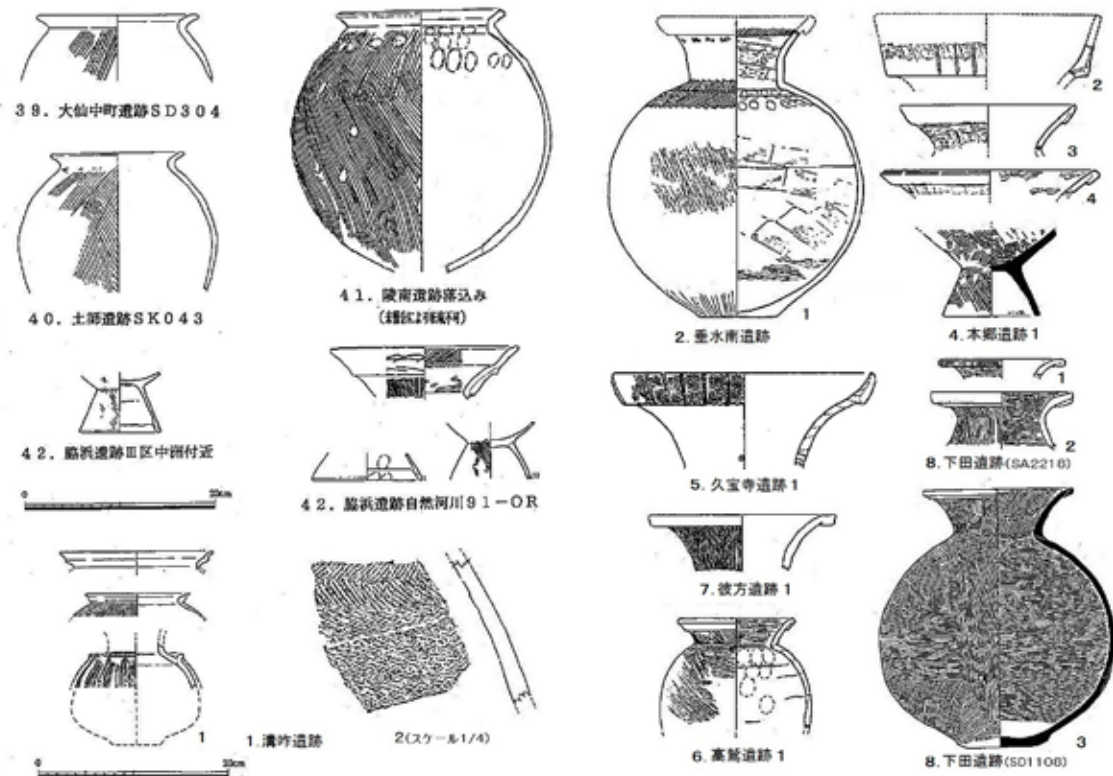


図7 東海系土器(5)・東国系土器

第4章 塩の生産と流通拠点

第1節 中河内における古墳時代前期の製塩土器

1 はじめに

中国の漢代において、塩は鉄と共に国家財政の根幹であり、それぞれ塩官と鉄官が置かれて厳重に管理された。すでに商品経済が発達し、塩の売買によって多くの富を得ていた塩商からその利益を取り上げ、疲弊した国家財政をたて直すことが目的である。塩官とは塩の生産地に設置された官営の製塩所で、国家が生産された塩を独占・専売し、その利益を得たのである。

一方、日本はどうだったのだろうか。もちろん中国と、日本ではその社会的な背景や成熟度も大きく異なるのだが、古墳時代前期の一部首長層は、塩の重要性を十分に認識していたと考える。それは、本稿で述べるように当該期の物流拠点での同形式の製塩土器による塩作りの拡散や、一部地域への塩の集積が確認できるようになることからの推定である。その背景には塩の重要性に関わる情報伝達があったと考えたい。そしてわが国でも最終的には、律令国家の成立によって、塩の生産地への政治的な支配が達成されることになるのである。

筆者は、かつて摂津中部を含む大阪府内陸部で出土する古墳時代前期までの製塩土器を集成し、製作技術から大阪湾岸系と備讃系に識別して、その概要について述べた¹⁾ことがある。それによって、中河内には備讃系と大阪湾岸系の二者がほぼ同じ割合で搬入されており、大和につながる物流ルートを通じて、塩の集積がなされ始めたことを指摘した。しかしここでは、大阪府下における阿波、讃岐、播磨系土器の搬入状況を紹介する中で、搬入土器のひとつとして取上げたもので、それ以上には言及していない。また搬入土器をあつかったため、製塩土器と認定できる粗製甕型土器は対象外であった。

よって本稿では再度、塩の消費地である摂津中部から中河内地域における遺跡から出土した弥生時代後期から古墳時代前期の製塩土器を集成し、その搬入先を特定して、本地域への塩の移動の実態を明らかにする。その上で、交流の側面から集落動向の中で塩の移動を位置付け、歴史的な背景を述べることを目的とする。

2 製塩土器製作技法の二者

本稿では、弥生時代後期から古墳時代前期における和泉以外の大阪府下出土の製塩土器を集成し、それを基礎資料とする。当該期の製塩土器は、丸底化する以前の脚台を有する段階であり、その資料がどこから持込まれたのかを推定する。脚台式製塩土器の産地を識別する上で、紀伊・和泉をはじめとする大阪湾沿岸地域²⁾に分布する脚台Ⅰ・Ⅱ式と備讃地域³⁾のⅠ・Ⅱ式の認定は比較的容易である。問題は、前者の脚台Ⅲ・Ⅳ式と後者の備讃Ⅲ・Ⅳ式製塩土器の識別である。それらのお阪湾岸系は庄内式～布留式中段階、備讃系は鬼川市Ⅲ式～布留式中段階に位置付けられる。そしてその相違点は、製作技法の違いによる脚台部の厚さにあり、大阪平野部では両者が混在する。外観はかなり異なり、粗雑な作りのため判断しがたい個体はあるものの、基本的に両者の識別は可能である。

備讃系製塩土器の製作技法については、大久保徹也氏⁴⁾の報告がある。そこでは、備讃Ⅰ式からⅣc式にいたる脚台の製作技法について述べている。それによるといずれの段階においても、脚台になる円筒を準備し、その上端に粘土帯を貼り足して体部作り上げるのであるが、体部の粘土帯貼り付けの比較的早い段階に円盤貼り付け、あるいは粘土塊を充填して円筒をふさぐことが基本である。粘土の充填を体部内面か脚台下方から、あるいは両方から施す違いはあっても、備讃地域ではこの製作技法を墨守しており、各段階で異なるのは、円筒の大きさである。大阪湾地域と比較して、粘土塊の充填部が非常に薄いことが特徴である。

萱振遺跡の井戸 SE03 と土坑 SK03 出土資料で、備讃系と大阪湾岸系の製塩土器を概観する⁵⁾。ここには両者があり、製作技法と胎土が全く異なる。各4点を抜粋した。

備讃系は 137~140 である。大きさは 138 がやや小型で脚裾径 4.7cm、高さ 1.3cm であるが、他は脚裾径 5.1 ~ 5.2cm、高さ 1.1 ~ 1.2cm におさまる。備讃Ⅳ a 式に位置付けられる。脚台部から体部を連続的に成形し、脚台部を強く屈曲させ粘土を充填する。脚台部と体部の境界の接合ラインは確認できない。粘土塊の充填は 137 が上方から、138 と 140 が下方からである。完存する 139 の接合は不明である。粘土塊の充填部は、0.2 ~ 0.6cm と非常に薄い。

大阪湾岸系は 134 ~ 136、144 である。大きさは脚裾径 3.9 ~ 4.4cm、高さ 1.4 ~ 1.8cm。脚台Ⅲ a 式に位置付けられる。

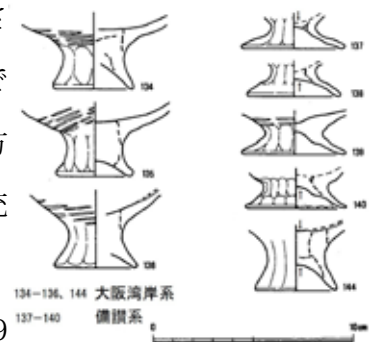


図1 脚台部の作り方

接合ラインが明瞭な個体は少ないが、脚台部と体部の境界の接合ラインだけは比較的よく観察できる。若干の乾燥時間を置いた脚部の上方に粘土帯を積上げていき体部を継続的に成形する。これは同時期の高坏と同様の製作技法である。なお144は、円筒に両側から粘土を充填して脚台部を成形したようである。底部から脚台の境界部断面は、1.1～2.0cmと厚い。裾部は135が粘土帯を巻いて成形する。また小島東遺跡では、ねじりながら裾部をひき出す事例もある。

以上のように備讃地域の製塩土器は、弥生中期後半からの製作技法の延長線にあって、粘土塊の充填部が薄いことが特徴である。一方、大阪湾岸地域の製塩土器は、脚台に粘土帯を積上げて成形しており、脚部への粘土塊の充填の有無にかかわらず、底部から脚台の境界部断面は、厚いことが特徴である。なおその特徴は脚台Ⅳ式になっても同じである。この時期、北部九州から瀬戸内、近畿地域において確認できる製塩土器の脚台は基本的に両者のいずれかで、少なくとも現状では大阪湾岸系と備讃系の二大別が可能である。

播磨から摂津西部にかけての沿岸部遺跡から出土する脚台部については、山本三郎氏⁶⁾が概観している。氏は脚台部の内側高さ（脚内高）によって両者を識別する。大阪湾岸系脚台Ⅲ式相当のⅠe1類が1cm未満、備讃Ⅳ式相当のⅠe2類が1～2cm未満が多数としており、備讃系は姫路市市川流域以西の西播磨に分布するとしている。また製塩土器変遷図において、大阪湾岸系の脚台Ⅰ～Ⅲ式は明石川流域以東の東播磨・摂津西部に分布することを示している。

淡路島については、脚台部は大阪湾岸系である。和泉の脚台に類似し、肉眼では両地域を区別することはできない。それは洲本市などの大阪湾岸域ばかりでなく、貴船神社遺跡などの播磨灘に面する西岸も同様である。紀伊の場合も、紀ノ川流域の脚台はもとより、それ以南の日高郡大目津泊Ⅰ遺跡、牟婁郡瀬戸遺跡などの脚台も大阪湾岸系と区別できない。なお北部九州と芸予地域の製塩土器は備讃系である。

つまり本稿において提示する製塩土器のうち、大阪湾岸系には厳密には播磨東部から摂津西部、淡路や紀伊からの搬入品も含む可能性があり、備讃系としたものには北部九州や芸予地域からの搬入品を含む可能性があるのだが、その数量は大変少ないと想定している。その理由は、製塩土器以外の器種でそれらの地域の土器が中河内地域に持ち込まれたと確定できるものが大変少ないことである。その一方で、持ち込まれた他地域系土器の中で、吉備系は大変多い。また和泉系と紀伊系は形態からの認定は困難なのだが、和泉地域における中河内系土器の多さからその交流関係が深いことが推定できるし、紀伊系については

胎土に結晶片岩が含まれるので認定が比較的容易にもかかわらず、ほとんど持込まれた形跡がないことが根拠である。

3 大阪府内陸部出土の製塩土器

塩生産地帯の和泉以外で、42 遺跡 178 点の脚台式段階（内、甕形 24 点）の製塩土器が抽出できる。これらは消費遺跡と考えられ、その特徴的な事例を概観する。

(1) 備讃系 利倉西遺跡と亀井遺跡、中田遺跡で外面へラ削りの製塩土器が出土している。亀井 39-2 は、SD2301 から弥生中期末～後期初頭の土器と共伴して出土した。脚裾径 3.7～4.0cm、脚高 1.8cm で、直線的に外傾する体部が付く。体部外面は下方への、脚台部外面は上方へのへラ削りを施す。備讃系Ⅱ b 式と考えられる。本段階の上東遺跡では脚裾径は 5.0cm 前後が主体であるものの、亀井と同様に少数の 4.0cm 程度の小型品も含む。

利倉西 11-6 は、体部は若干内湾しつつ立ち上がり、へラ削りを施す。脚部は「ハ」字状に開き、脚裾径 3.8cm、脚高 1.2cm である。備讃系Ⅱ c 式であり、後述する南谷Ⅲ式に収まる。隣接する穂積 14-1 も同型式の可能性もある。なお中田 48-3 は庄内Ⅰ式に位置付けられるが、年代観および体部が大きく開く形態は備讃とは異なり、位置付けは保留しておきたい。

本段階は、香川県小山・南谷遺跡⁷⁾の資料で、位置付けることができる。それに従えば、亀井は南谷Ⅰ式で後期前半、利倉西は南谷Ⅲ式で後期中葉に位置付けることができる。なお小山・南谷遺跡では、南谷Ⅲ期に叩き仕上げの備讃Ⅲ a 式が出現・共伴する。以上のように大阪では備讃Ⅱ式段階から確認できるが数は少なく、偶発的に持ち込まれた段階と考えられる。

備讃Ⅲ・Ⅳ式は、体部外面に叩き技法を採用する段階である。その前半の備讃Ⅲ a 式は体部があまり開かず直線的に外傾するもの、備讃Ⅲ b 式は体部下半の立ち上がりにやや丸みを持つ。また後半の備讃Ⅳ式は体部下半が大きく開き立ち上がるコップ状を呈する。脚台の矮小化により細別が可能で、脚裾径が 5 cm 程度のⅣ a 式から、やや小型化するⅣ b 式、2 cm 程度の痕跡的脚台のⅣ c 式へと変遷する。土器編年で備讃Ⅲ a 式は鬼川市Ⅲ式、Ⅲ b 式は才の町～下田所式、Ⅳ a 式は亀川上層式、Ⅳ b 式は布留式中～新段階に位置付けられる⁴⁾。

備讃Ⅲ a 式は、体部の残存状況にもよるが、小曾根 15-2a、東郷 45-8c・9a・17、小阪合 47-1a・30 の他、八尾南 54-17 にその可能性がある事例を含めても多くはない。出土

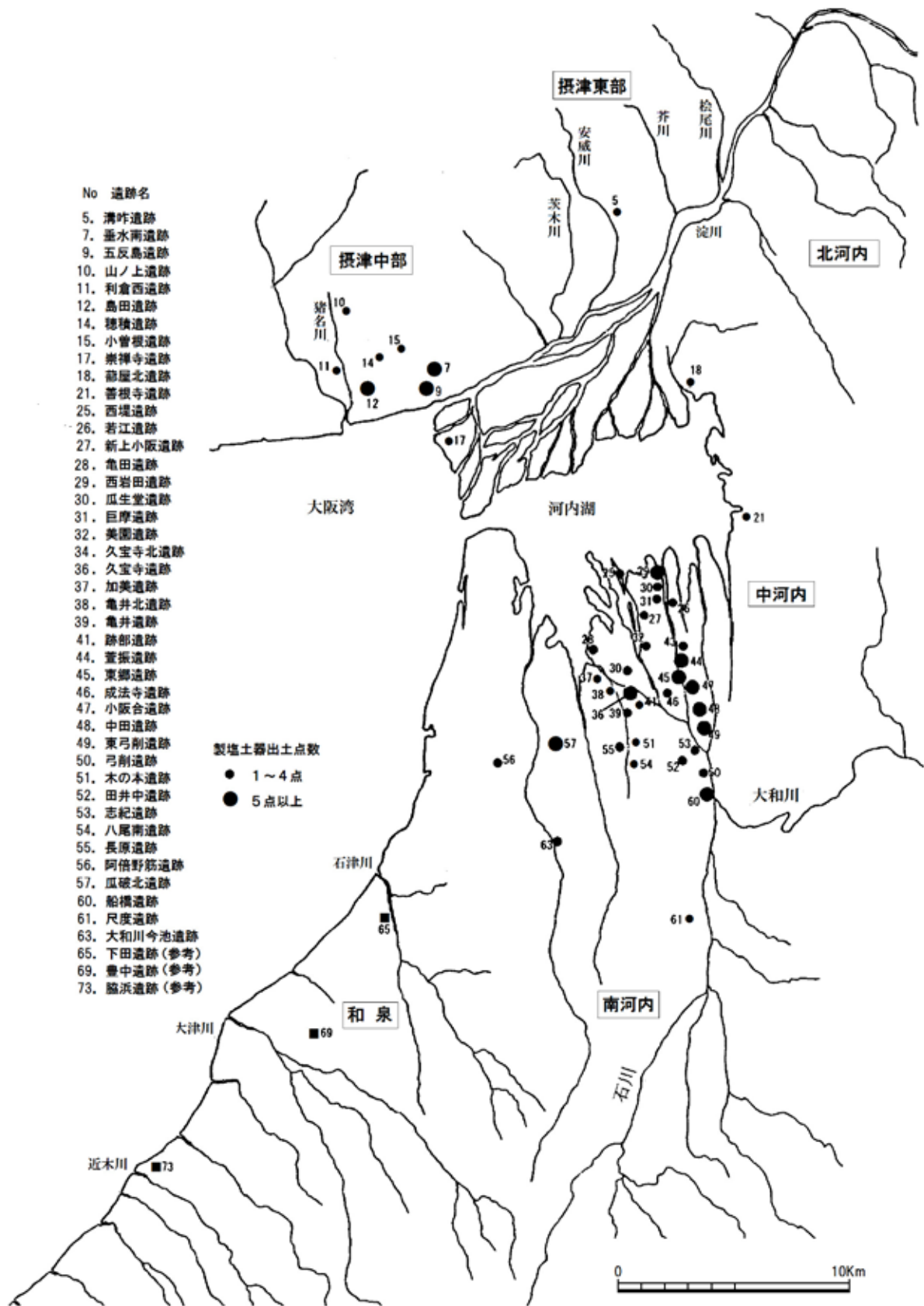


図2 大阪府の製塩土器出土遺跡分布図(和泉を除く)

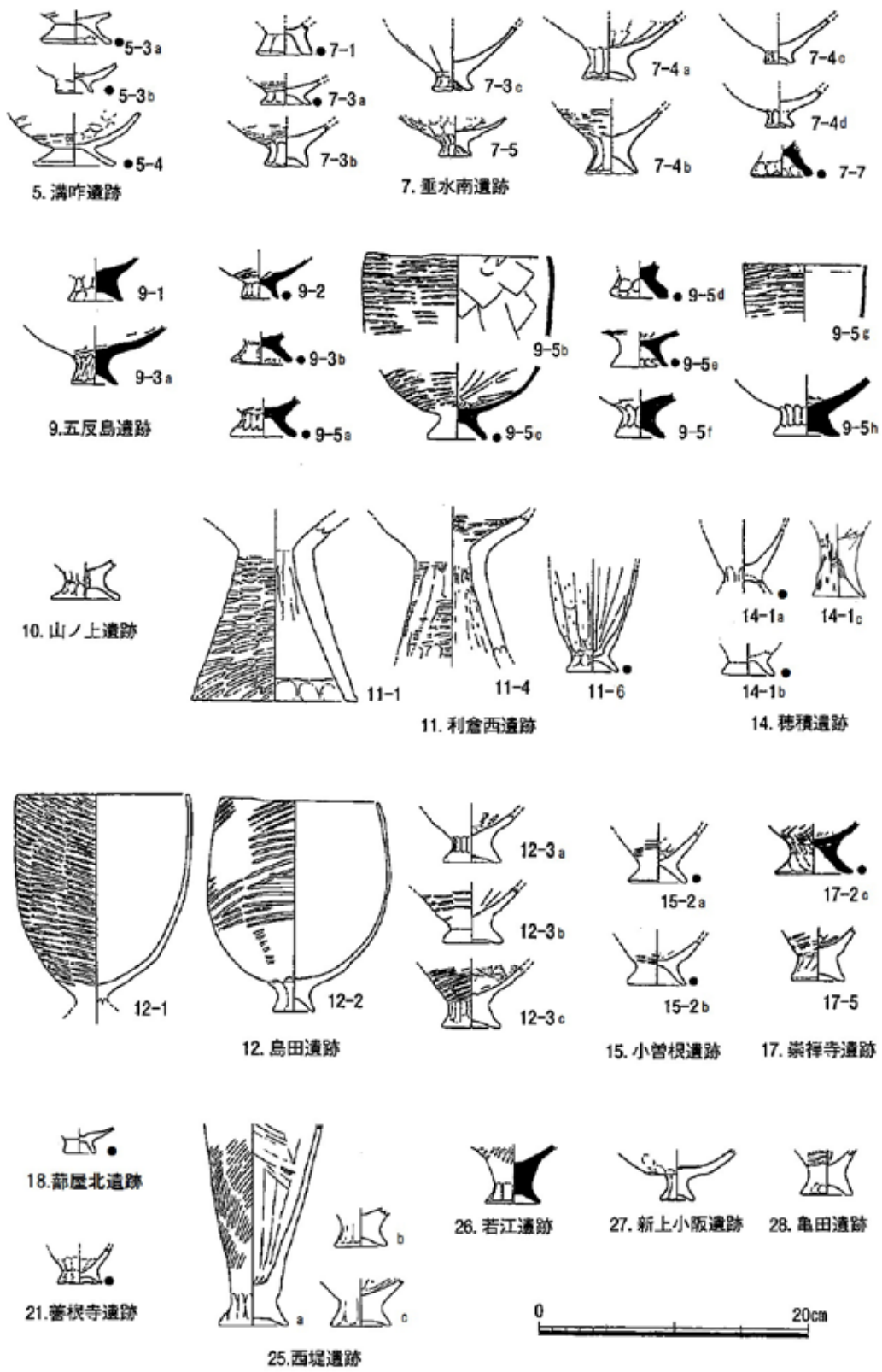


図3 摂津・中河内の製塩土器 (右下●が、他地域系)

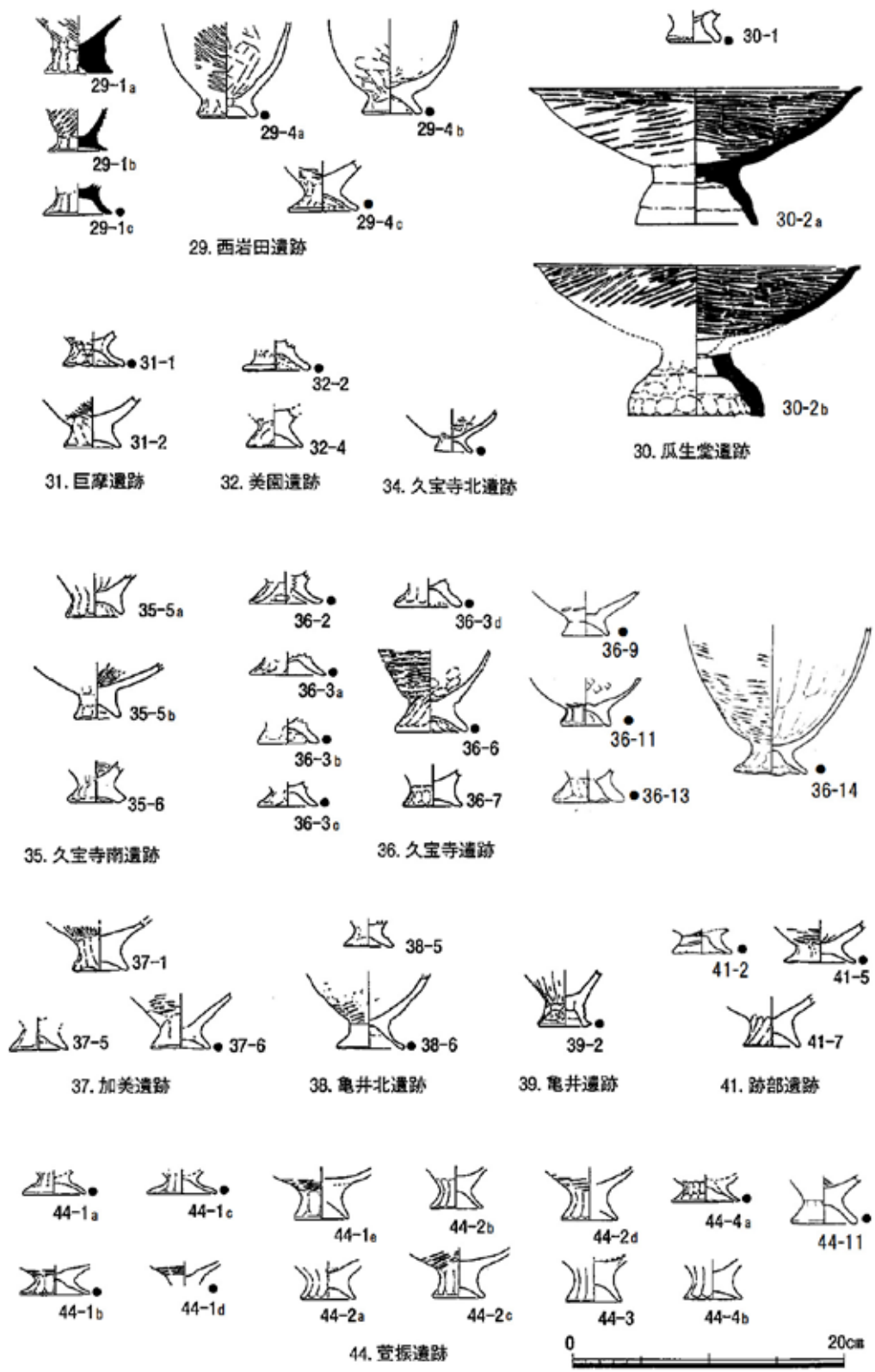


図4 中河内の製塩土器 (右下●が、他地域系)

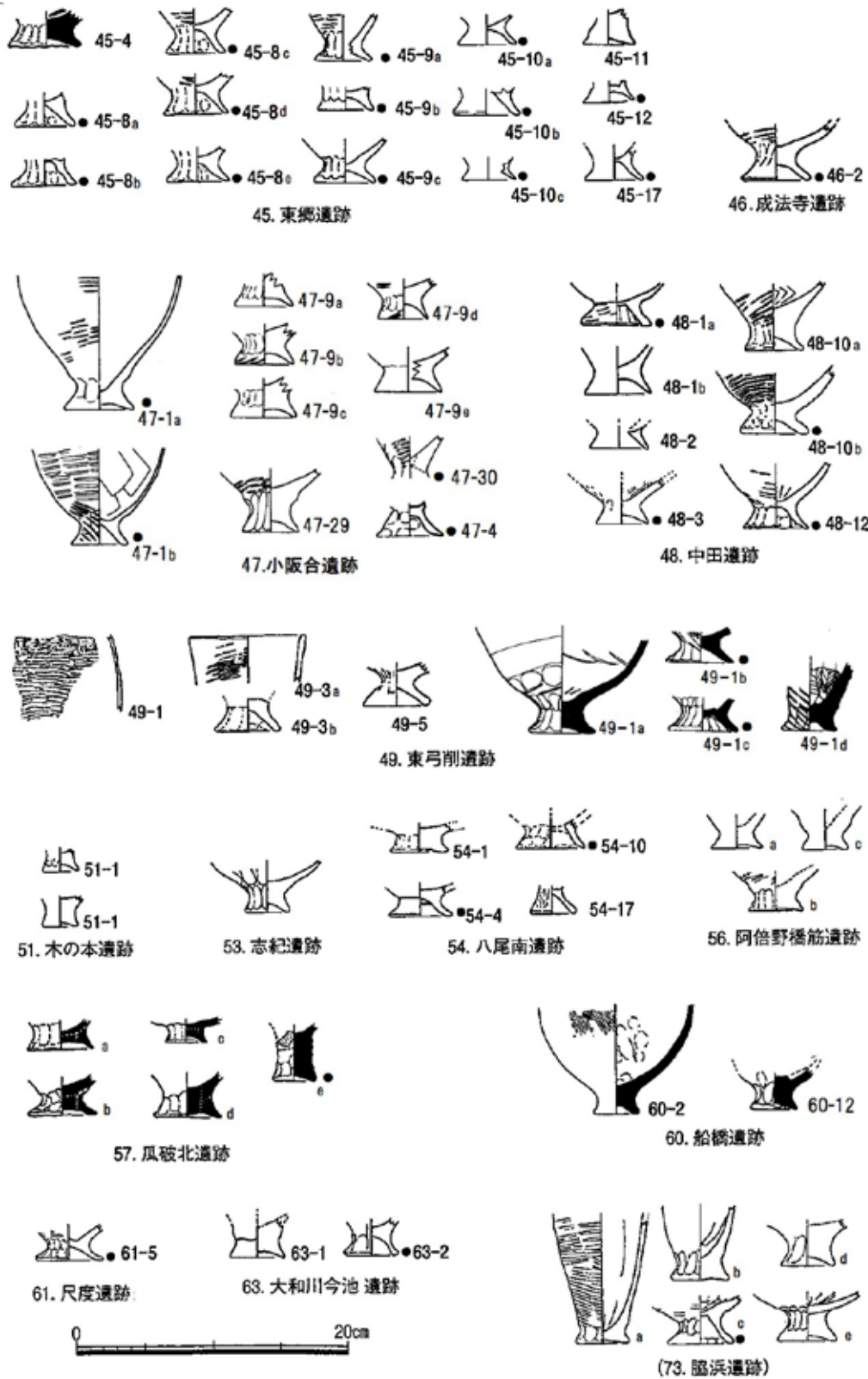


図5 中・南河内、その他の製塩土器 (右下●が、他地域系)

遺構としては布留初頭までを含むが、東郷 45-9a は庄内期中頃の土坑、同 45-17 は庄内期古相の素掘り井戸、また小阪合 47-30 は庄内期古相の良好な一括資料である。吉備の土器編年との併行関係からすれば若干新しいのだが、脚台裾径が 4～4.4cm とやや大きく、また体部も直線的ではあるがやや開く傾向があることから、備讃Ⅳ a 式でも新しい様相を示すと考えておきたい。

備讃Ⅲ b 式からⅣ a 式の事例は急増する。裾部のみから両者を識別することは容易ではないにしても、集成図から脚裾径が 5 cm 程度、体部下半が横方向に開くであろう個体の多いことが読み取れるので、本段階での急増は疑いない。代表例を概観する。

備讃Ⅲ b 式に位置付けられる事例として、西岩田 29-4a～c、久宝寺 36-6・14、亀井北 38-6、成法寺 46-2、小阪合 47-1b、中田 48-10b・12 等がある。久宝寺 36-6 は体部下半から脚部の形態が比較的良好にわかる。531 井戸は庄内 2 式でも古相を示す良好な一括資料であり、府下では最も古い。脚台は裾径 5.2cm、脚高 2.2cm と安定感がある。縦長の体部形態をとりつつも、下半がやや丸く膨らみをもち、備讃Ⅲ b 式に位置付けたい。36-14 は立ち上がりやや丸みを持つ点で備讃Ⅲ b 式でも新しいと考える。その他の事例も、河川等で良好な資料ではないが、庄内期から布留期初頭までの土器に混在するが多い。

備讃Ⅳ a 式は溝咋 5-3a・4、五反島 9-5c、跡部 41-5、中田 48-1a 等があるが時期の詳細は不明瞭である。残存状況は良好でないが、萱振 44-1b・4a は脚台裾径 5.0～5.2cm、高さ 1.2cm と扁平なもので、備讃Ⅳ a 式の新相と考えられる。井戸 SE03 から多数の土師器と共に 44-1b を含む数点の脚台式（5 点が報告）と甕形 3 点が出土しており、時期は布留 1 式である。

備讃Ⅳ b 式は五反島 9-2、久宝寺 36-9・11、備讃Ⅳ c 式は溝咋 5-3b、葎屋北 18、久宝寺北 34 で確認できる程度で、数量は極端に少ない。備讃Ⅳ b 式の五反島、久宝寺 36-9 は体部外面叩き仕上げ、久宝寺 36-11 は叩きをナデ消す。備讃Ⅳ c 式の溝咋、久宝寺北、葎屋北は器壁が薄く小型丸底タイプに近く、体部外面はナデ仕上げ、脚裾径は 2.2～2.8cm と小型である。いずれも単体での河川、包含層からの出土資料で時期の詳細は不明である。以上のように備讃Ⅳ式後半になると、著しい減少傾向が確認できる。

(2) 大阪湾岸系 脚台Ⅰ式は、利倉西 11-1・4、瓜生堂 30-2a・b で 4 点が確認できるのみである。利倉西は脚台Ⅰ式 a であるが、11-1 は脚裾径 12cm、脚高 11cm をはかり和泉地域の事例よりも大型である。大型品から小型に変遷するので、最も古い事例⁸⁾の可能性はある。瓜生堂は、脚台Ⅰ式の範疇にしても、形骸化が著しく脚部は異形である。報告

者は共伴資料から庄内初頭期に位置付け、和泉北部からの搬入を想定する。脚台Ⅰ式の最も新しい段階であろう。以上のように弥生時代後期後半～庄内期初頭の脚台Ⅰ式は、生産地の大阪湾岸以外では少ない。

脚台Ⅱ式は、脚台部から体部が斜上方に直線的にのびる形態で、体部外面は叩き仕上げである。崇禅寺 17-5、西堤 25a、若江 26、西岩田 29-1a・b、東弓削 49-6b で 5 点が確認できる。註 8 の宮地氏の分類に従えば脚台Ⅱ式 a は、若江と西岩田 29-1a と考えられるが、体部が外傾して大きく開く点で脚台Ⅰ式 b との区別は難しい。脚台Ⅱ式 b は崇禅寺、西堤、西岩田 29-1b、東弓削があり、体部は斜上方に直線的に立ち上がる。西堤 25 が庄内新相～布留古相の遺物を含む河川出土である以外は、時期の詳細は不明である。

脚台Ⅲ a 式は、脚台部から体部が内湾しながら立ち上がる形態で、体部外面は叩き仕上げが基本である。備讃Ⅲ b・Ⅳ a 式と比較して脚裾径が 4 cm 程度と小さく、体部下半が横方向に開く個体の多いことから、本段階の急増を読み取ることができる。将来的には細分が必要である。形態が推定できる事例として、垂水南 7-4a・b、島田 12-3a～c、萱振 44-1e・2c・d、小阪合 47-29、中田 48-10a、東弓削 49-6a 等がある。この中で萱振は、体部体部下半が大きく開く形態でやや新しく、布留Ⅰ式に位置付けられる。一方で島田、小阪合は、体部下半が斜上方に外傾して開く形態で、布留初頭までの遺物が伴う。

脚台Ⅲ b 式は脚台が小型化する事例である。垂水南 7-3b・c、五反島 9-3・5、島田 12-2、久宝寺南 35-5a、亀井北 38-5、東郷 45-11、志紀 53、船橋 60-2・12 などであり、脚部裾径が 3.0～3.5cm 程度である。体部外面調整は、ナデ仕上げが基本であるが、垂水南 7-3b、島田には叩き仕上げが残る。なお久宝寺南 SD70 は弥生時代後期終末、船橋 60-2 の出土した井戸 5 は、庄内Ⅰ式の良好な一括資料である。位置付けについては、将来の資料の増加を待ちたい。

脚台Ⅳ式は、小型化した脚台部から体部が内湾しながらのびる形態で、体部外面はナデ仕上げである。垂水南 7-4c・d、5、新上小阪 27、木の本 51-1a・b に 6 点があるのみで、本段階の事例は少ない。すべてが河川、包含層資料で位置付けは難しい。

なお近年、脚台式とは別に甕形製塩土器⁹⁾ が内陸部で確認される事例が増加している。今回、大阪・奈良・京都で確認し、大阪平野部では 20 点以上を抽出したが、紙幅不足のため図面は掲載せず、一覧表への記載に止めた。甕形製塩土器の場合、いわゆる「塩焼け」の状況を示すものは製塩に使用されたことがわかるのだが、そうでない場合の判断は難しい。両者を抽出すれば、中河内から大和にかけて、かなりの数が確認できる。和泉におい

ては、生産遺跡では小島東遺跡、消費遺跡では下田遺跡や大町遺跡で確認できる。

大阪湾沿岸部の生産遺跡で、甕形が多数見つかる状況にはない。一方、大阪では内陸部の消費遺跡で多数が確認できる。また奈良盆地でも、悉皆的に資料調査したのではないが一定数が確認できる。奈良盆地では脚台式が少ないにもかかわらず、甕形が多いことが特徴である。塩の搬入形態にもかかわると考える。庄内新相のものもあるが、大部分は塩の搬入が活発化する布留期以降である。脚台式と併存するが、容量が大きく使用方法が異なると考えている。

以下に概観した事をまとめる。まず搬入時期については、製塩土器の形式から概観する。

- ①大阪平野部に製塩土器が搬入されるのは、備讃Ⅱb式、大阪湾岸系は脚台Ⅰ式である。共伴する土器形式から、弥生時代後期前半から中頃であるが、数量は少ない。
- ②備讃Ⅲ～Ⅳa式、大阪湾岸系の脚台Ⅲ式段階に急激に増加する。両地域とも庄内新相から布留古相併行期に位置付けられる段階である。本段階に甕形製塩土器も出現する。
- ③備讃Ⅳb・c式、大阪湾岸系の脚台Ⅳ式は激減する。布留中頃以降の状況と考えられる。

次に遺跡単位で、製塩土器の数量を概観する。図2では、製塩土器1～4点出土の遺跡を小さな黒丸、5点以上を大きな黒丸で示した。これにより遺跡によって出土数量に大きな差があることが明らかである。5点以上の遺跡として、垂水南・五反島・島田・西岩田・久宝寺・萱振・東郷・小阪合・中田・東弓削・船橋・瓜破北がある。これらの集落は、瓜破北以外はかつて述べたように、河内湖の入口部、旧大和川沿いに立地しており、多量の他地域系土器が出土する交流拠点¹⁰⁾なのである。しかも最も多くを占めるのは吉備系土器である。このことは備讃塩が吉備の交流拠点を通して、多量に持ち込まれた物資の一つであったであろう事を示している。

4 周辺地域の搬入された製塩土器

庄内期から布留期にかけて、各地域には他地域系土器が多量に出土する遺跡が出現する。それらの遺跡は交流拠点としての機能を有すると考えられ、他地域系土器の急増する背景には、交流・物流の活発化がある。そして物資が持ち込まれることはもちろん、そこには各地域の人の有する技術や情報も含まれる。実際それぞれの地域において、交流拠点からは周辺的一般集落よりもランクの高い遺物や遺構が確認される場合が多い。しかし持ち込まれた物資が何なのか、具体的にはわからない。そんな中で、製塩土器はそこに塩が含まれていたことを示す。ここでは各地域の交流拠点と考える集落における製塩土器の状

況を概観する。

(1) 播磨地域 兵庫県の播磨から摂津西部の沿岸部では、製塩土器が出土する遺跡は多数確認できる。しかし土器製塩を行ったと認定できるのは数遺跡で、多くは少数の出土にとどまる。本稿では、塩の交流にも関与したと考えられる赤穂市堂山遺跡と姫路市長越遺跡を紹介する。

堂山遺跡¹¹⁾は、千種川流域に所在する。現在の海岸線から4 km 内陸部であるが、中世初期の塩田が確認されており、かつては湾入して播磨灘に接していたことがわかる。多数の他地域系土器が出土し、漁村であり交流拠点でもある。山陰と吉備系が多く、特に後者が多い。西播磨地域における土器製塩の開始は備讃Ⅳ式だが、本遺跡は家島群島にある真浦遺跡とともに、その段階に出現する製塩遺跡である。本遺跡の脚台式製塩土器は大部分が備讃Ⅳ a 式であり、備讃Ⅳ c 式は未確認である。庄内～布留前半の短期間の集落であり、備讃系製塩地帯の拡大に伴い土器製塩が開始され、さらに交流にも関与した遺跡と考えている。

長越遺跡¹²⁾は船場川流域に所在し、備讃系製塩土器の分布範囲にある。本遺跡の時期は弥生時代終末～古墳時代前期前半で、多量の他地域系土器が出土する他、播磨型庄内甕分布の中心であり、瀬戸内地域と畿内をつなぐ交流拠点の一つと考えられる。昭和49・50年度の調査で製塩土器が大溝から60数点(46点報告)、落込みから12点(7点報告)、竪穴住居2棟と土坑1基から各1点が出土した。製作方法は、「脚部から胴部にかけて連続成形した後、底部に粘土をつめて指なで」(326頁)するとし、類例を中部瀬戸内に求めている。製塩土器の数量が多いので、山本氏は塩生産を行った可能性を示唆する。しかし大溝出土の製塩土器は大部分が備讃系なのだが、数点の大阪湾岸系(図153の416・417・444)を含んでいる。備讃塩を大阪諸地域へと搬出した中継拠点としての在り方と考えておきたい。

以上のように播磨では、庄内新相から布留初頭期の備讃Ⅳ式段階において、備讃地域から東方への製塩地帯の拡大と、交流拠点における製塩土器の集中が確認できるようになる。塩の移動の活発化に連動したものと考えたい。

(2) 摂津東部地域 淀川に流れ込む安威川と芥川の流域の二つの交流拠点¹³⁾がある。前者が溝咋遺跡、後者が郡家川西遺跡である。後者については未報告資料が多く、製塩土器の存在は知られないが、今後明らかになると考えられる。この二遺跡は淀川を介しての、瀬戸内諸地域・摂津中部から山城・近江をむすぶ交流拠点と考えられる。溝咋遺跡¹⁴⁾で

は、多量の他地域系土器が出土し、弥生時代後期初頭と庄内新相～布留初頭にピークがあり、後者の資料が多い。

製塩土器は溝咋遺跡のみから、3点が出土しており、いずれも備讃系である。溝資料であり、弥生時代後期から布留全般の土器が混在する。5-3a と 5-4 は備讃Ⅳ a 式に位置付けられる。5-3b は備讃Ⅳ c 式に位置付けたい。後者の類例は少なく、兵庫県家島群島の江の浦遺跡、高砂市塩田遺跡の播磨地域に事例がある。なお製塩土器2点については奥田尚氏の砂礫分析がなされており、5-3a が讃岐、5-4 が牛窓付近とされている。

本地域では、交流拠点の溝咋遺跡から出土した3点のみである。周辺集落での出土は確認できない。庄内終末～布留初頭以降の交流によって、多数の他地域系に備讃Ⅳ式が含まれたのであるが、塩の搬入は中河内ほどには活発ではなかったようである。

(3) 山城地域 雲宮、下八ノ坪、今里遺跡の製塩土器が知られており¹⁵⁾、近年の資料として鴨田、水垂、佐山遺跡でも確認できる。前者の内容は、下八ノ坪遺跡で後世の盛土から大阪湾岸系の脚台Ⅲ式1点が出土した以外は備讃Ⅲ・Ⅳ式と考えられる。

鴨田遺跡¹⁶⁾では包含層から甕形4が出土している。塩焼けが激しい。水垂遺跡¹⁷⁾で

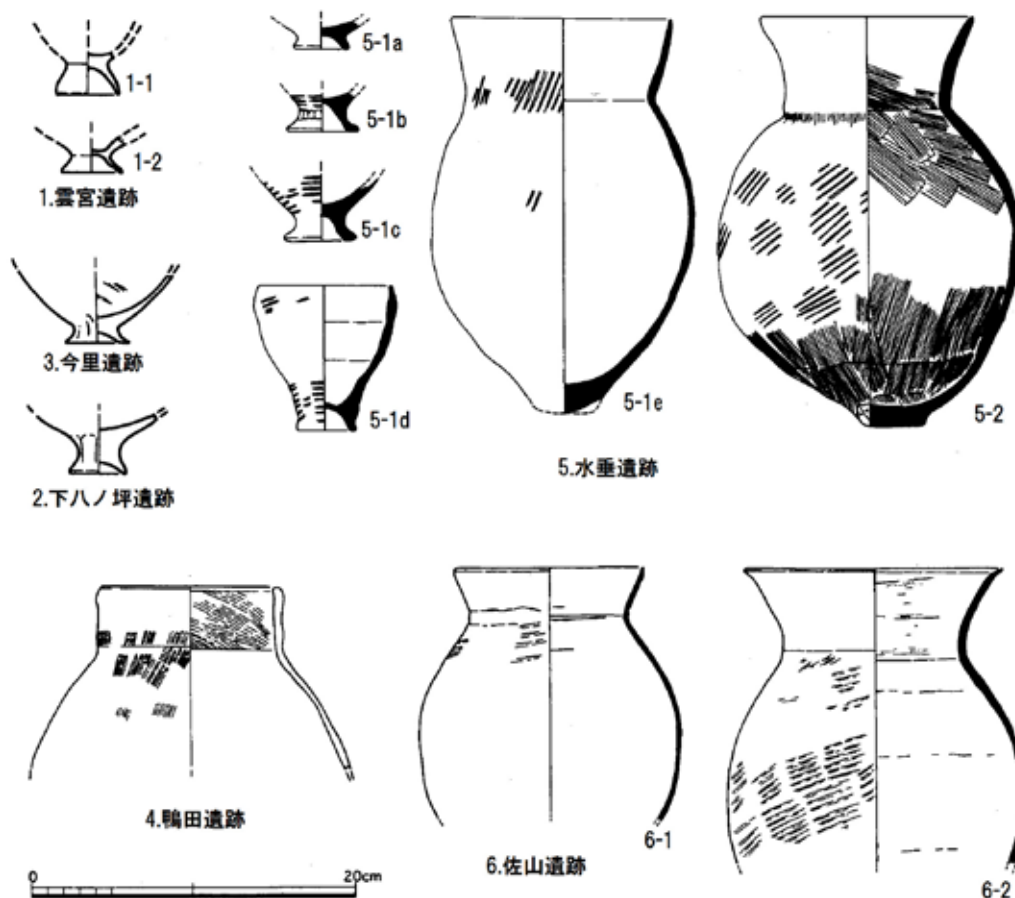


図6 山城の製塩土器

は自然の溝 SD98 から備讃系 4 点と甕形 5-1e が、河川 SD128 出土の甕形 5-2 も可能性がある。5-1b～d は備讃Ⅲ b～Ⅳ a 式、5-1a は備讃Ⅳ b 式と考える。甕形 5-1e は塩焼けが著しい。

佐山遺跡¹⁸⁾でも甕形 2 点が出土している。6-1 は竪穴住居 SH384 出土で、淡橙褐色を呈し剥離が激しい。6-2 は SD466 出土品で、淡褐色を呈し剥離が激しい。調査者は SH384 を佐山Ⅱ -4 式、SD466 を佐山Ⅱ -3 式新段階と位置付け、共伴資料から前者は布留 0 式併行、後者は庄内 3～布留 0 式に併行するとしている。また水垂遺跡 SD98 も同時期と述べており、ほぼ同時期に製塩土器が持ち込まれるようになったことがわかる。

鴨田、今里、下八ノ坪、雲宮、水垂遺跡は、乙訓地域の桂川に流れ込む小畑川流域に近接する集落遺跡である。桂川、鴨川、宇治川、木津川が合流して淀川になる地点の北側にあり、各地との河川交流の結節点に位置する。そして鴨田、雲宮、水垂遺跡からは、他地域系土器が多数出土することから、乙訓地域の交流拠点¹⁹⁾と考えられている。また木津川流域に立地する佐山遺跡も同様の状況を示す。本地域の諸遺跡が塩の消費遺跡であることは言うまでもない。製塩土器の流入は、水垂、佐山が示すように庄内 3～布留 0 式であり、脚台Ⅲ b 式以降である。ただし現状では、集中は認めつつも中河内程に活発な状況ではない事も明らかである。

(4) 大和地域 纏向遺跡、矢部遺跡、飛鳥京跡の製塩土器が知られており²⁰⁾、近年の資料として院上遺跡、伴堂東遺跡、布留遺跡で製塩土器が確認でき、纏向遺跡では資料増加がみられる。

纏向遺跡では大阪湾岸系の脚台Ⅱ式とⅢ b 式が知られていた。また山内紀嗣氏²¹⁾によって指摘された甕形 1-3 は、布留 0 式の基準資料である辻土坑 4 下層出土である。近年の報告された第 42 次調査²²⁾溝 3 から可能性のある甕形 5 点が出土している。1-4a・c・e は搬入品と報告され、共伴遺物から布留 1 式に位置付けられる。

矢部遺跡²³⁾では溝 401 上層から脚台Ⅱ式が出土した。共伴遺物は布留 2 式である。溝 301 上層から脚台式段階の体部 2 点が出土する。2-2a は体部外面タタキ、内面指押さえ・ナデ仕上げ、復元口径 12.2cm である。2-2b は口縁部内外面指押さえ、体部ナデ仕上げ、復元口径 15.4cm である。共伴遺物は布留 0 式。口縁部が内湾するボウル状を呈するもので、島田 12-2 に類似し口縁径もほぼ同じである。胎土の肉眼観察から「酷似した組成のものに和泉地方の例」があるとしている。

伴堂東遺跡²⁴⁾では、庄内 2 式の土坑 SK1090 から脚台Ⅱ式、布留 0 式の土坑 SK1080

から脚台Ⅲ a 式、布留 1 式の土坑 SK2290 から甕形が出土した。院上遺跡²⁵⁾ では溝 SD1001 から脚台Ⅱ式が出土した。脚台部、体部内外面ともに指などで仕上げ。共伴遺物は布留 0 式を主体に、同 1 式までである。飛鳥京跡は脚台Ⅳ式と考えられるが、産地は明確

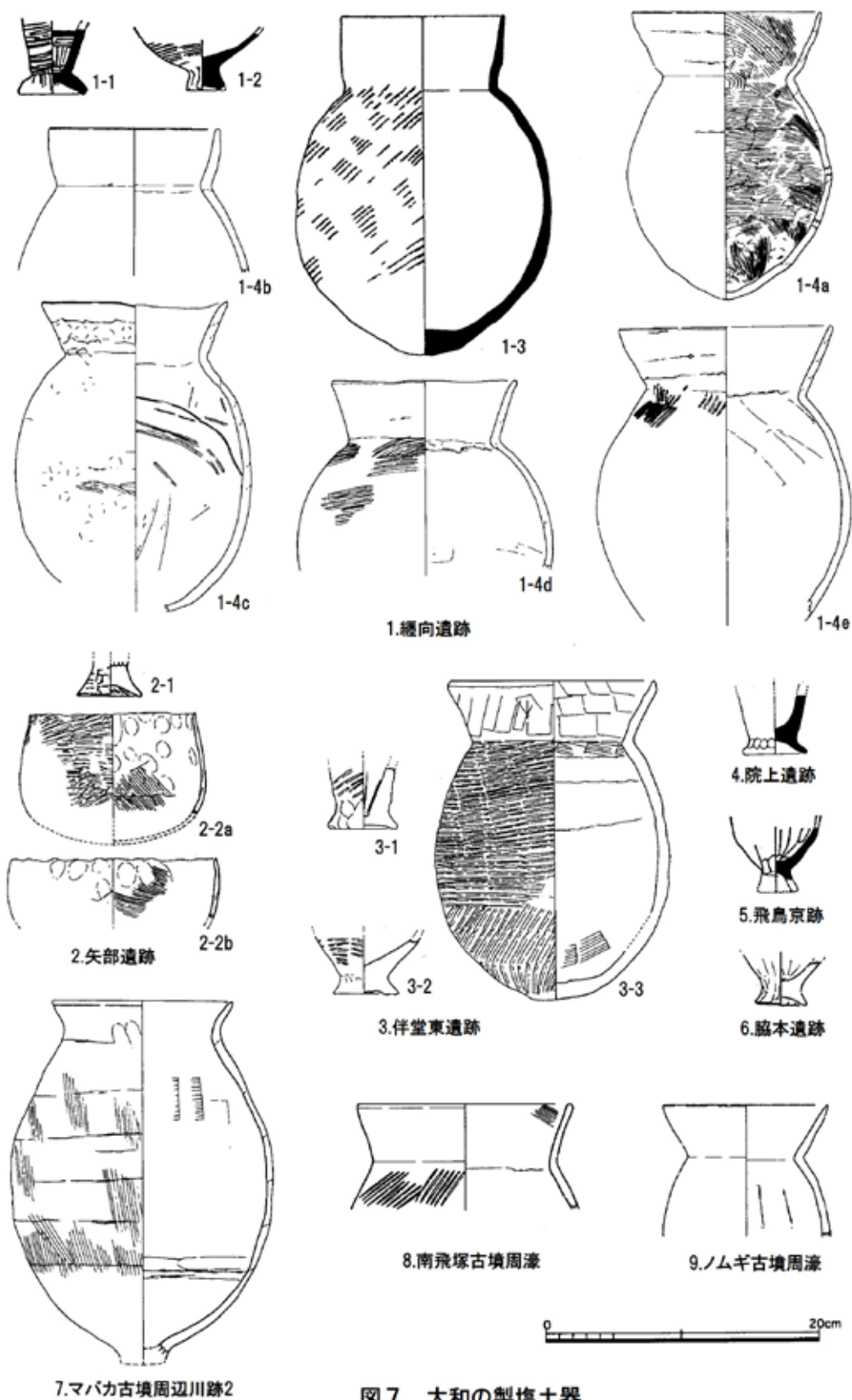


図 7 大和の製塩土器

ではない。脇本遺跡²⁶⁾では竪穴建物 SB13005 から製塩土器と考えられる資料がある。脚台Ⅲ式であろうか。

大和では布留遺跡で、初めて甕形3点が確認²¹⁾された。今回、悉皆的な資料調査をしたわけではないが、大和では脚台式段階の甕形製塩土器が一定数確認できる。ここでは大和盆地東南部の古墳調査で出土²⁷⁾したものを示した。マバカ古墳周辺川跡2出土資料は異形であるが、二次焼成の状況から製塩土器として報告されている。

奈良盆地は、旧大和川を介して中河内とつながり、多数の中河内系や吉備系が持ち込まれているにもかかわらず、脚台式段階の製塩土器は大変少ない。しかもそこには確実に備讃系と認定できるものはなく、大阪湾岸系のみである。これに加えて、一定数の甕形製塩土器の確認できることが大和の特徴である。中河内から大和に運びこまれる段階で、何らかの手が加えられている可能性は強いが、現状ではそれを明らかにする材料はない。甕形製塩土器は焼塩用と想定しているが、中河内での再加工や流通形態を含めて将来の課題としておきたい。

(5) 和泉地域 最後に和泉地域を概観する。和泉は他地域系土器の出土が少ない地域である。それは和泉の古墳時代初頭期の土器様式が「伝統的第Ⅴ様式」と呼ばれたように、弥生時代後期からの継続であって、そこに庄内式を含まない閉鎖性に示される。そんな中で、石津川流域の下田遺跡と海岸線にある脇浜遺跡の製塩遺跡には少ないながらも他地域系土器が確認できる。

堺市下田遺跡²⁸⁾は当時の海岸線から2 km 程度内陸に入った、石津川左岸の沖積平野部に立地する集落遺跡である。和泉地域内では傑出した数の他地域系土器が出土する。河内、吉備、阿波、東海、近江、丹波、丹後等から持ち込まれた土器が確認でき、中でも河内産庄内甕が多く、中河内地域と強い関連を有していたことがわかる。また、きぬがさ傘骨や漆塗り環形付木製品の威儀具、刀剣柄装具、四方転びの箱等の上位ランクにあることを示す遺物が出土することも特徴である。和泉地域北部の拠点集落と考えられる。

下田遺跡では多数の製塩土器も出土する。その特徴は、①大阪湾岸で土器製塩が開始される段階以降、すべての段階の製塩土器が出土すること、②脚台Ⅰ式には、備讃系との技術交流を示す体部外面へラ削りの個体、和泉でも最古段階に位置付けられる個体が確認できることがある。つまり和泉の土器製塩に関与したことは明らかで、むしろ主導した集落であったと考えられる。中河内で確認できる製塩土器は、下田遺跡を代表とする石津川流域から持ち込まれたと考えたい。

和泉市脇浜遺跡²⁹⁾は、海岸沿いに立地する製塩遺跡である。脇浜73は、Ⅲ区中洲付近から出土したもので、他に約20点の大阪湾岸系脚台Ⅱ・Ⅲ式の製塩土器がある。Ⅲ式と報告された73-cは、脚裾径5.0cm、脚高1.8～2.2cmで、底部は粘土充填による薄い仕上げである。調査者は「他のⅢ式とは異なって（中略）本遺跡中唯一の例」と報告している。搬入品で備讃Ⅳa式と考えられる。脚台Ⅲ式が共伴するが、形態・組み合わせ共に萱振遺跡と同じである。他に吉備系甕、東海系S字状口縁台付甕が各1点出土している。

本地域には多数の製塩遺跡が存在するが、交流面からみれば閉鎖的である。他地域系の出土は極端に少ない。そんな中で下田遺跡のありかたは特徴的で、交流拠点の一つであり、高いランクの首長が存在したようだ。当初から地域の製塩活動を主導したと考えられ、和泉北部地域における中河内への塩搬出の窓口としての役割を担ったと考えられる。

(6) 交流拠点と製塩土器 以上のように古墳時代初頭期～前期になれば、近畿地域の交流拠点において製塩土器が確認できるようになる。数量の多寡を問わなければ、旧大和川ルートばかりでなく摂津東部地域から山城地域におよぶ淀川ルートの交流拠点でも確認できる。近江では未確認なので、備讃地域と大阪湾岸地域の塩が生産品として山城までは到達していたことがわかる。しかし後者で出土する製塩土器の数は少なく、持ち込まれた塩の量は少なかったようである。

多数の製塩土器の出土から、活発な塩の集積が行われたと想定できる地域となると、現状では中河内のみと考えたい。摂津中部の大阪湾と河内湖をつなぐ地域から、中河内の旧大和川流域の地域にかけての「旧大和川ルート」上のみ確認できることが実態なのである。旧大和川ルート上の諸遺跡には、他地域系の土器が著しく搬入されるが、中でも吉備系土器の搬入は最も多い。備讃系製塩土器の多さはそれに対応しているのであり、和泉地域からの製塩土器をも加えると、中河内への塩の集積がより明らかになる。

この段階には東海、北陸、瀬戸内西部、北部九州の各地に備讃系あるいは大阪湾岸系の影響を受けた製塩土器による塩作りが始まる。各地域における交流拠点の存在と、それらをつなぐネットワークが背景にあると考えたい。活発化した地域間交流によって、各地の首長層を背景に、製塩技術を有した人の移動をも含んだ技術・情報の移転によって生じた状況と考えられる。

西日本の交流拠点と製塩土器出現の状況を概観する。次山淳氏³⁰⁾は、吉備形甕を多数出土する集落遺跡の分布を示すことで、古墳時代初頭の瀬戸内海ルートを明らかにした。これらの集落遺跡では他に山陰、讃岐、阿波系なども多く出土しており、瀬戸内ルートの

交流拠点と理解できる。その分布から、博多湾沿岸から周防灘をとおり松山平野・今治平野をへて備後東南部、吉備、播磨・摂津沿岸の瀬戸内海ルート、さらに旧大和川下流域の遺跡群から大和盆地へのルートを明らかにした。そしてこの瀬戸内海ルートは、土器製塩の拡散とは無関係ではない。それら地域の交流拠点の内、博多湾沿岸と今治平野から備後東南部の瀬戸内西部（芸予地域）で土器製塩が本格的に始まるのであり、しかも両者とも製塩土器は備讃系である。土器製塩開始の背景には、当時の交流における吉備の関与があったことは明らかなのである。

ところで芸予地域を例外にして、各地の土器製塩は非常に小規模である。地域内でいきわたることもない。芸予地域の場合は備讃製塩地帯の拡大と考えるが、北部九州の場合は、地域内での使用をまかなう分業として成立したとする久住猛雄氏³¹⁾の考えがある。氏は北部九州における土器製塩を「博多湾貿易」をささえる「博多湾岸経済」の分業の一つと考える。「博多湾貿易」とは、庄内期から布留初頭期にかけて、西新町遺跡を倭国全体の交易港として行われた対外交易である。つまり「西新町遺跡に対外交易の場が集中された一方で、博多湾岸の各種生産が諸拠点集落で専門特化する傾向にあり、相互補完的な分業・交換ネットワークを構築（「博多湾岸経済」とする）、地域経済だけでなく「博多湾貿易」の存続を維持した」（32頁）と考えている。なお博多湾岸地域で確認できる分業とは、今山・今宿遺跡、および海の中道遺跡の土器製塩の他、博多遺跡群の高温操業の鍛冶、潤地頭給遺跡の玉作などである。

北部九州において、弥生時代における塩作りが日常土器を使用して行われた³²⁾ことが明らかになりつつある。その塩作りは小規模なものであったにしても、古墳時代初頭期に出現した交流ネットワークの中にすでに土器製塩技術を有した大阪湾沿岸地域や備讃地域の存在したことにより、より集約化と量産を追求すべく、あるいは技術者の移動を伴った技術移転によって、同系統の製塩土器が北部九州に出現することになったと考えられる。同じころ同様に製塩土器が出現した地域も、地域内での研究が進めば、同様の方向性が明らかになってくるのではないだろうか。

5 まとめ

以上のように、弥生時代後期後半以降、特に庄内期～布留期中頃にかけて、大阪府では大阪湾岸に立地する製塩遺跡以外で、製塩土器が確認できるようになる。そしてその製塩土器は、大阪湾系と備讃系が混在することは重要である。当時、塩の二大生産地である大

阪湾岸地域と備讃地域は、瀬戸内海と河内湖・旧大和川を通じて中河内・大和盆地東南部に直結しており、製産された塩はそのルートによって持ち込まれたのである。最後に大阪府とその周辺における特徴を列記しつつ、その歴史的な背景について記す。

現状で中河内地域での、脚台式段階の製塩炉は未確認である。岡山県上東遺跡や兵庫県池上・口ノ池遺跡のように、海岸線からは離れているものの塩生産を行ったことが確認できる遺跡はない。中河内はあくまで消費地であり、しかも大阪湾岸系と備讃系の製塩土器の混在する状況は、交流によって両地域から運び込まれた事を示している。生産遺跡である和泉では、他地域系の確認できる脇浜遺跡以外で、異なる地域の製塩土器の混在は認められない。

下田遺跡は、大阪湾岸系製塩土器の中河内への搬出の窓口であるとともに、和泉地域にあっては土器製塩に関与、主導した遺跡であると想定した。根拠として、①河内産庄内甕を多数含んだ一定量の他地域系土器が出土する、②すべての段階の大阪湾岸系製塩土器が出土する、③製塩土器の脚台Ⅰ式には、備讃系との技術交流を示す体部外面へラ削りの個体、和泉地域でも最古段階に位置付けられる個体が確認できる等である。中河内で確認できる製塩土器は、下田遺跡を代表とする石津川流域から持ち込まれたと考えられる。

中河内地域で出土する他地域系土器の中で、吉備系が一番多数を占める。このことは、中河内地域は吉備との関連が最も強いことを示しており、備讃系製塩土器が多い事と対応する。当時の備讃地域の状況について大久保徹也氏³³⁾の検討がある。それによれば、弥生時代後期終末～古墳時代初頭には海浜・島嶼部に小規模ながら多くの製塩遺跡が確認できるばかりでなく、古墳時代前期前半までは沿岸平野部―特に足守川下流域―の遺跡は存続しつつまとまった製塩土器が出土することを指摘している。製塩関連の遺跡数が最も多い段階である。しかしその後、脚台が小型化する前期後半には平野部の土器製塩は消え、前期末までに島嶼部も激減することを指摘している。

足守川下流域の諸遺跡の報告書を検討すれば、多数報告されている古墳時代前期前半の住居に製塩土器が含まれることは一般的である。足守川下流域では塩の消費は一般的になっており、地域内で生産された塩を集積するシステムが確立されていたと考える。しかも足守川流域が旧大和川流域につながる交流拠点であることは間違いなく、備讃塩の搬出拠点なのであろう。足守川下流域の集落動向は、中河内における多数の備讃系Ⅲb式・Ⅳa式の出土と、その後の備讃Ⅳ式後半の資料の少ないことにも対応している。

摂津中部から中河内地域で、一定数の製塩土器が出土するとはいえ、地域内で広範囲に

分布するわけではない。遺跡間の格差が著しく、出土しない遺跡や出土しても1～2点の遺跡が大部分で、集中する遺跡は限定できる。摂津中部では大阪湾と河内湖のつながる地域に立地する遺跡、中河内では旧大和川に沿って立地する遺跡に集中する。そこには西日本各地域の土器が多数確認できる、西日本諸地域と大和盆地をつなぐ幹線交流ルートである。あくまで特定勢力への集積であったと考えられる。中河内への他地域系土器の流入圏は、吉備を西限にした瀬戸内東部地域であり、そこは当時最大の製塩地帯である。中河内に塩が集積され、特定勢力が塩の重要性を認識する状況が形成されたと考えたい。

その後、古墳時代中期になると、多くの前期集落は衰退・消滅し、新たな集落が出現する。社会が再編成されたと理解され、土器製塩に関わる集落の動向も例外ではない。備讃瀬戸地域と和泉地域の製塩遺跡の動向をみると、両地域ともに、脚台タイプの段階で著しく発展するに対して、中期の丸底タイプの段階で衰退期をむかえる。集落と共に、製塩遺跡も解体するのであり、両者は連動する。一方、消費地である大阪平野部の集落の動向も同様なのだが、隣接して出現する中期集落では、脚台式よりも多くの丸底タイプの製塩土器が確認できるようになる。中期になって、新たな交流拠点をつなぐルートが再編成されたと考えられる。大雑把に概観すれば、韓式系土器や初期須恵器の出土遺跡の分布がそれに重なる。しかも河内湖北岸域では製塩炉も確認されており、馬の飼育などにより、塩の需要は前期より高まった。古墳時代初頭以来、大阪平野部は、塩の集積地であり続ける。

奈良盆地の状況はさらに急激に変化する。脚台式の存在が極めて少なかった奈良盆地において、丸底タイプの製塩土器が激増する。その背景には前期段階では必ずしも明らかでない紀ノ川ルートの存在、活発化を抜きにしてはありえない。しかしそのことが古墳時代前期以降の幹線ルートである旧大和川ルートの衰退を示すわけではないことも確かである。大阪平野部での小型丸底式の製塩土器の多さを上げるまでもなく、何よりも多数集成された「奈良県古墳時代製塩土器集成図」³⁴⁾に紀伊系の製塩土器ばかりでなく、多くの北河内系や播磨系が含まれていることから明らかである。当該期の大和には、複数の地域から持込まれた製塩土器³⁵⁾が確認できるのであり、より本格的に塩の集積に乗り出したことを示している。

弥生時代中期後半に備讃地域で出現した土器製塩は、後期後半には大阪湾岸地域をも含めた広範囲が製塩地帯に変貌し、そして古墳時代初頭から前期には大阪平野部に多くの塩が持ち込まれる状況になった。特に古墳時代初頭期は大きな画期である。重要な点は、塩の在り方は当時の交流拠点の動向と連動していることである。それら交流拠点には、最先

端の物・技術・情報が集まり、その内部や周囲に居館や古墳の築造されることが示すように、背景には地域首長の存在がある³⁶⁾。塩の集積にも地域首長の関与があったことは確かだ、それは古墳時代初頭の畿内から始まる。大阪平野部に持ち込まれた製塩土器は、塩の重要性を認識し、やがて律令国家が独占するにいたる初期の状況を示している。

註

- 1 山田隆一「大阪府の讃岐・阿波系土器と備讃系製塩土器」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』学生社 2011
- 2 大阪湾岸系の製塩土器の編年には、数名の編年案がある。従来は比較的単純であった編年が、資料の増加により複雑な状況を呈するようになった。新たなタイプの抽出に加え、複数タイプが同時に存在すること、従来の年代観よりかなり遡ることが明らかになっている。ここでは、広瀬和雄（「大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店 1994）の分類によりつつ、積山洋（「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『季刊考古学』別冊 144 2004）の年代観を参考にした。
- 3 備讃の製塩土器編年は、大久保徹也「1 岡山県」『日本土器製塩研究』青木書店 1994 による。
- 4 大久保徹也「第五章 喜兵衛島遺跡群出土製塩土器について」『喜兵衛島』喜兵衛島刊行会 1999
- 5 報告書では、本稿での大阪湾岸系を a・c 類、備讃系を b 類とし、a 類は小島東遺跡の脚台Ⅲ式の特徴を示すとしている（大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1983）。今回の分類は、大阪湾岸系は大阪府小島北磯遺跡、同小島東遺跡など、備讃系は香川県大浦浜遺跡、愛媛県多々羅遺跡などで観察させていただいた資料が基礎となっている。
- 6 山本三郎「2 兵庫県（播磨・摂津）」『日本土器製塩研究』青木書店 1994
- 7 香川県教育委員会『小山・南谷遺跡Ⅱ』2006
- 8 和泉地域における土器製塩の始まりは、弥生時代後期中頃であると考えられ、少なくとも後期後半には製塩土器が出現する。確実な資料は、堺市下田遺跡の下田Ⅰ－Ⅱ式に位置付けうる脚台Ⅰ式である。その基準資料 SW1157 には、完形品を含む脚台Ⅰ式 6 点が報告されており、脚台部は 4 点が含まれ、それは脚裾径 8～9 cm で脚高 6 cm におさまる。下田Ⅰ－Ⅱ式は、後期後半の河内Ⅵ－Ⅰ様式に併行する。いっぽう宮地聡一郎は岬町小島北磯遺跡の脚台Ⅰ式には、「現時点で確実に時期を押さえられる最古の資料、下田遺跡の下田Ⅰ－Ⅱ式に伴うものよりも型式学的に古い」資料を含むと考える（「Ⅵ考察 脚台式製塩土器について」『小島北磯遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター 2000）。小島北磯遺跡には、脚裾径 9 cm で脚高 9 cm、脚裾径 11 cm で脚高 9 cm、また裾部が欠損するさらに大型品もあり、これら下田Ⅰ－Ⅱ式をうわまわる大型の個体数点が古くなると考える。つまり脚高は、徐々に低く推移するので、後期中頃のいずれかに開始を想定す

るのである。しかし利倉西はさらに大型であり、共伴土器の最古をとれば河内V-3様式に遡る可能性がある。

- 9 下田遺跡では、多数の甕形製塩土器が出土し、3種に分類されている。河田泰之「大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開」『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター 1996
- 10 山田隆一「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館』第3集 大阪府立弥生文化博物館 1994。製塩土器の流通は備讃、大阪湾岸系に限定される。瓜破北57eは瀬戸内西部の美濃ヶ浜式と考えられるが、例外的である。
- 11 兵庫県教育委員会『堂山遺跡』1995
- 12 兵庫県教育委員会『播磨・長越遺跡』1978
- 13 山田隆一「淀川流域の古墳時代初頭期集落について」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』2003
- 14 合田幸美「溝咋遺跡出土の外来系土器について」『溝咋遺跡(その1・2)』(財)大阪府文化財調査研究センター 2000
- 15 秋田浩三「8京都府(丹波・山城)」『日本土器製塩研究』青木書店 1994
- 16 向日市教育委員会『鴨田遺跡』1985
- 17 (財)京都市埋蔵文化財調査所『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』1998
- 18 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター『佐山遺跡』2003
- 19 國下多美樹「乙訓地域における土器交流拠点」『庄内式土器研究』20 庄内式土器研究会 1999
- 20 岩本正二「7 奈良県」『日本土器製塩研究』青木書店 1994
- 21 山内紀嗣「製塩土器の新例」『天理参考館報』第7号 天理大学出版部 1994
- 22 桜井市教育委員会『纏向遺跡発掘調査報告書一巻野内坂田地区における調査報告一』2007
- 23 橿原考古学研究所『伴堂東遺跡』2002
- 24 橿原考古学研究所『矢部遺跡』1986
- 25 橿原考古学研究所『院上遺跡』1983
- 26 橿原考古学研究所『脇本遺跡I』2011
- 27 マバカ古墳周辺の川跡2(橿原考古学研究所『マバカ古墳周辺の調査』2007)、南飛塚古墳の周濠(桜井市文化財協会『東田大塚古墳』2006)、ノムギ古墳の周濠(橿原考古学研究所『ノムギ古墳』2006)を示した。註22の他に保津・宮古遺跡(橿原考古学研究所『保津・宮古遺跡 第3次発掘調査報告』2003の62p 225)、藤原京(橿原考古学研究所『藤原京右京十一条三坊』2013の38p 221)等にもある。
- 28 (財)大阪府文化財調査研究センター『下田遺跡』1996
- 29 (財)大阪府埋蔵文化財協会『脇浜遺跡』1986。なお他にも、豊中遺跡等に備讃系と考えられる個

体が若干には存在する。

- 30 次山 淳「古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器と交流」『考古学研究』第 54 巻第 3 号 考古学研究会 2007
- 31 久住猛雄「「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』第 53 巻第 4 号 考古学研究会 2007
- 32 伊崎俊秋「北部九州の土器製塩研究の現状と課題」『海峡の地域史』水島稔夫追悼集刊行会 2004
- 33 大久保徹也「備讃地域における弥生後期土器製塩の特質」『環瀬戸内海の考古学』 2002
- 34 第 56 回埋蔵文化財研究集会実行委員会『古墳時代の海人集団を再検討する』2009 の『資料集第Ⅱ分冊』「奈良県古墳時代製塩土器集成図」(52・53 頁)。
- 35 奥田尚氏によって、奈良県御所市の南郷大東遺跡出土の丸底タイプの製塩土器の砂礫分析が報告されている。72 点が分析され、砂礫の採取推定地の内訳は、紀伊南部 52 点、和泉？ 10 点、金剛東麓 6 点、不明 4 点である。なお紀伊南部とは紀ノ川左岸の河口付近から下津町付近の結晶片岩が分布する付近、金剛東麓とは南郷大東遺跡付近の在地である。本遺跡から南下すれば紀ノ川ルートに直結すること、製塩土器以外の土師器にも多数の紀伊産があることから、南郷大東遺跡の製塩土器は小島東遺跡などの和泉南端、西庄遺跡などの紀伊北端から紀ノ川を遡って搬入されたものが主流と考えられる(奥田 尚「南郷大東遺跡出土土器の表面にみられる砂礫」『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所 2003)。
- 36 山田隆一「西三河の土器製塩と交流拠点」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004 年度共同研究成果報告書』2006

【表 1 文献】

- 6 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『溝咋遺跡 (その 1・2)』 2000
- 10 米田文孝 「搬入された古式土師器」 『関西大学考古学研究室開設三十周年記念 考古学論叢』 1983
- 11 吹田市教育委員会 『昭和 58 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』 1984
- 12 吹田市教育委員会 『平成 7 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』 1996
- 14 吹田市教育委員会 『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書 遺物編』 2003
- 15 豊中市教育委員会 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1984 年度』 1985
- 16 豊中市 『新修 豊中市史』 第 4 巻考古 2005
- 17 大阪府教育委員会 『崇禅寺遺跡発掘調査概要・I』 1982
- 19 大阪府教育委員会 『崇禅寺遺跡』 2003
- 23 東大阪市教育委員会 『善根寺遺跡第 1 次発掘調査概要報告』 2003
- 27 西堤遺跡調査団 『西堤遺跡』 1991
- 28 才原金引 「東大阪市内出土の製塩土器」 『東大阪市遺跡保護調査会年報 1979 年度』 1979
- 29 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『新上小阪遺跡 2』 2003
- 30 (財) 大阪府文化財センター 『弓削ノ庄遺跡他』 2005
- 32 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』 1998
- 33 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』 1999
- 35 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ』 1998
- 36 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ』 2003
- 37 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』 2004
- 38 (財) 八尾市文化財調査研究会 『久宝寺遺跡第 22 次発掘調査報告書』 2001
- 39 (財) 大阪市文化財協会 『加美遺跡発掘調査報告Ⅰ』 2003
- 40 (財) 大阪文化財センター 『亀井 (その 2)』 1986
- 42 (財) 八尾市文化財調査研究会 『跡部遺跡発掘調査報告書』 1991
- 44 (財) 八尾市文化財調査研究会 「Ⅱ跡部遺跡 (第 11 次調査)」 『八尾市文化財調査研究会報告 58』
1997
- 46 (財) 八尾市文化財調査研究会 「Ⅱ跡部遺跡 (第 23 次調査)」 『八尾市文化財調査研究会報告 81』
2004
- 49 大阪府教育委員会 『萱振遺跡発掘調査概要・I』 1983

- 56 (財) 八尾市文化財調査研究会「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』1983
- 58 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅰ 東郷遺跡(第11～16.18次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和63年度』1989
- 63 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅱ 東郷遺跡(第44次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告 61』1998
- 65 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅰ 成法寺遺跡(第5次調査)」『平成4年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』1992
- 66 (財) 八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡〈昭和57年度 第1次調査報告書〉』1987
- 67 (財) 八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡〈昭和58年度 第2・3次調査報告書〉』1987
- 68 (財) 八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡〈昭和59年度 第4次調査報告書〉』1988
- 76 八尾市教育委員会『中田遺跡』1975
- 77 八尾市教育委員会「7. 中田遺跡(93-289)の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅱ』1994
- 78 大阪府教育委員会『中田遺跡発掘調査概要』1986
- 83 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅱ 中田遺跡第14・25次調査」『中田遺跡』1997
- 84 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅰ 中田遺跡(第45次調査)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告 2』2001
- 86 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅴ 東弓削遺跡(第5次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告 32』1991
- 88 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅴ 東弓削遺跡(第7次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告 61』1998
- 89 八尾市教育委員会「4.2. 東弓削遺跡(97-675)の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅱ』1999
- 91 大阪府教育委員会『木の本遺跡発掘調査概要』1996
- 95 (財) 大阪府文化財調査研究センター『志紀遺跡(その2・3・5・6)』2002
- 96 八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』1981
- 97 大阪府教育委員会『八尾南遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1991
- 98 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅶ 八尾南遺跡(第22次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告 54』1996

- 101 (財) 大阪市文化財協会 『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』1999
- 102 (財) 大阪市文化財協会 『瓜破北遺跡』1980
- 111 柏原市教育委員会 『船橋遺跡』1994
- 116 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『尺度遺跡Ⅰ』1999
- 118 (財) 大阪府文化財センター 『尺度遺跡Ⅲ』2004
- 120 大阪府教育委員会 『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅸ』1992
- 121 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『大和川今池遺跡(その1・その2)』2000
- 133 (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『協浜遺跡』1986
- 150 大阪府教育委員会 『葎屋北遺跡Ⅰ』2010
- 151 東大阪市教育委員会 『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』2002
- 152 (財) 八尾市文化財調査研究会 『久宝寺遺跡』2009
- 153 (財) 大阪府文化財センター 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』2007
- 154 (財) 八尾市文化財調査研究会 『萱振遺跡』2008
- 155 (財) 八尾市文化財調査研究会 「Ⅰ 萱振遺跡(第16次調査)」 『八尾市文化財調査研究会報告95』2007
- 156 (財) 八尾市文化財調査研究会 『東郷遺跡』2010
- 157 (財) 八尾市文化財調査研究会 『Ⅱ小阪合遺跡(第32次調査)』2009
- 158 (財) 八尾市文化財調査研究会 『小阪合遺跡』2008
- 159 (財) 八尾市文化財調査研究会 『Ⅰ小阪合遺跡(第42次調査)』2009
- 160 八尾市教育委員会 『東弓削遺跡』1976
- 161 (財) 八尾市文化財調査研究会 「弓削遺跡第7次調査」 『八尾市文化財調査研究会報告112』2008
- 162 (財) 八尾市文化財調査研究会 『田井中遺跡』2007
- 163 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『船橋遺跡』1998
- 164 (財) 大阪府文化財調査研究センター 『船橋遺跡Ⅱ』2005

表1 大阪府消費地出土の製塩土器

番号	遺跡名	所在地	遺構等	時期	製塩土器			文献
					他地	在地	甕形	
5	溝咋	茨木市学園町	3 2A-2区6面溝120	—	2			6
			4 2A-2区6面溝120砂層	—	1			6
7	垂水南	吹田市垂水町	1 C-5地区土坑	庄古	1			10
			3 C-8地区土器群	布古-中	1	2		10
			4 —	—		4		10
			5 河道内落込み	—		1		11
			7 G4土器群	—	1			12
9	五反島	吹田市南吹田	1 河道VI下層	—		1		14
			2 河道VI上層	—	1			14
			3 河道III下層	—	1	1		14
			5 河道I上層	—	4	2		14
10	山ノ上	豊中市山ノ上町他	— 1号住居下層	布中		1		15
11	利倉西	豊中市利倉西	1 1区北土器群6層	庄古		1		16
			4 1区南6層	—		1		16
			6 2区南落込み1第7層	—	1			16
			— 3区SK19	布古			1	16
12	島田	豊中市庄内栄町他	1 1次流路	—		1		16
			2 4次北大溝SD1	—		1	1	16
			3 6次土器群	布初		3		16
14	穂積	豊中市服部豊町他	1 1次円形周溝SD37	—	2	1		16
15	小管根	豊中市小管根他	2 8次3区11層	布初	2			16
17	崇禅寺	大阪市東淀川区淡路他	2 I区包含層	—	1			17
			5 022溝?	—		1		19
18	蔀屋北	四條畷市蔀屋・砂	— 大溝	—	1			150
21	善根寺	東大阪市善根寺町	— 第4層	—	1			23
25	西堤	東大阪市西堤学園町	— 河川	庄新-布古		3		27
26	若江	東大阪市若江本町他	—	—		1		28
27	新上小阪	東大阪市新上小阪	— 第5層	—		1		29
28	亀田	東大阪市衣摺	— 9層	—		1		30
29	西岩田	東大阪市西岩田	1 —	—	1	2		28
			4 Bトレ河川I	布初	3			32
30	瓜生堂	東大阪市西岩田町	1 溝224	布初	1			32
			2 土器溜1上層	弥後期後半				151
31	巨摩	東大阪市若江西新町	1 自然河川I	—	1			32
			2 自然河川II	布古-布中		1		32
32	美園	東大阪美園町	2 布留(旧)遺構	—	1			32
			4 CSD324	—		1		32
34	久宝寺北	八尾市西久宝寺他	1 CトレSD4004	—	1			33
35	久宝寺南	八尾市神武町他	5 SD70	—		2		33
			6 SD60	—		1		33
36	久宝寺	八尾市亀井	2 96-1トレンチ第5-2層	—	1			35
			3 第3層	—	4			36
			6 531井戸	庄中	1			37
			7 SD1	庄新-布古		1		38
			9 第13次SK201	布前半	1			152
			10 第13次NR201	—			1	152
			11 第13次SK309	布中頃	1			152
			12 第14次SK311	—			1	152
37	加美	大阪市平野区	1 第7b層	—		1		39
			5 SD7b02	布		1		39
38	亀井北	八尾市北亀井町他	6 第7a層	布初	1			39
			5 C地区第X層	庄		1		33
39	亀井	八尾市春日町	6 Bトレ自然流路01	布古	1			33
			2 SD2301	IV末-V初	1			40
41	跡部	八尾市春日町	2 溝を伴う遺構	布初	1		1	42
			5 II区8C西側畦	—	1			44
			7 SE1	布古		1		46

番号	遺跡名	所在地	遺構等	時期	製塩土器			文献	
					他地	在地	壘形		
44	萱振	八尾市萱振他	1 SE03	布古	4	1	2	49	
			2 SK03	布古		4		49	
			3 土器溜1	—		1		49	
			4 包含層	—	1	1		49	
			9 第12次SE302	布古			1	154	
			10 第14次CSE201	布古			1	154	
			11 第16次SD5	—	1			155	
45	東郷	八尾市桜ヶ丘他	4 第5次SK4	—		1		56	
			8 第14次SK5	—	5			58	
			9 第14次SK17	庄中	3			58	
			10 第14次包含層	庄-布古	3			58	
			11 第16次4e層	—		1		58	
			12 第18次包含層	—	1			58	
			17 第44次SK204	—	1			63	
			19 第47次SD201	布古			1	156	
			20 第48次NR202	布古			2	156	
			21 第48次第Ⅲ層	—			1	156	
			46	成法寺	八尾市南本町	2 Ⅱ区SD303下層	V後半	1	
47	小阪合	八尾市青山他	1 A-Ⅲa区落込み7	庄新-布古	2			66	
			4 28n・o区SD316	庄新-布初	1			67	
			9 第7区SD1	庄新-布古		5		68	
			28 第32次SE203	—			1	157	
			29 第35次SK102	—		1		158	
			30 第42次SD401	庄古	1			159	
48	中田	八尾市中田他	1 49年度SX01	—	1	1		76	
			2 平成5年度SX01	庄新-布初		1		77	
			3 39トレンチSX01	庄古	1			78	
			10 第25次SO301	庄新-布古	1	1		83	
			12 第45次SKN101上層	庄新	1			84	
			- 第10次SD1	—			1	46	
			5 第16次SD207	布初			1	80	
49	東弓削	八尾市八尾木他	1 第5次2G6層	布古				86	
			3 第7次104層	—		1		88	
			5 6・7層	布古		1		89	
			6 15A-9区第6層	—	2	2		160	
			50	弓削		1 落込み01	—		
51	木の本	八尾市南木の本	1 第Ⅰ層	—		2		91	
52	田井中	八尾市田井中他	3 周溝墓A101	—			1	162	
53	志紀	八尾市志紀町西	— 3A区第5層	—		1		95	
54	八尾南	八尾市若林町	1 SX2	庄新-布初		1		96	
			4 SK3	庄新	1			96	
			10 土坑37	庄新	1			97	
			17 —	—		1		98	
56	阿倍野筋	大阪市阿倍野区	— 第3層	—		3		101	
57	瓜破北	大阪市平野区	— 包含層	—	2	3		102	
60	船橋	柏原市古町他	2 井戸5第2層	庄中-庄新		1		111	
			11 井戸4第3層	布初			1	111	
			12 (表探)	—		1		111	
			13 遺構114	—			1	163	
			14 遺構123	布初			3	163	
			8 468方形周溝墓	—			1	164	
61	尺度	羽曳野市尺度	5 43井戸	布初	1			118	
63	大和川今池	松原市天美西他	1 土坑19	布前半		1		120	
			2 34土坑	—		1		121	
73	脇浜	貝塚市脇浜	— Ⅲ区中洲付近	布古	1	4		133	
合 計						81	78	24	

第2節 西三河の土器製塩と交流拠点

1 はじめに

弥生時代終末から古墳時代初頭期にかけて、西三河は東海地方の中でも際立った地域性がみられる。その一つが東海で唯一、土器を使用した塩生産が始まることである。また、ほぼ同時期に近畿系¹⁾ 叩き甕が多数出土し、定着することも見逃せない。その背景には、交流拠点としての鹿乗川流域遺跡群の存在を無視しえないと考える。

広瀬和雄氏²⁾ は、愛知県清水遺跡から出土した製塩土器が大阪湾岸の脚台Ⅰ式そのものであることから、背景に「首長間ネットワーク」を見出した。つまり塩の収奪を目的に、大和政権を構成する首長層が三河湾周辺の首長層のもとに製塩集団を派遣した、と考えた。当時の考古資料は製塩土器のみで、三河湾沿岸をどの首長が支配していたかは後論に委ねられた。そして現在、発掘調査と研究の進展によって、具体的に両地域の集落遺跡の動向ともからめて論じることが可能になっている。そこで大阪湾沿岸を主とする集落遺跡と土器製塩のありかたを西三河のそれと比較することで、その背景について素描する。

2 大阪湾沿岸の土器製塩と集落遺跡

最初に、西三河に土器製塩をもたらしたと考えられる大阪湾沿岸の和泉地域の状況を概観する。本稿では、近年報告され内容がある程度明らかになった大阪府堺市下田町にある下田遺跡³⁾ を中心に取り上げる。下田遺跡は、大阪湾沿岸での土器製塩を掌握した、あるいは塩の流通において重要な役割を担った集落の一つと考えるからである。

1) 製塩土器 製塩土器の編年⁴⁾ については、酒井龍一氏、広瀬和雄氏、鈴木陽一氏、積山洋氏、河田泰之氏、宮地聡一郎氏、富加見泰彦等によるものがある。そして従来は比較的単純であった編年が、近年の資料増加によって複雑な状況を呈しつつある。新たなタイプの製塩土器の抽出に加え、複数タイプの製塩土器が同時に存在すること、従来の年代観よりかなり遡ることが明らかになっている。しかし本稿には、製塩土器の細かな編年を問題にする紙数はない。三河との対応を見るためにも、広瀬氏⁵⁾ の脚台式の分類(図1)によった。

なお製塩土器の年代観(図2)の概略は、弥生時代後期後半に脚台Ⅰ式の古相を示すものと椀形タイプのもの、庄内併行期に脚台Ⅱ式を中心としつつも脚台Ⅰ式の新相を示すもの、庄内期終末から布留期前半には脚台Ⅲ式に加え長胴の叩き甕形のものがみられる。な



図1 大阪湾岸の製塩土器 (註5より)

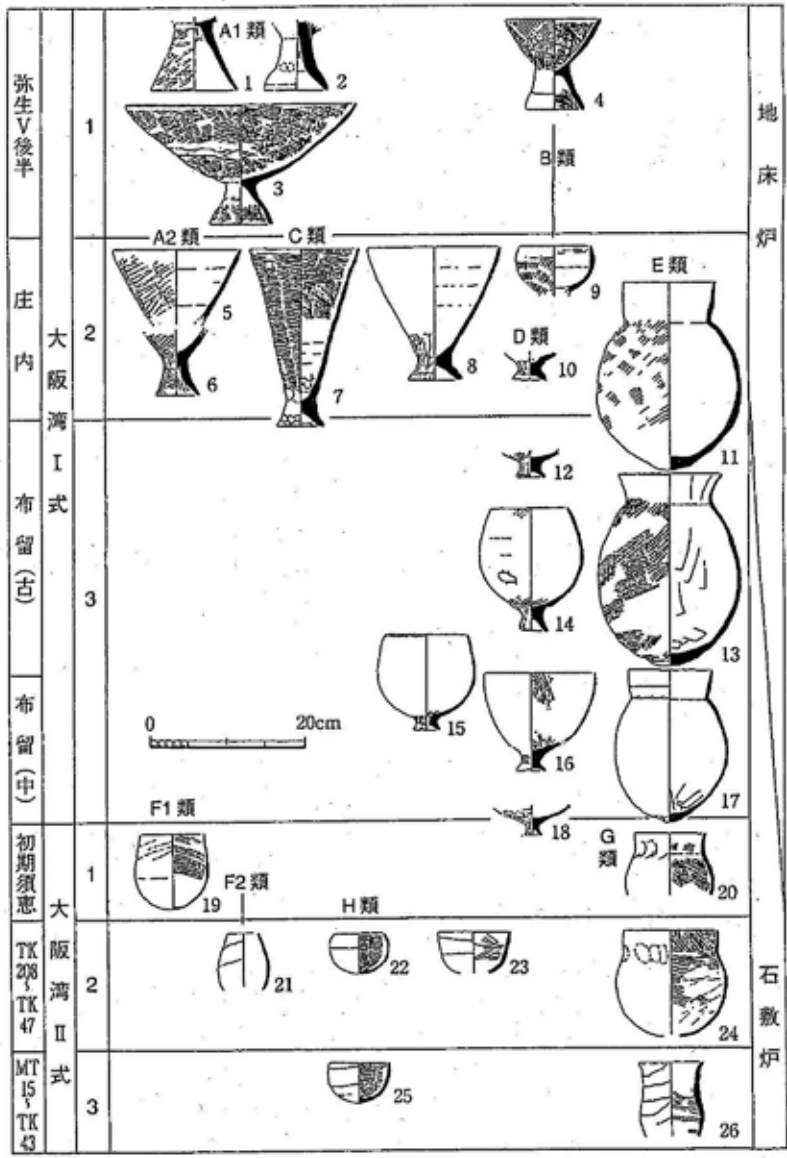


図2 大阪湾岸の製塩土器編年(註4fより)

お、脚台Ⅲ式からⅣ式にいたる細かな変化は判明していないが、5世紀初頭までは残存するようである。

2) 集落遺跡 下田遺跡は、弥生時代後期後半から古墳時代前期に営まれた集落遺跡であり、当時の海岸線から2km程度内陸に入った、石津川左岸の沖積平野部に立地する。農耕集落と理解できるが、多数の製塩土器が出土する。下田遺跡の変遷および社会的な位置付けについては、西村歩氏⁶⁾の詳細な分析がある。本稿と関連する部分を列記すれば、以下のとおりである。

1) 集落の営まれた時期は、下田Ⅰ式から下田Ⅲ式にかけて、つまり弥生後期後半～布留Ⅰ式である。下田Ⅰ式が第Ⅴ様式後半、Ⅱ式が庄内併行期(布留Ⅰ式を含む)、Ⅲ式が布留Ⅰ期である。



図3 弥生後期後半から古墳前期の製塩土器出土遺跡(註17を改変)

- 1 小島東 2 淡輪 3 山田海岸 4 尾崎海岸 5 男里 6 三軒屋 7 諸目 8 松原 9 湊 10 大久保 11 名越西 12 沢共同墓地 13 脇浜 14 山ノ内 15 今木 16 小田 17 土生 18 軽部池西 19 西大路 20 築ノ池 21 下池田 22 府中 23 和気 24 上町 25 伯太 26 七ノ坪 27 古池北 28 豊中 29 池上曾根 30 伽羅橋 31 羽衣砂丘 32 水源池 33 下田 34 四ツ池 35 船尾西 36 大和川今池 37 寛弘寺 38 津堂 39 船橋 40 小阪合 41 八尾南 42 東弓削 43 中田 44 萱振 45 若江 46 西岩出 47 北新町 48 瓜破北 49 崇徳寺 50 利倉西 51 島田 52 五反島 53 蔵人 54 垂水南 55 矢部 56 纏向 57 布留 58 半城宮朝集殿下層 59 大川 60 藻江 61 しょうぶ谷 62 深山 63 大谷川 64 加太 65 藻崎北浜 66 藻崎西方 67 一谷色 68 拍の谷 69 神島 70 西庄 71 太田・黒田 72 鳴神 73 地の池 74 津井浜 75 田殿尾中 76 野田藤並 77 鷹島 78 大引Ⅱ 79 三宅谷 80 阿戸 81 方抗 82 阿尾 83 三尾 84 東郷 85 東大人 86 尾の崎 87 坂井戸 88 大日津泊り 89 森の崎 90 古目良 91 立戸岩陰 92 磯間岩陰 93 種子浜 94 坂田山 95 江津良B 96 田尻浜 97 瀬戸 98 東白浜 99 網不知洞穴 100 笠島 101 高崎 102 宮崎 103 旧城内 104 山下居屋敷 105 今出川 106 舟木 107 伊昆 108 東石ヶ谷 109 日向 110 池上口ノ池 111 新方 112 吉田南 (*大型のドットとゴチックは、本稿に登場する遺跡)

2) 石津川水系では最大規模の下田遺跡と、その周囲に石津遺跡、船尾西遺跡、四ツ池遺跡などの中小集落群が存在する。これら遺跡のまとまりを「下田遺跡群」と呼称する。また圏外には、散発的に小規模な集落があり、海浜部に立地して漁業生産活動に従事した集落もあった。

3) 下田遺跡では一定量の他地域系土器が出土する。下田Ⅰ式では少ないが、Ⅱ式以降に増加する。吉備、阿波、東海、近江、丹波、丹後などからの搬入品やその影響のうかがえる土器が認められる。河内型庄内甕の搬入も多いが、それ自体が商品であり、模倣することは少ない。むしろ技術的に模倣し得なかったと考えられる。

4) 和泉地域では、他に大津川水系に「豊中遺跡群」と呼称しうる集落のまとまりがある。やはり「下田遺跡群」と同様に、最大規模の豊中遺跡と周囲の中小集落群、圏外の小規模集落としてモデル化できる。

以上のように下田遺跡とは、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭にかけて、和泉北部地域にあってさまざまな地域との交流にかかわった拠点集落である。そして、この集落からはきぬがさの笠骨⁷⁾や環形付木製品の威儀具の他、刀剣柄装具、四方転びの箱等の上位ランクであることを示す遺物が多数出土している。下田遺跡には「下田遺跡群」とその圏外にある小規模集落からなる地域を掌握する首長が存在したと考えられる。また、同様にモデル化できる関係が、「豊中遺跡群」ばかりでなく、和泉地域には河川単位で複数存在したとも推定できる。

下田遺跡の特徴の一つは、一定量の製塩土器が見つかることである。しかし、海岸部の製塩遺跡のように多量の製塩土器が出るのではないし、製塩炉は見つかっておらず、集落内で製塩作業を行なったのではないだろうが、製塩土器はすべての形式にわたり、脚台Ⅰ式の最古タイプのものも含む。このことから、大阪湾沿岸地域で土器製塩が開始された当初から、塩を入手していたことがわかる。あるいは、農耕を主としながらも、製塩を生業とした集落であり、土器製塩に携わった人を内包した集落であったのかもしれない。いずれにしても、地域の中核として備讃瀬戸から土器製塩を受容し、塩生産を主導した集落であったのだろう。そして塩は自家消費するばかりでなく、交換価値の高い生産品なので、塩生産を主導した下田遺跡の首長層によって掌握されたであろうことも想定できる。

ところで、庄内期（特に後半）から布留期初頭にかけて、交流の活発化により、各地域の中核となる遺跡から多数の他地域系土器が出土するようになる。大阪もその例外ではなく、特に摂津中部から中河内にかけては、当時の政治的中心である大和盆地東南部との交

流ルートの幹線沿いにあるために、他地域系土器の出土が著しい⁸⁾。他地域系土器の内容は、その大部分が山陰、吉備、讃岐、阿波およびその周辺の西日本各地から持ち込まれたものであり、東日本の土器は極めて少ない。本稿に係る東海系は、大和盆地までは庄内式前半段階から多量に出土するにもかかわらず、大阪ではたいへん少ない⁹⁾。しかも東海系

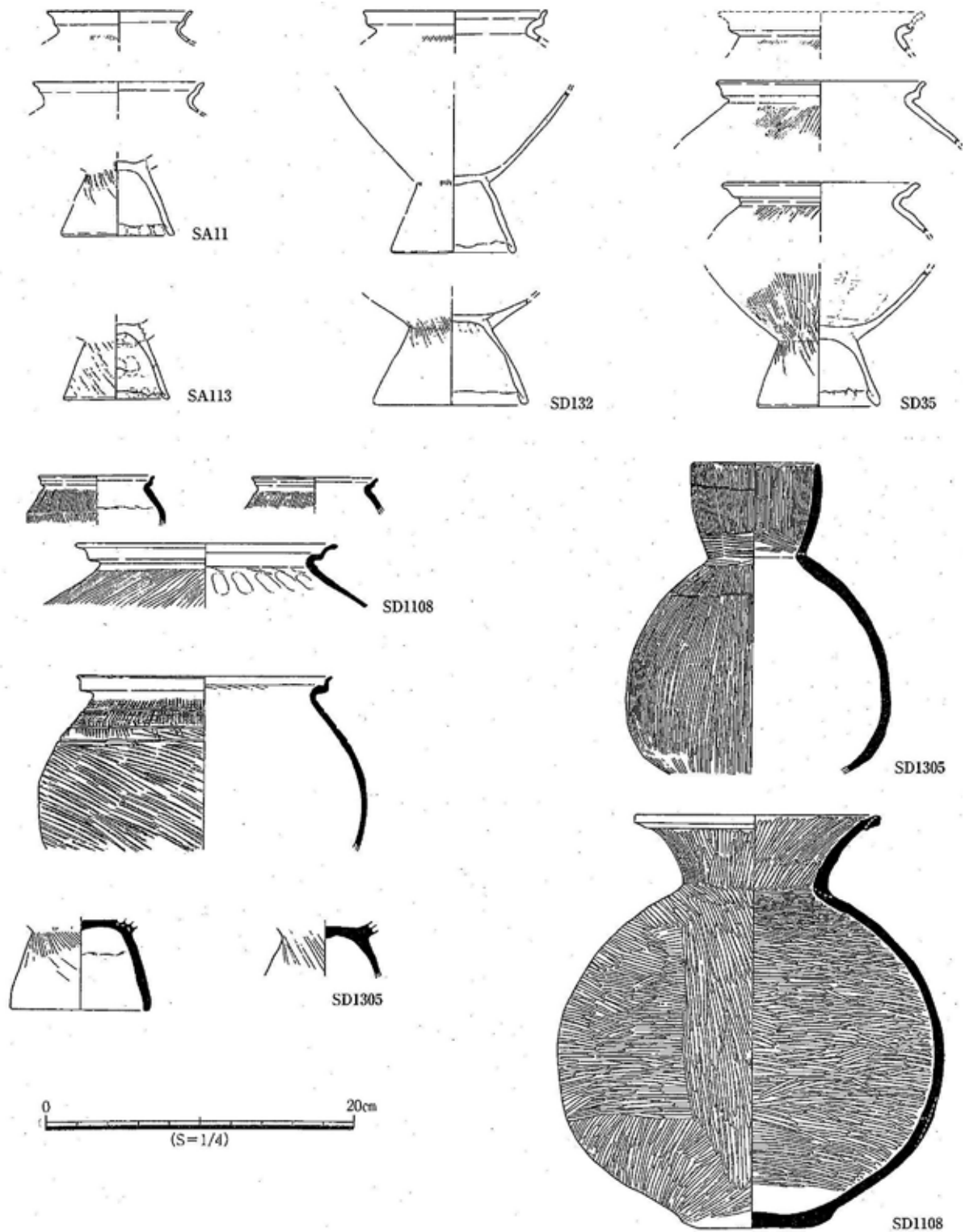


図4 下田遺跡の東海系土器(断面白抜きは註3c、黒塗りは註3aより)

は、持ち込まれたにしても庄内期終末以降のものが大部分なのである。

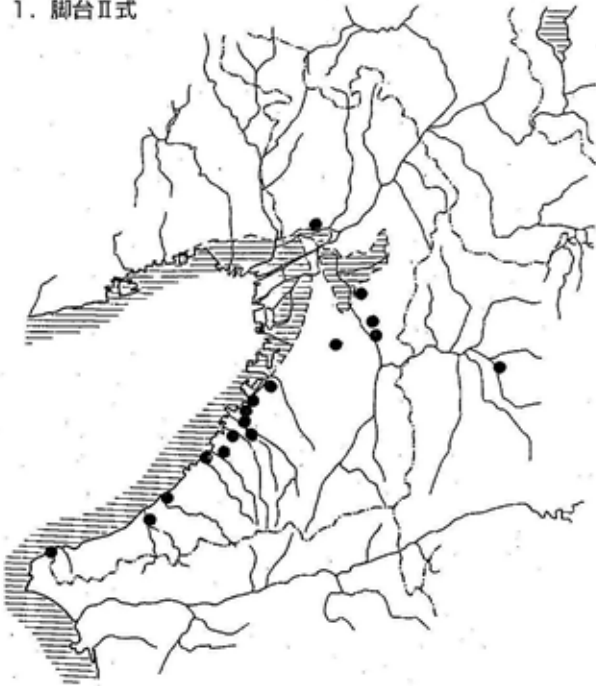
以上のような状況に反して、大阪府下でも東海系土器が多数出土する遺跡がある。その一つが下田遺跡（図4）なのであり、他に吹田市垂水南遺跡¹⁰⁾と大阪市崇禅寺遺跡¹¹⁾が上げられる。いずれも大阪湾沿岸に連なる交流の拠点である。これらの遺跡では、S字状口縁台付甕（以下、S字甕）C類段階以降が主体的であるとはいえ、府下ではほとんど出土することはない古い段階のS字甕もみられる。また、海浜部に立地する小島北磯遺跡や脇浜遺跡などの製塩遺跡でさえ、僅かながらも東海系の搬入が認められる。以上のことは、和泉地域が東海地域と深く係っていたことを示している。S字甕自体は伊勢、あるいは尾張を中心に分布するとはいえ、東海との交流ルートが確保されていたことを示しており、西三河に伝わった土器製塩を考える上で見逃せない。搬入土器が多いことから、和泉地域の窓口になったのは、下田遺跡を含むいずれかの交流拠点であり、そして大和を經由する陸路をとるのではなく、紀伊半島の海岸伝いに東海地方につながるルートが推定できる。大阪湾岸の製塩土器と同形態のものが紀伊半島沿岸にも点々と確認できる（図3）のの一つの理由である。また、穂積裕昌氏¹²⁾は、弥生時代後期から古墳時代初頭期にかけて、紀伊半島沿岸のルート上には、潟地形や入江を利用した港が顕在化するとともに、地域間交流を示す遺物が多いことを指摘している。

3) 内陸部の製塩土器 次に、塩がどのように運ばれたのか、内陸部の河内地域での製塩土器の分布¹³⁾を見てみよう。図5がその分布、図6が製塩土器の一部であり、以下のことがわかる。

- 1) 脚台Ⅰ式の古相段階では、内陸部には伝わらない。
- 2) 脚台Ⅰ式の新相段階からⅡ式段階には、少量ながら旧大和川沿いの遺跡を中心にして確認できる。この時期は、庄内期であり、中河内の旧大和川流域に多数の集落遺跡が形成される。旧大和川を遡り、政治的な中心である奈良県纏向遺跡でも、わずかながら脚台Ⅱ式が出土する。
- 3) 脚台Ⅲ式段階で、急激に増加する。旧大和川沿いへの集中がよりいっそう明確になる。この段階は庄内期末から布留期前半段階であり、中河内には前段階とは比較にならない多数の西日本各地の土器が認められる。やはり纏向遺跡でも脚台Ⅲ式が出土している。

以上のように、内陸部では庄内期以降に製塩土器が出土するようになる。出土点数は、庄内期の脚台Ⅱ式は少なく、庄内期終末から布留期初頭以降の脚台Ⅲ式段階に急増する。そして重要な点は、製塩土器はどの集落からも出土するのではなく、当時の流通ルートで

1. 脚台Ⅱ式



2. 脚台Ⅲ式

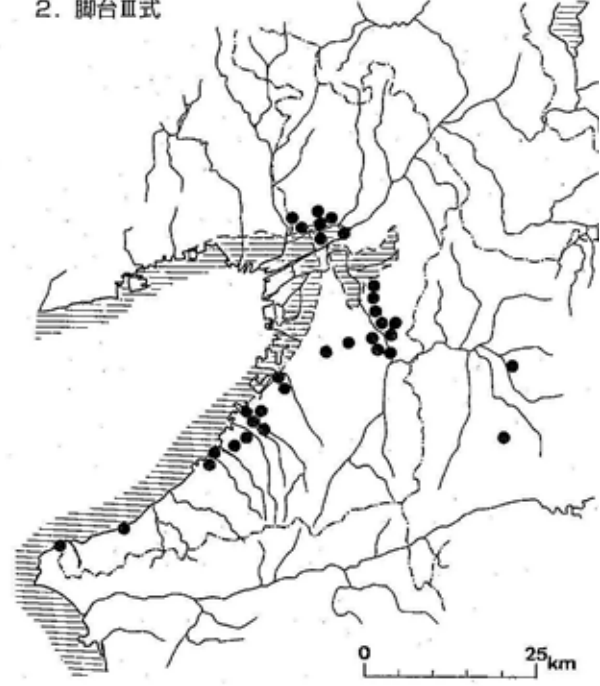
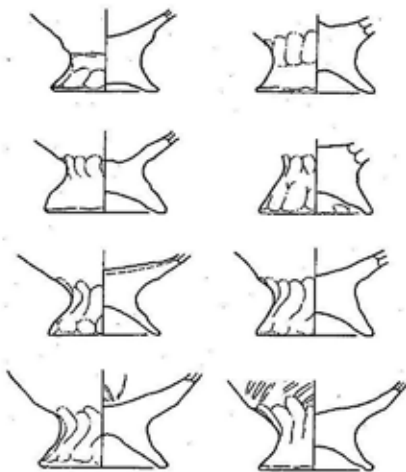
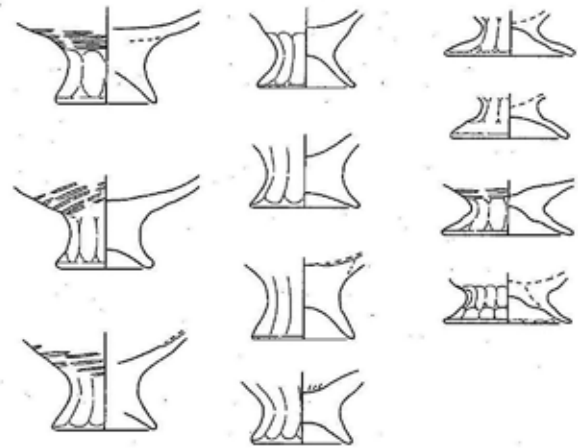


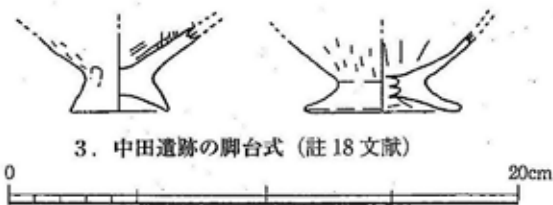
図5 脚台Ⅱ・Ⅲ式の出土遺跡分布(註13を改変)



1. 下田遺跡の脚台Ⅲ式
(註3a文献)



2. 萱振遺跡の「脚台Ⅲ式」
(註15文献を改変)



3. 中田遺跡の脚台式(註18文献)



4. 小阪合遺跡の脚台式

図6 下田遺跡の脚台Ⅲ式と中河内の「脚台Ⅲ式」

ある旧大和川流域に立地する集落に集中的に分布することである。このルートは、西日本の各地と当時の政治的な中心である大和盆地東南部をむすぶ主要幹線であり、これらの集落は、弥生時代後期の伝統的な集落が消滅・衰退した後に出現する、新たな交流拠点でもある。脚台Ⅱ式段階の土器製塩については、内陸部で出土することが少ないので、自給自足的な生産に止まり、政治性の介入の可能性は低いとする論調が目立つものの、少数とはいえ旧大和川ルートを通じて大和盆地東南部にまで運び込まれていることは重要であろう。塩は当初から他種多様な物・情報の一つと認識されていたのであろう。

ここで注意すべきは、「脚台Ⅲ式」の扱いである。中河内での分布が急増する脚台Ⅲ式には大阪湾沿岸のものに限らず、備讃瀬戸系を含むと考えるからである。大阪湾沿岸の脚台Ⅲ式（図6-1）は、体部に脚台を接合して作るため接合部が厚い、それに対して備讃瀬戸では体部と脚台の間に粘土充填によって作るために脚台部は薄い作り¹⁴⁾になる。図6-2に示した萱振遺跡 SE03 出土¹⁵⁾の製塩土器は、布留初頭に位置付けられる。左2列が大阪湾沿岸、右列が備讃瀬戸の形態に類似しており、内陸部には両者が認められる。

ところで、備讃瀬戸地域からの塩の供給を考える上で、中河内それも旧大和川流域における吉備系土器¹⁶⁾の搬入がたいへん多いことも重要である。吉備系土器は、中河内の他地域系土器で最も多く、旧大和川を通じて大和盆地にも運び込まれている。庄内期末から急増することは確かであるが、それ以前の才の町新相から下田所段階の吉備系も認められる。塩がどのように運ばれたのか、考古学的には問題は多いが、庄内式の当初から塩の搬入ルートが確保されていた可能性は高い。

河田氏¹⁷⁾は、脚台Ⅲ式は和泉地域よりも河内地域の方が出現時期の遡ることに触れている。例えば小阪合遺跡 A-3 区落ち込み7、船橋遺跡井戸5出土の「脚台Ⅲ式」が庄内期に位置付けられる¹⁸⁾。今後の資料の蓄積が解決するとされているが、はたしてそうであろうか。私は、むしろこれらの資料は和泉の脚台Ⅲ式というよりも、吉備を含む備讃瀬戸地域¹⁹⁾からの備讃Ⅲ式段階の搬入の可能性があると考えたい。すでに庄内式併行期から、大阪湾岸ばかりでなく備讃瀬戸地域からも塩が運び込まれており、予想以上に複雑な状況を想定しておきたい。製塩土器の分布から推定する以上の備讃瀬戸の塩が供給されたであろうことを指摘しておきたい。

3 西三河の土器製塩と拠点集落

次に西三河における古墳時代初頭期の土器製塩と集落の状況を概観する。集落として

は、鹿乗川流域遺跡群を取り上げる。それはこの遺跡群が、当該期に各地で顕在化する交流拠点そのものであると考えるからである。西三河では最大規模であり、集落内に古墳を取り込む状況から、今後もその位置付けがゆらぐことはないとする。また製塩遺跡と結びつける資料となり得る可能性があるため、叩き甕も取り上げた。

1) **土器製塩** 森泰通氏²⁰⁾の研究から、古墳時代前期の土器製塩をまとめると、以下のようである(図7)。

1) 東海の製塩土器は、清水式から始まる。清水式は、大阪湾沿岸地域の脚台Ⅰ式に類似しているため、その影響によって成立したものである。なお叩き仕上げのものが古く、ナデ仕上げのもの(清水式2類)は西三河での変容で新しい。成立時期は、廻間Ⅱ式初頭、畿内の庄内式併行期である。

2) 渥美式A類も、大阪湾沿岸地域の脚台Ⅱ式古相の影響のもとに出現する。存続時期は、廻間Ⅱ式の幅の中で理解でき、庄内式に併行する。なお近畿では叩き仕上げだが、三河で

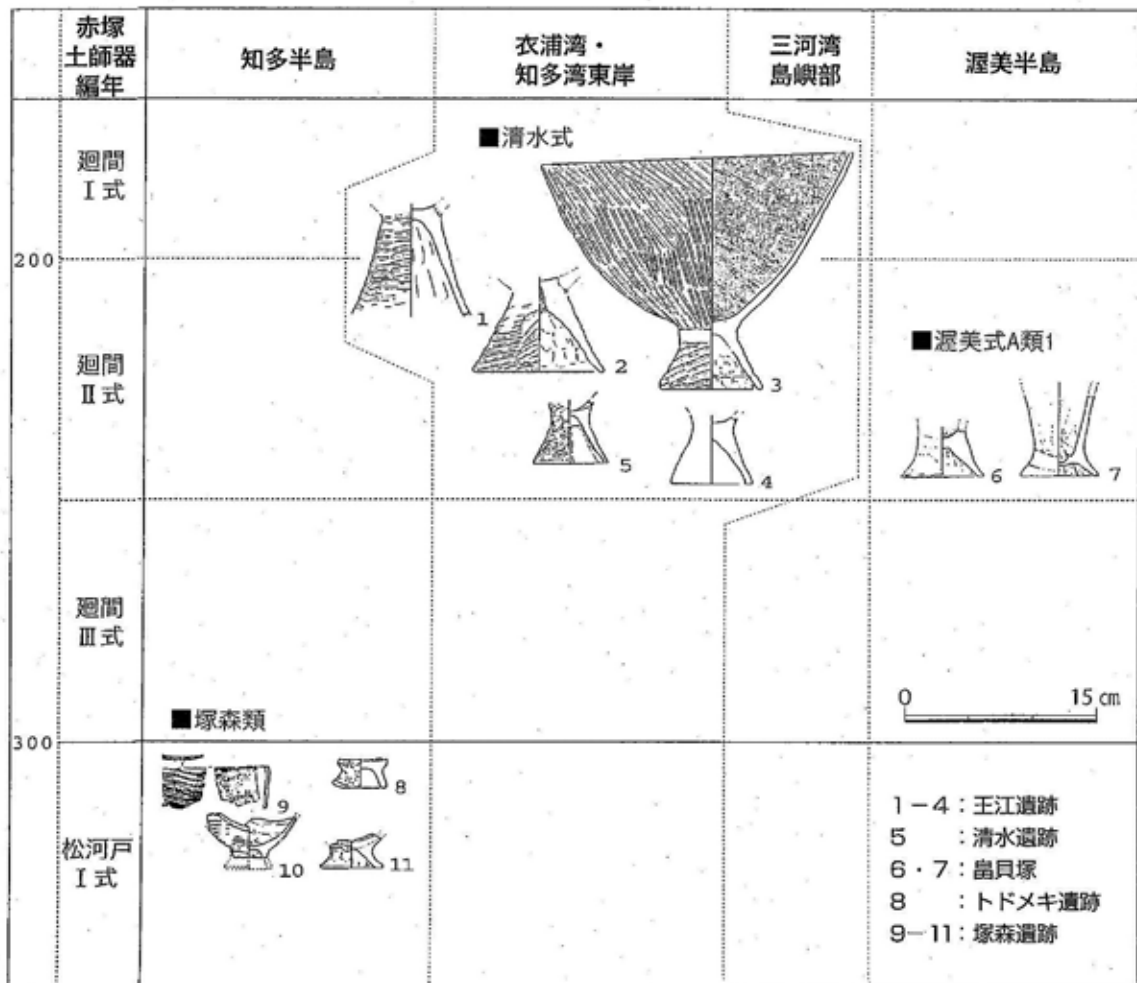


図7 愛知県の製塩土器編年(註20を改変)

はナデ仕上げである。

3) 塚森類は、大阪湾沿岸地域の脚台Ⅲ式あるいは備讃瀬戸のⅢb式～Ⅳa式の影響のもとに出現する。存続時期は廻間Ⅲ式～松河戸Ⅰ式、畿内の布留式初頭～中頃に併行すると考えられる。

4) 清水式は衣浦湾・知多湾岸地域、渥美式A類は渥美半島沿岸の三河湾側に分布する(図8)。いずれも後に土器製塩の中心になる知多・渥美半島ではなく、三河湾沿岸部に立地する。塚森類段階になって、分布域が伊勢湾岸に変化する。

以上のように、古墳時代初頭・前期の三河の製塩土器は、たえず大阪湾沿岸地域や備讃瀬戸地域からの情報を受け入れ、変容させつつ進行したことがわかる。土器製塩は、両地域の強い影響のもとに成立したのである。ところで詳細に見れば、塚森類は大阪湾沿岸の脚台式とは異なり、播磨²¹⁾から備讃瀬戸にいたる地域に分布する脚台のつくりと類似する。清水式と渥美式A類段階は大阪湾沿岸地域から、塚森類段階になって播磨を含む備讃瀬戸からの情報が伝わったこと、さらに両者の間で、東海での分布域が変化していることを確認しておきたい。重要な画期と考えたい。

清水式段階の製塩遺跡としては、西尾市清水遺跡、高浜市王江遺跡、刈谷市中条貝塚が、渥美式A類段階では渥美町畠貝塚がある。いずれも当時の海岸沿いに立地する小規模な製

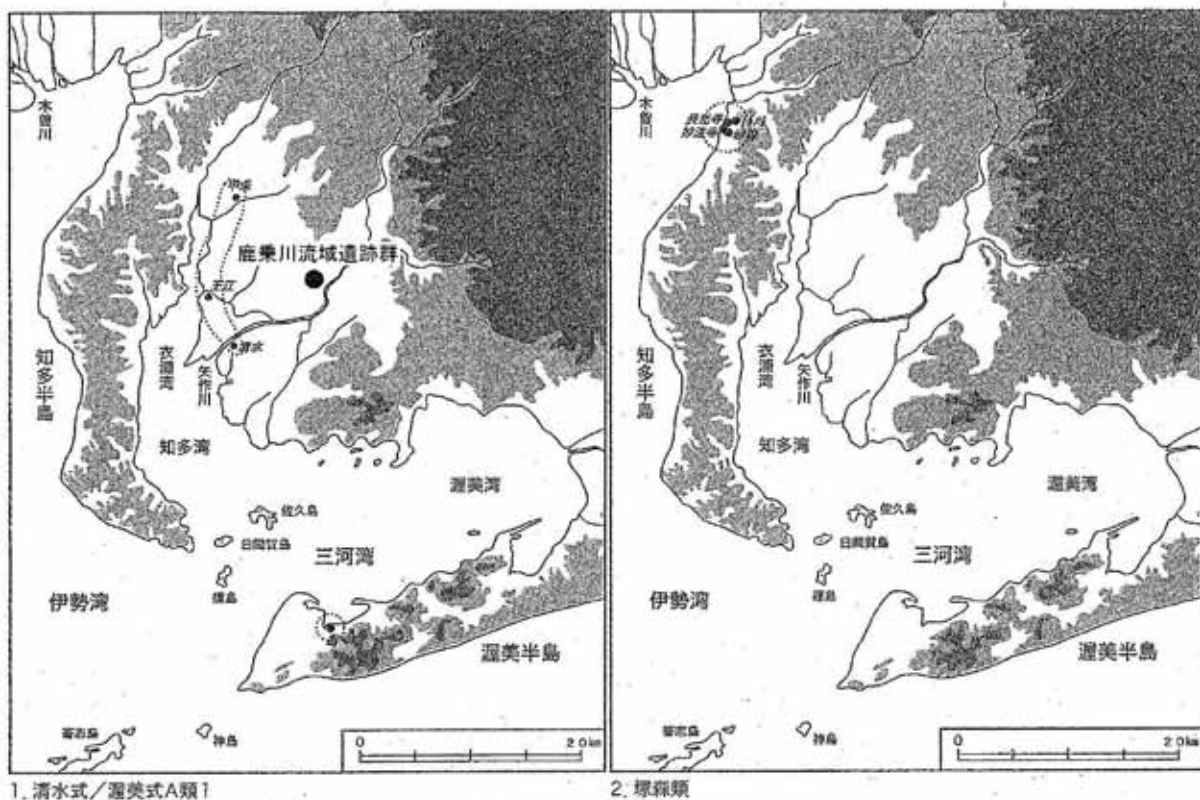


図8 愛知県の製塩土器分布(註20を改変)

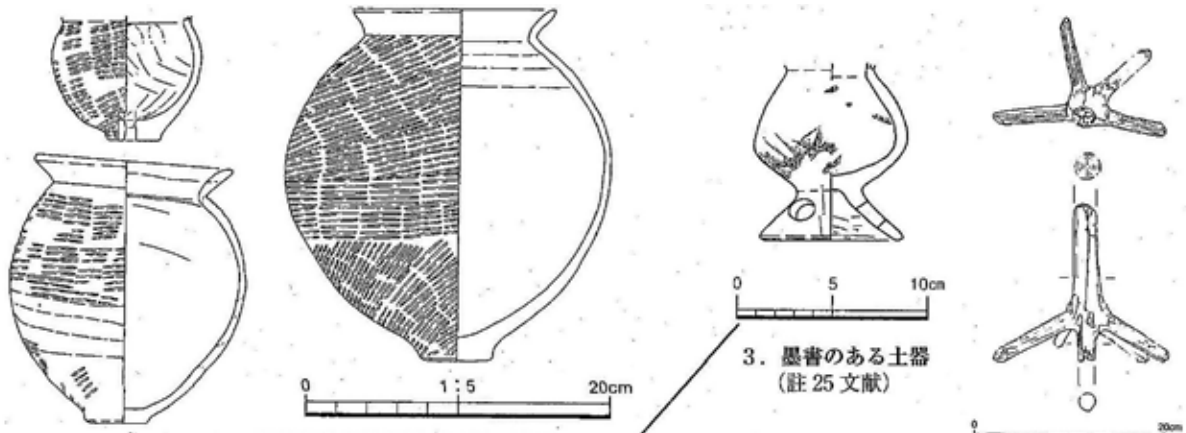
塩遺跡である。これらの遺跡では、遺物量も少ないので、単発的で定着することはなかったと理解されている。塩生産が大規模になるのは、塚森類が伊勢湾側に進出し、東海独自の形態である渥美式A類2・3や松崎類の出現以降であり、後に土器製塩の中心になる知多・渥美半島に分布域が変化してからである。

2) 西三河の交流拠点 鹿乗川流域遺跡群²²⁾とは、矢作川右岸の沖積地にあつて、西側の碧海台地縁辺に沿って、南北2 km以上にわたる遺跡群(図9-1)の総称である。現在この沖積地を鹿乗川が、直線的に流れているが、過去には蛇行して流れていた。なお鹿乗川流域遺跡群は、当時の海岸線から5 km程度内陸に入った所にある。鹿乗川流域遺跡群における弥生時代以降の変遷は、以下のようなものである。

- 1) 弥生時代前期は、土器が少量出土するものの実態は不明である。
- 2) 弥生時代中期前葉は、遺物は少ないながらも全域から確認できる。
- 3) 弥生時代中期後葉には、全域から遺構・遺物が多数見つかり盛行期をむかえる。環濠集落、方形周溝墓群も確認されている。
- 4) 弥生時代後期前半には、遺構・遺物は少なくなる。
- 5) 弥生時代後期後半以降、全域にわたって遺構密度、遺物量が急激に増える。中狭間遺跡や亀塚遺跡は大集落域であり、本神遺跡では環濠が確認されている。他地域系土器が大量に運び込まれており、近畿系の叩き甕が定着する。時期は廻間I式からIII式前半程度で、近畿の庄内式から布留式初頭に併行する。
- 6) 廻間III式の時期幅の中で、急激に衰退する。近畿の布留式中頃以降に併行すると考えられる。古墳時代中・後期の遺構・遺物は少ない。

つまり鹿乗川流域遺跡群とは、もともとは環濠集落や方形周溝墓を含む伝統的な弥生集落であり、弥生時代後期後半以降になって急激に発展して、西三河地域の拠点となった遺跡群である。そして、廻間III式の中で衰退傾向を示し、交流拠点としての役割は終えている。現状では、西三河地域で鹿乗川流域遺跡群に比肩しうる拠点性を示す遺跡は見当たらない。先に検討した大阪湾沿岸の下田遺跡の消長とほぼ同様であることも確認しておきたい。なお現状では、製塩土器は未確認である。

鹿乗川流域遺跡群が交流拠点であったことは、出土した多数の他地域系土器からわかる。近江・近畿の西日本、北陸・遠江・駿河・南関東の東日本の他、「欠山・元屋敷」様式圏では尾張低地・西濃・伊勢から多数の土器が持ち込まれている。中狭間遺跡では5%程度が他地域系土器と算出されている(図9-6)。尾張系はもちろんとし、北陸系の



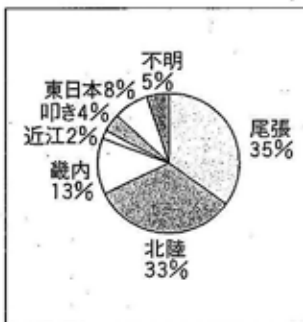
2. 本神遺跡の叩き甕 (註 22a 文献)

3. 墨書のある土器 (註 25 文献)

4. きぬがさ (註 24 文献)



1. 鹿乗川流域遺跡群 (註 22c 文献)



6. 中狭間遺跡の他地域系土器 (註 33 文献)



5. 二子古墳 (註 22a 文献)



7. 東海の人面文の分布 (註 22a 文献)

図9 鹿乗川流域遺跡群

多さが目につく。その背後には多くの物、情報や技術が伝わったと考えられるし、人の移動を伴う場合もあったであろう。

また、鹿乗川流域遺跡群には西三河地域の首長層が存在したと考えられる。それを示すのが、集落範囲内に古墳時代前期から築造された桜井古墳群であり、儀礼に関する遺物の存在である。前者の古墳は、前方後円墳を含むが、複数の前方後方墳を主体とするものであり、当時の西三河では有力な古墳群である。しかし残念ながら古墳自体の内容や時期の詳細はわからないので、現状では鹿乗川流域遺跡群との関係は明確でない。しかし少なくとも古墳群中で最古の桜井二子古墳²³⁾(図9-5)は、鹿乗川流域遺跡群の継続時期内に築造されたと考えておきたい。つまり古井遺跡群は、古墳を取り込んだ集落であった可能性が高いのである。

後者の儀礼に係る遺物としては、きぬがさ笠骨²⁴⁾(図9-4)であり、あるいは墨書のある土器²⁵⁾(図9-3)も相当する可能性がある。きぬがさ笠骨の出土遺跡には、下田遺跡をはじめ、東大阪市西岩田遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、同 纏向遺跡、滋賀県松原内湖遺跡、同 黒田遺跡等、また墨書のある土器には片部・貝蔵遺跡がある。交流拠点として、最先端の情報・技術を得ることのできた集落が、当時としては高いランクにある集落として理解できると考えられ、背後にはそれを掌握した地域首長の存在を想定することができる。

先に述べた清水式の分布域は、鹿乗川流域遺跡群を拠点とする西三河の沿岸部であり、三河湾沿岸の渥美式A類の段階を含めて、遺跡群が盛行した時期に重なる。鹿乗川流域遺跡群からは製塩土器は出土していないにもかかわらず、両者の関わりを想定するのは、塩生産を伝えた大阪湾沿岸域での拠点集落と製塩遺跡の関係の深さである。そして遺跡群に衰退傾向が認められる時期、分布域が伊勢湾岸に変化することも重要である。これによって、集落の動向と土器製塩を行なった遺跡が密接に関連していると考えたい²⁶⁾。

3) 西三河の叩き甕 西三河、ことに鹿乗川流域遺跡群からは、多数の叩き甕²⁷⁾が出土しており、近畿と非常に強い関係を持っていたことが窺える。西三河以外の伊勢湾沿岸の諸遺跡から叩き甕が出土することはあっても、極めて少数で、集中して出土することはない。叩き甕の特徴²⁸⁾は、以下の通りである。

1) 叩き甕の時期は、本神遺跡溝状遺構が欠山式中・新段階で最も古く、中狭間遺跡・高木遺跡が元屋敷式古相である。鹿乗川流域遺跡群以外では、伊保遺跡が元屋敷式古相、王江遺跡が元屋敷式新相である。つまり、近畿の庄内式初頭から布留式初頭に併行する。

2) 本神遺跡例の叩き目は3～3.5条/cmで、他遺跡の事例も同程度である。しかし、鹿

乗川流域遺跡群の内、上橋下遺跡・下橋下遺跡では5条/cmのやや細筋の叩きもみられる。また体部内面はナデ仕上げ、あるいはハケメ仕上げである。ヘラケズリは行なわない。これは、近畿の叩き甕と同様である。

3) 体部はほとんどが球形であり、張りの弱いものが少ない。基本的には、底部は平底で丸底化はしない。王江遺跡では、布留式初頭に併行する叩き甕の体部下半を削り、平底を持たない。やはり、近畿の叩き甕と同様である。

4) 赤褐色を呈するものが目立つ。胎土分析によれば、在地産の胎土である。

5) 叩き技法は、叩き甕以外に施されることはほとんどない。技術上の交わりはない。他に製塩土器と台付甕の脚台部に施す場合がわずかに認められる程度である。

西三河の叩き甕は、いくぶん体部が球形化した事例が多いと感じる意外は、形態的にも技術的にも近畿の叩き甕とほとんど同様である。近畿からの集団によって作られた可能性は高い。しかし、それが近畿のどこから伝わったのか、叩き甕自体の検討からは難しい。近畿における叩き甕は、地域・時期による形態・技法等の差が捉えにくく、基準になりにくい器種である。

立地からすれば、大和⇒伊賀⇒中・南伊勢、そこから伊勢湾を渡って西三河にいたるルート²⁹⁾が有力視されている。それぞれの地域に叩き甕がみられ、最短のルートでもある。しかも伊勢の雲出川下流域には、鹿乗川流域遺跡群と同様の交流拠点である嬉野町片部貝蔵遺跡³⁰⁾が存在するのでなおさらである。しかし異なる点もある。片部貝蔵遺跡では、庄内甕も出土するし、叩き甕が在地化することはない。あくまで持ち込まれた土器で、近畿からの人の移動を想定する必要のないことである。さらに時期は、庄内期新相から布留期初頭であり、西三河よりも新しい。伊勢から伝わったにしては、状況が全く異なることから確定は難しい。

前述したように西三河では、叩き甕が在地化し、庄内甕は持ち込まれていない。ところで近畿の庄内併行期、庄内甕が定着するのは中河内や大和盆地東南部だけで、その周辺部では、叩き甕を使用し庄内甕は少数か、あるいはほとんど出土しない。西三河の叩き甕は、中河内や大和盆地東南部から伝わったのではなく、周辺部地域のいずれかが候補になる。本稿では、先に述べたように東海との関連の強さを重視して、大阪湾沿岸地域との関連もその候補³¹⁾に挙げておきたい。下田遺跡をはじめ、和泉地域の在地の甕は叩き甕である。庄内甕は一部の集落—下田遺跡、豊中遺跡、小阪遺跡—で出土するものの、中河内からの搬入品で在地産は基本的に見られない。西村氏⁶⁾は、和泉地域にあって中河内型庄内甕

は商品であると考え。技術的に高度なので、在地産庄内甕は作り得なかったのである。

ところで1点だが、鹿乗川流域遺跡群の中狭間遺跡³²⁾で、庄内甕を模倣したと考えられる事例(図10)がある。外面はやや細筋の叩き仕上げ、内面はヘラ削りを施すが肩部までにはおよんでおらず、図示されていないがそこに粗い横ハケメが残る。ヘラ削りの技術が未熟で、器壁は大変厚い。庄内甕で内面肩部にハケメが残る事例は、大和や中河内に見られず、姫路市長越遺跡など播磨地域に多

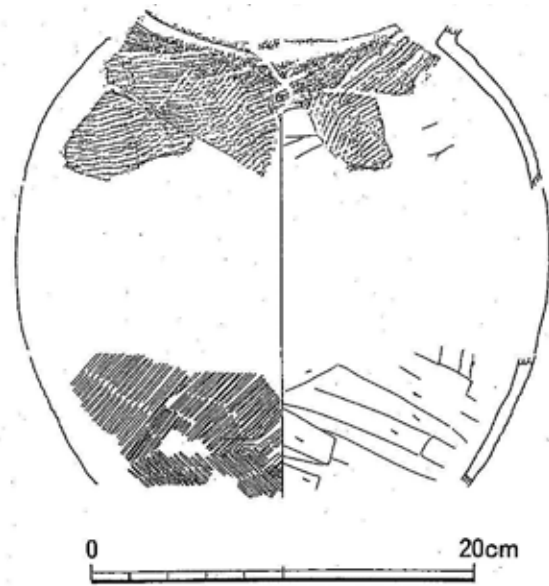


図10 中狭間遺跡の庄内模倣甕(註33より)

く大変類似している。播磨型庄内甕を模倣した可能性が強い。以上のように、西三河の叩き甕の故地は明確にしえないのだが、中部瀬戸内を含む大阪湾沿岸地域と紀伊半島南岸を介しての広範な交流の中での情報と理解しておきたい。

4 まとめ

最後に西三河の土器製塩について、それを伝えた大阪湾岸からの視点でまとめる。

1) 清水式は、庄内式併行期における大阪湾岸での脚台I式新相の製塩土器が伝えられたものである。大阪湾岸の下田遺跡が東海と強い係りを持つ状況から、当該期に顕在化する紀伊半島沿岸のルートで伝わったと考えられる。その背景には、古墳時代初頭期における交流拠点の顕在化と地域間交流の活発化があると考えたい。その場合、西三河での交流拠点は、鹿乗川流域遺跡群が有力な候補となる。東海で唯一、西三河で塩生産をなしえたのは、たえず西方の情報を入手しえた鹿乗川流域遺跡群があつてのことと考えられる。

2) 鹿乗川流域遺跡群では製塩土器は未確認である。しかし、同一地域で行なわれた塩生産と無関係とは考えにくい。それをつなぐのは、西三河地域では孤立した技法である叩き仕上げの近畿系叩き甕と製塩土器である。あるいは、西三河に土器製塩を伝えた和泉地域での拠点集落と海浜部の製塩遺跡の関係からの類推でもある。当時は、地域の拠点集落と関連を有しつつ、沿岸部に多数の製塩遺跡が出現した時期である。小規模な製塩集落のみでの自立は考えにくいし、交換価値の高い塩はその地域首長層によって掌握されたと考えられる。和泉では下田遺跡のような拠点集落内に想定できる首長層が塩を掌握したのと同

様に、西三河の場合は鹿乗川流域遺跡群の首長層によってなされたと考えられる。

3) 大阪湾沿岸の製塩遺跡では、タコ壺や土錘・石錘等の漁撈具も出土する。しかし西三河では出土しない。漁村の集団が移住してきたのではなく、製塩に特化した技術が伝わったと考えたい。弥生時代の木器や石器生産における分業に加え、塩生産にも分業を取り入れたのだろう。西三河の叩き甕は、そのような背景のもとに近畿地方からやってきた人々によって残されたものと理解したい。いくつかの情報があったのであろうが、少なくとも土器製塩もその一つであったと考えておきたい。

4) 広瀬氏の言う土器製塩に関与し、塩を掌握した西三河の首長とは、鹿乗川流域遺跡群の一画に居住した人物であり、その集落域に築かれた複数の前方後方墳がその人物を葬った墳墓と考えられる。桜井古墳群は、古墳時代前期に造営された前方後方墳を主体とする大型古墳群である。この時期の交流拠点となった集落内に、首長の墳墓や古墳の認められる事例³³⁾は多い。西三河の首長については今後、桜井古墳群個々の年代の確定、ならびにきぬがさや墨書のある土器などの個別研究からも明らかになっていくと考えられる。

5) 西三河での初期の塩生産とは、どの程度のものではあったのだろうか。遺跡自体は小規模で、出土する製塩土器量は少ない。さらに、渥美式A類と塚森類の間に若干の断絶が想定できるので、「単発的で、定着しなかった」という理解は当を得ていると考える。畿内からの政治的介入とするには、あまりにも小規模である。それがなされたのは、古墳時代中期以降と考えられる。古墳時代初頭期、紀伊半島沿岸を介しての東海と瀬戸内東部地域を含む大阪湾沿岸との交流関係の中で開始されたと考えたい。西三河における叩き甕の定着、人面文の集中も同様の背景の下で成立したのであろう。小規模・断続的であることから、むしろ塩の価値を知った受け手である西三河主導で始まったのであり、その衰退によって土器製塩も三河湾側から一旦は姿を消すと考えておきたい。

6) 渥美式A類と塚森類の間に画期が認められる。土器製塩を伝えた地域、東海での分布域が変化する。当時、鹿乗川流域遺跡群は衰退傾向にある。和泉でも布留期初頭から集落遺跡の動向に変化がみられる。平野部における製塩土器出土遺跡の減少と、紀伊半島西岸における急増が達成され、内陸部での製塩土器も急増する。その背景には、塩の需要拡大と製塩集団の再編成が想定されている。大阪府下では、庄内期から継続して営まれた集落は衰退あるいは消滅し、各地域で布留3期から、新たな集落遺跡の出現が確認できる。渡来系遺物のみられる集落も多く、韓式系土器や鉄器製作関連資料がみられることも多い。塩生産に関しても、前代とは比較にならないほどに政治的な介入が行われた。東海の状況

もこのような交流関係の再編と政治的介入といった動きに連動したものと考えられる。

7) 廻間Ⅲ式の時間幅の中で、鹿乗川流域遺跡群が衰退傾向を示すや、製塩土器の分布も知多湾から離れ、尾張側のあゆち瀨南岸域にうつる。そこは、断夫山古墳などが築造される尾張氏と深く係る地域である。古墳時代中期の集落動向は把握していないけれども、愛知県出土の布留式土器³⁴⁾や韓式系土器³⁵⁾が濃尾平野側に偏在することと関連していよう。西三河にあった交流拠点としての役割が尾張側に移動したのであり、尾張の地域首長勢力の充実がその背景にある、と考えられる。このことは、当時の土器製塩と地域首長との結びつきがいかに強いものであったかをも示している。

塩は人間の生活にとって必要不可欠な資源である。中国の王朝では、塩は鉄と共に嚴重に管理され、専売品として扱われた。日本でも弥生・古墳時代には、塩は自家消費するだけの資源ではなく、鉄をはじめ玉製品などに相当する地域の交換財としてあつかわれたと考えられる³⁶⁾。そして古墳時代までに、塩生産を確立した地域のみが、律令期の塩の貢納国になっていくのであり、三河は庸塩の貢納国の東限となる。三河での塩生産は、当初には細々と開始されたのではあるが、それは後の展開を考えると非常に重要な意味を持つ技術移転であったことがわかる。

註

- 1 東日本で出土する叩き技法の土器、特に叩き甕を「畿内系」と報告される場合が多い。しかし叩き技法は、畿内周辺部の紀伊、淡路、播磨や伊賀でも一般的な技法であり、地域の区別は難しい。よって本稿では「近畿系」と記載した。
- 2 広瀬和雄「大阪湾岸と三河湾岸の土器製塩―首長ネットワーク論の提唱―」『弥生文化博物館研究報告』第1集 大阪府立弥生文化博物館 1992
- 3 a 『下田遺跡』大阪府文化財調査研究センター 1996、b 『堺市下田遺跡』下田遺跡調査団・六甲山麓遺跡調査会 1998、c 『下田遺跡発掘調査概要報告―TSD―3・下田町―』堺市教育委員会 2005
- 4 a 酒井龍一「和泉における『伝統的第五様式』に関する覚え書き」『豊中・古池遺跡 その3』1976、b 広瀬和雄「大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店 1994、c 鈴木陽一「脚台式製塩土器について」『湊遺跡 90―4区の調査』泉佐野市教育委員会 1993、d 河田泰之「第5章 大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開」『下田遺跡』大阪府文化財調査研究センター 1996、e 宮地聡一郎「脚台式製塩土器について」『島北磯遺跡』大阪府文化財調査研究センター 2000、f 積山洋「大

- 阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『季刊考古学』別冊 14 雄山閣 2004、g 富加見泰彦「紀淡海峡の製塩土器」『久保和士君追悼考古論文集』2001
- 5 広瀬和雄「大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店 1994 なお I 式と III 式は、それぞれ A、B と細分されており、本稿では古相、新相と記載した。
 - 6 西村 歩「第 6 章 和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡』財団法人大阪府文化財調査研究センター 1996
 - 7 浅岡俊夫「きぬがさの検討—出土木製笠骨をとおして—」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』1990
 - 8 山田隆一「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第 3 集 大阪府立弥生文化博物館 1994
 - 9 山田隆一「大阪府下出土の東海・東国地域の土器」『庄内式土器研究』16 1998
 - 10 米田文孝「搬入された古式土師器」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』1983
 - 11 大阪府教育委員会『崇禅寺遺跡発掘調査概要・I』1982
 - 12 穂積裕昌「紀伊半島東岸部の古代港と海上交通—記紀熊野関連説話成立の前提—」『Mie Hisutory』Vol.11 三重歴史文化研究会 2000
 - 13 加藤志月「畿内出土の「製塩土器」の分布について」『網干善教先生華甲記念考古学論集』1988
 - 14 大久保徹也「喜兵衛島遺跡群出土製塩土器について」『喜兵衛島—師楽式土器製塩遺跡群の研究—』喜兵衛島刊行会 1999
 - 15 大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要・I』1983
 - 16 秋山浩三「摂河泉の吉備系土器」『邪馬台国時代の吉備と大和』二上山博物館 2002
 - 17 河田泰之「大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開」『下田遺跡』大阪府文化財調査研究センター 1996
 - 18 図示した中田遺跡 S X 01 出土資料は、庄内期古相の資料であり、体部外面にヘラケズリを施している。備讃瀬戸からの搬入品の可能性があると考えたい（大阪府教育委員会『中田遺跡発掘調査概要』1986）。
 - 19 大久保徹也「岡山県」『日本土器製塩研究』青木書店 1994
 - 20 森 泰通「愛知県における脚台式製塩土器の研究」『考古学フォーラム』17 考古学フォーラム 2005。他に東海の土器製塩については、立松 彰「5 愛知県」『日本土器製塩研究』青木書店 1994 がある。両者の編年で、本稿にかかわる部分では、松崎類の位置付けが大きく異なる。森氏は伴出遺物他から 5 世紀代に、立松氏は形態から 3 世紀代に位置付ける。ここでは森氏によるが、今後の資料の増加を待ちたい。
 - 21 例えば兵庫県赤穂市堂山遺跡が例示できる。海岸沿いに立地する製塩遺跡で、出土する脚台式は

- 備讃瀬戸と同様の薄い作りである。また叩き甕を使用する地域でもある（兵庫県教育委員会『堂山遺跡』1995）。
- 22 a. 安城市『新編安城市史』10 資料編考古 2004、b. 安城市博物館『縄文・弥生の遺産』2004、c. 安城市歴史博物館『掘り出された安城の歴史』1996などを参考にした。なお近年の報告では、「鹿乗川流域遺跡群」と呼称される場合が多いが、本稿では従来通り「古井遺跡群」と記載した。
- 23 桜井二子古墳の年代は、桜林遺跡 B 3 区の出土土器を根拠に、廻間Ⅲ式前半（布留 0 式併行）と推定されている（『桜林遺跡』安城市教育委員会 1998 145 頁）。
- 24 『鹿乗川流域遺跡群Ⅲ』安城市教育委員会 2005
- 25 『鹿乗川流域遺跡群Ⅱ』安城市教育委員会 2004
- 26 当該期、西三河では線刻人面文土器が分布する（図 9—7）ことも特徴的である。弥生時代終末から古墳時代初頭、線刻人面文土器が分布するのは、備讃瀬戸の吉備・讃岐と尾張・三河であり、両地域間に広範な交流関係が伺える。そして、三河では鹿乗川流域遺跡群とその周辺に集中分布する。設楽博己氏は、人面文の分布する背景について興味深い解釈を提示している。つまり「・・・線刻人面や弧帯文の分布の背後に、海人という漂泊する集団の活動を想定することもあながち間違とはいえないのではないだろうか。・・・海人部（アマベ）は大化前代に、地方の産物を中央に貢献する役割をおったように、流通にかかわる部であった。・・・弥生時代終末にあらわれた、線刻人面絵画とその分布は、ヤマト政権に編成される以前の、海人集団の祭祀とその動きを示している・・・・」（設楽博己「線刻人面文土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 25 集 1990 の 61 頁）と考える。鹿乗川流域遺跡群の住人の出自の一つに海人集団があるとすれば、それと塩生産を結びつける非常に有力な説になり得る。また、東海の土器製塩が西三河から始まった背景も理解できよう。
- 27 加藤安信「伊勢湾地域の叩き甕」『檜崎彰一先生古稀記念論文集』1998
- 28 川崎みどり「第 5 章考察 1—（3）叩き甕について」『本神遺跡』安城市教育委員会 1998。胎土分析については、安城市教育委員会『釈迦山遺跡』2001 を参考にした。それによると鹿乗川流域遺跡群に属する本神遺跡 2 点、中狭間遺跡 2 点、釈迦山遺跡 1 点の畿内系とされた土器は、いずれも矢作川流域の胎土である。
- 29 註 27 文献。
- 30 和気清章「伊勢に於ける土器交流拠点」『庄内式土器研究』20 1999
- 31 その場合でも、結晶片岩を含む甕がないので紀伊からの直接搬入はないであろうし、口縁端部に叩き工具による「刻み目」に巡らせる事例がないので、紀伊や淡路の影響でもない。森岡秀人氏は甕の口縁端部に叩き工具によって刻み目状に巡らせる資料を淡路型甕と呼称する。弥生時代後期後半～庄内期にかけて淡路島から紀伊北部に分布し、出現は前者が古いと述べる（森岡秀人「撰

津における土器交流拠点の性格」『庄内式土器研究』21 庄内式土器研究会 1999)。また淡路島では、洲本市下内膳遺跡、寺中遺跡、志知川沖田南遺跡で、甕口縁端部に刻み目を巡らせるものが認められる（『洲本市下内膳遺跡』兵庫県教育委員会 1996）。紀伊では、紀北の和歌山市西田井遺跡、紀中の御坊市中村地区遺跡などで後期後半の甕口縁端部に刻み目を巡らせる事例の多いことが報告されている（『西田井遺跡発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター 1991、『中村地区遺跡発掘調査報告書』御坊市遺跡調査会 1995）。

- 32 中狭間遺跡他の資料は、安城市教育委員会の岡安雅彦氏、安城市埋蔵文化財研究会の川崎みどり氏のご配慮で見学させていただいた。
- 33 北島大輔氏も、桜井古墳群は鹿乗川流域遺跡群を母体に成立したと考える。また東日本における交流拠点の一部を経済的拠点ととらえ、それに隣接する出現期大型墳墓の事例が多いことをあげて、両者の関係を示唆している（安城市教育委員会『中狭間遺跡』1999）。西日本でも、福岡県の比恵・那珂遺跡群と那珂古墳、奈良県の纏向遺跡と纏向古墳群など事例は多い。
- 34 早野浩二「濃尾平野における布留式甕について 一門間沼遺跡 94Cb 区 SD15 出土土器を中心として」『年報』平成7年度 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1996
- 35 早野浩二「ミヤケの地域的展開と渡来人—東海地方における朝鮮半島系土器の考察から—」『考古学フォーラム』17 考古学フォーラム 2005
- 36 岸本雅敏「古代国家と塩の流通」『古代史の論点』3 小学館 1998

第5章 鉄器と鉄器生産

第1節 近畿弥生社会における鉄器化の実態について

1 はじめに

弥生時代における鉄器の研究は古く、すでに昭和初頭より開始されている。しかも研究の当初より、前・中期には鉄器の存在したこと、後期には石器が消滅し鉄器に置きかわることにより生産力が増大し、古墳時代に向かう等のように、すでに今日の研究でも大枠の動かない結論に達していることは特筆すべきであり、以後の研究をも大きく規定した。しかしそれらの研究は、数量的には極めて限られた遺跡出土の鉄製遺物を中心に進められてきたことも事実であり、今日のような多くの開発に伴う大規模調査の存在しなかった当時にあっては、いたしかたのないことである。

従来、出土遺物としての鉄器が限られていたこともあって、地域差を考慮に入れようもなく、凡日本的視野に立脚しての研究がなされてきた。都出比呂志氏の弥生時代中期後半から農具鉄器化が始まるとする考えは、当時の代表的な研究であり定説化¹⁾してきた。しかし近年、鉄器資料が増加するにつれ、細部において従前の説にそぐわないことが明確になってきた。すなわち鉄器にも出現時期、形態等に地域差があり、最も先進的な北部九州地域でさえ、弥生時代中期後半からの農具鉄器化に無理が生じている。

近年の実状を捉えての論考は、川越哲志氏²⁾、橘口達也氏³⁾、潮見浩氏⁴⁾等を中心に発表されているが、それらは北部九州を主にした研究であり、近畿地域に関してはその結論の中で、概略的に触れられているにすぎないのが実状である。その様な状況の中、松井和幸氏⁵⁾は大陸系磨製石器の消滅と鉄器化より、また大村直氏⁶⁾は石鏃・銅鏃・鉄鏃より、各地域の地域性を追求されている点には注目したい。

上記の研究に導かれ、本稿では近畿地方における鉄器を集成し、その時期と内容を明確にし、特質を明らかにすることを目的にする。なお、本稿は遺物個々よりも、むしろ鉄器化の実態に重きを置くため、表裏一体の関係にある石器の状況にも言及する。また各地域の説明の冒頭で集落遺跡の動向の概略を記したのは、どのような社会状況の中で鉄器が存在したのかを確認するためである。従来の研究はそれを考慮してこなかったがために、実態以上に鉄器化を想定⁷⁾する結果となったと考えるからである。

2 近畿地方の鉄器化の状況

従来、鉄器研究は遺跡の動向から切り離された形で、個別に扱われることが多い。本稿ではどのような社会状況の中で鉄器が出現し、使用されたのかを明らかにするために旧国程度の単位で概観する。

1) 紀伊、淡路（洲本平野部）

近畿の南部地域として一括して述べる。また、この二地域は和泉も含めて弥生集落は全く同様の消長を示す。すなわち、前期以来継続する拠点集落をはじめ、平野部に立地する低地性の遺跡はⅣ期をもって終了し、Ⅴ期前半には多数の高地性集落が出現する。いっぽうで平野部での集落が再開されるのは、Ⅴ期後半からであり、多くが終末からである。

Ⅴ期前半に出現を見る高地性、あるいは丘陵性集落として、紀伊では橘谷遺跡、滝ヶ峰遺跡、淡路では大森谷遺跡、下加茂岡遺跡などがある。他に紀ノ川中流の船岡山遺跡は、紀ノ川の中島という特異な立地を示し、その造営期間が高地性集落と同時期に限られることなどから同様の社会的契機のもとに出現したと考えられる。

橘谷遺跡⁸⁾は、Ⅴ期初頭から前半の短期間に出現と廃絶をみる。最高所に立地する1号住居では鉄鏃、不明鉄器が出土し、石鏃2、砥石1、凹石1が伴出している。遺跡全体でも石器は他に石鏃、石包丁の破片、投弾各1点等があるのみで極めて少ない。

滝ヶ峰遺跡も同時期の遺跡であり、刃部を有する鉄器が出土している。石器は石鏃2、石包丁2、投弾1、破石1、凹石1、磨石2があり、橘谷遺跡と全く同様の傾向を示す。

船岡山遺跡では鉄鏃、鉋等が出土した。鉋の出土した円形住居（S B 09）は12棟の住居の中でも最大規模（径9.1 m）である。Ⅴ期前半に属する。

大森谷遺跡はⅤ期前半に出現をみる丘陵性の遺跡であり、竪穴住居7棟が検出され、2棟で用途不明鉄器（3号住居）と小鉄片（7号住居）が出土した。3号住居は本遺跡では傑出した規模（径11.4m）の円形住居であり、凸基有茎式石鏃1、投弾1が伴出した。また7号住居もそれに次ぐ規模（径6.6 m）の円形住居であり、砥石1、投弾1等が伴出した。他に大型 蛤刃石斧、石鏃、磨石、砥石各1、円礫6などが出土している。本遺跡はⅤ期前半から出現するが、3号住居はⅤ期中頃に属する。

低地集落である北田井遺跡では、布留期の71号住居より鉄鏃が出土している。報告者は後期には三角形大型石包丁、蛤刃石斧片、石錘、サヌカイト製刃器のみで石鏃が全く消滅していることから鉄鏃の存在を予想するが、公表された土器からすれば、後期でも終末

期あるいは庄内期の状況と理解できる。V期には石器が消滅したとされるにもかかわらず、むしろ終末期以降にまで蛤刃石斧が残存⁹⁾することに注目すべきである。V期終末～庄内期にまで蛤刃石斧が残る状況は、北部九州をはじめ西日本各地で散見し得るもので、この時期を最後に消滅すると理解できる。

同じく低地集落の田屋遺跡、下内膳遺跡の動向は不明である。田屋遺跡では円形住居から鉄鏃が出土している。紀伊ではV期中頃に円形から方形竪穴住居に移り、V期中頃の資料であると考えられる。下内膳遺跡では住居から鉄鏃6を含む鉄器が12点、V期終末の包含層からは鉄片4が出土している。すべてV期終末以降の所産である。田屋遺跡、下内膳遺跡は弥生前・中期にも営まれているが、鉄器の出土はV期後半以降に限られることが確認できる。

墳墓資料としてはIV期に属する亀川遺跡の方形周溝墓から鉋、釣針が出土している。長3.2mの土坑墓であり、3基検出された土坑墓の中でも最大規模である。中期の鉄器副葬は異例である。

以上のように本地域では、亀川遺跡の墳墓例を除けば、鉄器の使用はV期初頭の高地性集落出現以降である。石器の存在状況も共通しており、橘谷遺跡、滝ヶ峰遺跡、大森谷遺跡例から少量であったことが判明する。ただし営まれた期間も極めて短い。また船岡山遺跡、大森谷遺跡の住居、亀川遺跡の墓坑等の規模の比較可能なものはすべて大規模遺構に鉄器の出土が集中する。

2) 和泉

前期以来、平野部で拠点的な位置を占めた低地遺跡は後期になると消滅あるいは著しい衰退の時期を迎える。後期には観音寺山遺跡、惣の池遺跡等の高地性集落が出現する。

低地遺跡出土として、四ツ池遺跡の刀子状鉄器があり、I期¹⁰⁾とされるが確定できない。

観音寺山遺跡は、竪穴住居103棟が検出された大集落である。刀子2、鉄鏃3、鉄斧2、不明鉄細片（鉄片5、棒状4、針状3）が出土している。出土鉄器以上に注目できるのは、むしろ石器の多さで、石鏃63、尖頭器18、磨製石斧10（蛤刃5、柱伏片刃3、扁平片刃1、小型抉入石斧1）、石包丁6等が出土している。本遺跡はV期でも最古期に相当する時期より開始されており、石器主体の中に鉄器が入り込み出した初期の様相と理解できる。

惣の池遺跡も時期はV期であるが概要報告のみで不明確な部分が多い。4棟検出された竪穴住居の内、3棟から鉋1、不明鉄器4が出土している。1号住居では鉋、不明鉄器2に石鏃3、砥石1、投弾1、石錘伏円礫1が伴出している。注目すべきは、方形プラン

の第3・4号住居の一辺中央に寄って、2つ接続の特殊ピットを有する遺構であって、ともに数個の砥石と不明鉄器が出土している。「鉄製利器もしくは磨製石器の仕上げ工程に関係のある手工業専用の竪穴」と報告されている。類似例として枚方市星ヶ丘遺跡2号住居址がある。方形プラン、一辺中央寄りのピット、砥石、小鉄片の出土に共通点があり、星ヶ丘例は小鉄片50数点が出土しており、鉄器製作工房と考えられている。惣の池遺跡も鉄器製作工房の可能性はある。

以上のように本地域では、V期の最古段階を主体にする観音寺山遺跡で、石器主体の中に鉄器が入り込み始めた状況がうかがえる。石器の点数の多さはIV期と変わらないが、他遺跡IV期の石斧では伐採斧が従、加工斧が主となるに対して、観音寺山では同数である（第3表）。V期に残る石斧が太型蛤刃であることからすれば、観音寺山遺跡ではその過渡的様相を示す可能性がある。一方で、武器としての矢の主体は中期と同じく石鏃である。

3) 北河内

枚方丘陵を中心とした地域である。集落の動向は必ずしも明瞭でないが、Ⅲ期新段階以降に田ノ口山遺跡を筆頭に、丘陵上に多くの集落が出現する。現状ではこのような丘陵上の遺跡に鉄器の出土が集中する。

田ノ口山遺跡は未報告であるが、中期後半からの大集落であり、現在までに約40棟の竪穴住居が確認されている。中期後半の住居から鉄鏃5を含む鉄製品13点、中期後半から古墳時代前期の住居から鉄鏃、鉄斧が出土している。鉄斧は奈良県六条山遺跡、京都府田辺天神山遺跡（いずれもV期中頃から後半）に類似する小型の袋状鉄斧である。鉄鏃は柳葉式、有茎三角形式の他、庄内期新相の圭頭斧箭式も含む。石器類としては打製、磨製石鏃多数の他、太型蛤刃石斧、挟入り片刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧が出土しているが、所属時期は不明である。

鷹塚山遺跡は、V期後半～終末の高地性集落であり石器は少ない。鉄器は鉄鏃を含む12点が出土した。また報告された鉄片の中には三角形のものがあり、類例として星ヶ丘遺跡に1点、熊本県方保田東原遺跡に8点があり、いずれも鉄素材の可能性があり後述する。なお石器は砥石5、凹み石1、剥片1、石鏃1がある。

星ヶ丘遺跡では、V期後半の鉄器加工場と考えられる方形竪穴住居が確認されている。50数点の小鉄片が出土し、製品ではない完形品も含まれている。石器は、多数の砥石が出土し粗砥、中砥、仕上砥に分類できる。同様の遺構として、惣の池遺跡の第3・4号住居がある。方保田東原遺跡、鷹塚山遺跡と同様の形態の鉄片を含むことは前述のとおりで

あり、砥石の多さも共通する。

他に藤田山遺跡、出屋敷遺跡、長尾西遺跡、禁野車塚古墳の盛土内から後期の鉄鏃が出土している。

墳墓資料には鷹塚山遺跡、星ヶ丘西遺跡がある。鷹塚山遺跡ではV期末の墳丘をもつ木棺墓が検出されており、木棺墓上の覆土より鉋が出土している。星ヶ丘西遺跡の台状墓の主体部からは大型の柳葉式鉄鏃2が出土している。奈良県大王山遺跡の形態に類似する。

以上のように、本地域ではV期後半～終末の鷹塚山遺跡からは石器がほぼ消滅しており鉄器化した状況が、星ヶ丘遺跡からは地域内で鉄器を自給自足した状況がうかがえる。

4) 中・南河内

本地域では大規模調査によって、平野部での鉄器使用の一端が明らかになっている。中期の資料として、中河内では鬼虎川遺跡の鉄鏃、ノミ状鉄器(Ⅱ・Ⅲ期)、水走遺跡の鹿角柄ノミ(Ⅲ期)、池島・福万寺遺跡の鉄鏃(Ⅲ期)、西ノ辻遺跡の鉄鏃(Ⅲ～Ⅳ期)があり、南河内では甲田南遺跡の板状鉄斧(Ⅲ～Ⅳ期)がある。Ⅲ期以降に少数の鉄器が存在する状況がうかがえる。

甲田南例のみ竪穴住居出土である。直径9.8 mの円形住居は、50数棟の中でも大型に属する。鬼虎川遺跡の資料は、伴出遺物から青銅器製作に関わる工具と考えられ、科学分析からは鑄鉄脱炭鋼が素材である。また参考資料として瓜生堂遺跡の袋状鉄斧柄(横斧)、若江北遺跡の袋伏鉄斧柄(縦斧)がある。前者はⅣ期、後者はⅤ期に属する。若江北の縦斧柄は、着裝部から想定し得る鉄斧の袋部幅は2 cm強であり、縦斧ではあっても大型蛤刃にかわる伐採斧ではない。

亀井遺跡は、弥生時代の全期間継続する平野部の大遺跡であり、鉄器および関連資料は以下の通りである¹¹⁾。

Ⅳ期 鉋1、鉄鏃1、竪杵の金属刃痕1

ⅣまたはⅤ期 タガネ状鉄器、鉄片1

Ⅴ期 板状鉄斧1、袋状鉄斧1、ノミ状鉄器1、袋状鉄斧の木柄2(縦斧1、横斧1)、竪杵の金属刃痕1、横槌の金属刃痕1

他に、用途不明木製品1(Ⅱ期後半)、横柄杓未製品1(Ⅲ～Ⅳ期)の加工に鉄製工具の使用された可能性がある。以上のように、Ⅴ期になれば鉄斧関係の資料が充実し、板状鉄斧(片

表1 亀井遺跡出土石斧

時期	器種		
	大型 蛤刃	柱状 片刃	扁平 片刃
中期	1		
	2	3	1
	3	6	1
	4	5	1
	5	2	1
	6	1	1
	7	5	2
後期	1	5	1
	2	21	5
	3	1	3
不明	14	2(Ⅴ)	6
合計	63	10	18

刃)の全長9cm、袋状鉄斧8cm、横斧柄の3点は加工斧である。なお縦斧は伐採斧で、加工斧と伐採斧の比率も近畿一般の状況と一致している。

以上の豊富な鉄器および関連資料にもかかわらず、鉄器化が達成されたとは考えられないのは、石斧の多さ¹²⁾である(第1表)。大型蛤刃石斧の後期2(V期後半)21点の他、中・後期にかけて石斧は、同様に使用されており、むしろ加工斧である偏平片刃石斧には増加傾向がうかがわれる。鉄斧の存在にもかかわらず、V期における加工用の石斧の増加は、すべてを鉄器で賄えなかった鉄器化の限界性を示していると考えられる。近畿における低地集落の実態が極めて不明瞭な現在、拠点集落での鉄器化の一側面と考えたい。

南河内では、高地性集落はV期に営まれ、東山遺跡、大師山遺跡、寛弘寺遺跡でV期中頃～後半にかけての鉄器がある。

東山遺跡では鉄器2点が出土した。B-7b住居(円形)は本遺跡で最大規模であり、ノミ状鉄器と石鏃2点が伴出し、C-63住居(方形)でもノミと考えられる鉄片が出土した。石器としては遺跡全体で石鏃29点、砥石13点、石包丁2点等で、大陸系磨製石斧の出土はない。

大師山遺跡のV期後半の2号住居(方形)より有茎腸袂三角形式の鉄鏃1が出土した。石器は遺跡全体で石鏃1、砥石2、石皿2がある。やはり大陸系磨製石斧はない。

以上のように、本地域では中期初頭以来の鉄器資料が充実している。しかし、この状況はⅡ・Ⅲ期に鉄器が散発的に存在し、Ⅳ期以降急増する点で他地域と同じ傾向を示す。むしろ鉄器資料が充実し、一大拠点として流通の窓口でもあった亀井遺跡でさえ、多くの石斧が認められる事実は、鉄器の人手の難しさを示している。

5) 大和

近畿では大和のみ拠点集落はⅠ期からⅤ期まで継続して営まれており、加えてⅤ期には高地性集落も出現する。現状では鉄器の出土は大変希薄である。低地集落では、Ⅰ期の唐古・鍵遺跡出土の挿入孔に鉄鏃の付着した鹿角製刀子把¹³⁾とされたものがある。

六条山遺跡は丘陵性の遺跡でありV期前半～中頃に営まれる。鉄斧と鉄釘が出土した。鉄斧状鉄製品は、全長2.6cm、刃幅3.4cmと小型である。京都府田辺天神山(長2.7cm、刃幅5cm)、大阪府田口山(長3.1cm、刃幅5.2cm)に類似例がある。六条山遺跡、田辺天神山遺跡例がV期中頃～後半の資料であり、田口山遺跡例の時期は不明確である。石器は石核1、石錐1、石包丁未製品、砥石8、敲石1、握棒状石器1があり、砥石が多い。

大王山遺跡はV期初頭の高地性集落で、住居床面で板状鉄斧と石鏃2点が出土した。

ゼニヤクボ遺跡は、弥生前期から古墳時代前期の集落遺跡であり、弥生時代終末頃の鉄鏃、布留1期の住居から刀子が出土している。

墳墓資料として、法貴寺遺跡のV期後半と考えられる壺棺から出土した銅鏃型式の鉄鏃がある。他に大王山遺跡9号地点の方形台伏墓主体部に副葬された鉄鏃、見田大沢古墳群4号墳主体部に副葬された短剣、鉈がある。いずれも庄内期に位置付けられる。大王山の鉄鏃は柳葉式に属するが、関部が明らかに意識される。星ヶ丘西遺跡出土の大型鉄族が類例である。見田大沢4号墳の短剣は形態的には片関で、福岡県神蔵古墳の長剣、和泉黄金塚古墳例が類例と指摘¹⁴⁾されている。

以上、大和では鉄器化について言及できる状況にない。ここでは四分遺跡における石器の状況から、その背後にV期における鉄器化を想定している。石器において、「時期別石器出数」¹⁵⁾を見ると、V期（報文の土器はV期後半）における石斧の消滅が注意できるが、他に大きな変化はない。にもかかわらず報告者はIV、V期における「鉄製利器の普及に基づく石器群の絶対量そのものの減少」を考える。鉄器化の主たる石鏃は中期以来変化しておらず、可能性としては加工斧に鉄器化が想定できるのではあるまいか。少なくとも「石器の減少＝同程度の鉄器の普及」とする考えには同意できない。

6) 播磨

播磨灘に流れ込む河川の形成する沖積地毎に小地域区分が可能である。明石川流域での集落遺跡の動向は比較的明らかである。

明石川流域では近年の調査で新方遺跡、玉津田中遺跡を拠点にした集落のあり方が明らかになった。新方遺跡は、前期以降の大集落だがV期は希薄になる。Ⅲ期の方形周溝墓より鑄造鉄斧の刃部片が出土している。破片で全形はわからないが熊本県斎藤山遺跡、轟遺跡例と形態、破損状況ともに類似する。川越氏¹⁶⁾は「袋部の一方が他面より破損が大きいのは木柄を刃に対して直角につける手斧として利用されたために、使用時の衝撃がより強く使用者に向けた面に伝わった結果」と推定する。新方例も同様に、手斧としての使用、破損を示している。弥生時代の鑄造袋状鉄斧の分布の西限である。

新方例と関連して注目できるのが、玉津田中遺跡の中期旧河道内から出上した手斧柄^⑰である。斧の挿入する部分は断面長方形で直線的に長くのびており、新方と同形態の鑄造鉄斧を手斧として使用した可能性が強い。新方遺跡、玉津田中遺跡の鑄造鉄斧関連資料は、東方を介しての舶載品と考えられ、両者ともに手斧として使用する。

高地性集落としては、明石川水系にIV期の頭高山遺跡がある。竪穴住居16、地山切り

込み遺構 6、土器棺墓 2、土坑墓 16、ピット 12 が検出された。鉄器は鉄鏃、鉈、刀子の他、鉄片 が出土した。一方、石器も太型蛤刃石斧 1、柱状片刃石斧 4 の磨製石斧、打製石鏃 50 数点の他、磨製石剣、多数のサヌカイト片等が出土しており、鉄器化への主役である斧、石鏃の主力は石器にある。同時期の三田市奈カリ与遺跡では、いちはやく扁平片刃石斧から板状鉄斧への転換が見られるが、本遺跡では確認できない。鉄器化の程度において、遺跡間にも格差のあることがわかる。

播磨中部から西部をまとめて述べる。時期毎の集落遺跡出土鉄器の事例として、Ⅲ期に小山居住遺跡、鹿沢本田町遺跡から鉄鏃、Ⅳ期に福本遺跡、名古屋山遺跡から大・小型の板状鉄斧、Ⅴ期に家原堂ノ元遺跡と門前遺跡から鉄鏃、立岡遺跡から袋状鉄斧、養田遺跡と大中遺跡からは刀子（大中遺跡からは他に不明鉄器 4 点）、庄内期に 丁・柳ヶ瀬遺跡から鉄鏃が出土している。門前遺跡、丁・柳ヶ瀬遺跡以外はすべて竪穴住居址からの出土である。Ⅲ期より鉄鏃が、Ⅳ期より斧の鉄器化が認められるようになる。

墳墓資料としては、加古川市西条 52 号墳、竜野市白鷺山箱式石棺、明神山墳墓群、半田山 1 号墓に鉄剣を主体にした副葬が確認できる。两条 52 号墳と半田山は土器から、白鷺山は小型仿製鏡から、明神山遺跡は白鷺山と同類の鉄剣であることから、いずれも庄内期前後に位置付けられる。

本地域は未報告資料も多く、鉄器と遺構、伴出石器との関係の検討は難しい。そのような中、舶載品である鑄造鉄斧関連資料が、明石川水系の新方遺跡、玉津田中遺跡で出土したことは、瀬芦内海を媒介とした流通ルートによって鉄器が持込まれたことを示しており重要である。

7) 摂津西部

摂津は千里丘陵を境に西部（西摂）と東部（東摂）に区分できる。西摂はⅠ期以来の田能遺跡と 勝部遺跡、Ⅱ期以来の加茂遺跡等の拠点集落は、Ⅳ期をもって衰退する。田能遺跡は最も早くⅤ期後半より集落が再開される。高地性集落はⅢ期には出現し、Ⅳ期とⅤ期前半が盛期である。

田能遺跡出土の板状の用途不明鉄器は、Ⅲ期に属し本地域では最も古い資料である。

Ⅳ期には奈カリ与遺跡、伯母野山遺跡、五ヶ山遺跡、仁川高台遺跡で、Ⅴ期には北神ニュータウン第 4 地点、会下山遺跡で、鉄斧・鉄鏃を主体にした鉄器が見られる。

奈カリ与遺跡はⅣ期の竪穴住居約 30 棟で構成される。板伏鉄斧 8（大型 2、小型 6）、鉄鏃 3、刀子、鉈の他、鉄片多数等が出土した。石器としては太型蛤刃石斧 3、柱状片

刃石斧 8、石包丁 5、打製石鏃 62、磨製石鏃 6、他にも多数が報告されている。太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧が存在するのに対して扁平片刃石斧を欠いていることより、まず扁平片刃石斧の鉄器化が進行したと理解されている。板状鉄斧の小型品は片刃であり、手斧としての使用が想定でき首肯できる。ただ最大の 1 点は伐採斧と考えられる。刃幅、長さともに同一法量の太型蛤刃石斧の存在は象徴的である。また多数の石鏃が存在することから、鉄鏃よりも主体は石鏃にあることも確認できる。

伯母野山遺跡の遺物は大きくが採集品であるが、Ⅳ期に若干のⅤ期前半の土器を含む。板状鉄斧 3 は両刃であり、内 1 点は近畿で最大の法量を有する。縦斧としての使用が想定できる。他に鉄鏃 3 も報告されている。石器としては打製石鏃 45、太型蛤刃石斧 4、柱状片刃石斧 18 以上、扁平片刃石斧 3 の他、石包丁、砥石等が出土している。ほぼ同時期の奈カリ与遺跡と比較した場合、鏃では同様の関係が認められるが、扁平片刃石斧の鉄器化は認められず、遺跡間にも鉄器化の進行程度に差のあることが確認できる。

Ⅴ期初頭とされる北神第 4 地点（Ⅱ地区）遺跡の円形竪穴住居より袋状鉄斧と鉄鏃、並びに包含層から袋状鉄斧が出土した。打製石鏃、石器製作跡も確認されているが詳細は明らかでない。

Ⅴ期初頭～前半は会下山遺跡の資料がある。円形竪穴住居 7 棟、祭祀址 2 が確認されており、住居址 5 棟からは鉄器が出土している。鉄ノミ 1、鉋 3、鏃 4、釣針 1、斧 1、環伏鉄器 1、棒状鉄片 5、鉄片 4 等が確認¹⁸⁾ できる。斧は小型鑄造品であり、現存しないが形態、法量、鑄造品であることから京都府途中ヶ丘遺跡の例に近似する。石器としては、柱状片刃石斧 1、石鏃 19（1 点は磨製）、砥石 22、サヌカイト片 199 がある。特に砥石はほとんどの遺構で鉄器と伴出しており、両者の関係が明確であり、鉄器製作に使用する砥石の良好な資料になる。

古墳時代初頭期の低地遺跡出土鉄器として栄根遺跡の棒状鉄片と鉄鏃、崇禅寺遺跡の素環頭鉄刀がある。前者は庄内期前後に位置付けられ、鉄鏃は無茎三角形式で重抉りの可能性がある。後者は庄内新相から布留Ⅰ期古相の土器に伴出したものであり、素環部分はエックス線撮影により円環を鍛接したことが判明している。近畿の素環頭鉄刀としては最古の資料であり、技術面からもまた沿岸洲先端に立地することからも、瀬戸内海ルートによる東方からの搬入遺物と考えられる。

以上のように、本地域ではⅣ期の鉄器化の状況が比較的良好に判明する。奈カリ与遺跡、伯母野山遺跡では斧と鏃を中心に鉄器が確認できるものの、その数倍の石斧、石鏃が主体

となる。鉄器の流入による、石器の減少傾向は確認できず、むしろ武器としての石鏃は増加傾向を示すと考えられる。鉄器流入の当初、石器と鉄器は影響しあうことなく共に存在すると理解すべきであろう。

8) 摂津東部

千里丘陵より東部である。安満遺跡、東奈良遺跡を拠点集落とした展開が見られる。Ⅳ期～Ⅴ期には芝谷遺跡、古曾部遺跡、成合遺跡、紅葺山遺跡等の高地性集落、そしてⅤ期後半以降には郡家川西遺跡、大蔵司遺跡等の低地集落の巨大化が認められる。

古曾部遺跡では、Ⅳ期末からⅤ期初頭にかけての2棟の竪穴住居が確認されている。A地点の竪穴住居より片刃の小型板状鉄斧、B地点より鉄鏃が出土している。鉄鏃は大型化途上にある凹基腸袂式で、近畿では異例の形態である。

芝谷遺跡では、中期末から後期前半の竪穴住居33棟などが検出された。12号住居はⅤ期初頭の焼失家屋で、板状鉄斧と砥石1が伴出した。住居規模は、集落内では小型である。板状鉄斧は長さ19cm、幅4.9cm、厚さ0.9cmと大型であり、刃部は背部にわずかな研ぎ出しがみられるが片刃である。長大で片刃の鉄斧の類例はない。柱状片刃石斧の鉄器化と考えられ、ほぼ同様の法量の石斧として神戸市頭高山遺跡(Ⅳ期)等がある。

紅葺山遺跡は、Ⅴ期後半から終末の集落址であり、竪穴住居18棟(円形1、方形17)が検出された。3、14号住居より柳葉式、有茎腹袂三角形式の鉄鏃、13号住居より鉋が出土している。両住居とも方形で、集落内では通常の規模である。石器は磨製石斧の刃部片1、砥石4の他、磨石2、軽石1が出土している。後期後半の石斧のあり方を示しており、重要である。

群家川西遺跡は、Ⅰ期新段階以降の平地に立地する集落であり、Ⅴ期後半以降に100棟以上の住居が検出され巨大化する。鉋と推定される鉄器はこの巨大化する時期の方形竪穴住居址より出土しており、砥石が伴出する。

以上のように、本地域ではⅤ期後半以降の高地性集落と平地集落で鉄器が確認できる。

9) 山城

本地域で高地性集落が営まれるのは、Ⅴ期中頃から後半にかけてであり、田辺天神山遺跡、長法寺谷山遺跡で鉄器の出土が確認できる。低地遺跡での鉄器は未確認である。

田辺天神山遺跡は、平面形が円形・方形・五角形の竪穴住居が23棟検出され、円形から方形住居へ移行したことが判明した。17号住居の小型斧状鉄器は手斧と考えられ、奈良県六条山遺跡、大阪府田口山遺跡出土例に類似する。5・6・7号住居より鍬・鋤先が

出土した。形態は正方形に近く、古墳時代に通有の形態である。住居址埋土には布留期の土器も含んでおり、古墳時代前期の可能性が高い。他に鉄鏃3、刀子2、鉄片が出土している。第1号住居の刀子（長15.3cm）は形態・法量とも、和泉観音寺山例（長16.5cm）に近似する。鉄器の出上した7棟の住居すべてに砥石が伴出している。石器としては石鏃2、石包丁3、石斧3（蛤刃2、柱状片刃1）等が出土した。

長法寺谷山遺跡は、V期後半の高地性集落であり円形、方形、五角形の住居が7棟検出された。多くが焼失住居である。住居から板状鉄斧、鋤・鍬先各1が出土しており、さらに鉄器の出土しなかった住居址からも天神山同様、鉄器用と思われる砥石が出土している。石器は多数の砥石を除けば石鏃2点のみである。本遺跡の鋤・鍬先は、北部九州の資料と形態が似ており、同時期に位置付けられている田辺天神山例とは異なる（第4図）。

墳墓資料としては、芝ヶ原12号墳から鉋、田辺天神山遺跡からは鉄剣が出土した。前者は庄内期、後者は不明である。

以上のように、本地域ではV期中頃～後半の高地性集落の状況が判明する。鉄器の他、多量の砥石の出土から、鉄器化の進行が想定できる。石器としては、小数の石鏃の出土が共通しており、石斧類が残存することにも注目すべきであり、鉄器化の限界性を示す。2点出土した鋤・鍬先は重要である。遺跡立地からも両者は淀川支流の木津川沿いであり、瀬戸内海を通じての流通によって持ち込まれたと考えられる。

10) 但馬、丹後・丹波

近畿北部地域として一括する。竹野川流域に鉄器の出土が集中するが、数量は少ない。

扇谷遺跡は、I期新相～II期の高地性集落である。環濠を巡らせ、防御性を備える。鑄造鉄斧と鉄滓が出土した。科学分析により、前者は砂鉄系原料、後者は鑄造に関わる鉄滓と報告されている。途中ヶ丘遺跡は、I期新相～V期におよぶ大集落遺跡であり、IV期あるいはV期のピットより鑄造脱炭処理を施した小型鉄斧が出土した。形態は兵庫県会下山遺跡の鑄造鉄斧に類似する。

扇谷遺跡と途中ヶ丘遺跡の鑄造鉄器は、朝鮮半島あるいは大陸の鉄器であることは明らかで、日本海に物流ルートがあり、北部九州を介して持ち込まれたと考えられる。

砂丘上に立地する遺跡として、浜詰マサカリ浜遺跡、函石浜遺跡がある。いずれも採集品であるが石鏃、銅鏃、鉄鏃が出土している。鉄鏃は、銅鏃の形態に類似した長茎で深い抉りを有するもの、無茎三角形式で占められており特異である。

丹波の集落遺跡では、七日市遺跡で鉄器が出土した。IV期にノミ、庄内期に鍬・鋤先が

出土している。いずれも竪穴住居からの出土である。

墳墓資料としては、Ⅴ期中頃以降に鉄器の副葬が始まる。但馬では秋葉山遺跡、妙楽寺遺跡、柿坪中山遺跡、御屋敷遺跡、丹後では大山遺跡、坂野丘遺跡、丹波では豊富谷丘陵遺跡、久田山南遺跡がありいずれも台状墓である。中でも鉄剣の副葬は、Ⅴ期後半以降に始まる。日本海沿いの地域は、他の近畿諸地域とは大きく異なることが確認できる。特に播磨と共に弥生後期後半から墳墓への鉄器副葬が集中する地域である。

小結

近畿では鉄器化という面で、遺跡単位で前期から後期にスムーズにたどれる事例は皆無に近い。理由として、低地に立地する拠点集落は一部を例外としてⅤ期には衰退することがある。また一方で、中・後期は高地性集落の出現期でもある。鉄器の遺存しにくい低地と、遺存しやすい高地に集落が分離し、しかもその時期に鉄器化の時期がオーバーラップしており、また鉄器化の程度も地域毎、遺跡毎に異なることも考慮せねばならないからである。本稿では地域毎に煩雑な説明を行ったが、これによって現状での実態をグローバルな視点から概観し、遺存の偶然性を越えて近畿での鉄器化を大枠でとらえることを目的としたものである。以下のようにまとめたい。

低地と高地における鉄器出土数の差に自然条件による残存の良悪は無視しえないが、それがすべてではない。Ⅰ・Ⅱ期に出現する低地の集落遺跡であっても、鉄器が出土するのはⅣ期以降、大部分がⅤ期以降である。播磨の丁・柳ヶ瀬遺跡、摂津西部の栄根遺跡、淡路の下内膳遺跡、河内の亀井遺跡等がその具体例となる。さらに、Ⅴ期には低地集落自体が衰退あるいは消滅することも、低地での鉄器の出土が少ない原因になる。

次に遺構単位で概観した場合、鉄器を保有することの優位性は確認できるのであろうか。一遺跡内で複数の住居や墓が検出された場合、より大規模な住居、墓を上位ランク・有力者の遺構と考えられるが、検討し得る資料は少ない。Ⅰ～Ⅲ期の資料で検討できる事例はほとんどなく、南河内の甲田南例（Ⅲ～Ⅳ期）が竪穴住居 50 数棟の中でも大型に属する事例があるにすぎない。Ⅳ期では播磨の福本例が 11 棟の住居（6～8 m）の中で 8 m を超す大型住居であること、紀伊の亀川例が 3 基の木棺墓中で最大規模であることを例示出来る。Ⅴ期では、播磨の大中遺跡、紀伊の船岡山遺跡、淡路の大森谷遺跡、南河内の東山遺跡、大和の六条山遺跡等で遺跡内では大型の住居址からの出土である。一方、Ⅴ期初頭で北摂の芝谷遺跡、庄内期で西摂の栄根遺跡、布留期で紀伊の尾ノ崎遺跡では、規模の小さな住居、墓からの出土であることも確認できる。弥生時代にあっては、より優位な

遺構からの鉄器出土が目立つことは事実であり、V期後半以降に鉄器保有が一般的になるに従いその状況が崩れていくようである。しかし地域性は抽出できなかった。

最後に高地性集落と鉄器の関連について述べる。低地性集落に比較して高地性集落における石器総数の中に占める石鏃の高比率はすでに明らかにされている。IV・V期には高地性集落が急増し、石鏃が高い比率を占めるようになり、同時に鉄族も含まれるのが実態である。一方、低地性集落では石鏃の増加傾向が認められず、鏃の必要性が高地性集落ほど高くないと考えられる。鏃が鉄器化の一方の主流であることからすれば、高地性集落が鉄器化の主要舞台であつたと考えてよい。高地性集落と鏃との関連の深さを考えれば、高地性集落での鉄器のあり方は、弥生社会における鉄器化の最先端の状況をかなり正確に示していると考えられる。

3 鉄製品の概略

ここでは鉄器の各器種の時期、数量および特徴の概略を明らかにする。

1) ノミ

推定資料を含めて7遺跡9例がある。タガネとの区別は難しい。時期はⅡ～Ⅲ期1（鬼虎川遺跡）、Ⅲ期1（水走遺跡）、Ⅳ期4（頭高山遺跡2、七日市遺跡1、加美遺跡1）、Ⅴ期2（会下山遺跡、亀井遺跡）があり、他の器種同様にⅣ期以降に増加するが、盛用されたとも思えない。近畿においては、断面方形の棒状身部に片刃、両刃の刃部を形成するノミに限定でき、北部九州を中心に弥生時代終末期から出現する袋部を有する袋ノミは未確認である。

鬼虎川遺跡例のみ、刃部が丸くなる片刃であり、共伴した鉄鏃とともに鑄鉄に脱炭処理の施された舶載品である。銅鐸、銅釧、異形青銅器の鑄型に伴出したことから、青銅器製作に伴う金工用のタガネ¹⁹⁾と考えられている。

なお本資料の身部裏面、側面の基部から身の中程まで紐痕が残存している。使用方法を考える上で、形態のみならず、紐痕の細部に至るまで酷似した石器が長野県恒川遺跡²⁰⁾から出土している。恒川例は全長12.3cm、刃部幅1.5cm、時期は中期後半で、斧台、巻紐との接触で煤の付着をまぬがれた部分と、煤の付着した露出部分とが明瞭に識

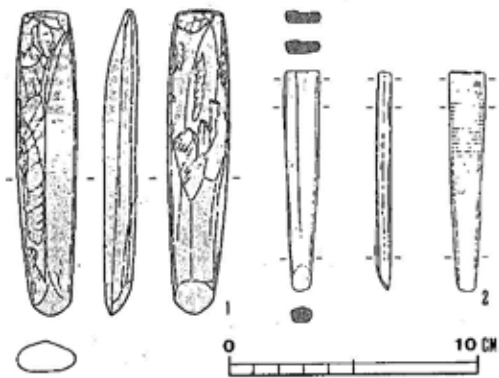


図1 石ノミと鉄ノミ (1:恒川、2:鬼虎川)

別できる。鬼虎川例はタガネなら棒状の柄に装着するであろうが、他に小型の膝柄に装着して横斧様に使用した可能性も考えられる。最も初期のノミ状鉄器に小型柱状片刃石斧と同様の装着痕を残すことを重視したい。

水走例は茎ノミであり鹿角柄が完存する。身部を鹿角柄にさし込むだけの簡単な構造で、柄部を叩いての使用は想定し難く、刃部が薄いことから突きノミと考えられる。Ⅳ期の兵庫県七日市例は、小型片刃で小型柱状片刃石斧の形態を残した資料である。一方、Ⅳ期の頭高山、Ⅴ期の会下山、亀井例は石器とは異なる細長い棒状の鉄器独自の形態を示す。水走例は細い棒状であるが、刃部に向かって徐々に薄くなる形態で、Ⅳ期以降のものが先端部のみ叩いて刃部を形成するのとは異なる。会下山例は全長 16cm を越える大型品であり、両刃である。

以上のようにノミ状鉄器は、中期初頭以降に柱状片刃の機能が鉄器化したと考えられ、Ⅳ期になってその鉄器としての形態の確立が認められ、出土量も増加する。両刃と片刃、大型と小型の別があり、用途によって使い分けられたと考えられる。

2) 刀子

「切る」新機能を備えた器種である。環頭刀子と茎刀子に大別でき、さらに茎刀子は茎部が偏平で短い a 類、茎部が棒状に細長い b 類に細別²¹⁾される。環頭刀子、茎刀子 b 類は舶載品で北部九州に集中する。

破損品を含めても 7 遺跡 11 点で、型式の判明するものは全て茎刀子 a 類である。参考資料として奈良県唐古遺跡ではⅠ期の鹿角製刀子把と報告された資料がある。

時期別ではⅠ期 1 (唐古)、Ⅳ期 4 (奈カリ与 2、頭高山 2)、Ⅴ期 7 (田辺天神山 2、観音寺山、養田、大中、大山墳墓、久田山南) がある。破損品が多く詳細な検討が難しい。観音寺山例と田辺天神山例は全長 16.5cm、15.3cm の大型であり形態も近似する。一方、大中例は完存しているが小型であり、刃部幅で見ると頭高山、田辺天神山の 1 例も小型に属する。田辺天神山遺跡では大・小型品がある。また大山墳墓、久田山南例は墳墓に伴う資料であり、Ⅴ期後半以降副葬品としての事例が増加する。以上のように、新機能を有する器種でありながら盛用されたとは思えない。ただ、Ⅳ期からその数が増加することは他の器種と同様の傾向であり、a 類茎刀子で占められることから近畿で製作が開始されたとしてよい。なお、Ⅳ期以前の例は今の所、唐古・鍵遺跡の鹿角製把のみだが、鹿角把の形態から半島系文物とも理解できる。

3) 鈍

木製品の面の加工に使用されたと考えられる。身部の断面形態によって、弧状を呈する a 類、矩形を呈する b 類に分類され、a 類は北部九州、b 類は瀬戸内以東に分布する²²⁾。

10 遺跡 20 例（2 遺跡 7 例は墳墓資料）があるが、細片となった多くの推定資料を含む。時期は、IV 期 4（頭高山、奈カリ与、亀井、亀川周溝墓）、V 期 16（会下山 3、東溝 3、紅葺山 1、東山 2、船岡山 1、大山墳墓 6）である。IV 期の頭高山、亀川、V 期中頃の大山墳墓例は岡村氏分類の b 類であり、氏の分類案は分布面で追認できる。近畿では、IV 期以降に増加することと、b 類で占められることが確認できる。

4) 鉄鏃

近畿に限らず鉄製品の中では、鉄斧とともにまとまった数量が出土しており、石斧と石鏃から鉄器化が進行する。特に鏃は消耗品にもかかわらず、貴重品である鉄を使用するのは、当該期の戦争状態を背景とした社会的要請の強さを示すと考えられる。

庄内期までの資料は、形態不明品も含めて 37 遺跡 65 点程度が確認できる。所属時期は、II 期あるいは III 期の鬼虎川例 1 点（鑄鉄脱炭）の他、III 期 3 点、IV 期 12 点、V 期 9 点、V 期前半 12 点、V 期後半 15 点、庄内期 13 点である。IV 期以降に数量が増加する。形態的には有茎三角形式 13 点（内、有茎腸袂三角形式 7 点）、柳葉形式 24 点、無茎三角形式（凹期）10 点、圭頭斧箭形式 2 点、銅鏃形式 3 点であり、方頭斧箭形式、鑿頭式²³⁾、定角式の確実な資料はみられない。II～III 期では形態にまとまりが見られないが、IV 期以降に柳葉式と有茎三角形式を主体としており、殊に V 期以降、後者から派生した深い逆刺を有する有茎腸袂三角形式に移行することが明確である。また近畿では鏃に言及する場合、銅鏃の存在は無視し得ず、やはり鉄鏃と時期的にも併行して柳葉式、有茎三角形式と有茎腸袂三角形式が主体となり、両者は時期、形態面で密接に関連しながら並存する。

一方、無茎三角形式鉄鏃は、弥生中・後期には九州と東国で盛行する。近畿では 10 点が確認できるが、5 点（大山墳墓 3、大山 1、途中ヶ丘 1）は日本海沿いであり、他に時期は不明ながら浜詰マサカリ浜遺跡、函石浜遺跡でも報告されている。上記を除外すれば、居住小山（III 期）、古曾部、観音寺山（V 期前半）、家原堂ノ元（V 期後半）、栄根（庄内）の計 5 点が存在する。しかし、家原堂ノ元例は身に 1 孔を有し類例は東国で散見されるし、古曾部例は、長 4.5cm で同型式の石鏃と比較し

表 2 近畿の鉄鏃型式

形式	時期	II・III	IV	V・前	V・後	V・?	庄内
凹基		1		2	5	1	1
有茎三角		1	4		1		
有茎腸袂三角			1	3	1		
柳葉		1	6	5	3	3	6
圭頭					2		
類銅鏃					2		1
不明		1	1	2	1	5	5
合計		4	12	12	15	9	13

た場合大型であり、一般的ではない。近畿において凹基式石鏃はⅡ期以降、石鏃の中に占める割合は減少しており、残存する場合でも大型化しないのが一般的である。また近畿での製作がほぼ確実な銅鏃においても、無茎式が皆無に近い状況を考えれば、近畿瀬戸内側における無茎式鉄鏃は孤立した存在である。無茎三角形式鉄鏃は、近畿では日本海沿いの地域色と考えられ、搬入品である可能性も想定しておきたい。

以上のように鉄鏃は、中期後半段階に石鏃を模倣することで出現すると考えられ、Ⅴ期以降に金属器特有の形態（有茎腸袂三角形式）が増加する。近畿では鉄鏃、銅鏃が柳葉式、有茎三角式を主体に共存している。鉄鏃、銅鏃は互いに補完し合う存在であり、そればかりか石鏃もⅤ期末まで残る状況は、鉄器の入手の限界性を示すと考えたい。

5) 斧

一定数が認められ、近畿では鉄鏃と共に鉄器化の主流となる。形態的には、石斧同様に板状身部の一辺に刃部を形成した板状鉄斧と、柄に装着するための袋部を有する袋伏鉄斧に分類できる。機能的には、木柄と斧刃部を平行に装着して伐採を機能とする縦斧と、木柄と斧刃部を直角に装着して加工を主機能とする横斧に分類できる。また刃部には両刃と片刃の別があり、両刃が縦斧で大型、片刃が横斧で小型が基本となる。大型と小型の境界が全長10～11cm付近にあることも示されている²⁴⁾。

板伏鉄斧は14遺跡23点が確認できる。時期別では、Ⅲ～Ⅳ期1点(甲田南)、Ⅳ期13点(奈カリ与8、伯母野山3、福本、名古屋山)、Ⅴ期8点(大王山、芝谷、古曾部、亀井、恩智、長法寺谷山、会下山、途中ヶ丘)、採集品で時期不明1点(会下山)²⁵⁾がある。以上のように、Ⅳ期以降の板状鉄斧の増加は明らかである。なお会下山、途中ヶ丘の資料は形態が類似し、いずれもが分析の結果、鑄造品とされ舶載品と考えられる。

板状鉄斧は12点が片刃で、確実に両刃と判明するのは、伯母野山例3、福本例1の計4点であり、加工斧として使用された横斧が多くを占める。伯母野山の2点は長13.9～16.4cmで、太型蛤刃石斧にかわる伐採斧である。第1図から、全長11cm前後で両刃(伐採斧)と片刃(加工斧)が分離できるのであろうが、実際には錆によるふくれで両刃、片刃の別が判明しないことが多く、それによって伐採斧、加工斧を区分することは容易でない。その意味では両刃ではあっても全長7.5cm、刃幅3.1cmの福本例は加工斧、片刃ながら全長10.8cm、刃幅5.6cmの奈カリ与例は伐採斧の可能性が強い。芝谷例は全長19cm、刃幅4.9cmの片刃であり、板状鉄斧においては類例がない。むしろ頭高山等より出土した柱状片刃石斧に形態的に類似するものがある。他の片刃鉄斧は扁平片刃・柱状片刃石斧を模し

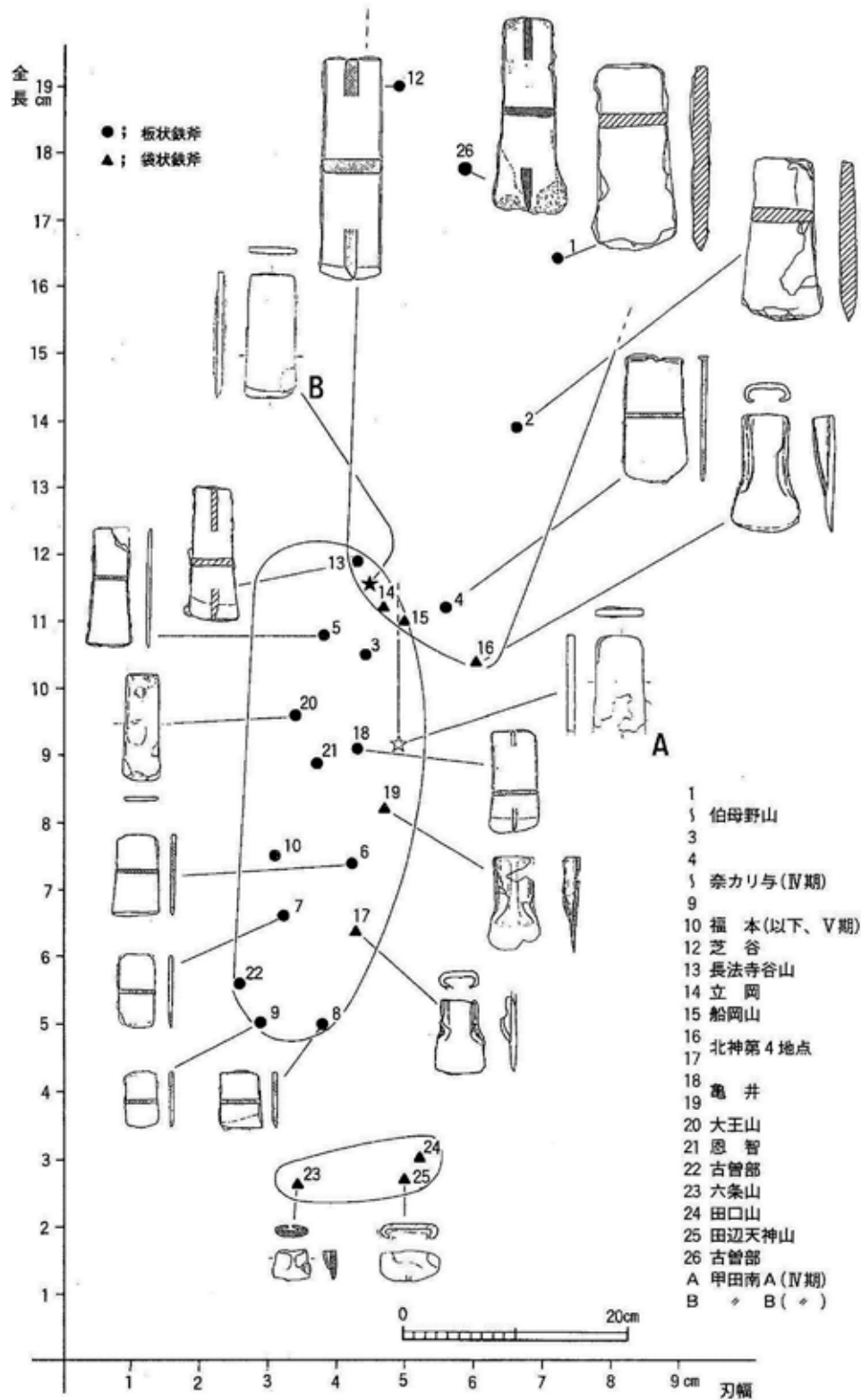


図2 近畿地方出土鉄斧の法量

た加工斧であろう。数少ない資料ではあるが板状鉄斧では、加工斧が多くを占めることが確認できる。

袋伏鉄斧は7遺跡8例が確認できる。時期別では、Ⅲ期1点(新方)、Ⅴ期6点(北神ニュー

タウン2、立岡、亀井、田辺天神山、六条山)、不明1点(田口山)がある。舶載品特有の袋部を丁寧に折かえして密着させる資料は未確認である。参考資料として木製斧柄があり、Ⅲ期新段階1点(玉津田中)、Ⅳ期1点(若江北)、Ⅴ期3点(亀井2、瓜生堂)がある。新方例は鑄造鉄斧、玉津田中の斧柄も鑄造鉄斧用の横斧で舶載品であろう。鉄斧は以下の4分類が可能である。

- A) 蛤刃石斧にかわる伐採斧(伯母野山等)
 - B) 通常の加工斧(板状斧は片刃主体、袋状斧は両刃。鉄斧の多くを占める)
 - C) 大型加工斧(芝谷のみ)
 - D) 小型加工斧(袋状鉄斧は六条山、田口山、田辺天神山の3例。板状鉄斧は名古屋例のみ)
- 伐採斧と加工斧の比率は1:3~4程度と考えられ、加工斧が主体を占める。

6) 鋤・鍬先

長方形鉄板の両端を内側に折り曲げ、木製鋤や鍬に装着し先端に刃をつけた簡単なつくりの鉄器である。

近畿では3遺跡3例が確認できるのみで、京都府田辺天神山遺跡、長法寺谷山遺跡²⁶⁾、兵庫県七日市遺跡の住居より各1点の出土例がある。時期は天神山、長法寺谷山がⅤ期中頃から後半、七日市は庄内期である。全国でも30数点にすぎず、しかも北部九州に集中する。九州以東の例として愛媛県釈迦面山遺跡、岡山県百間川原尾島遺跡、同百間川沢田遺跡と近畿3例がある。出土遺物ばかりでなく木製鋤・鍬も少ないことから、一般的な土木具や農耕具ではないと考えられる。

鉄製鋤・鍬先は、弥生時代から古墳時代後期にまで存在する。法量は弥生時代のものが横幅10~13cm、長4~8cmの範囲におさまり、古墳時代には横幅4~8cm、長3~8cmと小型化する一方で、幅10~17.5cm、長5~10cmの大型品も存在することが指摘されている²⁷⁾。つまり弥生中期末に出現して以来、長方形を呈した鋤・鍬先は、古墳時代に継続する一方、新たに小型正方形に近いグループが出現したものである。現状ではこの二系統が確認でき、古墳時代には後者が主流になる。近畿の事例は、長法寺谷山例が幅9.0cm、長3.8cmで弥生通有の長方形態である。一方、田辺天神山例は幅8.0cm、長7.4cm、七日市例が幅7.3cm、長6.6cmで小型正方形のグループに属する。Ⅴ期中頃の田辺天神山例は、第二系統の初現となる可能性がある。ただ鋤・鍬先の出土した5・6・7号住居覆土には、布留期の土器を含んでおり、混入の可能性もある。

鋤・鍬先は、北部九州以外では数量が極めて少ないことから、北部九州からの流入品と

想定しておきたい。また鉄製の鎌、穂摘具をはじめとする農具も同様であり、北部九州からの流入品の可能性が強い。

7) 刀剣

近畿では庄内期以降、刀剣類が散見できるようになる。海上交通の拠点集落と考えられる大阪府崇禅寺遺跡の素環頭鉄刀以外は、すべて墳墓に伴う副葬品である。一般の集落遺跡からの出土は未確認で、墳墓に集中することは出現の当初から刀剣類が権威的な性格を有することを示している。

崇禅寺遺跡で出土した素環頭鉄刀は、北部九州以外では唯一の例であり、庄内期新相の土坑から出土した。本遺跡は沿岸洲の先端に立地する集落で一般的な農耕集落ではない。河内、吉備、近江や東海・山陰地域の土器が多数出土しており、瀬戸内海の流通ルート上の拠点と考えられる。素環頭鉄刀も流通物資の一つであったことがわかる。

墳墓資料としては、兵庫県白鷺山1号（長29cm）、明神山箱式石棺（復原長25cm）、柿坪3号（長41cm）、西条52号、妙楽寺4A-3号（長25.9cm）、京都府坂野丘2号、田辺遺跡2例（長38cm）、奈良県見田・大沢4号（長21.3cm）、能峠9号（長31.2cm）、和歌山県尾ノ崎方形周溝墓15号等からは鉄剣、兵庫県天王山4号からは鉄刀2が出土している。他に、明神山には鉄刀も共伴したが行方不明である。鉄剣が鉄刀より多く主体である。また、柿坪3号の41cmが最長であるが、他はほとんどが30cm前後の短剣であることが特徴である。

近畿地方では、弥生時代を通じて埋葬施設への副葬は一般的ではない。その開始期を明確にするために、鉄剣副葬以前より連続的に営まれる墳墓の概略を示しておく。

奈良県能峠9号台状墓 庄内期新相（纏向3式）以来、9基の台状墓が造営される。9号は最も新しく布留期前半であり、9号のみに鉄剣と不明鉄器の副葬が認められる。

奈良県見田・大沢4号墳 V期終末（纏向1式）の1号墳には副葬はなく、庄内期（纏向2・3式）の4号墳以降に鉄剣を含む副葬が始まる。布留I期（纏向4式）の3号墳にも鉄剣、鉈を副葬する。

和歌山県尾ノ崎15号方形周溝墓 庄内併行期以降18基の方形周溝墓が造営される。布留期と考えられる15号墓から鉄剣の他、銅鏡、鉈、玉類等多くの副葬品が出土する。庄内期の副葬としては1号墓の碧玉製管玉1、3号墓の銅鏡1、ガラス製小玉2がある。

京都府坂野丘 台状墓に複数の埋葬施設が確認されており、鉄剣を副葬したのはその中で最も新しい時期の第2主体である。後期末とされている。

京都府大山墳墓群 V期前葉から後半の3～8号墓の主体部、10基の周辺埋葬施設より鉄鏃3、鉈8、刀子1が出土するが、鉄剣の出土はない。一定の空白期間を置き、最も新しい布留期の10号墳からは短剣の他、刀子と鉈が副葬される。

兵庫県柿坪中山墳墓群 大山墳墓群と同様の傾向を示す。V期前半あるいは初頭の一部の木棺墓群からは鉈、鉄鏃、ガラス小玉の内の1種類が副葬される。空白期間を置き布留期古相の3号墳（竪穴式石室）に鉄剣、鉄鏃2が副葬される。

以上のように庄内期以降に刀剣類（特に剣）を副葬する墳墓例が増加する。それは、単独の墳墓として出現するばかりでなく、前代から連続的に造営されてきた墳墓群にも、該期になれば鉄剣副葬の始まることは、近畿における鉄剣の副葬開始時期を明確に示している。これらの墳墓資料は一部に時期を決定し得ないものを含むものの、ほぼ庄内期（特に新相）から布留期古相の古墳出現前後に位置付けられよう。

8) その他

概観した器種以外に釣針、鉄環、鉄片があり、鉄片以外は各数点の出土である。なお北部九州では一般的な鉄鎌、穂摘具の農具は、近畿の古墳時代初頭期まにでは確認できず、布留期から出現する。鉄製鋤・鍬先を含め農具類の鉄器化は、弥生時代には進行しない。釣針は、和歌山県亀川（IV期）、兵庫県会下山（V期前半）で各1例がある。九州域に類例は多いが、それ以外の地域では漁撈具の鉄器化は確認できない。北部九州では他にヤス・モリ（長崎県唐神遺跡）、アワビオコシ（佐賀県菜畑遺跡）などにも鉄製品がある。

鉄環は用途不明品であるが、兵庫県会下山例（V期前半）があり、類例は熊本県西弥護免遺跡にある。会下山例が直径2.8～2.6cm、高さ1.0cm、西弥護免例が直径2.8cm、高さ1.1cmであり、ほぼ同様の法量である。

4 まとめ

以上に概観してきたことから、近畿出土の鉄製遺物を以下のように分類することが可能である。また近畿地域における鉄器化の段階についての概略を述べ、まとめとする。

- 1) 流入品（铸造品その他、崇禅寺遺跡の素環頭刀等のように形態から推定し得るもの、極端に出土例の少ない器種等）
- 2) 新機能を有する鉄製品（刀子、鉈など）
- 3) 石器の形態模倣により鉄器化する鉄製品（斧、鏃、ノミなど）

以上の鉄製品の中で、流入品に属するものは数量が極めて少ない。铸造品、素環頭鉄刀

の他にも、鍬・鋤先は3点、終末期の鎌1点、釣針2点の他、穂摘具（近畿では未確認）も含めて、出土例は認められても数量は、北部九州とは比較にならない程に少ない。この分布状況は、北部九州以外のどの地域にも共通しており、刀剣類も含めて、北部九州からの流入品の可能性を想定すべきであろう。終末期に刀剣類²⁸⁾が集中する以外、前期以来散発的な流入を示し、特定の器種を意図的に入手したような状況はない。

新機能を有する鉄器も、今後資料の増加は見込まれるにしても斧、鍬ほどの増加は望めず、やはり主体となり得ないであろう。なおノミ（タガネ）も同様の傾向を示す。

鉄器化の主体が斧、鍬にあることはその数量の多さが示しており、石器の数量にも影響を与える。鉄器に特有の機能を期待したのではなく、石器の機能を鉄器に置き換えることで鉄器化が進行する。このことは斧、鍬の分析を通して近畿における鉄器化の程度を究明することにつながる。ただし鉄器の出土点数の多寡によって、鉄器化を考えるのではなく、共伴する石器に目を向けるべきであるし、石器の減少をストレートに鉄器の普及に結びつけることは難しい。少数の鉄鍬が存在したり、太型蛤刃石斧の激減を鉄器化と見なすには同様の機能を想定し得る鉄斧があまりにも少ない。現状では鉄器、石器の状況から以下のような段階に区分して考えられる。

I 段階（I～III期）

資料点数は極めて少なく、ノミ2（铸造1）、鍬5（铸造1）、斧3（铸造2）、不明品1、鉄滓1の他、刀子2がI期に属する可能性があるにすぎない。铸造品の多さが目立つ。点数の少なさが自然条件のみで語れないのは、鉄器を多く保有する亀井遺跡でもI～III期の資料が木器に残された加工痕跡からの推定でしかない。鉄器自体も、铸造品4点は明らかに搬入品であるし、形態面でも水走の鹿角柄ノミの直線的に先端向かって薄くなる側面観は同時期の石器のノミとは全く異なり、IV期以降の鉄器が石器の模倣によるという点で異なるものである。

一方この時期、北部九州では大陸・半島からの鉄製品が多く流入し、国産鉄器の製作もII期には確実に開始される。近畿で出土する鉄器の多くも、北部九州からの流入の可能性が高いと考えられる。少なくとも鉄斧において北部九州ではIII期に、近畿のV期程度の鉄器化に到達する。なお少数ではあるにしても、中河内でまとまった鉄器の出土が確認できるのは、瀬戸内海の物流ルートによる、より優利な立地条件にあると考えておきたい。

II 段階（IV期）

前段階では一遺跡で複数の鉄器が出土することはまれであったが、本段階では鉄器の点

数が増加、安定する遺跡がある。鉄鏃・鉄斧を中心とした資料数の増加、鉄鏃の形態の地域色と石器の形態との類似等、近畿における鉄器化はⅣ期に石鏃と石斧の形態を模倣することによって始まる。一方次のⅢ段階との相異は、石器の残存の多さにある。鉄器化の主体である鏃、斧も石器を主体としており、その中に鉄器が若干の割合で入り込む状況が確認できる。もちろん、鉄斧の出現によって石斧の構成比率が変化するような、北部九州的な状況が生じたとは考えない。ところで、観音寺山遺跡は石斧組成に新しい傾向²⁹⁾が生じているようであるが、石器主体という点で本段階末に位置付けて考えたい。

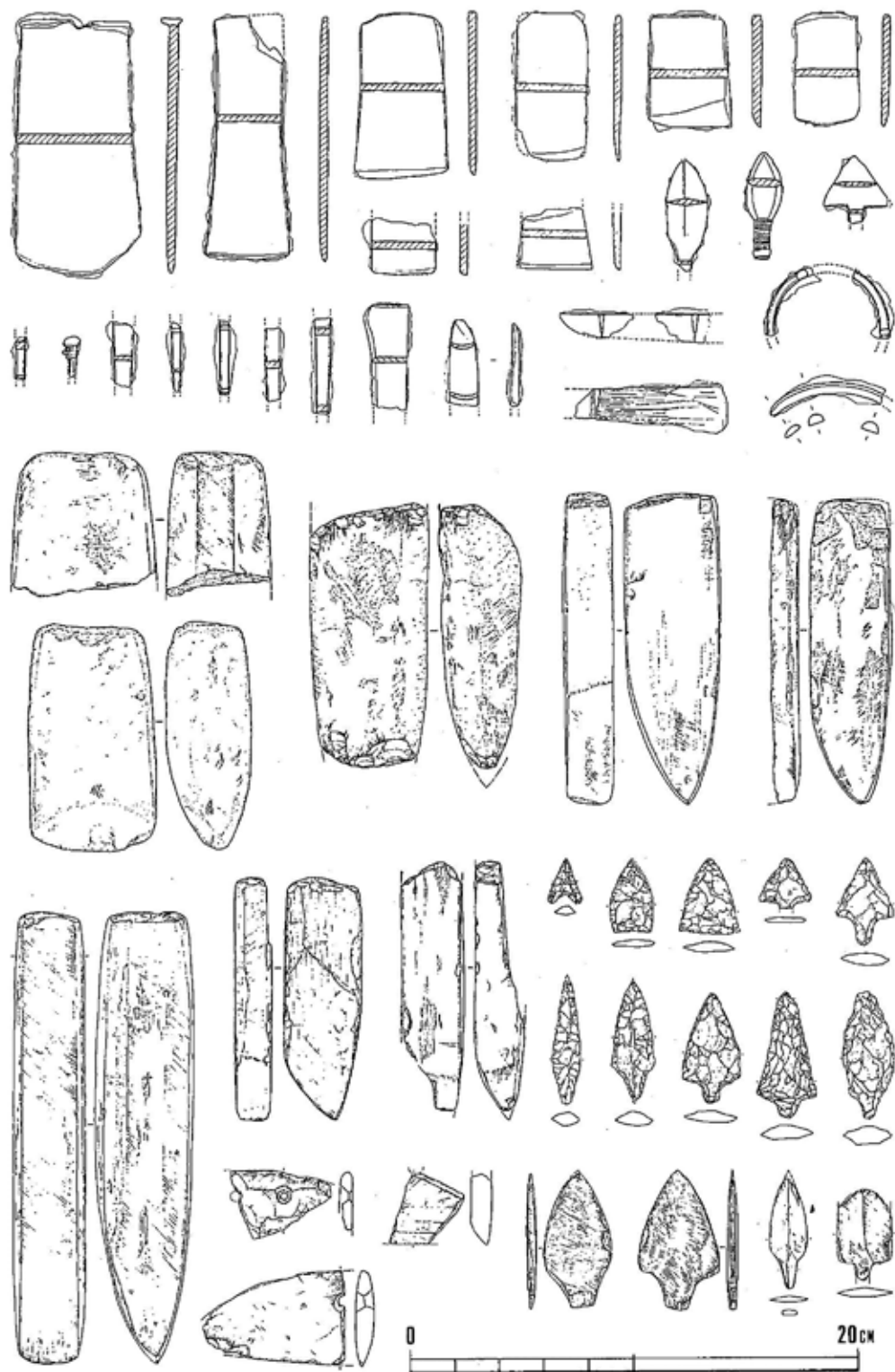
現状では本段階の資料は摂津西部の高地性集落に集中する。低地に比較して、高地性集落における石器総数に占める石鏃の割合が大きく、若干の鉄鏃も含むことが一般的である。鉄器化の一方の主体が武器としての鏃であり、防御製を供えた高地性集落は本段階の鉄器化を促進させたとすれば、それは鉄器化の最先端の実態を示している。また本段階までは遺跡の中で、より優位性を示す遺構に鉄器が集中することも事実で、鉄器が貴重品であったことを示している。

Ⅲ段階（Ⅴ期～庄内期）

鉄器を出土する遺跡数、遺物量が増加する。Ⅴ期の鉄器資料は、多数出現する高地性集

表3 鉄器と石器の共伴状況

遺跡名	鉄斧	鉄鏃	刀子	その他・鉄器	石斧			砥石	石包丁	その他・石器		
					太	柱	扁					
奈カリ与(Ⅳ)	8	3	1	1?	環2、鉄片9	3	8	68	14	5	他に多数	
伯母野山	3	1			不明2	4	15	3	46	6	4	環状石斧、他多数
頭高山		2	1	2?	不明7	1	4	56	5			他に多数
北神第4	2	1				有	有	有	有	有		"石器製作所"も有
観音寺山		3		1		5	4	1	63	多数	5	
会下山(Ⅴ)	1	4	3		ノミ1、釣針1、 環1、棒状5、鉄片4		1	19	22			サヌカイト片199
大王山	1							3	1			
橋谷(山頂)		1						3	1	1		凹石、投弾、剝片等
滝ヶ峰					不明鉄器1			2	1	2		" " 磨石等
東山			2?					29	13	2		他に多数
田辺天神山	1	3		2	鋤・鍛先1	2	1	2	10	3		不定形刃器4
長法寺谷山	1				鋤・鍛先1			2	多数			丸石1
大師山		1						1	3			
大森谷					不明1、鉄片1	1		2	2			
鷹塚山		2			不明10			1	5			他にフレイク
紅葺山		2	1			1			4			磨石2
北田井(庄)						1					1	刃器、石錘等
栄根(庄)						1						
長越(庄・布)												小型石斧1

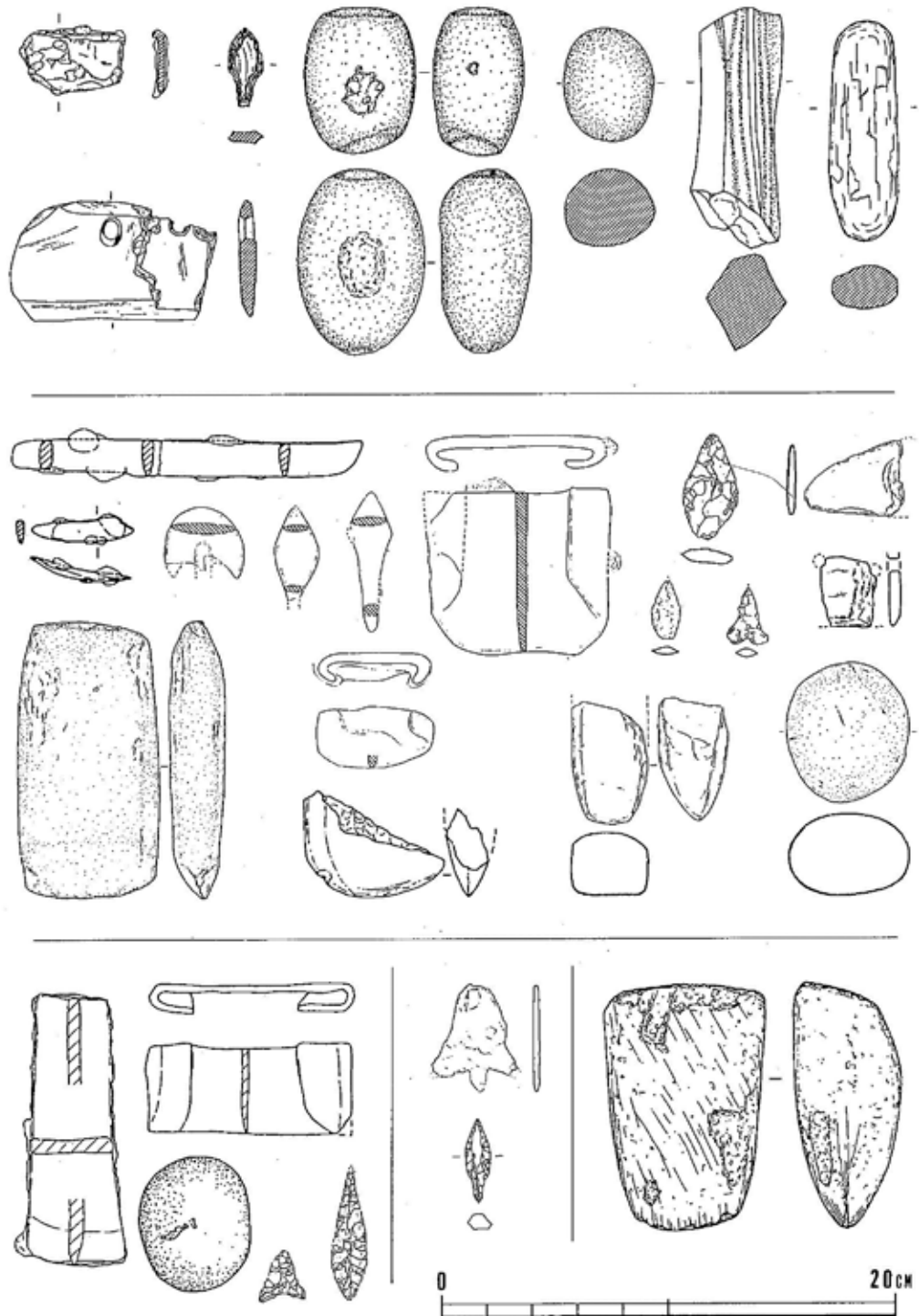


石器は、他に柱状片刃3、磨製石鏃2、打製石鏃52、石包丁2、砥石14、その他358点

図3 II段階の鉄器・石器の伴出状況（奈カリ与遺跡）

落からの出土品である。この状況は自然条件のみで理解すべきではなく、本段階前半における低地性集落は消滅あるいは衰退傾向も大きな理由である。その点ではII段階に続いて、本段階はV期を中心にした高地性集落主導の鉄器化の段階と言える。

石器としては、砥石は増加し石包丁は継続して作られる。ただIV期以降、石包丁の不足は部分的に木器（木製穂摘具）に置きかわる。北部九州では、V期後半から終末にかけて鉄製穂摘具が出土するが、近畿では庄内期を含めても農具の鉄器化は確認できない。本段



上段：和歌山県滝ヶ峰遺跡 他に石鏃1、石包丁1 中段：京都府田辺天神山遺跡 他に砥石10、石包丁1等
 下段左：京都府長法寺谷山遺跡 他に砥石多数
 下段中：大阪府大師山遺跡 他に石皿2、砥石3 下段右：兵庫県栄根遺跡 庄内期前後の蛤刃石斧

図4 III段階の鉄器・石器の伴出状況

階において石斧、石鏃を主体とした石器類の著しい減少があるも消滅には至らない。

鉄鏃の出土する遺跡では確実に石鏃も伴出しており、この状況はV期末まで続く。しかしその割合は、II段階が石鏃45～65に対して、鉄鏃1～3であった状況とは格段の違いがある。その一方で、V期前半～中頃にかけては石鏃が多くを占める遺跡（会下山遺跡、東山遺跡ほか）も存在するし、鉄器を有しない遺跡も存在するから一律でない。V期段階では、鏃においては鉄器化を指向しつつも、銅鏃、石鏃で補完した状況が認められ、地域・遺跡ごとの差異も著しい。石斧はII段階と比較すれば著しい減少傾向が確認できるが、一方ではI期以来の石斧の変質も看過し得ない。すなわち、I期以来の石器の中で占める割合の低下すること、前・中期初頭では蛤刃主体であったに対して、中期中頃～末には片刃類の加工斧主体となること、大型重厚な太型蛤刃石斧の消滅すること、太型蛤刃石斧に扁平なものが散見することがある。以上がIV期までに認められる石斧の動向であり、石斧減少の原因を鉄器化にのみもとめることは難しく、石斧自体の変質と考えたい。ましてV期に石斧が減少する背後に中期程度の数量の鉄斧を想定することは難しく、また扁平で小型化した蛤刃石斧を鉄斧の出現による形骸化と評価することにも首向できない。

最後に石斧と鉄斧のあり方から鉄器化について述べる。本段階には、石斧は少数の太型蛤刃（伐採斧）が存在し、加工石斧は柱状片刃石斧が数点しか確認できず、IV期の加工石斧主体の組成に変化が認められる。一方、鉄斧は大部分が加工斧であり、石斧と鉄斧の組成が異なることになる。資料数は少ないが、V期には鉄斧は加工用、石斧は伐採用に主に使用されたと考えたい。北部九州ではすでにIII期に、鉄斧の出現による石斧組成の変化が示されている³⁰⁾。近畿での鉄器化の遅れは歴然としており、本段階に至って鉄斧の増加により石斧組成に変化が顕われたとしたい。

「石器の減少＝鉄器の普及」と理解することは誤りでないにしても、近畿における鉄器化を実態以上に過大評価しているのではないかと感じている。鉄生産の技術がなく、鉄器あるいは鉄素材を半島・大陸に求めざるを得ない我国にとって、一定の鉄器化は認めつつも、潤沢に鉄器が存在したような社会ではない。弥生時代において、鉄器の保有数量に関しては、北部九州と近畿を含むそれ以外の諸地域との間に、著しい格差がある。この理由は、半島・大陸との物資流通ルートの窓口となりえた北部九州の立地の優位性から説明できる。鉄を含む半島・大陸からの物資を掌握・独占したのは、北部九州の伊都国や奴国の領域で確認されている王墓の被葬者達であろう。近畿における鉄器の普及は、瀬戸内海を貫通する新たな物資流通ルートが出現し、王墓が大和に築造されるようになる古墳時代

前期を待たねばならない。鉄器という考古資料を正しく位置付けるには、鉄器・石器それ自体の検討は勿論であろうし、各地域での集落遺跡の動向などを無視できないと考えており、それらの基礎的・総合的な検討を経ることによって明らかになると考える。

註

- 1 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第3号 1967
- 2 川越哲志「弥生時代鉄製工具の研究Ⅰ」『広島大学文学部紀要』33 1975、「弥生時代の鉄製収穫具について」『考古論集』1977、「弥生時代の鑄造鉄斧をめぐって」『考古学雑誌』第65巻第4号 1960、「弥生時代の鉄刃農耕具」『日本製鉄史論集』1983、「弥生時代農耕具鉄器化の諸段階」『たたら研究』26 1984、「鉄器の生産」『弥生文化の研究』5 1985ほか。
- 3 橋口達也「初期鉄製品をめぐる二・三の問題—福岡県吉ヶ浦遺跡出土の鉄器を中心に—」『考古学雑誌』第60巻第1号 1974、「ふたたび初期鉄製品をめぐる二・三の問題について」『日本製鉄史論集』1983等。
- 4 潮見浩『東アジアの初期鉄器文化』1982、「鉄・鉄器の生産」『日本考古学』3 1986
- 5 松井和幸「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐる」『考古学雑誌』第68巻2号 1982
- 6 大村直「弥生時代における鉄鋸の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第3号 1983、「石鋸・銅鋸・鉄鋸」『史館』17 1984
- 7 磨製石斧の使用がV期で消滅する遺跡として大阪府池上遺跡、同 四ツ池遺跡、兵庫県加茂遺跡が示されている(川越哲志「弥生時代鉄製工具の研究Ⅰ」『広島大学文学部紀要』33 1975の182頁)。その結果として、これらの遺跡ではすでに鉄器化が達成されたと推定されるのである。しかし実際には、V期になれば加茂遺跡は空白期間をむかえ、池上遺跡と四ツ池遺跡ではV期前半は遺物量は微量で、再度V期後半に遺物量はやや回復する。ただし後者であっても、遺構は井戸が主体となり遺跡自体の性格が大きく変化 することにも注意が必要である。このような低地性集落の消滅、衰退はV期には一般的に認められることであり、鉄器化の時期とも重なっており、実態がわかりにくくなっている。
- 8 関西大学考古学研究室調査の山頂部と和歌山市教育委員会調査の山裾部があり、鉄器の出土したのは山頂部である(関西大学考古学研究室『橘谷遺跡発掘調査現地説明会資料(3次)』1978、同『和歌山市橘谷遺跡Ⅳ次発掘調査概要』1979)。
- 9 同様に伐採斧が残り石鋸が消滅している事例として、摂津北部の紅葺山遺跡(V期末)、摂津西部の栄根遺跡(V期末～庄内期)でも確認できる。
- 10 弥生前期の土坑の出土資料。「遺構内の上部の埋土内にあったため、弥生前期の確実な資料として扱うことを保留」すべきとの批判がある(森浩一、炭田知子「考古学から見た鉄」『鉄』1974)。

- 11 大阪文化財センター『亀井・城山』1980、同『亀井遺跡』1982、同『亀井』1983、同『亀井遺跡Ⅱ』1984、同『亀井（その2）』1986
- 12 第1表の時期は『亀井（その2）』の土器編年（259頁）による。後期1はV期前半、後期1と2の間に空白期間があり、後期2以降は後半に相当する。
- 13 註10と同様に炭田氏の批判がある。
- 14 奈良県立橿原考古学研究所『見田・大沢古墳群』1982、147頁
- 15 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』1980の170頁
- 16 川越哲志「弥生時代の鑄造鉄斧をめぐって」『考古学雑誌』第65巻第4号 1980
- 17 兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡』第6分冊 1996
- 18 報告内容とは若干異なる（芦屋市教育委員会『会下山遺跡』1964）。実見による筆者の認識を示す。本遺跡では中期後半も存在するが、鉄器の集中する中央尾根はV期主体である。
- 19 銅鐸製作にかかわるタガネの使用例として兵庫県桜ヶ丘出土銅鐸で明らかにされている。14鐸出土のうち、3・4・6・7号の銅鐸にタガネ痕が残る。鑄かけ部の文様の線刻は別にしても、3・7号鐸では据部型持孔を整え、4号鐸では据部器壁の厚みを均一にし、6号鐸では据部底縁を水平にしさらに鈕の縁部では湯バリを削除する作業に使用する。タガネは湯バリを主にした不用部分の削除、器壁の調整に使用された（兵庫県教育委員会『桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書』1969）。
- 20 飯田市教育委員会『恒川遺跡群』1986
- 21 岡村秀典「D、刀子」『弥生文化の研究』5 1985
- 22 岡村秀典「C、鉈」『弥生文化の研究』5 1985
- 23 奈カリ与遺跡では鑿頭式鉄鎌1点が出土している（兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』1983）。しかし古墳時代後期以降の遺物も含む包含層出土であり除外した。庄内期新相の高知県林田遺跡に鑿頭式鉄鎌の事例がある（土佐山田町教育委員会『林田遺跡』1985）。
- 24 岡村秀典「A、斧」『弥生文化の研究』5 1985
- 25 松井雅司「東斜面採集の板状鉄斧欠片について」『芦の芽』32 1979
- 26 長岡京市埋蔵文化財センター『長法寺谷山遺跡現地説明会資料』1986
- 27 松井和幸「日本古代の鉄製鋤先、鋤先について」『考古学雑誌』第72巻第3号 1982
- 28 鉄剣形磨製石剣の存在から、中期中葉以降に「実用利器としての鉄剣が広く分布した」とする見解がある（清水真一「鉄剣形磨製石剣・研究ノート」『桜井市金屋・三輪遺跡 北ノ方地区発掘調査報告書』桜井市教育委員会 1987）。IV期以降、近畿では磨製石剣が散見される。例えば播磨の明石川水系では磨製石剣が集中して出土する。一方、多数の丘陵上の遺跡から鉄剣の出土はなく、近畿においては、石剣と鉄剣は切り離して考えるべきであろう。近畿においては、終末期以前に鉄剣が広く分布した状況はない。

- 29 IV期の石斧は加工斧主体で伐採斧が少い。V期にはほとんど石斧は残らないが、扁平化した伐採斧が残る。観音寺山遺跡での石斧は伐採斧・加工斧が各5点出土し、中間的な様相と考える。
- 30 下條信行「2. 伐採石斧（太型蛤刃石斧）」『弥生文化の研究』5 1985

第2節 甲田南遺跡出土の鉄斧について

1 はじめに

大阪府富田林市に所在する甲田南遺跡の発掘調査において、弥生時代中期の板状鉄斧2点が出土している。1点は大阪府教育委員会による国道309号線バイパス建設に伴う昭和59年度の調査であり、他の1点は富田林市教育委員会による個人住宅建設をに伴う平成5年度の調査においてである。筆者は、前者については(財)元興寺文化財研究所在職時に保存処理を担当し、後者については富田林市教育委員会のご厚意によって観察する機会を得たのでここに報告し、その考古学的な位置付けについて述べる。

2 甲田南遺跡出土の板状鉄斧(図1)

ここでは、大阪府教育委員会の調査で出土した資料を「甲田南鉄斧A」、富田林市教育委員会の調査で出土した資料を「甲田南鉄斧B」として以下に報告する。

甲田南鉄斧A 刃部側は欠損しており、全長は不明である。法量は残存長9.0cm、頭部幅(復元)4.2cm、身部幅4.5~4.6cm、刃部側の残存最大幅4.9cm。厚さについては錆化のため確実ではないが、復元すれば周縁部分が0.7cm、身部中央で0.1~0.2cm程度増加する。甲田南鉄斧Bよりも若干重量感がある。平面形態は、隅丸の頭部と身部中央付近から刃部に向かって若干バチ状に広がっており、木柄に装着した際に鉄斧の固定を強固に

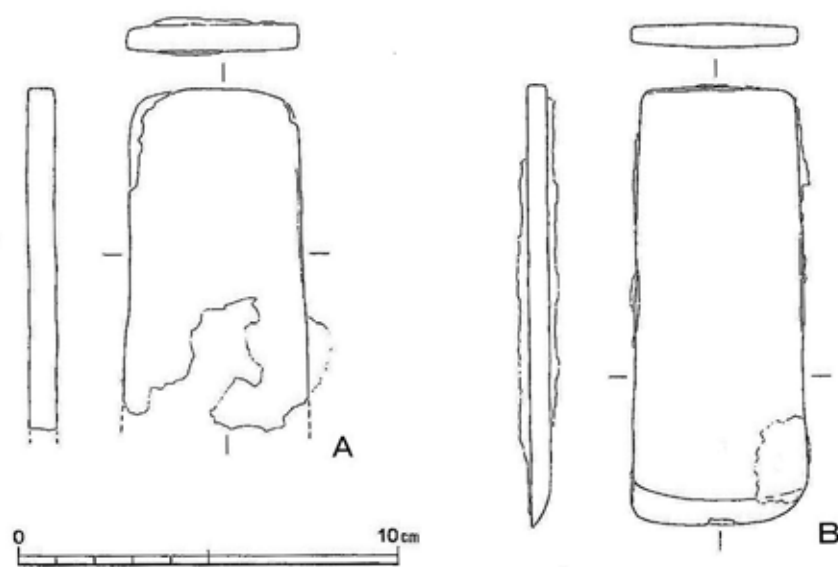


図1 甲田南遺跡出土の板状鉄斧

する工夫と考えられる。刃部の欠損により加工斧か伐採斧かの区別は難しい。

遺物は表面に限って層状剥離を生じており、鍛造品と考えることが自然であるが、その一方で刃部側はブロック状に割れており鑄造品的で

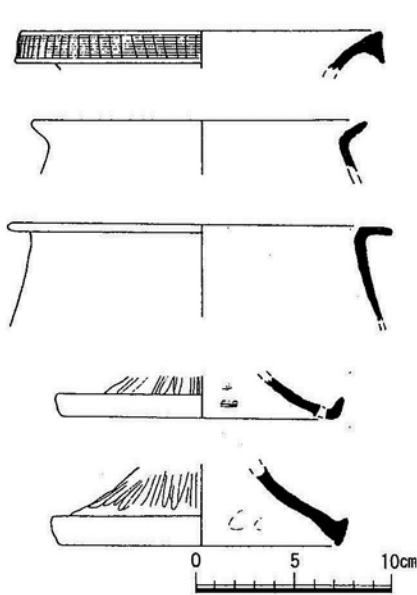


図2 甲田南鉄斧Aの共伴遺物

奇異にかんじる。それについては、「化学分析からみるとC量が3.27%もあり、明らかに鑄鉄である。」とする日立金属株式会社安来工場冶金研究所の分析結果とも符合する。

甲田南鉄斧B 完存品。法量は全長11.5cm、頭部幅4.1cm、身部中央の幅4.5cm、刃部幅4.6cmである。厚さは周縁部分が0.4cm、身部中央付近で0.55～0.60cm程度でいくぶんレンズ状を示している。平面形態は頭部から刃部に向かって若干広がるが、甲田南鉄斧Aほどにはバチ状は呈さない。刃部の平面形態は図の右側がより大きく研ぎ減っており、側面形態は極めて明瞭な刃部で表面（平面図裏面）は全くの平坦である。片刃であり、近畿地方出土鉄斧の法量分布（第3図）の状況からいくぶん大型の加工斧と判断される。

甲田南鉄斧Aと同様表面に限って薄皮1枚の層状剥離を生じており、本来極めて良質な鉄斧であったと推定できる。サビ取り前にエックス線撮影を行なったが、特別な状況は観察されなかった。科学的分析はなし。

以上、2点の鉄斧はいずれも竪穴住居址から出土しており、土器も共伴している。にもかかわらず、その位置付けについては、かならずしも明確ではない。それは共伴する土器が少量で、しかも細片であるために指標となる壺形土器の器形が不明確なことにつきる。図2は、甲田南鉄斧Aの共伴土器である。従来、この土器は「第三～IV期」として報告されてきた資料であるが、近年の土器編年から壺形土器口縁部の櫛描簾状文の単位、高杯脚部の形状等から第IV期前半の中であらえておきたい。甲田南鉄斧Bについてもこの報告の中で同様の位置付けがなされている。

3 まとめ

近畿地域での明確に弥生時代に属する鉄斧出土例は必ずしも多くない（第1表参照）。鑄造鉄斧を除外すれば、第IV期で7遺跡18例（内、袋状が1遺跡2例）、第V期で11遺跡13例（内、袋状が4遺跡4例）である。少数のため明言は避けねばならないが、中期後半から後期にかけて出土する遺跡の増加は認められそうである。袋状鉄斧は木製斧柄の増加からも、やはり中期後半から後期にかけて増加する。図3からもわかるように、一

府県名	時期 / I~III期	IV 期	V期 (前半)	同 (中頃)	同 (後半)
兵庫(板状)		奈カリ与(8) 伯母野山(3)----- 福本(1) 名古屋(1)		会下山(鑄・1)	
(袋状)	新方(鑄・1) 参・玉津田中(木柄・1) (鑄造鉄斧用?)	北神第4地点(2)			立岡(1)---
京阪(板状)	扇谷(鑄・1)---	--神足(1)---		途中ヶ丘(鑄・1)-----	長法寺谷山(1)
(袋状)					田辺天神山(1)
滋賀(袋状)					参・服部(木柄・1)
大阪(板状)		甲田南(2)	芝谷(1) 古曾部(2)		彼方(1)
(袋状)			恩智(1) 亀井(1)		亀井(1) 参・瓜生堂(木柄・1)
奈良(板状)		参・若江北(木柄・1)	参・亀井(木柄・2)		
(袋状)			大王山(1) -----唐古(1)-----		六条山(1)

※表中の(板状)は板状鉄斧、(袋状)は袋状鉄斧を示す。また、「鑄」は鑄造品、「参」は参考資料としての木製鉄斧柄である。一部に庄内併行期の資料を含む。

図3 近畿の弥生時代鉄斧の時期別一覧

部の鑄造鉄斧以外は近畿地域への鉄斧の流入は第IV期以降であり、甲田南遺跡の板状鉄斧は初期の資料である。

機能的には、木柄と鉄斧刃部を平行に装着して伐採を主機能とする縦斧と、斧刃部を直角に装着して加工を主機能とする横斧に分類される。また刃部には両刃と片刃があり、通常縦斧は両刃で大型品、横斧は片刃で小型品になる。近畿の弥生時代鉄斧では、縦斧と横斧の分離が全長10～11cm付近(本章第1節図2参照)にある。鉄斧Bは全長11.5cm、片刃で若干大型の加工斧と考えられる。鉄斧Aについては、鉄斧Bよりも若干大きくなりそうで、伐採斧の範囲に入る可能性がある。

以上の検討から、近畿地方の弥生時代鉄斧における甲田南鉄斧A、Bの占める位置については下記のようにまとめたい。

1. 時期的には弥生時代中期後半(第IV期前半)に属しており、近畿地域出土の板状鉄斧としては最も古い一群に属する。ただし当初第III-IV期とされていたように、その共伴する土器の編年的位置付けともからめてより明確にされねばならない。
2. 甲田南鉄斧Bについては片刃であること、その法量から加工斧として使用されたと考えられる。甲田南鉄斧Aについては刃部側が破損しているために不明である。甲田南鉄斧Bに比べてよりバチ状を呈しやや厚みもあり、伐採斧としての可能性がある。

観察所見で述べてきたように、2点の鉄斧は外観的には明瞭な稜線を形成する丁寧な造

りであるとともに、バチ形の平面形やレンズ状の断面形に造ることで木柄へのより強固な装着を目的に造られている。またブロック状に破損する状況、さらに化学分析からも「鑄造品」の可能性が高い。これらの特徴は、他の鉄斧にはみられないもので、極めて良質な鉄斧であることがわかる。鑄造品ならば、北部九州で出土する多数の事例のように大陸・半島産の鑄造鉄器の破損品を再利用したとも考えられるが、その痕跡は確認出来ず、むしろ製品そのものがもたらされた可能性も想定しておきたい。甲田南の鉄斧は、日本に鉄器がもたらされる初期段階の状況を示す資料として位置付けることができる。

註

- 1 大阪府教育委員会『甲田南遺跡発掘調査概要・V』1985.3 本概要には、甲田南鉄斧Bの分析結果が掲載されている（清水欣吾「付1 甲田南遺跡Ⅲ区4-A住居跡出土鉄斧の化学分析」日立金属株式会社安来工場冶金研究所）。
- 2 富田林市教育委員会の中辻亘氏、粟田薫氏のお世話になった。また、甲田南鉄斧Bの錆取りについては、置田雅昭氏、桑原久男氏のご厚意により、天理大学考古学研究室のエックス線装置と保存処理施設を使用させていただいた。
- 3 註1の文献。甲田南鉄斧Aの分析結果では、「C量が3.27%もあり、明らかに鑄鉄である」としつつ、顕微鏡組織観察とエックス線透過試験などから「むしろ部分的に炭素量の異なった鍛鋼である可能性が強い」とされている。また出土状況から「炭素量3.27%は外部からの有機質などの侵入によって変化した」とも判断されている。妥当な判断と考えるが、甲田南鉄斧Bも外観は同様の状況である。今後何らかの炭素処理がなされたのではないかなども含めて検討されねばならない。
- 4 寺沢薫・森井貞雄「1河内地域」『弥生土器の様式と編年I』木耳社1986.6

第3節 大阪湾沿岸地域における鉄器化について

1 はじめに

第1節では、近畿における鉄器化を過大評価する現状を批判し、近畿では第V期に石斧と石鏃が鉄器化に向うことは認めつつも、北部九州の鉄器化とは大きな差異のあることを述べた。その後、資料の増加はあるも、その結論に大きな変更はないと考えるが、研究の進展と発掘調査における新知見として、いくつかのことが判明している。本節では、以下の3点の新知見に立脚して、古墳時代初頭期における鉄器化について述べる。

1) 鑄造鉄器の再加工品 弥生時代前期、中期を主体にしつつ、一部後期まで認められた鑄造鉄器が、製品の破損品・破片を研磨して作られた再加工品（以下、破片再加工品）であることが判明¹⁾した。大陸・半島から鑄造鉄器の破片が鉄器素材として搬入された場合、または日本に搬入された鉄斧を主体とする鑄造鉄器が使用により破損し、それが鉄器素材として各地に流通したことがある。両者の場合が考えられ、日本側の流通窓口は北部九州である。鑄造鉄斧と破片再加工品の出土数量から、北部九州で多くの鑄造鉄斧が使用され、その破損品が諸地域に流通し、再加工されたと考えられる。近畿では大阪府鬼虎川遺跡のノミと鉄鏃が破片再加工品であり、兵庫県会下山遺跡の鑄造鉄斧、京都府途中ヶ丘遺跡の鑄造鉄斧もその可能性がある。鑄造鉄斧の製品も流通するが、その数量は少なく、近畿では兵庫県明石側流域の新方遺跡と玉津田中遺跡（木製の斧柄）が西限である。

2) 三角形鉄片 弥生時代後期、熊本県や大分県などの九州の周辺地域で、多数の小鉄片が出土する集落遺跡が確認された。小鉄片は、三角形を主体にして板状、棒状、不定形などで構成される。近畿でも大阪府星ヶ丘遺跡²⁾、同 鷹塚山遺跡³⁾、和歌山県西田井遺跡⁴⁾で同様の小鉄片が確認された。当初、それら小鉄片は鉄素材と考えられ、貴重な鉄を廃棄するほどに鉄素材が潤沢に流通していたと理解された。しかしその後の研究で、小鉄片は鉄鏃などを製作する過程で生じた端切れであり、当時の日本にはそれら小鉄片を再利用する鍛冶技術がないために廃棄したものであることが明らかになった。

3) 高度な鍛冶関連技術 古墳時代前期の集落遺跡で鍛冶関連遺物が出土すると共に、鍛冶炉の確認事例も増加した。鍛冶関連遺物とはフイゴ羽口、鉄滓、鍛造剥片、粒状滓、砥石などである。福岡県博多遺跡⁵⁾において、わが国で最古段階の鍛冶関連遺物が出土し、その技術内容が明らかになった。近畿でも同様の事例が確認されており、奈良県纏向遺跡⁶⁾

のフイゴ羽口、鉄滓、砥石、大阪府穂積遺跡⁷⁾のフイゴ羽口、京都府中海道遺跡⁸⁾の鉄滓、砥石、鍛造剥片がある。同様の鍛冶技術がどの程度に拡散したのかは残された課題であるが、この段階になれば北部九州以外の地域でも多数の鉄器を保有する集落が散見されるようになる。岡山県津寺遺跡⁹⁾もその一つで、多数の住居跡から鉄器が出土している。

本稿では上記の新たに判明した点をふまえ、まず大阪湾沿岸地域の資料を概観して実態の確認をおこなう。また第Ⅴ期終末から布留期初頭の鉄器化の進展について、集落遺跡の動向からの視点で述べることにする。

2 大阪湾沿岸地域の鉄器化

近畿において、遺跡単位で鉄器化の分析をできる事例は少ない。あえて言えば、兵庫県奈カリ与遺跡（Ⅳ期）、大阪府古曾部・芝谷遺跡（Ⅴ期初頭）、兵庫県会下山遺跡（Ⅴ期中頃）程度にすぎない。そこで表1により、大阪湾沿岸地域を総体として概観する。

1) 弥生第Ⅰ～Ⅲ期 出土する鉄器の数量は極めて少なく、鑄造品の占める割合が高い。兵庫県新方遺跡の鑄造鉄斧と玉津田中遺跡の鑄造鉄斧柄（鉄斧は未確認）は、大陸からの製品が半島、北部九州を仲介して持ち込まれた事例である。しかし近畿での鑄造鉄器の搬入は、明石川流域を西限としており普遍的ではない。大阪府水走遺跡の鑄造鉄器のノミと鉄鏃は、第Ⅳ期以降には見られない高度な技術で作られた優品と評価されてきたが、破片再加工品であることが判明した。本段階、その他の鉄器も科学的な分析が進めば、破片加工品が多く含まれると考えられる。本段階では半島でも鉄生産は始まっておらず、鉄・鉄器の搬入は一般的ではなく、形態も破片の形に左右されるので定型化しない。

2) 弥生第Ⅳ期 鉄器は急激に増加し、多数を保有する遺跡も出現する。巨視的に見れば、兵庫県の播磨と摂津西部から大阪府の中河内にかけての地域に鉄器の出土が集中する。いっぽう、より内陸になる大阪府の摂津東部から京都府、奈良県、滋賀県や海岸沿いであっても遠隔の和歌山県では少数か皆無に近い状況を示す。物資の流通ルート上にある地域に少数ながら鉄器の分布が確認できる。ただし前者であっても、第Ⅴ期以降との差は石器の多さにあり、あくまで石器主体の中に鉄器が若干入りこむ分布状況である。北部九州では第Ⅲ期に鉄斧の増加により、石斧の構成比率が変化¹⁰⁾することが指摘されている。近畿では兵庫県奈カリ与遺跡が嚆矢となる可能性があるが、北部九州に比べて鉄器化は遅れ、両者の構成比率に変化が顕われるのは第Ⅴ期以降である。

鉄鏃の形態から本段階以降に地域内で、鉄器生産が行なわれたことがわかる。第Ⅳ期以

降に鉄鏃は柳葉式と有茎三角形式を主体とするが、ことに後者は近畿を中心に分布する形式であり、第Ⅴ期以降に深い逆刺を有する有茎腸袂三角形式へと系統的にたどれるからである。鉄斧は板状鉄斧 15 点に対し、袋状鉄斧 3 点（大阪府若江北遺跡の木柄含む）で、前者が多いのは磨製石器から鉄器化する近畿の地域性と理解できる。鑄造鉄器の破片再加工品も継続する。石鏃と石斧が鉄器化の主体であり、ノミ、刀子、鉋の工具類は少ない。近畿では、石器の機能を鉄器が肩代わりする形で鉄器化が進行する。一方、北部九州では散見する穂摘み具、鎌、鋤・鍬先などの農具の鉄器化は確認できない。

3) 弥生第Ⅴ期 弥生時代前期以来、平野部で営まれてきた集落遺跡が衰退・消滅し、高地性集落が出現する変革期である。それに伴って石器は激減し、鉄器を出土する遺跡数は、高地性集落を中心に確実に増加する。しかし一部の遺跡を除いてほとんどが単体～数点の出土であって、鉄器資料だけでは第Ⅴ期の中に変革期を見出だせない。第Ⅴ期初頭から前半にかけて鉄器保有の実態を示す事例として、大阪府古曾部・芝谷遺跡、同 観音寺山遺跡などの巨大高地性集落の資料がある。

古曾部・芝谷遺跡¹¹⁾は、摂津東部の拠点集落である安満遺跡の人々が営んだ集住型の高地性集落である。安満遺跡での鉄器は未確認で、古曾部・芝谷遺跡では住居址ごとに少数とはいえ鉄器の保有が確認できる。鉄器は鉄鏃 4 点、板状鉄斧 5 点、鉋 2 点、刀子 2 点、用途不明 4 点の合計 17 点である。いっぽうで石器は打製石器、磨製石器、礫石器、砥石があわせて 184 点であるが、礫石器・砥石で半数以上（叩き石 17 点、砥石 88 点）を占める。武器類は打製石鏃 15 点、磨製石鏃 8 点、尖頭器 2 点である。打製石器の石材は、金山産サヌカイト 1 点以外は、二上山産サヌカイトであり、住居から剥片や未製品が出土することから、集落内での石器製作も確認できる。伐採・加工具の斧類は太型蛤刃石斧 10 点、柱状片刃石斧 6 点、扁平片刃石斧 4 点である。他に収穫具である磨製石庖丁 15 点があり、石材は緑色片岩 2 点、近江産の粘板岩 13 点である。後者内の 3 点は粗割状態の未製品で、石材は一部で中期と同様に流通し、集落内で生産が行われていたことがわかる。

観音寺山遺跡¹²⁾は、約 4 Km 程度離れているとはいえ拠点集落の池上・曾根遺跡の衰退に伴って出現すると考えられる集住型の高地性集落である。竪穴住居 14 棟から鉄鏃、鉄斧、刀子や板状、棒・針状の鉄器が出土した。いっぽうで多数の石器も出土しており、道具類だけでも打製石器、磨製石器、礫石器、砥石があわせて 278 点である。他にもサヌカイト剥片 380 点、石核 19 点が出土しており石器生産を行ったことも確かである。中でも重要なのが武器である石鏃 70 点と中型尖頭器 31 点、および伐採斧である蛤刃石斧 4 点、

加工斧である柱状石斧4点と扁平石斧1点の出土である。

両者は同時期でそれぞれの地域で中核となった集住型高地性集落であるにもかかわらず、石器と鉄器のあり方において、共通点とともに大きな差異も確認できる。いくらかの数量の鉄器が持ち込まれたものの、石器のあり方が全く異なるなっており、地域・集落によって一様ではないことを示している。鉄器化の主体である鉄斧と鉄鏃において、出土数量には大きな差はない。また石斧において、伐採斧と加工斧がほぼ同じ割合で残存することも同じである。いっぽうで、観音寺山遺跡における多数の石鏃と尖頭器の出土は重要である。尖頭器を含む石鏃は、最初に鉄器化が進行していく機種であり、観音寺山遺跡の石器は弥生中期高地性集落の状況そのものである。流通した鉄器・鉄器素材だけでは、必要な武器類の確保ができなかったことを示している。両遺跡共に集落内での石器製作が確認され、また弥生時代中期と同様に二上山産サヌカイトや紀伊産緑色片岩・近江産粘板岩の石器石材を確保する経路も存在していたことがわかる。流通する鉄器の数量は増加するものの、鉄器だけでは必要数量をまかなえるものではなく、それを補うため中期的な石器製作と石材流通網の残存・併存する社会であったことがわかる。

4) 庄内・布留期 大阪府星ヶ丘遺跡、和歌山県西田井遺跡での多数の鉄片が出土し、大阪府穂積遺跡、奈良県纏向遺跡、京都府中海道遺跡で鍛冶関連遺物の出土が認められる。前者から鉄器素材搬入の増加を、後者から最先端の鉄器製作技術が伝わったことがわかる。なお星ヶ丘遺跡は、弥生後期後半あるいは終末に位置付けられているが、所在する枚方市は土器様式に庄内式を含まない伝統的第Ⅴ様式の地域であり、資料の時期的位置付けは大きな課題となることは明記しておく。

出土資料では、弥生第Ⅳ・Ⅴ期にひき続き、鉄鏃と鉄斧が鉄器化の主体であるが、ノミ、刀子、鉈の工具類も増加する。いっぽうで穂摘み具、鎌、鋤・鍬先の農具類は数点の出土にとどまり、鉄器化には向かわない。

3 まとめ

最後に、本章第1・2節では述べなかった古墳時代初頭・前期の鉄器化について記し、まとめとする。先に述べたように弥生時代以来、近畿への鉄器の流入・鉄器化の進展と集落の動向には一定の一致点を見出だすことができる。近畿の鉄・鉄器研究にとっては、はじめに指摘した高度な鍛冶技術はもちろん、三角形鉄片の廃棄も古墳時代初頭期以降に盛行する可能性が高い。古墳時代初頭期における鉄器化の画期について、各地域の集落動

向が大きく関わると考えられ、背景にはそれら集落による広域の地域間流通がある。

先に述べたように、近畿の鉄器化は従来言われているよりも極めて漸移的であり、弥生第Ⅳ期から第Ⅴ期終末にかけて徐々に進行する。石製の武器や工具の中に、機能的にはより有効な鉄器が入り込む形で推移する。その状態が変化するのは、第Ⅴ期終末～庄内初頭期である。星ヶ丘遺跡、鷹塚山遺跡や西田井遺跡の鉄片は、多くの鉄素材が搬入され鉄器が生産されたことを示している。いっぽうこの段階では、フイゴ羽口や椀形滓・鍛造剥片・粒状滓などの鍛冶関連遺物はみられない。鍛冶関連遺物はフイゴを使用して炉内温度を高温にすることによって生成されるもので、この段階の技術が未だ高温操業に到達していないことがわかる。高温操業に到達するのは中海道遺跡や纏向遺跡の鍛冶関連資料の段階からであり、布留初頭前後である。

庄内期以降の変化は、ひとり近畿にとどまらない。時期の詳細な位置付けは将来の課題であるものの、熊本県や大分県の多数の三角形鉄片を主体とする小鉄片、および製品を出土した遺跡もほぼ同時期の資料である。また瀬戸内沿岸に立地する岡山県津寺遺跡の多量に廃棄された鉄鍬を主とする鉄器もほぼ同じ時期である。北部九州を窓口にして九州を南下し、あるいは瀬戸内海や日本海を通じて東方の諸地域に多くの鉄器素材が搬出されるようになったことを示している。その後、布留期になって博多遺跡群で高温操業の鍛冶技術が導入されるにおよんで、その技術は遠く千葉県沖塚遺跡¹³⁾にまで伝わるのであり、その状況が近畿でも顕在化したものである。Ⅴ期終末～庄内期における三角形鉄片を主とする鉄片の増加から多数の鉄器素材が流通したことがわかる、また布留期における鍛冶関連資料の出現からそれら鉄片の再利用を可能にした高温操業の鍛冶技術の導入の二つの画期を汎日本的に見出すことができる。

2・3章で述べたように、古墳時代初頭・前期の集落遺跡における他地域土器のありかたから、各地域には流通拠点と呼べる集落遺跡が確認され、それら流通拠点をつなぐ関東から九州の広範囲で流通ネットワークが存在したと考えられる。その流通ネットワークを通じて、物資ばかりか人の移動も想定でき、同時に彼らの保有した様々な先端技術、情報も伝えられたことが考古学的に確認できる。弥生時代終末以降、明らかになる鉄片資料や鍛冶関連資料もその流通ネットワークの中に位置付ける視点が必要であろう。

弥生時代中期には、拠点集落を中核とする流通ネットワークが形成されており、石器や石器素材、木器や鉄器も流通した。いっぽう、弥生時代後期になると拠点集落の衰退・消滅によって中期的ネットワークが分断、崩壊して大きな変質をきたしたと考えられる。そ

して古墳時代初頭・前期には再度、新たな集落を核とする流通ネットワークが形成される。それは弥生時代中・後期とは比較すべくもなく、多量の物資が移動しており、しかも北部九州を介して韓半島・大陸ともつながる広域なものである。鉄器あるいはその素材、最先端の鍛冶技術もそのネットワークによって流通したと考えられる。

鉄器製作時に生じた鉄素材の切れ端である三角形鉄片を主とする「鉄片」の出土が増加する。熊本県などの北部九州周辺地域では、同様の鉄片が竪穴住居の炉の周囲から多数出土する事例があり、鍛冶工房と考えられている。鉄器製作の工程では、温度をかけつつ鉄素材を叩きのぼして成形

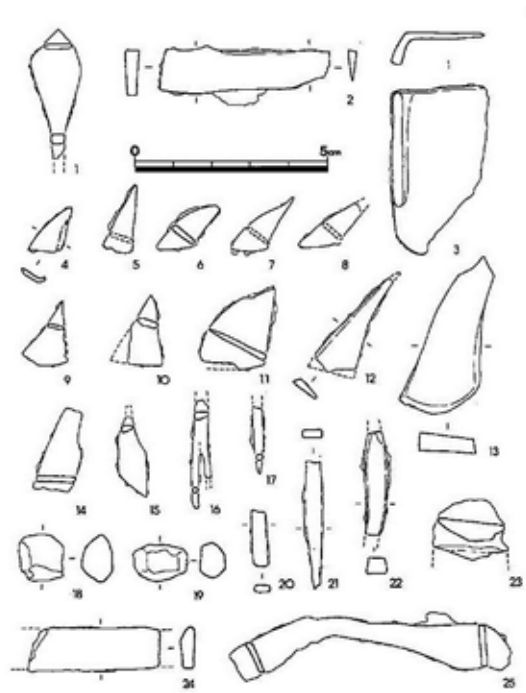


図1 星ヶ丘遺跡第2号住居出土鉄器

するが、鉄鏃、鉋、穂積み具などの種類によっては鉄板の隅をタガネで切断し、生じた切れ端を廃棄したものである。近畿での鉄片資料の出現は、鉄素材の流通の増加を示すと共に、技術者の移動を伴うと考えられる。弥生第Ⅳ・Ⅴ期は鉄片を熱して叩き、あるいは磨製石器と同様に研磨したと考えるが、切断する技術も加わったのであろう。

鉄器の保有量は確実に増加していたであろうが、近畿の集落では良好な出土事例がない。ここでは岡山県津寺遺跡の事例を紹介する。津寺遺跡は比恵・那珂遺跡群と中田遺跡群、纏向遺跡を中継する足守川流域遺跡群¹⁴⁾を構成する集落の一つであり、古墳時代前期集落での鉄器保有の実態を示しており、各地域での拠点集落でのあり方を推定することができる。以下のことがわかる。

①弥生時代中・後期(図2)には保有した鉄器は少ないが、古墳時代前期(図3)に急激に増加する。津寺遺跡は、「弥・後・Ⅳ」(庄内0・1併行)以降に集落の拡大がはじまる遺跡であり、初期の鉄器は住居28の鉄斧のみであるが、広域地域間流通の盛行する庄内期後半以降に鉄器が急増する。なお住居52(古・前・Ⅰ)からは、図示した鉄器以外にも多くの小鉄片が出土しており、鉄器生産が行われたと考えられる。

②鉄器は、鉄鏃を主体に刀子、鉋、錐の他、北部九州以外では出土事例の少ない鎌、穂摘み具、鋤・鍬先が出土している。後者は北部九州との流通関係を示すと考えられる。

③包含層からの出土ながら三角形鉄片があり、津寺遺跡に素材が持込まれ鉄器生産を行

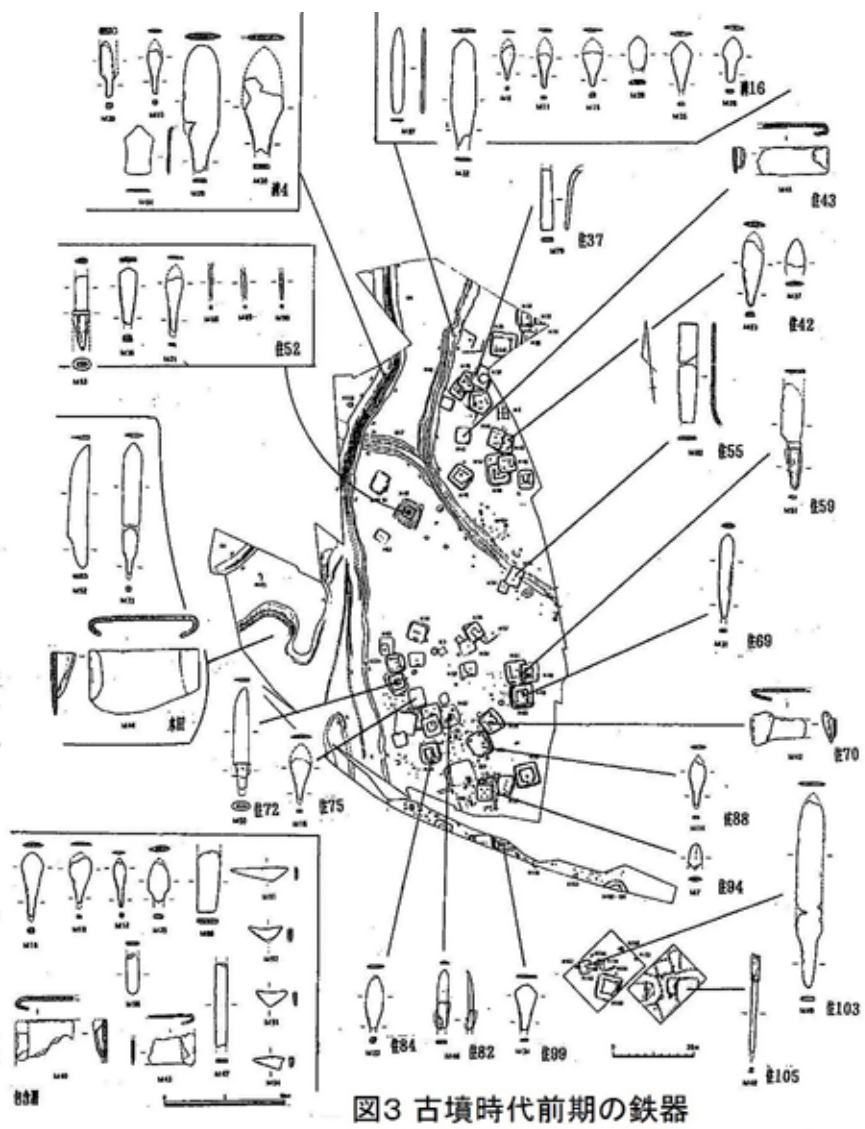


図3 古墳時代前期の鉄器

表2 津寺遺跡出土鉄器の組成

武器 32点(50%)		農工具 15点(26%)				不明 12点(20%)
銅鏃・鉄鏃	剣	刀子	手鎌	鋤	その他	
31点(52%)	1点(2%)	5点(8%)	4点(7%)	3点(6%)	6点(6%)	(20%)

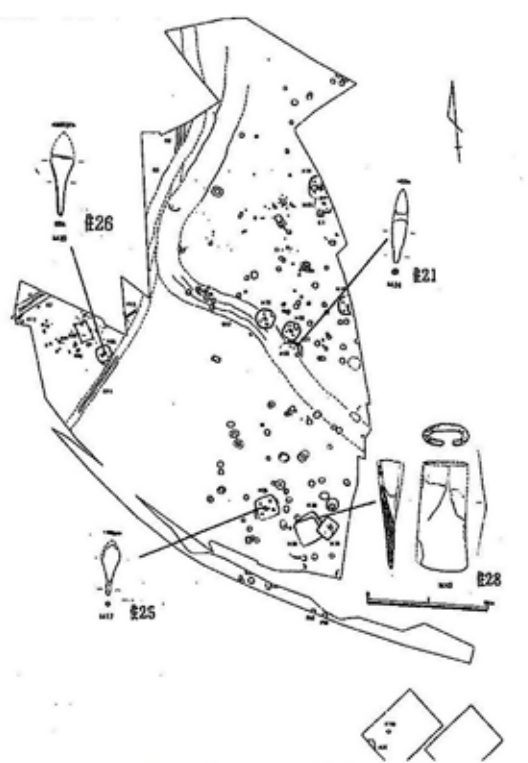


図2 弥生時代中・後期の鉄器

* 図2・3は、岡山県文化財保護協会「津寺遺跡」3 1996 より作成した。

ったことを示している。出土鉄器の形態から、三角形鉄片は鉄鏃および北部九州的な鎌、穂摘み具、鋤・鋤先の折り曲げ下半部の切断によって生じたと考えられる。

④最も新しい時期の住居55「古・前・Ⅲ」(布留2期程度)から一端が少し折り曲げられた鉄板と共に鉄滓(分析により鍛冶滓)が出土している。鉄板は鉄器素材の可能性が指摘されている。また、鍛冶滓はフイゴの使用による高温操業による技術が伝わったことを

示しており、それは博多遺跡群・纏向遺跡・沖塚遺跡とほぼ同時期である。

以上のように、津寺遺跡では古墳時代には多くの鉄器が普及しており、しかも初期の住居 52 と三角形鉄片から当初から集落内で鉄器生産を行っていたことがわかる。

三角形鉄片に遅れて確認できるのが、鍛冶炉と鍛冶関連遺物である。鍛冶関連遺物とは鍛冶道具である金鉗・鉄鎚・鉄床石・砥石や炉内に送風するファイゴの羽口、鍛冶によって生じる鉄滓、鍛造剥片、粒状滓などである。なお后者は、ファイゴ羽口の導入によって炉内温度を上げることが可能になって生じる生成物である。福岡県博多遺跡において、わが国で最古段階の鍛冶関連遺物がまとまって出土し、鉄器製作技術の拡散の指標となった。具体的には、出土遺物としてのファイゴ羽口と椀形鍛冶滓、鍛冶炉周辺の土壌サンプルによる鍛造剥片、球状滓の検出である。

博多遺跡のファイゴ羽口の形態は特徴的である。古墳時代中期以降のファイゴ羽口が円筒形・円錐形であるのに対して、博多遺跡の導入期のファイゴ羽口は側面に平坦面のあるもので横断面が蒲鉾形を呈するものである。同様の形態のファイゴ羽口は、古墳時代前期に限られ出土例は 10 数遺跡であり、高温操業による鍛冶技術の拡散状況を知ることができる。その分布域は、大阪府穂積遺跡、纏向遺跡を経由して、太平洋側での東限は千葉県沖塚遺跡まででほぼ同時期に伝わる。また日本海側では島根県古志本郷遺跡¹⁵⁾を経由し、やや新しい段階に新潟県長岡市の五千石遺跡にまで到達する。古墳時代前期には、わが国では北部九州を起点に短期間の内に高温操業の鉄器製作技術が拡散したことがわかる。

以上に述べた博多遺跡、津寺遺跡、穂積遺跡、纏向遺跡は古墳時代初頭期に成立する広域の地域間流通網の上に立地する有力な拠点集落である。もちろん技術だけが移動するものではなく、鍛冶技術を有する渡来系集団の移動も考えられる。古墳時代中期とは比較すべくもなく少数とはいえ、韓式系土器の出土がそれを示している。日本列島は、古墳時代初頭期から前期にかけて、急激な鉄器化を達成するが、その背景には纏向遺跡を中心に韓半島におよぶ流通ネットワークの形成があったと考えられる。

註

- 1 野島永「破碎した鑄造鉄斧」『たたら研究』第 32・33 号 たたら研究会 1992
- 2 村上恭通「星ヶ丘遺跡の鍛冶遺構について」『みずほ』第 15 号 大和弥生文化の会 1995
- 3 鷹塚山遺跡発掘調査団『鷹塚山弥生遺跡調査概要報告』1968。鉄器 12 点が出土しており、写真

図版 19 によるとその内 2 点が三角形鉄片と考えられる。

- 4 (財) 和歌山県文化財センター『西田井遺跡発掘調査報告書』1991。
- 5 福岡市教育委員会『博多』36 1993、同『博多』37 1993
- 6 奈良県立橿原考古学研究所「纏向遺跡 102 次(勝山古墳第 1 次)発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1997 年度(第 2 分冊)』1998
- 7 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 2000 年度』2001。フイゴ羽口は横断面蒲鉾形であることが確認されている(真鍋成史「金属器生産からみた木津川・淀川流域の弥生～古墳時代集落」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館 2017)。
- 8 (財) 向日市埋蔵文化財センター「中海道遺跡第 32 次(3 NNANK - 32 地区)」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第 44 集』1997。鍛冶関連遺物の出土した竪穴住居 SH32102B は庄内Ⅲ式期に位置付けられている。
- 9 岡山県文化財保護協会『津寺遺跡』3 1996。図 2・3 は、報告書の「遺構一覧表」と「遺物観察表」から作成した。図 2 は、弥生時代後期までの遺構で、住居 21・26 が「弥・中・Ⅲ」(畿内Ⅳ期併行)、住居 25 が「弥・後・Ⅰ」(畿内Ⅴ期前半)、住居 28 が「弥・後・Ⅳ」(庄内 0・1 併行)である。図 3 は、古墳時代前期の遺構で、住居 55 が「古・前・Ⅲ」(布留 2 期)である以外は「古・前・Ⅰ」と「古・前・Ⅱ」で庄内 2 期～布留 1 期である。
- 10 下條信行「伐採石斧(大型蛤刃石斧)」『弥生文化の研究』5 雄山閣 1985
- 11 高槻市教育委員会『古曾部・芝谷遺跡』1996
- 12 同志社大学歴史資料館『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書』1999
- 13 (財) 千葉県文化財センター『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他』1994
- 14 亀山行雄「瀬戸内海沿岸―足守川流域の遺跡群―」『大交流時代―鹿乗川流域遺跡群と古墳出現前夜の土器交流―』安城市歴史博物館 2014
- 15 島根県教育委員会『古志本郷遺跡Ⅵ』2003。古墳時代前期、出雲平野部での鍛冶関連遺物が初めて確認された遺跡である。蒲鉾形フイゴ羽口のほか、椀形滓を含む多数の鍛冶滓、三角形鉄片を含む多数の鉄器が出土している。また韓式系土器も出土しており、日本海側の流通拠点の一つであったと考えられる。

表1 近畿の弥生・古墳時代前期鉄器一覽

大阪府

遺跡名	所在地	時期	遺構	I	II	III	IV	V	庄	布	不明	備考	
崇禪寺	大阪市東淀川区	庄内・新	SK-08(土壇)									素環頭大刀	
芝谷	高槻市真上町	V初頭	住居S12									大型板状鉄斧、鉄鏃	高地性
"	"	"	包含層									板状鉄斧	"
古曾部	高槻市上田部	V初頭	住居K6									小型板状鉄斧	"
"	"	"	住居K24									鉄片	"
"	"	"	住居K25									刀子	"
"	"	"	住居K31									鏃	"
"	"	"	環濠K1									鉄鏃、板状鉄斧、刀子、不明鉄器2	
"	"	"	住居K2									大型板状鉄斧	"
"	"	"	住居K10									鉄鏃	"
"	"	"	住居K26									鉄鏃	"
"	"	"	A地点									鉄鏃	"
"	"	"	B地点									板状鉄斧	"
紅茸山	" 紅茸町	V後半	3号住居址									鉄鏃	高地性
"	" "	V末	13号住居址									鏃	"
"	" "	V後半	14号住居址									鉄鏃	"
郡家川西	" 清福寺町	V後半	6-L地区住居1、柱穴内									(鏃?)	
田口山	枚方市田口	IV										鉄製品13(鉄鏃5他)	高地性
"	" "	(IV以降)										鉄鏃 鉄斧	" 小型袋状鉄斧
鷹塚山	" 高塚町	V後半	方形整穴住居址等									鉄鏃2、他10	高地性
"	" "		SK-1(台状墓)覆土									鉄製品	"
長尾西	" 長尾	V(後半)	(住居内)									鉄鏃	
出屋敷	" 山田池	V末~庄内	SH-3(方形整穴住居)									鉄鏃	
屋ヶ丘	" 屋ヶ丘	V末	2号住居址									鉄片50数点 (鉄鏃1含む)	
屋ヶ丘西	" 宮之阪	(布留)										鉄鏃	土壇墓?
禁野車塚	" "	(V)	(盛土内)									(鉄鏃)	
藤田山	" 香里ヶ丘	V										鉄鏃	
野々井西	堺市菱木	V初頭	1号住居									鉄鏃	
"	"	IV末	2号住居									鉄片(刀子?)	
"	"	(IV)	土壇78									鉄片	
昭和池	堺市菱木	V中頃	3号住居									鉄鏃	
観音寺山	和泉市観音寺町	V(初頭~前半?)										...鉄鏃3、刀子、鉄片多数	高地性

遺跡名	所在地	時期	遺構	I	II	III	IV	V	庄	布	不明	備考
忽ノ池	小野町	V	第1号住居内					鉋, 不明鉄器 2				高地性
"	"	V	第3号住居内					小鉄片				"
"	"	V	第4号住居内					不明鉄器				"
池上曾根	和泉市池上町他	IV						(大型竪立柱建物の柱脚の鉄斧刃)				
加美	大阪市平野町	(IV)						(ノミ)				
鬼虎川	東大阪市弥生町	I~III古 (II・III主)	(包含層)					…鉄鏃, ノミ				铸铁脱炭鋼
水走	水走	III	(溝)					ノミ(鹿角柄)				
西ノ辻	西石切町	III-IV	2号方形周溝 墓・北溝					鉄鏃				
池島	池島町	III	(包含層)					鉄鏃				
甲田南	富田林市双葉町	III-IV	2・4号住居址					板状鉄斧 2				大型住居
大師山	河内長野市三日 市町	V後半	第2号住居址					鉄鏃				高地性
恩智	八尾市恩智	V中頃	SD-13溝					板状鉄斧				
亀井	八尾市南亀井町	V(中頃)	SD-3036					板状鉄斧				
"	"	(I~V)	IX層(包含層)									棒状 鉄器
"	"	III又はIV	SE-3015					…不明鉄器				
"	"	V後半	SD-3067					ノミ状鉄器				
"	"	IV末	SE-2401上部					鉄鏃				
"	"	IV	SE-2402					鉋?				
"	"	(中~後)	22区(包含層)									鉄片
"	"		21区ピット 53									鉄片
"	"	V後半	SD-11					袋状鉄斧				
(ノ)	"	V(前半?)	SD-3008					(袋状鉄斧柄 2)				縦斧
(若江北)	東大阪市 若江西新町	IV	SD-550					(袋状鉄斧柄)				縦斧
(瓜生堂)	瓜生堂	V後半	(包含層)					(袋状鉄斧柄)				横斧
船橋	柏原市古市	V末~ 庄内	(包含層)					鉄鏃				
東山	南河内郡河南町	V	B-7b 住居址					鉋?				高地性 (本遺 跡で最大住居)
"	"	V(後半?)	C-6a 住居址					棒状鉄製品(鉋?)				"
寛弘寺	"	V						棒状鉄片 2				高地性
玉手山	柏原市玉手町	V中頃	竪穴住居 2					鉄鏃				高地性
彼方	富田林市	V後半						鉄斧				"

兵庫県

遺跡名	所在地	時期	遺構	I	II	III	IV	V	庄	布	不明	備考
田能	尼崎市田能	Ⅲ	(第5調査区)				板状鉄製品					
栄根	川西市栄根	庄内・新	住居址2							棒状鉄片		
"	"	V後半	土坑9							鉄鏃		
五ヶ山	西宮市仁川	IV	溝状遺構				鉄片4					高地性
滝ノ奥	神戸市桜ヶ丘町	IV	SB01(歌謡)				鉈					
会下山	芦屋市三条町	V中頃	S祭祀址							鉄鏃・不明鉄片		高地性
"	"	"	Q祭祀址							鉄環		"
"	"	"	F住居址							鑄造鉄斧・鉄鏃 鉈2・鉄片2		"
"	"	"	E住居址							釣針・鉄片2		"
"	"	"	C住居址							鉄片		"
"	"	"	J住居址							鉄鏃?・鉈		"
"	"	"	L住居址							鉄鏃		"
"	"	"	X住居址							ノミ		"
奈カリ与	三田市貴志	IV					鉄鏃4, 板状鉄斧8 鉈・鉄環・鉄片					高地性
伯母野山	神戸市灘区	IV					鉄鏃・板状鉄斧3					高地性
北神4 地点	神戸市北区	IV					袋状鉄斧2, 鉄鏃					高地性
北神45 地点	"	?								鉄鏃		
新方	" 西区	Ⅲ	方形周溝墓状 遺構溝内				鑄造鉄斧					
居住・小山	"	Ⅲ(古)	SB-05 竪穴住居				鉄鏃					
養田	"	V	円形住居址							刀子		高地性
頭高山	"	IV					鉄鏃2, 鉈2, 刀子2, 鏃?, ノミ, 鉄片					高地性
(玉津 田中)	"	Ⅲ(新)	旧河道				(袋状鉄斧柄)					鑄造斧用? 横斧
川除藤ノ木	三田市川除	V後半	SH06(歌謡)							鉄鏃、不明鉄器		
"	"	V末	SH07(歌謡)							棒状鉄器		
家原・ 堂ノ元	加東郡社町	V後半	住居址13							鉄鏃		大型住居
大 中	加古郡播磨町	V	4号住居址							刀子, 鉄片3		六角形大型住居
"	"	V後半								不明鉄器		
東 溝	加古川市 加古川町	V後半	住居址1							鉈2		
"	"	"	住居址2							鉈		
福 本	神崎郡神崎町	IV	T住居址				板状鉄斧					大型住居
名古山	姫路市名古山	IV	住居址				板状鉄斧					小型品
丁・ 柳ヶ瀬	" 勝原	庄内	SX-03(河道)							鉄鏃		
六角	姫路市打越	布留?	SH1(歌謡)							不明鉄器(鉈?)		
"	"	V	SD2							鉈		

遺跡名	所在地	時期	遺構	I	II	III	IV	V	庄	布	不明	備考	
立岡	揖保郡太子町	V後半～	住居址 I									袋状鉄斧・鉄片 21	
本多町	宍粟郡山崎町	III	竪穴住居				鉄鏝						
門前	龍野市揖保町	(V以降)										鉄鏝 2	
七日市	水上郡春日町	IV					ノミ						
"	"	庄内?	17号住居址									スキ・クワ先	
"	"	V後半～庄内	SB-09 竪穴住居									鉄斧	
下内膳	洲本市下内膳	V末～庄内	(包含層)									棒状鉄片 4	
"	"	庄内?	住居址									鉄鏝 6 用途不明鉄器 6	
下加茂岡	" 下加茂岡	V	円形竪穴住居									鉄鏝	高地性
大森谷	" 上内膳	V中頃	3号住居址									用途不明鉄器	高地性・本遺跡で最大の住居址
"	"	V	7号住居址									小鉄片	"・大型住居
塩壺	津名郡淡路町	V										鉄鏝	高地性

京都府

遺跡名	所在地	時期	遺構	I	II	III	IV	V	庄	布	不明	備考	
大山	竹野郡丹後町	(V後半)	竪穴住居 2 B									(鉄鏝・鉄片)	
"	"	(V)	(包含層)									(不明鉄器)	
扇谷	中郡峰山町	I末～II	周溝No.10-1				鑄造鉄斧					高地性 砂鉄系鑄鉄	
"	"	I末～II	(南谷間トレ ンチ)				鉄滓					" 鍛造の鉄滓	
途中ヶ丘	"	V後半	EL75・溝内									鉄鏝 2	
"	"	IV～V?	EL53・溝内 ピット								鑄造鉄斧	鑄鉄脱炭
長法寺 谷山	長岡京市長法寺 谷山	V後半	竪穴住居 SH-23703									板状鉄斧	高地性
"	"	V後半	竪穴住居 SH-23706									スキ・クワ先	"
田辺 天神山	綴喜郡田辺町	V中頃	1号住居址									刀子・鉄片	高地性
"	"	(V又は 布留?)	5・6・7号 住居址									(スキ・クワ先) 鉄鏝・鉄片	"
"	"	V	10号住居址									鉄鏝	"
田辺 天神山	綴喜郡田辺町	V後半	12号住居址									鉄鏝	高地性
"	"	V後半	16号住居址									刀子	"
"	"	V中頃	17号住居址									小型袋状鉄斧	"
中海道	向日市物集女	庄内初	SH32102(黙蹟)									鉄滓	鍛造鉄片
馬場	長岡京市馬場	庄内	SH44(黙蹟)									鉄鏝?	
"	"	布留										鉄鏝他	

和歌山県

遺跡名	所在地	時期	遺構	I	II	III	IV	V	庄	布	不明	備考	
西田井	和歌山市西田井	庄内	S1171(歌壁)									鉄鏡	
"	"	庄内前段										鉄鏡材、鉄鏡、鉄弁他約65	
橋谷	和歌山市弘西	V初頭	1号住居址									鉄鏡・不明鉄器	高地性
北田井	" 北	布留	71号住居									鉄鏡	
"	" "	(布留)	(攪乱土)									(鉄鏡)	
田屋	" 田屋	(V後半)	円形竪穴住居									鉄鏡	
東田中	那賀郡打田	V末	SB7(歌壁)									鉄鏡	
船岡山	伊都郡 かつらぎ町	V前半	SB-12									鉄鏡	
"	" "	V前半	SD-06									鏡	
滝ヶ峰	海南市多田	V前半	(H-100) 調査地点									刃部を有する鉄器	高地性
※亀川	" 且来	IV	3号土坑墓 方形周溝墓									鏡・釣針	木棺墓3基中 最大
"	" "	V後半	SB-51 (竪穴住居址)									不明鉄器	

滋賀県

遺跡名	所在地	時期	遺構	I	II	III	IV	V	庄	布	不明	備考	
坂口	大津市木ノ岡町	庄内	方形周溝墓 北側溝下層									鉄鏡	
高野	栗太郡栗東町	庄内・新	SH-1 (竪穴住居)									鉄鏡	
桜内	伊香郡余呉町	V										鉄鏡, 刀子3, 槍先?	高地性 銅鏡20数点
(服部)	守山市服部町	V後半	旧河道									(袋状鉄斧柄・スキ ・クワ先柄)	横斧

奈良県

遺跡名	所在地	時期	遺構	I	II	III	IV	V	庄	布	不明	備考	
羅南	桜井市魯野内	布留0	溝									鉄鏡	フイゴ羽目
六条山	奈良市六条町	V後半	自然流路下層									小型袋状鉄斧	高地性
"	" "	V中頃	5号住居址									鉄釘?	"
三井岡原	生駒郡斑鳩町	V後半										鉄鏡	
唐古鏡	田原本町唐古・鏡	V後半										板状鉄斧	
ゼニヤクボ	山辺郡都祁村	布留(古)	1号住居									刀子	
"	" "	V末?										鉄鏡...	
大王山	宇陀郡榛原町	V(初頭)	12号地点・南 側住居址									板状鉄斧	高地性
鴨都波	御所市三室	V後半										不明鉄器(ノミか鏡?)	

第6章 土木技術の伝来と展開

第1節 中河内地域における古墳時代の敷葉工法

1 はじめに

「敷葉工法」とは、軟弱な地盤での盛土工法の一つである。土を盛っていく過程で、草本・粗朶・木葉・樹皮等を敷設して、盛土のすべりと崩壊・沈下を防ぐことが目的である。中国安徽省の安豊塘(1世紀)、韓国ではソウルの風納洞土城(3世紀)と全羅北道の碧骨堤(4世紀)で敷葉工法の古い事例があり、また日本では敷葉工法と韓式系土器の出土する遺跡との関連が強い事例があるので、大陸起源の工法が韓半島を経由して伝えられたと考えられている¹⁾。なお敷設する素材によって、「散草法」や「敷粗朶(工法)」とも呼ばれるが、その目的は同じと考えられるので、本稿では敷葉工法と記載した。

中河内地域では、亀井遺跡で古墳時代中期末、5世紀末～6世紀初頭の敷葉工法を用いた巨大な堤が知られている。当時、中河内では韓式系土器が多数見つかるので、渡来人を

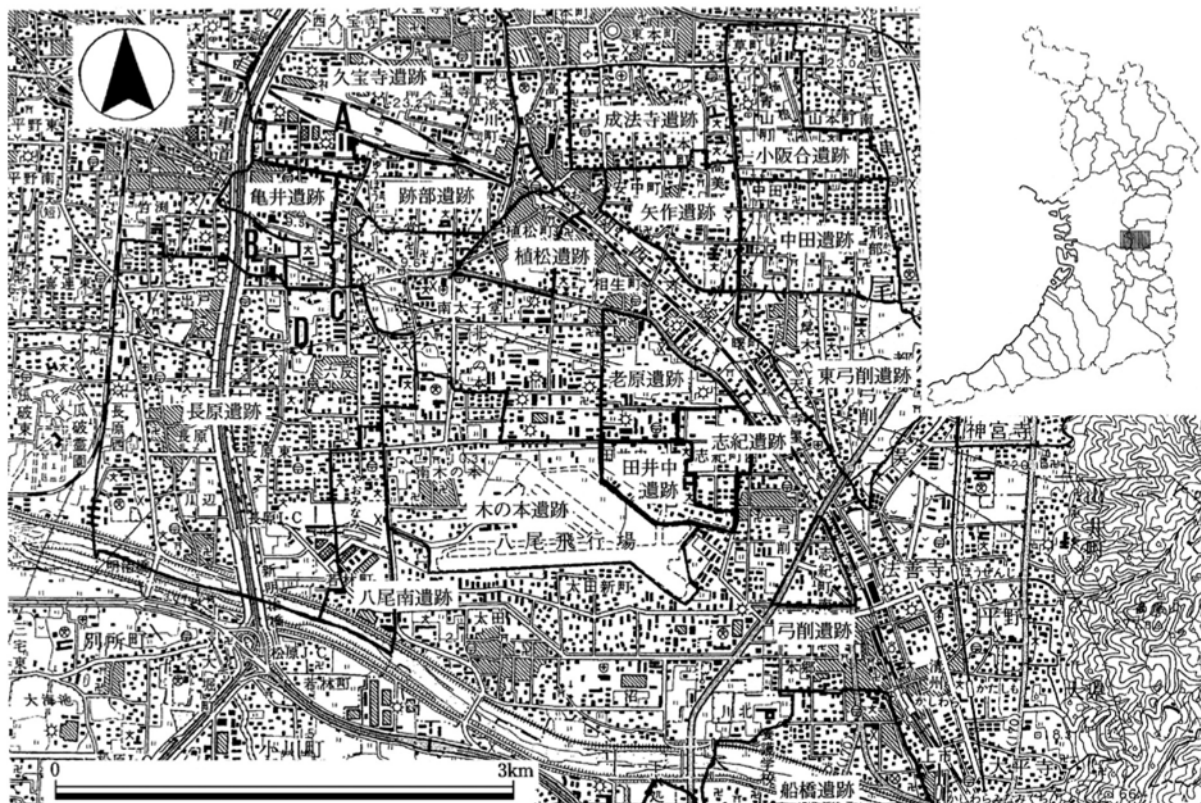


図1 遺跡分布と敷葉工法の位置(A久宝寺、B亀井、C長原95、D長原97)

中心にした人々により平野部の開発が本格的に着手された²⁾と考えられている。しかし近年、古墳時代前期の敷葉工法も知られるようになった。また、過去の報告書を調べると他にも敷葉工法の事例³⁾が見られるので、今回はそれらを紹介しその背景について若干の考察を行う。

2 古墳時代前期の敷葉工法

久宝寺遺跡では、駅周辺の再開発事業に伴い、広大な面積の発掘調査が行われた。そこは久宝寺自然堤防と亀井自然堤防に挟まれた谷地形（図9のA）であり、古墳時代前期にさかのぼる敷葉工法が4ヶ所、その可能性のあるものが1ヶ所で確認されている。

1) 第5-2面 05308溝の堤⁴⁾

05308溝は、下面より続く05006落込のくぼみの東側を掘削した水路で、調査者は排水流路と推定している。そして堤は、05308溝の掘削土を西側の05006落込内に堆積した砂の上に積んで築かれている。05308溝の規模は幅3.0m程度、深さ約1.5m。堤の幅

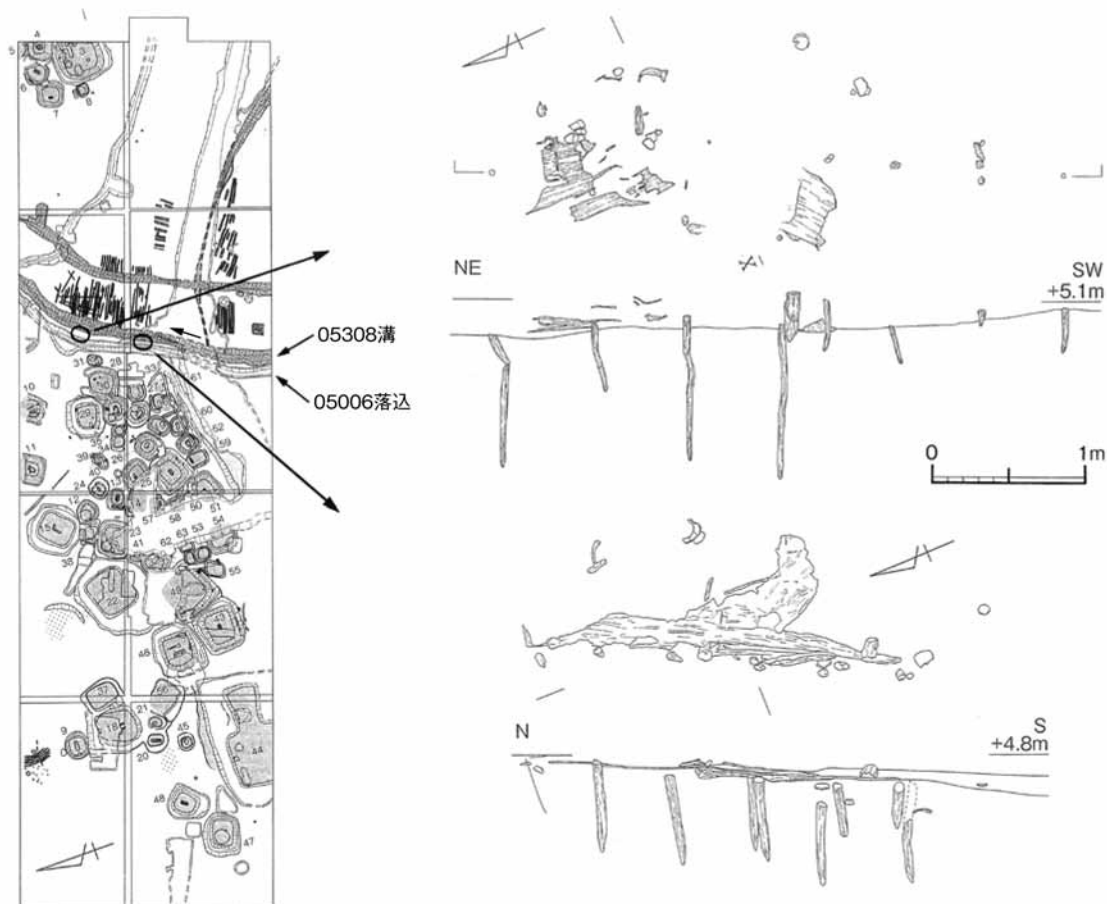


図2 久宝寺遺跡第5-2面 C05308溝の堤

は、場所によって異なるが 2.5 ～ 4.8 m である。

堤は杭の打設と敷葉を行って盛り土を行う。杭列 1 条と敷葉層が、北と南の二ヶ所に分離して確認されたが、敷葉の残存状況は悪い。敷葉の繊維方向は、残存状況の良好な南敷葉部分では堤の長軸方向に沿って確認された。北の杭列は 60cm 程度の間隔、南の杭列は 50cm 程度の間隔で打設されており、敷葉層上面より 0.6 ～ 1.0 m 程度の深度まで打設されている。そしてその杭列は、残存状況の良好な南敷葉部分では堤の中軸線よりも河裏側のり面部分に打設されている。時期は、庄内期新相に位置付けられる。

2) 第 5 - 1 (2) 面 05379 堤 (図 3) ⁴⁾

堤は自然河川である 05396 流路の北側を長さ 90 m 以上にわたって築かれたと考えられるが、大部分が流出し一部が残存するのみである。この河川は本遺構面で出現したもので出現の経緯はわからない。水は東から西に向かって流れ、05387 堰によって北に向かう 05384 溝に流したと考えられる。

本来の堤の規模は不明であるが、残存する盛土の最大幅約 4 m、高さ約 50cm である。敷葉工法は、残存した堤の西端で長さ 7.8 m にわたって確認された。杭列 1 条と、堤の下半部に 3 枚の敷葉層が確認された。敷葉を行うベース土と盛土は、シルト・微砂混じりシルト・細砂であり、敷葉は水生植物の茎を堤の長軸に直交して 3 層確認された。小枝や葉などの材料は確認できない。杭列は、約 50cm 間隔で打設され、その杭は直径 6 ～ 10cm、長さ 0.6 ～ 1.5 m で、3 枚目の敷葉層上面より 1 ～ 1.8 m 程度の深度まで打設されている。その杭列は、堤の中軸線よりも河裏側法面部分に打設されることが特徴である。報告書では「(杭列は) 敷葉工法に直接関連するものではなく、堤を強化するために裏法側に杭打

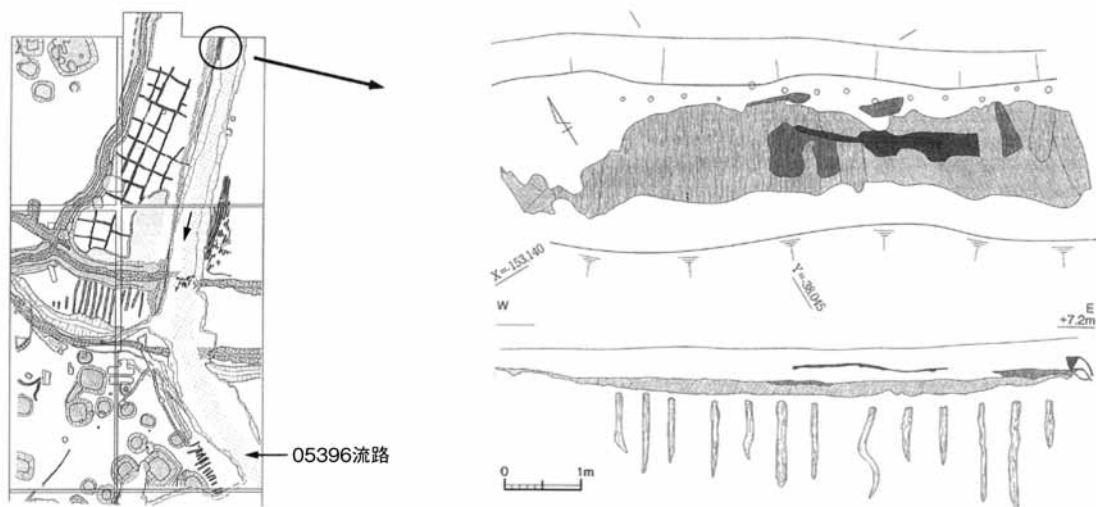


図3 久宝寺遺跡第5-1(2)面 05279堤

ちを行ったものと推測」している。しかし他の事例にも同様の杭列が伴うので、敷葉と一体的に打設されたと考えられよう。時期は、布留期古相に位置付けられる。

3) 第5-1(1)面 05424 堤 (図4)⁴⁾

堤は、東から西に向かって流れる自然河川の05421流路の北側堤である。05421流路は、下面(第5-1(2)面)の05396流路が氾濫の後に残存したもので、川幅は10m前後である。また05424堤の幅は2~3m程度である。堤の敷葉箇所は北に広がる水田への溢水防止のために築かれたもので、機能しなくなった下面の05384溝の取水口を閉塞した盛り土部分である。報告書では「水成植物の茎と思われるものを、溝の凹みに合わせるように盛土の間に敷き並べられていた」と記載されている。なお写真図版169-4によれば、敷葉は盛土の最下部近くに施されており、取水口を閉塞するに際して、まず砂あるいは砂質層の上に敷き、その後に盛土をしたことがわかる。杭の打設は見られない。時期は布留期古相に位置付けられる。

4) 第5-1(1)面 05428 高まり (図4)⁴⁾

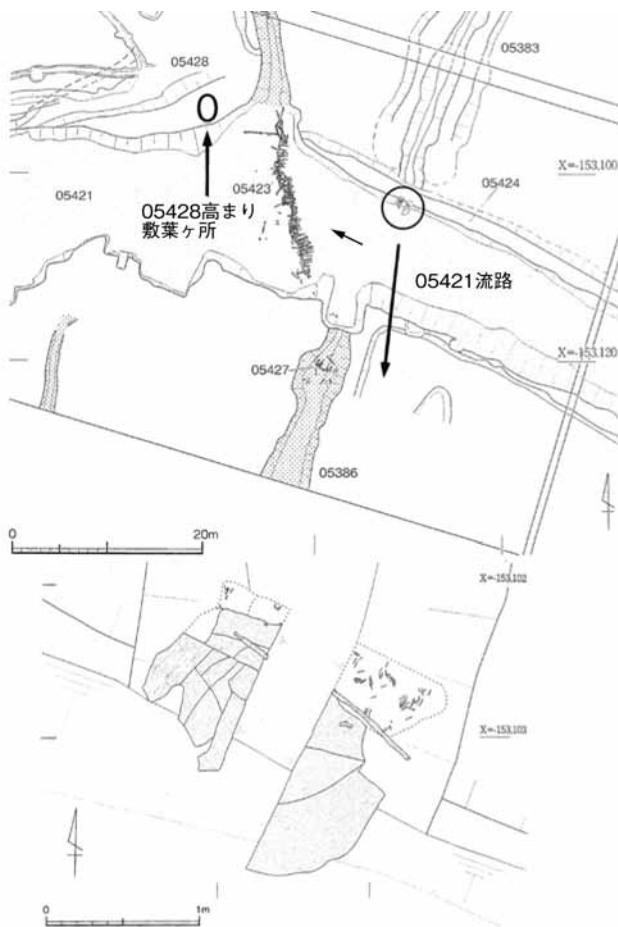


図4 久宝寺遺跡第5-1(1)面
05424堤と05428高まり

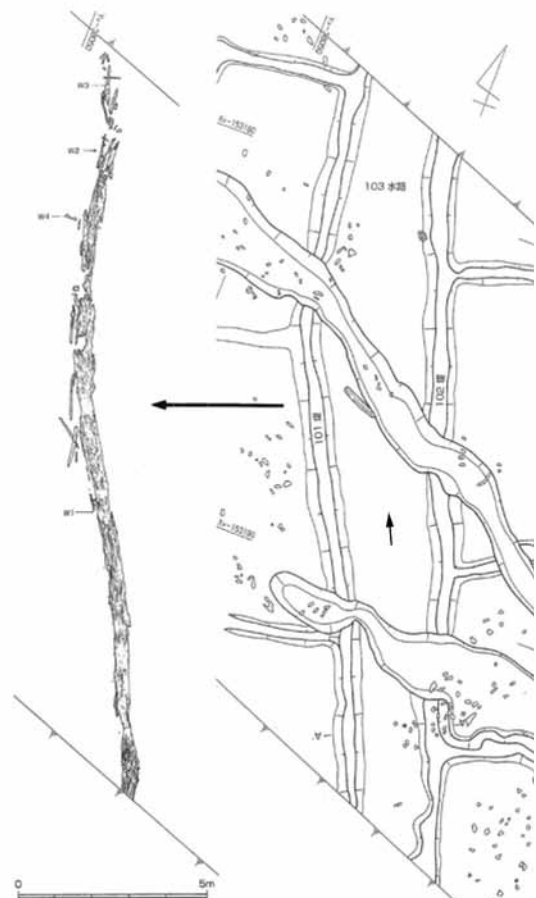


図5 久宝寺遺跡1区1面 101堤

05428 高まりは、下面（第5-1（2）面）の05389 溝の取水口が氾濫によって埋没したために、その上部や北側に盛土して形成されたと推定されている。なお05389 溝は、自然河川の05421 流路から取水して北に広がる水田に給水する水路である。

写真図版170-2によれば、敷葉の敷設された面が湾曲しているので、取水口を閉塞するに際して、05424 堤と同様に初期段階に敷かれ、その後に盛土をしたことがわかる。やはり杭の打設は見られない。05424 堤と同じ状況を呈する。ところで平面図を見れば、05421 流路の北側堤で05428 高まり部分だけが幅広く築造されている。これは西方に流れる05421 流路がこの部分で「へ」字状に南西に屈曲し流水の攻撃面に相当するからで、敷葉工法を採用して、より強度を持たせることを考慮したためであろう。時期は、布留期古相に位置付けられる。

5) 1区1面101堤 (図5)⁵⁾

本調査区は、先に紹介した事例1～4の確認された調査区の南側に隣接する。条里制施工以前の103水路と小区画水田が確認された。103水路は幅3.0～4.5 m、深さ25cm程度で、長22 mが調査された。

敷葉工法の確認された101堤は、103水路の西側堤である。規模は幅約70cm、高さ40～50cmで周囲の水田畦畔より大きい。堤裏のり尻（西側水田寄り）に杭を65～80cm間隔で打設し、ベース面に樹皮や植物質繊維の方向を堤の長軸方向に敷き詰める。東側堤（102堤）には敷葉は敷設していない。なお時期を確定する遺物は出土していない。

以上、紹介してきた久宝寺遺跡の敷葉工法は、二つの類型に分けることができる。一つは1・2・5の事例であり、大・中型の溝、あるいは自然河川の堤の築造過程で確認できたものである。堤の水流とは逆側のり面部分、あるいはのり尻部分に一系列の杭列を打設することが共通する。二つ目は大・中型の溝、あるいは自然河川の堤に設置された取水部が不用になり、それを閉じるために行った盛土部分に敷葉工法を行うものである。なお、二つの類型に共通する特徴は、後の土構造物と比較して大変小規模なことである。

久宝寺遺跡の敷葉工法は、墓域を生産域として改変し、水利を再編成する過程で始めて使われている。その過程で築造された、幹線水路を構成する堤、あるいはその堤の修理盛土において確認できる。一方で同時期の同じ立地での盛り土作業に係わらず、伝統的な土構造物である墳墓の築造には使わないことも指摘できる。

古墳時代中・後期の敷葉工法

亀井遺跡の巨大な堤が知られているが、他にも長原遺跡の数ヶ所で敷葉工法が確認⁶⁾できる。長原遺跡は、広大な面積の集落遺跡で住居、墓、水田等の遺構が高密度で確認できる。古墳時代中期にも集落のピークがあり、韓式系土器の出土が著しい。

6) 長原 NG95 - 57 次調査 柵 (図 6)⁷⁾

第 7 A 層内の基底付近で確認された柵である。本層は激しい水流で形成された粗粒砂などで構成され、水流の方向は南東から北西である。柵は水流に平行する方向性を持ち、自然流路の右岸に築造されたと考えられる。

柵の規模は幅約 4 m、両端は調査区外に続き長さ 13 m 分が検出された。築造過程は、①基礎に砂で約 10cm の盛土をし、②その上に植物繊維を柵の長軸に直交して敷き詰め、③植物繊維の上から杭を打設する。さらにその上に①～③の工程を繰り返す(④、⑤、⑥)。その後 10～30cm の自然堆積層をはさみ、⑦柵の長軸方向に横木を置いて植物繊維で覆う、⑧細い杭を打って横木を固定し、⑨さらに横木と縦木を架設する。築造時期は、第 7 A 層と柵の盛土から出土した須恵器細片から、TK10 型式を下限にする。

7) 長原 NG97 - 52 次調査 土手状遺構 (図 7)⁸⁾

調査区は 63 × 10.3 m であり、全域が氾濫性の堆積物で厚く覆われていた。この堆積は古墳時代中～後期に形成されたもので、ラミナの観察から北東から南西方向に流れたことが確認されている。土手状遺構は、水流に平行する方向性をもって、堆積層内の基底付近で見つかった。土手状遺構の西側のみに、粗粒砂など著しい水勢を示す堆積が確認されているので、自然流路の東岸に築造された堤と考えられる。

土手状遺構の規模は幅約 1.6 m、高さ約 0.5 m だが、両端が河川の浸食で流出し、長さ 2.3 m が残存するのみである。築造過程は、①基礎に細粒砂を積み、②杭列を 2 列打設し、③植物繊維を敷き、④シルトを積み上げて土手を築造する。なお報告者は前述した NG95-57 次調査の柵の事例から、③と④の間に横木を配置して植物繊維を押さえる工程を推定するが明確ではない。杭列は、やはり堤の中軸線よりも河裏側のり面部分に打設されている。杭列の間隔は 0.2～0.3 m、杭列各杭の間隔は 0.1～0.3 m 程度で、土手から 1 m 程度の深さまで打設されている。また植物繊維の繊維方向は、堤の長軸方向に対して、直行・平行・斜向する部分があって一定しない。ブロック状に敷いたようで、最大 5 cm 程度の厚みで残存する。

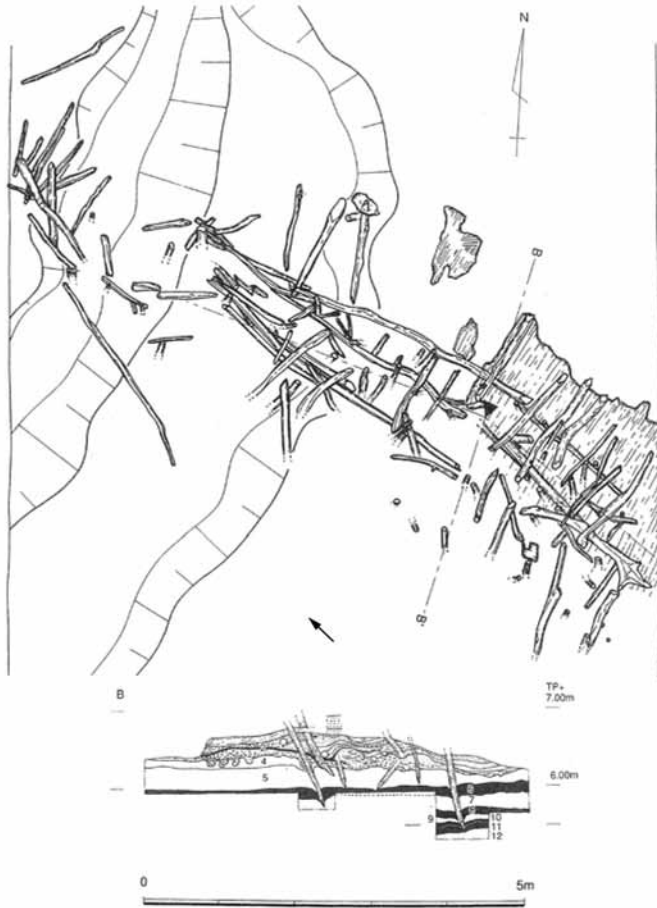


図6 長原遺跡NG95-57次調査
しがらみ

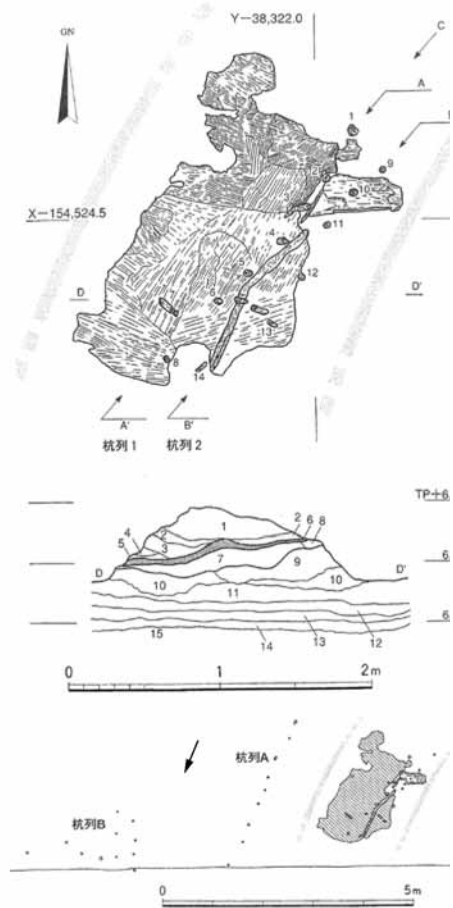


図7 長原遺跡NG97-52次調査
土手状遺構

さらに流路内で、土手状遺構に平行して杭列1条（杭列A）と集中して打設した杭群（杭列B）が確認されている点に注目したい。杭列A・Bと土手状遺構の杭材は、いずれも樹皮をそのままに残す自然木の先端を数面加工して尖らせるもので、前者の直径が2.5～4.0cm、後者は3.5～4.0cmと報告されている。また報告書を検討すると、杭列A・Bの杭はT.P.5.7～6.0mまで、土手状遺構の杭はT.P.5.6～5.9mまで打設されている。三者の共通性から杭列A・Bは、土手状遺構と同時に打設されたと考えられ、杭列Aは護岸杭、杭列Bは流路内に設置された水制杭と考えたい。

8) 亀井遺跡 堤 (図8)

亀井自然堤防の先端付近で、古墳時代中期末の第4遺構面の調査において、三つの遺構で敷葉工法が確認⁹⁾されている。巨大な堤34-OD、小規模な堤80-ODと堤70-ODである。堤34-ODに堤80-ODが直角に取り付くようにも見えるが、3者の関係はわからない。なお遺構面の標高はT.P.6.3～7.0mである。

堤 34 - OD (図 8 - 2) 溢水対策として水田の辺に築造されたと考えられている¹⁰⁾。規模は長さ約 80 m、幅 8 ~ 12 m、高さ約 1 m である。堤の構築は、①約 10 m の間隔で 10 数本ずつの杭列 2 条を打設し、②杭列間に草本類を敷き、シルトと粘土のブロック層を置き、その上に草本類を敷く。盛土下部は②の作業を複数回繰り返したもので、盛土上部はシルトと粘土のブロック層で敷葉は敷設しない。なお①の杭列は、堤のり尻から堤体内に 1 m 弱の位置であり、越水時に大きな力の加わるのり尻部を補強する役割がある。なお報告書では、堤の中央部を境に盛土の質が異なっているので、部分によって築造時期に若干の差のあることを想定する。築造時期は、盛土内から出土した須恵器から MT15 型式段階とされている。

堤 80 - OD (図 8 - 3) 堤 34 - OD の北にテラスがあり、そこに直角に取り付くようであるが、詳細はわからない。規模は長さ約 8 m、幅約 2 ~ 3 m、高さ約 1 m である。報告書図版 5 上から、盛土下部に草本植物の茎を堤の長軸に直交した方向に敷いた敷葉 2

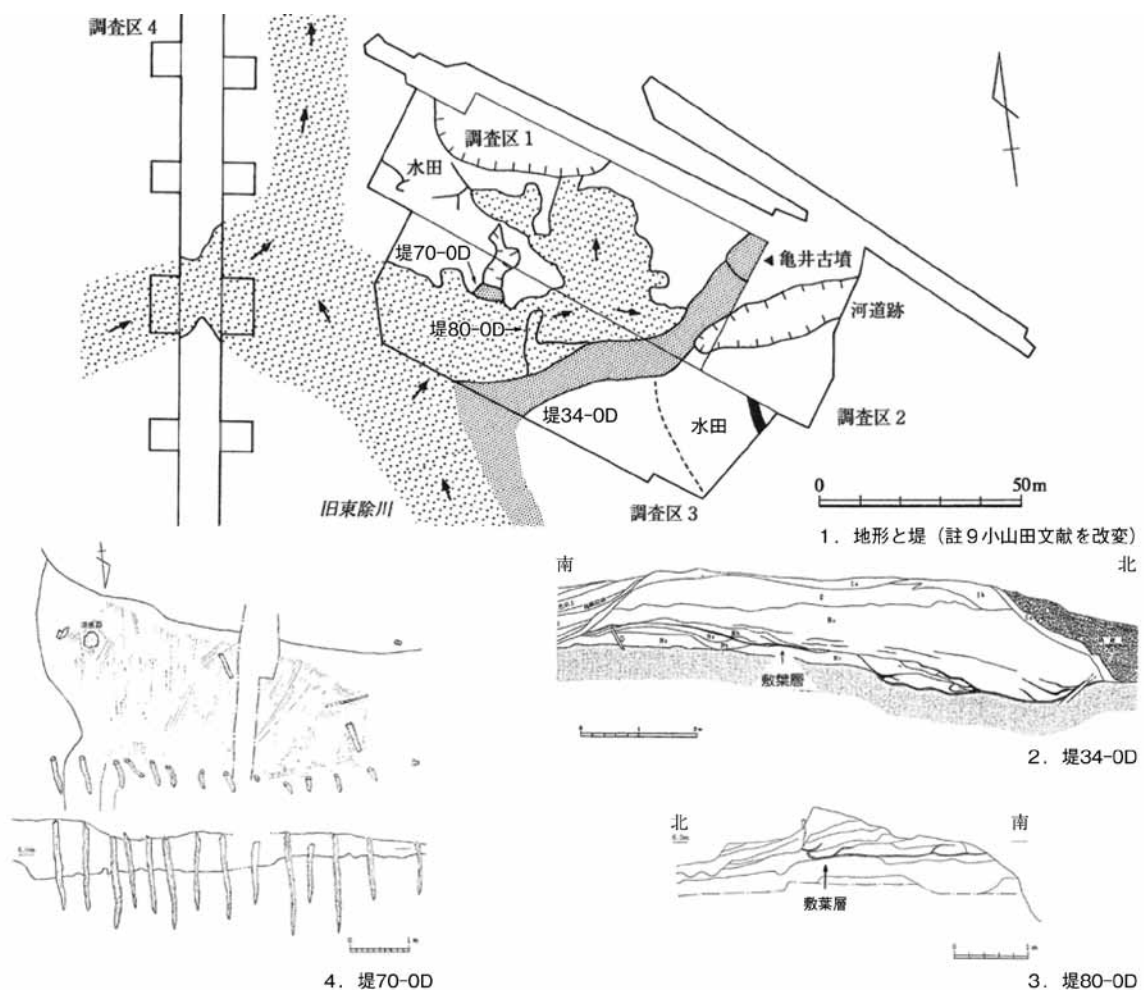


図8 亀井遺跡の堤

層分が確認できる。

堤 70 - OD (図 8 - 4) 幅 12 m の自然河川の北岸に築造された小規模な堤として報告されている。堤の規模は不明であるが、幅は約 3.5 m。盛土基底面に草本植物茎を堤の長軸に直交した方向に敷く。また河裏側のり面部分のり尻に寄った位置に杭列 1 条が確認されている。杭列は長さ 1.5 m 前後の杭を 20 ~ 50cm 程度の間隔で打設したものである。

以上、紹介した長原遺跡と亀井遺跡の敷葉工法は、古墳時代前期の事例と同じく、敷葉の敷設と杭列の打設をセットにすることが共通している。しかし全く同じというわけではなく、事例 6 は一定期間をおいた造り替えの可能性もあるが、縦木と横木を設置して強化し、事例 7 は水制杭と考えられる杭列を打設して堤を保護する。事例 8 は堤の両側のり尻付近に杭を打設して崩落を防ぐための補強をしており、なによりも大型構造物に敷葉工法が見られるようになる点に大きな画期がみられる。

ところで以上の事例を当時の地形復元図 (図 9) に示すと、若干の時期差を認めるにしても、いずれもが六反一出戸低地に築かれた施設であることがわかる。六反一出戸低地とは、旧平野川によって形成された自然堤防 (亀井自然堤防) と瓜破台地とその東方沖積平野にはさまれた、東南東から西北西にのびる幅の広い帯状の低地であり、中央に六反自然堤防が立地する。なお、亀井自然堤防に竹渕遺跡や跡部遺跡が、瓜破台地に長原遺跡が、東方沖積平野に八尾南遺跡や木の本遺跡が立地する。高橋工氏¹¹⁾ は、本地域の地形環境、集落と水田の動態を論じており、その成果に沿って敷葉工法の事例を位置付けたい。

まず集落について。第 9 図に示した集落は、すべてが同時に存在したのではない。古墳時代中期の集落は、布留期後半に出現し初期須恵器段階にピークを迎え、衰退することが一般的で、古墳時代中期末～後期の集落は少ない。対象となる MT15・TK10 段階の集落を見てみよう。

- ① 瓜破台地の長原遺跡は、前代と比較すると分散・縮小傾向を示す。
- ② 木の本遺跡と八尾南遺跡は存在するが、前代と比較すると遺構・遺物は減少する。
- ③ 亀井自然堤防と久宝寺自然堤防上の集落は、前代の空白期間をはさんで本段階から出現し、遺構・遺物は多い。なお、六反自然堤防での当該期の集落は未確認である。

次に水田については、亀井自然堤防と久宝寺自然堤防周辺の状態を示す。高橋氏は、久宝寺自然堤防南側の久宝寺遺跡と亀井自然堤防先端付近の亀井北遺跡に水田があり、いずれかの自然堤防上に居住した集団が経営母体と考える。また六反一出戸低地については、古墳時代中期には度々氾濫に見舞われ、水田耕作は不可能と考え、耕作痕跡も未確認であ

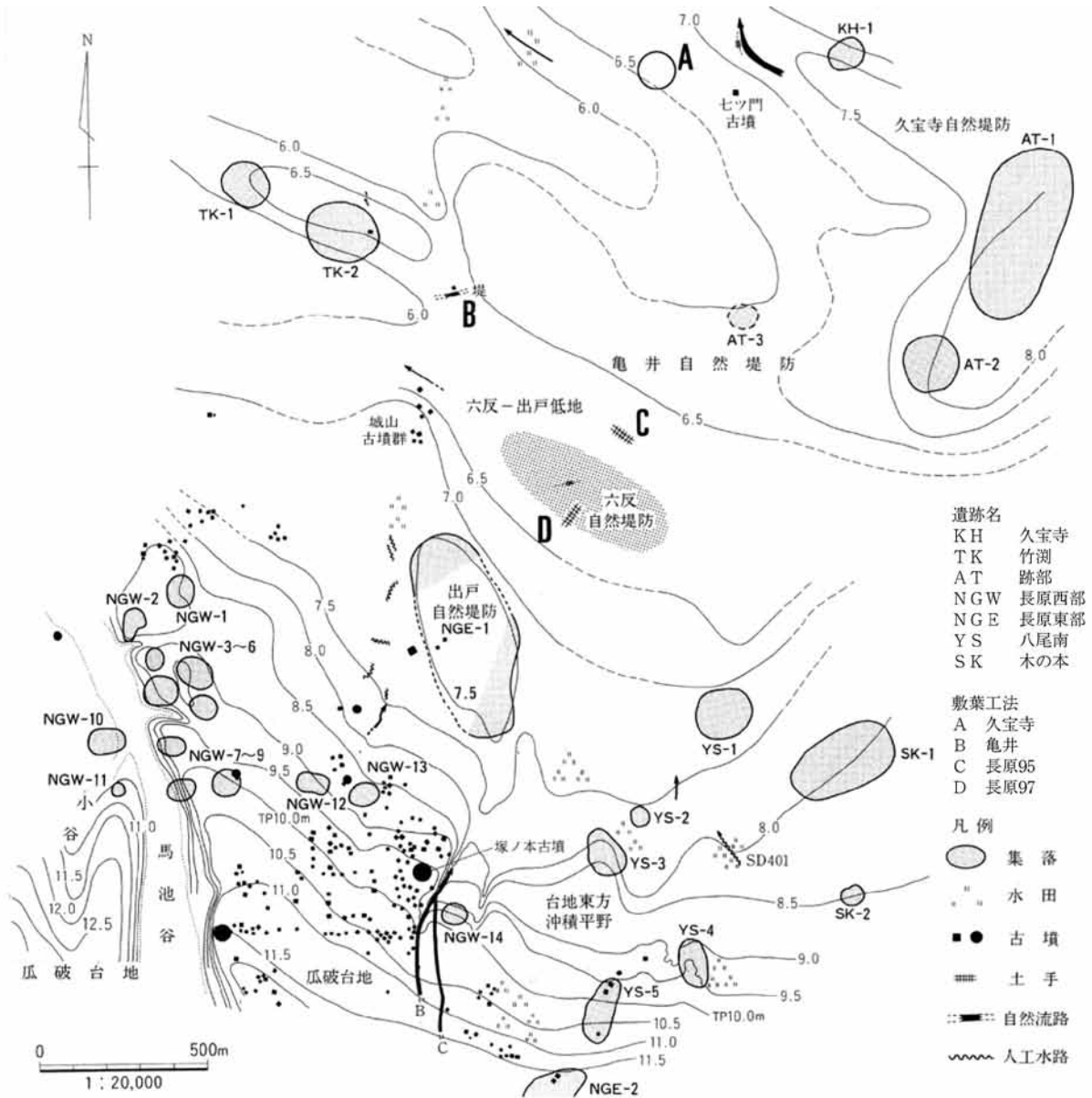


図9 古墳時代中期～後期前葉の地形復元図(註10を一部改変)

るとしている。そして事例7土手状遺構の機能は、灌漑用ではなく氾濫が周辺の集落や耕作地に及ぶのを防ぐために低地内に流路を固定することにあつたと考えている。

以上のことから六反―出戸低地の3事例には、亀井自然堤防あるいは久宝寺自然堤防に居住した集団が係わつた可能性が高いことがわかる。またその目的は六反―出戸低地の開発に乗り出したと考えるよりも、低地内に流路を固定する治水にあつたと考えられる。亀井遺跡堤の南に隣接して当時の水田(図8-1調査区3)が検出されていることを考慮すれば、未調査ながら亀井自然堤防の南側縁辺に水田が営まれたと推定でき、それらを氾濫から守る治水目的で、低地内に流路を固定する必要があつたと考えられる。

亀井遺跡堤は、亀井自然堤防を横断して北に抜ける小規模な谷部に築造されている。そこは、六反一出戸低地に流れ込んだ水の排水口の一つであり、氾濫時には洪水や土石流の集中する重要地点である。小山田が溢水対策として築造された堤と評価したように、堤西側の堆積は、砂礫からなる氾濫堆積で、それを見事にくい止めている。この事実こそ、本地点での巨大で強固な堤が必要であったことを示している。しかしこの堤も、MT10段階には、平野川の氾濫によって六反一出戸低地を埋め尽くした土砂によって途絶する。

4 まとめ

古墳時代前期以降、中河内地域で確認できた敷葉工法について紹介してきた。従来、敷葉工法は事例が少なく断片的であったが、限られた地域と時期の中で複数事例の使用実態を提示できたことが大きな成果と考えたい。その結果、いずれもが隣接する久宝寺自然堤防と亀井自然堤防に居住した人々によって築造された可能性が高いことがわかった。

ところで、中河内平野部ではその他の遺跡にも、面的に敷葉工法は浸透していたのであろうか。答えは否であるようだ。久宝寺遺跡のように、生産域での水路に敷葉工法が施工されたのなら、同時期中の河内地域の広大な生産域である池島・福万寺遺跡や志紀遺跡で見つかってもよさそうなのだが、確認出来ないのが実態である。また他にも多数の報告書を調べてみたのだが見つからない。周辺遺跡に伝わった状況は認められないのである。筆者はその使用に関して、遺跡間に格差があったと考えている。

古墳時代前期の久宝寺遺跡は、日本各地から持ち込まれた土器が多数集中する流通拠点の一つである。僅かながら韓式系土器も含まれており、それが韓半島をも含む広範囲の流通であったことがわかる。また古墳時代中・後期には、久宝寺遺跡の一角（久宝寺北遺跡）と長原遺跡、木の本遺跡や八尾南遺跡では、著しい数量の韓式系土器が出土する。前期とは比較にならないほどに、韓半島との交渉が盛行したことを示しており、渡来人の存在も推定できる。

以上のように古墳時代前期以来、中河内平野部は人・物・情報・技術が行きかう流通ルート上の地域である。持ち込まれた土器は、その流通の時期と交渉した地域を示しており、そこから物資、情報、技術が伝えられたことを示している。出土する韓式系土器は、渡来人がその交流に関与したことを示し、情報と技術の一つに敷葉工法が含まれていたであろう。筆者は中河内の古墳時代前期集落を検討して、交流ルートからはずれると、集落の様相が全く異なることを検討したことがある¹²⁾。それは他地域系土器がほとんど出土し

ない、また伝統的Ⅴ様式と評価されるように土器様式において庄内式を持たない様相となって現れる。また鏡、朱、吉備の特殊器台、木製威儀具、準構造船関連資料などの「高いランクの遺物」も流通ルートの諸遺跡に集中することになる。現状では敷葉工法の使用に関しても、それらと同様に集落間に格差があったと考えておきたい。

ところで今回は敷葉工法を取り上げたが、その他にもいくつかの土木技術が伝えられたようだ。それは古墳時代前期以降に確認できる技術であり、加美・久宝寺遺跡で確認された古墳時代前期の道や運河と推定される遺構、古墳時代中期の透過水制¹³⁾などである。これらも敷葉工法と同様に、当時の流通の活発化によって伝えられたのだろう。巨視的に見れば、それは古墳時代前期にあつては、久宝寺遺跡と一連の流通ルート上にあつた福岡県比恵・那珂遺跡群での道路遺構、奈良県纏向遺跡での運河も同様の視点で捉えられることになる。

註

- 1 工楽善通「古代築堤における「敷葉工法」」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1995
- 2 田中清美「河内湖周辺の韓式系土器と渡来人」『ヤマト王権と渡来人』（日本考古学協会 2003 年度滋賀大会シンポジウム 2）日本考古学協会 2005
- 3 本稿では堰の表面に植物を敷設したものは除外した。註 1 でも述べるように「堰の目つぶし材」としての役割があると考え。それは弥生時代前期から散見し、盛土のすべりと崩壊・沈下を防ぐことが目的の敷葉工法とは異なるからである。
- 4 (財)大阪府文化財センター『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』2007
- 5 (財)大阪府文化財センター『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』2004
- 6 長原遺跡では古墳時代以降にも 11 世紀頃の敷葉工法 2 ヶ所、敷葉工法と同じ効果をねらった表土積 1 ヶ所が報告されている。
- 7 大阪市文化財協会『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅰ』1998
- 8 大阪市文化財協会『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ』2000
- 9 大阪府教育委員会『1992・1993 年度 亀井遺跡発掘調査概要』1994。今回は本報告（図 8 の調査区 3）の遺構名称によつた。堤が最初に確認されたのは、図 8 の調査区 1 である（(財)大阪文化財センター『亀井・城山』1980）。なお図 8 上段は、註 13 に堤 80 - OD を追加する等の改変を行ったものである。
- 10 小山田宏一「亀井遺跡の堤と古代の治水」『古代探求』中央公論社 1998

- 11 高橋 工「第IV章第1節 長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ』大阪市化財協会 1999
- 12 山田隆一「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第3集 大阪府立弥生文化博物館 1994
- 13 小山田宏一「古代河内の開発と渡来人」『検証 古代の河内と百済』枚方歴史フォーラム実行委員会 2001

第2節 大阪の水制

1 はじめに

遺跡の発掘調査において、その性格や機能がわからない遺構や遺物が見つかることは多い。河川遺構で見つかる杭・杭列・乱杭の類もその一つである。河内平野は淀川や大和川等の沖積作用によって形成された平野で、埋没河川が検出されることは大変多く、それらは「自然流路」「自然河川」「流路」「河川」「河道」等として報告され、それに伴う状況で杭・杭列・乱杭が検出されることがある。河岸や堤防に接して平行していれば護岸杭の可能性が高いし、堰も良好に残存していればそれとわかるのだが、いずれの状況とも異なったり残存状況がよくないと、これらの杭・杭列・乱杭は、性格や機能については不明とされることが多い¹⁾。そしてその中には、明らかに「杭出し」に分類できる「水制」²⁾があると考えられる。一見すると、それは単なる杭列、杭列群である。

水制は近年まで、複雑な河川や水流の様相を考慮しつつ、目的に応じて使い分けて設置されてきた。構造は単純なのだが、その背景には複雑な河川や水流を見分ける経験や治水の知識と技術が必要とされる。今回は後に紹介する「出し類」の中の「杭出し」水制をあつかう。それによってわが国における水制使用の一側面を概観するとともに、その起源についても言及することが目的である。杭出しは、古事記にも記載される最も古い河川構造物の一つだが、遺構としては構造が単純なだけにそれが水制と気付かれない場合が多い。一方でそれ以外の水制は、その出現時期が新しいことにもよるのだろうが、あつかうには事例が少なく時期尚早と考えるからである。

2 水制研究の概要

水制とは、川岸や堤防から川の中心部に向けて突出して設けた河川構造物である。その目的は、流水を弱めて水制背後に土砂を沈殿させて護岸として、流水を川岸や堤防に衝突しないように中央部に追いやり、川筋を安定させることにある。以上の治水目的の他にも、川舟を運行する航路幅や水深を維持する役割もある。

水制にはいくつかの分類方法がある。詳細は眞田秀吉³⁾と山本晃一⁴⁾の所論によりたいが、本稿では杭出し水制をあつかうので、それを中心に概観しておく。水制を形態的に分類すると大変多くの種類があり「出し類」「牛類」「杵類」に3分類でき、さらに例え

ば「出し類」には材料によって「杭出し」「土出し」「石出し」「籠出し」やほか数種類に細分できる。構造的な分類では、水流が水制の中を透過出来る構造か、出来ない構造かの違いによって、前者を「透過水制」、後者を「不透過水制」と区分する。透過水制は、主に緩流河川で設置される水制で「杭出し」はその典型である。平時には部材の形状抵抗で流勢を弱めて土砂を堆積させ、洪水時にはそれによって河岸や堤防の洗掘を防ぐ。一方、不透過水制は急流河川に設置されることが多く「土出し」や「石出し」がそれで、出水時の水刎ねが目的である。設置する方向にも上流に向ける「上向水制」、水流に対して真っ直ぐに出す「直角水制」、下流に向ける「下向き水制」の3者があり、土砂の堆積や深掘れする位置や程度が異なる。また水制の使用目的では、水衝部（水流が川岸や堤防に激しくあたる所）に設置する場合と、その対岸側に設置する場合がある。前者は水を刎ねて水流を河岸から遠ざけることで、後者は土砂を堆積させて砂洲を固定することで、常水路を固定する事が目的である。

現状での水制研究は、文献によるものが主流であり、そして対象となる時期は近世以降である。文献とは多くが江戸時代中期以降に成立した、行政一般のことを記した各種の地方書である。それは幕府、諸藩の郡代、代官、郡奉行らが農村支配のために使用した地方実務に関する手引書であり、土木に関する内容も含まれる。室町時代後半には戦国大名の領地支配によって、地域の河川に合った各種の水制が考案されていたのだが、これらを治水行政のために分類・体系化がなされている。

その地方書の記述から、当時非常に多種類の水制があったことがわかり、それが水制研究の出発点になっている。一方それ以前の状況は、文書として残されていないので、研究の内容は極めて貧弱である。ここでは、先の眞田と山本の所論から、弥生時代から近世の水制がどのように考えられているのかを紹介しておこう。

①弥生時代は、治水・利水、河岸処理技術の始まった時期である。水田へ導水する水路に井堰を築いたり各所に杭や矢板の打設を行うが、のり崩れを防ぐ護岸的な施設にとどまっておらず、水を刎ねる水制的なものはないと考えられている。

②古墳時代の4～5世紀代には、日本書紀にみられるような茨田堤の築造や難波堀江の開削など大規模な治水事業が行われる。それをなし得たのは、渡来人による土木技術の高度化もその一因に上げられる。眞田氏はこの時期に、古事記や万葉集の内容から竹蛇籠や杭工・柵工が施工されたと考えている。しかし、これが水制的な構造物であるのかの説明はなく、確認のしようもない。

③飛鳥時代以降にも、やはり中国・朝鮮から先進的な各種技術を導入することで大規模な治水事業が実施された。しかしこれで適用の場が拡大したであろうが、河川処理技術自体は古墳時代と大きくは変わらないと考えられている。

④その後、律令制の崩壊にともない大規模な治水工事は行われず、技術的にはほとんど発展しない段階を経て、室町時代後半には戦国大名によって領域毎での地域特有の水制工を含む河川技術の発展段階にいたったと考えられている。武田信玄による御勅使川・釜無川の治水事業はその代表例としてよく取り上げられる。そして江戸時代に入って河川改修が活発化し、江戸時代中期に体系化されたと考えられてきた。

つまり近世以前については文書がないので、竹蛇籠や杭工・柵工が施工されたと推定されているとはいえ、それが水制的なものであったのかどうかも含めて、具体像については全くわからないのが実態で、むしろ考古学的な手法によって解決しうる課題なのである。

3 大和川の水制⁵⁾

まずここでは、新大和川（以下、大和川という）で確認できる近世の水制をその完成型として提示し、水制がどのようなものなのかを確認しておきたい。なお大和川とは、当初には奈良盆地から生駒山地南端を通過して河内平野に入るや北東方向に流れた大和川（以後、旧大和川という）を、1704年に石川合流点から西方への流れに付け替えたものである。大和川には、近世の良好な杭出し水制が確認できる。享和元年（1801）に刊行された『河内名所図会』には水制が描かれ、明和7年（1770）以降に成立した『大和川筋図巻』には詳細な記録がある。また藤井寺市小山平塚遺跡の発掘調査では、当初の堤防左岸と敷設された水制や護岸杭が確認されている。

『河内名所図会』（図1）⁶⁾ 大和川と石川が合流する地点が西上方より俯瞰した状況が描かれている。右岸に接して複数の杭列が描かれており、これが杭出し水制である。二重堤より下流側に3～4群の杭列群（図1の黒マル部分）が描かれており、各群は数条の杭列で構成される。その杭列は、単に杭を打設しただけで、なんらの上部構造を持たないことも確認できる。また河川の状態をみれば、右岸では複数の杭列が直接に堤防と接しているのに対して、左岸では砂の堆積が図示されているので、水制は流水が堤防に衝突する水衝部側に築かれたことがわかる。また5艘の川舟が描かれている。これは旧大和川の水運を担っていた剣先舟で、付け替え後も運行していたものである。大和川は水深が浅いので、舟の運航ルートを確保するのにも水制が必要であったのであろう。



図1 『河内名所図会』 (註6を一部改変、黒丸が杭出し水制)

『大和川筋図巻』(図2)⁷⁾ 由緒書がないので詳細は不明ながら、国役普請堤を支配する大坂代官が兼務して、堤防を管理する堤奉行の関係者か、堤奉行配下の川方役人が、大和川管理のために作られたと考えられている。奈良県三郷町立野から大和川河口部までの範囲が、長さ 7.26 m の絵図として描かれている。堤の国役普請・自普請の別、村の位置と境界、新田の状況、川幅、剣先船のルートや船着場とともに、多くの杭出し水制が描かれ、その規模や破損状況が詳細に記述されている。

図2は『河内名所図会』とほぼ同じ部分を示したもので、両者の水制が描かれたか所もほぼ同じである。右岸中程には「刎杭九ヶ所」(下線は筆者、以後同じ)と記載し杭列9条が図示されている。他にも「字コセカ原ヨリ溝尻迄乱杭十八組」と記載し杭列18条を図示する箇所があるが、記載内容と図示された杭数が合わない箇所も多い。杭、刎杭、乱杭などと記載するが、いずれも堤防から下流に向けて突出させた杭列として描かれている。「除杭長五間杭四十五本内四十三本朽失」と記載して杭2本を図示するように、破損状況を克明に記載したか所も多い。また「根杭四百六間」と記載されるが、根杭の場合は図が描かれないのは護岸杭と考えられる。

これらのことから水制は、一定の範囲に複数の杭列・乱杭を打設して構成される事、護岸杭と併設して役割を果たしたことがわかる。さらに杭名称や単位を呼び分けていること



図2 『大和川筋図巻』(堺市博物館所蔵 部分)

から、水流の状況や目的とする役割に合った水制や護岸を設置したことも考えられる。なお、杭出し以外の水制が描かれていないことも重要で、石川との合流部分から下流の大和川は流れが緩やかなので、杭出し水制が設置されたと考えられる。本資料は水制が公的機関によって、嚴重に維持・管理がなされた河川構造物であったことを示している。

発掘調査⁸⁾ 昭和62年、藤井寺市教育委員会による小山平塚遺跡の発掘調査で、水制が確認された。調査は、雨水ポンプ場放流渠の建設工事に先だって行われたもので、大和川堤防左岸の幅約13mをたち割り、弥生時代後期の遺構面まで掘削された。大和川に関する調査成果として、築堤に際して整地や掘り込み作業は行わずに盛土していること、築造当初の堤防が断面で確認されて規模や工事内容が明らかになったことである。また護岸杭と水制が確認でき、『大和川筋図巻』、『河内名所図会』の具体的な内容が確認で

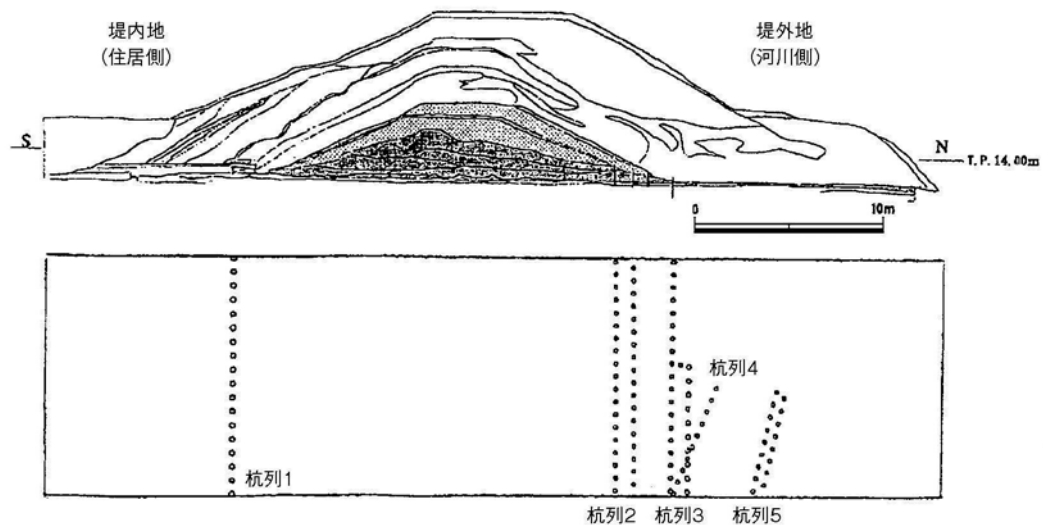


図3 小山平塚遺跡の大和川左岸堤防と杭列模式図(断面スクリーンが当初の堤防)

きたことは大きな成果である。その一方で堤防の規模は、中家文書「川違普請大見積書」の記載内容よりも小規模であることが判明し、新たな課題となった。

杭列は堤防に平行して続くもの3条と、やや北側に振って途切れるもの2条が確認されている（以下、図3に示す仮の遺構名で記載）。これらの杭は、約30cmと密な間隔で垂直に打設されている。杭列1は、当初の堤防裏側法尻から約1.8mはなれた位置に打設されており役割はわからない。堤防表側の杭列2は、堤防盛土内に70～90cmの間隔をあけて確認された。この2条は堤防裾部のすべりによる崩壊を防止する役割があり、千鳥に打設するのはその役割を強めるためであろう。また杭列3は堤防表側法尻部に20～30cmに打設されており護岸杭である。なお東半部が2列になる理由は不明である。杭列4・5が杭出し水制であり、前者は1条で、後者は2条であるが同時に存在したのかは不明である。いずれも堤防から下流に向ける。杭列4は全長6m、杭列5は図上で復元すると堤防に約22°の角度で取り付け全長22m前後になる。また杭列4の各杭は公表された平面図によると、模式図のように直線的ではなくジグザグで10～30cmの間隔で打設され、また杭列5の2条の杭は千鳥の配置で打設されている。これらは水の抵抗をより強く受けるための工夫と考えられる。

以上に紹介してきた近世段階の大和川の水制をまとめれば、次のようになる。

- ①大和川には、堺港まで多数の水制群が存在した。そして杭出し以外の水制の記載はない。
- ②水制は、公的機関によって厳重に維持・管理された。
- ③杭出し水制は、対象箇所に複数の杭列を打設したものである。
- ④兩岸ともに設置する意識はなく、水流の状況と目的に応じて対象か所に設置する。
- ⑤杭を直に打設するだけの構造で、斜め杭や横木で固定することはなく、上部構造もない。
- ⑥杭列は2列の場合は千鳥に打設される。水流を効率的に受ける目的と考えられる。
- ⑦水制杭は、護岸杭や堤防内に崩れ防止杭を併設することもある。
- ⑧杭は直径10cm程度の自然木の先端を尖らせたものである。

4 大阪の水制遺構

過去の調査から8遺跡、10例の杭出し水制⁹⁾が確認できる（図4）。

1) 茨木市玉櫛遺跡 a 第Ⅲ遺構面自然流路30019内杭列（図5上段）¹⁰⁾

自然流路30019は、出土遺物からすれば12世紀前半には流れはじめ、14世紀前半に埋没する。調査区での規模は、最大幅約22mで最深部約1.7m、北東から南西に流れて

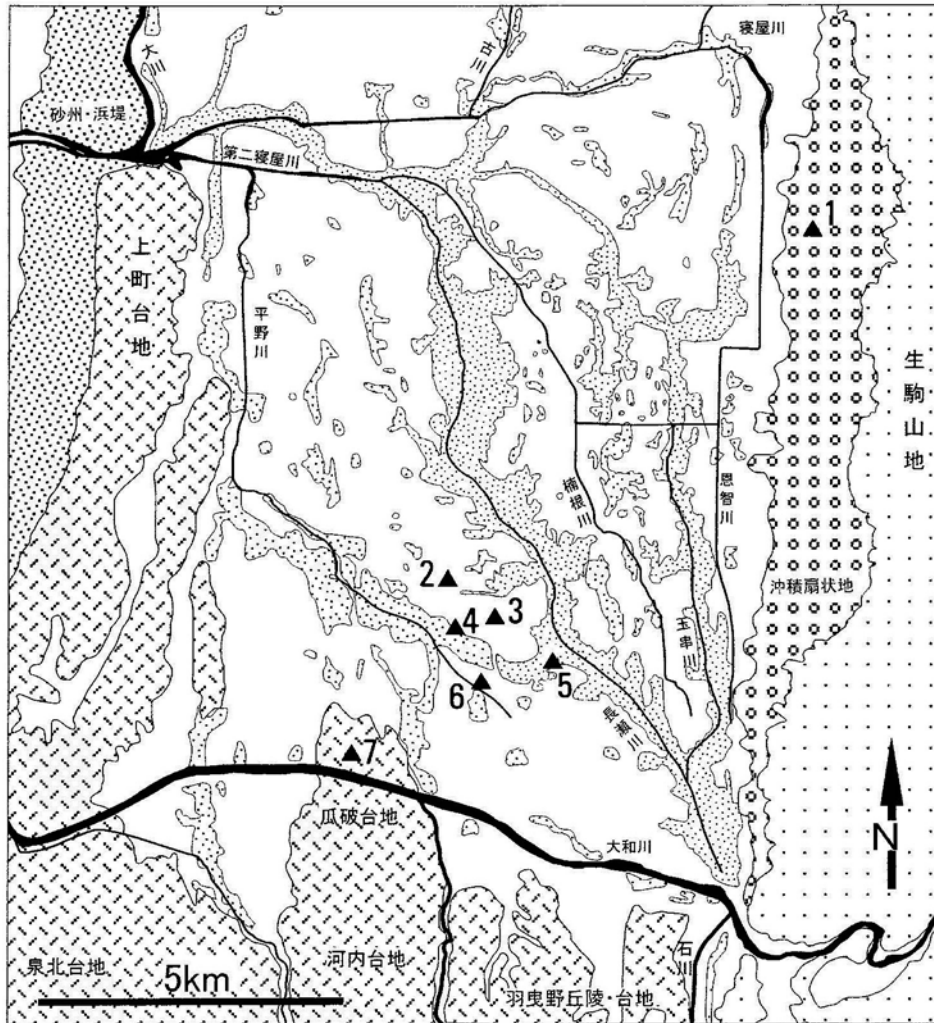


図4 河内平野の水制(1西ノ辻、2久宝寺南、3久宝寺、4亀井北、5植松、6長原、7長原・瓜破)

おり、右岸は比較的なだらかで、左岸は急激に深くなる。このことは左岸が水衝部であることを示し、そこに水制である杭列1～6が確認されている。右岸でも杭が多数確認されているが、多くが調査範囲外で詳細はわからない。杭列8・9と報告されているが、左岸とは異なる分布を示す。

左岸で確認された杭列1～6は杭出し水制で、良好に残存する。いずれも1条の杭列で構成され、杭列1・2などからみて10数本の木杭を20～40cm間隔で、左岸傾斜の中位から流れの下流方向に向かって5～6m程度まで打設したものである。断面図や写真図版をみると、流れにさらされていた上半部は多くが欠損し、また各杭の周囲は流水で挟られて砂が入り込み、激しい流れにさらされた事を示している。

右岸の杭群は、分布状況がわからないので判断は難しい。杭列8・9と報告されているが、左岸のように1条の杭列ではなく、杭列8は岸に平行しているので護岸杭とも考え

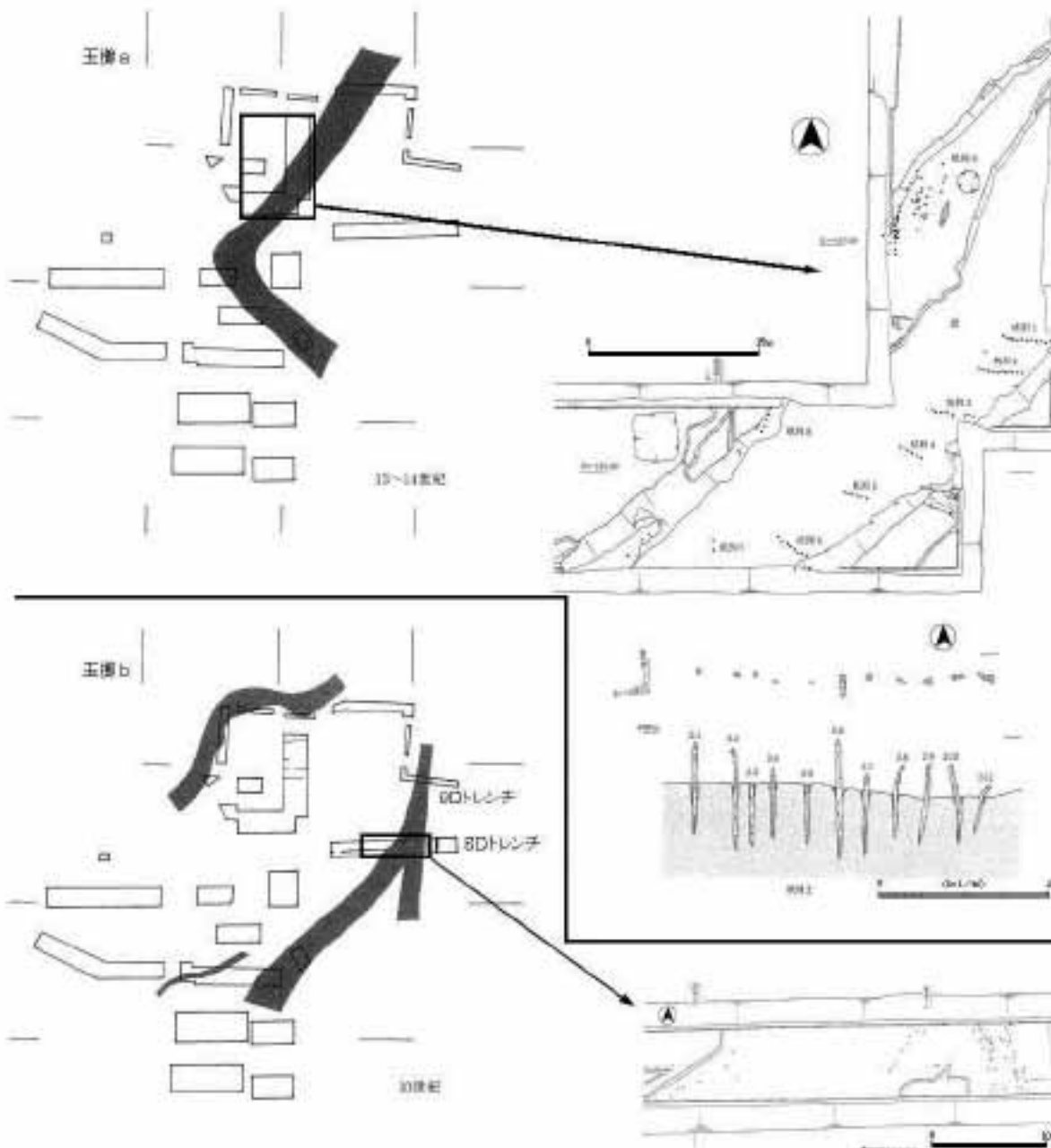


図5 茨木市玉櫛遺跡 (註10を改変)

られる。一方、杭列9の打設された部分は比較的なだらかと報告されており、それは水衝部の対岸に形成される地形である。本稿では杭列9は、土砂を堆積させて砂州を固定させて、水路を固定することを目的に設置された乱杭形式の水制と位置付けておきたい。

杭材は34本が報告され、3つの共通点が指摘されている。つまり①比較的真っ直ぐな材を選ぶ、②先端を尖らせる、③補修して打設された2本以外の直径は5～6cmにおさまることである。なお図示された杭は、すべてが小枝を除去した程度の自然の丸太である。また樹種はアカマツ20とスギ10が主体で、サカキとヒノキが各2本である。杭列4はアカマツ、杭列9はスギのみで構成されているが、他の杭列の樹種は混在している。

2) 茨木市玉櫛遺跡 b 第 V 遺構面溝 80305 杭列 (図 5 下段) ¹⁰⁾

8 D トレンチ溝 80305 と、9 D トレンチ溝 90209 は一連の溝なので、前者の遺構名で記載する。規模は、9 D トレンチで幅約 12 m、8 D トレンチで幅約 35 m、北から南方向に流れており、8 D トレンチでは不明瞭ながら流路の切り合いがあり、南南西方向の流路が先行する ¹¹⁾ とされている。溝の存続時期は 10 世紀前半から中頃である。

杭列は、9 D トレンチでは右岸に、8 D トレンチでは両岸に見られるが、規則性は見られないと報告されている。9 D トレンチ右岸の杭列は護岸杭と考えられる。一方で 8 D トレンチの杭列で、右岸は護岸杭、溝の中央やや東で 8 本の杭で構成され南西方向にのびる 1 条の杭列を左岸に築かれた水制と考えたい。溝はもともと南西方向への流路が先行して存在し、逆 Y 字状に分岐するように復元されているのはこの左岸部分が水衝部であり、そこに杭列が設置されたことを示している。この部分で川幅が広がるのは、流水が左岸を削ったからであり、左岸に平行して密に打設された 2 条ほどの杭列はその流水に抗するための護岸杭であり、そしてこの水制は本来の南西方向へ流水を刎ねて向かわせる目的で打設されたものと考えたい。なお調査範囲の南と北隣接地に、自然流路 30019 内杭列と同様に複数の水制杭列の存在を推定したい。

杭材は 7 本が報告されており、みかん割りのままで形状を整えない杭が目立ち、太さは 3 ~ 6 cm の細めの杭を含む。図示された杭は、樹皮が残り湾曲したアカマツの自然の丸太 2 本、他 5 本がみかん割りのスギ材である。みかん割り材の使用が特徴である。

3) 東大阪市西ノ辻遺跡 a 第 22 次河川 SR11 杭列 (図 6 右) ¹²⁾

調査地は東から西にゆるく蛇行する埋没谷で、奈良時代には埋積が進んで浅谷地形を呈していた。SR11 はその浅谷を南東から北西方向にやや蛇行して流れる河川で、規模は幅 5.4 m、深さ約 1 m である。小規模な河川であるが、埋土下層は垂角礫を多量に含む砂礫層で、当初の流れはかなり激しいものである。河川の存続時期は、奈良時代前期のごく短期間である。なお、杭列の周辺から人形や国産の小型海獣葡萄鏡、獣骨、他地域から持ち込まれたかまど形土器を含むミニチュア土器や穿孔のある土師器など、平城宮などで出土するのと同様の祭祀遺物が出土している。遺物は摩滅しておらず、出土状況から祭祀は河川の東岸で行われたことがわかる。

杭は 58 本が確認され、河床に深さ 20cm 前後打ち込まれていた。杭は水流に対してやや下流に向けて打設された杭列 10 条として報告されている。杭列どうしは約 40 ~ 60cm の間隔をあけて打たれ、列の杭どうしは 5 本前後が 40cm 程度の間隔で打設されている。

杭列どうしあるいは杭列内の杭どうしが40cmの間隔で打設されており、他の杭出し水制の状況からすると杭列と考えるよりも乱杭形式の水制である可能性もある。また各杭列を構成する杭の太さや間隔が異なるので、短期間の内に必要に応じて追加されたと考えられている。なお杭列と杭列の間には横に倒れた状態で杭が出土した部分もあるが、固定された状況ではない。

杭材は真直ぐなものや曲がったものもあり不揃いである。直径4～7cm程度、長さは50～85cm前後で図化されたすべての頭部は折れているので本来の長さはわからない。自然木の丸太材の小枝を除去し、先端を尖らせただけのものが主体である。樹皮も除去するが部分的に残したままのものも多い。図化された杭の樹種はモミ属7、カヤ2の他、マツ属、シキミ、ヤブツバキ、サカキ、広葉樹が各1点である。

4) 東大阪市西ノ辻遺跡b 第22次河川SR17-A杭列(図6中)¹²⁾

西ノ辻遺跡aとほぼ同様の地点であるが、当該期には谷地形はほぼ埋没する。河川の規模は、幅約25m、深さ0.7m以上で、南東から北西方向に流れる。埋土の砂礫は小さく少量なので、緩やかな流れに変化したことがわかる。河川の存続時期は鎌倉時代末期～室町時代後期で、左岸から河床面にかけて杭列が確認された。なお馬の頭骨5頭分と牛の下顎骨が出土しており、祭祀が行なわれたと考えられる。

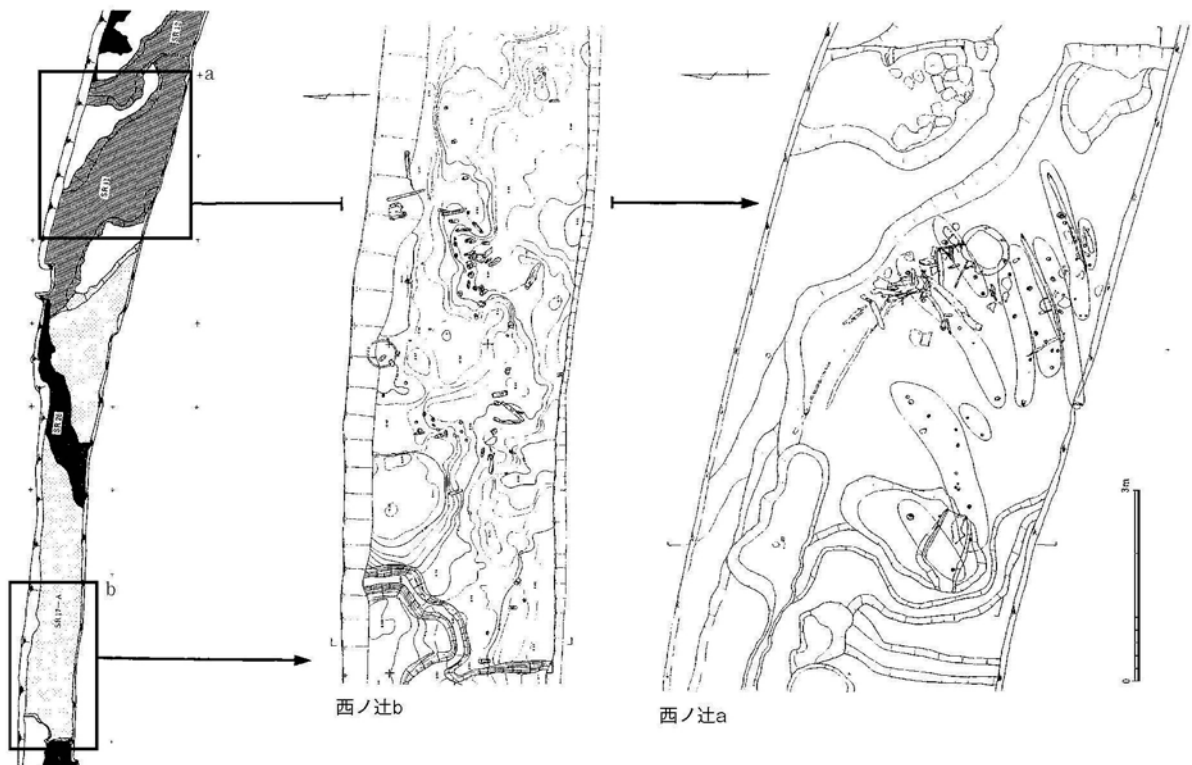


図6 東大阪市西ノ辻遺跡(註12を改変)

杭列は左岸から、水流に直行あるいはやや下流に向けて打設された3条の杭出し水制と考えられる。杭は総数97本が確認され、垂直方向に打ち込まれており、横木や斜め方向に打設されたものはみられない。各杭列は1.4m程度の間隔を空けて打設されたが、各杭の間隔や打ち込まれた先端部の深さがまちまちなので、何回かの修復の結果による考えられる。破損が著しいが良好に残存する部分では、杭列は直線的ではなく、より水流に抵抗するように千鳥に打設されている。

杭材は河川SR11杭列の材と類似する。真直ぐなものや曲がったものがあり、自然木の丸太の小枝と樹皮を除去し、先端を尖らせたものである。直径3.5～5.5cm程度で、頭部の折れていない杭2本の長さは95cm程度である。西ノ辻遺跡aよりも細い杭材でやや規格化されたようにも感じられるが、樹種はモミ属18、マツ属8、コナラ属8、シキミ5、ヤブツバキ3、カヤ2、ヤナギ属2、ケヤキ2、クスノキ科2、シラキ2、サカキ2、ツガ属1、シイノキ属1、ヤマグワ1、ナツツバキ属1、広葉樹散孔材2などで構成され、全く統一性はない。

5) 八尾市植松遺跡 第2面自然流路内杭列 (図7下段)¹³⁾

調査で確認された自然流路とその南岸は、旧大和川本流の旧平野川であり、杭列の時期は奈良時代後半(8世紀後半)～平安時代初頭(9世紀初頭)である。昭和47年の地形図には、その旧平野川の痕跡が明瞭に残っており、確認された南岸から北岸までの河川敷幅は約180mである。平安時代までにはそこでの沖積作用が終了したことがわかる。流水の方向は北東から南西である。大阪では最大クラスの自然河川に築造された大規模水制の一部と評価できる。なお墨書土器9点が出土しており、内訳は人面墨書1、文字1、絵画1以外は記号的な文様である。また高坏が主体で鉢、壺、カマドからなるミニチュア土器も多数出土しており、水に係わる祭祀が行われたと考えられる。

杭出し水制は、左岸から下流方向に、総数291本の杭を打設した約70mもの杭列で、さらに北西調査区外にのびる可能性もある。調査者は杭列に5つの遺構名称を付して報告しているが、一連の構造物と考えたい。ただし杭の打ち込まれた深さが深淺2種類に分かれるので、杭列が複数時期にわたって構築・修復されたことも確かである。その場合でも、その2種は全体にわたるので、当初から長大な杭列であったと考えられる。杭列の杭どうしの間隔は20～30cmであり、そして一直線ではなく30～40cmの幅をもって平面形で千鳥に配置されている。杭列の杭は垂直に打設されるのみで、堰やシガラミのように杭を交差させたり、横方向に木材や板をわたした痕跡はない。なお横に図示された

杭は、北からの洪水で杭先を北にして倒れたものである。

この水制の平面形態は、大変特徴的である。後に紹介する亀井北、久宝寺南、長原・瓜破も同種の事例と考えるので、ここではやや詳しく記載しておく。図7下段の平面図を見ると、左岸から下流方向に直線的にのびる長大な杭列1条と、10 m程度河川の内では左岸に平行させて打設された短い杭列があり、途中で交わり「Y」字状を呈するように見える。後者の杭列は、下流に続かないので、通常の護岸杭ではないと考える。左岸から伸びる1条の杭列の上流側に短い杭列を付加したというのが筆者の理解である。その目的は、付加した杭列が最もたくさん倒れている状況から、水制と堤防との取り付け箇所の補強にあると考えている。

杭は直径5～7 cm程度の自然木の丸太で、小枝をはらって先端を尖らせただけのものがほとんどである。刺さったままの杭は上部が欠損するが、倒れた杭は本来の長さをとどめており最長3 m、多くが2 m程度である。84点の樹種が報告されており、アカガシ亜

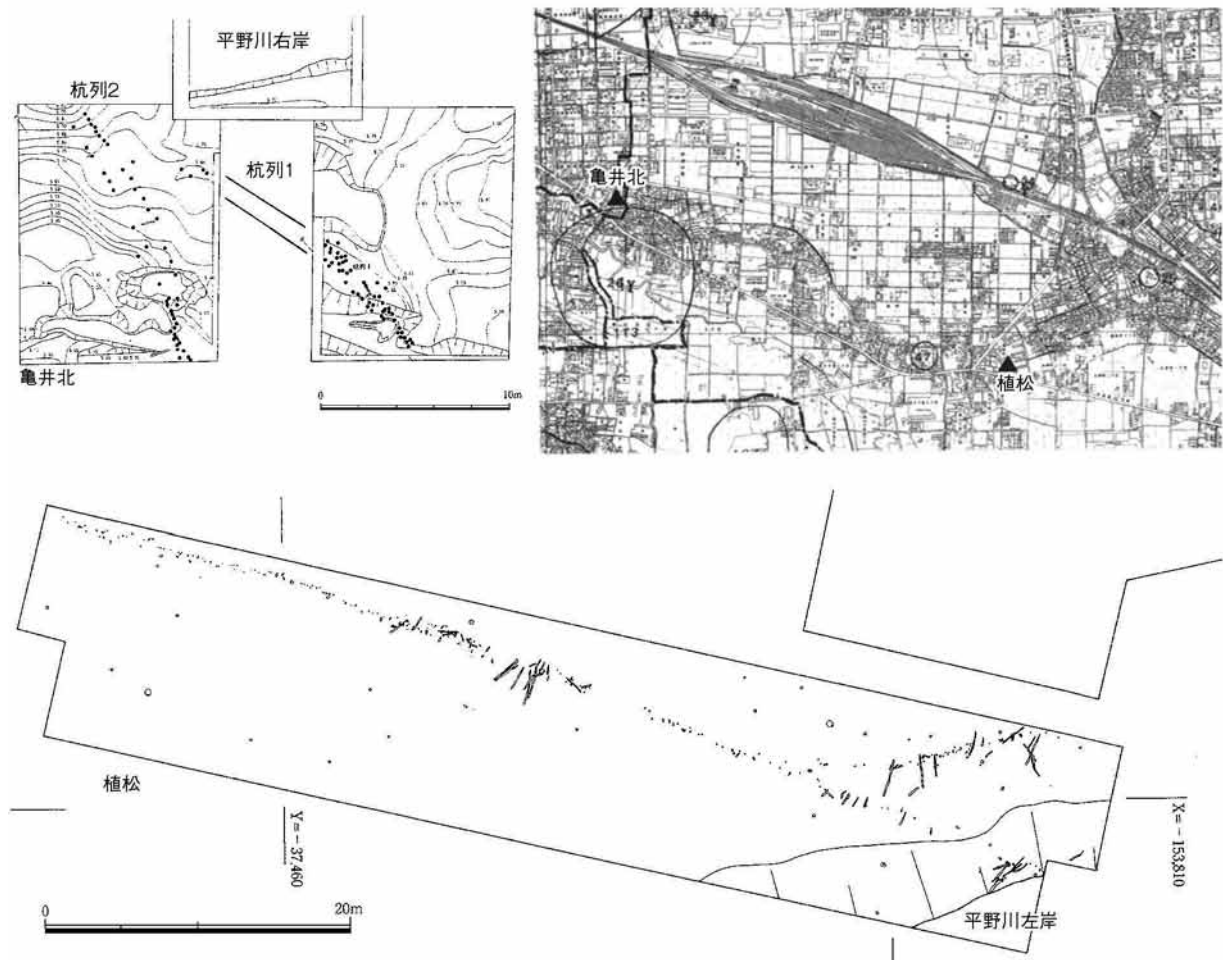


図7 大阪市亀井北遺跡と八尾市植松遺跡(註13・14を改変)

属 51 が最も多く、サカキ 9、コナラ亜属 8、サクラ属 7、ヤブツバキ 3 がそれにつき、スギ、マツ科、ムクノキ、ヤナギ属、カキノキ、不明が各 1 である。同時に行われた花粉分析の結果、当時の植生はカシ・シイ類の常緑樹やモミ・ツガ・マツ・スギ等の針葉樹が主であり、これは杭の樹種とも一致するので、杭材は周囲の入手しやすい樹木で作ったことがわかる。

6) 大阪市亀井北遺跡 (その 3) 自然流路 NR6201 内杭列 (図 7 上段左)¹⁴⁾

NR6201 は奈良時代後期の旧大和川本流の旧平野川であり、水流の方向は南東から北西へ、調査ではその北岸が確認された。埋土は砂・粗砂で、河床は強く抉られていて激しい流れであったことがわかる。特に杭列周囲の河床が不規則に著しく抉られているのは、激しい流れで杭周囲に生じた水流の渦によって洗掘されたことが原因である。南に隣接する亀井遺跡の調査¹⁵⁾では、NR6001 として主流路の南岸が確認されており、その間の河川幅は約 195 m である。また先に紹介した植松遺跡の巨大な水制も、旧平野川で同時期の河川構造物であり、1.8km 下流に位置する。なお埋土の遺物はほとんど摩滅しておらず、墨書土器 7 個体、ミニチュア品を含むカマド 6 個体、その他のミニチュア土器、「木」と刻んだ鉄斧 1 点が出土しており、近くで祭祀が行われたと考えられる。

流路内で右岸付近から設置された杭列 2 条 (杭列 1・2) が確認され、これを水制と考える。いずれの杭列も約 30° 上流に向け、約 3 m の間隔をあけて打設されている。北岸に取り付く部分から 15 m 程度が確認されたが、さらに南部は調査区外にのびる。杭列 1 は、62 本の杭がほぼ垂直に打設されたもので、幅約 1 m の範囲内に不規則に打ち込まれており、南方に行くにしたがい幅が狭くなり 1 条になる。杭列 2 は、53 本の杭がほぼ垂直に打設されたもので、幅約 1 m の間隔で 2 列が千鳥に打ち込まれており、南部分で西に方向を振りつつ 1 条になる。以上のように二つの杭列は若干異なった状況を呈しているのだが、巨視的には植松や長原・瓜破、久宝寺南と同様に平面形が「Y」字形を呈する事例と考えられる。特に後述する長原・瓜破の事例とは酷似している。そう考えれば両方の杭列は、南東方向にかなり伸びる可能性が高い。なお NR6201 の北岸部分は、その検出面から急激に 1.7 m 程度落ち込んで河床になる。この北岸の急激な落ちは、水流が激しく衝突して形成されたものと考えられ、本地点が水衝部であることを示している。

杭材は、直径 10cm 程度の自然木の丸太で、樹皮がついたまま先端を 3～4 方向から削って尖らせたものが主体である。杭列 2 の 53 本中 8 本が加工木である。刺さった状態の杭は、上部が欠損し本来の長さをとどめないが、中には 1.5 m 以上の杭も確認できる。

7) 八尾市久宝寺南遺跡 (その4) 第4遺構面河川I内杭列 (図8)¹⁶⁾

大阪府で最も早く水制と評価された事例である。河川Iは、旧大和川から分流した旧平野川の支流と考えられ、水流の方向は南東から北西であり、下層は急激な流水によって形成された粘土ブロックを含む微砂・粗砂層である。存続時期は8世紀～10世紀前半である。墨書土器が6点出土した。1点には「狛大」と書かれており、狛は狛を指し、渡来人である大狛連か狛氏系の人物の名。「税」の崩し字も確認でき、官衙的性格が認められるなら「税所」を意味するとされている。他に馬の頭蓋骨片を含む馬骨10数点が出土した。また遺物は杭列周辺で多く出土することが報告されている。

流路内で左岸から設置された杭列4条が杭出し水制と考えられている。周辺調査の成果から、調査区は河川Iが若干西に流れを変える屈曲部直前にあり、また河川I河床の標高が右岸に向かって深くなることも考慮すれば、東側の調査区外が水衝部である可能性が高い。そうすれば、本杭列群は水衝部とは反対側に設置された水制と考えられる。

杭列は東西第1・2・3杭列 (以下、「東西」は除外する) と南北杭列の4条である。なお第2杭列の残存状況は悪い。杭列には横木等は確認できず、垂直方向に打設された杭だけで構成される。杭列の規模は、第3杭列が7m以上と言っているのみである。最も良好に残存する第3杭列を検討すると、本事例の杭列は60～90cmの間隔で直線的に打設されたものである。また本杭列に取り付くように確認された南北杭列も同じ間隔と深度で打設されているので一連のものと考えられ、植松遺跡などと同様の平面形が「Y」字形を呈する事例と考えられる。

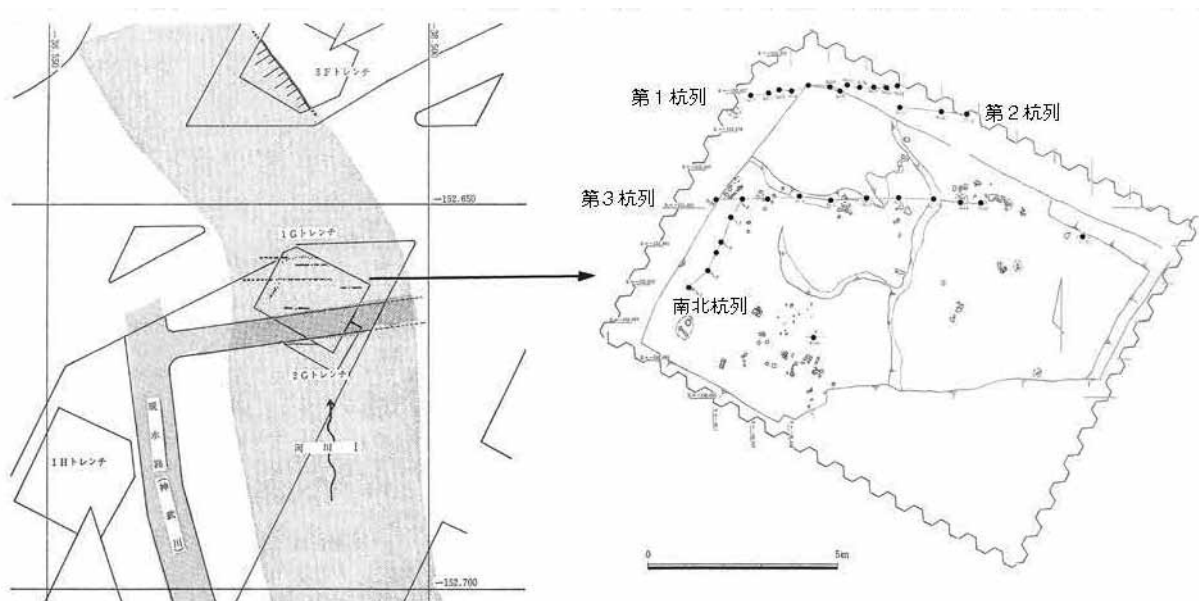


図8 八尾市久宝寺南遺跡(註16を改変)

杭列には時期差があり、平面分布と打設深度から以下のように検討されている。

①第1杭列は各杭の間隔がまちまちでしかも密である。そして打設深度は3群（深い群からA・B・C群）にまとまる。流水によって運ばれた砂が堆積し河床面が上昇することが原因で、時期差を反映しており、深い群ほど古くA群→B群→C群の変遷を想定する。

②第2・3杭列は各杭がほぼ等間で打設されているので一時期と考えられる。しかし打設深度は異なり、第3杭列と第1杭列A群、第2杭列と第1杭列B群が共通する。

以上の状況と出土遺物から、8～9世紀に第1杭列A群+第3杭列+南北杭列、9世紀後半～10世紀前半に第1杭列B群+第2杭列、それ以降に第1杭列C群の三段階の変遷のあったことが推定できる。

杭は計32本で、1本が一辺5cmの角材である以外は自然木の丸太で、先端を尖らせただけのもので、曲がった材も含む。直径は10～18cmが多いが、第3杭列は15cm以上の太めのものが目立つ。

8) 大阪市長原遺跡 NG97 - 52次調査杭列B (図9)¹⁷⁾

調査区の規模は63×10.3mであり、全域が古墳時代中～後期に形成された氾濫性の堆積物で厚く覆われる。水流方向は、北東から南西方向である。この堆積層内の基底付近で、水流に平行する方向で土手状遺構が確認された。この土手状遺構は自然流路の東岸付近に築造された堤であり、築造過程で敷葉工法が採用されている。土手状遺構の規模は、両端が河川の浸食で流出しており、現状は幅約1.6m、高さ約0.5m程度である。その流路内で、2条の杭列が確認されている。

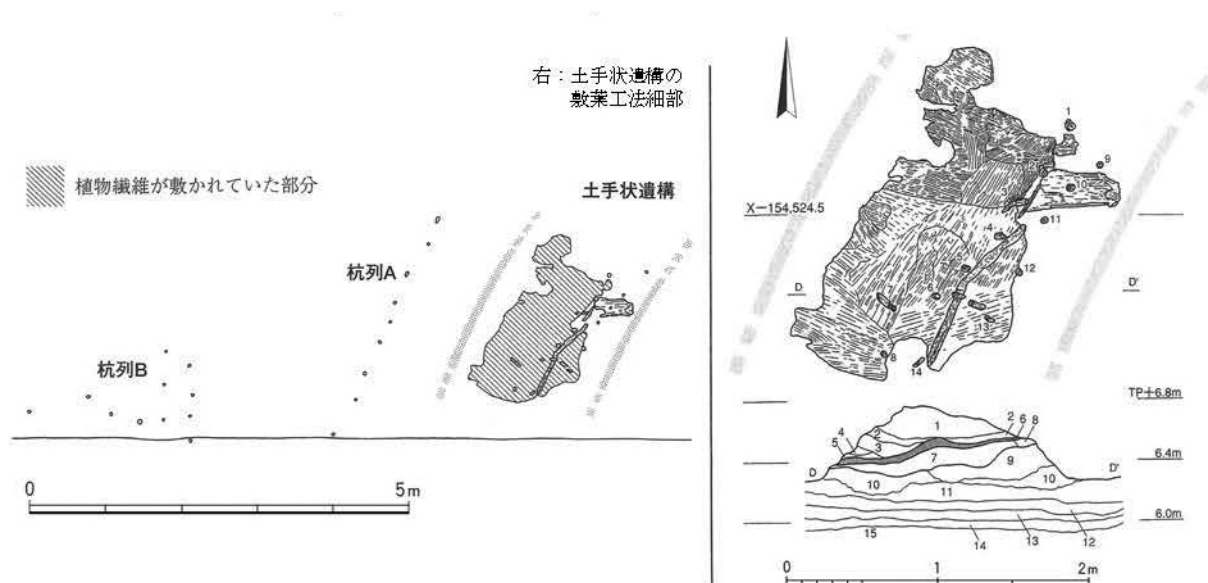


図9 大阪市長原遺跡(註17を改変)

杭列Aは、土手状遺構から西約1mの位置で平行して確認¹⁸⁾された。護岸杭と考えられ、杭どうしの間隔は0.2～0.5mである。杭列Bは杭列Aの西側で確認されたもので、「南北方向に2列、東西方向に1列の合計10本の杭で構成」されると報告されている。しかし南が調査区外で全体像はわからないのだが、筆者は乱杭形式の水制と考えている。

杭材は両者ともに、自然木の丸太で小枝を払い大半は樹皮を残したまま、先端を数面加工して尖らせたもので、直径2.5～4.0cm程度である。ところで土手状遺構の盛土内にも杭列2条が伴う。その杭材はやはり樹皮を残す自然木の先端を尖らせた丸太で、直径は3.5～4.0cmである。また打設された深さは、杭列は標高5.7～6.0mまで、土手状遺構の杭はT.P.5.6～5.9mまでである。三者の杭は大変共通しているので、杭列A・Bは土手状遺構の築造と同時に打設されたと考えられる。

9) 大阪市長原・瓜破遺跡 96-71次調査溝SD601内杭列SA601 (図10)¹⁹⁾

調査地は、瓜破台地にある。台地にはいく筋もの谷があり、その最大の谷が北西にのびる「馬池谷」で、調査地はその谷筋の東側隣接地にある。この部分での谷幅は200m程度。杭出し水制の設置されたSD601は、南東方向からの溝であり、奈良時代後半段階の洪水砂(長原5層)で埋没する。SD601は台地から「馬池谷」に水を逃がすために、取り付く支谷への流路と考えられている。調査区では北岸(右岸)が37m程度の長さで検出され、幅は9m分が確認された。なお図10上段平面図の右半において、SR601・602にも杭が打たれているが、水田関連の遺構で流路とは無関係である。

SD601では右岸に沿って護岸用杭列1条が打設されており、水制はそこから流路内の

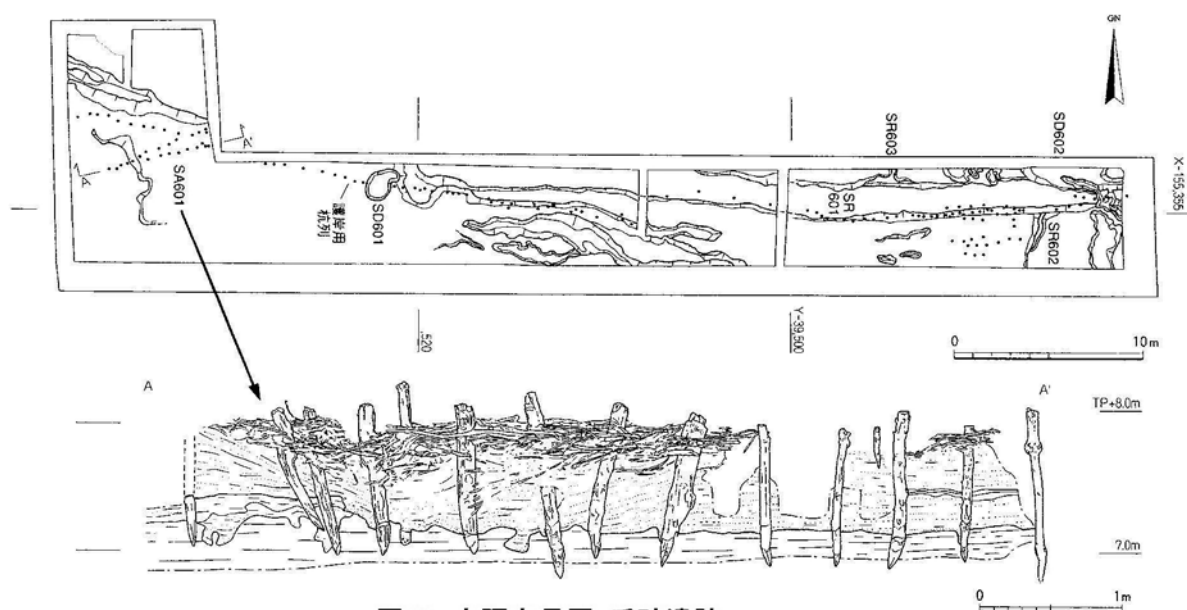


図10 大阪市長原・瓜破遺跡 (註19を改変)

下流方向に張り出して打設された杭列 SA601 である。平面形は流心側が 1 条になる「Y」字形を呈する。1 条部分は 6 本の木杭を 20～40cm 間隔で、2 条になる部分は 50cm 程度の間隔で打設する。なお木杭の上半部で木枝等が絡まって検出されているが、これが人為によるのか、流木等が自然に絡まったのかは不明である。第 5 層（奈良時代後半）の砂礫層の中で先端を露呈する杭が多いので、洪水時の応急処置的な施設であったと考えられる。写真図版を見ると、水制部分を含めて流路右岸が深く抉られており、南西方向に向かって底面が浅くなっているため、水制と護岸は水衝部側に設置されたことがわかる。

杭材は、長さ 1 m 強が多いが中には 1.35 m のものもあり、太さは 5～15cm 程度である。杭材は樹皮を残したままの自然木の丸太で、小枝を除去し先端を尖らせただけのものが主体である。

10) 八尾市久宝寺遺跡 竜華地区堰 1 (図 11)²⁰⁾

「堰」と報告されたが、構造が透過性であることと、このか所での河幅が 80 m 程度あり、兩岸をつないだとは考えにくいので水制と考えた。時期は古墳時代中期である。水制の築造された古墳時代中期は全域が自然河川内の堆積砂で、調査区はその右岸付近に位置付けられる。この自然河川は、周辺の調査成果から旧平野川から分流する「久宝寺分流路」と呼称されるものであり、河川の幅は個所によって異なるが 80～35 m 程度と巨大で、

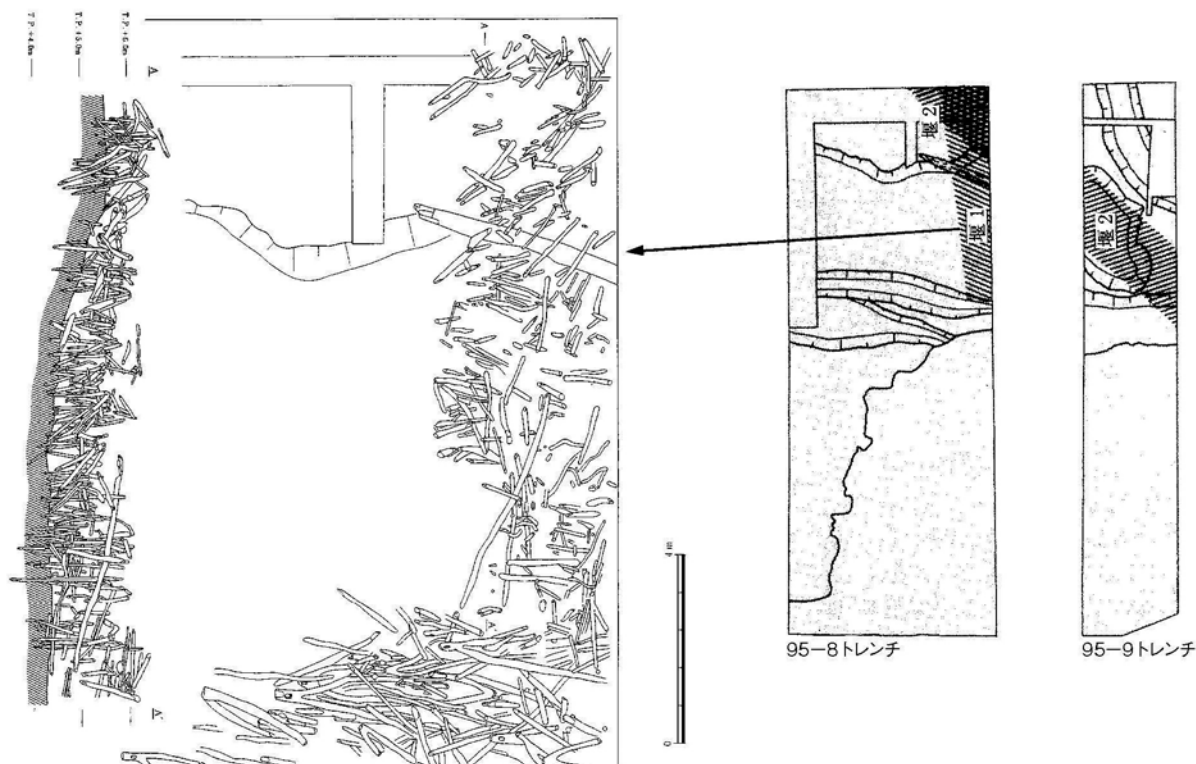


図 11 八尾市久宝寺遺跡(註22を改変)

南から北方向に流れる。水制はその最大幅付近に設置されたものである。調査区は2条の自然河川が合流する部分で、しかも南西からの水流が北西方向に急激に屈曲する手前部分に相当（図12左を参照）し、強く複雑な水流個所であったと考えられる。

水制の構造²¹⁾は杭を垂直に打ち込んだもので、横木はほとんど検出されていない。規模は幅4m以上、しかし長さは7m分が確認されただけで西部分は残存しない。一度で構築されたものではなく、倒壊したものの上に再構築したものと報告されている。さらに杭は南方向からの洪水砂で倒壊して、頭部を北に向けて出土したで構造の詳細は不明であるが、杭が密集して打ち込まれた状況から幅約4mの範囲に打設された多数の乱杭を推定しておきたい。

杭材は先端部を削って尖らせており、樹皮がついたままのものが多い。詳細な報告はないが写真を見る限り他の事例の杭材と同様である。なお図11左半平面図の下方には二股の材が多数図示されているが、上流の河川内施設が倒壊して流されてきたもので本遺構とは無関係である。

5 水制遺構の概要

大阪府での杭出し水制は10例である。資料不足は認識しつつも、ここでは築造時期、設置箇所、構造、杭材、祭祀関連遺物などの観点からまとめることで、大阪府の水制遺構を概観する。

1) 築造時期

時代の古い事例から列記すれば、以下のとおりである。

久宝寺遺跡：古墳時代中期（5世紀）

長原遺跡：古墳時代中・後期（5・6世紀）

西ノ辻遺跡 a：奈良時代前期（8世紀前半）

長原・瓜破遺跡：奈良時代後半（8世紀後半）

亀井北遺跡：奈良時代後半（8世紀後半）

植松遺跡：奈良時代末（8世紀後半）～平安時代初頭（9世紀初頭）

久宝寺南遺跡：奈良時代（8世紀）～平安時代前半（10世紀前半）

玉櫛遺跡 b：平安時代前半（10世紀前半～中頃）

玉櫛遺跡 a：平安時代後半（12世紀前半）～鎌倉時代末期（14世紀前半）

西ノ辻遺跡 b：鎌倉時代末期（14世紀前半）～室町時代後期（15世紀後半）

杭出し水制は古墳時代中期に出現する。奈良時代には明らかに事例が増加しピークが確認できる。その後、古代末から中世にかけての不明瞭な時期を経て、近世の発展期に向かう。以上が現状の資料でたどれる大阪府における水制遺構の動向である。出現時期の当否と、明らかに不足する中世については、今後の資料の増加に期待するほかない。

2) 設置箇所

河川のどの部分に設置されたのかは重要な要素である。水衝部に設置して水を刎ねて水流を河岸から遠ざける場合と、その対岸に設置して土砂を堆積させて砂洲を固定する場合があることは述べた通りである。今回の事例では、水衝部に設置したものが多数であるが、奈良時代の久宝寺南遺跡では逆方向に設置する。砂洲を形成させて常水路を固定するといった発想はすでに奈良時代にはあったようだ。また中世の玉櫛遺跡 a の水制は、両岸にその両者が確認できる。

唯一、長原遺跡のみが人工の堤防に設置されたものである以外は、自然河川に築造されたようだ。しかしいずれの場合も導水を目的とした利水施設であることを示すものは確認できない。事例は少ないが、ここでは水制を設置する自然河川の規模が、古墳時代から奈良時代へと経過すると明らかに巨大なものになっていることを指摘する。古墳時代中期、従来よりも巨大な河川の制御に乗り出したことは事実で、久宝寺遺跡はその最先端の状況を示している。しかしその水制は、旧大和川分流で幅 80 m 程度の規模であったが、奈良時代の植松遺跡と亀井北遺跡は旧大和川の本流である旧平野川で幅 180 ~ 200 m 程度の巨大河川に築造されるようになった。

植松遺跡と亀井北遺跡の水制は、旧平野川におけるほぼ同時期の河川構造物であり、両者は 1.8km 離れて確認されている。また亀井北遺跡の対岸の亀井遺跡で確認された旧平野川南岸では、水制は設置されてはいなかったものの護岸杭が打設されていた。奈良時代ともなれば、河内平野部では最大規模の旧大和川本流でも水制を含む河川構造物を設置して、河川の制御に乗り出したことがわかる。そして両者の杭出し水制の平面形が「Y」字形を呈するも、植松遺跡の事例が下流方向に、亀井北遺跡の事例が上流方向にと逆を向けて設置されているのは、河川の状況や複雑な水流を見分けつつ、目的に応じた水制を使い分けられた結果と考えられる。

3) 構造

構造については、内容が多岐にわたるので、表 1 にまとめた。

①杭列の設置方向は、下流に向けるものが主体で、直角に出すものがそれに継ぎ、上流に

向けるのは亀井北遺跡のみである。

②形態は、古墳時代は乱杭のみで、奈良時代に杭列が見られるようになる。久宝寺遺跡の乱杭は長さ7 m以上、幅約4 mの間に多数の杭を密に打設したもので、他の乱杭とは全く様相が異なる。久宝寺遺跡と同様の状況は、河内平野では堰等の利水施設に認められるので、後に述べる久宝寺遺跡堰2と同様に在来の構造物を水制に用いたと考えたい。

③奈良時代に限り、Y字状杭列が確認できる。個別に若干の差違があるが、川岸に取り付く部分では2条であった杭列が、川中で合体して1条の杭列になる。西ノ辻遺跡aが乱杭なので除外すれば、奈良時代の杭出し水制はすべてがY字状を呈することになる。またY字状にも2種類がある。植松遺跡と久宝寺南遺跡は、1条の杭列基部の上流側に短い杭列1条を付加した状況を呈している。一方、長原・瓜破遺跡と亀井北遺跡は、基部では2列であった杭列が途中で交わって1条になる。この二者のちがいが何に起因するのかは不明だが、いずれも水流の衝突から、川岸と水制基部を守る意識がより強く働いたからと考えられる。そう考えるのは、図5上半の玉櫛遺跡aの平面図をみると、杭列が1条の場合は明らかに川岸との接点部分が空いており、その部分の杭が消失、あるいは川岸が破損しているからでもある。Y字状の形態は、最も弱い水制と川岸の接点部分の保護を目的にした工夫と考えられる。

④水制のみが単独で設置される場合（西ノ辻遺跡a、亀井北遺跡、植松遺跡、玉櫛遺跡a）、護岸杭を併設する場合（長原遺跡、長原・瓜破遺跡、玉櫛遺跡b）があるが、規則性は認められない。河川の様相や水流の状況を見極めて、その場に合致した杭列を設置した結果であろう。また右岸と左岸では水流の状況が全く異なるので、水制を使い分ける場合が確

表1 水制遺構の構造一覧

報告番号	遺跡名	設置方向	形態	併設	備考
10	久宝寺	直角	乱杭1	不明	幅4m間に杭打設し帯状を呈する
8	長原	不明	(乱杭1)	護岸	
3	西ノ辻 a	不明	(乱杭1)	単独	
9	長原・瓜破	下流	杭列1	護岸	基部Y字状
6	亀井北	上流	(杭列2)	単独	基部Y字状
5	植松	下流	(杭列1)	単独	基部Y字状
7	久宝寺南	直角	(杭列3)	不明	基部Y字状
2	玉櫛 b	下流	(杭列1)	護岸	対岸に護岸杭
1	玉櫛 a	下流	杭列6+ a	単独	対岸に乱杭と護岸杭
4	西ノ辻 b	直角	(杭列3)	不明	

認できる。玉櫛遺跡 a の場合は、左岸には杭出し水制群を設置し水を兼ねて水流を河岸から遠ざけ、右岸には乱杭を設置して水流を滞留させて砂州を固定して流路を固定したと考えられる。

⑤近世大和川の杭出し水制を本地域での完成形とすれば、中世の玉櫛遺跡 a の事例が類似する。中世以降に近世的な複数の単純な杭列からなる水制を敷設する事例が出現する。

4) 杭材

杭材は自然木の丸太で、小枝を払い樹皮を除去する程度で、先端は数方向から削って尖らせただけの加工を施したものが主体である。樹皮を残す事例も多い。また真っ直ぐな材ばかりでなく、曲がった杭もある。加工木が使用される場合もある。その場合でも、水制の築造にともなう加工は確認できず、また統一性もないので再利用と考えられる。ただし玉櫛遺跡だけが、樹種と杭列、杭材に一定の関連がうかがえる。本遺跡では樹種はアカマツとスギを主体にする。つまり玉櫛遺跡 a では杭列 4 がアカマツ、杭列 9 がスギのみで構成され、また玉櫛遺跡 b ではミカン割り材 5 点がすべてスギのみで構成される。他遺跡にはない画一的な状況であり、事例の少ないことは認めつつも、中世には杭材の作成において画一化が図られた可能性があり、ひいてはより組織的な水制の築造への移行がはかられた可能性も想定できる。

杭材の長さは不明瞭である。水制は流水にさらされるので、刺さった状態の杭は上部が欠損する場合が大部分であることが理由である。しかし本来の長さをとどめた事例もある。西ノ辻遺跡 b (河幅約 25 m) が 95cm、長原・瓜破遺跡 (同不明) が 1 m 強、植松遺跡 (同 180 m) が 2 m 程度が主体で 3 m が最大、亀井北遺跡 (同 195 m) が 1.5 m 以上である。河川規模や深さによって異なるのは明らかで、通常は 1 m 前後、後二者の大規模河川で 1.5 ~ 2 m 前後としておきたい。太さは一部の例外を除けば、3 ~ 7 cm と 10 ~ 15cm 程度に集中する。激しい水流を兼ねるにすれば大変細いという印象を受ける。後者は長原・瓜破遺跡、亀井北遺跡、久宝寺南遺跡で、いずれも奈良時代の事例であるが、同じ河川でしかも同時期の植松遺跡は細い杭材を使用している。そこに時代性や河川規模・水制構造に差異は見出せない。

樹種は、多くの場合一部が報告されるだけであるが、中世の玉櫛遺跡以外は統一性のないことが特徴である。西ノ辻遺跡 b の事例はその好例であり、また植松遺跡では同時に行われた花粉分析の結果から復元できる当時の植生とも合致することは重要である。それによって杭材は、中世以前は周囲の入手しやすい樹木で作ったことがわかる。

5) 祭祀関連遺物

水制付近から祭祀関連の遺物が出土する頻度は大変高い。水制を築造するのは、そこが洪水の危険にさらされる場所であるからで、危険回避のためにも祭祀が行われたと考えられる。もちろん水制を設置することで水流は妨げられ、そこに多くの遺物が流れ着いて出土することも推定できる。しかし墨書土器や獣骨、祭祀遺物がまとまって出土し、しかも摩滅していなければ、そこで祭祀行為がなされたと考えべきであろう。

墨書土器や祭祀関連遺物が確認できるのは、奈良時代では西ノ辻遺跡 a、長原・瓜破遺跡、植松遺跡、亀井北遺跡、久宝寺南遺跡とすべての水制遺構周辺から出土している。ほかに中世の西ノ辻遺跡 b で、馬の頭骨 5 頭分と牛の下顎骨が出土しており、確認できないのは、古墳時代の久宝寺遺跡と長原遺跡、平安時代以降の玉櫛遺跡 a・b だけである。水制と祭祀の関連が大変強いことが確認できるとともに、奈良時代は別格である。なかでも西ノ辻遺跡 a の事例は、遺物の内容から平城京と同様の祭祀がなされたことを示しており重要である。祭祀が行われたのは、治水事業自体が国家の関与で行われた大規模な土地開発に伴うものであり、祭祀もその一画を占める行為であったことが理由と考えられる。

6 まとめ

今回は、まず完成型としての近世大和川の水制を紹介し、次にそれ以前の事例を考古資料によってあと付けてきた。考古学的には未知の分野なので、どの程度の資料があり、どのような変遷をたどったのかを明らかにすることが目的であったが、資料数が少ないことは確かである。調査範囲が狭い場合には、遺構の部分的な確認であったり、河川の流れの中での位置がわからないと、水制とは断定しえないことが多いことも一因である。

今回取り上げた杭出し水制の起源が、どこにあるのかは将来の課題である。高度な知識と技術が必要であるにも係わらず、構造が単純なためにそれとは判らずに、実態把握がほとんどなされていないことも要因の一つである。そんな中であって、長原遺跡の事例は重要である。同時に検出された土手状遺構には、土を盛って築造していく過程で敷葉工法が施工されており、それに杭出し水制が併設されていることに注目したい。敷葉工法は渡来系の技術²¹⁾であり、長原遺跡自体も多くの半島系土器が出土するので、渡来人がその技術を伝播したことを述べたことがあるが、これは水制も渡来系の技術であった可能性が強いことを示唆している。

いま一つ重要な事例がある。それは八尾市久宝寺遺跡竜華地区の堰 2^{21・23)}で、事例 10

の堰1が倒壊した直後、その直上に築造されたもので、以後の水制と比較すれば様相の異なる構造物である。それを小山田宏一²⁴⁾は我が国最古の透過水制として評価している。堰2の構造については文献によられたいが、古墳時代前期に類似例が増加する合掌型の堰と同じ木組み構造である。堰はその木組みの中に粘土や石を詰めて河川や水路の水を堰き止めて水位をあげるが、久宝寺遺跡堰2は木組み構造の中に何も詰めておらず流水で運ばれた砂が堆積しているだけで、水が透過する構造になっている。小山田は治水の知識を持った渡来人が合掌型の丈夫な堰を作る弥生時代からある技術を応用して水制としたものとする。なお、堰2は堰1が倒壊した直後にその直上に築造されたもので、やはり急激に屈曲する水衝部分に相当する。

ところで近年この周辺部の調査が進み、高度な治水関連の河川構造物が複数確認され、堰2もその一つであることが明らかになりつつあり、図12²⁵⁾はそれをまとめたものである。すなわち、①第56次-2区の堤101は、久宝寺分流路の右岸堤であり、水衝部に相当する。盛土内部に土留めを目的にした多量の杭が打設されたもので、規模は基底幅5.8

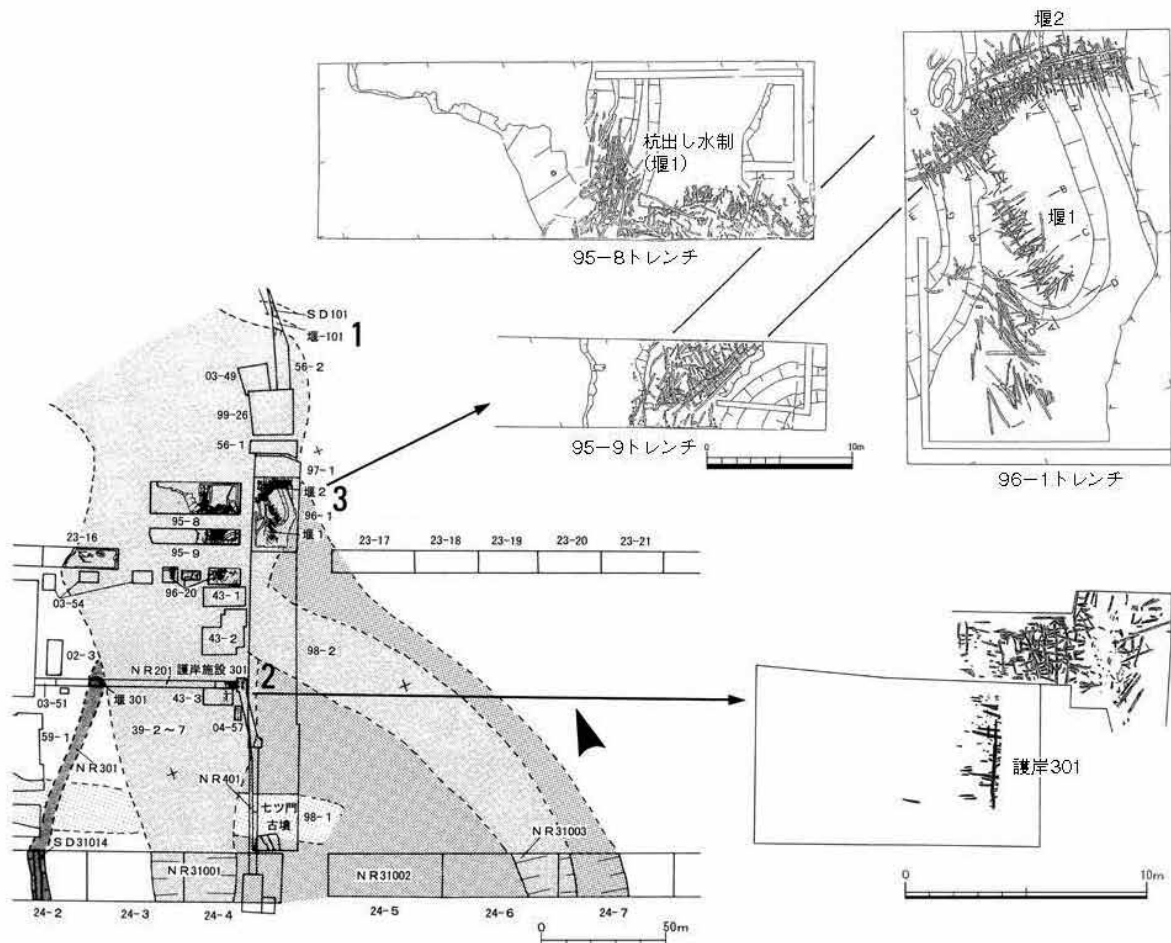


図12 久宝寺分流路の治水遺構群(註23・25を改変)

m、上面幅 3.9 m、高さ約 2.4 mである。②第 51 次の護岸施設 301 は、合流点手前の右岸に築造された護岸施設である。南側の調査区でもその延長部分が確認されており、規模は長さ 18 m以上と言いうるのみであるが、幅は約 7.2 mと巨大である。③第 96 次－1 トレンチの堰 2 は、小山田が透過水制と考えた堰 2 の延長部であり、全長が 42 m以上あることが明らかになった。そしてそれを可能にしたのは、弥生時代には見られない、二股の木材と横木によって築造された構造にあることも明らかになった。

それと共に筆者が重視するのは、その平面形態である。図 12 の 96－1 トレンチで、堰 2 に堰 1（95－8 トレンチ堰 1 とは別遺構）が取り付くように確認されており、それは奈良時代の杭出し水制基部の上流側に短い杭列を敷設した「Y」字状の形態と大変類似しているのである。この堰 2 左上流側には、流されてきた多数の構造物材が図示されており、これは先に上流側の短い杭列の役割が水流の衝突から川岸と水制基部を守るためとした想定に合致している。堰 2 基部が良好に残ったのは、堰 1 が洪水流とそれによって破壊され流されてきた上流の構造物材の衝突を防いだからであろう。以上の点から筆者は、95－9、96－1 トレンチの堰 1・2 は奈良時代の「Y」字状をした杭出し水制の淵源であり、それを小山田と同様に在来の技術を応用した水制と考える。

以上に紹介した複数の河川構造物は、それぞれが単独で機能したものではなく、久宝寺分流路の右岸に堰 2 を中心に少なくとも数 100 m の間に築造された治水施設群として並存したものである。堰、護岸、水制であれ、多数の斜方向に打設した杭と長い横木で構築する類似した構造をもち、入念に築造されている。さらに合掌式構造、水制、二股の材などに当時の最先端の技術がうかがえる。その理解には弥生時代には認められない大規模河川への治水事業としての視点が必要である。長原遺跡や久宝寺遺跡を含む旧大和川流域の諸遺跡は、有数の韓式系土器の出土する集落域であり、その背景には治水の技術と知識を持った渡来人の関与を想定することができよう。

ところで八尾市久宝寺遺跡竜華地区堰 1（95－8 トレンチ）と堰 2 は、そこに水制的な役割を認めるとすればどのように評価すべきなのであろうか。堰 1 は多数の杭を密に乱杭的に打設することで水制としたが、巨大な自然河川の水流に抗することができなかった。堰 2 はその直後に、堰 1 の直上に築造されたのでやはり透過水制と考えるが、やはり成功していない。両者は水田稲作の水路に築造される利水構造物を治水に採用したものであるが、その後の展開において類似する治水構造物の築造は確認できないので、それは一過性のものであったようだ。一方で長原遺跡では以後の水制につながるものが確認でき

る。いずれにしても古墳時代中期は、水制の知識を持った渡来人を背景にしつつ、在来の技術との融合をはかるなど試行錯誤の段階であり、そんな中から以後の水制につながる河川構造物が成立していった時代と考えておきたい。

奈良時代から平安時代初頭にかけて、杭出し水制が集中することが明確になった。当時の旧大和川の本流である平野川で見つかった水制は、それ以前では不可能と考えられるような大規模河川の制御に向かったものである。形態は、乱杭形式の一例以外、川岸に取り付く箇所を強固にした「Y」字状にすることが共通点である。またほとんどの場合、祭祀関連遺物が出土し、中には平城宮と同種のものも含まれるので、そこには国家を含む公的機関の関与が想定できる。なお本来このことは、水に関わる祭祀全体の中で位置付けるべきであり、大阪平野部の河川では多くの河川構造物が確認されており、水制もその一要素であることは言うまでもない。ところで「延喜主税式」によれば、河内は甲斐とともに堤防料を配当された二国であり、国家が治水事業に強く関与した地域である。他地域の事例とも比較しないといけないのだが、大規模な河川制御への進出と祭祀関連遺物の強い関連の背景には、国家の強い関わりがあったと考えておきたい。

鎌倉時代以降の事例は少ない。しかし玉櫛遺跡 a は水衝部に整然とした杭列群と、その対岸には乱杭を設置して水路の固定をはかる完成形といえるものである。それは単純な杭列であり、基部を Y 字状にする前段階の水制とは顔つきが全く異なる。むしろ複数の杭列で水制を構成するあり方は、近世大和川の水制と類似しており、中世には近世的な水制が確実に出現していたことは指摘できる。事例が少なく、しかも確認しえたのは小規模河川のみという事実は、先に述べたように、中世は河川構造物の視点からみれば停滞の段階に相当しており、その実態を示しているのであろうか。筆者は否と考えている。それは例えば佐堂遺跡²⁶⁾では、中世には旧大和川の本流となる長瀬川右岸に築造された 13 世紀初頭の堤防、その左岸では時期の詳細は不明確であるが、近世につながる土木技術である「粗朶沈床」、「根固め」が確認²⁷⁾されている。両者の遺構からわかる長瀬川の河川敷幅は 220 m と巨大である。また堤防の規模は基底部幅 15 m 程度、高さ 4.6 m 以上で、調査者は長瀬川の総延長 14.5km、両岸に築けば 29km とその労働力を算出している。つまり明らかに中世にも集落や耕地を安定させるために大規模河川の流路を固定する治水事業は確認できるからである。

最後に、今回水制としていくつかの事例を提示したが、全くふれることが出来なかった点を明示しておく。第一に、実際には各事例がどのように機能したのかが不明瞭な点であ

る。これを解決するには、発掘調査における全体像の把握と、水制と認定した上での詳細な土層堆積状況の観察が必要となるが、現状でそのような事例はない。特に非常に巨大な事例は、近世・近代にそれを凌駕する規模の水制が存在するとはいえ、全体像がわからないのでその認定には不安が付きまとう。第二に系譜に関わる点である。奈良時代をはさんで、その前後を見るだけでも、全く様相が異なることは明らかである。本稿では水制とはどのようなものかを提示するために近世大和川の水制を紹介したが、それは地域あるいは国内のみでの発展で近世に至ったと想定しているわけではない。中国や韓国にも考古資料としては未確認なのだが、残された文献などからすれば、むしろ水制は絶えず進んだ技術として、わが国に取り入れられたことを念頭に置かねばならないと考えている。いずれにしろ、これらの解明には将来の資料増加を待たねばならないだろう。

註

- 1 破損した堰の残骸や、船をつなぎ留める杭であった可能性も推定できる。また民俗例を調べると、網をかけることで魚を捕獲・飼育する漁業関連の施設になるし、あるいは水鳥等の飼育施設が含まれるかもしれない。構造が単純なだけに識別が難しい。
- 2 水制の定義は本文のとおりであるが、護岸と堰についても触れる。なぜならば弥生時代には、護岸と堰は一般的であるが、水を刎ねる水制的なものは見られず、水制の出現を考える場合にはそれらを区別しておかねばならないからである。また水制と堰が混同される場合もある。護岸とは、河岸や堤防に流水が当たって破損するのを防止するために、それに沿って設置される治水目的の構造物である。なお通常は水制と護岸は区別が可能であるが、後に紹介する長原遺跡のように困難な場合もある。一方、堰とは河川や水路の流水をせき止めるために、それを横断して設置される構造物で、洪水被害を軽減する治水目的で築かれる堤防の機能を有しないものである。用途は取水堰が最も多く弥生時代以降、水田への灌漑用水としての取水が主目的である。なお農業工学では、堰と用水の取り入れ口を合わせて「頭首工」と呼び、外観が水制に類似するものが弥生時代には出現するが、これには流水を刎ねる目的はなく、流水を用水路に引き入れる導水を目的にした構造物なので含めない。
- 3 眞田秀吉『日本水制工論』日刊工業新聞社 1953
- 4 山本晃一『日本の水制』山海堂 1996
- 5 今回は触れないが、昭和17年撮影の航空写真（国際航業株式会社、縮尺約1：8,000）を検討すると、大和川には多数の水制群が確認できる。その多くが上流に向けられているが、航空写真で

あるために透過水制か不透水制なのかも含めて構造については未確認である。しかし水制の背後に砂が堆積し護岸を形成していく状況が明瞭に観察できることは重要である。水制が有効に機能しているのかどうかは、設置後に絶えず観察することが必要であるが、そんな記録が残されていることは期待薄だからである。ここでは水制の背後にどのように砂が堆積し、それが護岸の役割を果たすのかを示すために掲載した。写真は右が大和川上流、南から流れ込むのが東除川、大和川の北側中央の集落が大阪市平野区长吉川辺である。堤防は直線的であるが、大和川はその2条の堤防の間を蛇行して流れる。橋の下流右岸には上流に向けた「上向き水制」14条が水衝部に設置されている。水制の下流側に白く見えるのは、水面より高く堆積した砂堆である。橋の上流側にも水衝部側に9条ほどの水制が確認できる。なお淀川にも同じ状況が見られることも述べておこう。大阪では他にも昭和3年、23年、36年、49年、60年の航空写真が残されており、それが水制終末期の重要な資料になりうることを示しており、将来の研究課題になるだろう。



写真1 大和川の水制 (昭和17年撮影の航空写真 東除川合流地点)

- 6 秋里籬嶋『河内名所図会』柳原書店 1975
- 7 矢内一磨『大和川筋図巻をよむ』堺市博物館 2004。なお図2掲載には、堺市博物館の許可を得た。
- 8 a 藤井寺市教育委員会『大和川左岸堤部及び小山平塚遺跡発掘調査概要』1988
b 藤井寺市教育委員会「小山平塚遺跡・新大和川左岸堤防部の調査」『藤井寺市文化財保護事業年報昭和60・61・62年度』1989
c 上田睦『大和川の付替えと近世藤井寺の文化』南河内歴史講座 2006 などがある。杭列の状況等は文献cの「図5 大和川左岸堤防部下層遺構平面図」によった。
- 9 水制遺構かそうでないのかの識別が困難な場合が多数あった。まず導水を目的とする堰の破損事例との識別であったが、これは残存する横木や盛土、斜方向に打設された杭により判断した。次に調査面積が狭いので、遺構が河川のどこに設置されたのか、あるいは遺構と水流方向との関係がわからない事例であり、除外した。判断の難しい事例として、弥生時代以降に確認できる自然

流路内の杭列で、通常の堰にみられる横木や盛土、斜方向の杭は見られないもので、杭は垂直に打ち込まれるものだけで構成されており、水制との相違点は兩岸をつなぐ杭列があった。今回、これを「杭堰」あるいは「草堰」と位置付けて除外した。前者は杭を河道内に一定間隔で打ち込んだ堰、後者はそれに草や木の枝をからませた堰で、いずれも水の透過性が高く、川の水を全量取水できない仕組みになっていて、水利用の複雑な地域でよく用いられるものである（丸善株式会社『川の百科事典』2009）。

- 10 （財）大阪府文化財センター『玉櫛遺跡Ⅱ』2003
- 11 阪田育功「玉櫛遺跡周辺における河道の変化と条里水田の開発」『玉櫛遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター 2003
- 12 東大阪市教育委員会『西ノ辻遺跡第22次発掘調査報告書』1995
- 13 （財）大阪府文化財センター『植松遺跡』2007
- 14 （財）大阪文化財センター『亀井北（その3）』1986
- 15 （財）大阪文化財センター『亀井』1982。調査では護岸杭が確認されている。
- 16 （財）大阪文化財センター『久宝寺南（その3）』1986
- 17 大阪市文化財協会『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ』2000
- 18 通常、水制と護岸は区別されるが、その区別が容易でない場合もある。たとえば護岸杭は堤や河岸の裾に打設するが、かなり離れた位置で平行に打設されている場合である。この場合は土のすべりを防止するというよりも、水流が直接に衝突することを意図しており、水制と考えたほうが適当であろう。本事例の場合も区別が難しいが、堤自体がかなり流されているのでここでは護岸施設と考えておきたい。
- 19 大阪市文化財協会『長原・瓜破遺跡発掘調査報告XVI』2001
- 20 a （財）大阪府文化財調査研究センター『久宝寺遺跡・竜華地区（その1）発掘調査報告書』1996
b 同『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ』1998、c 同『最古の土師器』（小テーマ展示 シリーズここまでわかった考古学）2004
d （財）八尾市文化財調査研究会『久宝寺遺跡』（八尾市文化財調査研究会 89）2006。本稿で紹介する堰1・2は上の文献a・bで報告された遺構である。その後に周辺の発掘調査の成果から、文献cで久宝寺分流路を見出しその流路を図示し、文献dでその成果を総括する中で久宝寺分流路と堰1・2の関連にも言及している。
- 21 本田奈都子「古墳時代の合掌型堰 ―久宝寺遺跡・竜華地区検出例をもとに―」『大阪文化財研究』第10号（財）大阪府文化財調査研究センター 1996
- 22 山田隆一「中河内地域における古墳時代の敷葉工法」『大阪府立狭山池博物館研究報告5』2008

- 23 島崎久恵「久宝寺遺跡出土の堰」『大阪文化財研究』第12号（財）大阪府文化財調査研究センター1997。なおここで報告されている堰1は、事例9・註17の文献a・註18の堰1とは別遺構である。
- 24 小山田宏一「古代河内の開発と渡来人」『検証古代の河内と百済』枚方歴史フォーラム実行委員会2001
- 25 原田昌則「Ⅲ久宝寺遺跡第39・51次調査」『久宝寺遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告89』2006
- 26 （財）大阪文化財センター『佐堂（その2）-I』1984
- 27 「粗朶沈床」、「根固め」は、河川構造物の一種であり事例は少ないが、調査の状況からはその築造年代は確定できない。しかし調査者は、以下の状況から15世紀頃の構造物と考えている。すなわち①「粗朶沈床」、「根固め」の構築において、礫石経の垂種と考えられる墨書土器片16点がある中に埋納された状況で出土している。礫石経は鎌倉時代の資料は少なく、圧倒的に南北朝から近世が多い事、②構造物の横木の中に、ほぞを切った材や、ほぞ穴を穿った材が数点確認されており、それが建築材の転用であるなら南北朝を上り得ない形態である事の二点である。

終章

ここでは序章で設定した課題について、近年の調査・研究で新たに明らかになった成果も参考にしつつその概要を記し、最後に拠点集落の隣接地に築造された古墳との関連を述べ、まとめとする。

1 広域流通網における拠点集落と他地域系土器

古墳時代初頭期は、広域の地域間流通が活発になる時期である。集落遺跡から出土する多数の他地域系土器がそれを示す。しかしすべての地域、集落が同じ状況を示すわけではない。他地域系土器の集中する集落つまり流通拠点となる集落があり、流通関係にある地域も限定される。近畿において流通拠点となる集落は、吹田市を中心とする摂津中部から、そこを起点に和泉の大阪湾の沿岸部を南下するルート、摂津東部と北河内を貫く淀川ルート、中河内の平野部を流れる旧大和川ルートの周辺に主に分布する。そしてルートによって他地域系土器の内容、および出土数量に著しい差異がある。なお現状では紀伊に流通拠点は見いだせない。

1) 摂津中部と旧大和川流域の流通拠点

流通拠点としての集落の集中と他地域系土器の出土数量において、摂津中部と旧大和川流域に立地する集落は別格である。摂津中部から河内湖に入り、旧大和川をさかのぼって大和盆地東南部に至るルートが当時の幹線ルートであることが明確である。摂津中部には崇禅寺遺跡や垂水南遺跡など、河内湖の南沿岸部には西岩田遺跡、旧大和川流域の大阪平野部には巨大な中田遺跡群と加美・久宝寺遺跡群の二遺跡群、さらにさかのぼって船橋遺跡などが立地し、そして大和盆地東南部の纏向遺跡にいたる。これら旧大和川流域の遺跡からは吉備¹⁾、讃岐、阿波系や山陰系などの西日本の土器が非常に多く、大和や北近畿のほか、北陸、東海、関東系などの東日本の土器が少数ながら出土する。なお吉備以西の西日本からの他地域系は少ない。そしてこれらの他地域系土器は、在地化や模倣品は少なく、搬入品であることが一般的である。

流通によって持ち込まれた物資に塩と朱のあったことは、多くの製塩土器と朱付着土器の出土することから明らかである。また特殊な遺物としては素環頭鉄刀(崇禅寺)、銅鏡(加美・久宝寺、瓜破北、矢作、池島・福万寺)、銅剣(加美)、筒形石製品(加美)、メノウ

製鎌形品（大竹西）、陶質土器（加美）や墳墓の築造に関わる吉備の特殊器台（東郷、萱振、小阪合）、前期古墳に敷かれる白石（中田）などがある。他にも多くの物資が持ち込まれたのであろうが不明である。在地生産できない物資や威信財、墳墓に関わる各種物資が流通の主体であったと考える。

ところで、旧大和川流域には準構造船関連の資料が多い。船材としては久宝寺遺跡の船首部材、加美遺跡の直弧紋が彫られた舷側部材と船材を転用した第6・7号木棺、中田遺跡のピポットを残す舷側部材があり、他に木製の小型模造品が西岩田遺跡から出土している。西岩田例は、庄内期初頭の最古段階の事例である。準構造船の関連資料の出土数が他地域を圧倒するのは、主要寄港地であったことを示している。久宝寺遺跡の船首部材は、舷側部材を再利用した後の廃棄部材と想定され、資料が巨大であることからすれば、準構造船が出土地近くまで入ってこれたのであろう。当然、旧大和川をさかのぼり大和に入るには、難所の亀の瀬を通過するために小型船に積み替え、人力で牽引あるいは陸路を中継しつつ運搬したと考えられる。なお準構造船部材は福岡県潤地頭給遺跡、兵庫県長越遺跡、滋賀県下長遺跡でも出土しており、いずれも広域流通網に立地する流通拠点である。準構造船は、韓半島から北部九州、瀬戸内から河内湖南岸までの間を多くが往来したことはもちろん、淀川をさかのぼったことも確認できるのである。

2) 淀川流域の流通拠点

淀川流域の摂津東部には二つの流通拠点がある。安威川左岸の溝咋遺跡、芥川右岸の郡家川西遺跡である。弥生時代には、それぞれに拠点集落である東奈良遺跡と安満遺跡が存在した地域である。また淀川をさかのぼり山城に入ると、三川合流地点から桂川右岸には鴨田遺跡や水垂遺跡など、木津川右岸には佐山遺跡などが存在する。溝咋遺跡、佐山遺跡と水垂遺跡が詳細に報告されている。

溝咋遺跡²⁾では、庄内期前半から布留期の遺物が確認でき、盛行期は庄内期後半～布留期初頭である。他地域系は多様で吉備2点、讃岐6点、阿波14点、山陰23点、中河内14点、播磨1点、北近畿3点、近江11点、北陸1点、東海6点、関東2点が確認できるが、比率は古式土師器全体の1%と少ない。旧大和川流域との違いは近江、東海系の多さが目立ち東方地域との流通が確認できる点と、吉備系の少ない点である。

佐山遺跡³⁾では、他地域系土器が全体の土器出土量の約10%を占める。庄内期前半に併行する佐山Ⅱ式前半には北陸系が多く、庄内期後半から布留期初頭に併行する佐山Ⅱ式後半には、西方からは西部瀬戸内、吉備、讃岐、阿波、山陰、播磨、河内系が、東方から

は近江、北陸、東海系の他、若干の南関東からの搬入が確認できる。摂津東部と同様に東方からの他地域系も一定量が出土する。なお水垂遺跡でも佐山遺跡と類似の他地域系土器の出土傾向が確認できる。

山城の地域色の一つは、播磨型庄内甕の搬入が多いことである。佐山遺跡では数10点と多数が出土するが、同様の状況は内里八丁遺跡、木津川河床遺跡、鴨田遺跡でも確認できる。佐山Ⅱ式には播磨の大申遺跡などで多く検出されたベッド状遺構を持つ竪穴住居が認められるので、播磨からの人の移住を伴う交流が想定されている。また近江、東海系が在地化することも地域色である。東方からの人の移住が想定でき、東と西の流通の接点となる地域であったことが背景となったと考える。水垂遺跡⁴⁾では東海西部特有の人面文を線刻した壺が出土しているが、単なる模倣ではなく、美濃～三河からの人の存在を想定すべきであろう。一方で摂津東部では、山城のような他地域からの人の移住や他地域系の在地化などは確認できず、流通ルート上での通過点としての状況を示すと考えられる。

3) 石川流域の流通拠点

南河内の中央部を北流する石川流域では、尺度遺跡でのみで若干の他地域系土器が出土するが、それ以外の集落からの出土は大変少ない。石川流域では弥生時代後期以降、高地性集落が出現し後期後半にはその数の増加と一部集落での大規模化が確認できるが、庄内期になってもそれら高地性集落で小規模な生活が継続する。それを含めても、庄内～布留期前半における集落数は少なく、小規模な集落が短期間に消長をくり返す。また報告された他地域系土器は、すべてを列記しても吉備4点、山陰3点、阿波1点、讃岐1点、駿河1点、東海4点にすぎない。これは広域流通網から疎外された南河内の閉鎖性を示すと考えられ、同様のあり方を示す地域として北河内、和泉がある。尺度遺跡はそのような疎らな遺跡分布の中央部に立地する。

尺度遺跡⁵⁾では、庄内期～布留期初頭の集落が確認されている。集落域は北東にのびる自然堤防上に立地し、規模は長350m、幅120m程度と推測される。掘立柱建物と周囲に溝を巡らせる竪穴住居、方形区画、井戸、畠で構成される。方形区画は、掘立柱建物を囲む首長居館と考えられ、北から45度程度傾いた36.7m×37.6mの正方形である。区画内には掘立柱建物2棟が並列し、3時期の変遷がある。この居館は一般集落、あるいは首長家族の居住域内に立地しており、他と隔絶された状況ではない。また方形区画周辺には、竪穴住居や区画内よりも小規模な掘立柱建物や畠が確認されている。他地域系土器は、中河内系が最も多く生駒西麓産胎土の庄内甕110点以上、大型壺1点である。他に

大和型庄内甕1点、山陰系9点（甕、鉢、鼓形器台）、阿波系壺4点、備讃系製塩土器1点などがある。また小型器台、小型丸底鉢や高杯において微細な横方向のミガキ調整を施す精良胎土の精製品も散見し、これらも持込まれた土器と考えられる。これらの他地域系土器や精製土器の持込まれる状況は、他の南河内の集落では確認できないものである。また他地域系で中河内産庄内甕が著しく多いことは重要で、中河内地域との関係が強い集落であることを示している。

石川流域は、他地域系土器の搬入が大変少ない地域であり、それは石川が物資の広域流通ルートとはなり得なかったことを示している。そのような閉鎖性によって土器様式に庄内式を含まない状況も生じたと考えられる。そんな中で尺度遺跡だけが別格である。数量は少ないものの西日本諸地域からの搬入土器が出土するとともに、重要なのは河内型庄内甕を主体とする生駒西麓産胎土の土器が多数出土することである。このことは、南河内において、尺度遺跡が中河内との流通の窓口になったことを示しており、加えて首長居館を囲うであろう方形区画の確認は、その背後に南河内の地域首長の存在したことを示している。南河内の他地域系土器は、尺度遺跡を窓口に持込まれたものであり、その見返りとして南河内からも何らかの物資が中河内に供給されたと考えたい。

4) 大阪湾岸地域の流通拠点

大阪湾沿岸の和泉は、他地域系土器の出土が少ない地域である。それは和泉の古墳時代初頭期の土器様式が「伝統的Ⅴ様式」⁶⁾と呼ばれたように、弥生時代後期からの継続であって、庄内式を含まない閉鎖性に示される。ここでは、他地域系が確認できる石津川流域の下田遺跡を取り上げる。

堺市下田遺跡⁷⁾では、和泉では傑出した数の他地域系土器が出土する。中河内、吉備、阿波、東海、近江、丹波、丹後などから持ち込まれた土器が確認でき、中でも河内産庄内甕が多く、中河内と強い関連のあったことがわかる。また、きぬがさ傘骨や漆塗り環形付木製品の威儀具、刀剣柄装具、四方転びの箱など、集落が上位ランクにあることを示す遺物が出土することも特徴である。和泉北部の流通拠点と考えられる。

下田遺跡では製塩土器が出土する。特徴は、大阪湾岸で土器製塩が開始される段階以来、すべての段階の製塩土器を含むばかりでなく、脚台Ⅰ式には備讃系との技術交流を示す体部外面ヘラ削りの個体、和泉でも最古段階に位置付けられる個体が確認できることである。和泉の土器製塩に関与、主導した遺跡であったと考える。中河内で確認できる大阪湾岸系の製塩土器は、下田遺跡を主体とする石津川流域から持ち込まれたと考えたい。

本地域には多数の製塩遺跡が存在するが、交流面からみれば閉鎖的である。他地域系土器の出土は極端に少ない。そんな中で下田遺跡のありかたは特徴的で、他地域系土器の出土から交流拠点の一つであり、また各種の威儀具の出土からそこには高いランクの首長が存在したことがわかる。当初から地域首長層が本地域の製塩活動を主導したと考えられ、和泉北部地域における中河内への塩搬出の窓口としての役割を担ったと考えられる。

5) 各地の流通拠点と中河内

大阪湾岸の和泉と石川流域の南河内は、よく似た特徴が看取できる。両地域ともに他地域系土器の出土が極端に少ないこと、その閉鎖性により土器様式に庄内式を含まない「伝統的Ⅴ様式」の地域となることである。このような状況の生じた原因として、両地域が広域流通網から疎外された閉鎖性にある。そのいっぽうで、地域で唯一少量ではあるが他地域系土器が出土する、いわば地域の窓口となる集落が存在する。和泉の下田遺跡と南河内の尺度遺跡であり、その他地域系土器の多くが中河内系の庄内式土器であることは重要である。尺度遺跡で確認された首長居館、下田遺跡で出土した各種の威儀具や上位ランクにあることを示す遺物はその集落内に地域首長が存在したことを示すと考えられる。地域首長を介して、中河内と強い関係を持ったと考えられ、中河内産以外の他地域系土器も中河内を通じて持込まれたと想定したい。

下田遺跡は和泉で生産された塩を中河内へ搬出する窓口としての役割を担った可能性が高い。考古学的な証拠は残らないが、同時にその他の海産物も搬出したと考えられる。また、南河内の尺度遺跡にも同様の機能があったとすれば、木材などの森林資源が想定できよう。以上のように、大阪の中・南部地域では、より有力な中河内の首長層が和泉や南河内の地域首長層を通じて必要物資を入手するシステムが成立していたと考えたい。

近畿における流通拠点を集落遺跡の集中度合いから見れば、二つの類型がある。地域の中で単独で存在する場合と、密集して広い範囲を占める場合である。前者として溝咋遺跡、郡家川西遺跡、下田遺跡、尺度遺跡などがあり、弥生時代にはその隣接地にそれぞれ東奈良遺跡、安満遺跡、四ツ池遺跡、貴志遺跡が拠点集落として中核を占めた地域である。弥生時代には拠点集落が立地したように、地域の中核としての立地を継承し、それを広域流通網に組み込んだと考えられる。一方で後者として摂津中部、中河内の旧大和川流域、三川が淀川に合流する山城が上げられる。摂津中部は瀬戸内諸地域と大阪湾岸そして淀川、山城は淀川と桂川・宇治川・木津川の結節点に立地の優位性がある。また中河内は、河内湖を介して摂津中部と、旧大和川を通じて大和盆地東南部との結節点にある。

旧大和川流域の中河内は、山陰地域と吉備、讃岐、阿波の瀬戸内中部諸地域との関係が強く、日常的な交流関係が想定できる。また、吉備以西の他地域系土器が少ないことからすれば、足守川流域遺跡群⁸⁾を主体とした吉備を中継する流通が想定できる。あるいは、山陰系の搬入が吉備を中継したことも想定できよう。

淀川ルートでの山城の場合、西日本諸地域に加えて近江、東海、北近畿、北陸等の東日本との交流が確認できる。三川を介して丹波、近江、大和と通じており、東海との関連を考える上でも重要な地域である。しかも近江、東海系土器の在地化や多くの播磨系土器や播磨同様の住居形態から、それら地域からまとまった人数の移住も想定できる。そのいっぽうで摂津中部は、瀬戸内諸地域と摂津東部・山城、中河内をつなぐ役割を果たす。そのような流通網において、中河内にみられる大変広い範囲への集落の集中は、近畿の他の流通拠点を凌駕するあり方である。広域流通網の結節点に、首長層を含む多くの集団が集住するあり方は、大和盆地東南部の巨大さとも共通するあり方であり、近畿において中河内がより重要な位置を占めていたことを示している。

2 塩と塩生産の掌握

大阪平野にあって、製塩土器は他地域系土器の一つであり、しかも土器流通の背景を具体的に知ることが出来る。当時、備讃瀬戸地域ならびに大阪湾沿岸の和泉地域から紀淡地域では、製塩土器を使った塩作り（土器製塩）が盛んに行われており、大阪内陸部からそれら製塩土器が出土する。そして両地域の製塩土器は、脚部の製作方法が異なるので、搬入元を区別できる。備讃系は粘土紐で脚台部から体部を連続的に積み上げた後に、境界部に粘土を薄く充填する円盤充填法である。一方、大阪湾岸系は脚台に粘土紐を積上げて成形しており、脚部への粘土塊の充填の有無にかかわらず、底部から脚台の境界部断面は厚いことが特徴である。両地域で製塩土器が成立した段階の台付き鉢、高杯の成形技法を取り入れたものである。大阪平野部では両者が出土する。両地域の製塩土器が運び込まれていることが明らかで、持ち込まれた物資の一つに「塩」があったことがわかる。しかも出土個体数の比率は同程度あるいは備讃系が大阪湾岸系を凌駕する。

大阪平野部での製塩土器を概観する。搬入の開始は、弥生時代後期前半から中頃の備讃Ⅱb式⁹⁾、大阪湾岸系は脚台Ⅰ式¹⁰⁾であるが、数量は極めて少なく、偶発的な存在にとどまる。搬入が本格化するのは、庄内期新相から布留期古相併行の備讃Ⅲ～Ⅳa式、大阪湾岸系の脚台Ⅲ式段階で、急激に増加する。そして布留期中頃以降の備讃Ⅳb・c式、大

阪湾岸系の脚台Ⅳ式は激減する。

遺跡単位で製塩土器の数量を概観すと、遺跡によって出土数量に差がある。5点以上の遺跡として垂水南・五反島・島田・西岩田・久宝寺・萱振・東郷・小阪合・中田・東弓削・船橋・瓜破北があり、瓜破北以外は摂津中部と旧大和川沿いに立地する流通拠点である。中でも流通拠点の中心部に位置する垂水南・五反島遺跡と加美・久宝寺・萱振・東郷遺跡では10数点が集中的に出土する。それらの遺跡で最も多い他地域系は吉備系であり、備讃系製塩土器も同時に持ち込まれたことは明らかで、それらは足守川流域遺跡群を窓口にして、恒常的に持ち込まれたと考える。

製塩土器は、摂津東部から山城におよぶ淀川ルートの流通拠点でも確認できる。しかし点数は少なく、溝咋遺跡3点、雲宮遺跡2点、水垂遺跡4点、今里遺跡1点、下八ノ坪遺跡1点である。近江では未確認で、流通したのは山城までである。淀川ルートで持ち込まれた塩の量は少なかったと考えざるを得ない。現状では、摂津中部と中河内に認められるような地域を越えた塩の集積は、他地域では確認できない。旧大和川ルート上の諸遺跡にのみ確認できるのであり、著しい他地域系の土器の中でも吉備系の搬入が最も多いことも重要である。備讃系製塩土器の多さはそれに対応しており、和泉からの製塩土器も加えると、首長層による積極的な塩の集積が行われたと考えられる。

この段階には東海、北陸、瀬戸内西部、北部九州の各地域に備讃系あるいは大阪湾岸系の影響を受けた製塩土器による塩作りが始まる。その成立には流通拠点の存在と、その間のネットワークが背景にあると考える。北部九州では、弥生時代における塩作りが日常土器を使用して行われたことが明らかになりつつある。そして本段階での交流拠点の出現と、ネットワークの中にすでに土器製塩技術を有した大阪湾沿岸や備讃地域の存在したことによって、より集約化と量産を追求すべく、類似する製塩土器が各地に出現することになったと考えられる。各地域で出現する塩作りの性格について、北部九州では備讃系の土器製塩が開始されるが、博多湾貿易を支える目的で地域内での使用をまかなう分業として成立¹¹⁾したと考えられている。また三河の西尾市清水遺跡の大阪湾岸系製塩土器の場合も、清水遺跡が鹿乗川流域遺跡群の立地する碧海台地の三河湾側に立地しており、地域内での分業と考えたい。

第4章第1節では、摂津中部を含む旧大和川流域に備讃系と大阪湾岸系の製塩土器が流入していることを明らかにしたが、それは日常的に流通関係を持った地域と一致する。古墳時代前期の日本列島において、多量の製塩土器の移動は他地域では確認できず、摂津中

部から中河内において始まるということが明らかになった。塩の集積・掌握は、その後の律令国家において完成するが、その開始が旧大和川流域でいち早く古墳時代前期に開始されたことの意義は大きい。なぜならば、塩とその他の物資は、同列には扱えないと考えられるからである。塩は食用や儀礼用などの直接的な用途以外に、労働の対価としての価値を持つことは多くの研究者が指摘¹²⁾しており、その掌握は多くの労働力の掌握につながるからである。塩作りに政治力が関与することは、その後の製塩地帯の変遷にも顕われている。中河内への他地域土器の流入圏は、山陰以外は吉備を西限にした大阪湾・播磨灘沿岸つまり瀬戸内東部地域であり、そこは当時最大の製塩地帯である。中河内の首長層が、製塩地帯を掌握していたことを示しており、背景には旧大和川でつながる大和盆地東南部に存在した倭王権がある。

3 流通拠点と古墳

各地の流通拠点と考えられる集落の隣接地、あるいは集落内に古墳の確認できる事例が多い。その地域内では、大型の前方後円墳である場合が一般的で、その築造時期が集落の営まれた時代と重なる場合、被葬者はその集落の経営に関与した首長層と考えてよいであろう。少ない事例ながら、首長層の居館もその集落内に存在する。それら拠点集落で出土する前期古墳の築造に直結する物資や要素—吉備の特殊器台、阿波の朱、古墳に敷く白石、青銅鏡、鉄刀、朝鮮半島の土器などは、広域流通によって持込まれた物資・情報であり、それに果たした首長層の関与は明らかである。

広域流通ルートの中にある纏向遺跡の場合、集落内に石塚・矢塚・勝山・ホケノ山・箸墓古墳などがあり、周辺には北方に大和古墳群と柳本古墳群、南方に桜井茶白山古墳とメスリ山古墳が隣接する。箸墓古墳をはじめ大和盆地東南部での巨大前方後円墳の集中は別格である。福岡県の筑前では比恵・那珂遺跡群と那珂古墳、岡山県の備中では足守川流域遺跡群の周囲に中山茶白山古墳や矢藤治山墳丘墓、香川県の讃岐では香東川流域に想定できる拠点集落と石清尾山古墳群、大阪府の摂津東部では郡家川西遺跡と弁天山古墳群、愛知県の三河では鹿乗川流域遺跡群と二子古墳をはじめとする桜井古墳群などがある。重要なことは、多くの場合、集落の出現時期が古墳の築造時期よりも先行することである。社会の変遷における画期をとらえる場合、それはまず集落の出現に顕われることを示している。最後に近畿の事例を提示することで、広域流通網と地域首長層、それを統括したであろう王権との関わりを概観する。

1) 玉手山古墳群と松岳山古墳群

旧大和川流域の場合、集落の範囲からは多数の方形周溝墓に混じって前方後方墳、あるいは前方後方形墳墓が確認される。それらの墳墓は加美・久宝寺遺跡、亀井北遺跡など旧大和川西岸域に集中するものの、他地域の流通拠点に対応する前方後円墳と比較すれば、規模は小型であり副葬品も見劣りする。これらの墳墓は、集落構成員の中でも比較的上位クラスのものであって、首長層の墳墓でないことは明らかである。中・南河内の古墳時代前期では、最も大型の前方後円墳の集中する玉手山古墳群と松岳山古墳群をそれら首長層の墳墓と考えたい。両古墳群の周辺には、同時期の集落遺跡が確認できないことが大きな根拠なのだが、そのいっぽうで未報告資料が多く築造年代において、決め手に欠ける状況が続いてきた。

ところが近年、中・南河内の古墳の動向が判明しつつある。それは埴輪研究の進展などによって、古墳の築造時期がより詳細に位置付けられるようになった。特に本稿との関連では、玉手山古墳群と松岳山古墳群の内容が明らかになり、時期的な位置付けも大きく変更された¹³⁾ことは重要である。従来、玉手山古墳群の諸古墳は、副葬品の内容から古墳時代前期後半の時期幅の中で築造されたと考えられており、それは古墳時代前期前半の大阪平野部の集落変遷とは全く相容れないものであった。しかし出土した埴輪の資料化と再検討によって、玉手山古墳群と松岳山古墳群の築造が古墳時代前期前半から中頃にさかのぼること、大和の大王墓との並行関係の概要が明らかになったものである。さらに玉手山古墳群の測量図が提示された意義も大きい。従来、玉手山古墳群の墳丘に関する資料は、決して多くはなかったが、大阪市立大学による測量調査・発掘調査によって、検討が可能となった。以上の研究成果は、集落変遷の動向にも直結する内容である。以下に内容を列記する。

1) 玉手山古墳群は、9号墳→3号墳→1号墳→7号墳という首長墓系列と、それに付随する小型前方後円墳から構成される¹⁴⁾。また松岳山古墳群の松岳山古墳と茶臼塚古墳は、玉手山7号墳とほぼ同時期である。両古墳群は、7号墳と松岳山古墳という大型古墳を築造した後に古墳の築造を停止する。

2) 玉手山古墳群の築造時期は、埴輪による編年でI-2期からI-5期である¹⁵⁾。土師器による編年では、古墳群の最終段階である玉手山7号墳の後円部テラスから出土した直口壺から布留2期である。なお最古段階の玉手山9号墳(埴輪I-2期)は、やはり同時期の京都府元稲荷古墳から出土した直口壺によって布留1期に位置付けられる。よって玉

手山古墳群と松岳山古墳群の造営時期は布留1～2期である。

3) 墳丘の平面形態および側面観から王墓ないしそれに準ずる大型古墳の築造順序と時期区分を確定し、それを基準にして地域の古墳の時期と系譜を位置付けるのは新たな研究方法である。それによると玉手山古墳群は3・7・1号墳、その後に松岳山古墳の順に築造され、前者は大和古墳群の王墓である西殿塚古墳・行燈山古墳・渋谷向山古墳の相似墳、後者は佐紀古墳群の五社神古墳の相似墳の可能性が指摘¹⁶⁾されている。現状では埴輪、土師器編年による玉手山古墳群と松岳山古墳群の編年とは齟齬があり、将来の課題であるものの、これら四代にわたる相似墳は、両古墳群の被葬者層が倭王権と強い関係を有していたことを示すことは明らかである。

4) 両古墳群における他地域との関連を示す要素に、以下のようなものがある。①玉手山1号墳の方形壇上面、松岳山古墳と茶臼塚古墳の間に白石(石英質片岩)が敷かれていることが確認¹⁷⁾された。白石は、淡路島の五色ヶ浜・和歌山市紀ノ川流域・徳島市吉野川流域のいずれかから持ち込まれた石材である。中田遺跡の布留1期の土坑から阿波系・吉備系土器と共に白石10点が出土している。阿波系土器が多数持込まれる状況から吉野川流域産の可能性が高いと考えたい。

②結晶片岩を使って竪穴式石槨を築造した古墳として、玉手山2・7・9号墳と松岳山古墳・茶臼塚古墳が確認¹⁸⁾されている。石材は、紀伊の紀ノ川流域と阿波の吉野川流域に産するが、紅簾石片岩が含まれることが多く、後者から持込まれたと考えてよい。摂津東部の茨木市域では紫金山古墳と茨木将軍山古墳、高槻市域では弁天山C-1号墳と鬮鷄山古墳に採用される。なお小片ながら、結晶片岩は溝咋遺跡からも出土している。また大和では、燈籠山古墳、東殿塚古墳、櫛山古墳、柳本大塚古墳、メスリ山古墳などの王墓や大型古墳に採用される。

③墳丘の葺石において垂直板石積みが見られ、玉手山1号墳と松岳山古墳・茶臼塚古墳で確認された。同様の工法は、香川県石清尾山古墳群の稲荷山姫塚古墳、北大塚古墳、鏡塚古墳、鶴尾神社4号墳などで確認される。また松岳山古墳と茶臼塚古墳は、積石塚状墳丘であることが確認されたが、やはり石清尾山古墳群を中心とした讃岐には多数分布する。積石塚古墳とそこに見られる垂直板石積みは、石清尾山古墳群を主体とした四国東北部に分布し、しかも系譜の追える墳丘構築技法である。そして近年、他地域で見つかる讃岐系胎土が、石清尾山古墳群の西を流れる香東川流域で産出されることが明らかになっている。讃岐における流通拠点の存在は未だ明確ではないが、高松平野西部の香東川流域に流通拠点

が存在する可能性は高く、積石塚古墳の築造はそこを中継とする広域流通を背景に技術移転がなされたと考えておきたい。

④玉手山3号墳の埋葬施設とされる割竹形石棺と松岳山古墳の古式の長持形石棺の側石は讃岐から持込まれた石材¹⁸⁾である。玉手山3号墳の割竹形石棺については、形態的にも前後両端に各1個の縄掛突起を有する典型的な讃岐のくり抜き式割竹形石棺であり、讃岐地域の中で系譜の辿れる石棺である。そのことから、松岳山古墳の被葬者と讃岐の高松地域に拠点を持った首長層同士の交流によって、完成品が持ち込まれた可能性が指摘¹⁹⁾されている。一方、松岳山古墳の場合は側石のみが讃岐産で、蓋石と底石は花崗岩であり当地付近で採石が可能である。これらの事例から、石棺そのものが持ち込まれる場合と石材が持ち込まれる二者のあることがわかる。

⑤工人あるいは技術の移動を示す事例として、松岳山古墳と茨木市紫金山古墳のヒレ付楕円筒埴輪²⁰⁾がある。楕円筒埴輪にヒレを付ける事例は両古墳だけで、同一工人か少なくとも同一集団の製作した埴輪と考えられる。ただし両者の埴輪は胎土が異なっており、一方で作った埴輪を他方の古墳に運んだ状況ではない。紫金山古墳は、茨木川を通じての流通拠点である東奈良遺跡と郡・倍賀遺跡との関連が想定でき、広域流通網における情報・工人の移動が背景にあると考えたい。

⑥他地域との関連を示す出土遺物として、松岳山古墳出土の土師器の細頸壺と平底円筒形土器がある。墳頂周辺の積石の間から出土したとされている。前者は徳利形、後者は筒形で、日本では事例が無く百済などの韓半島産と推定²¹⁾されている。

広域流通網の一画を占めた旧大和川沿いの集落遺跡群と玉手山古墳群・松岳山古墳群の関係は以下のように理解できよう。集落遺跡群は庄内0期に出現し布留2期程度まで継続するが、両古墳群の築造も①②から集落遺跡群の継続時期の後半になされたものであり、しかも布留3期になるや集落群・両古墳群ともに衰退する。集落群の周辺に予想される地域首長層ランクの古墳は、玉手山古墳群と松岳山古墳群以外には確認できず、また両古墳群周辺に同時期の造営母体となる集落も確認できない。よって、両古墳群こそ集落群の首長層を被葬者とするにふさわしいと考える。集落群と両古墳群の間に若干の距離があるにしても、むしろ両古墳群は大和と中河内をつなぐ旧大和川を見降ろす南岸の丘陵上に立地することから、広域流通網の結節点を押さえた中田遺跡群および加美・久宝寺遺跡群の首長層にふさわしい古墳群と考えたい。

玉手山古墳群は松岳山古墳を含めて、前期の前方後円墳からなる古墳群であり、これに

小型の円墳や方墳も近接して存在する。前方後円墳には90～110 mの中規模古墳と80 m以下の小規模古墳があり、被葬者は中規模の前方後円墳に葬られた首長層とより下位ランク3～4系列の被葬者層からなると想定される。このように前期の前方後円墳が古墳群を形成するあり方は極めて特異であるが、このことは集落遺跡のあり方に対応すると考えたい。すなわち、約3.5×1 kmもの規模を有する中田遺跡群や1×2 km以上の加美・久宝寺遺跡群で想定できる複数集団が、古墳群の数系列の首長層・被葬者層に対応すると考える。また両遺跡群では、複数の地点で小・中規模の前方後方形周溝墓や方形周溝墓からなる墓域が確認されており、彼らが玉手山古墳群と松岳山古墳群につらなるクラスの構成員であろう。このような多数の前期の前方後円墳からなる古墳群と、近接地に存在する広大な面積の集落遺跡群、そして集落域にも見られる小・中規模の前方後方形周溝墓や方形周溝墓からなる墓域の併存は、集落内部における複雑な階層分化を示しており、それを可視化したものと考えることができる。

2) 弁天山古墳群

淀川ルート上での事例として、東部摂津では郡家川西遺跡の背後に立地する弁天山古墳群がある。郡家川西遺跡は、芥川右岸の段丘上に800 m四方程度の居住域を有する集落遺跡で、竪穴住居が50棟以上確認された東部摂津の拠点集落である。古墳時代前期には、多数の他地域系土器が持込まれた流通拠点であるが、その役割は古墳時代以降にも引き継がれ、律令期には嶋上郡衛が置かれる。隣接して現在の西国街道に並行して走る古代山陽道も確認されており、陸上交通の要衝に立地することが理由である。集落規模としては大きい、複数集団の集住を想定するほどではない。

弁天山古墳群²²⁾は、郡家川西遺跡の背後にある丘陵尾根上に立地する。古墳群は尾根ごとに4群(A～D)15基で構成されており、各群は前方後円墳1基と円墳・墳形不明墳や前方後方墳からなる。各群の前方後円墳が首長墓で、A-1号(115 m)⇒B-1号(100 m)⇒C-1号(73 m)の順番で築造されており、これらは一系列の首長墓と理解できる。築造時期をうかがう手掛かりは、A-1号が箸墓古墳と相似形をなすこと、C-1号墳の円筒埴輪がI-3期、前方部粘土槨棺外出土の土師器が布留2期に位置付けられる²³⁾ことである。郡家川西遺跡の営まれた時期に合致するとともに、玉手山古墳群とほぼ同時期に築造されたことが確認できる。重要なのはそれら前方後円墳の規模で、玉手山古墳群の首長墓とほぼ同じ中規模古墳で構成される。地域首長層の倭王権との政治的関係が、古墳の墳形と規模に示されるとすれば、弁天山古墳群と玉手山古墳群・松岳山古墳群

の首長層は、ほぼ同様のランクであったことを示している。

3) 向日古墳群

同様の事例は、京都府の向日丘陵に築造された向日古墳群でも確認できる。本地域は淀川をさかのぼり、山城に入って桂川・宇治川・木津川の交わる三川合流地帯にあり、三川を介して丹波などの北近畿、近江、大和とつながる流通の結節点にある。集落遺跡としては、古墳群の南に近接して鴨田遺跡や水垂遺跡などで他地域系土器が多数出土している。これらの集落と向日古墳群は桂川に流れ込む小畑川流域に立地しており、流通拠点とその首長系列の古墳群の関係でとらえたい。

向日古墳群²²⁾では、元稲荷古墳（全長 94 m、埴輪編年 I - 2 期）⇒五塚原古墳（91 m）⇒寺戸大塚古墳（95 m、I - 4 期）⇒妙見山古墳（114 m、I - 5 期）の前方後方墳・前方後円墳からなる首長墓の系譜がある。元稲荷古墳のみが前方後方墳であるとはいえ、90 ~ 110 m 級の中規模古墳で構成されることは、玉手山・松岳山古墳群、弁天山古墳群の首長層と同ランクにあったことがわかる。向日古墳群には、内容の不明確な部分が多いが、元稲荷古墳が箸墓の相似墳で竪穴式石槨の石材に結晶片岩が使用され、また寺戸大塚古墳がメスリ山古墳の相似墳で竪穴式石槨の石材に亀ノ瀬の輝石安山岩の使用が確認されている。やはり古墳群の成立の背景に、広域の流通拠点を背景にした地域首長の存在がある。ただし前方後方墳・前方後円墳が系列墳のみであることは、拠点となる集落が、中河内のように集住型ではなく小型・分散的であることに対応すると考えられる。

4) 大和盆地東南部の前期古墳群

古墳時代前期、旧大和川水系東端の大和盆地東南部で、大型の前方後円墳を含む複数の古墳群が存在する。北から西殿塚古墳を中心とする大和古墳群、渋谷向山古墳と行燈山古墳のある柳本古墳群、箸墓古墳を中心とする纏向古墳群が続く。またやや南方に桜井茶白山古墳とメスリ山古墳が単独墳として確認できる。これらが南北約 10km、東西約 2 km の範囲に、約 40 基の前方後円墳と少数の前方後方墳が密集して分布する。ここでの首長墓は、箸墓古墳（全長 280 m、埴輪編年 I - 1 期）⇒西殿塚古墳（230 m、I - 2 期）⇒メスリ山古墳（235 m、I - 3 期）⇒行燈山古墳（242 m、I - 4 期）⇒渋谷向山古墳（300 m、II - 1 期）と推移¹⁵⁾したと考えられている。古墳時代前期前半において、墳丘長 200 m 以上の前方後円墳は、大和盆地東南部のみに築造される。日本列島では、前期前半を通じて最大規模の古墳がいずれかの古墳群に築造されることから、大和盆地東南部には有力な政治集団が継続的に存在したことが明らかである。この政治集団の中核となっ

た200 m以上の前方後円墳の被葬者が、倭国王と考えられている。この王墓の最古の前方後円墳が箸墓古墳であり、しかもそれが纏向遺跡の縁辺部に築造されていることは重要である。纏向遺跡では当該期では最大規模の居館も確認されており、倭国王の存在したことも明らかと考えられる。王墓はまず居館のある纏向遺跡縁辺に築造され、その後に纏向遺跡の北部に集住する他集落²⁴⁾から倭国王が選出され、大型前方後円墳を築いたと考えられる。

概観してきたように、広域流通に関わる拠点集落の成立する背景には、集落内の構成員における階層構造を含みつつ、それらを掌握する地域首長層の存在が確認でき、さらに各地域の首長層も大和盆地東南部の王権によって掌握されたより重層的な階層構造の成立が確認できる。大和盆地東南部の古墳群には、200 m以上の王墓の下位に、120～180 m級、90～110 m級、50～80 m級程度の古墳も存在²²⁾しており、明確な階層構造のあったことを示していると考えたい。そして広域流通を担ったのは、階層構造の中では、90～110 m級の中規模クラスに位置付けられる地域首長である。古墳時代前期の広域流通網とは、それら各地域の首長達を大和盆地東南部の王権がとり込み、統括することによって成立したものであることを示している。広域流通によって持込まれた情報や物資には、古墳の築造や副葬品、祭祀にかかわる遺物も多い。もちろん竪穴式石槨を築造する石材としての結晶片岩やその槨内に納める石棺、などは単純な物資の流通とは考えられず、王権の関与は明白である。むしろ広域流通自体、王権が膝下に最先端の物資・技術・情報や渡来人・労働力を集中させるために、自らが創り上げたシステムで、当時の階層構造を維持する古墳築造もその目的の一つに含みこんでいたと考えられるのである。

註

- 1 秋山浩三「吉備・近畿の交流と土器」『弥生時代のモノとムラ』新泉社 2017
- 2 合田幸美「溝咋遺跡出土の外来系土器について」『溝咋遺跡(その1・2)』(財)大阪府文化財調査研究センター 2000
- 3 高野陽子「総括」『佐山遺跡』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003
- 4 (財)京都市埋蔵文化財研究所『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』1998
- 5 (財)大阪府文化財調査研究センター『尺度遺跡 I』1999
- 6 酒井龍一「和泉に於ける「伝統的第五様式」に関する覚え書」『豊中・古池遺跡発掘調査概要 そのⅢ』豊中・古池遺跡調査会 1976

- 7 (財)大阪府文化財調査研究センター『下田遺跡』1996
- 8 亀山行雄「瀬戸内海沿岸―足守川流域の遺跡群」『大交流時代―鹿乗川流域遺跡群と古墳出現前夜の土器交流―』安城市歴史博物館 2014
- 9 大久保徹也「1 岡山県」『日本土器製塩研究』青木書店 1994
- 10 広瀬和雄「大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店 1994
- 11 久住猛雄「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』53-4 2007
- 12 岸本雅敏「古代国家と塩の流通」『古代史の論点 3』小学館 1998
- 13 柏原市教育委員会『玉手山古墳群の研究Ⅰ』埴輪編 2001、同『同Ⅱ』墳丘編 2002、同『同Ⅲ』埋葬施設編 2003、同『同Ⅳ』副葬品編 2004、同『同Ⅴ』総括編 2005。
- 14 安村俊史「玉手山古墳群の実像を求めて」『玉手山古墳群の研究Ⅴ』総括編 2005
- 15 鐘方正樹「古墳時代前期の円筒埴輪編年と玉手山古墳群」『玉手山古墳群の研究Ⅰ』埴輪編 2001
- 16 岸本直文「玉手山古墳群の消長と政権交代」『玉手山古墳群の研究Ⅴ』総括編 2005
- 17 奥田 尚「玉手山古墳の葺石・敷石の石種とその採石地」『玉手山古墳群の研究Ⅴ』総括編 2005
- 18 奥田 尚「玉手山古墳群の石室材・石棺材」『玉手山古墳群の研究Ⅲ』埋葬施設編 2003
- 19 本田奈都子「古墳時代前期の讃岐と畿内」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994
- 20 宇野隆志・若杉智宏「7 埴輪からみた紫金山古墳の位置づけ」『紫金山古墳の研究』京都大学大学院文学研究科 2005
- 21 柏原市立歴史資料館『松岳山古墳群を探る』平成 21 年度夏季企画展 2009
- 22 下垣仁志「畿内大型古墳群考」『玉手山古墳群の研究Ⅴ』総括編 2005
- 23 米田敏幸「庄内式土器研究の課題と展望」『庄内式土器研究』14 庄内式土器研究会 1997
- 24 今尾文昭『古墳文化の成立と社会』青木書店 2009。氏は、大和古墳群と乙木・佐保庄遺跡、柳本古墳群と柳本遺跡、纏向古墳群と纏向遺跡の関連を示している。

収録論文初出一覧

序章 新稿

第1章 弥生時代の集落動態

第1節「大阪府雁屋遺跡の大型掘立柱建物」『究班』Ⅱ 埋蔵文化財研究会 2002

第2節「近畿—大型建物の変遷とその性格について—」『季刊考古学』86 雄山閣 2004

第2章 古墳時代前期の広域流通と拠点

第1節「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第3集 大阪府立弥生文化博物館 1994

第2節「淀川流域の古墳時代初頭期集落について」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』上巻 関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢刊行会 2003

第3節「大阪府南部・石川流域における弥生時代後期から古墳時代初頭社会の特質」『弥生時代の集落』学生社 2001

第4節「東海地域における古墳時代初頭期の集落—大阪府の状況との比較から—」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 2001

第3章 他地域系土器とその社会背景

第1節「大阪府の讃岐・阿波系土器と備讃系製塩土器」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』学生社 2011、「大阪府出土の讃岐・阿波・播磨系土器」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』香芝市二上山博物館 2006

第2節「大阪府下出土の北部九州系土器覚書」『考古学論集』第5号 考古学を学ぶ会 2001

第3節「大阪府下出土の東海系土器とその特質」『庄内式土器研究』3 庄内式土器研究会 1992、「大阪府下出土の東海・東国地域の土器」『庄内式土器研究』16 庄内式土器研究 1998

第4章 塩の生産と流通拠点

第1節「中河内における古墳時代前期の製塩土器」『関西大学考古学研究室開設六拾周年記念 考古学論叢』 2003

第2節「西三河の土器製塩と交流拠点」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004 年度共同

第5章 鉄器と鉄器生産

第1節「近畿弥生社会における鉄器化の実態について」『網干善教先生華甲記念考古学論集』 網干善教先生華甲記念会 1988

第2節「甲田南遺跡出土の鉄斧について」『平成5年度 富田林市内遺跡発掘調査概要』 富田林市教育委員会 1994

第3節「大阪湾沿岸における鉄器化について」『弥生後期の瀬戸内海』(古代学協会四国支部第10回松山大会資料) 古代学協会 1996

第6章 土木技術の伝来と展開

第1節「中河内における古墳時代の敷葉工法」『大阪府立狭山池博物館研究報告』5 大阪府立狭山池博物館 2008

第2節「大阪の水制」『大阪府立狭山池博物館研究報告』6 大阪府立狭山池博物館 2009

終章 「大阪府沿岸—摂津・河内・和泉・山城の遺跡群—」『大交流時代—鹿乗川流域遺跡群と古墳出現前夜の土器交流』安城市歴史博物館 2015 を改変、新稿を追加した。